秋田県文化財調査報告書第505集

峰吉川中村遺跡

－雄物川上流河川改修事業（中村芦沢地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

２０１６・９

秋 田 県 教 育 委 員 会

シンボルマークは、北秋田市白坂（しろざか）遺跡出土
の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年８月発見、高さ７㎝、凝灰岩。

峰吉川中村遺跡
（みねよしかわなかむら）

－雄物川上流河川改修事業（中村芦沢地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

２０１６・９

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約 5,000 か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これら埋蔵文化財の保存・継承と積極的活用は、地域社会の歴史や文化に親しみ、理解を深め、ふるさとを愛する人づくりにつながります。

一方、雄物川中流部においては度重なる浸水被害への対策として、堤防整備を推進する河川改修事業が行われています。本教育委員会では、こうした災害対策事業との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、雄物川上流河川改修事業（中村芦沢地区）に先立って、平成 26 年度に大仙市において実施した峰吉川中村遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。調査の結果、古代の竪穴建物跡・土坑、中世の井戸跡・カマド状遺構・火葬墓、近世の掘立柱建物跡・竪穴建物跡などが見つかり、古代から近世にかけて、人々が雄物川流域の川沿いで営んだ暮らしの一端が明らかとなりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助になることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査の実施及び本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所、大仙市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成28年 9 月

秋田県教育委員会

教育長　米　田　　進

例　言

1　本報告書は、雄物川上流河川改修事業（中村芦沢地区）に伴い、平成26年度に調査した、大仙市所在の峰吉川中村遺跡の発掘調査報告書である。調査内容については、すでにその一部が埋蔵文化財センター年報などによって公表されているが、本報告書を正式なものとする。

2　調査要項

遺　　跡　　名　峰吉川中村遺跡（みねよしかわなかむらいせき）
遺　跡　略　号　７ＭＹＫＮＭ
遺 跡 所 在 地　秋田県大仙市協和峰吉川字中村15－８外
調　査　期　間　平成26年５月８日～９月19日
　　調査面積8,390㎡（未調査面積340㎡）
調 査 主 体 者　秋田県教育委員会
調 査 担 当 者　谷地　薫（秋田県埋蔵文化財センター調査班　主任学芸主事）
　　佐藤　淳（秋田県埋蔵文化財センター調査班　学芸主事）
　　山村　剛（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　学芸主事）
　　冨樫那美（秋田県埋蔵文化財センター調査班　文化財主事）
総 務 担 当 者　柴田真希（秋田県埋蔵文化財センター総務班　主査）平成26年度
　　今田陽子（秋田県埋蔵文化財センター総務班　主任）平成26年度
　　斉藤憲治（秋田県埋蔵文化財センター総務班　主査）平成27・28年度
調 査 協 力 機 関　国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所、大仙市教育育委員会

3　第１図は、秋田県公文書館蔵『秋田領峯吉川同領寺館村矢島領寺館尻引村地境争論絵図』（県Ｃ－48、掲載許可番号：指令公文４－５、平成28年４月20日）を一部改変し収載した。第４図は、国土交通省国土地理院発行の１／50,000地形図『刈和野』（平成21年発行）、第５図は、国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所提供の1／1,000工事用図面をそれぞれ元に作成した。

4　発掘調査及び整理作業における以下の作業は、下記の業者に委託した。
　水準測量及び方眼杭設置業務：（株）佐々木技術コンサルタント
　掘削管理業務：（株）宮原組
　遺跡空中写真撮影：（株）みどり光学社
　木製品保存処理業務：（株）吉田生物研究所

5　理化学分析は放射性炭素年代測定を、平成26年度は（株）加速器分析研究所に、平成27年度は（株）パレオラボ・（株）吉田生物研究所に委託した。その他樹種同定・塗膜分析及び木製品保存処理を、（株）吉田生物研究所に、種実同定・人骨同定を（株）パリノ・サーヴェイに委託した。

6　本書の執筆は、第１章を佐藤が、他は山村が行った。第４章は委託分析調査報告を山村が編集し、掲載した。また附編は国立歴史民俗博物館准教授三上喜孝氏より玉稿を賜った。

7　発掘調査及び整理作業において、ご指導･ご助言を賜った以下の方々に記して感謝申し上げます。
　島田祐悦　　庄内昭男　　辻本裕也　　三上喜孝　　（五十音順）

凡　例

1　本報告書に掲載した平面図(遺構実測図)の方位は、世界測地系平面直角座標大第Ｘ系による座標北を示す。座標北から磁北の偏角は西偏７°５″である。

2　遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、検出順に連番とした。これらの中には、精査と整理作業の過程で欠番としたものもある。遺構に用いた略記号は下記のとおりである。またいわゆる火葬墓について、遺体を荼毘に付した火葬施設をＳＫＣ、火葬した焼骨片を再葬した火葬墓をＳＴとした。

ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＡ：柱穴列　ＳＫＩ：竪穴建物跡　ＳＥ：井戸跡　ＳＯ：カマド状遺構
ＳＫＣ：火葬施設　ＳＴ：火葬墓　ＳＤ：溝跡　ＳＫ：土坑　ＳＮ：焼土遺構

3　遺跡基本層序はローマ数字で、遺構内層位はアラビア数字で表記した。また土色記述には農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖2005年版』を参照した。

4　遺構の法量について、[　]や〈　〉内の数値は、それぞれ推定値、残存値を表す。

5　遺構実測図及び遺物実測図には、それぞれスケールバーを付して縮尺を表示した。

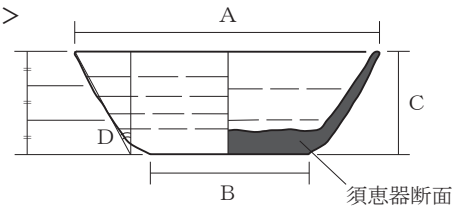
6　遺構実測図中に十字記号とともに併記されるグリッド記号の「+」以下の英数字は、各グリッド杭からの方向及び距離を示している。それぞれＥＷＳＮは東西南北を示し、例えば「ＭＡ50+W2.0ｍ」であれば、ＭＡ50杭から真西に２ｍの地点であることを示す。

7　土器及び陶磁器破片の実測図中の拓影及び写真は、平置した遺物を垂直撮影したものであり、必ずしも本来の傾きに対応したものではない。また土器・陶磁器の破片実測図は、縄文・古代の土器は左から外面－断面－内面の順で記載しているが、中世以降の陶磁器に関しては、内面－断面－外面の順で掲載している。

8　遺構実測図・遺物実測図の網フセ、調整等の凡例は次のとおりである。これ以外の場合は、各挿図中に凡例を示した。

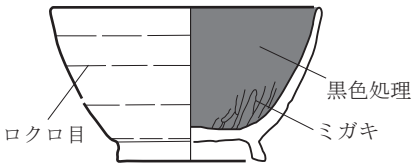
＜遺構関連＞

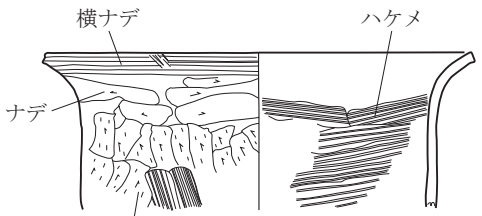
＜遺物関連＞

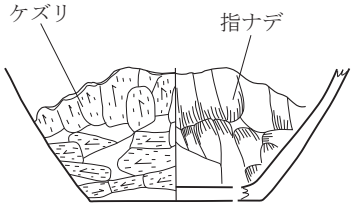


A：口径　B：底径　C：器高　D：外傾度

底径指数＝$\frac{B}{A}$　高径指数＝$\frac{C}{A}\times100$







目　次

序
例言 …… ii
凡例 …… iii
目次 …… iv
挿図目次 …… v
表目次 …… vii
図版目次 …… vii

第１章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 1
　第３節　整理作業の経過 …… 3
第２章　遺跡の位置と環境 …… 4
　第１節　地理的環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 6
第３章　調査の方法と成果 …… 12
　第１節　調査の方法 …… 12
　　１　発掘調査 …… 12
　　２　整理作業 …… 12
　第２節　基本層序 …… 13
　第３節　検出遺構と遺物 …… 53
　　１　概要 …… 53
　　２　古代 …… 53
　　（１）遺構と遺構内出土遺物 …… 53
　　①竪穴建物跡 …… 54
　　②井戸跡 …… 55
　　③火葬墓 …… 59
　　④土坑 …… 59
　　⑤焼土遺構 …… 63
　　（２）古代の遺構外出土遺物 …… 64
　　３　中世 …… 66
　　（１）遺構と遺構内出土遺物 …… 66
　　①井戸跡 …… 66
　　②カマド状遺構 …… 78
　　③火葬施設 …… 91
　　④火葬墓 …… 93
　　⑤溝跡 …… 96
　　⑥焼土遺構 …… 96
　　（２）中世の遺構外出土遺物 …… 97

4　近世及び時期不明……97
（1）遺構と遺構内出土遺物 ……97
①掘立柱建物跡……98
②柱穴列 ……101
③竪穴建物跡 ……102
④井戸跡 ……105
⑤溝跡 ……107
⑥土坑 ……109
⑦焼土遺構 ……114
⑧柱穴様ピット ……116
（2）近世以降の遺構外出土遺物 ……117
第4章　理化学的分析 ……221
第1節　放射性炭素年代測定 ……221
第2節　樹種同定 ……229
第3節　種実同定 ……232
第4節　骨同定 ……238
第5章　総括 ……243
報告書抄録
図版
附編　峰吉川中村遺跡出土片仮名木簡について……（1）

挿 図 目 次

第1図　秋田領峯吉川同領寺館村矢島領寺館
尻引村地境争論絵図　延宝八(1680)年…… viii
第2図　遺跡位置図…… 4
第3図　遺跡周辺の地形区分及び地形分類図…… 5
第4図　峰吉川中村遺跡と周辺遺跡位置図…… 7
第5図　調査区と周辺地形図…… 14
第6図　基本層序図…… 16
第7図　調査区全体の遺構配置と割り付け…… 17・18
第8図　遺構配置図（1）…… 19
第9図　遺構配置図（2）…… 20
第10図　遺構配置図（3）…… 21
第11図　遺構配置図（4）…… 22
第12図　遺構配置図（5）…… 23
第13図　遺構配置図（6）…… 24
第14図　遺構配置図（7）…… 25
第15図　遺構配置図（8）…… 26
第16図　遺構配置図（9）…… 27
第17図　遺構配置図(10)…… 28
第18図　遺構配置図(11)…… 29
第19図　遺構配置図(12)…… 30
第20図　遺構配置図(13)…… 31
第21図　遺構配置図(14)…… 32
第22図　遺構配置図(15)…… 33
第23図　遺構配置図(16)…… 34
第24図　遺構配置図(17)…… 35
第25図　遺構配置図(18)…… 36
第26図　遺構配置図(19)…… 37
第27図　遺構配置図(20)…… 38
第28図　遺構配置図(21)…… 39
第29図　遺構配置図(22)…… 40
第30図　遺構配置図(23)…… 41
第31図　遺構配置図(24)…… 42
第32図　遺構配置図(25)…… 43
第33図　遺構配置図(26)…… 44
第34図　遺構配置図（a）…… 45
第35図　遺構配置図（b）…… 46
第36図　遺構配置図（c）…… 47
第37図　遺構配置図（d）…… 48
第38図　遺構配置図（e）…… 49
第39図　遺構配置図（f）…… 50
第40図　遺構配置図（g）…… 51
第41図　遺構配置図（h）…… 52
第42図　ＳＫＩ104竪穴建物跡 ……131
第43図　ＳＫＩ107竪穴建物跡 ……132
第44図　ＳＥ06・10井戸跡、ＳＫ09土坑 ……133
第45図　ＳＥ72・92・93・94井戸跡……134
第46図　ＳＥ95・100井戸跡、ＳＴ89火葬墓、
ＳＫ116・117土坑……135
第47図　ＳＫ133・134・136・140・144・312土坑……136
第48図　ＳＫ148・149・226・239土坑、
ＳＮ240・248焼土遺構…… 37
第49図　古代遺構内出土遺物（1）……138

第50図　古代遺構内出土遺物（２）……139
第51図　古代遺構内出土遺物（３）……140
第52図　古代遺構内出土遺物（４）……141
第53図　古代遺構内出土遺物（５）、
古代遺構外出土遺物（１）……142
第54図　古代遺構外出土遺物（２）……143
第55図　古代遺構外出土遺物（３）……144
第56図　古代遺構外出土遺物（４）……145
第57図　古代遺構外出土遺物（５）……146
第58図　古代遺構外出土遺物（６）……147
第59図　古代遺構外出土遺物（７）……148
第60図　古代遺構外出土遺物（８）……149
第61図　古代遺構外出土遺物（９）……150
第62図　古代遺構外出土遺物(10)……151
第63図　古代遺構外出土遺物(11)……152
第64図　古代遺構外出土遺物(12)……153
第65図　古代遺構外出土遺物(13)……154
第66図　古代遺構外出土遺物(14)……155
第67図　古代遺構外出土遺物(15)……156
第68図　古代遺構外出土遺物(16)……157
第69図　ＳＥ05・07・08井戸跡……158
第70図　ＳＥ14・20・21・29井戸跡……159
第71図　ＳＥ30・31・34井戸跡……160
第72図　ＳＥ43・53・58井戸跡……161
第73図　ＳＥ63・66・67井戸跡……162
第74図　ＳＥ68・74・91・96井戸跡……163
第75図　ＳＥ99・150・151・153井戸跡 ……164
第76図　ＳＥ211・235井戸跡……165
第77図　ＳＯ01・15・19・28カマド状遺構……166
第78図　ＳＯ36・40・41・50カマド状遺構……167
第79図　ＳＯ54・56・79・80カマド状遺構……168
第80図　ＳＯ81・82・83カマド状遺構……169
第81図　ＳＯ84・87・152・156カマド状遺構、
ＳＴ97火葬墓……170
第82図　ＳＯ165・166・168・169カマド状遺構……171
第83図　ＳＯ204・205・206・207・238カマド状遺構
……172
第84図　ＳＯ258・309・311カマド状遺構、
ＳＫＣ38・157・180・241火葬施設 ……173
第85図　ＳＴ60・85・301・302・304・305・306・307
火葬墓、ＳＮ98焼土遺構……174
第86図　ＳＤ200・201溝跡……175
第87図　中世遺構内出土遺物（１）……176
第88図　中世遺構内出土遺物（２）……177
第89図　中世遺構内出土遺物（３）……178
第90図　中世遺構内出土遺物（４）……179
第91図　中世遺構内出土遺物（５）……180
第92図　中世遺構内出土遺物（６）……181
第93図　中世遺構内出土遺物（７）……182
第94図　中世遺構内出土遺物（８）、
中世遺構外出土遺物（１）……183
第95図　中世遺構外出土遺物（２）……184
第96図　ＳＢ243掘立柱建物跡 ……185
第97図　ＳＢ247掘立柱建物跡 ……186
第98図　ＳＢ247掘立柱建物跡 ……187
第99図　ＳＢ254・255掘立柱建物跡……188
第100図　ＳＢ255・308・313掘立柱建物跡……189
第101図　ＳＢ314掘立柱建物跡、ＳＡ244柱穴列 ……190
第102図　ＳＢ314掘立柱建物跡、
ＳＡ244・245柱穴列 ……191
第103図　ＳＫＩ88・102竪穴建物跡……192
第104図　ＳＫＩ115竪穴建物跡……193
第105図　ＳＫＩ122竪穴建物跡……194
第106図　ＳＫＩ147・171・197竪穴建物跡……195
第107図　ＳＥ44・71・126井戸跡……196
第108図　ＳＥ142井戸跡、ＳＤ02・18・146溝跡、
ＳＫ124土坑……197
第109図　ＳＤ242溝跡、ＳＫ11・12・13・16・17・22
土坑 ……198
第110図　ＳＫ26・32・33・59・61・106・131・132・
137土坑、Ｐ07……199
第111図　ＳＫ138・139・145土坑、ＳＮ108・110・
114焼土遺構……200
第112図　ＳＮ113・154・252・303焼土遺構 ……201
第113図　近世遺構内出土遺物（１） ……202
第114図　近世遺構内出土遺物（２） ……203
第115図　近世遺構内出土遺物（３） ……204
第116図　近世遺構内出土遺物（４） ……205
第117図　近世遺構内出土遺物（５） ……206
第118図　近世遺構内出土遺物（６） ……207
第119図　近世遺構内出土遺物（７） ……208
第120図　近世遺構外出土遺物（１） ……209
第121図　近世遺構外出土遺物（２） ……210
第122図　近世遺構外出土遺物（３） ……211
第123図　暦年較正年代グラフ(参考)（１）……226
第124図　暦年較正年代グラフ(参考)（２）……227
第125図　暦年較正年代グラフ(参考)（３）……228
第126図　樹種同定　顕微鏡写真 ……231
第127図　種実遺体 ……237
第128図　人体骨格各部の名称 ……241
第129図　出土骨 ……242
第130図　遺構変遷図（１）付墨書土器分布図 ……245
第131図　遺構変遷図（２） ……247
第132図　遺構変遷図（３） ……251
第133図　遺物出土分布図 ……252
第134図　峰吉川中村遺跡出土木簡 ……（１）
第135図　盤若台遺跡出土いろは歌木簡 ……（２）
第136図　横手市観音寺廃寺跡出土音義木簡 ……（２）
第137図　井川町洲崎遺跡出土人魚供養札木簡 ……（２）
第138図　山形県遊佐町大楯遺跡出土木簡 ……（３）

表　目　次

第１表　峰吉川中村遺跡周辺の遺跡一覧（１）……10
第２表　峰吉川中村遺跡周辺の遺跡一覧（２）……11
第３表　柱穴様ピット一覧（１）……119
第４表　柱穴様ピット一覧（２）……120
第５表　柱穴様ピット一覧（３）……121
第６表　柱穴様ピット一覧（４）……122
第７表　柱穴様ピット一覧（５）……123
第８表　柱穴様ピット一覧（６）……124
第９表　柱穴様ピット一覧（７）……125
第10表　柱穴様ピット一覧（８）……126
第11表　柱穴様ピット一覧（９）……127
第12表　柱穴様ピット一覧(10)……128
第13表　柱穴様ピット一覧(11)……129
第14表　柱穴様ピット一覧(12)……130
第15表　銭貨・鉄滓一覧表……211
第16表　土器・陶磁器一覧表（１）……212
第17表　土器・陶磁器一覧表（２）……213
第18表　土器・陶磁器一覧表（３）……214
第19表　土器・陶磁器一覧表（４）……215
第20表　土器・陶磁器一覧表（５）……216
第21表　土器・陶磁器一覧表（６）……217
第22表　土器・陶磁器一覧表（７）……218
第23表　土器・陶磁器一覧表（８）……219
第24表　土製品一覧表……219
第25表　石器・石製品一覧表……219
第26表　木製品一覧表（１）……219
第27表　木製品一覧表（２）……220
第28表　測定試料および処理……224
第29表　放射性炭素年代測定の暦年較正の結果……225
第30表　秋田県峰吉川中村遺跡出土木製品同定表……230
第31表　分析試料一覧……232
第32表　種実同定結果……233
第33表　出土炭化米の粒大・粒形……234
第34表　分析試料一覧……238
第35表　骨同定結果……240

図　版　目　次

図版１　峰吉川中村遺跡及び周辺の中世遺跡
　　（真上が北、1975年撮影）
図版２　遺跡遠景
図版３　遺跡全景・近景
図版４　遺跡近景
図版５　基本土層、ＳＫＩ104・107、ＳＥ06・10、
　　ＳＫ09
図版６　ＳＥ72・92 ～ 95・100、ＳＴ89
図版７　ＳＫ133・136・140・149・239、ＳＮ240・248、
　　井戸跡群
図版８　ＳＥ05・07・08・14・20・21
図版９　ＳＥ29 ～ 31・34・43・53
図版10　ＳＥ58・63・66 ～ 68・74・91
図版11　ＳＥ96・99・150・151・153・211・235
図版12　ＳＯ01・15・19・28・36・40・41・50
図版13　ＳＯ54・56・79 ～ 83
図版14　ＳＯ84・87・152・156・165・166、
　　カマド状遺構群、ＳＢ308
図版15　ＳＯ168・169・204 ～ 207・238・258
図版16　ＳＯ311、ＳＫＣ38・157・180・241、
　　ＳＴ60・97
図版17　ＳＴ97・301・302・304 ～ 307、ＳＮ98、
　　ＳＤ200・201、ＳＢ247・254・255
図版18　ＳＫＩ88・102・115・122・147・171・197、
　　ＳＥ44
図版19　ＳＥ71・111・126・142、ＳＤ02・18・146、
　　ＳＫ106、ＳＮ108
図版20　ＳＮ110・114・154・252・303、遺物出土状況、
　　遺跡見学会の様子
図版21　出土遺物（１）
図版22　出土遺物（２）
図版23　出土遺物（３）
図版24　出土遺物（４）
図版25　出土遺物（５）
図版26　出土遺物（６）
図版27　出土遺物（７）
図版28　出土遺物（８）
図版29　出土遺物（９）
図版30　出土遺物(10)
図版31　出土遺物(11)
図版32　出土遺物(12)

第１図　秋田領峯吉川同領寺館村矢島領寺館尻引村地境争論絵図　延宝八（1680）年
※白点で囲われている部分は、「峯吉川之内中村」と記されている。

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

国土交通省による雄物川上流河川改修事業は、雄物川沿川地域において、昭和19年７月洪水及び戦後最大の昭和22年７月洪水等、昭和以降に発生した代表的洪水と同規模外水氾濫による床上浸水等重大な被害を防止するとともに、水田等農地についても被害の軽減に努めることを目的として、平成25年度に開始された。特に治水安全度が低い中流部は重点的に流化能力の向上を図るため、平成31年度の竣工を目指している。

堤防整備予定地内には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があるため、国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所（以下、湯沢河川国道事務所）から、秋田県教育委員会に埋蔵文化財の分布状況についての調査依頼があった（平成24年５月14日付、国東整湯―工第５号）。秋田県教育委員会は、平成24年7月から8月にかけて、中村芦沢地区堤防整備予定地内の試掘調査を実施して、新たに峰吉川中村遺跡を発見[註１]し（平成24年９月24日付、教生―1420）、その旨を湯沢河川国道事務所に通知した。この結果を受けて、平成24年10月22日から11月２日に秋田県埋蔵文化財センターが峰吉川中村遺跡の確認調査を実施[註２]し（平成24年11月30日付、教生―1861）、湯沢河川国道事務所に工事区域内における発掘調査が必要であることを報告した。その後、湯沢河川国道事務所と秋田県教育委員会による協議を経て、平成26年度に工事区域内8,550㎡を対象として、秋田県埋蔵文化財センターが峰吉川中村遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第２節　発掘調査の経過

調査は平成26年６月９日から９月19日まで、調査員４人のもと、掘削作業管理業務を委託し、現場代理人１人、作業員52人の体制で実施した。調査は、２班体制で東西調査区の端から中央に向かって調査を開始した。なお本調査に先立ち、重機による表土除去を５月８日（金）～30日（土）までの期間で行った。表土除去中に調査区西端で、遺跡の範囲が広がることが判明し、６月５日（木）に国土交通省湯沢河川国道事務所及び埋蔵文化財センターで確認協議し、今回の調査範囲には含めないことになった。本発掘調査の経過は以下のとおりである。

【第１週】６月９日（月）～６月13日（金）

９日、発掘調査開始。発掘機材の搬入、環境整備を実施。10日～13日にかけ、ベルトコンベアを設置。調査区中央部でＳＯ01カマド状遺構を検出。12日（木）、遺跡測量システムの講習を行った。

【第２週】６月16日（月）～６月20日（金）

調査区西側の墓地跡東側で第Ⅱ・第Ⅲ層土を掘り下げ、井戸跡６基（ＳＥ05・06・08・10・14・21）を検出し、精査。ＳＥ08井戸跡から須恵器系陶器擂鉢、同じくＳＥ21井戸跡で須恵器系陶器甕が出土。また調査区西端で井戸跡２基（ＳＥ29・30）を検出。第Ⅲ層上位では、近世以降の陶磁器が、中位から下位では土師器・須恵器が出土。

【第３週】６月23日(月)～６月27日(金)

調査区西側で、複数の井戸跡(ＳＥ05～08・10・14・58・74)とカマド状遺構(ＳＯ15・19・28)及び柱穴様ピットを検出。ＳＥ05井戸跡底部から曲物底板が出土。調査区東側で、ＳＩ104竪穴建物跡を検出。周辺から９世紀前半の土師器・須恵器が多数出土。ＫＤ46Ⅲ層から「風」と墨書が記された須恵器坏が出土。

【第４週】６月30日(月)～７月４日(金)

調査区西側で、ＳＫＣ38火葬施設を検出。調査区東側では、重機により第Ⅱ層土を除去し、第Ⅳ層地山上面を精査。また調査区中央部の第Ⅲ層土を掘り下げ、第Ⅳ層地山上面を精査。

【第５週】７月７日(月)～７月11日(金)

９日、台風８号接近により現場・ヤード内の飛散防止措置を講じた。

【第６週】７月14日(月)～７月18日(金)

調査区西側のＳＥ31井戸跡から宋銭(熙寧元寶)が出土。調査区東側の竪穴建物跡ＳＩ104は断面観察の結果、２時期あることが判明。14日、県文化財保護管理指導員(大仙地区担当)が来跡。

【第７週】７月22日(火)～７月25日(金)

24日、(株)パリノ・サーヴェイ辻本裕也氏が来跡。25日、職員技術研修会を本遺跡内で行う。

【第８週】７月28日(月)～８月１日(金)

28日、西仙北高校２年生２名がインターンシップのため来跡。30日、大曲出張所管内工事業者団体８名が見学のため来跡。大曲工業高校２年生４名がインターンシップのため来跡。

【第９週】８月４日(月)～８月８日(金)

５～８日、小林副所長が調査に参加。調査区中央北部で、カマド状遺構(ＳＯ80～82・165・166・168・169・205～207)、火葬施設(ＳＫＣ157・180)を検出。５日、仙北中学校２年生１名がインターンシップのため来跡。

【第10週】８月18日(月)～８月22日(金)

調査区西側のＳＴ89火葬墓でヒトの焼骨片が出土。調査区中央部で検出された土坑群は、近世以降のＳＢ247掘立柱建物跡を構成する柱穴と判明。

【第11週】８月25日(月)～８月30日(土)

調査区西側のＳＥ72井戸跡底部付近で、曲物が出土。30日、午後に遺跡見学会を開催、見学者100名が来跡。秋田魁新報社が取材で来跡(新聞掲載は31日)。

【第12週】９月１日(月)～９月５日(金)

調査区中央部でＳＯ84カマド状遺構と重複するＳＴ97火葬墓からヒトの焼骨片が出土。またＳＯ81カマド状遺構の焚き口部からヒトの焼骨片が炭化物ともに出土。火葬墓と重複する可能性があるが、明確には確認できず。

【第13週】９月８日(月)～９月12日(金)

調査区西側のＳＥ95井戸跡から片仮名で墨書が記された木簡が、また底部付近より水溜施設と考えられる曲物が出土。ＳＥ34井戸跡で箸が多量に出土。ＳＥ100井戸跡で井戸枠を確認。調査区東側のＳＫ239土坑底面で火が焚かれた痕跡を確認するとともに、廃絶に伴う土器が多量に出土。10日、(株)みどり光学社が空中写真撮影の打ち合わせのため来跡。

【第14週】９月16日(火)～９月19日(金)

18日、遺跡遠景の撮影。湯沢河川国道事務所、文化財保護室が現地引き渡し協議のため来跡。19日、空中写真撮影。撤収作業。

第３節　整理作業の経過

整理作業は、発掘調査中の平成26年７月から平成28年９月まで実施した。平成26年７月から11月までは遺物洗浄と注記作業を行い、12月から翌年12月まで遺物の集計・計量・分類、土器等の接合・復元作業及び実測を行った。デジタルトレースは、平成27年７月から翌年２月までの期間で行った。

図面関係については平成26年11月から翌年８月まで遺構第２原図の作成を行い、平成27年４月からデジタルトレースを行った。トレース完了図については、平成27年10月から翌年６月までの期間に編集作業を行った。平成28年５月から９月までは、収蔵のためのデータ作成・整理を行った。

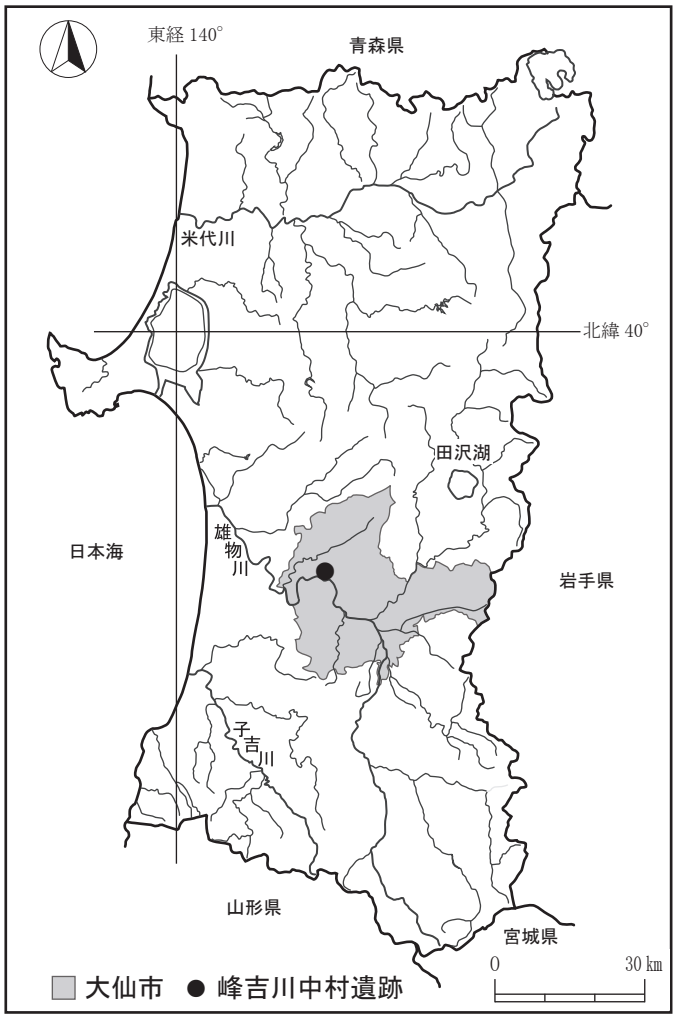
註１・２　秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布報告書』 秋田県文化財調査報告書486集　2013(平成25)年

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

峰吉川中村遺跡が所在する大仙市は、秋田県の中心部に位置する。東は岩手県和賀郡西和賀町と、西は秋田市・由利本荘市、南は横手市・美郷町、北は仙北市に接している。古くから県南の交通の要衝であり、現在でも秋田新幹線や秋田自動車道等が市内を縦断している。

遺跡はＪＲ奥羽本線峰吉川駅から南東1.7㎞の、北緯39度33分26秒、東経140度20分25秒の雄物川右岸、標高16～18ｍの自然堤防上に立地する(註１)(第２図)。遺跡の南0.2㎞には雄物川が西流し、出羽山地を先行的に横断し、秋田平野に出て日本海に注ぐ。また周辺地形は、山地、丘陵地、台地(段丘地)、低地によって構成され、北から東に大牧森山地(Ｉｆ)、鍋倉山山地(Ｉａ)、奥山山地(Ｉｂ)、米ヶ森山地(Ｉｇ)、長者森山地(Ｉｈ)、諏訪山山地(Ｉｃ)がそびえ立ち、それらの山地に隣接して北から西へ、河辺丘陵地(Ⅱａ)、種沢丘陵地(Ⅱｂ)、石森山丘陵地(Ⅱｆ)、畑山丘陵地(Ⅱｇ)、淀川丘陵地(Ⅱｃ)が、南では大沢郷丘陵地(Ⅱｄ)、立倉丘陵地(Ⅱｅ)が形成されている。遺跡周辺の雄物川の流路一帯では、雄物川狭窄部低地(Ⅲａ)が広がり、その周辺には横手低地(Ⅲｂ)、淀川低地(Ⅲｄ)、大沢川低地(Ⅲｅ)、土買川低地(Ⅲｆ)が位置する(第３図上)。特に遺跡の近辺は、旧河道が入り組み、雄物川の氾濫平野を特徴付け、河川の勾配もいたって緩やかで雄物川の下流部にも似た緩やかな水流を呈し、自然堤防が発達する(第３図下)。遺跡周囲の表層地質は、遺跡を含めた雄物川沿岸部に高位から低位の段丘堆積物が分布する(註２)。その周囲の丘陵地においては、第三紀上位の女川層が畑山丘陵地などに分布する。女川層は、硬質頁岩、硬質シルト岩、暗灰色泥岩から構成される。その上位の船川層が同じく畑山丘陵地などに分布する。本層には泥岩、シルト岩、デイサイトなどを含む。その上位の天徳寺層は、河辺丘陵地、大沢郷丘陵地、立倉丘陵地、石森山丘陵地、畑山丘陵地などに広く分布する。シルト岩、細粒砂岩などから構成される。笹岡層は、種沢丘陵地などに分布し、中粒砂岩、シルト岩などから成る。遺跡周辺の雄物川の河床礫は、主としてこれらの丘陵地周辺の表層地層に



第2図　遺跡位置図

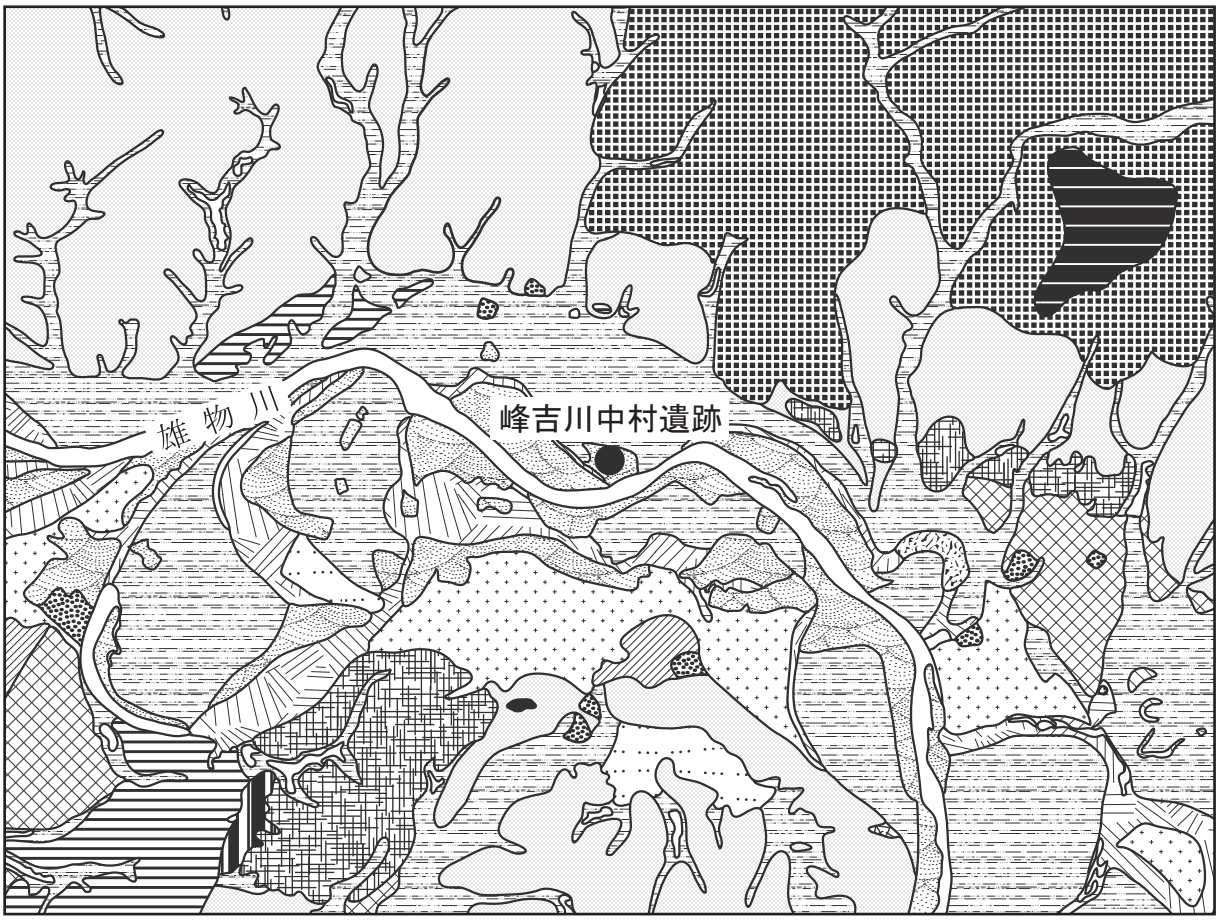
地形区分図

Ⅰ　山地
- Ⅰa　鍋倉山山地
- Ⅰb　奥山山地
- Ⅰc　諏訪山山地
- Ⅰd　杉沢山地
- Ⅰe　明光沢岳山地
- Ⅰf　大牧森山地
- Ⅰg　米ヶ森山地
- Ⅰh　長者森山地

Ⅱ　丘陵地
- Ⅱa　河辺丘陵地
- Ⅱb　種沢丘陵地
- Ⅱc　淀川丘陵地
- Ⅱd　大沢郷丘陵地
- Ⅱe　立倉丘陵地
- Ⅱf　石森山丘陵地
- Ⅱg　畑山丘陵地
- Ⅱh　虚空蔵岳丘陵地
- Ⅱi　金葛丘陵地

Ⅲ　台地・低地
- Ⅲa　雄物川狭窄部低(台)地
- Ⅲb　横手低地
- Ⅲc　岩見川谷低(台)地
- Ⅲd　淀川低地
- Ⅲe　大沢川低地
- Ⅲf　土買川低地
- Ⅲg　入見内川低地

● 峰吉川中村遺跡



地形分類図

0　1/50,000　1 km

- 中起伏山地（起伏量400～200m）
- 丘陵地Ⅰ（起伏量200～100m）
- 丘陵地Ⅱ（起伏量100m未満）
- 砂礫段丘Ⅰ⁺
- 砂礫段丘Ⅰ
- 砂礫段丘Ⅱ⁺
- 砂礫段丘Ⅱ
- 砂礫段丘Ⅲ⁺
- 砂礫段丘Ⅳ
- 砂礫段丘Ⅴ
- 谷底平野・氾濫平野
- 扇状地
- 河原・砂堆地・自然堤防
- 干拓地
- 湿地
- 旧河道
- 人口改変地

第３図　遺跡周辺の地形区分及び地形分類図（註１文献をもとに作成）

由来するものであろう。

第２節　歴史的環境

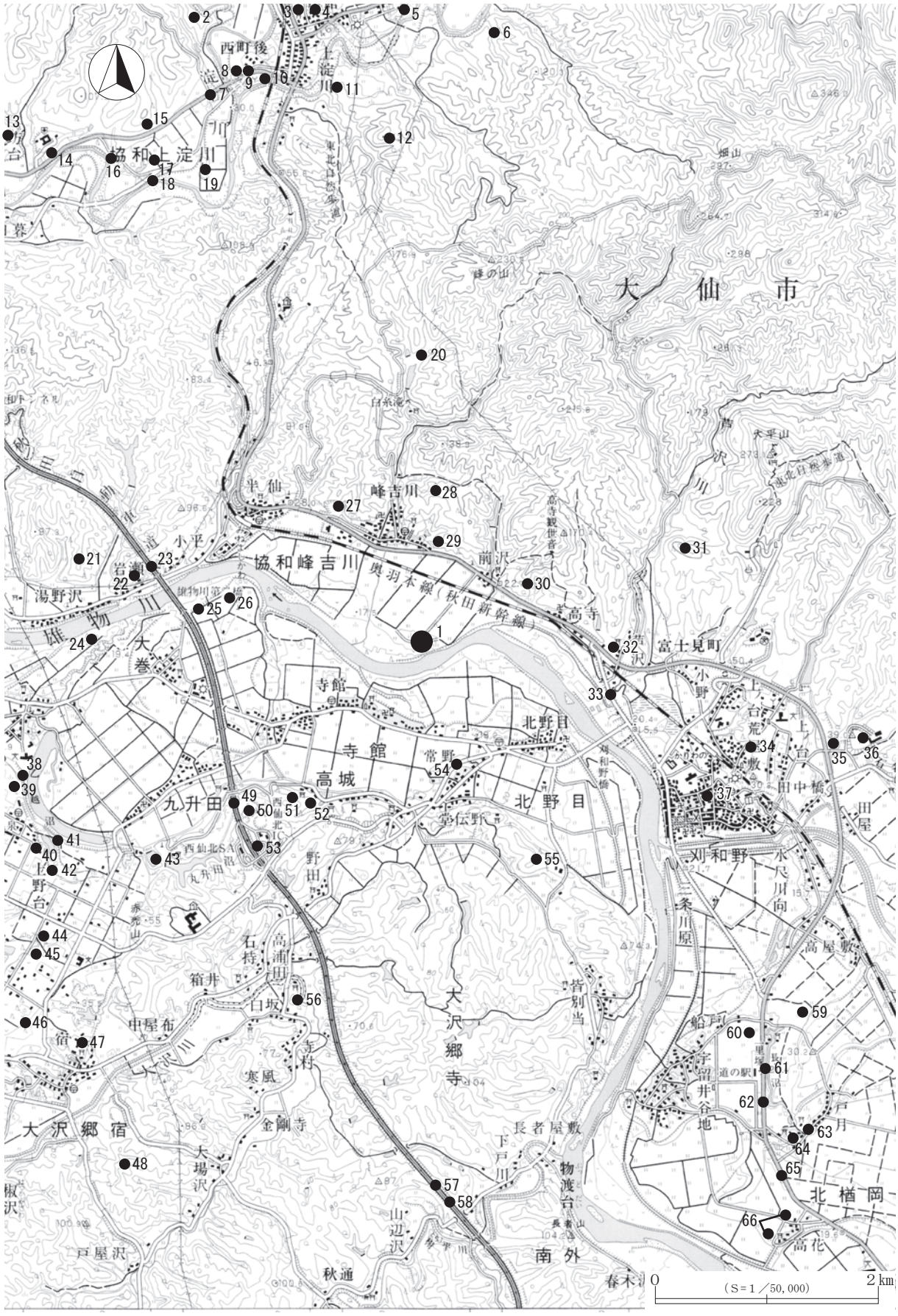
峰吉川中村遺跡（第４図１、以下番号のみ）は大仙市協和地区に位置する。『秋田県遺跡地図（仙北地区版）』[註３]に基づいて作成した同遺跡を中心とする雄物川中流域の周辺遺跡位置図（第４図）には、66の遺跡を数えることができる。これらの遺跡は、沖積地周辺の丘陵や雄物川及びその支流沿いでの河岸段丘等比較的小高い位置に集中している。以下、峰吉川中村遺跡の周辺遺跡について縄文時代から近世までを概観[註４]する。

雄物川中流域及び、その支流である淀川周辺では、古くから人間の活動した痕跡が残る。旧石器時代の遺跡は、岸館遺跡（４）・坊台遺跡（13）・柏台遺跡（50）・上野台遺跡（53）等がある。いずれも石刃、ナイフ形石器等が少量採集されているに止まり、遺跡の詳細な性格は不明である。現状では上記４遺跡中３遺跡が淀川～荒川沿いの段丘上に立地する。さらに荒川流域では、岸館遺跡の上流3.5kmの右岸段丘上に複数時期にまたがる石器集中域が伴う米ヶ森遺跡が立地している[註５]。小形の台形様石器は、米ヶ森技法と命名され標識遺物となっている。

縄文時代の遺跡は、草創期から晩期まで確認されている。本遺跡の北東へ９㎞の上ノ山Ⅱ遺跡では、草創期と推定される有舌尖頭器５点が出土している。前期を中心とする遺物と混在して出土しており、遺跡の具体的な様相は不明である。縄文時代早期では、半仙遺跡（23）、上野台遺跡（53）がある。両遺跡とも早期末の土器が出土している。雄物川右岸高位段丘上に立地する上野台遺跡では、この他に該期の土坑１基も検出されている。また、雄物川左岸沖積低地の自然堤防上に立地する大川端道ノ上遺跡（24）ではトランシェ様石器が１点出土している。当該石器は早期まで遡る時期のものと推定される。

縄文時代前期になると遺跡数が増加する傾向が顕著になる。発掘調査された遺跡には、五百刈田遺跡（14）、館野遺跡、上ノ山Ⅰ遺跡、上ノ山Ⅱ遺跡、半仙遺跡、寺沢遺跡（49）、常野遺跡（54）等がある。このうち、五百刈田遺跡、寺沢遺跡では主に前期前半の土器が出土し、淀川右岸低位段丘上に立地する前者では当該期の可能性ある竪穴建物跡１棟、雄物川右岸高位段丘上に立地する後者では同じく土坑７基がそれぞれ確認されている。現状では、前期前半に複数の住居が集合するような集落が出現していたかは判然としない。一方、館野遺跡、上ノ山Ⅱ遺跡、上ノ山Ⅰ遺跡、半仙遺跡では、前期後半の竪穴建物跡が確認されている。中でも上ノ山Ⅱ遺跡では、中央の広場の周囲に大小の竪穴建物跡が巡る大規模な集落が出現している。さらに隣接する上ノ山Ⅰ遺跡、館野遺跡にも同時期の竪穴建物跡が併存し、少なくともこれらの遺跡群を包括する村落が形成されていたと判断される。上ノ山Ⅱ遺跡からは70棟以上となる竪穴建物跡や30基以上のフラスコ状土坑等多数の遺構に加えて、多種多量の遺物が検出されている。前期前半の五百刈田遺跡出土遺物と比べると、堅果類等の植物性食料の加工具と想定される凹石、磨石、半円状扁平打製石器等の礫石器が急増していることが大きな特徴となっている。大規模集落出現の一因として、植物性食料を集中的かつ大量に採集・加工し、貯蔵する複数の単位集団による協業が発達したことも想定できよう。このほか、雄物川左岸低位段丘上に立地する常野遺跡では、縄文時代前期に属すると推定される狩猟用の陥し穴が６基見つかっている。

縄文時代中期では、岸館遺跡、西町後遺跡（10）、五百刈田遺跡、館野遺跡、上ノ山Ⅰ遺跡、寄騎館



第４図　峰吉川中村遺跡と周辺遺跡位置図

遺跡(32)、大川端道ノ上遺跡、柏台遺跡、上野台遺跡等がある。現状では中期前半の遺跡は顕著ではなく、中期後半の遺跡が目立つ。このうち、淀川左岸中位段丘上に立地する館野遺跡･上ノ山Ⅰ遺跡、雄物川右岸側の丘陵裾部上に立地する寄騎館遺跡、上野台遺跡では中期後半の竪穴建物跡が確認されている。前期の上ノ山Ⅱ遺跡のような広場の周りに多数の住居が巡るような大規模集落は認められないが、中期後半には一定規模の集落が再度形成されるとみられる。また、大川端道ノ上遺跡では住居は未確認であるが、縄文時代中期末から弥生時代中期までの遺物が出土している。遅くとも縄文時代中期末以降には、雄物川中流域の沖積低地が断続的に利用されている。大川端道ノ上遺跡の発掘調査結果からは、当該地点は通年の居住地としてではなく、貯蔵や埋葬等のある程度限定された目的のために、季節的、短期的に利用されたものと推定される。

縄文時代後期では、上述の大川端道ノ上遺跡のほか、柏台遺跡、上野台遺跡等がある。このうち上野台遺跡では、後期前葉の竪穴建物跡が１棟確認されているほか、地点を異にして同時期の掘立柱建物跡も分布する。当該時期では、複数住居が集合して集落を形成するのではなく、単独の住居が分散して立地していた可能性も想定される。また、大川端道ノ上遺跡では住居は確認されず、主として後期前半には貯蔵穴が、後期後半から晩期にかけては土坑墓がそれぞれ累計で10数基前後営まれた可能性が想定される。両者は大きくは分布域を異にするとみられるが、いずれも比較的分散した分布状況を呈し、明瞭に貯蔵域や墓域が形成されたとは認め難い。既述のように季節的、短期的活動に伴う施設であったものと推測される。

縄文時代晩期では、西町後遺跡、寄騎館遺跡、大川端道ノ上遺跡、常野遺跡等がある。寄騎館遺跡では、10ｍほど離れた南北２地点で、小判形平面の土坑墓が合わせて20基近く確認されている。土坑墓平面の主軸方位は大半がほぼ西北西方向にまとまり、例外的に直交するものなどがわずかに存在する。現状の遺構分布からは、二つに分節される双分的な墓域を形成しているものと認められる。また、大川端道ノ上遺跡では、晩期初頭まで下る直径0.9ｍ前後の円形平面で一度に埋め戻されたと想定される小形土坑が確認されている。大川端道ノ上遺跡のこの種の土坑を土坑墓と推定し、寄騎館遺跡例と併存する可能性を認めると、近接地域内で、墓制を異にする集団が併存したことを示唆するものである。今後の検討課題であろう。

弥生時代では、和田遺跡(15)、中沢遺跡(28)、大川端道ノ上遺跡、上野台遺跡、上野台Ｘ遺跡、上野台Ⅵ遺跡(44)等がある。上野台遺跡では中期の土坑１基が確認されているが、遺構及び遺跡の詳細な性格は不明である。また、大川端道ノ上遺跡では破片ではあるものの、比較的大形の中期の甕などが出土している。同遺跡においては、自然堤防上の微高地に居住し、周囲の低地で水田耕作を行ったとする想定もあり得よう。ただし、既述のように微高地の利用そのものは縄文時代中期末から断続的に行われており、弥生時代になって当地で水田耕作が導入されたかについては現状では確実な根拠はない。一方、弥生時代後期には、淀川右岸中位段丘上に立地する和田遺跡で、住居の可能性がある焼土遺構と柱穴群に加えて土製紡錘車が検出されている。この他、後期には、中沢遺跡などのように丘陵部に立地する例がある。これらの遺跡では、おそらく水田耕作とは異なった形態の生業活動が行われた可能性があろう。

古墳時代もしくは続縄文文化の遺跡は、峰吉川中村遺跡周辺では現在のところ未確認である。

古代になると、寺沢遺跡、上野台遺跡で平安時代の遺構、遺物が確認される。このうち、周辺沖積

地とは比高40m前後の雄物川左岸高位段丘上に立地する寺沢遺跡では、竪穴建物跡２棟が確認されている。住居は同時に併存していた可能性が高く、遺跡は短期間営まれた小規模集落であったと想定される。

中世では、唐松城跡（２）、唐松林館跡（８）、大館城跡(12)、湯ノ沢城跡(21)、馬館跡(27)、根岸館跡(29)、館ノ沢城跡(30)、寄騎館跡(33)等の館跡が丘陵部を中心に点在して分布する。いずれも詳細な時期や構造などは不明であるが、多くは戦国時代前後の造営と推測されている。また、寄騎館跡に隣接する寄騎館遺跡では、中世の火葬施設及び火葬骨を埋納した火葬墓などが確認されている。これらの遺構も詳細な時期は不明であり、寄騎館跡と関係するかは判然としない。雄物川沿岸の沖積低地では､左岸の大川端道ノ上遺跡で２棟の掘立柱建物と井戸などからなる鎌倉時代の屋敷跡が確認され、周辺低地での水田開発及び雄物川水運と関連する可能性が推測される。同遺跡は短期間の居住に限定されるとみられ、おそらく雄物川の氾濫により短期間で放棄されたようである。雄物川沿岸沖積地に立地する現集落には、中世近くまで遡るものも存在すると予想される。一方、近年、雄物川中流域の沖積低地の微高地部では、船戸遺跡(62)、北楢岡中野遺跡(65)、沖田Ⅰ遺跡、沖田Ⅱ遺跡等の中世及び近世にかかる集落遺跡の新たな発見例が増加している。新発見の遺跡例は、雄物川周辺沖積低地では、雄物川の氾濫などによって、必ずしも安定して長期にわたり集落を営むことができなかった場合があったことを示していよう。

近世の代表的な遺跡には、雄物川左岸段丘に部分的に遺存する亀田街道跡(46)と御番所跡がある。本遺跡のある峰吉川中村地区は、近世を通じ一貫して秋田藩に属している。

その後、峰吉川地域は、明治22(1889)年の町村制の施行に伴い、新刈和野村となる。明治33(1900)年に新刈和野村の一部が分割されて、峰吉川村が起立。昭和30(1955)年に協和村の一部となり、昭和44(1969)年に協和町、そして平成17(2005)年の平成の大合併で、大仙市の一部となり今に至る。本遺跡のある中村集落は、平成５(1998)年、築堤工事により移転するまで存続していた。

註１　秋田県 『土地分類基本調査　刈和野』 1980(昭和55)年
註２　土谷信之・吉川敏之『刈和野地域の地質』通商産業省工業技術院地質調査所　1994(平成６)年
註３　秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(仙北地区版)』 2007(平成19)年
註４　以下の文章は、秋田県教育委員会『西板戸・窪遺跡』秋田県文化財調査報告書第502集　2016(平成28)年を参照した。
註５　協和町教育委員会『米ヶ森遺跡発掘調査報告書』 1971(昭和46)年
　　協和町教育委員会『米ヶ森遺跡発掘調査報告書』 1977(昭和52)年

参考文献

1　秋田県教育委員会『西板戸・窪遺跡－雄物川上流河川改修事業(西板戸地区)・－雄物川上流河川改修事業(寺館大巻地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』秋田県文化財調査報告書第502集　2016(平成28)年
2　協和町史編纂委員会編『協和町史　上巻』 2001(平成13)年
3　西仙北町郷土史編纂委員会編『西仙北町史　先史～近世編』 1995(平成７)年
4　秋田県公文書館『秋田県公文書館　絵図図録』 2014(平成26)年

第１表　峰吉川中村遺跡周辺の遺跡一覧（１）

番号	遺跡台帳番号	遺跡名	主な時代	遺構・遺物	文献
1	212-51-45	峰吉川中村	古代・中世・近世	竪穴建物跡・掘立柱建物跡・井戸跡・カマド状遺構・火葬墓・須恵器・土師器・青磁・須恵器系中世陶器・近世陶磁	本書・２・28
2	212-51-3	唐松城			１・２・３・４
3	212-51-2	岸館城			１・２・３・４・５
	212-51-107	岸館塚群		塚、土葬墓	
4	212-51-1	岸館	旧石器・縄文	組石遺構１基、人骨（再埋葬）、縄文土器（中期）・磨製石斧・石鏃・石槍・石匙・石皿・石棒・凹石・勾玉・ブレード	１・２・６
5	212-51-17	中野	縄文・古代	縄文土器（後期）・石槍・石匙・石錐・石鏃・石篦・石製装飾品	１・２・５
6	212-51-19	荒川城			１・２・３・４
7	212-51-7	和田の台Ⅰ	縄文	縄文土器（中期）・土師器・打製石斧・石槍・石錐・石匙・磨製石斧・石錐・石鏃・掻器	１・２・５
8	212-51-4	唐松林館	中世		１・２・３・４
9	212-51-5	中島	縄文	縄文土器（後期）・石鏃・石匙・磨製石斧	１・２
10	212-51-6	西町後	縄文	縄文土器（中期・晩期）、石組遺構（３）、石鏃・石錐・磨製石斧・石匙・石錘・石棒・石槍	１・２・５
11	212-51-15	鷺ノ巣	縄文	縄文土器・石鏃	１・２
12	212-51-16	大館城	中世		１・２・３・４
13	212-51-13	坊台	旧石器・縄文	縄文土器（晩期）・丸石（先土器）・石刃・スクレーパー（黒曜石）・石製装飾品・尖頭器	１・２
14	212-51-12	五百刈田	縄文	縄文土器・石鏃・石槍・石小刀	１・２・７
15	212-51-92	和田	弥生	土器・石匙・篦状石器・磨製石斧・凹石	１・２・８
16	212-51-11	館の沢城	中世		１・２・３・４
17	212-51-8	和田の台Ⅱ	縄文	縄文土器（前期・中期）・須恵器・石鏃・石槍・石錘・石斧・石匙・篦状石器	１・２・５
18	212-51-9	和田の台Ⅲ	縄文	縄文土器（後期）・打製石斧	１・２・５
19	212-51-10	川又	縄文	縄文土器（前期・後期）・打製石斧・石匙・石鏃・凹石・篦状石器・石錘	１・２
20	212-51-41	白滝	縄文	縄文土器（後期）・石鏃	１・２
21	212-51-38	湯ノ沢城	中世		１・２・３・４
22	212-51-39	岩瀬	縄文	縄文土器（後期）・磨製石斧、石匙	１・２
23	212-51-108	半仙	縄文	土坑・土器埋設遺構	１・２・９
24	212-46-55	大川端道ノ上	縄文・弥生・中世	土器埋設遺構・火葬墓・井戸跡・掘立柱建物跡・土坑・柱穴様ピット・縄文土器、石器、青磁	２・25・28
25	212-46-52	大巻	縄文	縄文土器・石器	１・２
26	212-46-54	窪	縄文	縄文土器	２・26・29
27	212-51-40	馬館	中世		１・２・３・４
28	212-51-42	中沢	弥生	弥生土器（天王山式類似）・篦状石器・石匙・石槍・石鏃（アメリカ型含む）	１・２・５
29	212-51-43	根岸館	中世		１・２・３・４
30	212-51-44	館ノ沢城	中世		１・２・３・４・５
31	212-46-32	茶臼館	中世	郭・帯郭・空堀	１・２・３
32	212-51-109	寄騎館	縄文・中世	竪穴住居跡・焼土遺構・火床・土坑・フラスコ土坑・土器埋設遺構・土坑墓、火葬墓縄文土器（中期、後期、晩期）・石鏃・石槍・石匙・石錐・石篦・スクレイパー・打製石斧・凹石・石皿・石錘	１・２・10
33	212-46-31	寄騎館	中世	館の面影を残す郭あり	１・２・３・10・11・12
34	212-46-1	上ノ台	縄文	打製石斧	１・２
35	212-46-53	笹原台	縄文	縄文土器（中期・後期）	１・２・13
36	212-46-2	四階沢	縄文	縄文土器（晩期）・石鏃	１・２・14
37	212-46-30	御本陣跡	近世		１・２・11・12
38	212-46-45	弥助堰		堰の一部	１・２・11
39	212-46-20	上野台Ⅰ			１・２・14
40	212-46-28	上野台Ⅸ	縄文	縄文土器・石匙	１・２
41	212-46-47	上野台Ⅺ	縄文中期		１・２
42	212-46-21	上野台Ⅱ	縄文	縄文土器（中期・晩期）・土偶・石槍・石鏃・石錘・磨製石斧	１・２・15
43	212-46-44	称宜館	中世		１・２・３・６
44	212-46-25	上野台Ⅵ	弥生	弥生土器・石器	１・２
45	212-46-27	上野台Ⅷ	縄文	縄文土器・凹石	１・２
46	212-46-41	亀田街道跡	近世	旧道、両側の土盛り	１・２・11
47	212-46-19	角間沢	縄文	縄文土器（晩期）・石斧	１・２
48	212-46-42	キッカ沢館	中世	山城跡	１・２・３・６
49	212-46-51	寺沢	縄文・古代・近世	竪穴住居跡・土坑・井戸跡、縄文土器、石器（石鏃・石槍・石匙・石錐・石篦・スクレイパー・二次加工のある剥片）・石製品（石冠）、土師器・須恵器	１・２・６・９
50	212-46-29	柏台	旧石器・縄文	住居跡 10 棟・土坑 14 基（フラスコ状ピット１）・焼土遺構２基、縄文土器（後期）・石器	１・２
51	212-46-17	高城Ⅰ	縄文	縄文土器（晩期）・有角石斧・石槍・石棒	１・２
52	212-46-38	高城Ⅱ	中世	主郭・帯郭・土塁跡	１・２・３・12
53	212-46-50	上野台	旧石器・縄文・弥生・古代	竪穴住居跡・堀立柱建物跡・土坑、縄文土器・石器・弥生土器・石器・須恵器・土師器・須恵器系中世陶器	１・２・６・９
54	212-46-16	常野	縄文・古代	土坑・陥し穴・溝跡・焼土遺構・柱穴様ピット、縄文土器（前期、中期、後期）・石器（石匙・石篦・磨製石斧・敲石・凹石・石皿）・土製品（土偶）、土師器・須恵器・土製品（土錘）・鉄関連遺物（鉄滓）	１・２・16
55	212-46-37	館ノ城	中世	主郭・帯郭・堀状割り込み	１・２・３
56	212-46-39	白坂館	中世	主郭・帯郭・陶磁器	１・２・３・６・11
57	212-46-49	戸川堤沢Ⅱ		石器	１・２
58	212-46-48	戸川堤沢Ⅰ	縄文	縄文土器・石鏃（前期）	１・２
59	212-45-28	北楢岡中嶋	中世・近世	竪穴住居跡・土坑・カマド状遺構・焼土遺構・柱穴様ピット、陶磁器	２
60	212-45-1	三本杉経塚		経石	１・２・17・18

第２表　峰吉川中村遺跡周辺の遺跡一覧（２）

番号	遺跡台帳番号	遺跡名	主な時代	遺構・遺物	文献
61	212-45-2	三本杉一里塚	近世	一里塚２基	1・2・19・20
62	212-45-27	船戸	古代・中世	掘立柱建物跡、柱穴列、竪穴建物跡、井戸跡、カマド状遺構、焼土遺構、火葬施設、溝跡、柱穴様ピット、土師器、須恵器、陶磁器、木製品、石製品、銭貨	2・25・29
63	212-45-4	龍蔵台経塚			1・2・21
64	212-45-3	龍蔵寺跡	中世	土塁・空堀・井戸跡（陥没）	1・2・20
65	212-45-26	北楢岡中野	縄文・弥生・古代・中世・近世	掘立柱建物跡・竪穴建物跡・カマド状遺構・焼土遺構・井戸跡・溝跡。柱穴様ピット・縄文土器・石器・弥生土器・土師器・須恵器・須恵器系陶器・近世陶磁器	2・24・27
66	212-45-20	茨野	縄文・中世・近世	竪穴住居跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・井戸跡・屋外炉・溝跡・焼土遺構・土坑・土器埋設遺構・柱穴様ピット、縄文土器・石器（石鏃・磨製石斧・磨石・凹石・石皿）・石製品（線刻礫）・自然遺物（有孔礫）・土製品、磁器（龍泉窯）・須恵器系中世陶器・鉄製品（釘）・鉄関連遺物（鉄滓・羽口）・銭貨・近世陶磁器	1・2・24

※遺跡台帳番号：212-○-△の 212 は大仙市、○のうち 45 は旧神岡町、46 は旧西仙北町、51 は旧協和町を表す。△は遺跡番号。

第１・２表　文献（表中の番号は文献番号に対応する）

1　秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（仙北地区版）』　2007（平成19）年
2　秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室ホームページ『秋田県遺跡地図情報』
3　秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集　1981（昭和56）年
4　長山幹丸『協和町の城と館－郷土学習資料－』　1980（昭和55年）年
5　協和村郷土史編纂委員会編『協和村郷土誌』　1968（昭和43）年
6　西仙北町郷土史編纂委員会編『西仙北町史　先史～近世編』　1995（平成７）年
7　秋田県教育委員会『五百刈田遺跡発掘調査報告書－県道協和・松ヶ崎線緊急地方道路整備工事に係る埋蔵文化財調査報告書』秋田県文化財調査報告書第194集　1990（平成２）年
8　秋田県教育委員会『和田遺跡発掘調査報告書－県道協和・松ヶ崎線緊急地方道路整備工事に係る埋蔵文化財調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第212集　1991（平成３）年
9　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ－上野台遺跡・寺沢遺跡・半仙遺跡－』秋田県文化財調査報告書第180集　1989（平成元）年
10　秋田県教育委員会　『寄騎館遺跡－一般国道13号刈和野バイパス改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第277集　1998（平成10）年
11　西仙北町郷土史編纂委員会編『西仙北町郷土誌』1976（昭和51）年
12　内田武志・宮本常一編「月の出羽路」『菅江直澄第７巻』未来社　1978（昭和53）年
13　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第140集　1986（昭和61年）
14　秋田県『秋田県史考古編』　1960（昭和35）年
15　秋田県教育委員会『秋田県遺跡地名表（新産都市指定地域内埋蔵文化財包蔵地一覧）』秋田県文化財調査報告書　第９集　1967（昭和42）年
16　秋田県教育委員会　『常野遺跡－主要地方道本荘西仙北角館線緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第368集　2004（平成16）年
17　神岡町教育委員会『神岡町遺跡等所在一覧』1984（昭和59）年
18　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第259集　1995（平成７）年
19　秋田県庁文書『領中大小道程』1681（天和元）年
20　神岡町教育委員会『神岡町遺跡跡、伝説、神社仏閣等所在地一覧』1984（昭和59）年
21　神岡町教育委員会　『神岡町遺史跡等所在地一覧』1984（昭和59）年
22　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第365集　2003（平成15）年
23　神岡町教育委員会　『茨野遺跡－下夕野地区県営担い手育成基盤事業に係る埋蔵文化財調査報告書－』神岡町文化財調査報告書　2004（平成16）年
24　秋田県教育委員会『船戸遺跡－一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－』秋田県文化財調査報告書第490集　2011（平成23）年
25　秋田県教育委員会『大川端道ノ上遺跡－雄物川上流河川改修事業（寺館大巻地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』秋田県文化財調査報告書第496集　2015（平成27）年
26　秋田県教育委員会『西板戸・窪遺跡－雄物川上流河川改修事業（西板戸地区）・雄物川上流河川改修事業（寺館大巻地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』秋田県文化財調査報告書第502集　2016（平成28）年
27　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布報告書』秋田県文化財調査報告書　第475集　2012（平成24）年
28　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布報告書』秋田県文化財調査報告書　第486集　2013（平成25）年
29　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布報告書』秋田県文化財調査報告書　第497集　2015（平成27）年

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

１　発掘調査

調査区は事業用地のうち、旧中村集落が移転した微高地上に立地しており、大きく２か所に分かれる。また用地買収等の問題から､今回調査を実施できなかった２つの未調査区が残っている(第５図)。

発掘調査では、施設仮設や発掘作業員による掘削業務及び安全管理等については「掘削作業管理業務」とし、一括して外部委託した。

表土除去作業は、埋蔵文化財センター職員立ち会いのもと重機を使用して行った。調査区内の掘り下げは、盛土(Ⅰ層)から水田造成土(Ⅱ層)までを重機で行い、古代の遺物包含層(Ⅲ層)から人力で掘り下げた。基盤層(Ⅳ層)上面で遺構確認を行い、検出した遺構について精査を行った(第６図)。

調査は、グリッド法で行った。調査対象のほぼ全域に方眼杭を打設するため、調査区内の中心に近い箇所で、世界測地系平面直角座標第Ⅹ系　Ｘ＝－49016.000、Ｙ＝－42356.000を基軸にし、４ｍ×４ｍのメッシュを組み、その交点に方眼杭を打設した。方眼の原点を通る南北線をＭＡ、同じく東西線を50とし、南北線はアルファベットの符号を西に向かって昇順となるよう、東西線は数字の符号を北に向かって昇順となるよう付した。この方眼による４ｍ四方の区画は、南東隅にあたる杭の南北と東西の符号を組み合わせ、ＭＡ50のように呼ぶことにした(第７図)。

遺構は、柱穴様ピットとそれ以外の遺構に分け、一部例外もあるが、検出順にＭＡ50を境とし任意に呼称した。西側調査区では01番、東側調査区では100番からの通し番号を付し、遺構の略記号と組み合わせて呼称した。また、柱穴様ピットも同様に、西側調査区では01番、東側調査区では1001番からとした。1431番以降は整理作業中に番号を付したものである。また中には、精査の結果により、遺構でないと判断し欠番としたものもある。実測図は原則として西側では主に１/20の縮尺で作図し、必要に応じて１/10での作図も行った。東側では主に、トータルステーションを用いた遺跡測量システムにより行うとともに、必要に応じ、１/20の縮尺での作図も併用した。

遺物は、出土区もしくは出土遺構、出土層位、出土年月日を記録して取り上げを行った。遺物の取り上げ等に用いる測量機器の設置は、調査区内の方眼杭24か所に設定した水準杭をもとに行った。遺物の収納、取り扱いについては、土器、陶磁器、石製品等はチャック付ポリ袋に入れ、コンテナに収納した。木製の遺物については、コンテナに水漬けして収納した。

写真撮影は、遺構調査の随所で行ったほか、必要に応じて遺物の出土状況等を記録した。撮影は、デジタルカメラで行った。

２　整理作業

遺物は、洗浄、注記の後、土器・陶磁器類については、必要に応じて接合作業を行った。土器・陶磁器類は、接合作業後に種類及び器種に分類し、それぞれの重量を計量した。計量後に報告書掲載土器・陶磁器類を選別し、遺存状態により、必要に応じエポキシ樹脂等を充填し復元作業を行った。

報告書掲載遺物図面については、実測図作成後、当該図をスキャニングして下図としてドローイングソフトを用いてデジタルトレースして作成した。必要に応じ、拓本の作成及び写真撮影を行い、同様にスキャニングしてトレース図と組み合わせた。

遺構等の図面に関しては、西側調査区では主に現場で作成した図から第２原図を作成し、スキャニングして下図としてドローイングソフトを用いてデジタルトレースを行った。また東側調査区では主に、遺跡測量ソフト及び遺構トレースソフトを用いて行った。手実測による土層断面図をスキャニングし下図としてデジタルトレースし、現場で測量作成した平面図と組み合わせて全体を調整して作成した。

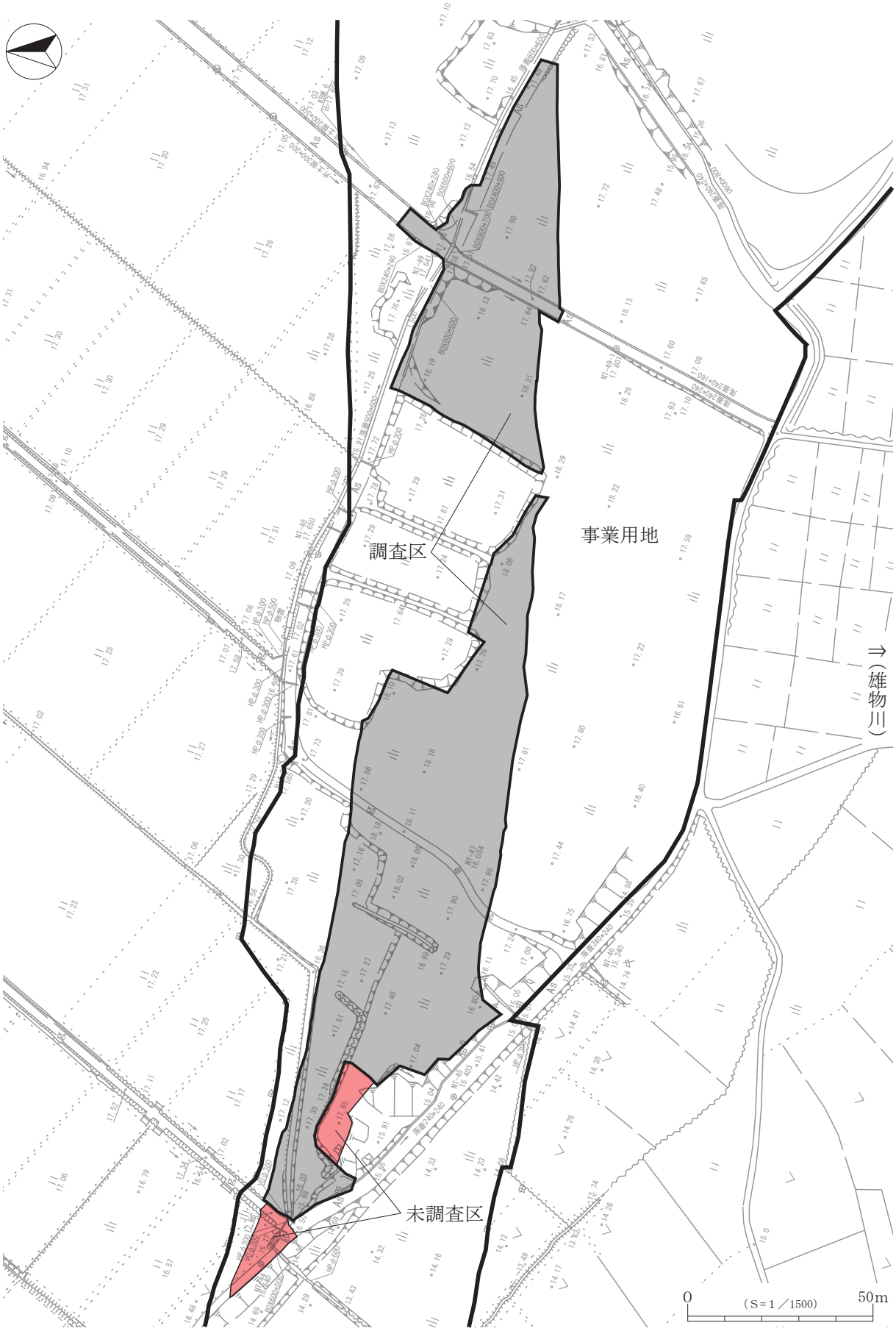
遺構・遺物等のデジタルトレース図は、最終的にドローイングソフトを用いてレイアウトし、挿図原稿を作成した。

第２節　基本層序

遺跡は、雄物川右岸の自然堤防上に立地する。周囲は旧雄物川河道である谷底平野に囲まれ、出羽丘陵の先端は遺跡から北へ約900ｍまで迫っている。遺跡の試掘及び確認調査前の様子は荒蕪地で、以前は約20年前に移転した旧中村集落の宅地や水田として土地利用がされていた。遺跡内は、標高の比較的高位地区と低位地区に大きく分けられる。高位地区は調査前の高さがおおよそ18.2 ～ 17.5ｍ、低位地区は17.2 ～ 15.9ｍである。遺跡調査区周辺は標高が低く、南は雄物川本流へ、北は後背湿地につながっている（第５図）。調査区内での低位地区は場所によって幅はあるが、おおよそＭＥグリッドライン以西の、55 ～ 63グリッドライン以北、及び調査区西端にあたる。調査区内及び周囲の標高が低い地区は、旧集落の住宅位置が記された『用地取得箇所表示図　中村築堤』によれば水田としての土地利用がされ、住宅は遺跡の高位地区に集中していた。調査区内では、この旧集落が移転した際の住宅の土台部分が残っていたり、建物の取り壊し及び移転に際し出た廃棄物を処理するために掘られた大きなゴミ穴が、表土除去時に随所で確認され、調査区内は大きく撹乱を受けていた。また表土以下も大きく改変されている。おそらく旧集落時代の移転に伴う更地化及び旧水田の圃場整備などで遺跡内を大きく削平し、その後土を多量に盛っている。遺跡の基本層序は東側・西側調査区ともに調査区外に接する壁面で土層観察を、また地山面以下の土層は、井戸跡調査時に設定した断ち割り壁面で土層観察をした。大別して５層に分層した。詳細は以下に述べる（第６図）。

第Ⅰ層：表土または水田耕作土を含む造成土である。調査区は以前に宅地及び水田としての土地利用がされていたことから、第Ⅰ層も大きく３種類に分けられる。第Ⅰａ層は、遺跡の表土で遺跡全体を覆い、植物根による撹乱が多い。層厚は約１～ 10cmである。第Ⅰｂ層は、表土下の宅地に伴う造成土で、第Ⅱ・Ⅲ層土を巻き込んで造成されている。層厚は約20 ～ 40cmである。第Ⅰｃ層は水田耕作土である[註１]。今回の調査では、東西どちらの土層断面にもかからなかったため図示していない。しかし確認調査時に、調査区西端及びＭＡ50付近で堆積している様子を確認している。層厚は約20cmである。

第Ⅰａ層　暗褐色（10ＹＲ３／３）シルト　しまり強　粘性弱



第５図　調査区と周辺地形図

第Ⅰｂ層　暗褐色(10ＹＲ３／４)シルト～粘土質シルト　しまり強　粘性中
第Ⅰｃ層　暗灰黄色(2.5Ｙ４／２)～灰黄色(2.5Ｙ６／３)シルト質粘土～粘土　しまり強　粘性強

第Ⅱ層：雄物川の氾濫による洪水堆積土である。基本的には、第Ⅱ層以下も洪水堆積土を基質とするが、特に遺物を包含していない。また上面から遺構の掘り込みが確認されていないことから第Ⅲ層と区別した。層厚は20～30㎝で、西側調査区では、宅地及び水田の圃場整備による土地改良により改変されているため、今回の西側調査区の土層断面観察のみならず、確認調査時の土層断面観察でも確認されていない。

第Ⅱ層　にぶい黄褐色(10ＹＲ５／３)砂質シルト　しまり強　粘性中

第Ⅲ層：遺跡の遺物包含層である。また第Ⅱ・Ⅳ層同様、雄物川の氾濫による洪水堆積土を基質とする。西側調査区では、宅地及び水田の圃場整備による土地改良により改変されているため、第Ⅳ層上にわずかに堆積している状況が部分的に確認されたのみである。一方、東側調査区では、西側調査区ほどの削平を受けていないため、部分的な削平はあるが比較的良好な状態で堆積していた。一部の遺構が第Ⅲ層上面で検出されている。層厚は約５～15cmである。

第Ⅲ層　暗褐色(10ＹＲ３／４)シルト　しまり強　粘性中

第Ⅳ層：遺跡の地山土層である。調査区内でほとんどの遺構が第Ⅳ層上面で検出されている。第Ⅱ・Ⅲ層同様、雄物川の氾濫による堆積土を基調とする。第Ⅳａ層は、一部グライ化による変色もあるが、遺跡全体に広がっている。第Ⅳａ層以下の堆積は、井戸跡を調査するために設定した断ち割り壁面で観察している。第Ⅳａ層以下は、大きく砂質シルトのⅣｂ層、粘土質のⅣｃ層に分類される。各層厚は地区ごとに異なるが、第Ⅳａ層は約20～80㎝、第Ⅳｂ層は40～140㎝、第Ⅳｃ層は０～20㎝でその下は岩盤層である第Ⅴ層となる。

第Ⅳａ層　褐色(10ＹＲ４／６)シルト～粘土質シルト　しまり強　粘性中
第Ⅳｂ層　にぶい黄褐色(10ＹＲ５／４)砂質シルト　しまり強　粘性やや弱
第Ⅳｃ層　にぶい黄橙色(10ＹＲ７／２)粘土　しまりやや弱　粘性中

第Ⅴ層：遺跡の基盤層である。ＳＥ05井戸跡の断ち割り壁面で、第Ⅴ層直上で出土した流木は、放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、3094～2945calＢＣ(１σ)の年代値を示した(第４章第１節参照以下同)。このことから該期には、第Ⅴ層上面が地表面であった可能性がある。その後、たび重なる雄物川の洪水の影響で、第Ⅴ層上に第Ⅳ層が堆積したものと推測される。

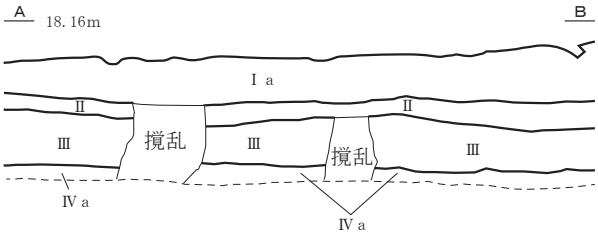
第Ⅴ層　灰色(7.5Ｙ５／１)岩盤　しまり強　粘性中

註１　確認調査の結果は、『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県埋蔵文化財報告書第486集に掲載されている。その際には、今回調査の第Ⅰｃ層を第Ⅰｂ層として報告している。

参考文献

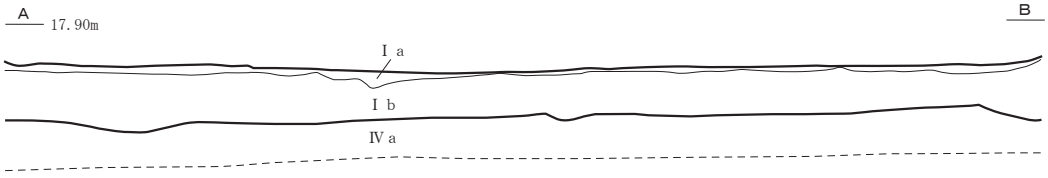
秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県埋蔵文化財報告書第486集　2013(平成25)年

東側調査区　※断面図作成位置は第７・30・40 図参照

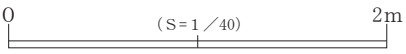


東側調査区
Ⅰａ　暗褐色（10ＹＲ３／３）シルト　しまり強　粘性弱
※植物根による撹乱多
Ⅱ　にぶい黄褐色（10ＹＲ５／３）砂質シルト　しまり強　粘性中
混入物：炭化物粒φ２㎜１％未満
Ⅲ　暗褐色（10ＹＲ３／４）シルト　しまり強　粘性中
Ⅳ　褐色（10ＹＲ４／６）シルト　しまり強　粘性中～やや強
※植物根による暗褐色土の撹乱多

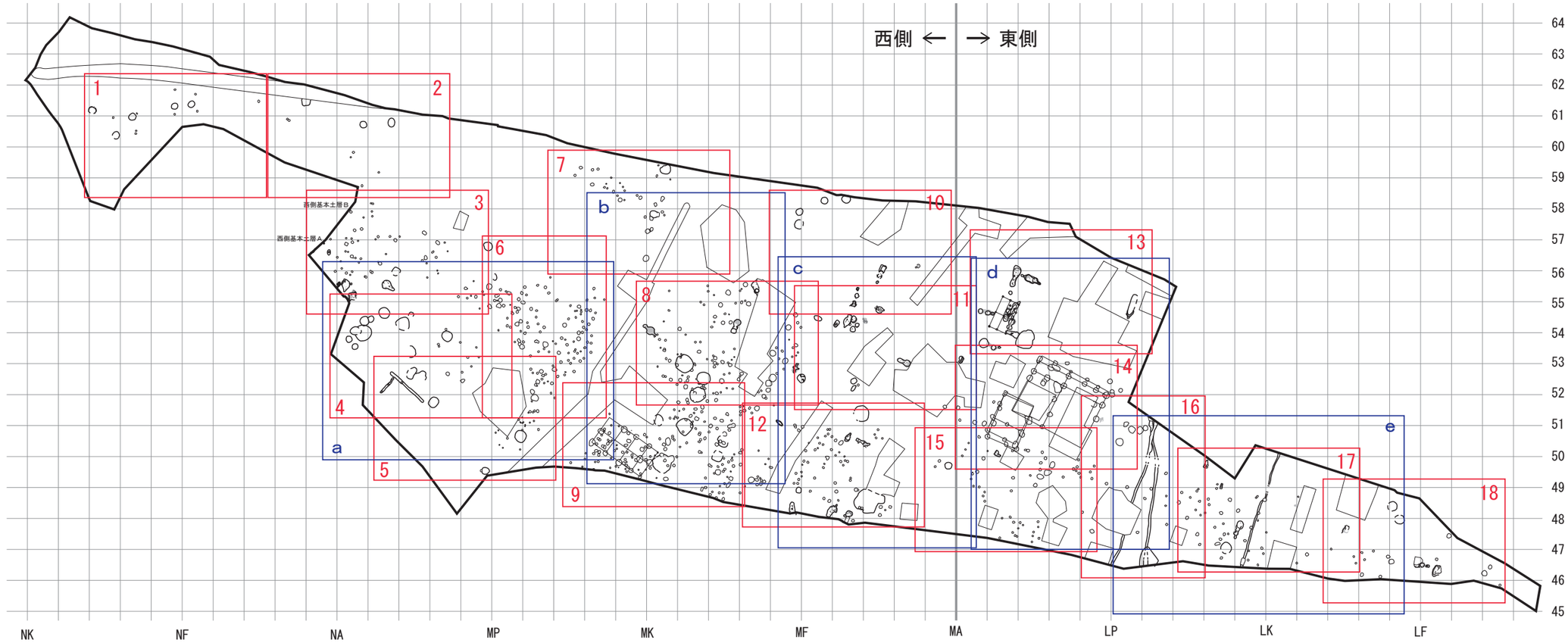
西側調査区基本土層　※断面図作成位置は第７・10 図参照

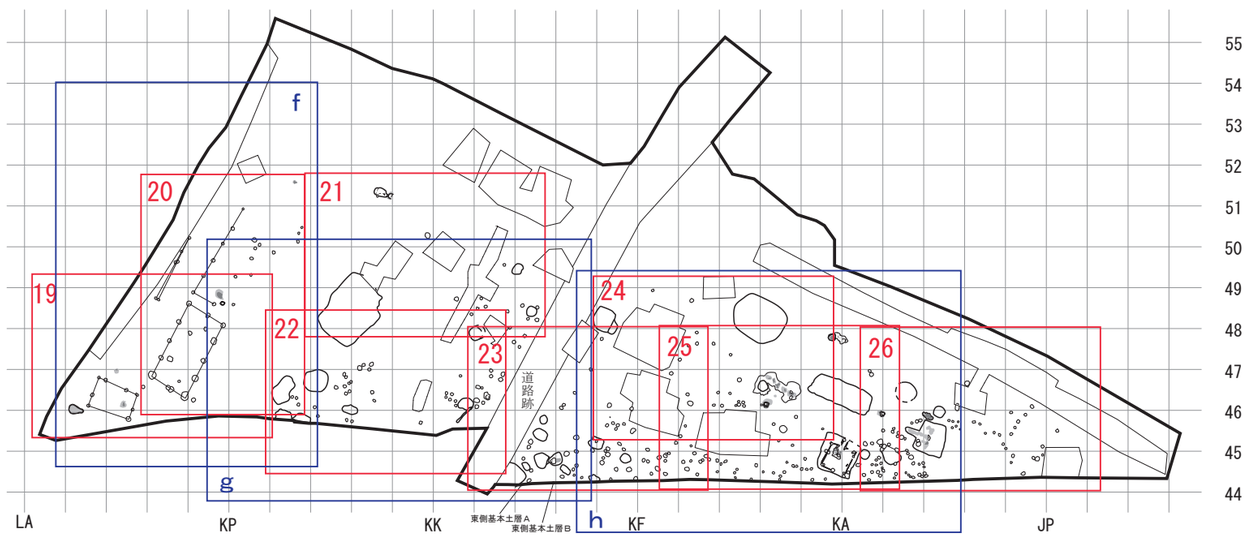


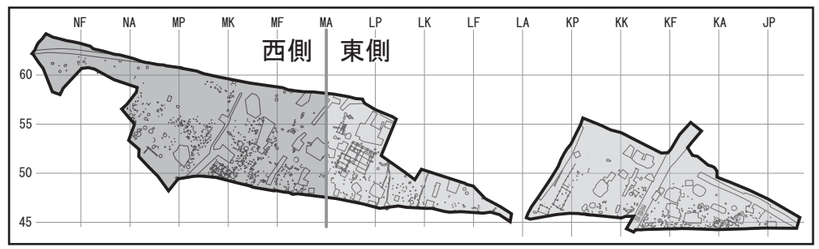
西側調査区
Ⅰａ　暗褐色（10ＹＲ３／３）シルト　しまり強　粘性弱　※植物根による撹乱多
Ⅰｂ　暗褐色（10ＹＲ３／４）シルト　しまり強　粘性中　混入物：炭化物粒φ２㎜１％未満、焼土粒φ２㎜１％未満
Ⅳａ　褐色（10ＹＲ４／６）シルト　しまり強　粘性中～やや強　※植物根による暗褐色土の撹乱多

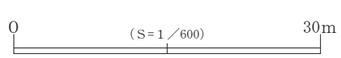


第６図　基本層序図

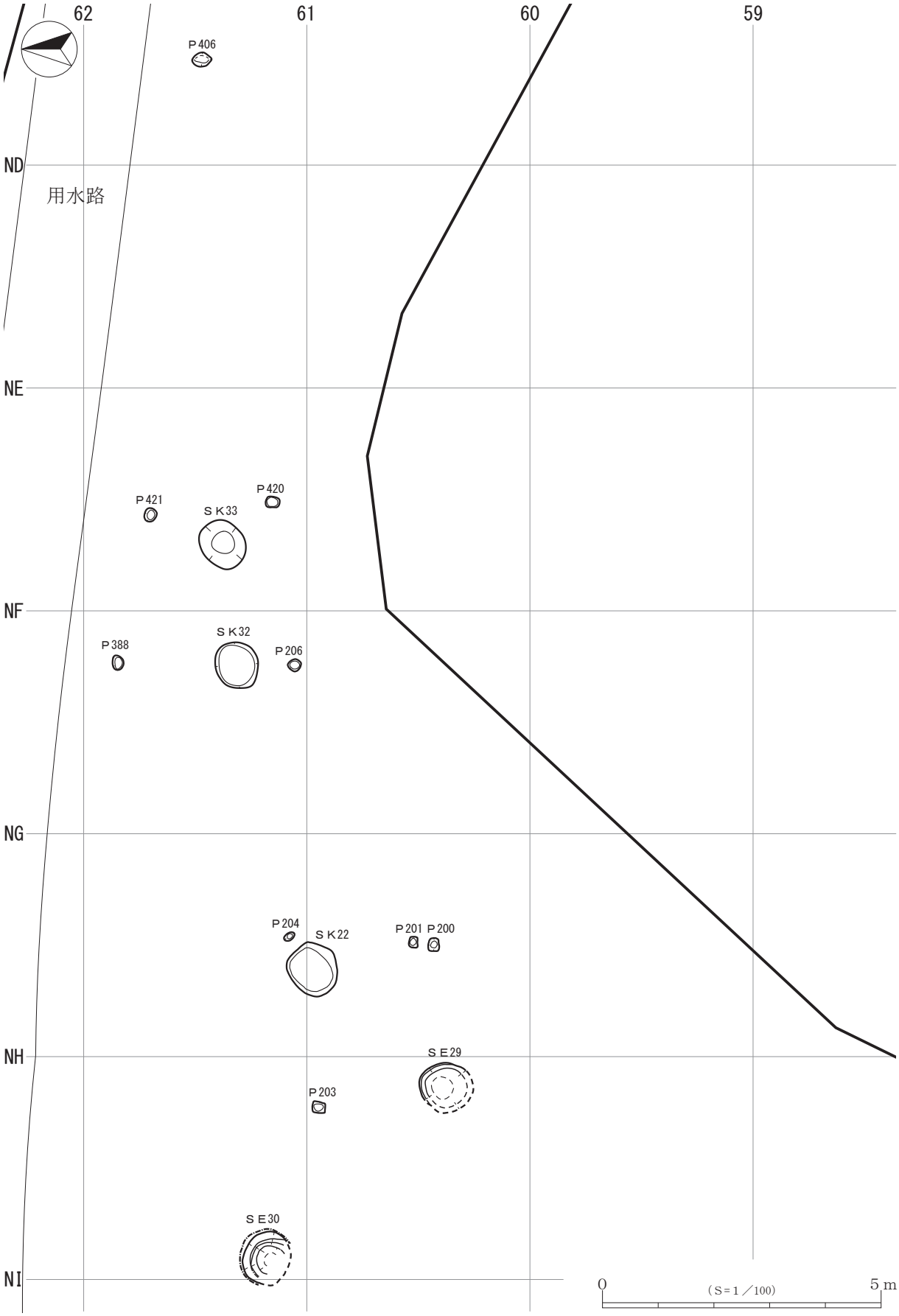




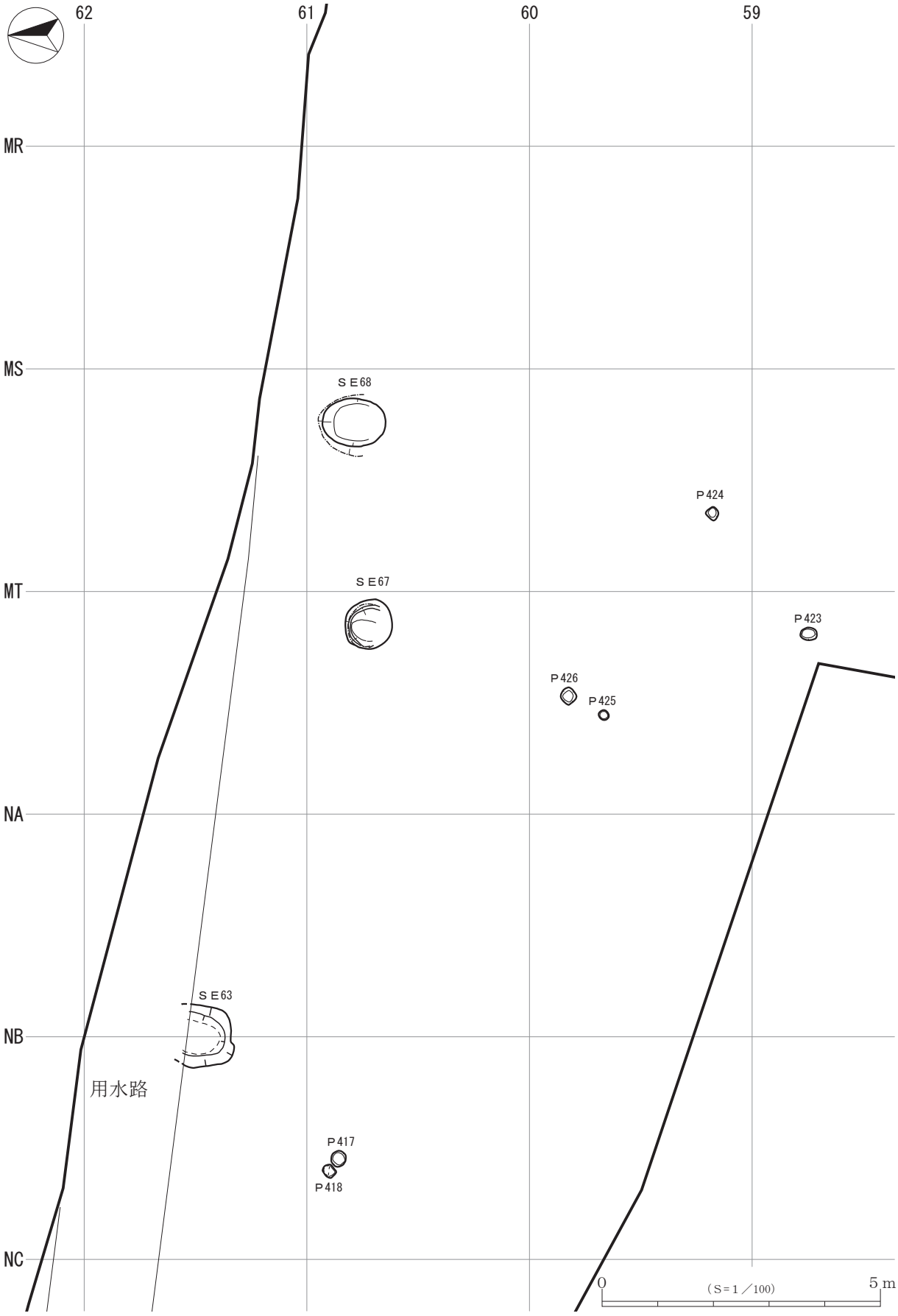




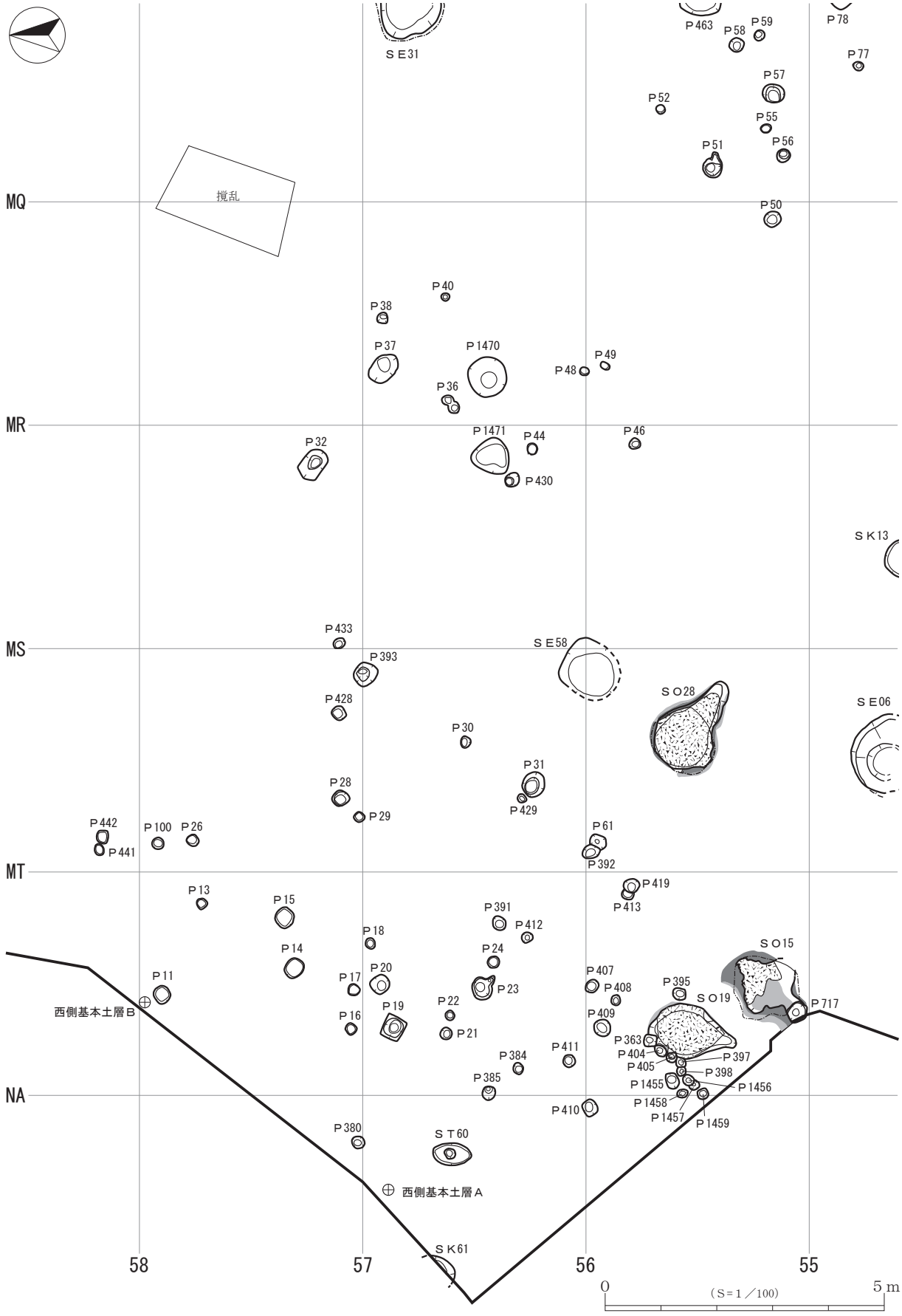
第７図　調査区全体の遺構配置と割り付け


62
61
60
59
ND
NE
NF
NG
NH
NI
用水路
P406
P421
SK33
P420
P388
SK32
P206
P204
SK22
P201
P200
SE29
P203
SE30
0
(S=1／100)
5m

第８図　遺構配置図（１）

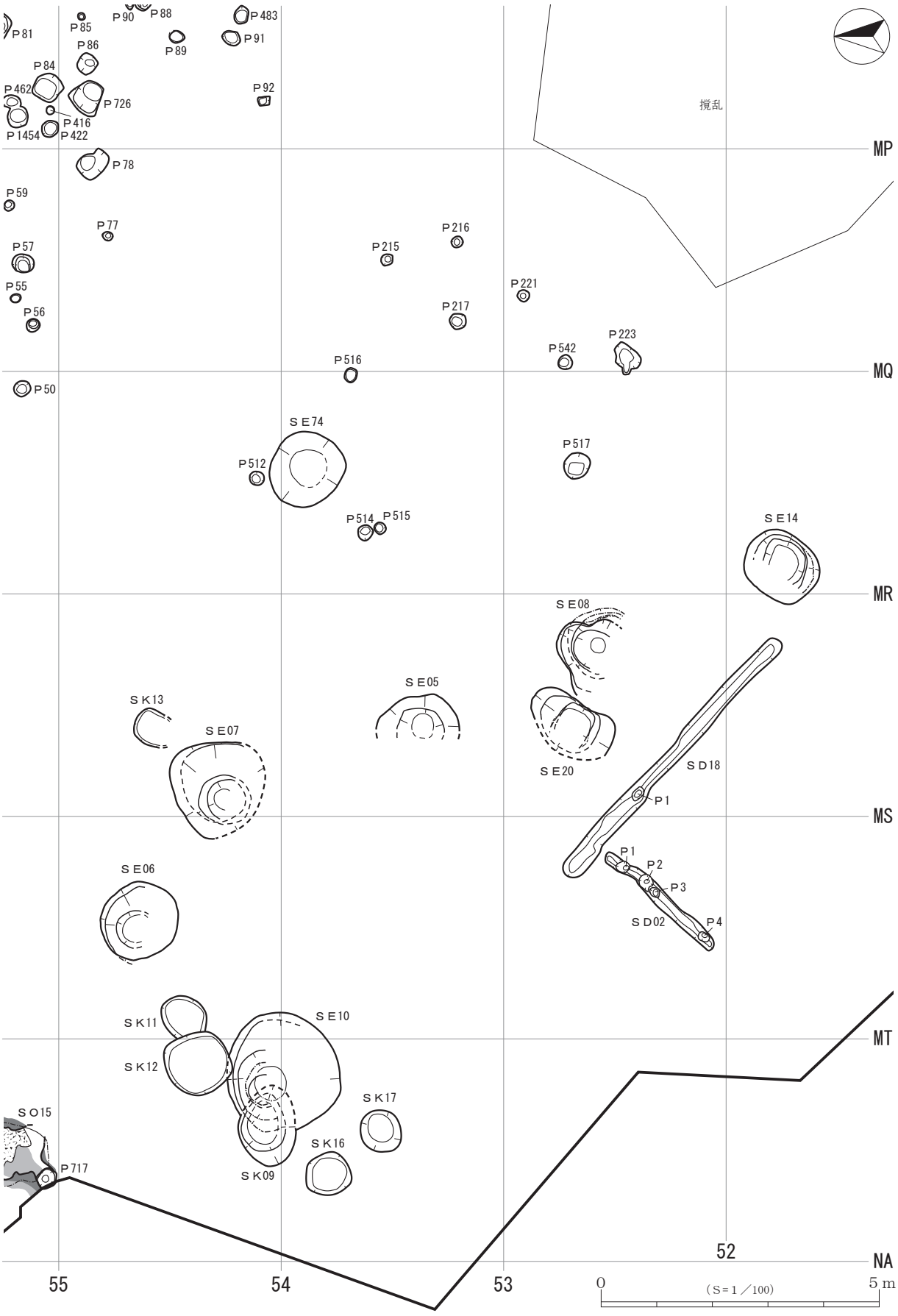

62
61
60
59
MR
MS
MT
NA
NB
NC
ＳＥ68
ＳＥ67
ＳＥ63
Ｐ424
Ｐ423
Ｐ426
Ｐ425
Ｐ417
Ｐ418
用水路
0
(S＝1／100)
5ｍ

第９図　遺構配置図（２）

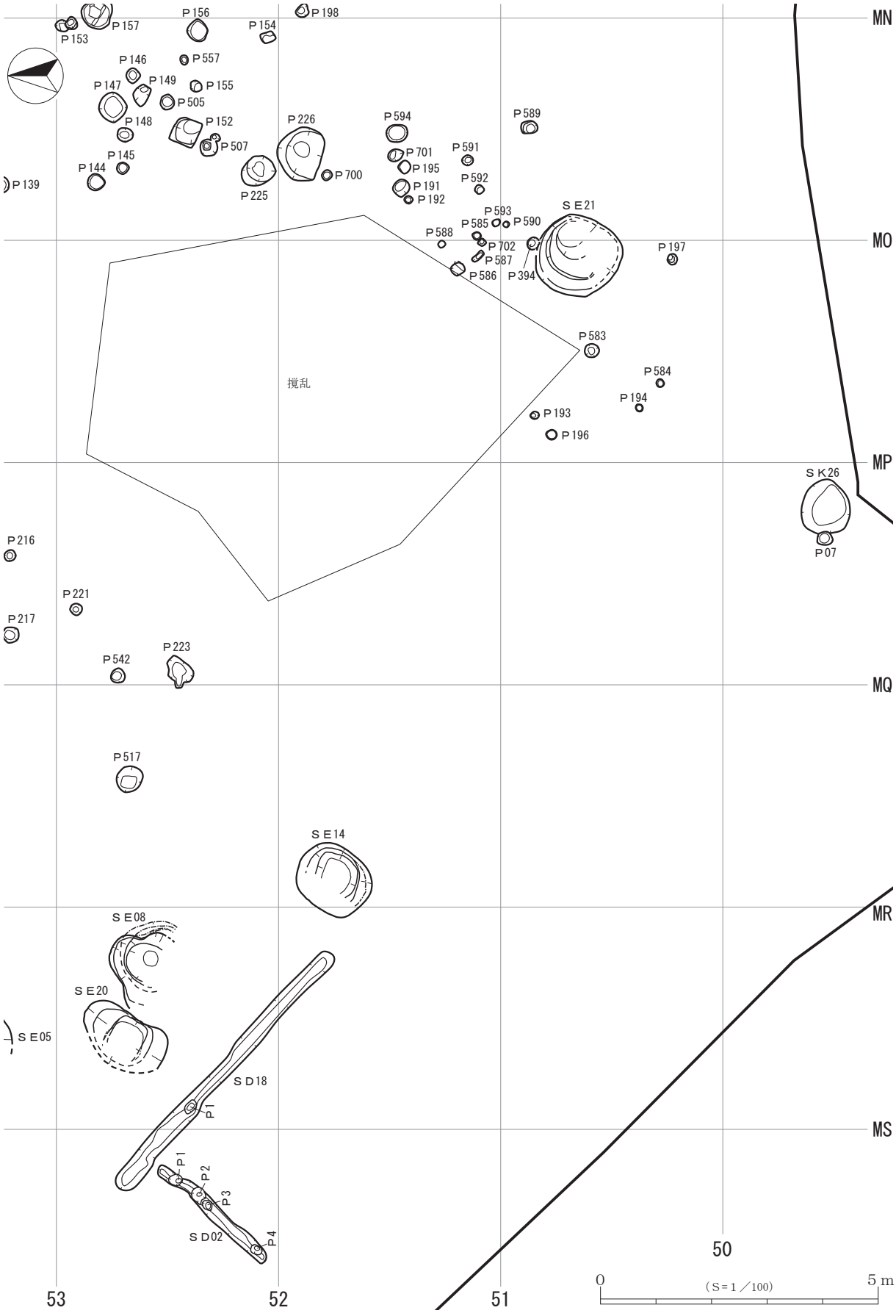


MQ
MR
MS
MT
NA
58
57
56
55
撹乱
SE31
P463
P58
P59
P78
P77
P57
P52
P55
P51
P56
P50
P40
P38
P37
P1470
P49
P48
P36
P32
P1471
P44
P46
P430
SK13
P433
SE58
P393
SO28
SE06
P428
P30
P31
P28
P429
P29
P442
P100
P26
P61
P441
P392
P419
P13
P15
P413
P391
P412
P18
SO15
P14
P24
P11
P17
P20
P407
P408
P395
P23
SO19
P717
西側基本土層B
P16
P19
P22
P409
P21
P363
P411
P404
P397
P384
P405
P398
P385
P1455
P1456
P1458
P410
P1457
P1459
P380
ST60
西側基本土層A
SK61
0
(S=1／100)
5m

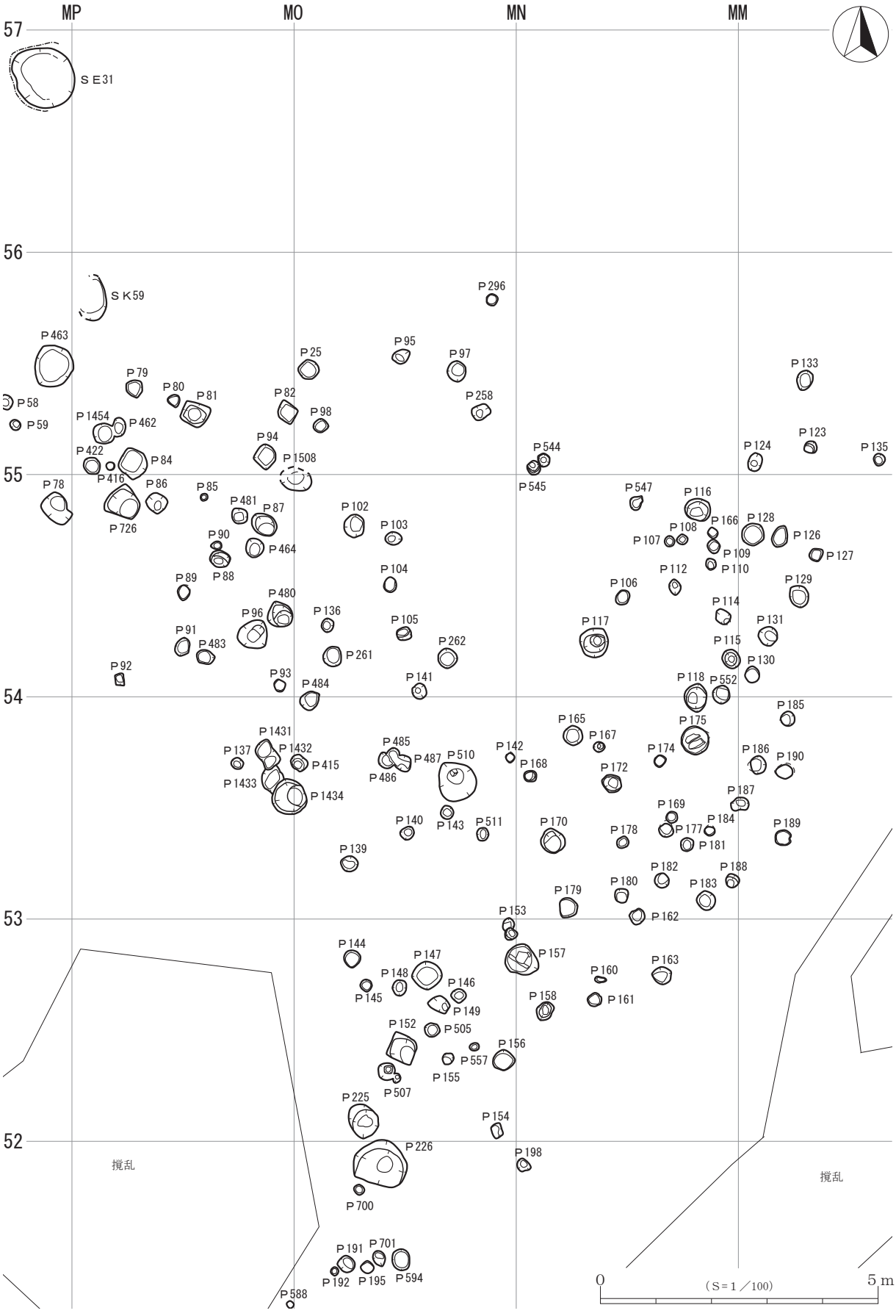
第 10 図　遺構配置図（３）


P81
P85
P90
P88
P483
P86
P89
P91
P84
P462
P726
P92
P416
P1454
P422
P78
P59
P77
P216
P215
P57
P221
P55
P217
P56
P223
P542
P516
P50
SE74
P512
P517
P514
P515
SE14
SE08
SK13
SE05
SE07
SE20
SD18
P1
MS
P1
P2
P3
SE06
SD02
P4
SK11
SE10
SK12
SK17
SO15
SK16
P717
SK09
MP
MQ
MR
MT
NA
搅乱
55
54
53
52
0
5 m
(S=1／100)

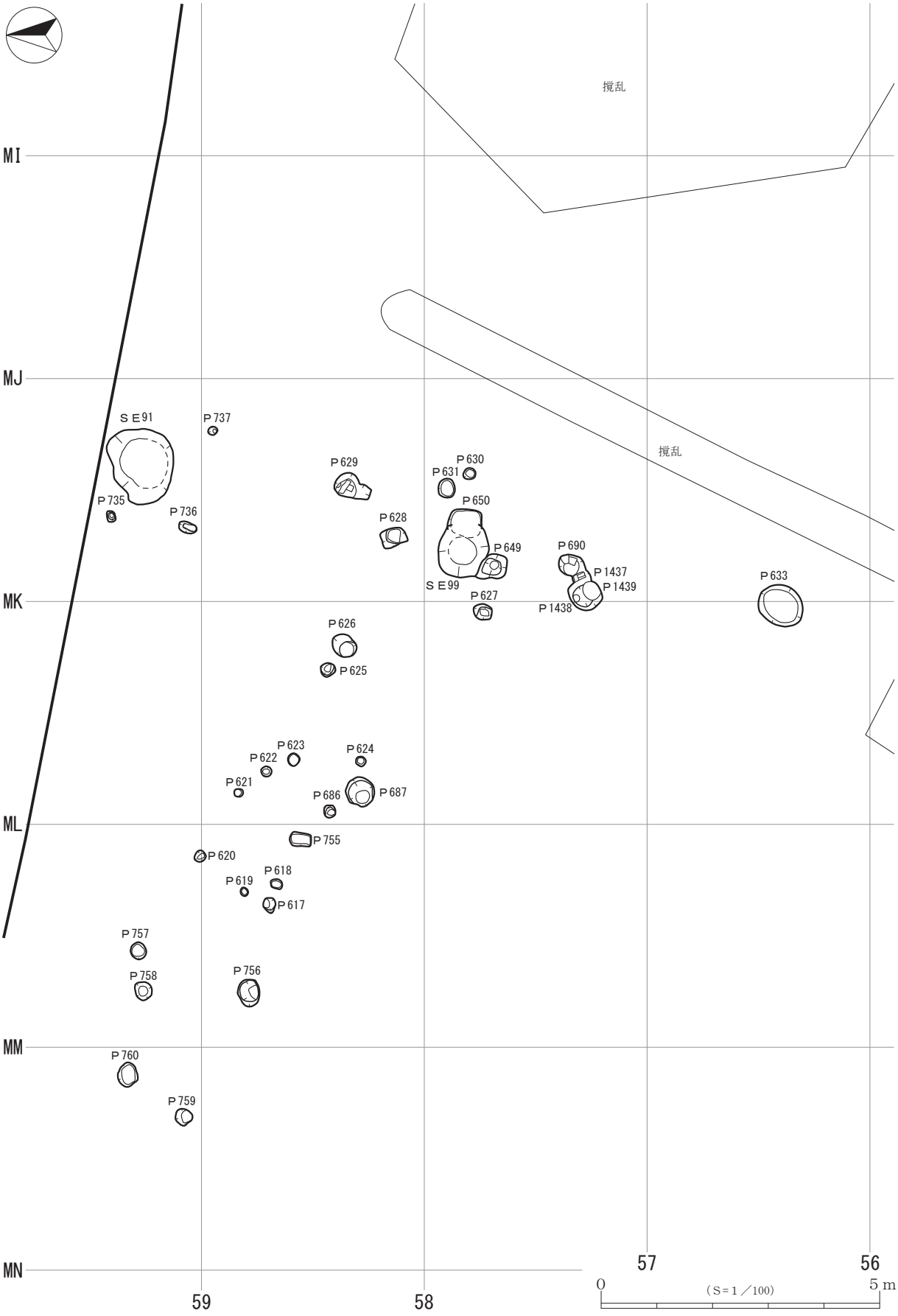
第 11 図　遺構配置図（４）


MN
MO
MP
MQ
MR
MS
53
52
51
50
P153
P157
P156
P154
P198
P146
P557
P147
P149
P155
P505
P148
P152
P507
P145
P144
P139
P225
P226
P700
P594
P701
P195
P191
P192
P589
P591
P592
P593
P585
P590
P588
P702
P587
P586
P394
SE21
P197
P583
P584
P194
P193
P196
搅乱
SK26
P07
P216
P221
P217
P542
P223
P517
SE14
SE08
SE20
SE05
SD18
P1
SD02
P1
P2
P3
P4
0
(S=1／100)
5m

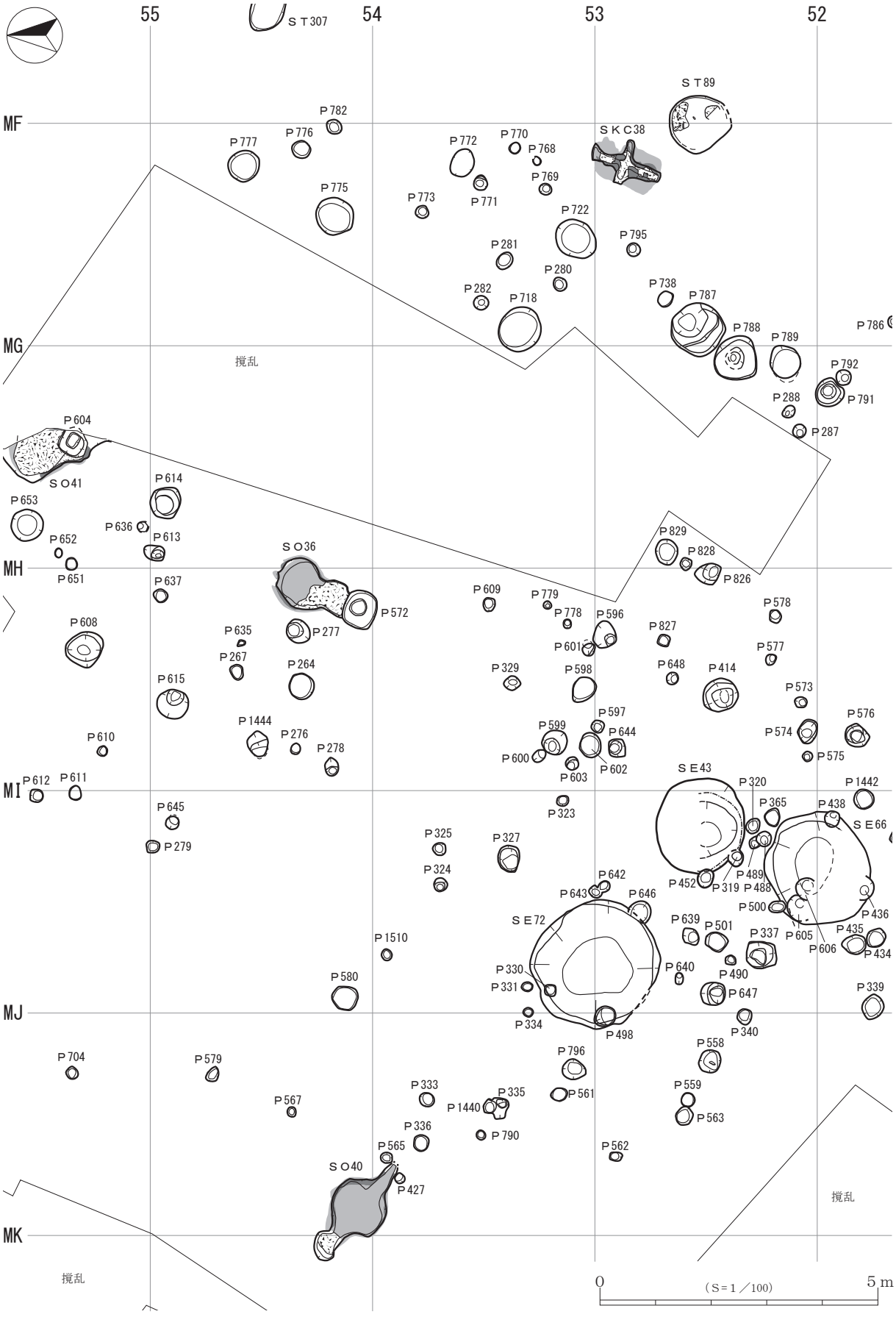
第 12 図　遺構配置図（５）


MP
MO
MN
MM
57
56
55
54
53
52
ＳＥ31
ＳＫ59
P296
P463
P95
P97
P25
P133
P79
P80
P81
P82
P98
P258
P58
P59
P1454
P462
P94
P123
P422
P84
P1508
P544
P124
P135
P416
P545
P78
P86
P85
P547
P116
P481
P87
P102
P166
P128
P726
P103
P108
P126
P90
P464
P107
P109
P127
P89
P88
P104
P112
P110
P129
P480
P106
P96
P136
P114
P105
P117
P131
P91
P483
P262
P115
P261
P130
P92
P93
P484
P141
P118
P552
P185
P1431
P165
P167
P175
P137
P1432
P485
P142
P174
P186
P190
P415
P487
P510
P168
P172
P1433
P486
P187
P1434
P169
P184
P140
P143
P511
P170
P177
P189
P178
P181
P139
P182
P188
P180
P183
P179
P153
P162
P144
P157
P147
P163
P148
P160
P146
P145
P158
P161
P149
P152
P505
P156
P557
P155
P507
P225
P154
P226
P198
P700
P191
P701
P192
P195
P594
P588
撹乱
撹乱
0
(S=1／100)
5m

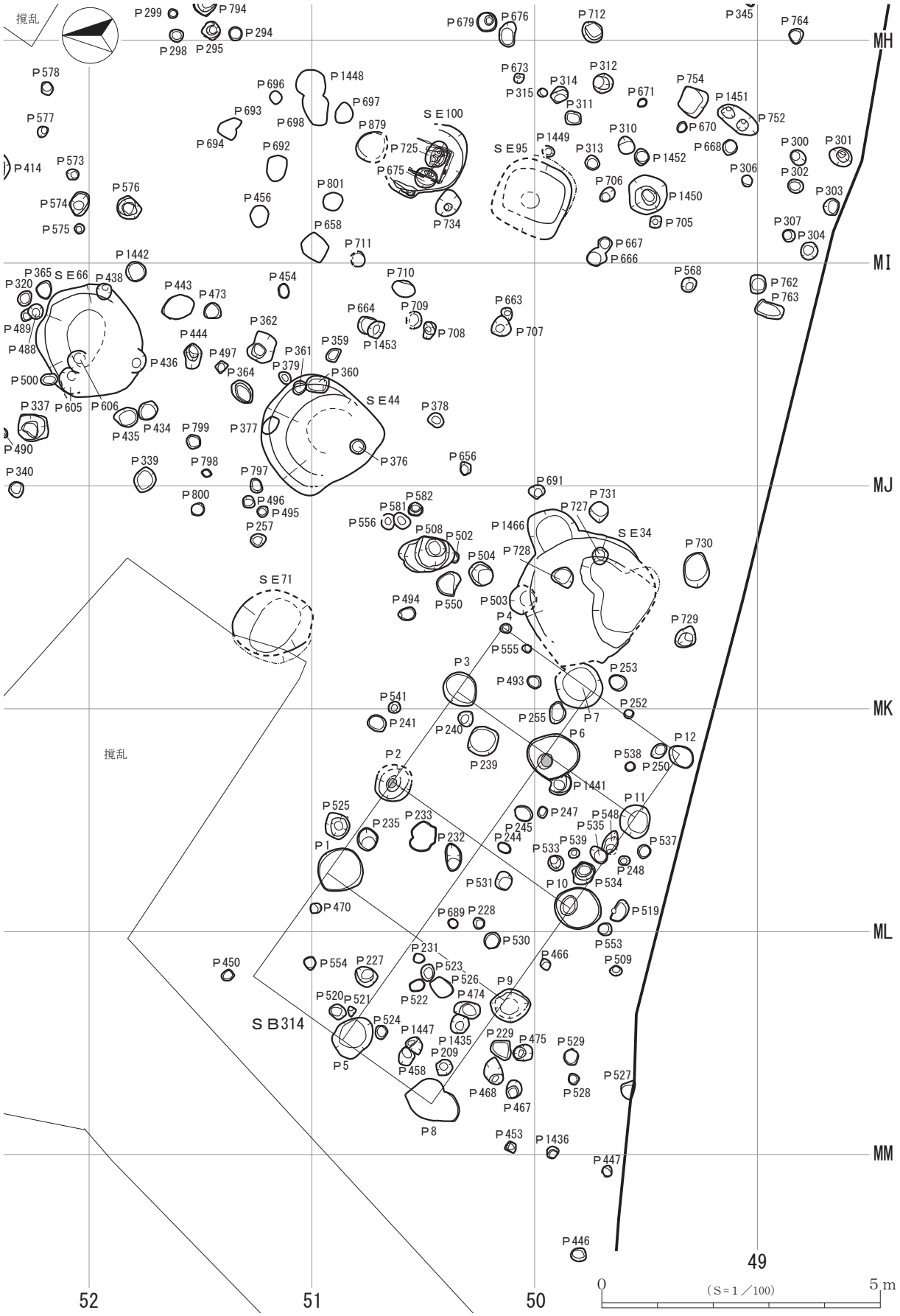
第 13 図　遺構配置図（６）


撹乱
撹乱
MI
MJ
MK
ML
MM
MN
59
58
57
56
SE91
P737
P735
P736
P629
P630
P631
P650
P628
P649
SE99
P690
P1437
P1439
P1438
P627
P633
P626
P625
P623
P622
P624
P621
P686
P687
P755
P620
P618
P619
P617
P757
P758
P756
P760
P759
0
5m
(S=1／100)

第 14 図　遺構配置図（７）


55
54
53
52
MF
MG
MH
MI
MJ
MK
ＳＴ307
ＳＴ89
ＳＫＣ38
ＳＯ41
ＳＯ36
ＳＯ40
ＳＥ43
ＳＥ66
ＳＥ72
攪乱
攪乱
攪乱
P604
P614
P653
P636
P613
P652
P651
P637
P608
P635
P267
P264
P615
P1444
P276
P278
P610
P612
P611
P645
P279
P782
P776
P777
P775
P772
P770
P768
P769
P771
P773
P722
P795
P281
P280
P282
P718
P738
P787
P788
P789
P786
P792
P791
P288
P287
P572
P277
P609
P779
P778
P596
P601
P598
P329
P597
P599
P644
P600
P603
P602
P323
P829
P828
P826
P827
P648
P414
P578
P577
P573
P576
P574
P575
P320
P365
P438
P1442
P325
P327
P324
P642
P643
P646
P452
P319
P489
P488
P500
P436
P639
P501
P337
P605
P606
P435
P434
P1510
P330
P331
P334
P640
P490
P647
P339
P580
P498
P340
P704
P579
P796
P558
P567
P333
P335
P1440
P561
P559
P563
P336
P790
P565
P562
P427
0
（S＝1／100）
5m

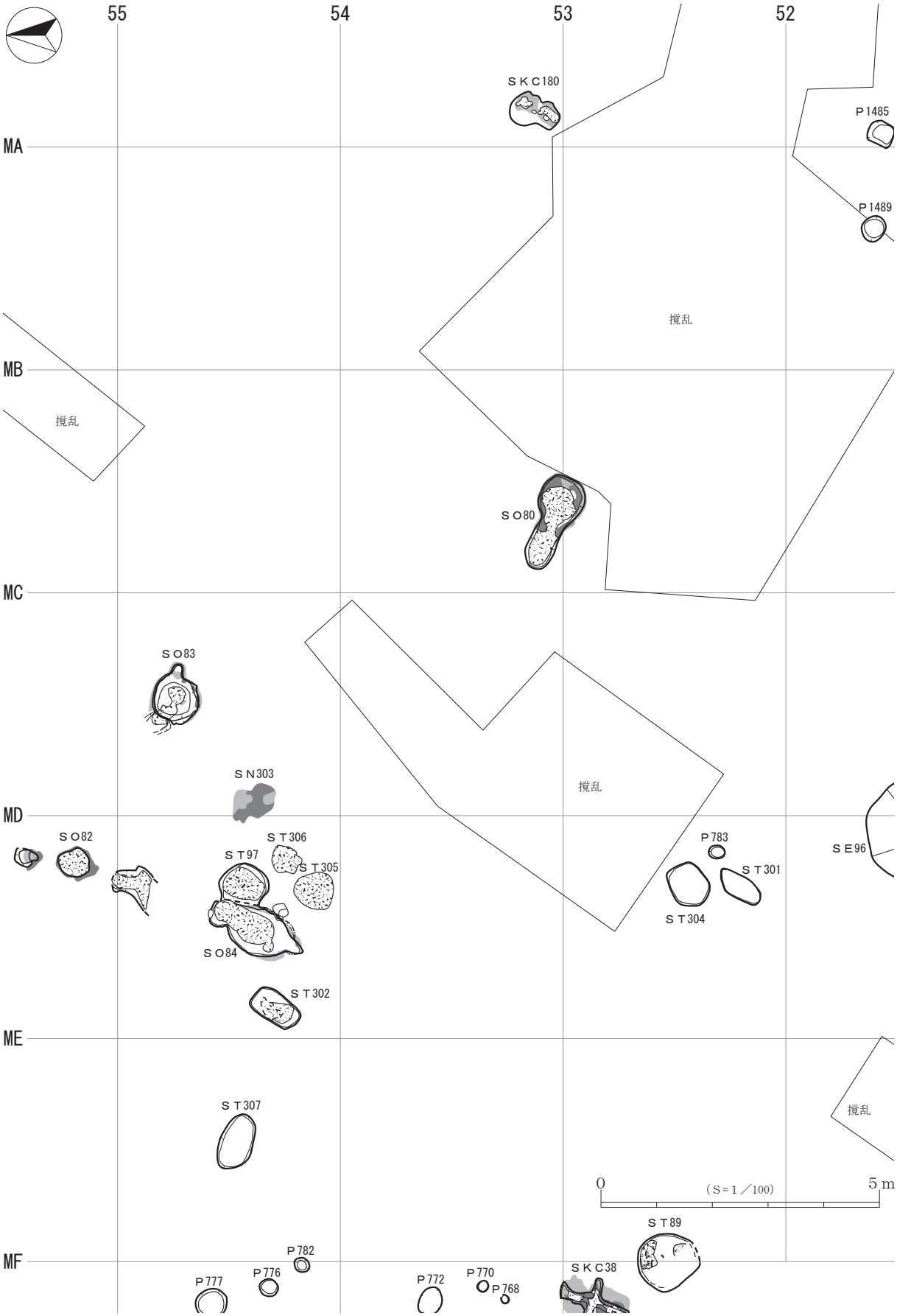
第 15 図　遺構配置図（８）



撹乱
MH
MI
MJ
MK
ML
MM
52
51
50
49
SE100
SE95
SE66
SE44
SE34
SE71
SB314
P299
P794
P294
P298
P295
P679
P676
P712
P345
P764
P578
P696
P1448
P697
P673
P314
P312
P315
P311
P671
P754
P1451
P752
P577
P693
P698
P879
P670
P694
P692
P725
P1449
P310
P668
P300
P301
P414
P573
P675
P313
P1452
P306
P302
P576
P801
P706
P1450
P303
P574
P456
P734
P705
P575
P658
P307
P304
P711
P667
P666
P1442
P365
P438
P710
P568
P762
P320
P443
P454
P763
P473
P664
P709
P663
P489
P362
P708
P707
P488
P444
P359
P1453
P436
P497
P361
P379
P364
P360
P500
P605
P606
P337
P378
P434
P799
P377
P435
P490
P376
P656
P339
P798
P340
P797
P691
P800
P496
P495
P582
P731
P581
P727
P556
P257
P508
P502
P1466
P504
P728
P730
P494
P550
P503
P4
P729
P555
P3
P253
P493
P541
P252
P255
P7
P241
P240
P6
P12
P239
P538
P250
P2
P1441
P11
P525
P247
P548
P235
P233
P245
P535
P232
P244
P537
P1
P533
P539
P248
P531
P10
P534
P470
P689
P228
P519
P530
P553
P231
P466
P509
P450
P554
P227
P523
P526
P9
P520
P521
P522
P474
P524
P1447
P229
P475
P529
P1435
P209
P5
P458
P527
P468
P528
P467
P8
P453
P1436
P447
P446
0
5 m
（S＝1／100）

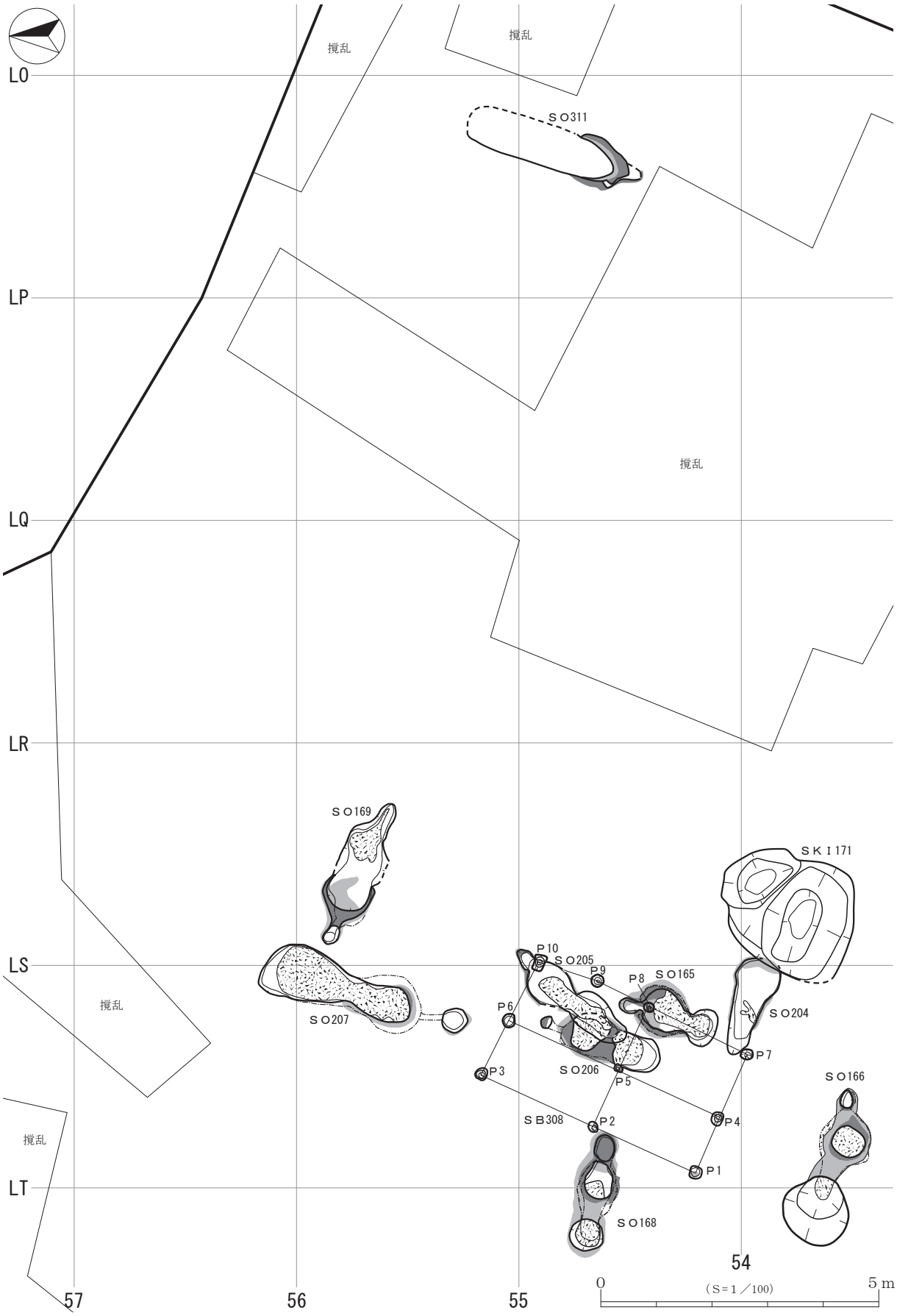
第 16 図　遺構配置図（９）

第 17 図　遺構配置図（10）

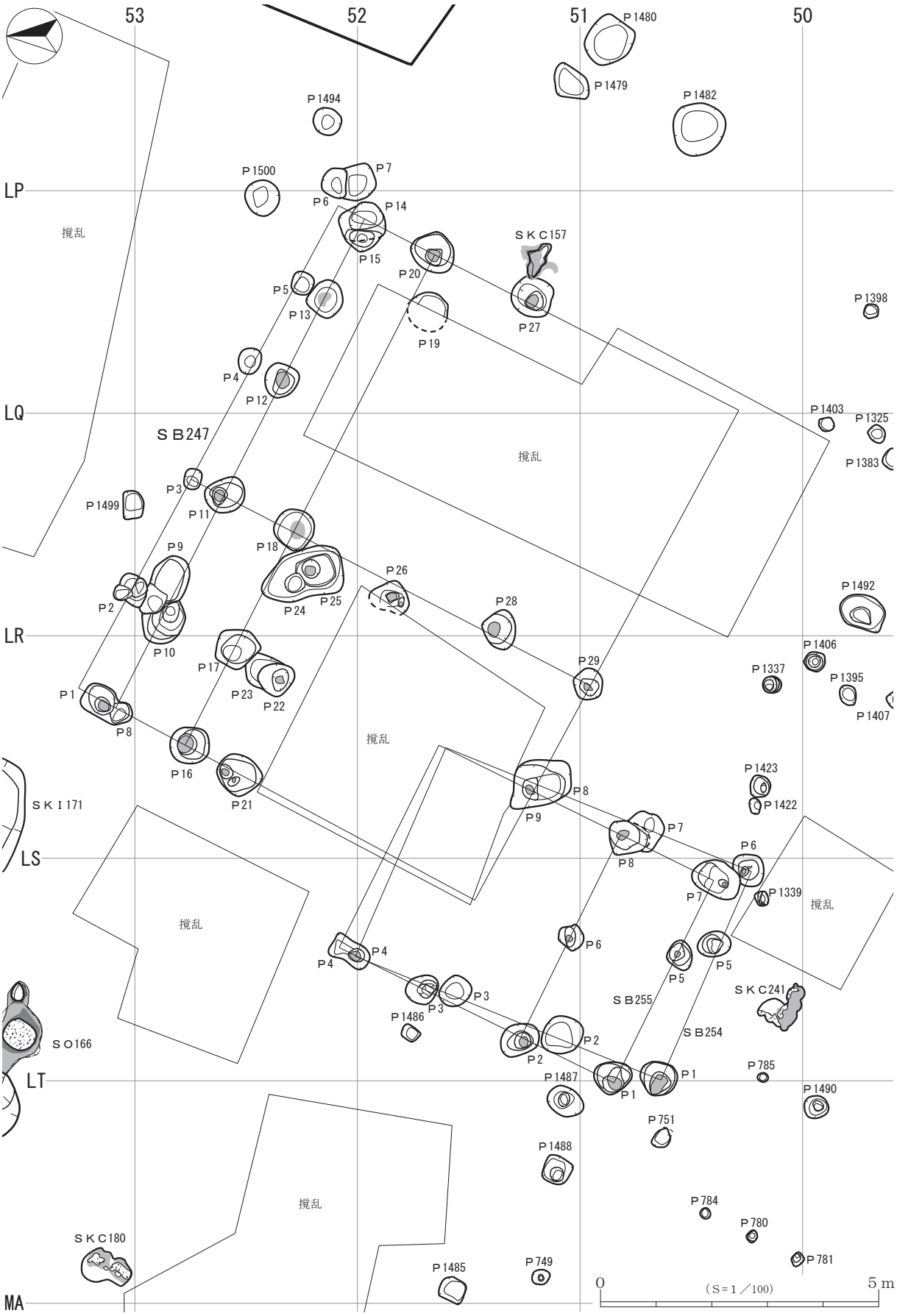


第 18 図　遺構配置図（11）

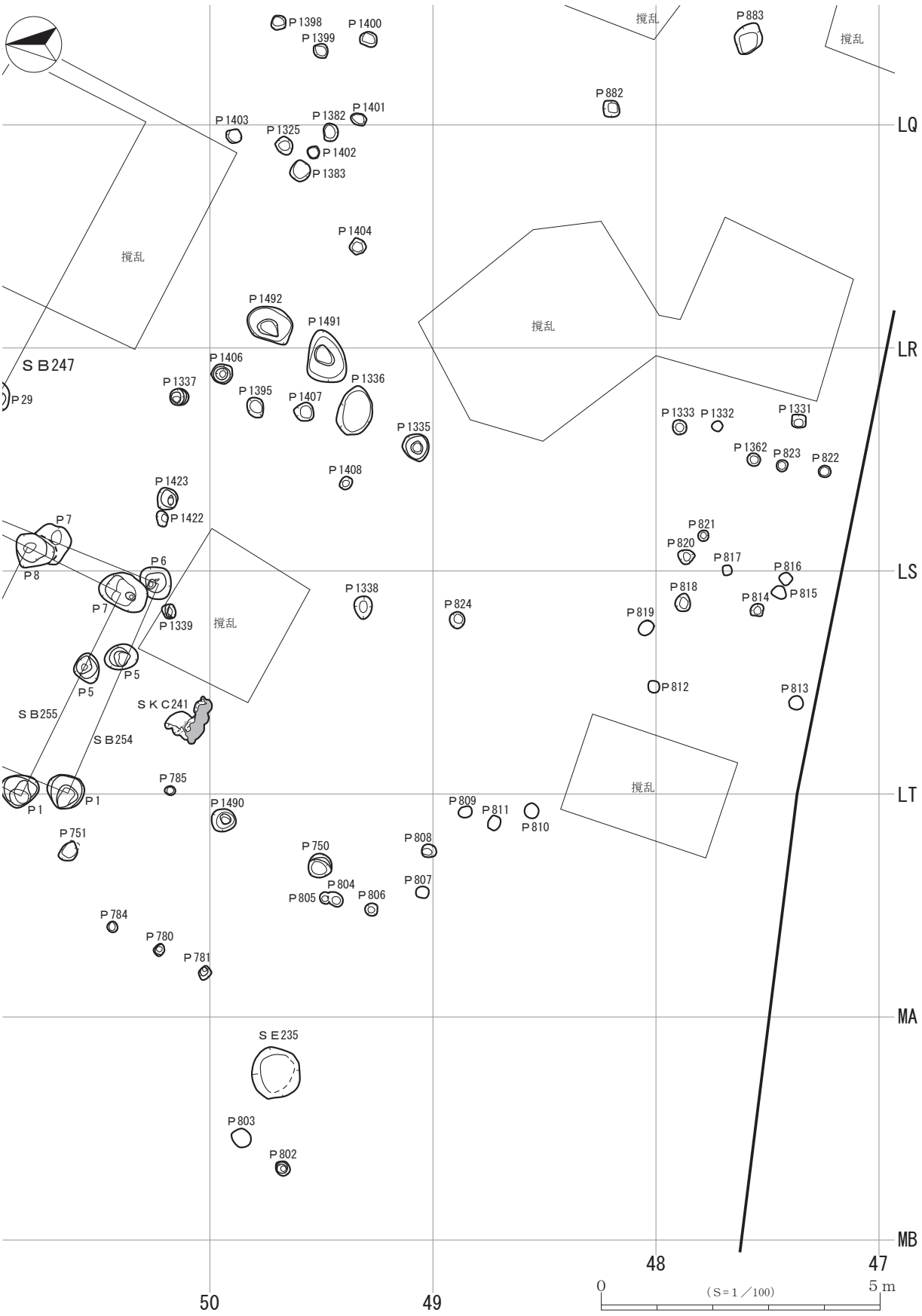
第 19 図　遺構配置図（12）



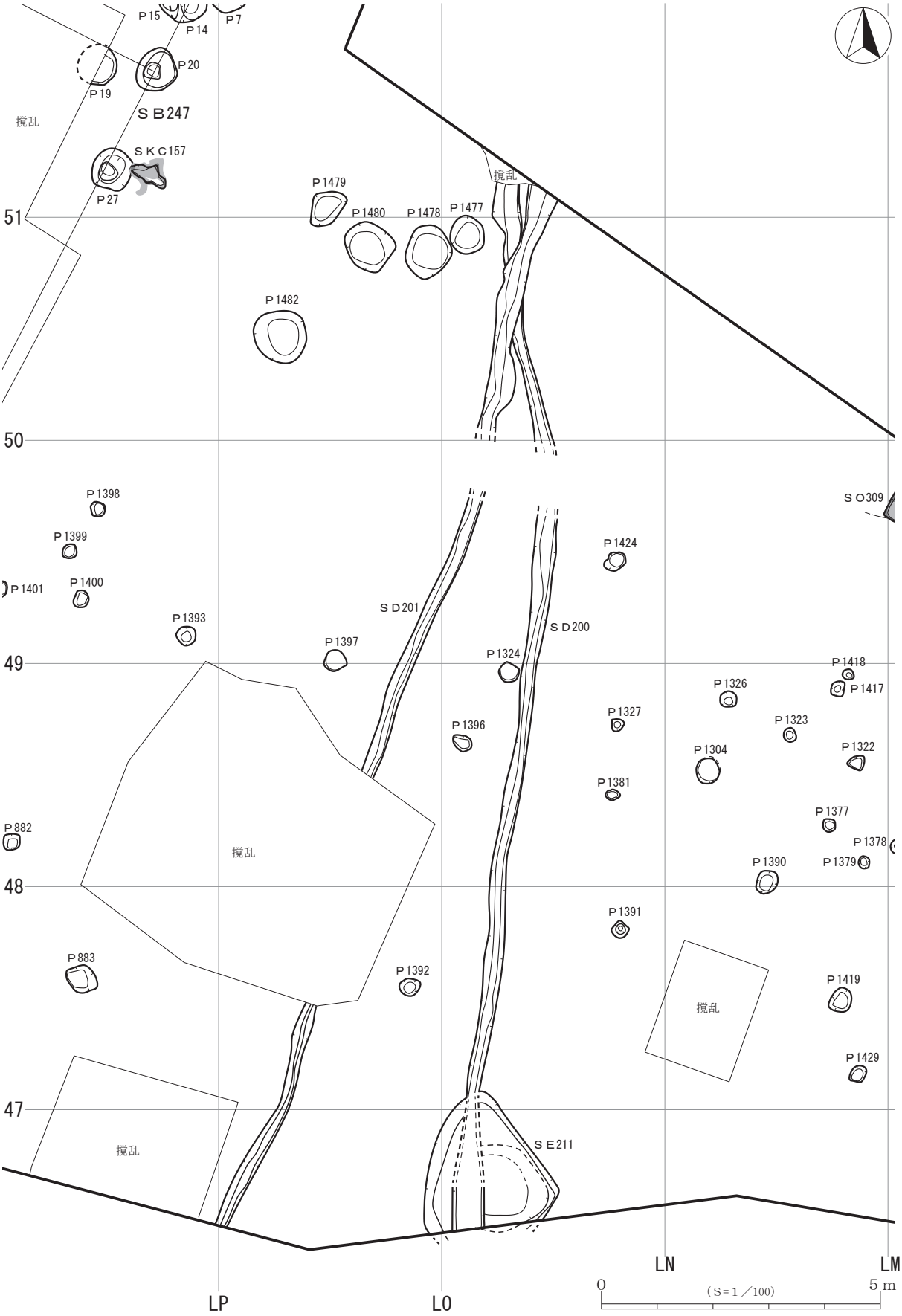
第 20 図　遺構配置図（13）



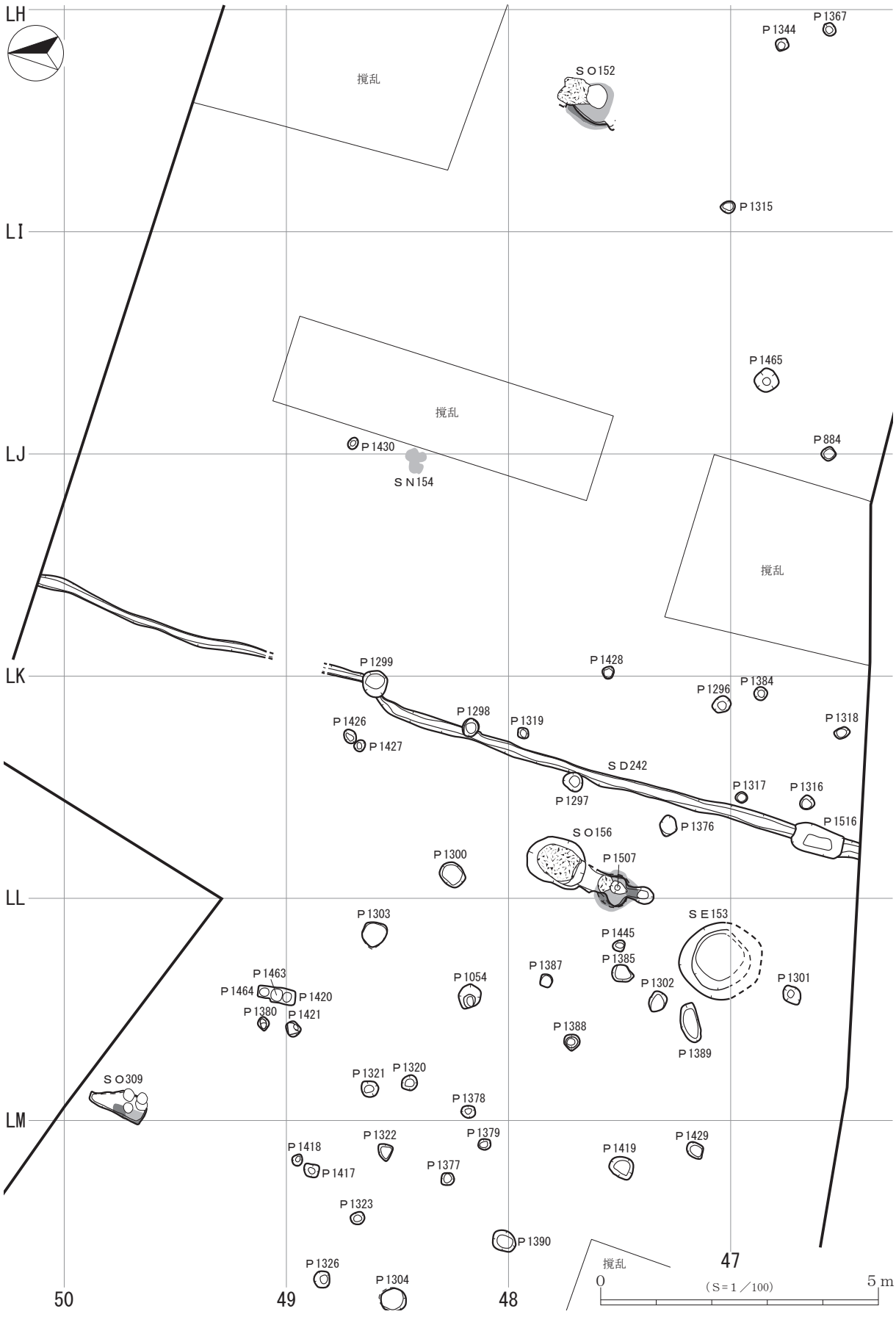
第 21 図　遺構配置図（14）



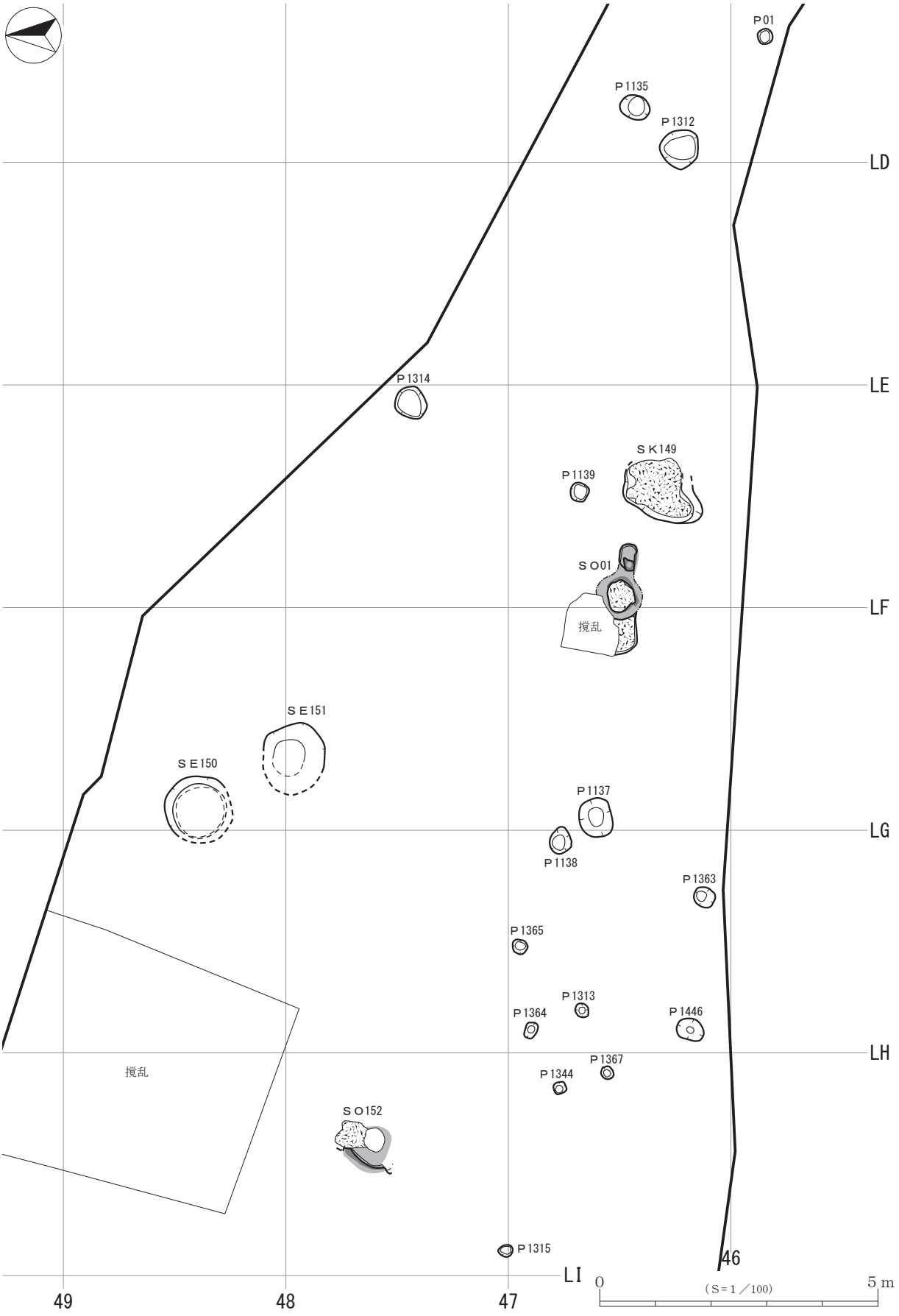
第 22 図　遺構配置図（15）



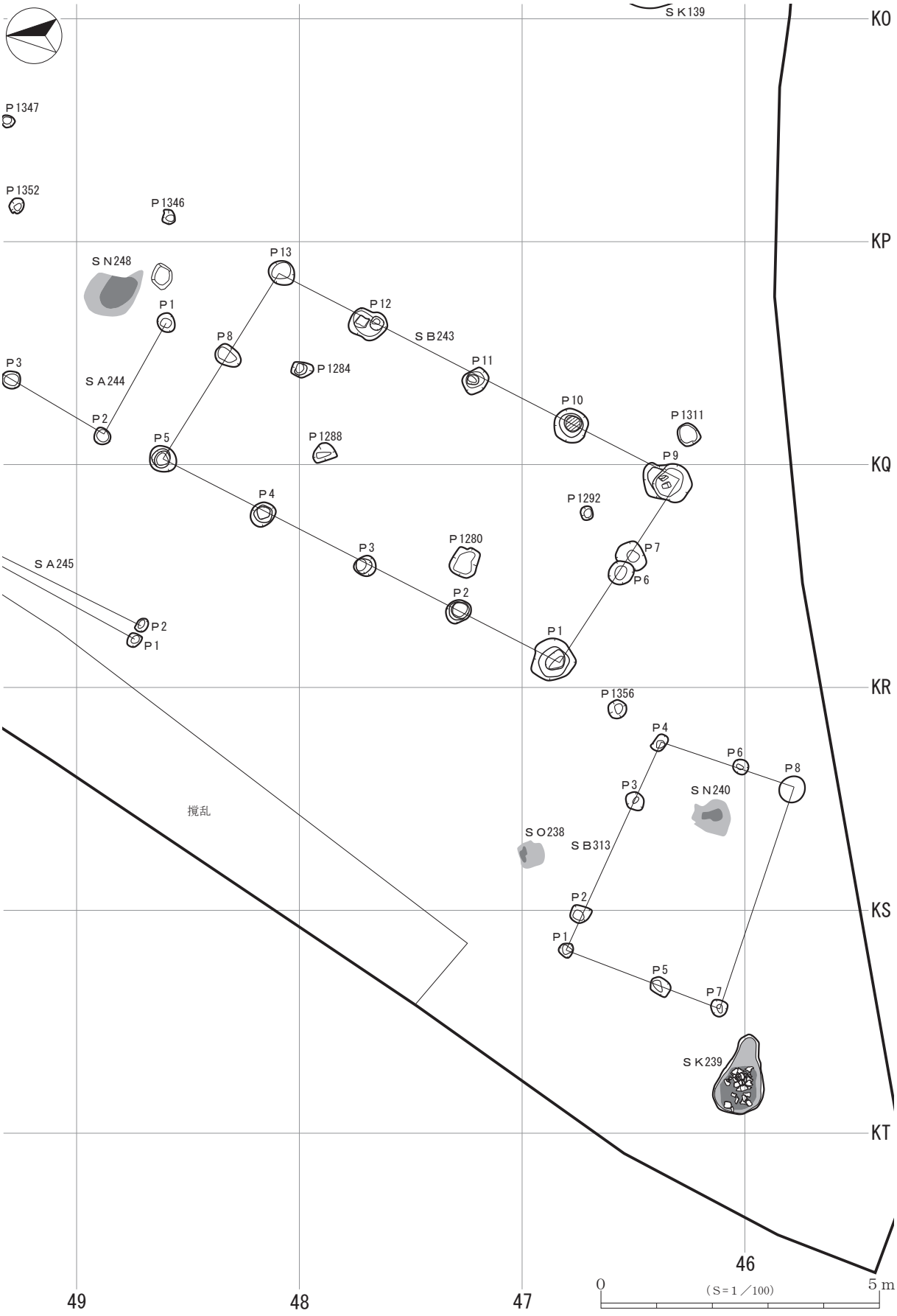
第 23 図　遺構配置図（16）



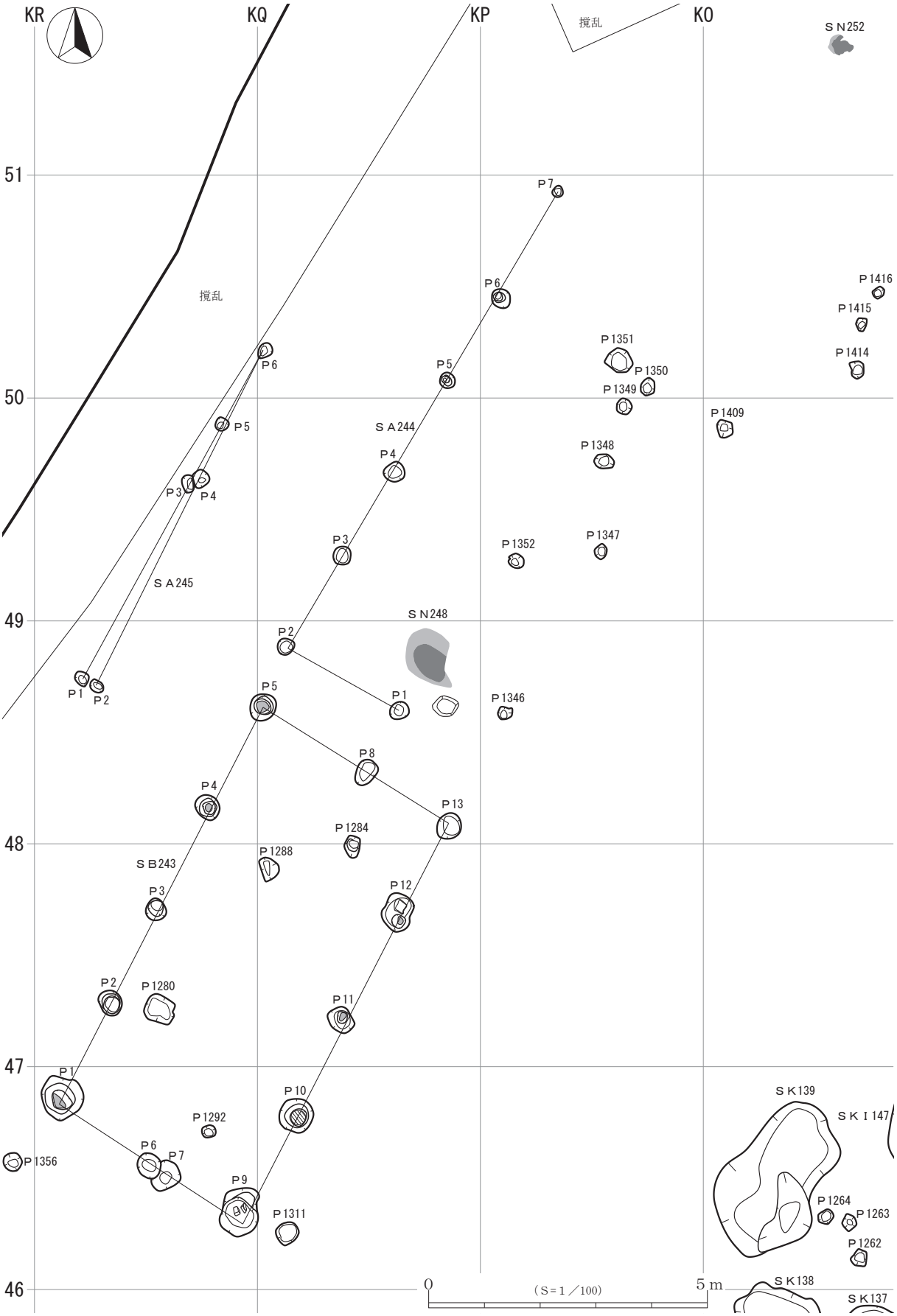
第 24 図　遺構配置図（17）



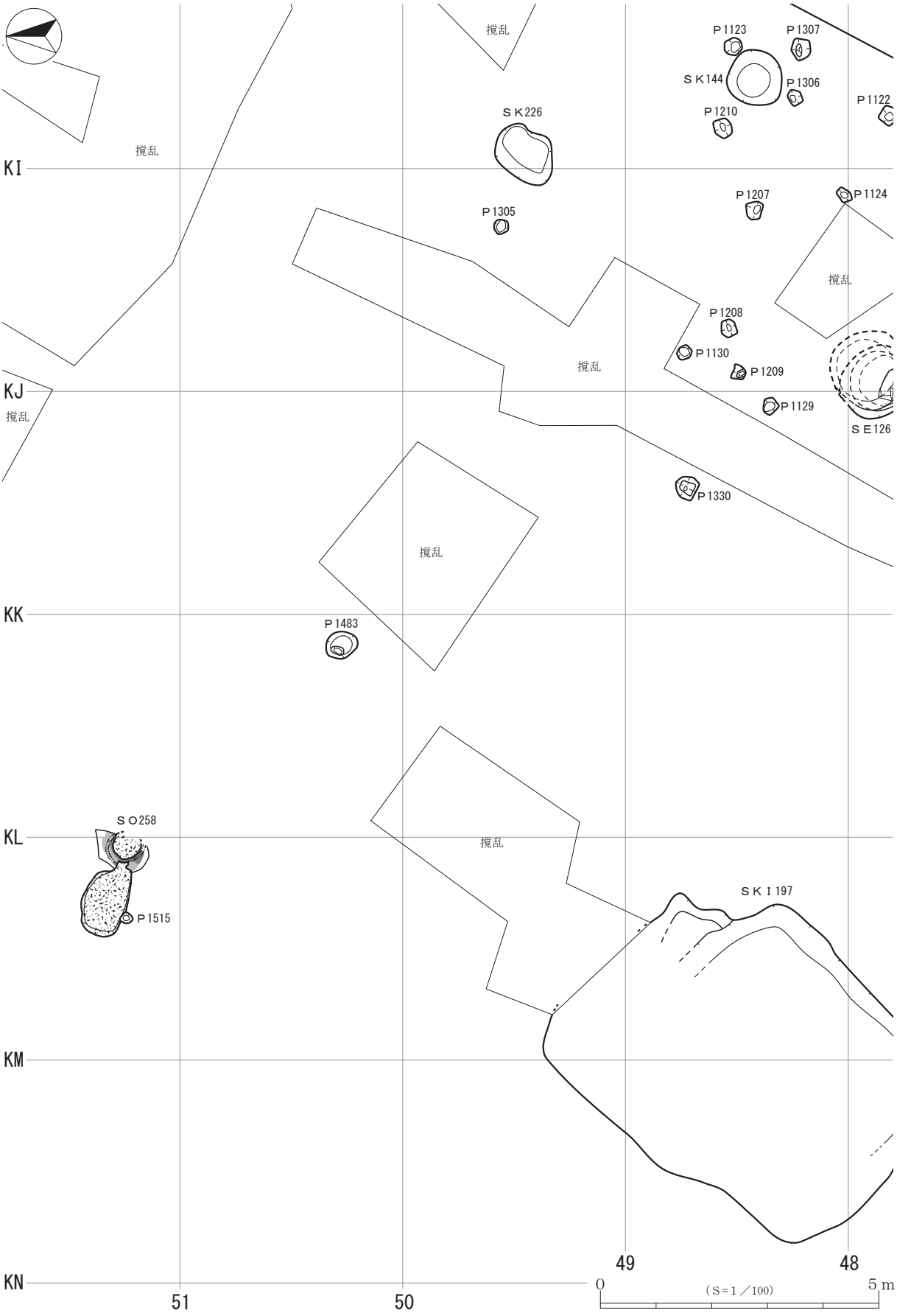
第 25 図　遺構配置図（18）



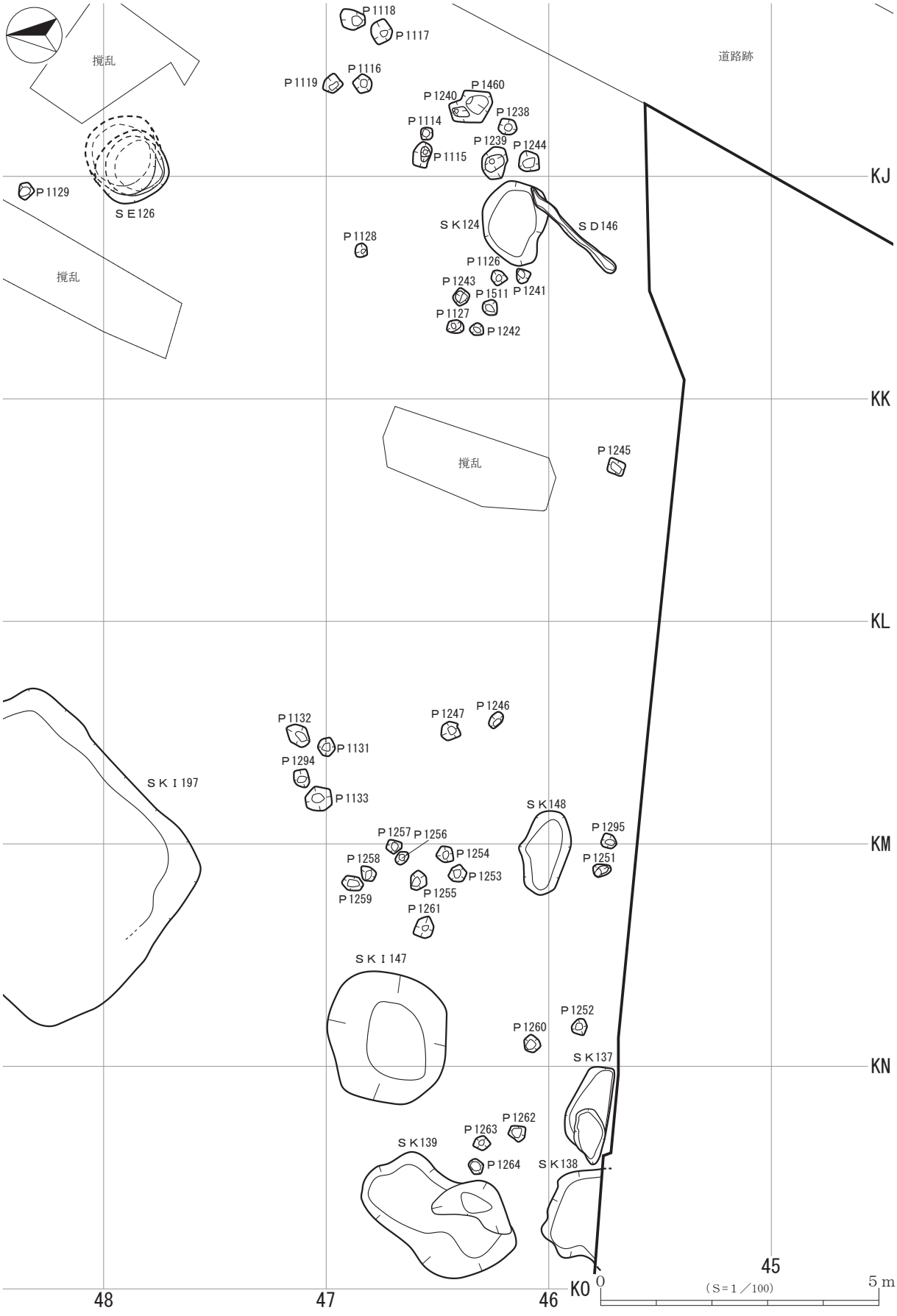
第 26 図　遺構配置図（19）



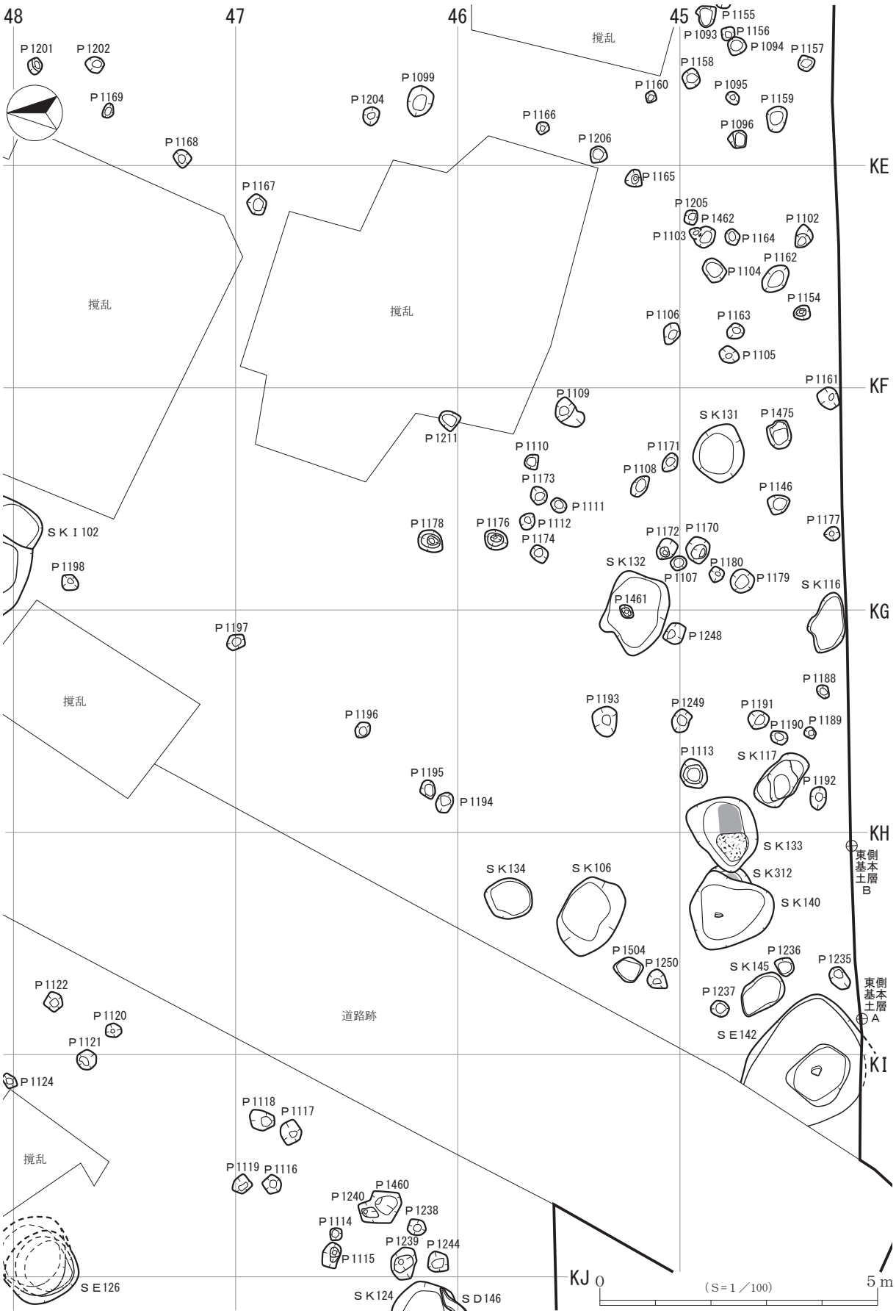
第 27 図　遺構配置図（20）



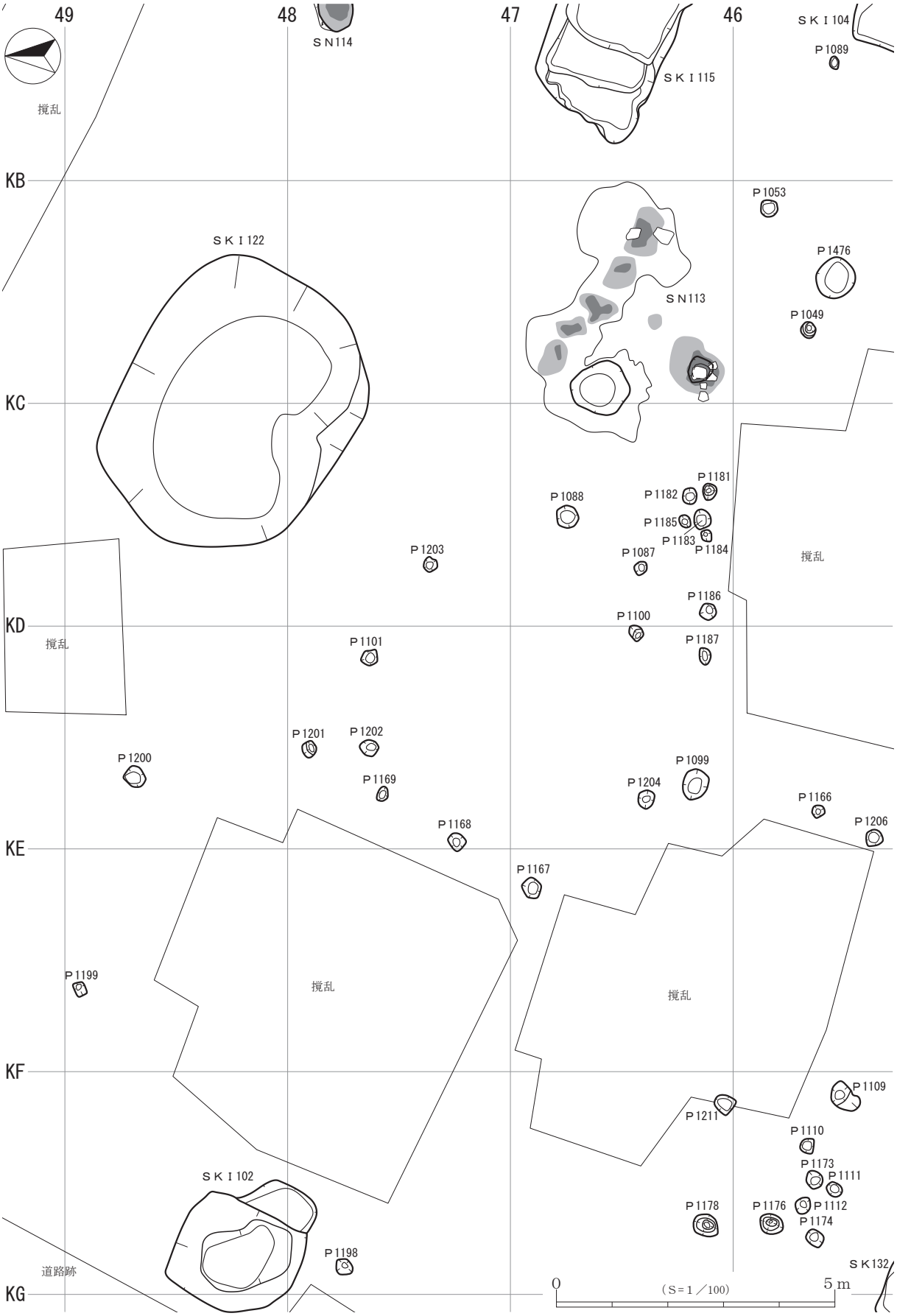
第 28 図　遺構配置図（21）



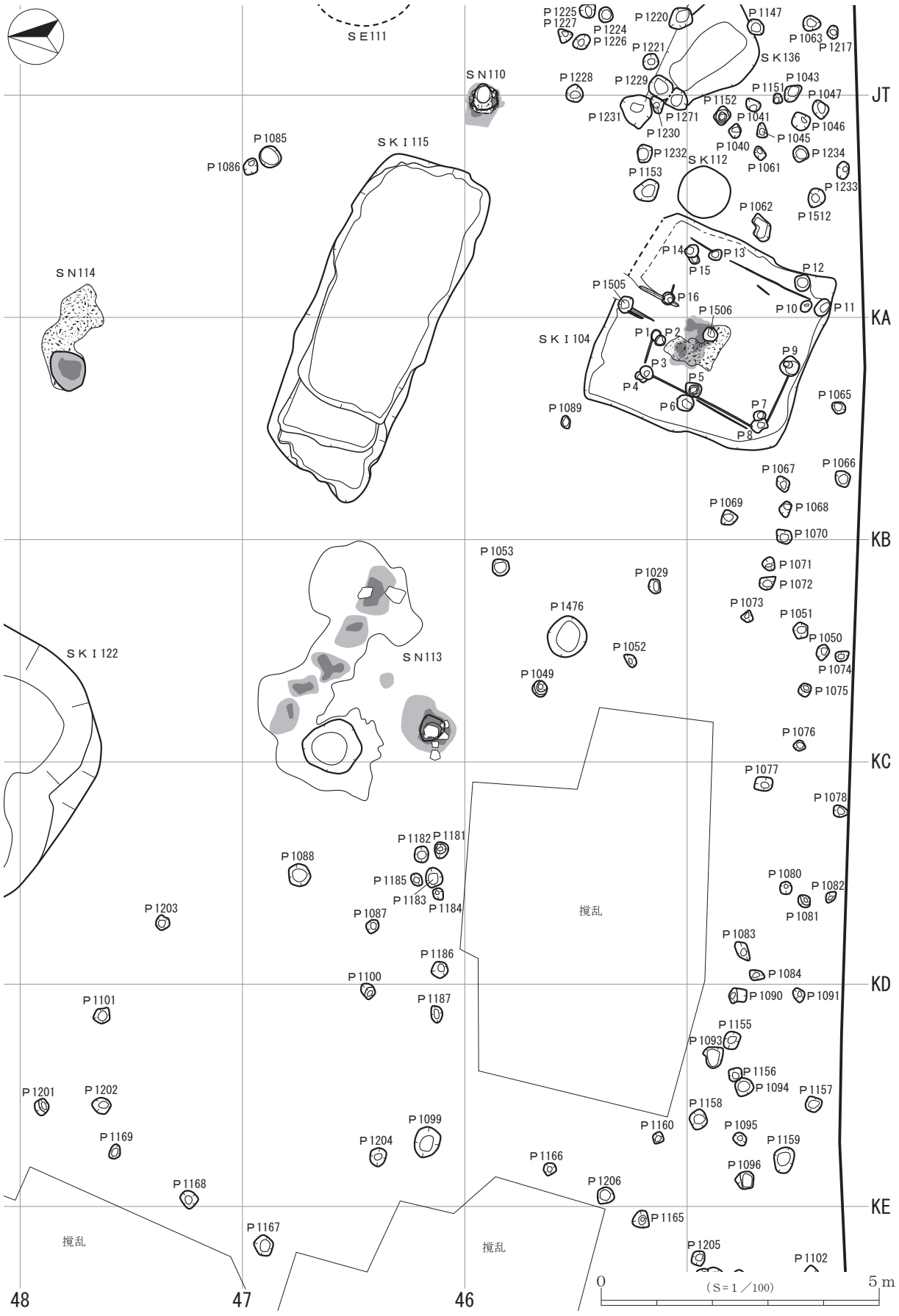
第 29 図　遺構配置図（22）



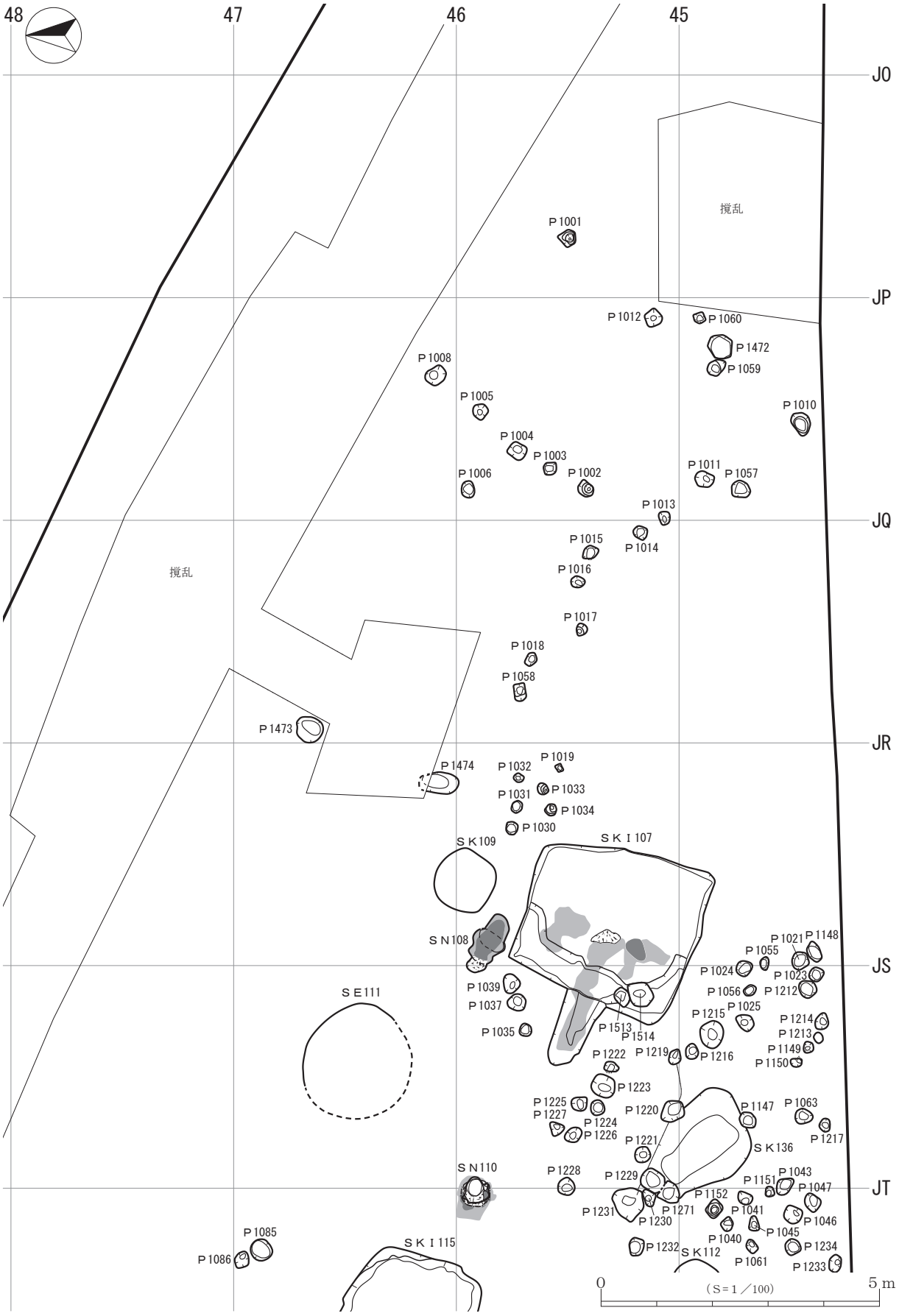
第 30 図　遺構配置図（23）



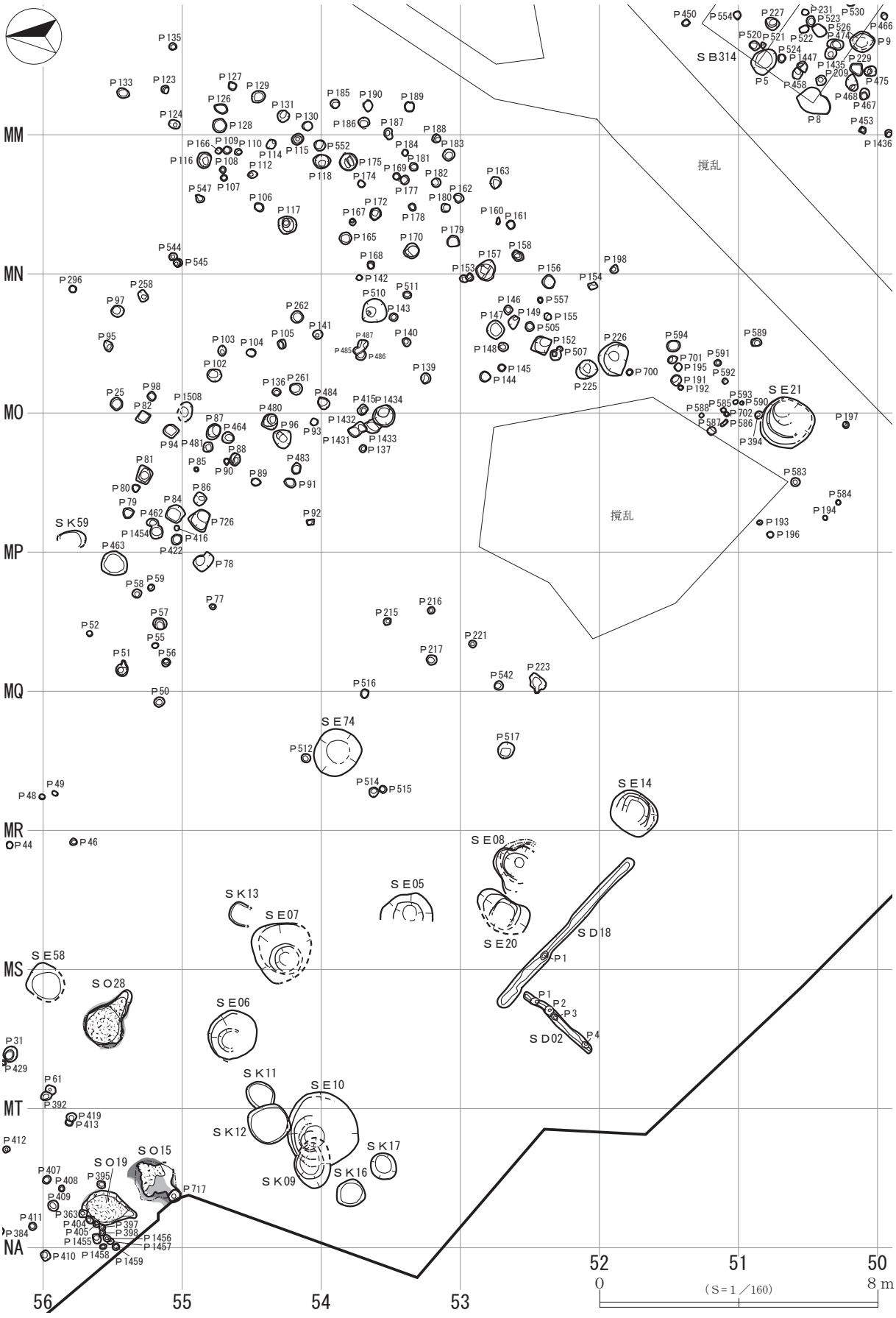
第 31 図　遺構配置図（24）



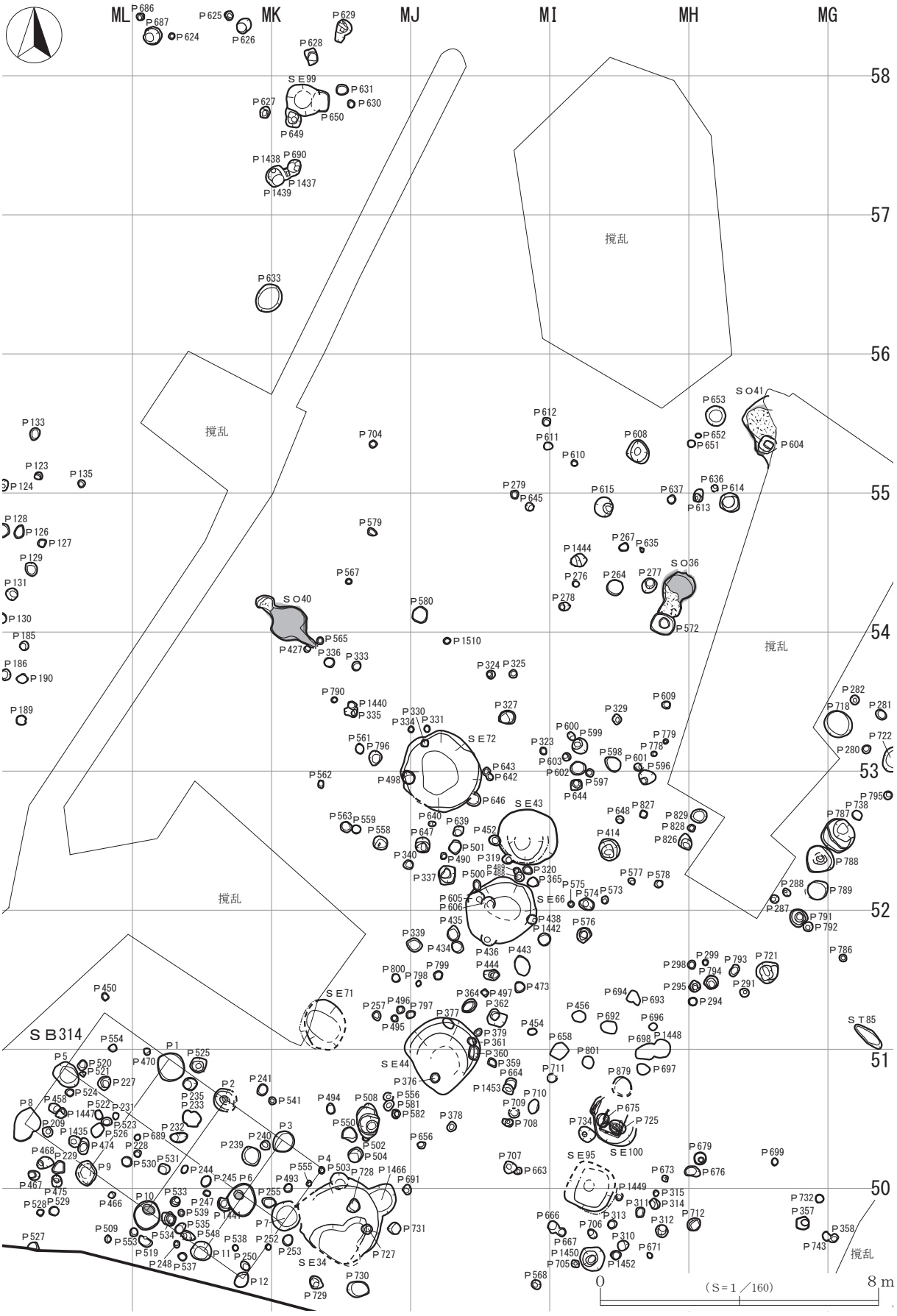
第 32 図　遺構配置図（25）



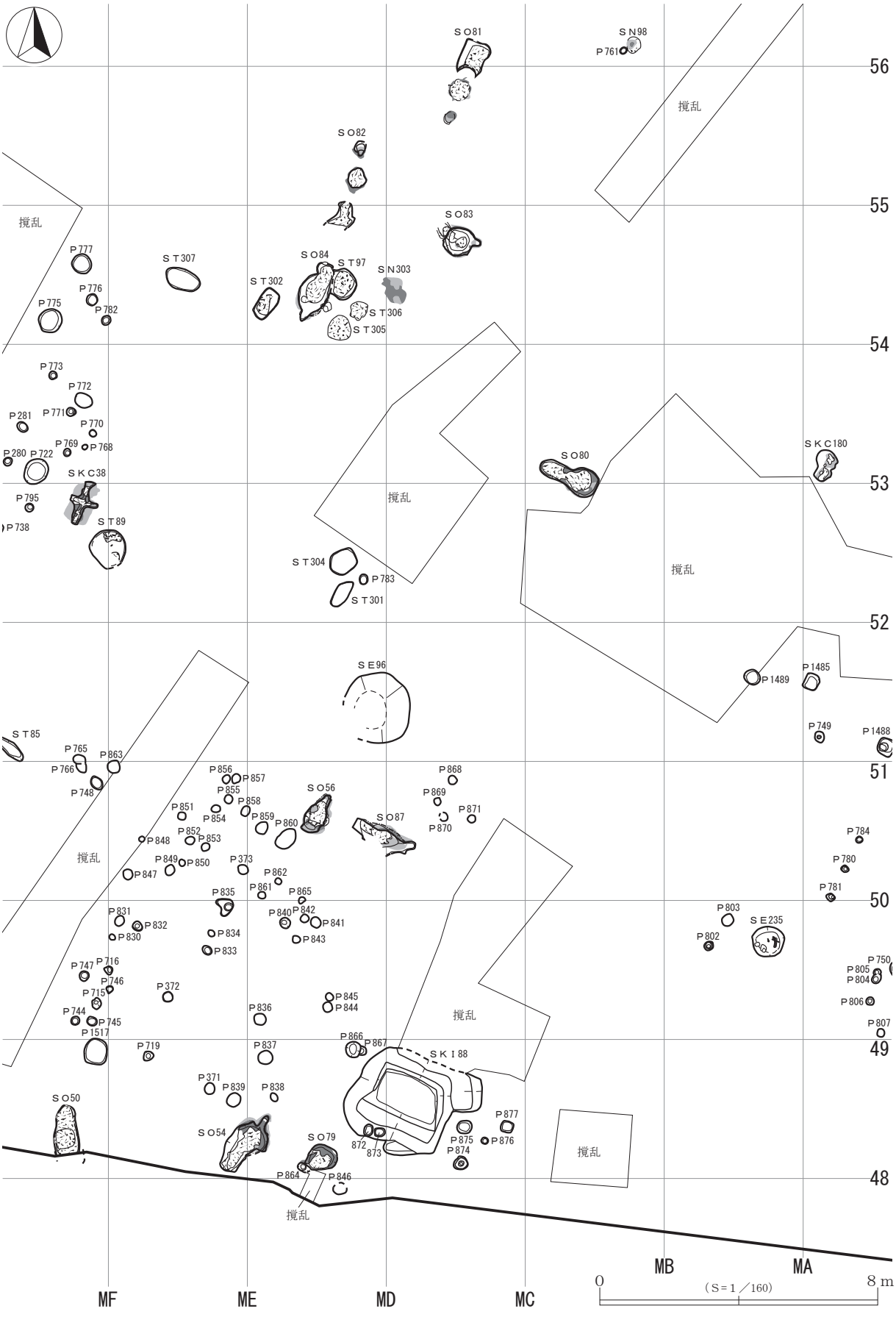
第 33 図　遺構配置図（26）


MM
MN
MO
MP
MQ
MR
MS
MT
NA
56
55
54
53
52
51
50
0
8 m
（S＝1／160）
撹乱
撹乱
SB314
SE21
SE74
SE14
SE08
SE20
SE05
SE07
SK13
SE58
SO28
SE06
SK11
SE10
SK12
SK09
SK16
SK17
SO15
SO19
SK59
SD18
SD02

第 34 図　遺構配置図（ａ）

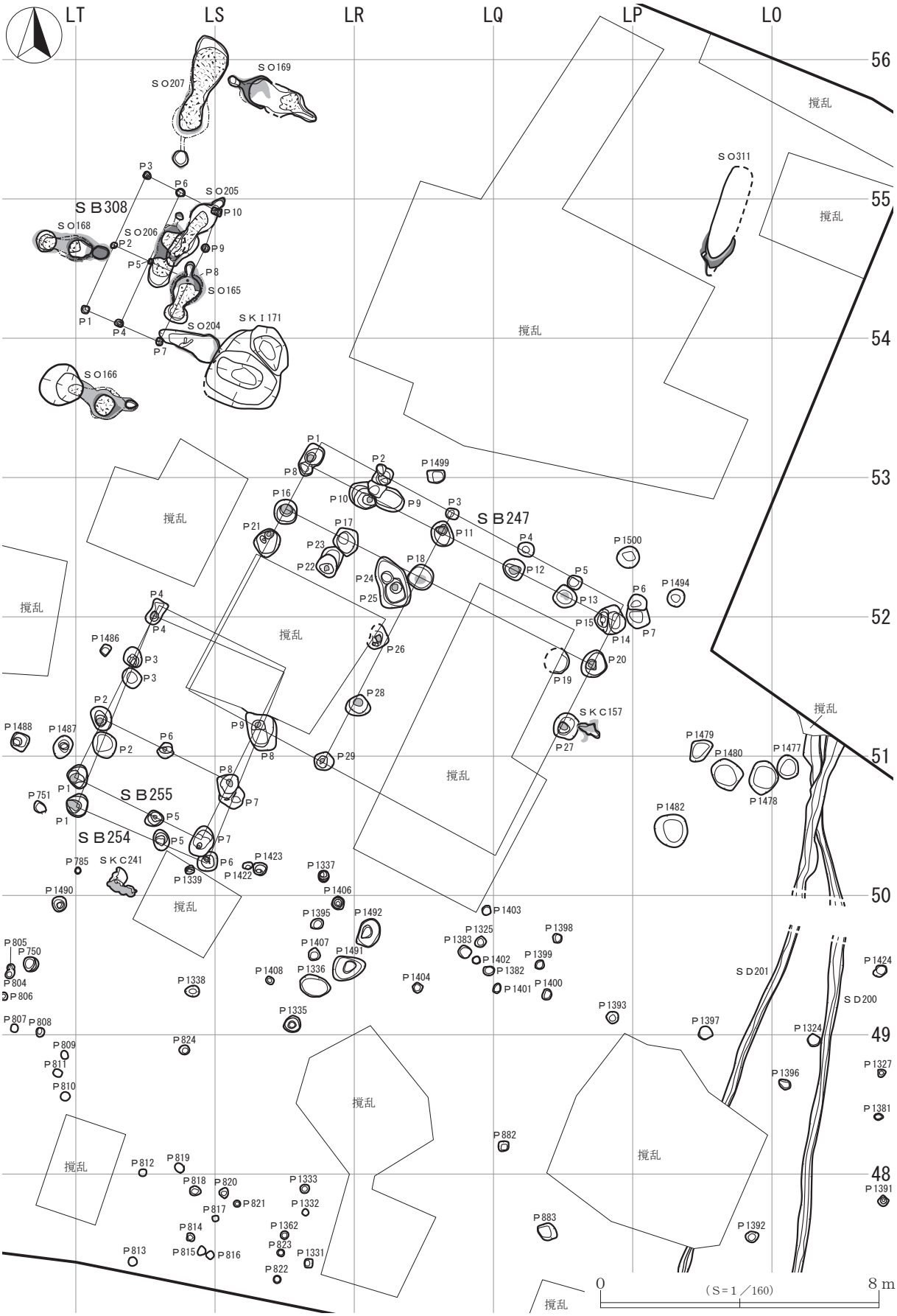

ML
MK
MJ
MI
MH
MG
58
57
56
55
54
53
52
51
50
撹乱
撹乱
撹乱
撹乱
撹乱
SB314
SE34
SE43
SE44
SE66
SE71
SE72
SE95
SE99
SE100
SO36
SO40
SO41
ST85
0
(S=1／160)
8m

第 35 図　遺構配置図（ｂ）



56
55
54
53
52
51
50
49
48
MF
ME
MD
MC
MB
MA
0
8 m
（S＝1／160）
撹乱
SO81
SN98
P761
SO82
SO83
P777
ST307
SO84
ST97
SN303
ST302
P776
P775
P782
ST306
ST305
P773
P772
P281
P771
P770
P769
P768
P280
P722
SKC38
P795
P738
ST89
SO80
SKC180
ST304
P783
ST301
SE96
P1489
P1485
P749
P1488
ST85
P765
P863
P766
P748
P856
P857
P855
P858
SO56
P868
P869
P871
P870
P851
P854
P859
P860
SO87
P852
P853
P848
P849
P850
P847
P373
P862
P861
P865
P835
P831
P832
P830
P840
P842
P841
P834
P843
P833
P784
P780
P781
P803
SE235
P802
P747
P716
P746
P715
P372
P845
P844
P836
P744
P745
P1517
P719
P837
P866
P867
SKI88
P750
P805
P804
P806
P807
P371
P839
P838
SO50
SO54
SO79
P877
P875
P876
P874
872
873
P864
P846

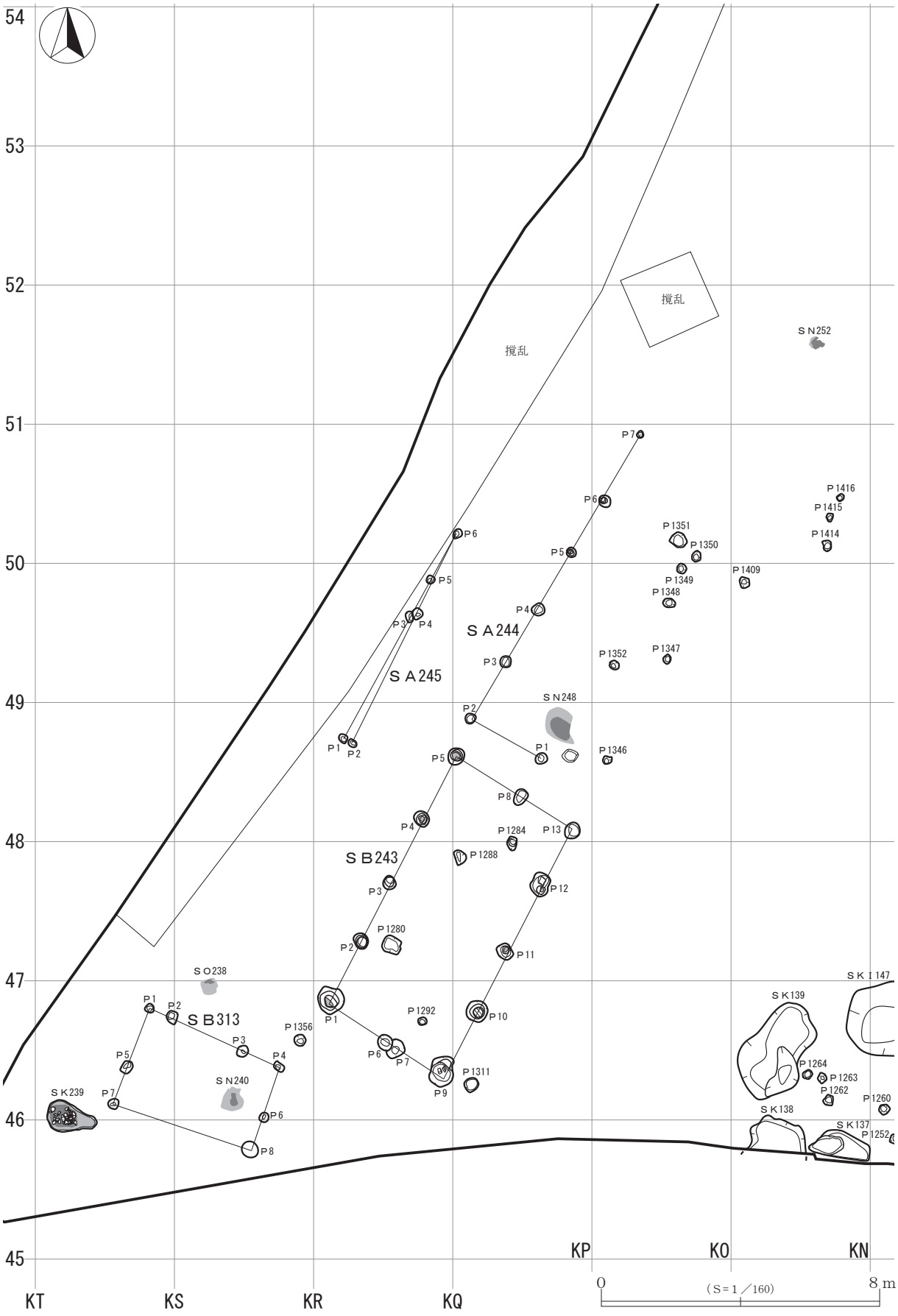
第 36 図　遺構配置図（ｃ）


LT
LS
LR
LQ
LP
LO
56
55
54
53
52
51
50
49
48
撹乱
ＳＢ308
ＳＢ247
ＳＢ255
ＳＢ254
ＳＫＩ171
ＳＫＣ157
ＳＫＣ241
ＳＯ169
ＳＯ207
ＳＯ205
ＳＯ168
ＳＯ206
ＳＯ165
ＳＯ204
ＳＯ166
ＳＯ311
ＳＤ201
ＳＤ200
0
（Ｓ＝１／160）
8ｍ

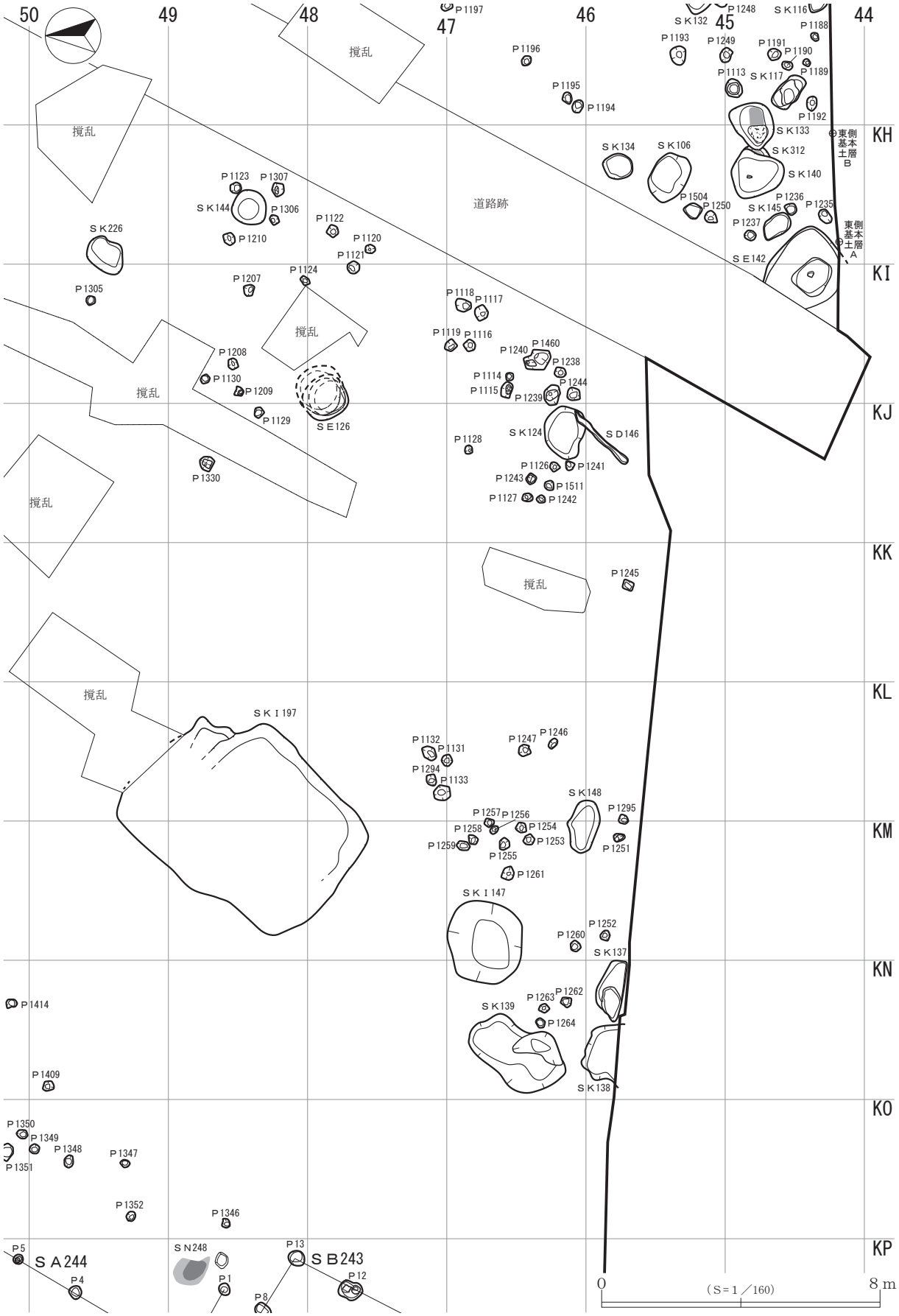
第 37 図　遺構配置図（ｄ）

LG
LH
LI
LJ
LK
LL
LM
LN
LO
51
50
49
48
47
46
45
0
8m
（S＝1／160）
SE150
SE151
P1137
P1138
P1363
P1365
P1313
P1364
P1446
P1344
P1367
SO152
P1315
P1465
P884
P1430
SN154
P1299
P1428
P1296
P1384
P1318
P1298
P1319
P1426
P1427
SD242
P1297
P1317
P1316
P1376
SO156
P1507
P1516
P1300
P1303
SE153
P1445
P1463
P1464
P1420
P1387
P1385
P1301
P1054
P1380
P1421
P1388
P1302
P1389
SO309
P1321
P1320
P1378
P1379
P1418
P1322
P1429
P1419
P1417
P1377
P1323
P1390
P1326
P1304
P1424
P1327
P1381
P1391
SD200
SE211
P1324
P1396
P1477
P1478
P1480
P1479
P1482
SD201
P1392
P1397
搅乱

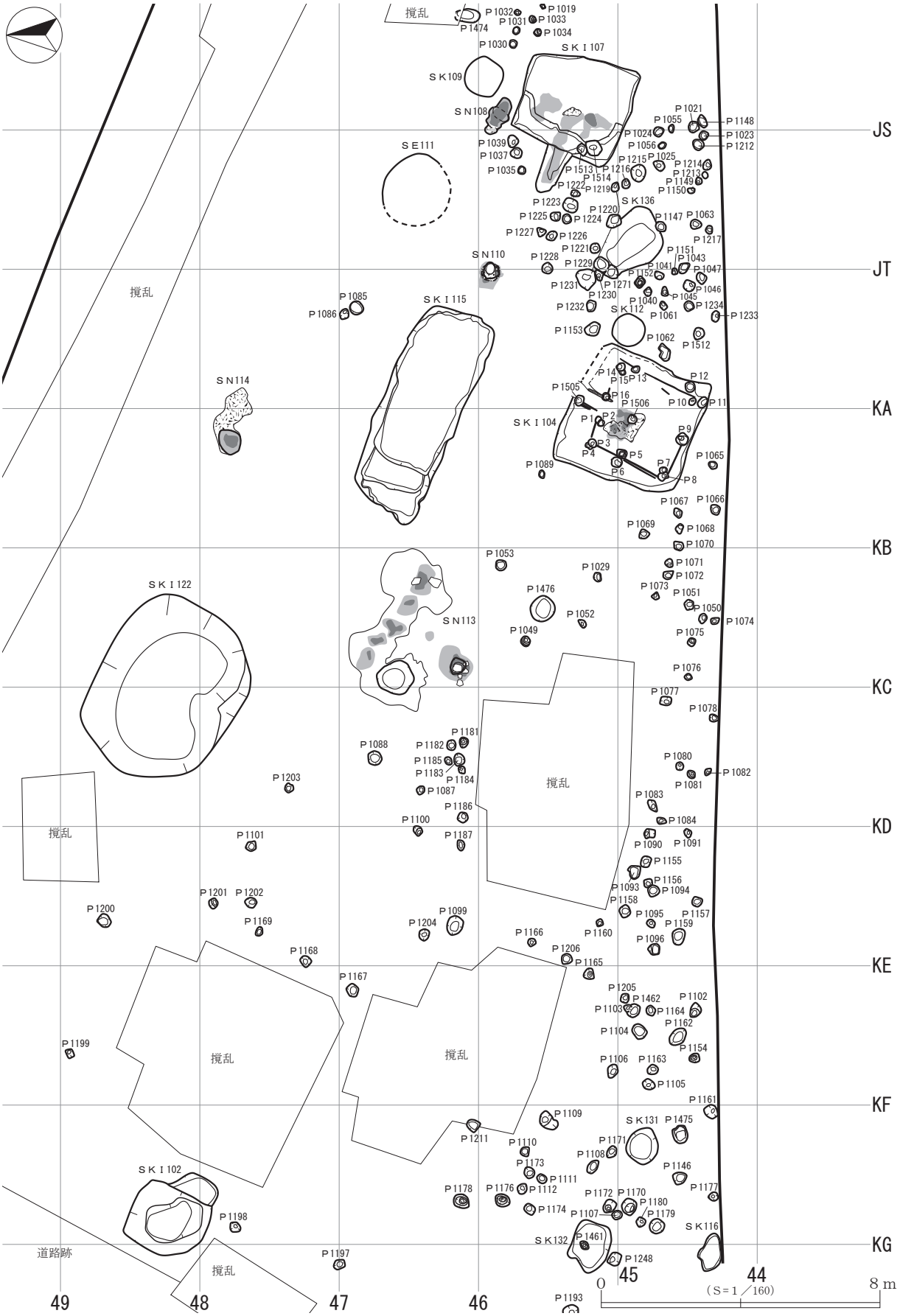
第 38 図　遺構配置図（ｅ）


54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
KT
KS
KR
KQ
KP
KO
KN
撹乱
撹乱
ＳＮ252
ＳＡ244
ＳＡ245
ＳＮ248
ＳＢ243
ＳＯ238
ＳＢ313
ＳＮ240
ＳＫ239
ＳＫ139
ＳＫ138
ＳＫ137
ＳＫＩ147
P1416
P1415
P1414
P1351
P1350
P1349
P1348
P1409
P1352
P1347
P1346
P1284
P1288
P1280
P1292
P1311
P1356
P1264
P1263
P1262
P1260
P1252
0
8 m
（S＝1／160）

第 39 図　遺構配置図（ｆ）


50
49
48
47
46
45
44
KH
KI
KJ
KK
KL
KM
KN
KO
KP
撹乱
道路跡
SK226
SK144
SK132
SK116
SK117
SK133
SK312
SK140
SK134
SK106
SK145
SK124
SK148
SK137
SK139
SK138
SKI197
SKI147
SE126
SE142
SD146
SA244
SB243
SN248
東側基本土層B
東側基本土層A
0
(S=1／160)
8m

第 40 図　遺構配置図（ｇ）


JS
JT
KA
KB
KC
KD
KE
KF
KG
49
48
47
46
45
44
0
8 m
（S＝1／160）
撹乱
道路跡
SK I 102
SK I 104
SK I 107
SK I 115
SK I 122
SK109
SK112
SK116
SK131
SK132
SK136
SN108
SN110
SN113
SN114
SE111

第 41 図　遺構配置図（ｈ）

第３節　検出遺構と遺物

１　概要

調査区内で検出した遺構は、掘立柱建物跡７棟、柱穴列２条、竪穴建物跡９棟、井戸跡39基、カマド状遺構31基、火葬施設４基、火葬墓10基、溝跡６条、土坑34基、焼土遺構10基、柱穴様ピット1065基である。火葬墓については、荼毘に付された後に収骨し埋葬されたものが火葬墓であるというのが一般的であるが、火葬跡を火葬墓として表記する例もある。そのため火葬墓という遺構名では誤解を生じる可能性があるため、今回は火葬跡を火葬施設(ＳＫＣ)とし、焼骨を埋葬した土坑のみを火葬墓(ＳＴ)として区別した。

遺跡の帰属時期は、大きく古代、中世、近世以降に分けられる。各時期における特徴については、各遺構の個別説明及び各時期の遺構外出土遺物や遺物一覧表に記すため以下に譲り、ここでは割愛する。

出土した遺物の総量は中コンテナで133箱であるが、報告書に掲載した出土遺物は、縄文土器１点、土師器77点、須恵器160点、中国産磁器８点、須恵器系陶器36点、瀬戸美濃陶器10点、肥前陶器(肥前系陶器含む)18点、肥前磁器25点、在地系陶器９点、貝風呂２点、土錘２点、焙烙１点、羽口４点、縦型石匙１点、砥石３点、木製品55点(井戸枠材を含む)、銭貨12点、鉄滓１点である。掲載した出土遺物の詳細については、遺物一覧表(第15～27表)に掲載した。各遺構及び遺構外出土土器・陶磁器のうち、細分が難しい未掲載の破片について、坏蓋・坏・皿等の土器を坏類、壺・甕・鍋の土師器及び壺・甕・瓶の須恵器を壺甕類とし、碗・皿・鉢等の陶磁器は碗皿類、壺・甕・瓶等の陶磁器は袋物類と便宜的に分け、点数及び重量を記載した。また木製品は、水を多く含むため保存処理を行ったもののみ重量を計測した。

出土遺物の年代については、土師器・須恵器は秋田城跡調査事務所による編年(註１)や島田祐悦氏による横手盆地の土器編年(註２)を、須恵器系陶器は吉岡康暢氏の編年(註３)、中国産磁器は太宰府編年(註４)及び上田秀夫氏の編年(註５)、瀬戸美濃陶器は藤澤良祐氏の編年(註６)、肥前陶磁は大橋康二氏の編年(註７)を参照した。

また各遺構の帰属時期が、出土遺物で判断できない場合、C^{14}年代を参考として時期区分の参考とした。

２　古代

(１)遺構と遺構内出土遺物

古代に属する遺構は、竪穴建物跡２棟、井戸跡８基、火葬墓１基、土坑13基、焼土遺構２基で、大きく２期に分けることができる(第130図)。第１期は９世紀前半を主とし、東側調査区ＪＲ～ＬＦラインに散在する竪穴建物跡、土坑や焼土遺構がこの時期に属する。また西側調査区においても、放射性炭素年代測定により、８世紀後葉～９世紀後葉の年代が推定されるＳＥ10井戸跡や、遺跡内で唯一明確な井戸枠が残存していたＳＥ100井戸跡は該期に含めることができるであろう。第２期は11世紀半ば～12世紀半ばを主とし、放射性炭素年代測定により、該期に推定される６基の井戸跡(ＳＥ06・72・92～95)が確認され、その内の５基が調査区西側のＭＤ～ＭＫラインに集中している。またＳＴ89火葬墓は、これらの井戸跡よりやや時期が古く10世紀末まで遡る可能性がある。第49～53図に図示

した古代の遺構内出土遺物は、土師器壺甕類９点、須恵器坏類９点(墨書土器１点含む)・壺甕類１点の他、木製品17点(井戸枠材・曲物・木簡等)、羽口３点である。また後世の混入と考えられる須恵器系陶器袋物類１点もある。

①竪穴建物跡

ＳＫＩ104竪穴建物跡(第31・32・41・42図、図版５)

《位置・確認状況》ＪＴ44・45、ＫＡ44・45に位置する。第Ⅳ層地山上面で、褐色・暗褐色土の分布が確認された。確認調査時のトレンチにより東側を、本遺構調査のため北東部に断面断ち割りが入れられたためそれぞれ削平されていた。またＰ1505・1506と重複して古い。

《規模・形態》平面形は、長軸3.64m(Ｎ−61°−Ｗ)、短軸[3.60]mの隅丸方形を呈す。確認面からの深さは0.26mである。底面は平坦で、壁は北側ではやや緩やかに、東・西・南側では垂直に立ち上がる。また底面壁際から約20〜90cmの内側を囲うように幅２〜４cm、底面から深さ５〜８cmの壁溝跡が巡る。この他、出入り口のための張り出しが、断面観察のために設置されたサブトレンチの辺りにあったものと考えられる。壁溝は作り替えがあったと考えられ、旧時期の壁溝は削平され大部分が失われているが、部分的に新旧の壁溝が平行に２本走っている箇所が確認された。西から東へ約10cmほど移して建て替えられたと考えられる。また壁溝のライン上及びその近辺で、竪穴建物に伴う柱穴16基が並んでいた。Ｐ２・３・７・14は、それぞれＰ１・４・８・15の建て替えで、Ｐ５・６、P10・11・12は、それぞれ作り替えと考えられる。柱穴の規模は、長軸0.22〜0.37mで、短軸0.20〜0.35m、検出面からの深さは0.05〜0.23mである。柱間は、Ｐ１−Ｐ４は0.80m、Ｐ４−Ｐ６は0.94m、Ｐ６−Ｐ８は1.40m、Ｐ８−Ｐ９は1.20m、Ｐ９−Ｐ11は1.22m、Ｐ11−Ｐ13は2.18m、Ｐ13−Ｐ15は0.38m、Ｐ15−Ｐ16は0.85m、Ｐ16−Ｐ１は0.69mである。

《炉》竪穴建物本体のほぼ中央部に位置する。底面に炭化物及び赤褐色〜褐色焼土の分布が確認された。平面形は、長軸0.54m、短軸[0.48]mの不整形である。被熱厚は２〜４cmである。

《層序》13層に分けた。１・４・５・11〜13層は、第Ⅳ層地山土由来の褐色土を、２・３・６・７・10層は第Ⅲ層土由来の暗褐色・黒褐色土を基質とする。１〜６層は、それぞれ地山土塊や第Ⅲ層土由来の暗褐色土を含むことから、廃絶に伴う人為的な埋め戻し土と考えられる。７〜９層は、建物の炉に関連するもので、７層は炭化物層である。８層は強被熱範囲で、９層は弱被熱範囲である。10層は旧時期に使用された壁溝の堆積土である。11〜13層は、竪穴建物の壁板の裏込め土と考えられ、11層は、旧時期から新時期へ建て替えられた際に、裏込め土として入れられ、旧時期の壁溝上を覆うように堆積している様子が、Ａ−Ｂラインの断面観察から見ることができる。12・13層は竪穴建物を構築する際に、旧時期の建物壁外の掘形に埋めた裏込め土である。新旧両時期ともに、建物壁外に裏込め土を入れた痕跡が確認されたことから、竪穴建物は最初に大きく掘り込んだ後、掘形の中に建物本体を建て、建物壁外に裏込め土が埋められたと考えられる。

《出土遺物》埋土から、土師器壺甕類24点194.1ｇ、須恵器坏５点69.9ｇ、羽口１点4.1ｇ、鉄滓１点6.2ｇ、肥前磁器筒型碗16.5ｇが出土した。このうち須恵器坏１点を図示した(第49図１)。

《所見・時期》新旧２時期あると考えられる。羽口や鉄滓が出土したことから、鍛冶関連施設の可能性がある。時期は、埋土から土師器や須恵器が出土したことから、平安時代と推定される。

ＳＫＩ107竪穴建物跡（第33・41・43図、図版５）

《位置・確認状況》ＪＲ44・45、ＪＳ45に位置する。第Ⅳ層上面で、にぶい黄褐色～褐色土の分布が確認された。東側は表土除去時に削平され、西側に比べやや低い位置で検出された。Ｐ1513・1514と重複して古い。

《規模・形態》竪穴建物本体部分の平面形は、長軸3.11ｍ（Ｎ－20°－Ｅ）、短軸2.77ｍの隅丸方形を呈し、西側に張り出しが付く。確認面からの深さは0.29ｍである。張り出し部は、長さ1.34ｍ、径0.44～0.77ｍで、確認面からの深さは0.08～0.26ｍで、西側が高くなるスロープ状である。底面は平坦で、壁は西側の張り出し部以外の三方では急に立ち上がる。本体部西側の底面は、溝状に凹み、一段低くなっている。深さは検出面から２～６cmある。

《炉》竪穴建物本体の中央やや南よりの底面で、被熱により変色した痕跡が確認された。平面形は、長軸0.44m、短軸0.21ｍの楕円形を呈す。被熱厚は２cmである。また本体部炉跡周辺を中心とした西側及び張り出し部底面では、被熱により硬化した部分が確認された。

《層序》17層に分けた。１～６・８～10・14・15層は第Ⅲ層土由来のにぶい黄褐色・暗褐色・黒褐色及びグライ化した灰黄褐色土を、７・11～13・16層は第Ⅳ層地山土由来の褐色土を基質とする。１～８層は、混入物を多く含むことから、竪穴建物廃絶後の人為的な埋め戻し土と考えられる。９層は、炭化物を多く含み、調査時、底面に広がった状況が確認された。10～16層は、混入物が上から下へ流れるように堆積していたことから、自然流入による堆積土と考えられる。また17層は炉跡の焼土である。

《出土遺物》埋土から、土師器壺甕類約50点270.9g、須恵器坏２点9.3g、鉄滓１点2.5ｇが出土した。

《所見・時期》埋土から鍛冶滓・鍛造剥片等の出土が確認されないため断定できないが、形状から住居の可能性は低く、作業小屋と考えられる。時期は、出土遺物から平安時代と推定される。

②井戸跡

ＳＥ06井戸跡（第10・11・34・44図、図版５・７）

《位置・確認状況》ＭＳ54に位置する。第Ⅳ層地山上面で、褐色土の分布が確認された。断面精査により、周辺に分布するにぶい黄褐色土まで掘り込みが広がると判明した。

《規模・形態》確認面の平面形は、長軸1.45ｍ（Ｎ－30°－Ｗ）、短軸1.32ｍの隅丸方形を呈す。確認面からの深さは1.45ｍである。底面形は長軸0.5ｍ、短軸〈0.22〉ｍの円形を呈し、底面は平坦で、壁は急角度で立ち上がり、特に中位から上位は垂直である。

《埋土》10層に分けた。１・４・９・10層は第Ⅳ層地山土由来の褐色・にぶい黄褐色・グライ化したオリーブ灰色土を、２・３・６～８層は第Ⅲ層土由来の暗褐色・グライ化した褐灰色・灰黄褐色土を基質とし、５層は第Ⅲ層と第Ⅳ層地山に由来する混合土と考えられる。１～５層は、井戸廃絶に際しての人為的な一括埋め戻し土と考えられる。６～８層は、地山土塊、暗褐色土筋状、炭化物粒がそれぞれ含まれ、廃絶時に10層と連続した裏込め土が崩落して落ち込んだ自然堆積土、９層は炭化物粒が凹レンズ状に連続して堆積していたことから、井戸使用時の自然流入土、10層は壁沿いに堆積していることから構築時に埋められた井戸枠の裏込め土と考えられる。

《出土遺物》７・８層から廃絶時に抜き取られた井戸枠の一部と考えられる板材片が出土し、放射性炭素年代測定を実施した。

《所見・時期》堆積状況及び井戸枠材と思われる板材が出土したことから、井戸枠が設置されていた井戸跡と考えられる。出土した板材の放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1022～1147calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。

ＳＥ10井戸跡(第11・34・44図、図版５・７)

《位置・確認状況》ＭＳ53・54、ＭＴ53・54に位置する。第Ⅳ層地山上面で、褐色土の分布が確認された。ＳＫ09・12土坑と重複して古い。

《規模・形態》平面形は、長軸[2.24]ｍ(Ｎ－73°－Ｗ)、短軸2.09ｍの円形を呈す。確認面からの深さは1.67ｍである。底面形は長軸0.60ｍ、短軸0.56ｍの円形で、底面は平坦、壁は部分的にオーバーハングしながら、西側は急角度で、東側は緩やかな角度で立ち上がる。形状は、地震の影響を受けたと思われ変形が著しい。

《埋土》11層に分けた。１・３・５・７・８・10・11層は第Ⅳ層地山土由来の褐色・にぶい黄褐色・黄灰色土を、他は第Ⅲ層土由来のにぶい黄褐色・灰黄褐色を基質とすると考えられるが、グライ化の影響もあり詳細は不明である。１～９層は、それぞれ地山土や炭化物を含むことから、井戸廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土、10層は地山土塊を多く含むことから、壁面が崩落した堆積土、また11層は、黒泥状土が下位に堆積していることから、井戸使用時の自然流入による堆積土と考えられる。

《出土遺物》11層から棒状加工材が出土し、放射性炭素年代測定を実施するとともに、それを図示した(第49図２、図版30)。

《所見・時期》堆積状況及び井戸枠材の出土もないことから、素掘りの井戸跡と考えられる。また、11層から出土した棒状加工材の放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、778～882calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。

ＳＥ72井戸跡(第15・35・45図、図版６)

《位置・確認状況》ＭＩ52・53、ＭＪ52・53に位置する。第Ⅳ層地山上面で、暗褐色土の分布が確認された。Ｐ330・498・646と重複して古い。なお断面精査中、埋土が崩落したため土層の記録はできなかった。

《規模・形態》平面形は、長軸2.32ｍ(Ｎ－43°－Ｗ)、短軸2.14ｍの円形を呈す。確認面からの深さは2.56ｍである。底面形は長軸1.22ｍ、短軸0.97ｍの不整楕円形で、底面は平坦、壁は急角度で立ち上がる。また、底面から約0.5ｍ上位の井戸中央付近で出土した径23㎝、高さ９㎝の曲物は、底板が上へ浮き上がった状態で埋まっていたことから、井戸廃絶時に投げ込まれたと考えられる。

《出土遺物》底面から約0.5ｍ中央付近で曲物が、また底面付近では火付け木が出土した。その他層位不明であるが、土師器器種不明４点2.9ｇ、須恵器坏１点3.1ｇ・壺甕類１点7.1ｇ、須恵器系陶器袋物類２点165.7ｇや肥前磁器碗１点1.4ｇ、箸や井戸枠の一部と考えられる板材等の木製品、クリ・トチノキの種実(第４章第３節参照以下同)が、また中位層では、井戸廃絶に際し投入されたと考えられる径17～30cmの礫が数個出土した。このうち須恵器系陶器袋物類１点及び曲物１点・火付け木１点を図示した(第49図３～５)。また曲物で放射性炭素年代測定を実施した。

《所見・時期》埋土崩落前の断面観察から、井戸枠裏込め土と考えられる第Ⅳ層地山土由来の土が壁沿いに堆積した状態が確認されたことから、井戸枠を伴った井戸跡と考えられる。曲物の放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1035～1154calＡＤ(１σ)年代値が得られている。須恵器系陶器や肥

前磁器碗も出土したが、井戸廃絶後に混入した可能性が高い。

ＳＥ92井戸跡(第17・45図、図版６)

《位置・確認状況》ＭＥ57・58、ＭＦ57・58に位置する。第Ⅳ層地山上面で、にぶい黄褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.96ｍ(Ｎ－29°－Ｅ)、短軸0.87ｍの円形を呈す。確認面からの深さは1.28ｍである。底面形は長軸0.32ｍ、短軸[0.25]ｍの円形で、底面は鍋底状、壁は下位では緩やかに立ち上がり、中位以上は垂直である。

《埋土》６層に分けた。２層は炭化物層である。他は全て第Ⅳ層地山土由来のにぶい黄褐色土やグライ化した暗オリーブ灰色・オリーブ灰色土を基質とする。４層以下はグライ化していた。全ての層で混入物を含むことから、井戸廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》６層から井戸廃絶に際し投入されたと考えられる加工木材片が多量に出土した。６層から出土した加工木材片の一部で放射性炭素年代測定を実施するとともに、図示した(第49図６)。

《所見・時期》断面形状及び堆積状況から素掘りの井戸跡と考えられる。６層から出土した加工板材片の放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1046～1160calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。

ＳＥ93井戸跡(第17・45図、図版６)

《位置・確認状況》ＭＥ58に位置する。第Ⅳ層地山上面で、一部撹乱を受けた黒褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.88ｍ(Ｎ－62°－Ｗ)、短軸0.86ｍの円形を呈す。確認面からの深さは1.66ｍである。底面形は長軸[0.46]ｍ、短軸0.44ｍの円形で、底面は鍋底状、壁は垂直に立ち上がる。

《埋土》６層に分けた。１・２層は第Ⅲ層土由来の黒褐色・黒色土を基質とし、３～５層は黒泥状土である。６層は第Ⅳ層地山土由来のグライ化したオリーブ灰色土を基質とする。１～３層では、地山土塊を、また４・５層は本質的には同質であるが、４層では籾殻を多量に含んでいた。以上から、１～５層は、井戸廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。６層は底部に黒泥状土が凹レンズ状に堆積していることから、井戸使用時の自然流入による堆積土と考えられる。

《出土遺物》底面付近で曲物底板が出土した。出土した曲物底板で放射性炭素年代測定を実施するとともに、図示した(第49図７、図版31)。

《所見・時期》断面形状や堆積状況から素掘りの井戸跡と考えられる。曲物底板の放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1040～1152calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。

ＳＥ94井戸跡(第17・45図、図版６)

《位置・確認状況》ＭＤ58に位置する。第Ⅳ層地山上面で、北側が調査区外へ続く灰褐～灰色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸1.13ｍ(Ｎ－78°－Ｗ)、短軸[1.02]ｍの円形を呈す。確認面からの深さは1.29ｍである。底面形は長軸[0.66]ｍ、短軸0.52ｍの楕円形で、底面はやや鍋底状、壁は垂直に近い立ち上がりである。

《埋土》４層に分けた。１・２層は第Ⅲ層土由来のグライ化した灰褐色・灰色土を、４層は第Ⅳ層地山土由来のグライ化したオリーブ灰色土を基質とする。３層は黒泥状土である。１・２層は、地山土塊や炭化物粒・塊を含むことから、井戸廃絶に伴う人為的埋土、３・４層は炭化物が断面で凹レンズ

状に堆積していたことから、井戸使用時の自然流入による堆積土と考えられる。
《出土遺物》なし。
《所見・時期》断面形状や堆積状況から素掘りの井戸跡と考えられる。時期は、出土遺物がなく不明である。しかし周囲に形状が似たＳＥ92・93井戸跡が近接していることから、古代の項に含めておく。

ＳＥ95井戸跡(第16・35・46図、図版６)
《位置・確認状況》ＭＨ49・50に位置する。第Ⅳ層地山上面で、中心部が暗オリーブ灰色土と黒褐色土の分布が確認された。
《規模・形態》平面形は、長軸[1.30]ｍ(Ｎ－25°－Ｅ)、短軸1.28ｍの隅丸方形を呈す。確認面からの深さは1.81ｍである。底面形は長軸0.30ｍ、短軸0.28ｍの円形で、底面は平坦、東側は緩やかに、西側は急に立ち上がり、中位やや下からは垂直に立ち上がる。また４層上では、完形の径23㎝、高さ17㎝の曲物が、正位で埋設された状態を確認した。水溜施設と判断される。
《埋土》４層に分けた。１・３・４層は第Ⅲ層土由来のグライ化した暗オリーブ灰色土を、２層は第Ⅲ層土由来のグライ化した黒褐色土を基質とする。１・２層は基質土に対し、暗褐色土塊や地山土塊の割合を多く含む。また２層は、廃絶に伴い投入されたと考えられる径11～28cmの礫を数個含んでいる。また３層は木材片を多く含むことから、１～３層は、井戸廃絶に際しての人為的な一括埋め戻し土、４層は曲物を据えるため、井戸構築時、底部まで掘りきった後に埋め戻された土と考えられる。
《出土遺物》３層から井戸枠材と考えられる板材片とともに木簡(曲物底板、附編参照)が、また４層出土の曲物内からトチノキの種実１点、モモの核４点出土した。これら種実は井戸廃絶時の祭祀に関わる可能性があるが、詳細は不明である。このうち井戸枠材と思われる加工材３点、曲物１点、木簡１点を図示した(第49・50図８～12)。また３層から出土した有孔板材で放射性炭素年代測定を実施した。
《所見・時期》水溜施設と考えられる曲物が井戸中央に置かれていたことや、井戸枠材と考えられる板材片が出土したことから、本来井戸枠を伴った井戸跡であったと考えられる。３層出土の有孔板材による放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1040～1152calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。

ＳＥ100井戸跡(第16・35・46図、図版６)
《位置・確認状況》ＭＨ50に位置する。第Ⅳ層地山上面で、検出されたＰ675・725を精査後、その底面及び壁面が地山でなかったため、断ち割りを入れて断面をさらに掘り下げたところ、井戸跡の一部と判明した。Ｐ675・725と重複して古い。
《規模・形態》平面形は、長軸1.61ｍ(Ｎ－30°－Ｗ)、短軸〈1.04〉ｍの不整円形を呈す。確認面からの深さは1.80ｍである。底面形は長軸〈0.33〉ｍ、短軸0.60ｍの隅丸方形で、底面は平坦、壁は垂直に立ち上がる。東側では一部オーバーハングしていた。井戸枠は、方形縦板組型である。掘形に対し井戸枠は小さく、一辺約30cmの方形であったと残存状態から考えられる。井戸枠の隅柱は四隅全て確認され、径約４～６㎝の芯去りミカン割材の角柱を用い、側面にそれぞれ貫通したほぞ穴を開け、直角に対面する柱と横桟で結合させていた。北東隅柱及び北東・南西両隅柱を結ぶ横桟は掘削時に確認し

ていたが、それぞれ図化する以前に取り上げてしまったため、どのように結合していたかは不明である。よって以下図示したもののみ記していく。南東隅柱は、それぞれの隅柱に対面する北東側・南西側の両側面に貫通孔を開け、横桟を差し込んで両隅柱と結合していた。北東側の貫通孔は、南西側の貫通孔より上部に開けられていた。南西隅柱は、対面する北西側面に貫通孔が設けられ、南東隅柱からくる横桟は、南西隅柱の上部が腐食しているため凹みにはめ込まれたように設置していたが、本来は南東隅柱同様に貫通孔であった痕跡が一部残る。また北西隅柱は、南西隅柱からくる横桟が、南西隅柱同様頂の凹みにはめ込まれた状態で、これも本来は貫通孔であったと考えられる。北西隅柱と北東隅柱の接合状況は不明である。北東隅柱では、南西隅柱からくる横桟は頂きに配置されていた。凹みもなく腐食のため接続方法も不明であるが、やはり貫通孔が設けられていたと考えられる。また本遺構の北西壁には、人為的に掘られた凹凸が認められた。井戸構築時に、掘削者が昇降に使用した足架け痕と思われる。

《埋土》３層に分けた。１層は第Ⅲ層土由来のグライ化した灰色土を、２・３層は第Ⅳ層地山土由来のグライ化した暗オリーブ灰色土を基質とする。１層では地山土塊や炭化物が、２・３層では暗褐色土粒を含むことから、全て人為的な埋め戻し土と考えられる。井戸廃絶時には裏込め土を掘り崩し、井戸枠の側板を外し、多量の木材片とともに３層土を埋め立て、その後１・２層土を埋めたと考えられる。

《出土遺物》３層から井戸枠材が出土した他、トチノキの種実１点及び廃絶に伴い投入されたと考えられる木材片が多量に出土した。このうち井戸枠材の隅柱４点、縦板３点を図示した(第51図13～19)。また、北西及び南東隅柱で放射性炭素年代測定を実施した。

《所見・時期》遺跡内で唯一明確に井戸枠が残る井戸跡である。北西・南西各隅柱の放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、それぞれ772～868calＡＤ(１σ)・724～864alＡＤ(１σ)の年代値が得られている。

③火葬墓

ＳＴ89火葬墓(第15・18・36・46図、図版６)

《位置・確認状況》ＭＥ52、ＭＦ52に位置する。第Ⅳ層地山上面で、黒色土の分布が確認された。

《規模・形態》長軸[1.10]ｍ(Ｎ－14°－Ｗ)、短軸1.01ｍの略円形を呈す。確認面からの深さは0.12ｍである。底面は平坦で、壁は北西側では急に、南東側では緩やかに立ち上がる。

《埋土》単層である。第Ⅲ層土由来の黒色土を基質とする。地山土粒、炭化物粒を含むことから人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土からヒトの焼骨片262.3ｇ(第４章第４節参照以下同)、炭化したイネやオオムギ等の種実が出土した。また、埋土から出土した炭化物で放射性炭素年代測定を実施した。

《所見・時期》埋土から多量の炭化物とともに焼骨が不規則な状態で出土したことから、火葬施設で焼かれた骨を改めて埋葬した火葬墓と考えられる。また、放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、990～1017calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。

④土坑

ＳＫ109土坑(第33・41図)

《位置・確認状況》ＪＲ45・46に位置する。第Ⅳ層地山上面で、にぶい黄褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》底面まで掘りきっていないため、深さは不明である。平面形は、長軸1.06m（N－67°－W）、短軸1.05mの円形を呈する。

《埋土》断面観察をしていないため、堆積状況は不明である。検出面による観察では、第Ⅲ層土由来のにぶい黄褐色土を基質とし、地山土塊を含むことから、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から土師器甕９点61.8ｇが出土した。

《所見・時期》完掘していないため、詳細な性格は不明である。時期は、出土遺物から９世紀前半の平安時代前期と推定される。

ＳＫ116土坑（第30・40・41・46図）

《位置・確認状況》ＫＦ44、ＫＧ44に位置する。第Ⅳ層地山上面で、削平を受けた暗褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸1.12m（N－74°－W）、短軸0.64mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.14mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《埋土》２層に分けた。１層は第Ⅲ層土由来の暗褐色土を、２層は第Ⅳ層地山土由来の褐色土を基質とする。それぞれ地山土塊を多く含むことから、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から土師器甕５点34.5ｇが出土した。

《所見・時期》時期は、出土遺物から平安時代と推定される。

ＳＫ117土坑（第30・40・46図）

《位置・確認状況》ＫＧ44に位置する。第Ⅳ層地山上面で、にぶい黄褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸1.12m（N－37°－W）、短軸0.62mの隅丸方形を呈す。確認面からの深さは0.31mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がった後、中位で平坦になり、再び急に立ち上がる。

《埋土》４層に分けた。１・２・４層は第Ⅲ層土由来のにぶい黄褐色・暗褐色土を基質とし、３層は第Ⅳ層地山土由来の褐色土を基質とする。１・２・４層は地山土や焼土を多量に含み、３層は第Ⅲ層土由来の暗褐色土を多量に含むことから、全て廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から土師器甕２点138.2ｇが出土した。このうち１点を図示した（第52図20）。

《所見・時期》時期は、出土遺物から９世紀代前半と推定される。

ＳＫ133土坑（第30・40・47図、図版７）

《位置・確認状況》ＫＧ44、ＫＨ44に位置する。第Ⅳ層地山上面で、にぶい黄褐色・暗褐色土の分布が確認された。ＳＫ312土坑と重複して新しい。

《規模・形態》平面形は、長軸1.40m（N－30°－E）、短軸1.10mの略円形を呈す。確認面からの深さは0.32mである。底面は比較的平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》10層に分けた。１～６層は第Ⅲ層土由来のにぶい黄褐色・褐色・暗褐色土を、９・10層は第Ⅳ層地山土由来の褐色土を基質とする。８層も第Ⅳ層地山土由来であるが、被熱により変色していた。また７層は炭化物層である。１～６層は、廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土で、地山土、炭化物、焼土等の混入物を含む。８～10層は、構築時に、一度底部まで掘りきった後、底面を整形するために埋め戻され、その後８層上面で火が焚かれたと考えられる。７層はその際に出た炭化物が堆積していた。炭化物を掻き出す際、８層上部は大きく削られたと考えられる。

《出土遺物》埋土から、土師器坏３点5.7ｇ・壺甕類51点352.3ｇ、須恵器坏９点92.8ｇ・甕３点(同一個体)22.8ｇ、フイゴの羽口３点65.4ｇ、鉄滓１点6.5ｇが出土した。このうち土師器甕１点、須恵器坏１点、羽口２点(第52図21～24)を図示した。

《所見・時期》底面には、火が焚かれた痕跡が残る。出土遺物には特に被熱の痕跡はなく、遺物は火が焚かれた後に廃絶されたものと考えられる。時期は、出土遺物から９世紀前半の平安時代前期と推定される。

ＳＫ134土坑(第30・40・47図)

《位置・確認状況》ＫＨ45に位置する。第Ⅳ層地山上面で確認した。

《規模・形態》平面形は、長軸0.88ｍ(Ｎ－30°－Ｅ)、短軸0.74ｍの略円形を呈す。確認面からの深さは0.25ｍである。底面は比較的平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》単層である。第Ⅳ層地山土由来の褐色土を基質とする。地山土塊・炭化物粒を含むことから、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から須恵器坏１点13.0ｇが出土した。

《所見・時期》時期は、出土遺物から９世紀前半の平安時代前期に推定される。

ＳＫ136土坑(第32・33・41・47図、図版７)

《位置・確認状況》ＪＳ44・45、ＪＴ44・45に位置する。第Ⅳ層地山上面で、北側を確認調査時のトレンチにより削平された、にぶい黄褐色土の分布が確認された。Ｐ1147・1220・1229・1271と重複して古い。

《規模・形態》確認調査時のトレンチに削平され、全体の形態は不明である。平面形は、長軸2.14ｍ(Ｎ－58°－Ｗ)、短軸[1.50]ｍの楕円形を呈す。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《埋土》単層である。第Ⅲ層土由来のにぶい黄褐色土を基質とする。基質土が塊状で、地山土塊を含むことから、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から、須恵器坏蓋１点97.4ｇ・坏３点26.4ｇ、土師器甕１点22.8ｇが出土した。このうち須恵器坏蓋・坏各１点を図示した(第52図25・26)。

《所見・時期》時期は、出土遺物から９世紀前半の平安時代前期と推定される。

ＳＫ140土坑(第30・40・47図、図版７)

《位置・確認状況》ＫＨ44に位置する。第Ⅳ層地山上面で、にぶい黄褐色土の分布が確認された。ＳＫ312土坑と重複して新しい。

《規模・形態》平面形は、長軸1.50ｍ(Ｎ－０°－Ｅ)、短軸1.22ｍの略円形を呈す。確認面からの深さは0.26ｍである。底面は比較的平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》３層に分けた。１・２層は第Ⅲ層土由来のにぶい黄褐色土を、３層は第Ⅳ層地山土由来の褐色土を基質とする。１・２層は地山土や炭化物を多量に、３層では第Ⅲ層土由来の暗褐色土を含むことから、全て廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から、土師器壺甕類40点498.4ｇ、須恵器坏９点67.6ｇ・甕１点2.3ｇが出土した。このうち土師器甕２点、須恵器坏(墨書土器)１点を図示した(第52図27～29)。

《所見・時期》時期は、出土遺物から９世紀前半の平安時代前期と推定される。

ＳＫ144土坑(第28・40・47図)

《位置・確認状況》ＫＨ48に位置する。第Ⅳ層地山上面で分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸1.06m(Ｎ－54°－Ｅ)、短軸0.98mの略円形を呈す。確認面からの深さは0.22mである。底面は比較的平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》単層である。グライ化した第Ⅳ層地山土由来のオリーブ褐色土を基質とする。塊状に堆積していたことから人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から須恵器甕１点45.7ｇが出土し、これを図示した(第52図30)。

《所見・時期》時期は、出土遺物から９世紀前半の平安時代前期と推定される。

ＳＫ148土坑(第29・40・48図)

《位置・確認状況》ＫＬ45・46、ＫＭ45・46に位置する。第Ⅳ層地山上面で、にぶい黄褐色・黄褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》長軸1.53m(Ｎ－77°－Ｗ)、短軸0.88mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.22mである。底面は比較的平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《埋土》２層に分けた。１層は第Ⅲ層土由来のにぶい黄褐色土を、２層は第Ⅳ層地山土由来の黄褐色土を基質とする。１層は地山土塊、２層は第Ⅲ層土由来のにぶい黄褐色土を多量に含むことから、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から土師器壺甕類５点24.4ｇが出土した。

《所見・時期》時期は、出土遺物から９世紀前半の平安時代前期と推定される。

ＳＫ149土坑(第25・48図、図版７)

《位置・確認状況》ＬＥ46に位置する。確認調査時のトレンチ底面にあたる第Ⅳ層地山上面で、焼土と炭化物の分布が確認された。精査後、改めて第Ⅲ層上面から掘り込まれていたことが確認された。

《規模・形態》確認調査時のトレンチにより東側が削平されているため、全体の形態は不明である。掘り込みの平面形は、長軸[1.60]m(Ｎ－35°－Ｅ)、短軸〈1.06〉mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは、0.21mである。底面は平坦で、壁は北側では緩やかに立ち上がり、その後急に立ち上がる。南側では、急に立ち上がり、その後緩やかに立ち上がる。底面の焼土の平面形は、長軸0.45m、短軸0.31m、被熱厚は２～５cmである。

《層序》埋土は３層に分けた。１層は、第Ⅳ層地山土由来の明黄褐色土を基質とする。炭化物塊を含み、焼土周辺に薄く堆積していた。本遺構使用時に出た炭化物を含む人為的な埋め戻し土と考えられるが詳細は不明である。２・３層は使用時の被熱痕である。２層は強被熱範囲で、３層は弱被熱範囲である。２層を中心にして３層が同心円状に広がる。

《出土遺物》なし。底部１層内に堆積していた炭化物で放射性炭素年代測定を実施した。

《所見・時期》土坑底面に被熱が認められるのは、ＳＫ239等がある。放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、661～761calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。しかし遺跡内には、他に７世紀後半から８世紀半ばの遺構や遺物が確認されていない。よって時期は、もう少し時代が下る可能性がある。

ＳＫ226土坑(第28・40・48図)

《位置・確認状況》ＫＨ49、ＫＩ49に位置する。第Ⅳ層地山上面で分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸1.20ｍ（Ｎ－65°－Ｅ）、短軸0.96ｍの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.28ｍである。底面は平坦で、壁は北東側は急に、南西側では緩やかに立ち上がる。

《出土遺物》埋土から、須恵器坏１点11.8ｇ、土師器甕２点11.2ｇが出土した。このうち須恵器坏１点を図示した（第52図31）。

《所見・時期》時期は、出土遺物から９世紀前半の平安時代前期と推定される。

ＳＫ239土坑（第26・39・48図、図版７）

《位置・確認状況》ＫＳ45・46に位置する。第Ⅳ層地山上面で、褐色土や焼土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸1.46ｍ（Ｎ－85°－Ｗ）、最大径0.91ｍの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.16ｍである。底面は平坦で、壁は東側は緩やかに、西側では急に立ち上がる。また底面に広がる被熱面は長軸1.37ｍ、最大径は0.82ｍ、被熱厚は１～14cmである。

《埋土》５層に分けた。１～３層が掘形に堆積した埋土で、４・５層は地山面が被熱した焼土である。１層は第Ⅳ層地山土由来の褐色土を、２・３層は第Ⅲ層土由来の暗褐色土を基質とする。全て焼土及び炭化物を含む人為的な埋め戻し土である。４層は強被熱範囲で、本遺構構築後、底面で火が焚かれたものと考えられ、上部にはその際に出た少量の残った炭化物が堆積した様子が確認された。５層は弱被熱範囲で、４層周辺で確認された。

《出土遺物》１～３層から土師器甕38点2471.3ｇ、須恵器坏４点318.9ｇ、羽口１点51.0ｇが出土した。また須恵器坏は逆位で２枚重なった状態で出土した。このうち土師器甕５点、須恵器坏４点、羽口１点を図示した（第52・53図32～41）。

《所見・時期》土坑底面に被熱が認められる。須恵器坏が逆位で２枚重ねられ埋納され、他にも多くの土器が出土した。土器類は被熱を受けた痕跡がなく、遺物は火を焚いた後に入れられたと考えられる。時期は、出土遺物から９世紀前半の平安時代前期と推定される。

ＳＫ312土坑（第30・40・47図）

《位置・確認状況》ＫＨ44に位置する。第Ⅳ層地山上面で、にぶい黄褐色土の分布が確認された。ＳＫ133・140土坑と重複して古い。

《規模・形態》平面形は、長軸〈0.77〉ｍ（Ｎ－16°－Ｅ）、短軸0.37ｍの円形を呈す。確認面からの深さは0.24ｍである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《埋土》４層に分けた。１・２層は第Ⅲ層土由来のにぶい黄褐色土を、４層は第Ⅳ層地山土由来の褐色土を基質とする。３層も第Ⅳ層地山土由来であるが、被熱により変色していた。１・２層は廃絶に伴う一括埋め戻し土で、地山土塊を多く含む。４層は、構築時に３層とともに埋め戻し、底面を整形し、その後３層上面で火が焚かれたものと考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》ＳＫ133土坑同様、一旦掘られた後に埋め戻され、火が焚かれていた。時期は、出土遺物がなく不明であるが、９世紀前半と推定されるＳＫ133・140土坑と重複して古いことから、同時代かそれよりやや古い時代のものと考えられる。

⑤焼土遺構

ＳＮ240焼土遺構（第26・39・48図、図版７）

《位置・確認状況》ＫＲ46に位置する。第Ⅳ層地山上面で、焼土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.72m、短軸0.62mの不整形で、被熱厚は４～14cmである。
《層序》２層に分けた。１・２層とも地山面で火が焚かれた際の焼土で、１層は強被熱範囲、２層は弱被熱範囲で、１層周辺を同心円状に広がっていた。
《出土遺物》なし。
《所見・時期》周辺には、関連する上屋施設がないことから、野外の地床炉の可能性がある。時期は、出土遺物がなく不明であるが、周辺の状況や検出面から、９世紀前半の平安時代前期に推定される。

ＳＮ248焼土遺構(第26・27・39・40・48図、図版７)
《位置・確認状況》ＫＰ48に位置する。第Ⅲ層上面で、南東側で撹乱を受けて削平された、焼土の分布が確認された。
《規模・形態》平面形は、長軸0.58m、短軸0.43mの円形を呈す。被熱厚は６～10cmである。
《層序》２層に分けた。１・２層とも焼土で、１層は強被熱範囲で、本層上面で火が焚かれたものと考えられる。２層は弱被熱範囲で、１層周辺を同心円状に広がっていた。
《出土遺物》なし。
《所見・時期》周辺には、関連する上屋施設がないことから、野外の地床炉の可能性がある。時期は、古代の生活文化層である第Ⅲ層上面で火が焚かれた痕跡が残ることから、平安時代と推定される。

（２）古代の遺構外出土遺物

古代に属する遺構外出土遺物は、土師器坏類136点1257.8ｇ・壺甕類4551点39441.7ｇ・器種不明57点132.1ｇ、須恵器坏類1289点15430.5ｇ・壺甕類290点19602.5ｇである。図示したものは、土師器坏６点・甕64点・鍋６点、須恵器坏蓋12点・坏92点・甕18点・壺11点・瓶２点・横瓶４点である(第53～68図42～246)。

42～47は土師器坏で、土師器壺甕類及び須恵器に比べ、出土量は極端に少なく、摩滅しているものがほとんどである。確認できたものは全てロクロ成形である。42は高台付坏である。42は内面、46は内外面黒色処理が施されている。43は灯明皿として使用され、外面及び口縁部内面に煤が付着している。47の底部切離しは回転糸切りである。

土師器甕は、大別すると非ロクロ成形(48～66)、ロクロ成形(67～102)に分かれ、非ロクロ成形の土師器甕は、内外面にハケメやナデ、ケズリ等の調整が施されている。55は内面黒色処理が施されている。基本的に口縁部先端は「く」の字状に外反し、48は口唇部先端に外傾面を形成し、54は口唇部に凹みを、49・50・56は頸部に明瞭な段を持つ。52は頸部に２条、58は７条の沈線が施されている。59～66は底部で、全て平底である。底部から胴部への立ち上がりは一度内彎した後、外側へ立ち上がっていくものがほとんどで、63は立ち上がりの開きが広く、球胴底の形態をとる。66は底面が凹む。59・60・62は底部に成形時の木葉痕が、61・63は砂底痕、64・65は笹葉痕が残る。66も笹葉痕であろう。

ロクロ成形の土師器甕は、大型のものは底部が丸底の長胴甕、中・小型のものは平底甕と推定される。口縁部は、非ロクロ成形同様「く」の字状に外反し、口唇部先端は、個体により強弱があるが、80を除き上方に摘まみ出されている。67～71・81～83は口縁部先端が上に摘まみ出され外傾面を形成

し、72～79・84～87は外傾面が凹み沈線が巡る。88・89は上部に大きく口縁部先端が摘まみ出されている。90～95は長胴甕の胴部及び底部で、67同様内外面に成形時の当て具痕や叩き痕等が残る。96～102は平底甕の底部で、ほとんどの底部切離しが回転糸切りと推定される。100は底部からの立ち上がりが急である。102は底部から柱状に立ち上がった後、外へ広がるように緩やかに立ち上がっている。

103～108は鍋である。103は口唇部が面取され、104･105は胴部から緩やかに立ち上がり、口唇部は上へ摘まみ出されている。107・108は底部で、内外面に当て具痕及び叩き痕が残る。

須恵器は、土師器に比べて残存状態が良い。109～120は須恵器坏蓋で、109～111は摘まみ部が残存している。109は摘まみ部が宝珠形を呈す。一方110は摘まみ部内面がやや凹み、111は比較的平坦な面を持つ。109のように天井部が狭く高さのあるものと、110・111のように天井部が広く低いもので大別できると思われるが、資料点数が少なく詳細は不明である。端部は、109・110のように下方へ返りがつくものと、若干の平坦面が形成された後に返りがつくものとに分かれる。110・112・117・118・119は端部が面取され凹み線を呈す。また119・120は内面に墨痕が残ることから、硯への転用が考えられる。

121～196は須恵器坏で、他に墨書が認められる197～211・213も須恵器坏である。墨書土器を含む須恵器坏は、大別すると121～178及び197～211・213の高台のないものと、179～196の高台付とに大別される。また焼成があまく、肌が白色に焼成されているものや、酸化炎焼成気味のものも多く見られる。底部切離しは、回転ヘラ切りがほとんどを占め、まれに133・154・172～174・176・178のような回転糸切りが確認される。177は静止糸切りの可能性もある。無高台の坏は、口縁部から底部まで残存するものを見ていくと、定径指数と高径指数の差が0.28以上で、高さがほぼ３㎝前半におさまる皿形(121～150・197・206～209)と、定径指数と高径指数の差が0.27以下で高さが３㎝後半～４㎝以上の碗型(151～164)に大きく分かれる。175～178は底部が厚く外反しながら体部が立ち上がる。また132は外面に、138は内面、154は外面及び口縁部内面に煤が付着していることから灯明皿としての使用が考えられる。

高台付坏は、口縁部から底部まで残存するものを見ていくと、179・180の坏形と181～183の碗型に分かれる。186は体部上半であるが、残存状態から碗型と思われる。高台部は、180・181・184・187～190・192・193・195のように外に突き出すものと、182・183・191のように直立気味のもの、その中間である179・194・196の３タイプに大別できる。底部切離しは、181・194で糸切りが見られるが、詳細は不明である。

197～213は墨書土器で須恵器である。遺構内外を含め18点(ＳＫ140土坑内１点、遺構外17点)出土した。212は坏蓋で他は全て坏である。記された文字は、「田」・「□〔田ヵ〕」８点(197～204)、「田□」１点(205)、「風」１点(206)、「□〔无ヵ〕〔天ヵ〕」１点(207)、「人」１点(208)、「工」２点(209・210)、不明４点(29・211～213、29は遺構内)である(分布状況は第130図)。

214～231は須恵器甕である。214～216は口縁部で、214は口縁が大きく外反し、口唇部先端は下方へ摘まみ出されている。214・215はそれぞれ肩部及び頸部から「く」の字状に外反する。215は口唇部先端が比較的平坦に面取されるのに対し、216は先端が上に摘まみ出されている。217～231は胴部及び底部で、内外面に整形時の当て具痕や叩き痕が残る。231は丸底の底部である。

232～242は須恵器壺・瓶である。ロクロ成形であるが、238は胴部内外面にナデ調整が見られる。232～235は口縁部が残存する。232・233は頸部から口縁部へ垂直に近い立ち上がりをする短頸壺で、234・235は頸部から口縁部へ外反し立ちあがる長頸瓶である。238～242は底部で、底部切離しは回転ヘラ切りである。238～240は高台部が欠損している。242の高台部は、241と比べ大きく外へ張り出す。

243～246は須恵器横瓶である。243は焼成に失敗して変形し、焼けた陶土塊も付着している。244～246は胴部で、245はロクロ整形痕が、243・244・246にはロクロ整形痕の他、内外面に当て具痕や叩き痕が残る。

これらの土師器・須恵器を中心とした古代遺物の年代は、おおよそ８世紀末から９世紀前半におさまると考えられる。

３　中　世

（１）遺構と遺構内出土遺物

中世に属する遺構は、井戸跡26基、カマド状遺構31基、火葬施設４基、火葬墓９基、溝跡２条、焼土遺構１基である。そのうち出土遺物や炭素年代測定、周囲の状況等から年代が推定される遺構(井戸跡19基、カマド状遺構５基、火葬施設２基、火葬墓５基)を見ていくと、中世は大きく３期に分かれる(第131図)。第１期は、12世紀末～13世紀の平安時代末期から鎌倉時代を主とする。井戸跡12基(ＳＥ05・07・08・14・20・29～31・43・58・66・211)、カマド状遺構２基(ＳＯ83・84)、火葬墓３基(ＳＴ97・302・304)がこの時期に当たる。大きくは、ＳＥ211井戸跡を除きＭＩライン以東に井戸跡が集中している。また火葬墓及びカマド状遺構は、ＭＣ～ＭＥラインで特に集中している。第２期は、14世紀代の鎌倉時代末期から室町時代前期である。井戸跡は３基(ＳＥ53・150・151)、カマド状遺構２基(ＳＯ205・206)、火葬施設(ＳＫＣ38・157、ただし上限が第１期末に遡る)がこの時期に当たる。井戸跡は第１期に比べ東西に分散する。第３期は、15世紀代の室町時代中期から後期である。井戸跡２基(ＳＥ91・235)、カマド状遺構１基(ＳＯ36)、火葬墓２基(ＳＴ60・301、ただしＳＴ60の上限は第２期に遡る)である。井戸跡に関して観ていくと、ＳＥ91井戸跡・ＳＥ99井戸跡はＭＪ57・59、ＳＥ235井戸跡はＭＡ49に分散して位置する。これらは中世遺構の一部で、他にも中世に属するが時期不確定の遺構もある。このため正確な遺構の分布の把握はできないが、カマド状遺構及び火葬施設、火葬墓の分布は大きく変化している印象はない。古代と異なり西側調査区に生活の中心を移している。全体的に見ていくと、第１期は遺構数の比率が高いが、時期が下るにつれ遺構数が減少していく。このことから中世での遺跡内のピークは、13世紀代の鎌倉時代と考えられる。

遺構内出土遺物で図示したものは、後世の混入を含め、須恵器甕２点・台付坏１点、中国産磁器碗４点、須恵器系陶器甕２点・壺７点・袋物類１点・擂鉢６点・鉢１点、土錘１点、石鏃１点、砥石１点、木製品35点(漆椀・折敷・箸・鉤・加工材等)、銭貨４点(癒着は１点とした)、鉄滓１点である。

①井戸跡

ＳＥ05井戸跡(第11・12・34・69図、図版７・８)

《位置・確認状況》ＭＲ53に位置する。第Ⅳ層地山上面で、にぶい黄褐色土の分布が確認された。その後の断面調査の結果、周辺を囲む褐色土まで掘り込みが広がることが判明した。

《規模・形態》平面形は、長軸1.50m（N－３°－E）、短軸〈0.74〉mの不整円形を呈す。確認面からの深さは1.98mである。底面形は長軸[0.40]m、短軸0.44mの円形で、底面は平坦、壁は急に立ち上がり、やや角度を変えて開いた後、垂直に立ち上がる。南側では部分的にオーバーハングしている。

《埋土》６層に分けた。１・２層は第Ⅲ層土由来のグライ化したにぶい黄褐色・灰黄褐色土を、３～５・６層は第Ⅳ層地山土由来の褐色及びグライ化したにぶい黄橙色・オリーブ灰色土を基質とする。１～３層は、人為的な一括埋め戻し土、４・５層は井戸廃絶時に崩落した自然堆積土、６層は井戸構築時の裏込め土と考えられ、井戸使用時には、内側壁に井戸枠を構成する板材等が当てられていた可能性がある。

《出土遺物》２層から須恵器系陶器壺１点44.2ｇ、３層から火付け木、４～５層から曲物底板・側板が、また層位不明であるが須恵器甕１点195.0ｇが出土した。このうち須恵器甕１点、須恵器系陶器壺１点、曲物底板１点、火付け木１点、端部炭化材１点を図示した(第87図247～251)。また曲物底板で放射性炭素年代測定を実施した。

《所見・時期》堆積状況から、井戸枠を伴った井戸跡と考えられる。曲物底板の放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1184～1243calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。時期は、２層出土の須恵器系陶器壺が、大畑桧山腰窯(大仙市南外)産であり、13世紀前半の鎌倉時代前半と推定される。

ＳＥ07井戸跡(第11・34・69図、図版７・８)

《位置・確認状況》ＭＲ54、ＭＳ54に位置する、第Ⅳ層地山上面で、褐色～褐灰褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸[1.82]m(N－70°－W)、短軸[1.75]mの略円形を呈す。確認面からの深さは1.07mである。底面形は長軸[0.40]m、短軸0.36mの不整楕円形で、底面は平坦、壁は急に立ち上がるが、一部中位より緩やかに立ち上がり、開口部付近で再び急になる。中位より開口部まで大きく開くことから、井戸廃絶時に井戸枠を抜き取るため掘り広げられたと考えられる。

《埋土》11層に分けた。１・３・６・７・９・11層は第Ⅳ層地山土由来の褐色・にぶい黄橙色土を、２・４・５・８・10層は第Ⅲ層土由来のグライ化した褐灰色土を基質とすると考えられる。

１～８層は、井戸廃絶後に井戸枠を抜き取った後の人為的な埋め戻し土で、７・８層は、曲物が置かれたと思われる掘形の形状に堆積していた。９～11層は井戸枠裏込め土と考えられる。

《出土遺物》２層から縦型石匙１点8.6ｇ、４層から龍泉窯青磁碗１点84.9ｇが、この他層位不明であるが、不明鉄製品１点8.3ｇが出土した。このうち縦型石匙１点、龍泉窯青磁碗１点(第87図252・253)を図示した。

《所見・時期》堆積状況から井戸枠が設置され、曲物が底に置かれていた井戸跡の可能性がある。時期は、４層から出土した青磁碗より、13世紀代の鎌倉時代が推定される。

ＳＥ08井戸跡(第11・12・34・69図、図版７・８)

《位置・確認状況》ＭＲ52に位置する。第Ⅳ層地山上面で、暗褐色土の分布が確認された。その後、断面調査の結果、周辺を囲む褐色土まで掘り込みが広がることが判明した。

《規模・形態》平面形は、長軸1.43m(N－28°－E)、短軸〈0.72〉mの不整円形を呈す。確認面からの深さは1.56mである。底面形は長軸0.28m、短軸0.26mの円形で、底面は平坦、壁は急に立ち上がり、東側では一端緩やかに、その後やや内傾しながら立ち上がる。東側の壁はいびつで、地震の影響を受

けて形状が変形した可能性がある。

《埋土》６層に分けた。１～５層は第Ⅲ層土由来の暗褐色・黒褐色土及びグライ化した灰黄褐色・褐灰色・黄灰色土を、６層は第Ⅳ層地山土由来の褐色土を基質とする。１～３層は、地山土塊を含むことから、井戸廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土、６層は井戸枠の裏込め土と考えられ、内側の壁には井戸枠の板等が当てられていたと思われる。４・５層は、井戸廃絶時に６層から連続していた裏込め土が崩落し、落ち込んだ自然堆積土と考えられる。

《出土遺物》２層から須恵器系陶器壺１点40.8ｇ・擂鉢１点233.1ｇが、５層から井戸枠材と考えられる板材及び、水溜施設として使用されたと考えられる曲物底板が出土した。このうち須恵器系陶器壺１点・擂鉢１点を図示した(第87図254・255)。また曲物側板で放射性炭素年代測定を実施した。

《所見・時期》堆積状況や井戸枠材と考えられる板材、曲物側板が出土したことから、井戸枠があり、水溜施設が設置されていた井戸跡と考えられる。曲物側板の放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1184～1243calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。時期は、13世紀代の須恵器系陶器が出土したことから、13世紀前半の鎌倉時代前期と推定される。

ＳＥ14井戸跡(第11・12・34・70図、図版７・８)

《位置・確認状況》ＭＱ51、ＭＲ51に位置する、第Ⅳ層地山上面で、明黄褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸1.36ｍ(Ｎ－50°－Ｅ)、短軸1.15ｍの隅丸方形を呈す。確認面からの深さは1.18ｍである。底面形は長軸〈0.39〉ｍ、短軸0.50ｍの隅丸方形で、底面は平坦、壁は北側では急に、南側では急に立ち上がった後、大きくオーバーハングし、再び開口部へ緩やかに立ち上がる。

《埋土》５層に分けた。３・５層は第Ⅳ層地山土由来の明黄褐色・にぶい黄橙色土を、４層は第Ⅲ層土由来のグライ化した灰黄褐色土を基質とする。１・２層は、第Ⅲ層由来土と地山土の混合土である。１・２層は混合土で、３層は基質土が塊状に集まって堆積したものであることから、井戸廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土、４層は炭化物が凹レンズ状に多量に混じることから、井戸使用時に流れ込んだ自然堆積土、５層は崩落した壁部分が埋め立てられた土と考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》堆積状況や、井戸枠材等の出土もないことから、素掘りの井戸跡と考えられる。時期は、出土遺物がなく不明であるが、13世紀代の井戸跡と推定されるＳＥ08・20井戸跡に隣接していることから、中世の項に含めておく。

ＳＥ20井戸跡(第11・12・34・70図、図版７・８)

《位置・確認状況》ＭＲ52に位置する。第Ⅳ層地山上面で、褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸1.66ｍ(Ｎ－54°－Ｗ)、短軸[0.95]ｍの楕円形を呈す。確認面からの深さは1.51ｍである。底面形は長軸0.72ｍ、短軸〈0.40〉ｍの隅丸方形で、底面は平坦、壁は垂直に立ち上がり、中位でオーバーハングした後、緩やかに開口部へ向かう。井戸枠は残存していないが、中位より底面までの掘形の平面形が隅丸方形で箱状の掘り込みである。また底面直上では井戸枠材と思われる加工木材片が出土した。平面方形の井戸枠を設置していた可能性が考えられる。また中位より開口部は、大きく開く形状をしており、井戸廃絶時、井戸枠を抜き取るために掘り広げられたと考えられる。

《埋土》８層に分けた。１・３～８層は第Ⅳ層地山土由来の褐色・にぶい黄褐色・黄褐色土を、２層

は第Ⅲ層土由来のにぶい黄褐色土と第Ⅳ層地山土由来の褐色土の混合土を基質とする。１・３～６層は、地山土塊や暗褐色土、炭化物等を含み、２層も混合土であることから、井戸廃絶に伴う人為的な埋め戻し土と考えられる。７・８層も廃絶後の人為的な埋め戻し土と思われる。

《出土遺物》３層から須恵器系陶器壺１点36.8ｇが出土した他、底面付近から井戸枠材の一部と考えられる加工木材片が出土した。底面付近から出土した加工木材片で放射性炭素年代測定を実施するとともに、それを図示した(第88図256)。

《所見・時期》堆積状況や井戸枠材と考えられる加工木材片が出土し、井戸枠を抜き取るため開口部が掘り広げられたと思われる痕跡もあり、井戸枠が設置されていた井戸跡と考えられる。底面直上で出土した加工木材片の放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1274～1292calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。時期は、13世紀代の須恵器系陶器壺が出土したことから、13世紀後葉～末葉の鎌倉時代半ば～後半と推定される。

ＳＥ21井戸跡(第12・34・70図、図版８)

《位置・確認状況》ＭＮ50、ＭＯ50に位置する。第Ⅳ層地山上面で、褐灰色土の分布が確認された。その後、断面観察の結果、周囲を囲むにぶい黄褐色土も掘り込みの一部と判明した。Ｐ394と重複して古い。

《規模・形態》平面形は、長軸1.60ｍ(Ｎ－22°－Ｗ)、短軸1.45ｍの楕円形を呈す。確認面からの深さは1.11ｍである。底面形は長軸〈0.25〉ｍ、短軸0.49ｍの隅丸方形で、底面は平坦、壁は東側では垂直に、西側では緩やかに立ち上がった後、垂直に、そして再び緩やかに立ち上がった後、再度垂直に立ち上がり開口部へ向かう。底面形が隅丸方形であることから、井戸枠が設けられていた可能性がある。また特に西側では、底部から開口部へ向かい大きく開くような形状をしていたことから、井戸廃絶後、井戸枠を抜き取るため掘り広げられたと考えられる。

《埋土》７層に分けた。１・３・６層は第Ⅲ層土由来のグライ化した褐灰色土を、また２・７層は第Ⅳ層地山土由来のにぶい黄橙色とグライ化したオリーブ灰色を基質とすると思われる。４・５層は炭化物層である。１・３層は地山土塊、２層は暗褐色土塊を含むことから人為的な一括埋め戻し土、４・５層は炭化物層で多量に堆積し、６層は地山土塊を含み、７層は廃絶時に投入されたと考えられる木製品や木材を含むことから、井戸廃絶時の一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》６層から須恵器系陶器甕１点164.7ｇ、７層から井戸廃絶時に投入されたと考えられる曲物や鉤、板材等の木製品及び加工木材片が多量に、またスモモの核やトチノキの種実も出土した。その他層位不明であるが土師器坏１点4.7ｇが出土した。このうち須恵器系陶器甕１点、鉤１点を図示した(第88図257・258)。

《所見・時期》底面の形状から井戸枠が設置されていた井戸跡と考えられるが、詳細は不明である。時期は、須恵器系陶器甕が出土したことから、中世に属すると推定される。

ＳＥ29井戸跡(第８・70図、図版９)

《位置・確認状況》ＮＨ60に位置する。第Ⅳ層地山上面で、暗褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸[0.98]ｍ(Ｎ－13°－Ｅ)、短軸[0.88]ｍの隅丸方形を呈す。確認面からの深さは底面まで掘りきっていないため不明であるが、確認面から1.62ｍの深さまで確認された。壁は下位では急に、途中から垂直に立ち上がる。

《埋土》５層に分けた。２・３層は第Ⅲ層土由来の暗褐色土及びグライ化した黄灰色土を、１・４・５層は第Ⅳ層地山土由来の褐色及びグライ化したオリーブ灰色を基質とする。１層は周囲の地山土と異なりはがれ易い。また２層は地山土塊を含むことから、１層同様埋め戻し土、３・５層は井戸廃絶に際し、多量の地山土が投げ入れられた一括埋め戻し土、４層は廃絶時に井戸の壁の崩落による堆積土と考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》井戸枠が残存せず、また井戸枠材と考えられる加工木材片の出土もないことから、素掘りの井戸跡と考えられる。時期は、出土遺物がなく不明であるが、北東に隣接するＳＥ30井戸跡と形状が類似していることから、中世の項に含めておく。

ＳＥ30井戸跡(第８・71図、図版９)

《位置・確認状況》ＮＨ61、ＮＩ61に位置する。第Ⅳ層地山上面で、にぶい黄橙色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸[0.95]ｍ(Ｎ−81°−Ｗ)、短軸[0.83]ｍの隅丸方形を呈す。確認面からの深さは1.80ｍである。底面形は長軸0.26ｍ、短軸〈0.13〉ｍの円形で、底面は平坦、壁は中位で一部オーバーハングし、確認面まで垂直に立ち上がる。

《埋土》10層に分けた。２・４・７層は第Ⅲ層土由来の暗褐色及びグライ化した灰黄褐色、暗オリーブ灰色土を、１・３・５・６・８・10層は第Ⅳ層地山土由来の褐色・にぶい横橙色、グライ化したオリーブ灰色土を基質とする。９層は黒泥状土である。１～４層では地山土塊が、１～８層でも炭化物・焼土を含むことから、井戸廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。また底部に堆積した９・10層は、９層が黒泥状土であり、10層も本層底部で黒泥状土が堆積していたことから、井戸使用時の自然流入による堆積土と考えられる。

《出土遺物》１層下位から、須恵器系陶器壺１点209.1ｇが出土した。その他層位不明であるが、土師器坏２点7.9ｇ・壺甕類８点49.0ｇ、須恵器坏１点1.2ｇ、椀形滓１点80.2ｇが出土した。このうち、須恵器系陶器壺１点、椀形滓１点を図示した(第88図259・260)。

《所見・時期》断面形状及び堆積状況から、素掘りの井戸跡と考えられる。時期は、１層出土の須恵器系陶器壺から13世紀前半の鎌倉時代前期と推定される。

ＳＥ31井戸跡(第10・13・71図、図版９)

《位置・確認状況》ＭＯ56、ＭＰ56に位置する。第Ⅳ層山上面で、暗褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸1.22ｍ(Ｎ−56°−Ｗ)、短軸1.06ｍの不整円形を呈す。確認面からの深さは2.23ｍである。底面形は長軸〈0.51〉ｍ、短軸0.73ｍの不整円形で、底面は凹凸、壁は垂直に立ち上がり、中位で一部オーバーハングし、再び垂直に立ち上がる。

《埋土》10層に分けた。１・２・５～９層土は第Ⅲ層土由来の暗褐色及びグライ化した褐灰色・黒褐色・黒色・灰色・オリーブ黒色土を、３・４・10層は第Ⅳ層地山土由来の黄褐色・褐色及びグライ化したオリーブ灰色土を基質とする。それぞれ混入物を含むことから、全て人為的な埋め戻し土と考えられる。１・２層では、井戸廃絶に伴う径４～27cmの礫が数個投入されていた。また10層は、井戸構築時に埋められた裏込め土と思われ、内側に井戸枠の板等が当てられていた可能性がある。

《出土遺物》５層から須恵器系陶器壺１点111.8ｇや銭貨である熙寧元寶１点4.6ｇ、砥石１点11.8ｇ

の他、篦や井戸枠材と考えられる板材等が出土した。また６層からは、井戸枠材と考えられる板材片が、９層からも漆椀や有孔円盤板が板材片とともに出土した。このうち須恵器系陶器壺１点、砥石１点、漆椀１点、篦１点、有孔円盤板１点を図示した(第88・89図261～266)。

《所見・時期》堆積状況や井戸枠材と考えられる板材が出土しており、井戸枠が設置されていた井戸跡の可能性がある。また１・２層に入れられた礫は、廃絶儀礼の可能性が考えられる。時期は、出土した須恵器系陶器壺が大畑桧山腰窯産と考えられ、13世紀前半の鎌倉時代前半が推定される。

ＳＥ34井戸跡(第16・35・71図、図版９)

《位置・確認状況》ＭＪ49・50に位置する。第Ⅳ層地山上面で、黄褐色土の分布が確認された。半截時に、周囲に広がるにぶい黄褐色土も掘り込みの一部と判明した。ＳＢ314掘立柱建物跡Ｐ７、Ｐ503・727・728と重複して古い。

《規模・形態》平面形は、長軸[2.51]ｍ(Ｎ－３°－Ｅ)、短軸[2.38]ｍの円形を呈す。確認面からの深さは、1.90ｍである。底面形は長軸[1.56]ｍ、短軸〈1.27〉ｍの不整形で、底面は平坦、壁は垂直に立ち上がるが、南西側では中位から緩やかに立ち上がり、再び垂直に立ち上がる。南東側を除き、中位から開口部へ大きく開くような形状をしており、井戸廃絶後、井戸枠抜き取りのため掘り広げられ、さらに堆積状況から、土坑として再利用された可能性がある。

《埋土》７層に分けた。１・３・４・７層は第Ⅳ層地山土由来の黄褐色・にぶい黄褐色・明黄褐色土及びグライ化した暗オリーブ灰色土を基質とする。また２・５・６層は第Ⅲ層土由来のにぶい黄褐色・黒褐色土を基質とする。１層は人為的な埋め戻し土、２層は自然流入による堆積土、３～７層は井戸廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。１・２層は堆積状況から、３・４層が大きく掘り込まれた後に土坑が構築され、それが廃絶された後の堆積土の可能性がある。

《出土遺物》６層から龍泉窯青磁碗１点15.7ｇが、７層上位からは、曲物底板・側板や井戸枠材と考えられる加工部材の他、箸が322本出土した。また層位不明であるが土師器坏１点4.6ｇ・甕１点3.7ｇ、須恵器台付坏１点61.9ｇ、須恵器系陶器袋物１点88.7ｇ・擂鉢１点76.2ｇが出土した。このうち、須恵器台付坏１点、龍泉窯青磁碗１点、須恵器系陶器袋物１点、須恵器系陶器擂鉢１点、木製品では加工部材１点、曲物底板１点、箸８点を図示した(第89・90図267～280)。

《所見・時期》井戸枠材と考えられる加工木材が出土したことから、井戸枠が設置されていた井戸跡の可能性がある。また堆積状況から、井戸廃絶後に土坑として再利用された可能性が考えられる。時期は、６層から出土した龍泉窯青磁碗及び、層位不明であるが大畑桧山腰窯産と思われる須恵器系陶器甕が出土したことから、13世紀初頭の鎌倉時代前期と推定される。

ＳＥ43井戸跡(第15・35・72図、図版９)

《位置・確認状況》ＭＨ52、ＭＩ52に位置する。第Ⅳ層地山上面で、暗褐色土の分布が確認された。Ｐ319・452と重複して古い。

《規模・形態》平面形は、長軸1.76ｍ(Ｎ－61°－Ｗ)、短軸1.60ｍの隅丸方形を呈す。確認面からの深さは1.36ｍである。底面形は長軸〈0.26〉ｍ、短軸0.45ｍの円形で、底面は平坦、壁は急に立ち上がるが、中位ではオーバーハングしている。堆積状況から土坑として再利用された可能性がある。

《埋土》10層に分けた。1･3･５層は第Ⅲ層土由来の暗褐色・黒褐色土を基質とする。また２・７～10層は第Ⅳ層地山土由来の黄褐色の他、グライ化した灰黄褐色～オリーブ灰色・黄灰色土を基質とす

る。４・６層は炭化物層である。１～３層は、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。４～６層は、一時的な開口時の自然流入土で凹レンズ状に堆積する。７～９層は井戸廃絶に伴う人為的な埋め戻し土、10層は井戸使用時の自然流入による堆積土と考えられる。また堆積状況から、１～６層は、７層が大きく掘り込まれた後に土坑が構築され、それが廃絶された後の堆積土の可能性がある。

《出土遺物》埋土から、土師器甕１点3.2ｇ、須恵器系陶器壺１点4850.0ｇや砥石１点92.7ｇ、有孔礫１点26.3ｇが出土した。このうち須恵器系陶器壺１点を図示した(第90図281)。

《所見・時期》堆積状況から素掘りの井戸跡と考えられる。また上部は、井戸廃絶後に土坑として再利用された可能性がある。時期は、出土遺物から13世紀前半の鎌倉時代前半と推定される。

ＳＥ53井戸跡(第17・72図、図版９)

《位置・確認状況》ＭＥ57、ＭＦ57に位置する。第Ⅳ層地山上面で、暗褐色土の分布が確認された。半截時に埋土が崩落したため断面の記録はできなかった。

《規模・形態》平面形は、長軸[1.23]ｍ(Ｎ－50°－Ｅ)、短軸[1.14]ｍの円形を呈す。確認面からの深さは1.75ｍである。底面形は長軸0.96ｍ、短軸〈0.39〉ｍの略円形で、底面は平坦、壁は垂直に立ち上がる。

《出土遺物》上位層から、同一個体と思われる須恵器系陶器擂鉢２点979.6ｇが出土し、これら２点を図示した(第91図282・283)。

《所見・時期》井戸枠材と考えられる加工木材の出土もないことから、素掘りの井戸跡と考えられる。時期は、出土した須恵器系陶器擂鉢から14世紀前半の鎌倉時代末期～室町時代初期と推定される。

ＳＥ58井戸跡(第10・34・72図、図版10)

《位置・確認状況》ＭＲ55・56、ＭＳ55・56に位置する。確認調査時に第Ⅳ層地山上面で、灰黄褐色土の落ち込みが確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸[1.07]ｍ(Ｎ－31°－Ｅ)、短軸[0.98]ｍの隅丸方形を呈す。確認面からの深さは1.68ｍである。底面形は長軸0.85ｍ、短軸0.77ｍの略円形で、底面は平坦、壁は垂直に立ち上がる。

《埋土》８層に分けた。１・４・６・７層は第Ⅲ層土由来のにぶい黄褐色及びグライ化した灰黄褐色・褐灰色土を、３・５・８層は第Ⅳ層地山土由来のにぶい黄褐色及びグライ化したオリーブ灰色土を基質とする。２層は第Ⅲ層土由来の灰黄褐色土と第Ⅳ層地山土由来のにぶい黄褐色土の混合土である。また埋土は全て混入物を含むことから、井戸廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。７層には、廃絶に際し投入されたと思われる木製品の他、黒泥状土の混入が見られた。８層は、基本的には埋め戻し土であるが、最低部には炭化物が凹レンズ状に堆積し、井戸使用時の自然流入土も含むと考えられる。

《出土遺物》７層上位から須恵器系陶器壺２点829.8ｇが、７層下位からは、鉤・箸・曲物底板や側板、楔の他、井戸枠材と考えられる板材、炭化材等の木製品、モモの核が出土した。このうち須恵器系陶器壺２点、木製品では鉤１点、折敷１点、曲物底板１点、箸３点を図示した(第91・92図284～292)。

《所見・時期》井戸枠材と考えられる板材が出土したが、土層断面では井戸枠の痕跡が確認されないため、詳細は不明である。時期は、出土した大畑桧山腰窯産の須恵器系陶器壺から、13世紀前半の鎌

倉時代前期と推定される。

ＳＥ63井戸跡（第９・73図、図版10）

《位置・確認状況》ＮＡ61、ＮＢ61に位置する。第Ⅳ層地山上面で、北側が調査区外へ続く暗褐色土の分布が確認された。また北側は用水路に接し、崩落の危険があるため底面まで掘りきっていない。

《規模・形態》平面形は、長軸〈0.96〉ｍ（Ｎ－31°－Ｅ）、短軸1.18ｍの隅丸方形を呈す。確認面からの深さは、底面まで掘りきっていないため不明であるが、1.06ｍまで確認した。壁は垂直に立ち上がり、中下位で再び垂直に立ち上がる。堆積状況から土坑として再利用された可能性がある。

《埋土》７層に分けた。１・３層は第Ⅲ層土由来の暗褐色・黒褐色土を、５・６・７層は、第Ⅳ層地山由来のにぶい黄褐色及びグライ化した褐灰色・オリーブ灰色土を基質とする。２・４層は炭化物層である。全て井戸廃絶時の人為的な一括埋め戻し土と考えられる。また、１～４層は堆積状況から、５層を大きく掘り込んだ後に土坑が構築され、それが廃絶された後の堆積土の可能性がある。

《出土遺物》６層から、井戸枠材の一部と考えられる貫孔材や加工材が出土した。このうち貫孔材１点を図示した（第92図293）。

《所見・時期》井戸枠材の一部と考えられる加工材が出土したことから、井戸枠が設置されていた井戸跡と考えられる。また堆積状況から、上位部は土坑として再利用された可能性がある。時期は、時期を特定する遺物の出土がないことから不明であるが、周辺に中世の遺構が多いことから、中世の項に含めておく。

ＳＥ66井戸跡（第15・16・35・73図、図版10）

《位置・確認状況》ＭＩ51・52に位置する。第Ⅳ層地山上面で、にぶい黄褐色土の分布が確認された。Ｐ436・438・500・605・606と重複して古い。

《規模・形態》平面形は、長軸2.10ｍ（Ｎ－50°－Ｅ）、短軸1.75ｍの隅丸方形を呈す。確認面からの深さは1.77ｍである。底面形は、長軸[1.04]ｍ、短軸[0.64]ｍの楕円形で、底面は平坦、壁は東側では急に、西側では緩やかに立ち上がり、中位より垂直に立ち上がる。

《埋土》５層に分けた。１・３・５層は第Ⅳ層地山土由来のにぶい黄褐色土及びグライ化したオリーブ灰色土を、２・４層は第Ⅲ層土由来の黒褐色土を基質とする。埋土は全て混入物を含むことから、井戸廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》２層から土錘１点61.1ｇが、また層位不明であるが土師器壺甕類６点34.1ｇ、大畑桧山腰窯産の須恵器系陶器鉢１点48.0ｇが出土した。このうち須恵器系陶器鉢１点、土錘１点を図示した（第92図294・295）。

《所見・時期》堆積状況から素掘りの井戸跡と考えられる。時期は、出土した須恵器系陶器鉢から、13世紀前半の鎌倉時代前期と推定される。

ＳＥ67井戸跡（第９・73図、図版10）

《位置・確認状況》ＭＴ60に位置する。第Ⅳ層地山上面で、にぶい黄褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.90ｍ（Ｎ－76°－Ｗ）、短軸0.85ｍの円形を呈す。確認面からの深さは1.46ｍである。底面形は長軸〈0.31〉ｍ、短軸0.36ｍの楕円形で、底面は平坦、壁は緩やかに立ち上がった後、一部オーバーハングしながら垂直に立ち上がる。

《埋土》４層に分けた。１層は第Ⅳ層地山土由来のにぶい黄褐色土、２・３層は第Ⅲ層土由来のグラ

イ化した灰黄褐色・黄灰色土を、４層も第Ⅲ層土由来の黒褐色土を基質とすると思われるが、グライ化のため詳細は不明である。１層では、塊状に基質土である地山土が入り込み、また２～４層でも地山土塊を含むことから、１～４層は全て井戸廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から、須恵器系陶器甕１点40.7ｇ、砥石１点22.1ｇ及び加工材が出土した。このうち須恵器系陶器甕１点を図示した(第92図296)。

《所見・時期》井戸枠が残存せず、井戸枠材の出土もない。堆積状況から素掘りの井戸跡と考えられる。時期は、出土した須恵器系陶器壺から中世と推定される。

ＳＥ68井戸跡(第９・74図、図版10)

《位置・確認状況》ＭＳ60に位置する。第Ⅳ層地山上面で、にぶい黄褐色土の分布が確認された。半截時に埋土が崩落したため、土層記録は崩落を免れた上位のみである。

《規模・形態》平面形は、長軸1.14m(Ｎ－０°－Ｅ)、短軸0.86mの楕円形を呈す。確認面からの深さは1.78mである。底面形は、長軸〈0.53〉m、短軸0.66mの隅丸方形で、底面は平坦、壁は急に立ち上がり、中位でオーバーハングしているため内側へ傾斜した後、再び垂直に立ち上がる。

《埋土》断面は上位層のみ確認された。３層に分けた。１・２・３層とも基本的には第Ⅲ層土由来のグライ化した褐灰色・灰黄褐色土及び第Ⅳ層地山土由来のにぶい黄褐色土と第Ⅲ層土由来の褐灰色土の混合土を基質とすることから、井戸廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から、井戸廃絶時に投入されたと考えられる箸や楔、曲物側板、有孔加工材、杭状加工材、種子が出土した。このうち箸１点を図示した(第93図297)。

《所見・時期》断面形状から素掘りの井戸跡と考えられる。時期は、出土遺物がなく詳細は不明であるが、周辺に中世の遺構が多いことから、中世の項に含めておく。

ＳＥ74井戸跡(第11・34・74図、図版10)

《位置・確認状況》ＭＱ53・54に位置する。第Ⅳ層地山上面で、暗褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸1.38m(Ｎ－53°－Ｗ)、短軸1.26mの略円形を呈す。確認面からの深さは0.68mである。底面形は長軸[0.77]m、短軸0.77mの略円形で、底面は鍋底状、壁は緩やかに立ち上がる。

《埋土》７層に分けた。２・６層は第Ⅲ層土由来の暗褐色及びグライ化した灰褐色土を、１・３～５層は第Ⅳ層地山土由来の褐色・にぶい黄褐色・黄褐色土を基質とする。７層は土中の鉄分により変色していた。１層は暗褐色土塊を、２層は地山土塊及び炭化物粒を含むことから、人為的な埋め戻し土、３～７層は凹レンズ状の堆積であることから、自然流入による堆積土と考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》他の井戸跡よりも浅く、底部は湧水の出る深さに達していない。このため、水溜としての使用が考えられるが、詳細は不明である。時期は、出土遺物がなく不明であるが、周囲に中世の井戸跡が多いことから、中世の項に含めておく。

ＳＥ91井戸跡(第14・74図、図版10)

《位置・確認状況》ＭＪ59に位置する。第Ⅳ層地山上面で、灰褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸1.38m(Ｎ－50°－Ｅ)、短軸1.14mの不整円形を呈す。確認面からの深さは1.61mである。底面形は、長軸[0.92]m、短軸0.82mの不整円形で、底面は鍋底状、壁は東側では垂

直に、西側では急に立ち上がり、中位で垂直に立ち上がる。

《埋土》７層に分けた。１～５層は第Ⅲ層土由来の黒褐色及びグライ化した灰褐色・黒色土、６層は第Ⅳ層地山土由来のグライ化したオリーブ灰色土を基質とする。７層は黒泥状土である。１～５層は地山土塊、炭化物粒及び筋状、焼土粒等を含むことから、６層は黒泥状土や葦の根を含むが、比較的均質な土であることから、それぞれ人為的な一括埋め戻し土と考えられる。７層は凹レンズ状の堆積であり、井戸使用時の自然流入による堆積土と考えられる。

《出土遺物》３層で加工木材がわずかに出土した。このうち２点を図示した(第93図298・299)。また出土した加工木材片で放射性炭素年代測定を実施した。

《所見・時期》断面形状や堆積状況から、素掘りの井戸跡と考えられる。時期は、放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1450～1490calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。

ＳＥ96井戸跡(第18・19・36・74図、図版11)

《位置・確認状況》ＭＣ51、ＭＤ51に位置する。第Ⅳ層地山上面で、中心部がにぶい黄褐色土で、周りが黄褐～暗オリーブ灰色土、黄灰色土の分布が確認された。半截時に埋土が崩落したため、土層断面は崩落を免れた上位のみ記録した。さらに崩落する恐れがあったため、完掘できなかった。

《規模・形態》平面形は、長軸2.01ｍ(Ｎ－８°－Ｗ)、短軸〈1.61〉ｍの円形を呈す。確認面から2.13ｍの深さまで確認されたが、底面は未確認である。壁は開口部に向かい急に立ち上がる。

《埋土》残存していた上位層を３層に分けた。１・３層は第Ⅲ層土由来のにぶい黄褐色土及びグライ化した黄灰色土を、２層は第Ⅳ層地山土由来のグライ化した黄褐色～暗オリーブ灰色土を基質とする。全て人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》完掘していないため、素掘りの井戸跡か井戸枠を伴う井戸跡であるかは不明である。時期は、出土遺物がなく詳細は不明であるが、周辺に中世の遺構が多いことから、中世の項に含めておく。

ＳＥ99井戸跡(第14・35・75図、図版11)

《位置・確認状況》ＭＪ57に位置する。第Ⅳ層地山上面で、褐灰色土の分布が確認された。Ｐ649・650と重複して古い。

《規模・形態》平面形は、長軸[0.97]ｍ(Ｎ－84°－Ｅ)、短軸0.91ｍの円形を呈す。確認面からの深さは1.36ｍである。底面形は、長軸[0.52]m、短軸0.31mの円形で、底面は鍋底状、壁は緩やかに立ち上がり、中位より垂直に立ち上がる。

《埋土》５層に分けた。１～４層は第Ⅲ層土由来のグライ化した褐灰色･黄灰色土を基質とする。１～４層は、基質土及び混入した地山土が塊状に混ざり合うことから、井戸廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。また５層は黒泥状土で、井戸使用時の自然流入による堆積土と考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》断面形状や堆積状況から素掘りの井戸跡と考えられる。時期は、出土遺物がなく不明であるが、北側に形状が類似した15世紀後半のＳＥ91井戸跡があることから、中世の項に含めておく。

ＳＥ150井戸跡(第25・38・75図、図版11)

《位置・確認状況》ＬＦ48、ＬＧ48に位置し、ＳＥ151井戸跡と隣接する。崩落の恐れがあるため、完掘していない。

《規模・形態》平面形は、長軸[1.24]ｍ(Ｎ－56°－Ｗ)、短軸[1.22]ｍの円形を呈す。確認面からの深さは1.84ｍまで確認した。底面は未確認である。壁は急に立ち上がる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》井戸枠材と考えられる加工材の出土もないことから、素掘りの井戸跡と推定される。時期は、出土遺物がなく不明であるが、隣接するＳＥ151井戸跡から出土した加工材の放射性炭素年代測定(暦年較正用)の結果、13世紀末～14世紀末の年代値が得らているため、中世の項に含めておく。

ＳＥ151井戸跡(第25・38・75図、図版11)

《位置・確認状況》ＬＦ47・48に位置し、ＳＥ150井戸跡と隣接する。第Ⅳ層地山上面で、灰オリーブ色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸[1.32]ｍ(Ｎ－81°－Ｗ)、短軸[1.10]ｍの円形を呈す。確認面からの深さは1.80ｍである。底面形は、長軸[0.33]ｍ、短軸0.56ｍの隅丸方形で、底面は平坦、壁は急に立ち上がる。

《埋土》５層に分けた。１～３・５層は第Ⅳ層地山土由来のグライ化した灰オリーブ・暗オリーブ灰色・暗緑灰色土を、第４層はグライ化した第Ⅲ層由来の暗オリーブ灰色土を基質とする。１層を除き混入物を多く含むことから、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》底面付近の５層から加工板材等が、また層位不明であるが、土師器甕１点9.0ｇや加工材が出土した。５層から出土した加工板材で放射性炭素年代測定を実施するとともに、それを図示した(第93図300)。

《所見・時期》断面形状や堆積状況から素掘りの井戸跡と考えられる。放射性炭素年代測定(暦年較正用)の結果、1291～1386calAD(１σ)の年代値が得られている。

ＳＥ153井戸跡(第24・38・75図、図版11)

《位置・確認状況》ＬＬ46・47に位置する。第Ⅳ層地山上面で、褐色・黄褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸[1.51]ｍ(Ｎ－16°－Ｗ)、短軸[1.38]ｍの円形を呈す。確認面からの深さは、0.86ｍである。底面形は、長軸[0.80]、短軸[0.80]ｍの隅丸方形で、底面は平坦、壁は東側では急に、西側ではやや緩やかに立ち上がる。堆積状況から、土坑として再利用された可能性がある。

《埋土》７層に分けた。１・４～７層土は、第Ⅳ層地山土由来の褐色・黄褐色土及びグライ化した暗灰黄色・オリーブ褐色土を、２層は第Ⅲ層土由来のグライ化した暗灰色土を基質とする。また、３層は黒泥状土である。１・２層は地山土塊を多く含むことから、人為的な埋め戻し土、３層は一時的な開口状態の際に流入した堆積土、４～７層は地山土塊や第Ⅲ層土由来の暗褐色土塊を多量に含むことから、井戸廃絶時の一括埋め戻し土と考えられる。また１～３層は堆積状況から、４・５層が大きく掘り込まれた後に土坑が構築され、それが廃絶された後の堆積土の可能性がある。

《出土遺物》埋土から、炭化した底板が１点出土した。

《所見・時期》遺跡内で検出された他の井戸跡と比較して、掘形が浅いことから、水溜として使用された可能性がある。堆積状況から井戸埋設後、土坑として再利用された可能性もある。時期は、出土

遺物がなく不明である。しかし、周囲に中世の遺構が確認されていることから、中世の項に含めておく。

ＳＥ211井戸跡(第23・38・76図、図版11)

《位置・確認状況》ＬＮ46・47、ＬＯ46に位置する。第Ⅳ層地山上面で、南側が調査区外へ続く黄褐色土の分布が確認された。ＳＤ200溝跡と重複して古い。

《規模・形態》南側が調査区外へ広がるため全体の形態は不明である。平面形は、長軸[3.26]ｍ(Ｎ－０°－Ｅ)、短軸2.30ｍの不整円形を呈する。確認面からの深さは1.35ｍである。底面形は、長軸1.18ｍ、短軸[1.08]ｍの略円形で、底面はやや凹凸、壁は急に立ち上がるが、途中平坦になり、再び急に立ち上がる。

《埋土》７層に分けた。２層は第Ⅲ層土由来のにぶい黄褐色土を、他は全て第Ⅳ層地山土由来の黄褐色・明黄褐色土を基質とする。それぞれ混入物を含むことから、全て人為的な埋め戻し土と考えられる。また、１・２層は堆積状況から、３層が大きく掘り込まれた後に土坑が構築され、それが廃絶された後の堆積土の可能性がある。

《出土遺物》埋土から、中国産白磁碗１点11.7ｇ、元豊通寶１点1.3ｇが出土し、それぞれ図示した(第93図301・302)。

《所見・時期》井戸枠材と思われる木材が出土していないことから、素掘りの井戸跡と考えられる。堆積状況から、井戸廃絶後に土坑として再利用された可能性がある。時期は、出土した中国産白磁碗から、12世紀後半の平安時代末～鎌倉時代初頭と推定される。

ＳＥ235井戸跡(第22・36・76図、図版11)

《位置・確認状況》ＭＡ49に位置する。第Ⅳ層地山上面で、褐色～黄灰色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.92ｍ(Ｎ－73°－Ｅ)、短軸0.87ｍの隅丸方形を呈す。確認面からの深さは1.93ｍである。底面形は長軸[0.64]ｍ、短軸[0.62]ｍの隅丸方形で、底面は平坦、壁は垂直に立ち上がる。

《埋土》11層に分けた。１・７・８・11層は第Ⅳ層地山土由来の褐色～黄灰色及びグライ化したオリーブ灰色土を、６層を除く他の埋土は第Ⅲ層土由来のグライ化した灰色・黄灰色・黒褐色・黒色土を基質とする。６層は焼土塊の堆積である。それぞれ混入物を含むが、４・５・10層は地山土塊を、８層は焼土粒を多く含み、９・11層には廃絶に伴う木屑が多量に含まれていたことから、１・２層は凹みが埋められた一括埋め戻し土、３層は凹レンズ状に堆積しているため自然流入による堆積土、４層以下は、井戸廃絶時の一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》８層から須恵器系陶器擂鉢１点270.1ｇ、11層から曲物側板や箸、楔、その他加工材や板材等の木製品が出土した。また層位不明であるが、８層出土と同一個体と思われる須恵器系陶器擂鉢１点143.0ｇや土師器甕１点3.2ｇ、須恵器甕２点113.0ｇ、椀形滓１点161.4ｇも出土した。このうち須恵器甕１点、須恵器系陶器擂鉢２点、加工板材１点、加工材１点、箸２点を図示した(第93・94図303～309)。また11層で出土した加工板材で放射性炭素年代測定を実施した。

《所見・時期》断面形状や堆積状況から素掘りの井戸跡と考えられる。11層から出土した加工板材の放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1325～1411calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。時期は、出土した須恵器系陶器擂鉢の年代から、15世紀前半の室町時代前半と推定される。

②カマド状遺構

ＳＯ01カマド状遺構(第25・77図、図版12)

《位置・確認状況》ＬＥ46、ＬＦ46に位置する。第Ⅳ層地山上面で、北西側で撹乱を受けた褐色土と焼土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸〈1.98〉m(Ｎ－98°－Ｅ)、燃焼部は天井部が残り、アーチ状にオーバーハングしている。径は現状における燃焼部の開口部が0.49m、最大値0.85m、焚口部で〈0.33〉mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.30mである。西側は焚き口部、東側は燃焼部である。焚き口部と燃焼部を結ぶ直線上より７°南に傾いて煙道が付設される。底面はやや平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《層序》６層に分けた。１層は６層焼土由来の天井部崩落土である。２・３層は第Ⅳ層地山土由来の褐色土を基質とする。２・３層は焼土粒を含むことから、カマド状遺構廃絶に伴う人為的な埋め戻し土と考えられる。２層は基本的に３層と性質は同じであるが、天井部崩落焼土をより多く含む。４層は炭化物層で、カマド状遺構使用時に形成されたと考えられ、廃絶時の状態を残す。５・６層は焼土で、使用時の被熱痕である。５層は強被熱範囲で、燃焼部及び煙道周辺で、また６層は弱被熱範囲で、５層周辺及び燃焼部・煙道底面で確認された

《出土遺物》２・３層から須恵器坏１点3.7ｇ、土師器甕２点50.8ｇが出土した。

《所見・時期》天井部が残存する地下式の構造である。埋土から平安時代の遺物が出土したが、形状や構造、ＳＯ36カマド状遺構における放射性炭素年代測定値を考慮して、中世の項に含めておく。

ＳＯ15カマド状遺構(第10・11・34・77図、図版12)

《位置・確認状況》ＭＴ55に位置する。第Ⅳ層地山上面で、南東側で撹乱を受け、南西側調査区外へ広がる褐色～にぶい黄褐色土と焼土の分布が確認された。Ｐ717と重複して古い。

《規模・形態》平面形は、長軸〈1.57〉m(Ｎ－140°－Ｗ)、径は現状における燃焼部の開口部が〈1.00〉m、最大値1.22mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.28mである。底面は平坦、壁はアーチ状に立ち上がる。燃焼部と焚き口部の区別が不明瞭で、煙道は長軸上にあるが、Ｐ717と重複し、さらに調査区外に続くため詳細は不明である。天井部は一部残存しているが、中央部が大きく削平されている。

《層序》４層に分けた。１層は、第Ⅳ層地山土由来の褐色～にぶい黄褐色土を基質とする。炭化物粒、焼土塊を含むことから、一部天井部崩落土を含んだ人為的な一括埋め戻し土と考えられる。２層は炭化物層で、カマド状遺構使用時に形成されたと考えられ、廃絶時の状態を残す。３・４層は焼土で、使用時の被熱痕である。３層は強被熱範囲で、燃焼部周辺、４層は弱被熱範囲で、３層周辺で確認された。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》天井部が部分的に残存する地下式の構造である。時期は、出土遺物がなく不明であるが、前述の通り中世の項に含めておく。

ＳＯ19カマド状遺構(第10・34・77図、図版12)

《位置・確認状況》ＭＴ55に位置する。第Ⅳ層地山上面で、暗褐色・褐色土と焼土の分布が確認された。Ｐ363・397・404・405と重複して古い。

《規模・形態》平面形は、長軸1.59m（N－169°－W）、径[0.98]mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.17mである。燃焼部と焚き口部の区別が不明瞭で、煙道は長軸線上に位置する。底面は平坦、壁は緩やかに立ち上がる。天井部は残存していない。

《層序》５層に分けた。１層は第Ⅲ層土由来の暗褐色土を、２層は第Ⅳ層地山土由来の褐色土を基質とする。それぞれ炭化物塊、焼土塊を含むことから、カマド状遺構廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。３層は炭化物層で、カマド状遺構使用時に形成されたと考えられ、廃絶時の状態を残す。４・５層は焼土で、使用時の被熱痕である。４層は強被熱範囲であり、確認面にて燃焼部北東側の一部に、また５層は弱被熱範囲で、燃焼部周辺で確認された。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》上部は大きく削平を受け、天井部が残存していない。地下式、半地下式どちらの可能性もあるが、詳細は不明である。時期は、出土遺物がなく不明であるが、前述の通り中世の項に含めておく。

ＳＯ28カマド状遺構（第10・34・77図、図版12）

《位置・確認状況》ＭＳ55に位置する。第Ⅳ層地山上面で、にぶい黄褐色土と焼土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸1.77m（N－124°－E）、径1.16m、最大径1.19mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは、0.45mである。燃焼部と焚き口部の区別は不明瞭で、煙道は長軸線上に位置する。底面はやや鍋底状で、壁は煙道では緩やかに、焚き口部では急に立ち上がる。天井部は残存していない。

《層序》５層に分けた。１・２層は第Ⅳ層地山土由来のにぶい黄褐色土を基質とする。それぞれ炭化物粒・塊、焼土粒・塊を含む。これは一部天井崩落土を含むが、基本的にはカマド状遺構廃絶に伴う人為的な埋め戻し土と考えられる。３層は炭化物層で、カマド状遺構使用時に形成されたと考えられ、廃絶時の状態を残す。４・５層は焼土で、使用時の被熱痕である。４層は強被熱範囲で、燃焼部周辺の確認面で、また５層は弱被熱範囲で、４層周辺で確認された。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》上部は大きく削平を受け、天井部が残存していない。よって地下式、半地下式どちらの可能性もあるが、詳細は不明である。時期は、出土遺物がなく不明であるが、前述の通り中世の項に含めておく。

ＳＯ36カマド状遺構（第15・35・78図、図版12）

《位置・確認状況》ＭＧ54、ＭＨ54に位置する。第Ⅲ層上面で、暗褐色土と焼土の分布が確認された。Ｐ572と重複して古い。

《規模・形態》平面形は、長軸〈1.32〉m（N－25°－E）、径は燃焼部0.86m、焚き口部0.56mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは、0.20mである。南西側に焚き口部、北東側に燃焼部がある。煙道は検出されていない。底面は鍋底状で、壁は緩やかに立ち上がるが、焚き口部側は、Ｐ572との重複により不明である。

《層序》５層に分けた。それぞれ１層は第Ⅲ層土由来の暗褐色土を、２層は第Ⅳ層地山土由来の褐色土を基質とする。１・２層ともに、地山土塊、炭化物粒、焼土粒・塊を含むことから、カマド状遺構廃絶時による、一部天井崩落土を含んだ人為的な一括埋め戻し土と考えられる。３層は炭化物層で、

カマド状遺構使用時に形成されたと考えられ、廃絶時の状態を残す。４・５層は焼土で、使用時の被熱痕である。４層は強被熱範囲で、燃焼部及び３層下で、５層は弱被熱範囲で燃焼部底面で確認された。

《出土遺物》なし。３層から出土した炭化物で放射性炭素年代測定を実施した。

《所見・時期》煙道は検出されなかったが、後世の掘削により消失した可能性がある。また、天井部が残存していないことから、地下式、半地下式どちらの可能性も考えられるが、詳細は不明である。時期は、出土した炭化物の放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1453～1616calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。

ＳＯ40カマド状遺構(第15・35・78図、図版12)

《位置・確認状況》ＭＪ53・54、ＭＫ53・54に位置する。第Ⅲ層上面で、南東側で撹乱を受けた暗褐色土と焼土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸〈2.16〉m(Ｎ－131°－Ｅ)、径は燃焼部1.02m、焚き口部0.43mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.15mである。燃焼部と焚き口部を結ぶ中軸線上に煙道が付設される。底面は平坦で、焚き口部側は緩やかに立ち上がる。煙道側も平坦であるが、撹乱のため不明である。天井部は残存していない。

《層序》５層に分けた。１・２・３層は第Ⅲ層土由来の暗褐色土を基質とする。１層は地山土粒、炭化物粒、焼土粒を含むことから、カマド状構廃絶に伴う人為的な埋め戻し土と考えられる。２層も、基本的には１層と性質は同じであるが、天井部崩落焼土を多く含む。３層は炭化物粒を多く含むことから、カマド状遺構使用時に形成されたものと考えられ、廃絶時の状態を残す。４・５層は焼土で、使用時の被熱痕である。４層は強被熱範囲で、燃焼部及び煙道周辺で、また５層は弱被熱範囲で、４層周辺及び燃焼部や煙道底面で確認された。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》煙り出しが欠損し、天井部も残存していないことから、大きく削平を受けたと考えられる。よって地下式、半地下式どちらの可能性も考えられるが、詳細は不明である。時期は、出土遺物がなく不明であるが、前述の通り中世の項に含めておく。

ＳＯ41カマド状遺構(第15・35・78図、図版12)

《位置・確認状況》ＭＧ55に位置する。第Ⅲ層上面で、北側及び東側で撹乱を、上部は削平を受けた褐色土と焼土の分布が確認された。Ｐ604と重複して古い。

《規模・形態》平面形は、長軸〈1.80〉m(Ｎ－26°－Ｅ)、燃焼部と焚き口部の区別は不明瞭で、径は〈0.71〉mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.23mである。北西側に焚き口、南東側に燃焼部があると考えられる。煙道は撹乱を受け欠損している。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。天井部は残存していない。

《層序》３層に分けた。１層は第Ⅳ層地山土由来の褐色土を基質とする。炭化物を比較的多く含むことから、カマド状遺構使用時に形成された炭化物の上に、人為的な埋め戻し土が混ざったものと考えられる。２・３層は焼土で、使用時の被熱痕である。２層は強被熱範囲で確認面で、また３層は弱被熱範囲で、２層周辺及び底部で確認された。

《出土遺物》１層から、釘と思われる鉄製品１点10.0ｇが出土した。

《所見・時期》天井部が残存していない。よって地下式、半地下式どちらの可能性も考えられるが、詳細は不明である。時期は、出土遺物がなく不明であるが、前述の通り中世の項に含めておく。

ＳＯ50カマド状遺構(第19・36・78図、図版12)

《位置・確認状況》ＭＦ48に位置する。第Ⅲ層・第Ⅳ層地山上面で、南側が調査区外へ続く褐色土と炭化物の分布が確認された。

《規模・形態》燃焼部は調査区外へ続くため、Ｃ－Ｄでの土層断面のみの確認である。平面形は、長軸1.42m(Ｎ－173°－Ｅ)、径は燃焼部0.80m、焚き口部〈0.72〉mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.54mである。底面は鍋底状、焚き口部へは緩やかに立ち上がる。天井部は残存していない。

《層序》５層に分けた。１・３層は第Ⅳ層地山土由来の褐色土を基質とする。１層は焼土粒を含むことから、カマド状遺構廃絶に伴う人為的な埋め戻し土と考えられる。２・４層は炭化物層で、カマド状遺構使用時に形成されたものと、３層は炭化物塊、焼土粒を含むため、１層同様人為的な埋め戻し土と考えられる。５層は焼土で、使用時の被熱痕で、燃焼部周辺で確認された。また焚き口部では、第Ⅳ層地山土由来の堆積土である１・３層と炭化物層である２・４層が交互に重なっていたことから、大きく２時期の操業が考えられる。当初の使用で形成された炭化物の上に地山土が盛られて、焚き口部が平坦に整形され、再使用されたと考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》大きく２時期の操業が堆積状況から推定される。天井部は後世の削平を受けて消失したと考えられ、地下式、半地下式どちらの可能性もあるが、詳細は不明である。時期は、出土遺物がなく不明であるが、前述の通り中世の項に含めておく。

ＳＯ54カマド状遺構(第19・36・79図、図版13)

《位置・確認状況》ＭＤ48、ＭＥ48に位置する。第Ⅳ層地山上面で、南東側の一部で撹乱を受け欠損した褐色土と焼土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸2.00m(Ｎ－36°－Ｅ)である。径は燃焼部1.04m、焚き口部0.71mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.29mである。焚き口部と燃焼部を結ぶ中軸線上から５°北に傾いて煙道が付設される。底面はやや平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。天井部は残存していない。

《層序》６層に分けた。１・３層は第Ⅳ層地山土由来の褐色土を基質とする。１層は炭化物粒、焼土粒・塊を含むことから、カマド状遺構廃絶時の人為的な一括埋め戻し土と考えられる。２層は天井部の崩落焼土に地山土が混じる。３層は炭化物粒、焼土粒を含むが、焼土粒の量がやや多めであることから、廃絶後の自然流入による堆積土と考えられる。４層は炭化物層で、カマド状構使用時に形成されたと考えられ、廃絶時の状態を残す。５・６層は焼土で、使用時の被熱痕である。５層は強被熱範囲で、燃焼部及び煙道周辺で、また６層は弱被熱範囲で、５層周辺で確認された。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》天井部が残存していない。地下式、半地下式どちらの可能性もあるが、詳細は不明である。時期は、出土遺物がなく不明であるが、前述の通り中世の項に含めておく。

ＳＯ56カマド状遺構(第19・36・79図、図版13)

《位置・確認状況》ＭＤ50に位置する。第Ⅳ層地山上面で、褐色土と焼土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸1.23m(Ｎ－145°－Ｗ)、径0.61mの不整楕円形を呈す。確認面からの深

さは0.14ｍである。焚き口部と燃焼部の位置関係は不明瞭であるが、被熱状況から、北東側に焚き口、南西側に燃焼部があると考えられる。煙道は確認されていない。上部が削平され消失した可能性がある。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。天井部は残存していない。

《層序》４層に分けた。１層は第Ⅳ層地山土由来の褐色土を基質とする。地山土粒、炭化物粒、焼土粒を含むことから、一部天井の崩落を含むが、基本的にはカマド状遺構廃絶時の人為的な一括埋め戻し土と考えられる。２層は炭化物層で、カマド状遺構使用時に形成されたと考えられ、廃絶時の状態を残す。３・４層は焼土で、使用時の被熱痕である。３層は強被熱範囲で、燃焼部周辺で、また４層は弱被熱範囲で、３層周辺及び燃焼部底面で確認された。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》天井部が残存していない。上部が削平された可能性がある。地下式、半地下式どちらの可能性も考えられるが、詳細は不明である。時期は、出土遺物がなく不明であるが、前述の通り中世の項に含めておく。

ＳＯ79カマド状遺構（第19・36・79図、図版13）

《位置・確認状況》ＭＤ48に位置する。第Ⅳ層地山上面で、南側で撹乱を受けた暗褐色土と焼土の分布が確認された。Ｐ864と重複して古い。

《規模・形態》平面形は、長軸〈0.96〉ｍ（Ｎ－68°－Ｅ）、径は0.74ｍの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは、0.16ｍである。焚き口部と燃焼部は不明瞭であるが、被熱痕や炭化物の分布から、南西側が焚き口、北東側が燃焼部と考えられる。煙道は確認されていない。撹乱を受け消失した可能性もある。また天井部も確認されていない。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《層序》４層に分けた。１層は、第Ⅲ層土由来の暗褐色土を基質とする。混入物を含むことから、カマド状遺構廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。２層は炭化物層で、カマド状遺構使用時に形成されたと考えられ、廃絶時の状態を残す。３・４層は焼土で、使用時の被熱痕である。３層は強被熱範囲で、確認面で一部が、また４層は弱被熱範囲で、燃焼部底面でそれぞれ確認された。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》天井部が残存していない。上部が削平され消失した可能性がある。地下式、半地下式どちらの可能性も考えられるが、詳細は不明である。時期は、出土遺物がなく不明であるが、前述の通り中世の項に含めておく。

ＳＯ80カマド状遺構（第18・36・79図、図版13）

《位置・確認状況》ＭＢ52・53に位置する。第Ⅳ層地山上面で、南東側で撹乱を受けた、にぶい黄褐色～灰黄褐色土と焼土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は〈1.75〉ｍ（Ｎ－117°－Ｅ）、径は燃焼部で0.80ｍ、焚き口部では0.51ｍの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは、0.24ｍである。北西側に焚き口、南東側に燃焼部がある。煙道は確認していない。撹乱を受け消失した可能性がある。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。天井部は残存していない。

《層序》４層に分けた。１層は第Ⅳ層地山土由来で一部グライ化したにぶい黄褐色～灰黄褐色土を基質とする。混入物はないが、カマド状遺構廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。２層は炭化物層で、カマド状遺構使用時に形成されたものと考えられることから、廃絶時の状態を残す。

３・４層は焼土で、使用時の被熱痕である。３層は強被熱範囲で、燃焼部で、また４層は弱被熱範囲で、３層周辺で確認された。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》天井部が残存していない。上部が削平され消失した可能性がある。地下式、半地下式どちらの可能性もあるが、詳細は不明である。時期は、出土遺物がなく不明であるが、前述の通り中世の項に含めておく。

ＳＯ81カマド状遺構（第17・36・80図、図版13）

《位置・確認状況》ＭＣ55・56に位置する。第Ⅳ層地山上面で、褐色～灰黄褐色土と焼土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸2.51ｍ（Ｎ－162°－Ｗ）、径は現状における燃焼部の開口部が0.62ｍ、最大径0.91ｍ、焚き口部0.78ｍの不整楕円形で、確認面からの深さは、0.31ｍである。北東側に焚き口、南西側に燃焼部がある。焚き口と燃焼部を結ぶ中軸線上から、５°西に傾いて煙道が付設される。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がるが、煙道、焚き口部では垂直に立ち上がる。焚き口部からヒトの焼骨片が出土し、火葬墓と重複していた可能性があるが、調査時に明確な重複関係は確認されなかった。

《層序》５層に分けた。１層は第Ⅳ層地山土由来の褐色～灰黄褐色土を基質とする。焼土粒・塊を含むことから、カマド状遺構廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。２層は崩落焼土で、天井部である４層の一部が崩落したものと考えられる。３層は炭化物層で、カマド状遺構使用時に形成されたと考えられ、廃絶時の状態を土層断面から想像できるが、本遺構北東側の一部でヒトの焼骨片が出土していた。このため北東側に火葬墓があった可能性がある。４・５層は焼土で、カマド状遺構使用時の被熱痕である。４層は強被熱範囲で、燃焼部周辺で、また５層は弱被熱範囲で、燃焼部底面で確認された。また１層と天井部である４層は、上部がかなり削平されているため、明確に地山が掘り込まれている様子は確認されていない。

《出土遺物》１層から肥前波佐見産磁器皿１点6.2ｇが、３層から火葬墓に由来するヒトの焼骨片39.4ｇが出土した。また埋土から出土した炭化物で放射性炭素年代測定を実施した。

《所見・時期》天井部が残存しているため、地下式のカマド状遺構と、それによって破壊された火葬墓が不明瞭に重複していたと考えられる。埋土中から出土した炭化物の放射性炭素年代測定（暦年較正年代）の結果、1045～1158calＡＤ（１σ）の年代値が得られている。しかしこの数値は、他のカマド状遺構で得られた年代値より極端に古い。よって、この炭素年代測定の試料である炭化物は火葬墓に起因すると思われる。カマド状遺構としての時期は、１層から17世紀後半の肥前磁器皿が出土したが、後世に混入したと考えられ、前述の通り中世の項に含めておく。

ＳＯ82カマド状遺構（第17・18・36・80図、図版13）

《位置・確認状況》ＭＤ55に位置する。第Ⅳ層地山上面で、木の根による撹乱を受けた、褐色土と焼土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸〈2.50〉ｍ（Ｎ－13°－Ｅ）、燃焼部はオーバーハングし、径は現状における燃焼部の開口部が0.52ｍ、最大径1.04ｍ、焚き口部では0.60ｍの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.63ｍである。南側に焚き口、北側に燃焼部がある。焚き口部、燃焼部の中軸線上から11°西に傾

いて煙道が付設される。底面は比較的平坦で、壁は北側では緩やかに立ち上がる。南側の焚き口部では明確な掘り込みは確認されていない。

《層序》７層に分けた。１・２・３層は、第Ⅳ層地山土由来の褐色土及びグライ化したオリーブ灰色・灰黄褐色土をそれぞれ基質とする。１・２層はカマド状遺構廃絶後の人為的な埋め戻し土で、焼土や炭化物を含んでいる。３層は天井部の崩落土である。４層は第Ⅲ層土由来の黒褐色土で、焼土粒を多量に含むことから、廃絶直後、煙道へ流れ込んだ土に天井の崩落焼土が混ざったと考えられる。５層は炭化物層で、カマド状遺構使用時に形成されたと考えられ、廃絶時の状態を残す。６層は強被熱範囲で、燃焼部で、また７層は弱被熱範囲で、煙道底面で確認された。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》天井部の残りが良好な地下式構造である。時期は、出土遺物がなく不明だが、前述の通り中世の項に含めておく。

ＳＯ83カマド状遺構(第17・18・36・80図、図版13)

《位置・確認状況》ＭＣ54に位置する。第Ⅳ層地山上面で、北西側で撹乱を受けた、灰黄褐色土と焼土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸〈1.00〉ｍ(Ｎ－133°－Ｅ)、燃焼部では一部オーバーハングし、径は現状における燃焼部の開口部が0.82ｍ、最大径〈0.86〉ｍ、焚き口部では(0.41)ｍの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.32ｍである。北西側に焚き口、南東側に燃焼部がある。焚き口と燃焼部を結ぶ中軸線上から33°東に傾いて煙道が付設される。底面はやや鍋底状で、壁は緩やかに立ち上がるが、煙り出し、焚き口部で急に立ち上がる。天井部は残存していない。

《層序》４層に分けた。１層は第Ⅳ層地山土由来のグライ化した灰黄褐色土を基質とする。焼土塊を含むことから、カマド状遺構廃絶に伴う人為的な埋め戻し土と考えられる。２層は炭化物層で、カマド状遺構使用時に形成されたものと考えられることから、廃絶時の状態を残す。３層は強被熱範囲で、燃焼部及び煙道で、また４層は弱被熱範囲で、３層周辺で確認された。

《出土遺物》埋土から須恵器系陶器鉢１点11.9ｇが出土し、それを図示した(第94図310)。

《所見・時期》天井部が残存していない。上部が削平され消失した可能性がある。そのため地下式、半地下式どちらの可能性も考えられるが、詳細は不明である。時期は、出土遺物から13世紀末～14世紀初頭の鎌倉時代後期に推定される。

ＳＯ84カマド状遺構(第18・36・81図、図版14)

《位置・確認状況》ＭＤ54に位置する。第Ⅳ層地山上面で、褐色土と焼土の分布が確認された。当初はＳＴ97火葬墓と重複する状態は確認されず、ＳＯ84カマド状遺構の調査中にＳＴ97火葬墓と重複していると判明した。ＳＴ97と重複して新しい。

《規模・形態》平面形は、長軸1.82ｍ(Ｎ－155°－Ｅ)、燃焼部では一部オーバーハングし、径は現状における燃焼部の開口部が0.82ｍ、最大径0.84ｍ、焚き口部では(0.26)ｍの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは、0.29ｍである。南西側に焚き口、北東側に燃焼部がある。焚き口と燃焼部を結ぶ中軸線上に煙道が付設される。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がるが、煙り出し、灰掻き出し口では急に立ち上がる。底面は他のカマド状遺構と比べ被熱が弱い。

《層序》５層に分けた。１・３層は第Ⅳ層地山土由来の褐色・にぶい黄褐色土を基質とする。１・３

層は炭化物粒、焼土粒・塊を含むことから、カマド状遺構廃絶に伴う人為的な埋め戻し土、２層は天井部の崩落焼土である。４層は炭化物層で、カマド状遺構使用時に形成されたと考えられ、廃絶時の状態を残す。５層は弱被熱範囲で、検出時に燃焼部周辺で確認された。

《出土遺物》１層から近代磁器碗１点2.7ｇが出土した。

《所見・時期》天井部が残存していない。上部が削平され消失した可能性がある。そのため地下式、半地下式どちらの可能性もあるが、詳細は不明である。１層から近代の遺物が出土したが、後世に混入したと考えられる。本遺構と重複して古いＳＴ97火葬墓の放射性炭素年代測定の結果、1223～1258calAD(１σ)の年代値が得られている。よって前述の通り、中世の項に含めておく。

ＳＯ87カマド状遺構(第19・36・81図、図版14)

《位置・確認状況》ＭＣ50、ＭＤ50に位置する。第Ⅳ層地山上面で、南半分を確認調査時のトレンチとの重複により欠損した、暗褐色土と焼土の分布が確認された。

《規模・形態》長軸〈1.69〉ｍ(Ｎ－122°－Ｅ)、燃焼部は一部オーバーハングし、径は現状における燃焼部の開口部が〈0.46〉ｍ、最大径〈0.58〉ｍ、焚き口部〈0.23〉ｍ、最大径[0.28]ｍの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは、0.35ｍである。北西側に焚き口、南東側に燃焼部がある。焚き口と燃焼部を結ぶ中軸線上から40°北に傾いて煙道が付設される。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。天井部は北側のみ残存している。

《層序》７層に分けた。１～４層は第Ⅲ層土由来の暗褐色土を基質とする。１層は焼土塊を多く含むことから、カマド状遺構廃絶後の天井崩落土を含んでいた。４層も同様に焼土塊を多く含むことから、煙道天井部や燃焼部周辺の焼土の流れ込みと考えられる。２・３層は、地山土粒・焼土粒・炭化物を含むことから人為的な一括埋め戻し土と考えられる。２層は１層崩落以前に煙道に投げ込まれたと考えられる。５層は炭化物層で、カマド状遺構使用時に形成されたと考えられ、廃絶時の状態を残す。６・７層は焼土で、使用時の被熱痕である。６層は強被熱範囲で、確認面にて燃焼部周辺で、また７層は弱被熱範囲で、６層周辺及び燃焼部・煙道底部で確認された。

《出土遺物》埋土から、土師器甕１点9.3ｇ、肥前磁器碗１点0.9ｇが出土した。

《所見・時期》天井部が残る地下式構造である。時期は、埋土から平安時代及び近世の遺物が出土したが、これらは後世に混入したものと考えられ、前述の通り中世の項に含めておく。

ＳＯ152カマド状遺構(第24・25・38・81図、図版14)

《位置・確認状況》ＬＨ47に位置する。第Ⅲ層及び第Ⅳ層地山上面で、確認調査時のトレンチ壁面及び確認面精査中、一部撹乱を受けた暗褐色土と焼土の分布が確認された。確認調査時のトレンチにより、南東側は消失している。

《規模・形態》平面形は、長軸〈1.24〉ｍ(Ｎ－140°－Ｅ)、径は燃焼部〈0.72〉ｍ、焚き口部〈0.52〉ｍの不整形を呈す。確認面からの深さは0.33ｍである。北東側が焚き口部、南西側が燃焼部である。煙道は、削平されて消失している。底面は平坦で、燃焼部側では緩やかに立ち上がる。天井部は残存していない。

《層序》５層に分けた。１・２層は第Ⅲ層土由来の暗褐色・黒褐色土を基質とする。１・２層は、焼土粒・塊を含むことから、カマド状遺構廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。３層は炭化物層で、カマド状遺構使用時に形成されたと考えられ、廃絶時の状態を残し、使用時の燃焼部底部

から掻き出された焼土塊を含んでいる。４・５層は焼土で、使用時の被熱痕である。４層は強被熱範囲で、燃焼部周辺で、また５層は弱被熱範囲で、４層周辺及び燃焼部底面で確認された。

《出土遺物》埋土から土師器器種不明１点1.5ｇが出土した。

《所見・時期》天井部が残存していない。上部が削平され消失した可能性がある。そのため地下式、半地下式どちらの可能性も考えられるが、詳細は不明である。時期は、平安時代の遺物が出土したが、後世に混入したと考えられ、前述の通り中世の項に含めておく。

ＳＯ156カマド状遺構(第24・38・81図、図版14)

《位置・確認状況》ＬＫ47、ＬＬ47に位置する。第Ⅳ層地山上面で、北側で大きく削平された、灰オリーブ色～オリーブ褐色土と焼土の分布が確認された。Ｐ1507と重複して古い。

《規模・形態》平面形は、長軸2.41ｍ(Ｎ－160°－Ｗ)、径は現状における燃焼部の開口部が0.52ｍ、最大値0.59ｍ、焚き口部は0.82ｍの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.36ｍである。北東側が焚き口、南西側が燃焼部で、焚き口と燃焼部を結ぶ中軸線上より14°南に傾いて煙道が付設される。底面はやや平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。天井部は残存していない。

《層序》８層に分けた。１～３・６層は第Ⅳ層地山土由来のグライ化した灰オリーブ色・オリーブ褐色・暗オリーブ色土を基質とする。１・２層は、それぞれ地山土塊、炭化物粒・塊、焼土粒・塊を含むことから、カマド状遺構廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。３層は天井部崩落土である。６層はカマド状遺構使用時に、炭化物や灰等を掻き出す際にできた凹みへの堆積土で、掻き出し作業によって出た焼土塊が含まれていた。４・５層は、炭化物層で使用時に堆積したと考えられ、廃絶時の状態を残す。７・８層は焼土で、使用時の被熱痕である。７層は強被熱範囲で、燃焼部周辺及ぶ底面で、また８層は弱被熱範囲で、７層周辺で確認された。

《出土遺物》埋土から土師器甕１点7.9ｇが出土した。

《所見・時期》天井部が残存していない。上部が削平され消失した可能性がある。そのため地下式、半地下式どちらの可能性も考えられるが、詳細は不明である。時期は、平安時代の遺物が出土したが、後世に混入したと考えられ、前述の通り中世の項に含めておく。

ＳＯ165カマド状遺構(第20・37・82図、図版14)

《位置・確認状況》ＬＳ54に位置する。第Ⅳ層地山上面で、灰オリーブ色土と焼土の分布が確認された。ＳＢ308掘立柱建物跡Ｐ８と重複して古い。

《規模・形態》平面形は、長軸1.81ｍ(Ｎ－19°－Ｅ)、燃焼部の掘り込みはオーバーハングしているため、径は現状における燃焼部の開口部が0.72ｍ、最大径0.86ｍ、焚き口部では0.68ｍの不整形を呈す。確認面からの深さは0.28ｍである。南西側に焚き口部、北東側に燃焼部がある。焚き口と燃焼部を結ぶ中軸線上から９°北に傾いて煙道が付設される。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《層序》埋土は５層に分けた。１・２層は第Ⅳ層地山土由来のグライ化した灰オリーブ色土を基質とする。炭化物粒、焼土粒を含むことから、カマド状遺構廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。３層は炭化物層で、カマド状遺構使用時に形成されと考えられ、廃絶時の状態を残す。４・５層は焼土で、使用時の被熱痕である。４層は強被熱範囲で、燃焼部周辺で、また５層は弱被熱範囲で、燃焼部周辺や底面及び煙道底部で確認された。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》天井部が残存していない。上部が削平され消失した可能性がある。そのため地下式、半地下式どちらの可能性も考えられるが、詳細は不明である。時期は、出土遺物がなく不明であるが、前述の通り中世の項に含めておく。

ＳＯ166カマド状遺構(第20・21・37・82図、図版14)

《位置・確認状況》ＬＳ53、ＬＴ53に位置する。第Ⅳ層地山上面で、オリーブ褐色・暗褐色土と焼土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸2.38ｍ(Ｎ－122°－Ｅ)、燃焼部の掘り込みは天井部が残存し、オーバーハングしているため、径は現状における燃焼部の開口部が0.57ｍ、最大径0.95ｍ、焚き口部では1.20ｍの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.47ｍである。南東側に焚き口、北西側に燃焼部がある。焚き口と燃焼部を結ぶ中軸線上から16°北に傾いて煙道が付設される。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《層序》５層に分けた。１層は第Ⅳ層地山土由来のグライ化したオリーブ褐色土、２層は第Ⅲ層土由来の暗褐色土を基質とする。１・２層ともに炭化物粒・焼土粒を含むことから、カマド状遺構廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。３層は炭化物層で、カマド状遺構使用時に形成されたと考えられ、廃絶時の状態を残す。４・５層は焼土で、使用時の被熱痕である。４層は強被熱範囲で、燃焼部及び煙道周辺で、また５層は弱被熱範囲で、燃焼部周辺や煙出し及び煙道底面で確認された。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》天井部が残存する地下式である。時期は、出土遺物がなく不明であるが、前述の通り中世の項に含めておく。

ＳＯ168カマド状遺構(第20・37・82図、図版14・15)

《位置・確認状況》ＬＳ54、ＬＴ54に位置する。第Ⅳ層地山上面で、オリーブ褐色～灰オリーブ色と焼土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸2.13ｍ(Ｎ－103°－Ｅ)、燃焼部の掘り込みは天井部が残存し、オーバーハングしているため、径は現状における燃焼部の開口部が0.49ｍ、最大径0.71ｍ、焚き口部では0.60ｍの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.43ｍである。北西側に焚き口、南東側に燃焼部がある。焚き口、燃焼部の中軸線上に煙道が付設される。底面は比較的平坦で、壁は焚き口部では緩やかに、煙道では急に立ち上がる。

《層序》６層に分けた。１・２層は第Ⅳ層地山土由来のグライ化したオリーブ褐色・灰オリーブ色土を基質とし、地山土粒・塊を含むことから、カマド状遺構廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。３層は天井部の崩落焼土である。４層は炭化物層で、カマド状遺構使用時に形成されたと考えられ、廃絶時の状態を残す。５・６層は焼土で、使用時の被熱痕である。５層は強被熱範囲で、燃焼部よび煙道周辺で、また５層は弱被熱範囲で、５層周辺の燃焼部や煙道周辺で確認された。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》天井部が残存する地下式である。時期は、出土遺物がなく不明であるが、前述の通り中世の項に含めておく。

ＳＯ169カマド状遺構(第20・37・82図、図版14・15)

《位置・確認状況》ＬＲ55に位置する。第Ⅳ層地山上面で、中央部の南側、北側でそれぞれ撹乱を受け欠損した、灰オリーブ色土と焼土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸2.62m(Ｎ－63°－Ｗ)、燃焼部の掘り込みは天井部が残存し、オーバーハングしているため、径は現状における燃焼部の開口部が0.76m、最大径0.86m、焚き口部では0.84mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.38mである。南東側に焚き口、北西側に燃焼部がある。焚き口と燃焼部を結ぶ中軸線上から南に８°傾いて煙道が付設される。底面は平坦で、壁は緩やかに、途中から急に立ち上がる。

《層序》５層に分けた。１・２層は第Ⅳ層地山土由来のグライ化した灰オリーブ色土・オリーブ黒色土を基質とする。それぞれ炭化物粒、焼土塊を含むことから、カマド状遺構廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。３層は炭化物層で、カマド状遺構使用時に形成されたと考えられ、廃絶時の状態を残す。４・５層は焼土で、使用時の被熱痕である。４層は強被熱範囲で、検出時に燃焼部周辺で、また５層は弱被熱範囲で、４層燃焼部周辺や底面及び煙道で確認された。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》天井部が残存する地下式である。時期は出土遺物がなく不明であるが、前述の通り中世の項に含めておく。

ＳＯ204カマド状遺構(第20・37・83図、図版15)

《位置・確認状況》ＬＲ53・54、ＬＳ53・54に位置する。第Ⅳ層地山上面で、暗オリーブ褐色土と焼土の分布が確認された。ＳＫＩ171竪穴建物跡と重複して古い。

《規模・形態》長軸〈1.74〉m(Ｎ－115°－Ｅ)、径は燃焼部0.82m、焚き口部では0.43mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.45mである。北西側に焚き口、南東側に燃焼部がある。煙道はＳＫＩ171竪穴建物跡との重複により欠損している。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がるが、煙道側は消失しているため不明である。天井部は残存していない。

《層序》４層に分けた。１層は第Ⅳ層地山土由来がグライ化した暗オリーブ褐色土を基質とし、地山土塊・炭化物粒・焼土粒を含むことから、カマド状遺構廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。２層は炭化物層で、カマド状遺構使用時に形成されたと考えられ、廃絶時の状態を残すが、他のカマド状遺構に比べ、焚き口部での炭化物の残存状況が悪いことから、廃絶以前の段階で多量に掻き出されたと考えられる。３・４層は焼土で、使用時の被熱痕である。３層は強被熱範囲で、燃焼部周辺で、また４層は弱被熱範囲で、３層周辺や燃焼部底面で確認された。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》天井部が残存していない。上部が削平され消失した可能性がある。そのため地下式、半地下式どちらの可能性も考えられるが、詳細は不明である。時期は、出土遺物がなく不明であるが、前述の通り中世の項に含めておく。

ＳＯ205カマド状遺構(第20・37・83図、図版14・15)

《位置・確認状況》ＬＲ54・55、ＬＳ54に位置する。第Ⅳ層地山上面で、中央部で撹乱を受けた灰オリーブ色と焼土の分布が確認された。ＳＯ206カマド状遺構、ＳＢ308掘立柱建物跡Ｐ10と重複し、ＳＯ206カマド状遺構より新しく、ＳＢ308掘立柱建物跡Ｐ10より古い。

《規模・形態》平面形は、長軸2.48ｍ(Ｎ－40°－Ｅ)、径は燃焼部[0.73]ｍ、焚き口部では0.63ｍの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.28ｍである。南西側に焚き口、北東側に燃焼部がある。焚き口と燃焼部を結ぶ中軸線上から７°東に傾いて煙道が付設される。底面は平坦、壁は緩やかに立ち上がる。

《層序》６層に分けた。１～３層は第Ⅳ層地山土由来でグライ化し灰オリーブ色・にぶい褐色土を基質とし、それぞれ１・３層は炭化物粒、焼土粒・塊、２層は地山土粒を含むことから、カマド状遺構廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。４層は炭化物層で、カマド状遺構使用時に形成されたと考えられ、廃絶時の状態を残す。５・６層は焼土で、使用時の被熱痕である。５層は強被熱範囲で、燃焼部周辺で、また６層は弱被熱範囲で、燃焼部周辺や煙り出し底部で確認された。

《出土遺物》なし。底部から出土した炭化物で、放射性炭素年代測定を実施した。

《所見・時期》天井部が残存していない。上部が削平され消失した可能性がある。そのため地下式、半地下式どちらの可能性も考えられるが、詳細は不明である。時期は、出土遺物がなく不明であるが、本遺構と重複して古いＳＯ206カマド状遺構の放射性炭素年代測定の結果、14世紀中葉～15世紀第１四半期の年代値が得られていることから、本遺構もそれに近い時期と推定され、中世の項に含めておく。

ＳＯ206カマド状遺構(第20・37・83図、図版14・15)

《位置・確認状況》ＬＳ54に位置する。第Ⅳ層地山上面で、一部撹乱を受けたにぶい黄褐色土と焼土の分布が確認された。ＳＯ205カマド状遺構、ＳＢ308掘立柱建物跡Ｐ５と重複して古い。

《規模・形態》平面形は、長軸2.25ｍ(Ｎ－28°－Ｅ)、燃焼部の掘り込みは天井部が残存し、オーバーハングしているため、径は現状における燃焼部の開口部0.71ｍ、最大径0.74ｍ、焚き口部0.62ｍの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.24ｍである。南西側に焚き口、北東側に燃焼部がある。焚き口、燃焼部を結ぶ中軸線上から６°北に傾いて煙道が付設される。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がるが、煙道は撹乱を受けているため不明である。

《層序》５層に分けた。１・２層は第Ⅳ層地山土由来で、１層はにぶい黄褐色土を、２層はグライ化した青灰色土を基質とする。１層は地山土粒、炭化物粒を、２層は焼土粒をそれぞれ含むことから、カマド状遺構廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。３層は炭化物層で、カマド状遺構使用時に形成されと考えられ、廃絶時の状態を残す。４・５層は焼土で、使用時の被熱痕である。４層は強被熱範囲で、燃焼部周辺で、また５層は弱被熱範囲で、燃焼部周辺や煙道底面で確認された。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》天井部が残存する地下式構造である。底部から出土した炭化物の放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1331～1422calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。

ＳＯ207カマド状遺構(第20・37・83図、図版14・15)

《位置・確認状況》ＬＲ55・56、ＬＳ55・56に位置する。第Ⅳ層地山上面で、にぶい黄褐色と焼土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸3.82ｍ(Ｎ－169°－Ｗ)、燃焼部の掘り込みは天井部が残存し、オーバーハングしているため、径は現状における燃焼部の開口部0.65ｍ、最大値1.02ｍ、焚き口部0.99ｍの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.47ｍである。北西側に焚き口、南東側に燃焼部がある。焚き

口と燃焼部を結ぶ中軸線上より９°南に傾いて煙道が付設される。底面は平坦で、煙道は緩やかに、焚き口部は急に立ち上がる。

《層序》６層に分けた。１・２・３層は第Ⅳ層地山土由来のにぶい黄褐色、グライ化した灰黄褐色・褐灰色土を基質とする。１層は焼土粒を含むことからカマド状遺構廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と、２・３層は、地山土粒や焼土粒を含むが、カマド状遺構使用時または、廃絶後の自然流入による堆積土と考えられる。４層は炭化物層で、使用時に形成されと考えられ、廃絶時の状態を残す。５・６層は焼土で、使用時の被熱痕である。５層は強被熱範囲で、燃焼部周辺で、また６層は弱被熱範囲で、６層周辺で確認された。

《出土遺物》なし。底部から出土した炭化物で放射性炭素年代測定を実施した。

《所見・時期》天井部が残存する地下式である。時期は、出土遺物がなく不明であるが、放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1271～1287calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。

ＳＯ238カマド状遺構(第26・39・83図、図版15)

《位置・確認状況》ＫＲ46・47に位置する。第Ⅲ層上面で、上部を大きく削平された焼土の分布が確認された。残りの形状からカマド状遺構と判断した。

《規模・形態》形状から煙り出しと思われる一部が残る。平面形は、長軸0.54m(Ｎ-52°-Ｗ)、短軸0.52mの不整形を呈す。被熱厚は３～10cmである。

《層序》２層に分けた。１層は強被熱範囲、２層は弱被熱範囲である。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》残存部の形状からカマド状遺構としたが、その他の詳細は不明である。時期は、出土遺物がなく不明であるが、前述の通り中世の項に含めておく。

ＳＯ258カマド状遺構(第28・84図、図版15)

《位置・確認状況》ＫＫ51、ＫＬ51に位置する。第Ⅳ層地山上面で、東西で撹乱を受け、特に南西側で大きく削平を受けた、暗褐～灰色・褐色土、炭化物・焼土の分布が確認された。Ｐ1515と重複して古い。

《規模・形態》平面形は、長軸〈1.87〉m(Ｎ－109°－Ｅ)、燃焼部の掘り込みは天井部が残存し、オーバーハングしているため、径は現状における燃焼部の開口部が0.50m、最大値0.66m、焚き口部では0.84mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.34mである。北東側に焚き口、南西側に燃焼部がある。煙道は撹乱を受け欠損している。底面は平坦で、焚き口部は緩やかに立ち上がる。

《層序》８層に分けた。１層は第Ⅲ層土由来の暗褐～灰色土、３・４層は第Ⅳ層地山土由来の褐色・灰色土を基質とする。１・３・４層は炭化物粒・塊、焼土粒・塊を含むことから、カマド状遺構廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。２層は天井部の崩落焼土である。５層は、他のカマド状遺構に比べ少量であるが、炭化物を多く含む。６層は炭化物層である。５・６層はカマド状遺構使用時に形成されたと考えられ、廃絶時の状態を残す。７・８層は焼土で、使用時の被熱痕である。７層は強被熱範囲で、燃焼部周辺で、また６層は弱被熱範囲で、７層周辺で確認された。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》天井部が残存する地下式構造である。時期は、出土遺物がなく不明であるが、前述の通り中世の項に含めておく。

ＳＯ309カマド状遺構(第23・24・38・84図)

《位置・確認状況》ＬＬ49、ＬＭ49に位置する。第Ⅳ層地山上面で、南側で確認調査時のトレンチと接っし、撹乱を受けた暗褐色土と焼土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸〈1.05〉ｍ(Ｎ－158°－Ｗ)、燃焼部径0.48ｍの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは７cmである。焚き口は北西側で、燃焼部は南東側にある。煙道は残存状態が不良のため確認されていない。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《層序》３層に分けた。１層は第Ⅲ層土由来の暗褐色土を基質とする。炭化物・焼土粒を含むことから、カマド状遺構廃絶時の人為的な一括埋め戻し土である。２・３層は焼土で、カマド状遺構使用時の被熱痕である。２層は強被熱範囲、３層は弱被熱範囲である。

《出土遺物》１層から、中国同安窯青磁碗１点2.5ｇが出土し、これを図示した(第94図311)。

《所見・時期》残存状況が不良であることから、構造は不明瞭である。時期は、１層から出土した青磁碗より、13世紀初頭の鎌倉時代前期が推定される。

ＳＯ311カマド状遺構(第20・37・84図、図版16)

《位置・確認状況》ＬＯ54・55に位置する。第Ⅳ層地山上面で、暗褐色土と褐色土、焼土の分布が確認された。崩落のため完掘できなかった。

《規模・形態》平面形は、長軸3.26ｍ(Ｎ－144°－Ｗ)、燃焼部の掘り込みは、天井部が残存し、径は現状における燃焼部の開口部0.71ｍ、焚き口部0.74ｍの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.41ｍである。焚き口は北東側で、燃焼部は南西側である。焚き口、燃焼部を結ぶ中軸線上に煙道が付設される。底面は比較的平坦で、煙道は緩やかに、焚き口部では急に立ち上がる。

《層序》７層に分けた。１・２層は第Ⅳ層地山土由来の褐色土を基質とし、１層では炭化物粒、２層では第Ⅲ層土由来の暗褐色土塊、炭化物粒、焼土塊を含むことから、カマド状遺構廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。３層は第Ⅲ層土由来の暗褐色土を基質とする。焼土塊を含むが、廃絶後、自然流入土に天井部の崩落焼土が入り込んだ可能性がある。４層は天井部の崩落土である。５層は炭化物層で、カマド状遺構使用時に形成されたと考えられ、廃絶時の状態を残す。６・７層は焼土で、使用時の被熱痕である。６層は強被熱範囲で、燃焼部及び煙道の周辺で、６層は弱被熱範囲で、７層周辺で確認された。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》天井部が残存する地下式構造である。時期は、出土遺物がなく不明であるが、前述の通り中世の項に含めておく。

③火葬施設

ＳＫＣ38火葬施設(第15・18・36・84図、図版16)

《位置・確認状況》ＭＦ52に位置する。第Ⅳ層地山上面で、灰黄褐色土周辺に焼土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸1.31ｍ(Ｎ－21°－Ｅ)、短軸0.82ｍの焚き口が直交する十字形を呈す。確認面からの深さは７cm、被熱厚は１～３cmである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

《層序》４層に分けた。１層は第Ⅲ層土由来の灰黄褐色土を基質とする。炭化物や焼土粒を含むことから、一括埋め戻し土と考えられる。３層は炭素吸着被熱範囲で、火葬時に形成された炭化物が底面

に吸着している。２・４層は焼土で、火葬時の被熱痕である。２層は強被熱範囲で、燃焼部周辺で、４層は弱被熱範囲で、２層周辺や底面で確認された。

《出土遺物》１・２層からヒトの焼骨片16.4ｇが出土した。また、埋土から出土した炭化物で放射性炭素年代測定を実施した。

《所見・時期》形状及び周辺の被熱が激しく、埋土からヒトの焼骨が出土したことから、火葬施設と考えられる。本来は浅い土坑状の底部に、十字に焚き口が構築されたと考えられる。焼骨の残りは少なく、また近くにＳＴ89・97・302火葬墓もあることから、火葬された遺体はいずれかの火葬墓に改葬された可能性がある。放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1284～1381calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。

ＳＫＣ157火葬施設(第21・23・37・84図、図版16)

《位置・確認状況》ＬＰ51に位置する。第Ⅳ層地山上面で、灰黄褐色土周辺に焼土の分布が確認された。ＳＢ247掘立柱建物跡Ｐ27と重複して古い。

《規模・形態》平面形は、長軸〈0.71〉m(Ｎ－62°－Ｗ)、短軸0.61mの焚き口が直交する十字形を呈す。確認面からの深さは５cm、被熱厚は１～６cmである。底面はやや凹凸で、壁は緩やかに立ち上がる。

《埋土》３層に分けた。１層は第Ⅲ層土由来の灰黄褐色土を基質とする。炭化物や焼土を含むことから人為的な一括埋め戻し土である。２・３層は焼土で、火葬時の被熱痕である。２層は強被熱範囲で、燃焼部周辺で、３層は弱被熱範囲で、燃焼部周辺や底面で確認された。

《出土遺物》１層からヒトの焼骨片29.5ｇが出土した。また１層から出土した炭化材で放射性炭素年代測定を実施した。

《所見・時期》形状及び周辺の被熱が激しく、埋土からヒトの焼骨が出土したことから、火葬施設と考えられる。本来は浅い土坑状の底面に、十字に焚き口が構築されたと考えられる。焼骨の残りは少なく、また近くにＳＴ89・97・302火葬墓もあることから、火葬された遺体はいずれかの火葬墓に改葬された可能性がある。放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1281～1380calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。

ＳＫＣ180火葬施設(第18・21・36・84図、図版16)

《位置・確認状況》ＬＴ53に位置する。第Ⅳ層地山上面で、上部は著しく削平され、一部撹乱を受けた灰横褐土と焼土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.90m(Ｎ－23°－Ｅ)、短軸0.61mの不整形を呈す。確認面からの深さは２cm、被熱厚は１～５cmである。底面は平坦である。

《層序》３層に分けた。１層は第Ⅲ層土由来の灰黄褐色土を基質とする。炭化物粒、焼土粒を含むことから、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。２層は炭化物層で、火葬時に形成されたと考えられ、火葬施設廃絶時の状態を残す。３層は焼土で、火葬時の被熱痕であり、東側半分の底面に広っていた。

《出土遺物》埋土からヒトの焼骨片51.0ｇが出土した。

《所見・時期》形状及び周辺の被熱が激しく、埋土からヒトの焼骨が出土したことから、火葬施設と考えられる。削平により上部が消失しているため詳細は不明であるが、本来は浅い土坑状の底面に焚

き口が構築されたと考えられる。焼骨の残りは少なく、また近くにＳＴ89・97・302火葬墓もあることから、火葬された遺体はいずれかの火葬墓に改葬された可能性がある。時期は、出土遺物がなく不明であるが、他の火葬施設同様、中世の項に含めておく。

ＳＫＣ241火葬施設(第21・22・37・84図、図版16)

《位置・確認状況》ＬＳ49・50に位置する。第Ⅳ層地山上面で、焼土及び炭化物の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.88m(Ｎ－55°－Ｅ)、径0.23～0.67mの不整形を呈す。被熱厚は１～４cmである。上部が大きく削平されているため残存状況は悪く全体の形態は不明である。

《層序》３層に分けた。１層は焼土で、弱被熱範囲であり、南側に集中している。２層は炭化物層で、火葬時に形成された炭化物が堆積する。３層は第Ⅳ層地山土由来の黄褐色土を基質とする。火葬時に炭化物、焼土を掻き出してできた凹みに堆積したものと考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》形状が、ＳＫＣ180火葬施設に類似するため、火葬施設の可能性が考えられる。時期は、出土遺物がなく不明であるが、他の火葬施設同様、中世の項に含めておく。

④火葬墓

ＳＴ60火葬墓(第10・85図、図版16)

《位置・確認状況》ＮＡ56に位置する。第Ⅳ層地山上面で、暗褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.69m(Ｎ－６°－Ｅ)、短軸0.40mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.18mである。底面は中央部が凹むが、比較的平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》２層に分けた。１層は第Ⅲ層土由来の暗褐色土、２層は第Ⅳ層地山土由来の黄褐色土をそれぞれ基質とする。１・２層ともに地山土粒を含むことから、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》１層から、北宋銭である元〇通宝(〇は不明)、明銭である洪武通宝とそれに癒着した銭貨(不明３点)の計５点7.4ｇが出土し、これら２点(癒着したものを１点とした)を図示した(第94図312・313)。

《所見・時期》ヒトの焼骨片等の出土はないが、形状及び銭貨がまとまって出土したことから火葬墓と考えられる。時期は、出土遺物から14世紀中葉以降の室町時代から近世と推定される。また、本遺構の西側(未調査区)は近年まで墓地として使用されていた。

ＳＴ85火葬墓(第19・35・36・85図)

《位置・確認状況》ＭＦ51第Ⅳ層地山上面に位置する。

《規模・形態》平面形は、長軸0.97m(Ｎ－50°－Ｗ)、短軸0.35mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.18mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》時期は、出土遺物がなく不明であるが、近くにＳＴ97・301・302火葬墓があり、形状がそれら火葬墓に類似していることから、本遺構も中世の項に含めておく。

ＳＴ97火葬墓(第18・36・81図、図版16・17)

《位置・確認状況》ＭＤ54に位置する。第Ⅲ層上面で、本遺構と重複するＳＯ84カマド状遺構を精査中、北東に広がる炭化物の分布が確認された。その後周辺を精査し、灰黄褐色土の分布が確認された。ＳＯ84カマド状遺構と重複して古い。

《規模・形態》平面形は、長軸〈0.73〉m（N－60°－W）、短軸0.81mの略円形を呈す。確認面からの深さは0.17mである。底面は比較的平坦で、壁は北東側では急に立ち上がる。南西側は欠損しているため不明である。

《埋土》２層に分けた。１・２層ともに第Ⅲ層土由来の暗褐色・黄褐色土を基質とする。それぞれ地山土粒・塊、炭化物粒を含むことから、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》１・２層からヒトの焼骨片175.9ｇ、炭化したイネやヒエ等の種実が出土した。特に底面付近の２層に集中していた。埋土から出土した炭化物で放射性炭素年代測定を実施した。

《所見・時期》埋土からヒトの焼骨片が不規則な状態で出土し、炭化物を多く含むことから、火葬施設で焼かれた骨を改葬した火葬墓と推定される。放射性炭素年代測定（暦年較正年代）の結果、1223～1258calＡＤ（１σ）の年代値が得られている。

ＳＴ301火葬墓（第18・36・85図、図版17）

《位置・確認状況》ＭＤ52に位置する。第Ⅳ層地山上面で、暗褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.88m（N－43°－E）、短軸0.38mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.16mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》土層断面の観察はしていない。確認状況から単層と思われる。第Ⅲ層土由来の暗褐色土を基質とし、地山土塊、炭化物板、焼土粒を含むことから人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土からヒトの焼骨片0.6ｇが出土した。埋土から出土した炭化物で放射性炭素年代測定を実施した。

《所見・時期》埋土からヒトの焼骨片が出土したことから、火葬施設で焼かれた骨を改葬した火葬墓と推定される。埋土から出土した炭化物の放射性炭素年代測定（暦年較正年代）の結果、1446～1482calＡＤ（１σ）の年代値が得られている。

ＳＴ302火葬墓（第18・36・85図、図版17）

《位置・確認状況》ＭＤ54に位置する。第Ⅳ層地山上面で、暗褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.90m（N－37°－E）、短軸0.51mの隅丸長方形を呈す。確認面からの深さは0.24mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》土層断面の観察はしていないが、確認状況及び底部に炭化物が広がることから大きく２層に分けられると考える。１層は第Ⅲ層土由来の暗褐色土を基質とし、炭化物粒、焼土粒を含んでいる。２層は炭化物層であることから、１・２層ともに人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》中央部の底部直上付近からヒトの焼骨片906.2ｇが出土した。また埋土から出土した炭化物で放射性炭素年代測定を実施した。

《所見・時期》埋土から多量の炭化物とともに、焼骨片が不規則な状態で出土したことから、火葬施設で焼かれた骨を改葬した火葬墓と推定される。放射性炭素年代測定（暦年較正年代）の結果、1249～1277calＡＤ（１σ）の年代値が得られている。

ＳＴ304火葬墓（第18・36・85図、図版17）

《位置・確認状況》ＭＤ52に位置する。第Ⅳ層地山上面で、にぶい黄褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.80m（N－118°－W）、短軸0.66mの隅丸方形を呈す。確認面からの深さは0.10mである。

《埋土》単層である。第Ⅳ層地山土由来のにぶい黄褐色土を基質とする。炭化物粒、焼土粒を含むことことから、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土からヒトの焼骨片0.2ｇが出土した。埋土から出土した炭化物を放射性炭素年代測定にかけた。

《所見・時期》少量であるが、埋土から焼骨片が出土したことから、火葬施設で焼かれた焼骨片を改葬した火葬墓と考えられる。埋土から出土した炭化物の放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1446～1482calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。

ＳＴ305火葬墓(第18・36・85図、図版17)

《位置・確認状況》ＭＤ54に位置する。第Ⅳ層地山上面で、炭化物を多量に含んだ２基の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.70m(Ｎ－５°－Ｗ)、短軸0.64mの略円形を呈す。確認面からの深さは２cmである。底面は平坦であるが、立ち上がりは残存状況が悪いため不明である。

《埋土》単層である。炭化物層であり、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》埋土が、他の火葬墓同様炭化物を多量に含んでいることから、火葬墓の可能性が考えられる。また北東には、ＳＴ306火葬墓が隣接し、北西近隣では径30cmの礫に径12cmの礫がもたれるように重なった状態が確認された。礫の重なりは墓標の名残の可能性がある。時期は、出土遺物がなく不明であるが、周辺の火葬施設や火葬墓同様、中世の項に含めておく。

ＳＴ306火葬墓(第18・36・85図、図版17)

《位置・確認状況》ＭＤ54に位置する。第Ⅳ層地山上面で、炭化物を多量に含んだ２基の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.58m(Ｎ－57°－Ｅ)、短軸0.39mの不整形を呈す。確認面からの深さは２㎝である。底面は平坦であるが、立ち上がりは残存状況が悪いため不明である。

《埋土》単層である。炭化物層であり、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》埋土が、他の火葬墓同様炭化物を多量に含んでいることから、火葬墓の可能性が考えられる。南西には、ＳＴ305火葬墓が隣接し、西近隣では径30cmの礫に径12cmの礫がもたれるように重なった状態が確認された。礫の重なりは墓標の名残の可能性がある。時期は、出土遺物がなく不明であるが、周辺の火葬施設や火葬墓同様、中世の項に含めておく。

ＳＴ307火葬墓(第15・18・36・85図、図版17)

《位置・確認状況》ＭＥ54に位置する。第Ⅳ層地山上面で、暗褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸1.04m(Ｎ－65°－Ｗ)、短軸0.60mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.20mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》単層である。第Ⅲ層土由来の暗褐色土を基質とする。焼土塊を含むことことから、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》周囲で検出された火葬墓に形状が類似しており、火葬墓と考えられる。時期は、出土

遺物がなく不明であるが、周辺の火葬施設や火葬墓同様、中世の項に含めておく。

⑤溝跡

ＳＤ200溝跡（第23・37・38・86図、図版17）

《位置・確認状況》ＬＮ47～51に位置する。第Ⅳ層地山上面で、確認調査時のトレンチと重複し、南側調査区外から北側調査区外へ撹乱を受けながら、南から北へ走る褐色土の分布が確認された。ＳＤ201溝跡と重複して古く、ＳＥ211井戸跡と重複して新しい。

《規模・形態》長さは〈16.45〉ｍで、南からやや北東よりに走り、その後北西よりに向きを変える。径は0.22～0.54m、深さは0.20～0.26ｍである。底面は平坦、壁は急に立ち上がる。

《埋土》２層に分けた。１層は第Ⅳ層地山土由来の褐色土、２層は第Ⅲ層土由来のグライ化したオリーブ褐色土を基質とする。１・２層ともに砂質土ではなく、水が常時流れていた形跡はない。また１層は第Ⅲ層土由来の暗褐色土を、２層は地山土塊をそれぞれ多く含むことから、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》埋土から水が常時流れた形跡が確認されていないことから、区画のために構築された可能性がある。本遺構と重複して新しいＳＤ201溝跡は、ＳＤ200溝廃絶後の付け替えと考えられる。時期は、ＳＥ211井戸跡と重複して新しいことから、ＳＥ211井戸跡と同時期である12世紀後半の平安時代末～鎌倉時代初頭、もしくはそれ以降と推定される。

ＳＤ201溝跡（第23・37・38・86図、図版17）

《位置・確認状況》ＬＮ49～51、ＬＯ46～49に位置する。第Ⅳ層地山上面で、南側調査区外から北側調査区外へ撹乱を受けながら、南から北へ走る褐色土の分布が確認された。ＳＤ200溝跡と重複して新しい。

《規模・形態》長さは〈19.60〉ｍで南からやや北東より、僅かに弧状気味に走る。径は0.22～0.58m、確認面からの深さは0.18～0.22ｍである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》２層に分けた。１層は第Ⅳ層地山土由来の褐色土、２層は第Ⅲ層土由来のグライ化したオリーブ褐色土を基質とする。１・２層ともに砂質土ではなく、水が常時流れていた形跡はない。また１層は第Ⅲ層土由来の暗褐色土を、２層は地山土塊をそれぞれ多く含むことから、人為的な埋め戻し土と考えられる

《出土遺物》なし。

《所見・時期》埋土から水が常時流れた形跡が確認されないことから、区画のために構築された可能性がある。本遺構はＳＤ200溝廃絶後の付け替えと考えられる。時期は、本遺構と重複するＳＤ200溝跡に重複して古いＳＥ211井戸跡の時期が、12世紀後半の平安時代末～鎌倉時代初頭と推定されることから、ＳＥ211井戸跡と同時期、もしくはそれ以降と推定される。

⑥焼土遺構

ＳＮ98焼土遺構（第17・36・85図・図版17）

《位置・確認状況》ＭＢ56に位置する。第Ⅳ層地山上面で、焼土と褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》焼土の平面形は、長軸0.47ｍ（Ｎ－14°－Ｅ）、短軸0.21ｍの略円形を呈す。被熱厚は２～９cm、灰の掻き出しにより形成された凹みの痕の深さは４cmである。

《層序》３層に分けた。１・２層は焼土で、焼土遺構使用時の被熱痕である。１層は強被熱範囲、２層は弱被熱範囲である。１層上面が燃焼部で、２層は１層周辺に広がる。３層は第Ⅳ層地山土由来の褐色土を基質とする。炭化物粒・焼土粒を含むことことから、焼土遺構使用時に炭化物や灰が掻き出され、地山面が抉られて凹みができ、そこに流入した堆積土と考えられる。
《出土遺物》なし。
《所見・時期》周辺には、上屋施設となる柱穴が認められないため、屋外の地床炉と考えられる。時期は、本遺構南側には、中世の遺構であるカマド状遺構及び火葬施設、火葬墓等が密集している。このことから中世の項に含めておく。

（２）中世の遺構外出土遺物

中世に属する遺構外出土遺物は、中国産青磁３点54.7ｇ、須恵器系陶器42点2128.7ｇ、瀬戸美濃陶器１点30.2ｇである。図示したものは、中国産青磁碗３点、須恵器系陶器甕１点・壺７点・擂鉢７点・小鉢１点、瀬戸美濃陶器瓶１点である（第94・95図314～333）。

314～316は中国産青磁碗である。いずれも龍泉窯産である。314・316は口縁部で、314は内面に櫛掻及び劃花文が、316は外面に蓮弁文が施されている。315は胴部である。314・315は13世紀初頭、316は15世紀末～16世紀初頭と推定される。

317～332は須恵器系陶器である。317は甕の胴部で、外面に平行叩き、内面に円礫当て具痕が施されている。318～324は壺で、318は口縁部で２面の外傾面を形成している。319～324はそれぞれ頸～胴部で、322は外面に櫛歯波状文、320・321・323は外面に平行叩き、324には二筋平行叩きが施されている。325～331は擂鉢で、325・326・329・331は内面に卸目が確認できる。331は口縁部に櫛歯波状文が施されている。332は小鉢である。須恵器系陶器は、在地である大畑桧山腰窯産の破片が、遺構内出土遺物と合わせ、報告書に掲載している36点のうち11点を占める。須恵器系陶器の編年Ⅱ１期（12世紀末～13世紀前葉）に当たる。第Ⅴ期（15世紀前半）と考えられる擂鉢（331）も出土したが、時代が下るにつれ出土量は減少する。

また333は瀬戸美濃陶器瓶で、古瀬戸中期（14世紀初頭～半ば）と考えられ、鉄釉に印花文が施されている。

４　近世及び時期不明

（１）遺構と遺構内出土遺物

近世及び時期不明遺構は、掘立柱建物跡７棟、柱穴列２条、竪穴建物跡７棟、井戸跡５基、溝跡４条、土坑21基、焼土遺構７基である。このうち近世と推定される遺構は、掘立柱建物跡７棟、柱穴列２条、竪穴建物跡７棟、井戸跡４基、土坑３基である（第132図）。今回報告する掘立柱建物跡は７棟である。しかし遺跡全体に柱穴様ピットが多数検出されていて、これらが結びつき建物跡になる可能性は大いにある。近世の井戸跡は、古代～中世の井戸跡周辺にも検出され、古来よりほぼ同じ区域に井戸を設置し続けた様子がうかがえる。また倉庫として使用されていたと考えられる竪穴建物跡が７棟確認され、これらは東側調査区に集中しているのが特徴的である。図示した近世の遺構内出土遺物は、後世の混入も含め須恵器坏２点・壺甕類１点・中国産青磁碗１点、須恵器系陶器壺１点、肥前陶

器皿１点・壺２点・火入れ１点・秉燭１点、肥前磁器碗３点・皿７点・浅鉢１点・鉢１点・仏飯器２点・筒形碗１点・猪口２点・瓶２点、在地系陶器鉢１点・壺１点・甕１点、擂鉢４点、貝風呂２点・焙烙１点、木製品では加工板材１点・折敷２点・くさび１点である。柱穴様ピットの一部は古代や中世に属する可能性もあるが、その分布状況からほとんどが近世に属すると考えられるため、今回は近世及び時期不明遺構として一括して扱った。

①掘立柱建物跡

ＳＢ243掘立柱建物跡（第26・27・39・40・96図、図版20）

《位置・確認状況》ＫＰ46～48、ＫＱ46～48に位置する。第Ⅳ層地山上面で、規則性をもって並ぶ13基の柱穴が確認され、それらを掘立柱建物跡と判断した。直接の重複はなく新旧関係及び本遺構との関連は不明だが、５基の柱穴様ピットが建物範囲と重なる。

《規模・形態》13基の柱穴からなるが、Ｐ６・７の２基は柱の建て替えと考えられる。桁行４間×梁行２間の建物跡である。桁行総長はＰ１－Ｐ５間は7.99ｍで、柱間はそれぞれ、Ｐ１－Ｐ２間は2.03m、Ｐ２－Ｐ３間は1.95m、Ｐ３－Ｐ４間は1.98m、Ｐ４－Ｐ５間は2.03ｍで、主軸方向はＮ-27°-Ｅである。一方梁行総長は、Ｐ１－Ｐ９間で3.92ｍで、柱間はそれぞれＰ１－Ｐ６間は1.93m、Ｐ６－Ｐ９間は1.99ｍである。柱穴の規模は、長軸0.40～0.90m、短軸0.22～0.72m、確認面からの深さは0.19～0.56ｍである。Ｐ１・５・９・12では柱痕跡が確認された。柱痕跡の径は、Ｐ１が径0.41m、Ｐ５が0.32m、Ｐ９が0.62m、Ｐ12が0.22ｍで、平面形は円形である。Ｐ10では径0.18m、高さ0.11ｍの柱材が一部残存していた。柱当たりが、Ｐ１・４・５・11・12で確認され、径８～18㎝である。また上屋構造は不明である。

《埋土》埋土は第Ⅲ層土及び第Ⅳ層地山土由来を基質とするが、グライ化の影響により、明確な区分は難しい。柱痕跡の見られるＰ１・５・９・12では、裏込め土と柱腐食後の流入堆積土が、明瞭に見分けられた。

《出土遺物》Ｐ12で土師器甕１点5.6ｇが出土した。

《所見・時期》土師器甕が１点出土したが、後世の混入の可能性があるため、時期は不明である。６尺５寸前後の柱間を主に使用していたことから、中世末から近世以降と推定される。

ＳＢ247掘立柱建物跡（第21～23・37・97・98図、図版17）

《位置・確認状況》ＬＰ50～52、ＬＱ50～53、ＬＲ50～53、ＬＳ51に位置する。第Ⅲ層及び第Ⅳ層地山上面で、撹乱を受け一部未検出であるが、規則性をもって並ぶ29基の柱穴が確認され、それらを掘立柱建物跡と判断した。ＳＢ254・255掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。また本遺構Ｐ27がＳＫＣ157火葬施設と重複して新しい。

《規模・形態》桁行５間、梁行４間の身舎の北側に庇が付く。29基の柱穴からなるが、Ｐ１・８、Ｐ２・９・10、Ｐ６・７、Ｐ14・15、Ｐ17・22・23、Ｐ24・25は重複関係にある。Ｐ１・２は、身舎と庇をそれぞれ構成する柱穴が重複した思われる。他は柱の建て替えによる重複と考えられる。桁行総長は、Ｐ８－Ｐ14間は9.89ｍで、柱間はそれぞれＰ８－Ｐ10間は2.00m、Ｐ10－Ｐ11間は2.28m、Ｐ11－Ｐ12間は2.38m、Ｐ12－Ｐ13間は1.65m、Ｐ13－Ｐ14間は1.58ｍで、主軸方向はＮ-63°-Ｗである。一方梁行総長は、Ｐ11－Ｐ29間で7.41ｍで、柱間はそれぞれＰ11－Ｐ18間は1.44m、Ｐ18－Ｐ26間は2.14m、Ｐ26－Ｐ28間は2.00m、Ｐ28－Ｐ29間は1.83ｍである。また庇の桁行の芯々距離は、Ｐ３－Ｐ11で

0.76ｍである。柱穴の規模は、それぞれ長軸0.37～1.20ｍ、短軸0.30ｍ～0.82ｍ、確認面からの深さは0.22～0.88ｍである。Ｐ10・Ｐ14では柱痕跡が確認された。柱痕跡の径は、Ｐ10が0.26ｍ、Ｐ14が0.22ｍで、平面形は円形を呈す。Ｐ１・11～13・16・18・20～22・25～29では柱当りが確認された。径は、0.04～0.26ｍである。また上屋構造は不明である。

《埋土》埋土は第Ⅲ層土由来及び第Ⅳ層地山土由来を基質とするが、グライ化の影響により、明確な区分は難しい。柱痕跡が見られるＰ10・14では、裏込め土と柱腐食後の流入堆積土が、明瞭に見分けられた。

《出土遺物》Ｐ３で肥前磁器碗１点2.5ｇ、Ｐ４で須恵器坏１点73.0ｇ、Ｐ８・９で肥前陶器壺１点62.8ｇ、Ｐ10で肥前磁器袋物１点22.4g、Ｐ21で有孔礫１点、Ｐ26で肥前陶器皿１点4.7ｇ・碗１点4.8ｇ、擂鉢１点10.2ｇ、Ｐ27で肥前陶器甕１点24.1ｇ、剝片１点8.4ｇ、Ｐ28で肥前磁器壺1点17.8ｇが出土した。このうち、須恵器坏１点、肥前陶器壺１点を図示した(第113図334・335)。

《所見・時期》詳細な性格は不明であるが、一定の規模を有する大型の建物跡と考えられる。時期は、Ｐ３・10・27・28で肥前陶磁が出土したことや、柱間が６尺５寸及び６尺の間尺であることから、近世以降と推定される。

ＳＢ254掘立柱建物跡(第21・22・37・99図、図版17)

《位置・確認状況》ＬＲ50・51、ＬＳ50～52、ＬＴ50に位置する。第Ⅲ層及び第Ⅳ層地山上面で、北東部は撹乱を受け消失したため、本遺構に関わる柱穴が確認されなかったが、規則性をもって並ぶ８基の柱穴が確認され、それらを掘立柱建物跡と判断した。ＳＢ255掘立柱建物跡Ｐ４・７・８と本遺構Ｐ４・６・７が重複して古い。また本遺構Ｐ４は、土層断面ではＳＢ255掘立柱建物跡Ｐ４との重複を確認できるが、確認面では不明瞭である。また本遺構Ｐ８は、ＳＢ255掘立柱建物跡Ｐ９と同一の柱穴である。またＳＢ247掘立柱建物跡とは、直接的な重複はなく、新旧関係は不明である。

《規模・形態》８基の柱穴からなる桁行３間、梁行２間の建物跡である。桁行総長は、Ｐ１－Ｐ４間は5.94ｍで、主軸方向はＮ-22°-Ｅである。柱間はそれぞれＰ１－Ｐ２間は2.00m、Ｐ２－Ｐ３間は2.06m、Ｐ３－Ｐ４間は1.88ｍである。一方桁行総長はＰ１－Ｐ６間で4.07ｍで、柱間はそれぞれＰ１－Ｐ５間は2.58m、Ｐ５－Ｐ６間は1.49ｍである。柱穴の規模は、それぞれ長軸0.54～0.98m、短軸0.44～0.82m、確認面からの深さは0.42～0.78ｍである。Ｐ３・６・７では柱痕跡が確認された。柱痕跡の径は、Ｐ３が0.24m、Ｐ６が0.09m、Ｐ７が0.16ｍで、平面形は円形である。Ｐ１・４・６・８では柱当りが確認された。規模は径0.05～0.19ｍである。Ｐ８はＳＢ255掘立柱建物跡Ｐ９と同一の柱穴である。本遺構は、ＳＢ255掘立柱建物跡と主軸の向き及び形状が大差なくほぼ同様であることから、本遺構からＳＢ255掘立柱建物跡へ建て替える際に、そのまま使用されたと考えられる。また上屋構造は不明である。

《埋土》埋土は第Ⅲ層土及び第Ⅳ層地山土由来を基質とするが、グライ化の影響で変色しているため、明確な区分は難しい。柱痕跡が確認されたＰ３・６・７では、裏込め土と柱の腐食後に流入した埋土が、明瞭に見分けられた。

《出土遺物》Ｐ４(ＳＢ254Ｐ４とどちらに由来する埋土から出土したかは不明)で、肥前磁器皿１点17.4ｇ及び木材が、Ｐ８(ＳＢ254Ｐ９と同一)で肥前陶器袋物類１点62.8ｇが出土した。

《所見・時期》ＳＢ255掘立柱建物跡を建て替える以前の建物と考えられるが、詳細は不明である。

時期は、Ｐ４・８で肥前陶磁が出土したことから、近世以降と推定される。

ＳＢ255掘立柱建物跡(第21・22・37・99・100図、図版17)

《位置・確認状況》ＬＲ50・51、ＬＳ50～52、ＬＴ50に位置する。第Ⅲ層及び第Ⅳ層地山上面で、北東部は撹乱を受け消失したため、本遺構に関わる柱穴は確認されなかったが、規則性をもって並ぶ９基の柱穴を確認し、それらを掘立柱建物跡と判断した。ＳＢ254掘立柱建物跡Ｐ４・６・７と本遺構Ｐ４・７・８が重複して新しい。また本遺構Ｐ４は、土層断面からＳＢ254Ｐ４との重複が確認されたが、確認面では不明瞭である。本遺構Ｐ９はＳＢ254Ｐ８と同一の柱穴である。またＳＢ247掘立柱建物跡とは、直接的な重複はなく、新旧関係は不明である。

《規模・形態》９基の柱穴からなる桁行３間、梁行２間の建物跡である。桁行総長はＰ１－Ｐ４間は5.53ｍで、主軸はＮ-26°-Ｅである。柱間はＰ１－Ｐ２間は1.83ｍ、Ｐ２－Ｐ３間は1.93ｍ、Ｐ３－Ｐ４間は1.88ｍである。梁行総長は、Ｐ１－Ｐ６間で4.04ｍ、柱間はＰ１－Ｐ５間は2.57ｍ、Ｐ５－Ｐ６間は1.47ｍである。柱穴の規模は、それぞれ長軸〈0.39〉～0.98ｍ、短軸0.38～0.82ｍ、確認面からの深さは0.45～0.74ｍである。Ｐ８は柱痕跡が確認された。柱痕跡の径は、0.19ｍで、平面形は円形を呈す。Ｐ３を除き、柱当りが確認された。径は0.06～0.13ｍである。Ｐ９はＳＢ254掘立柱建物跡Ｐ８と同一の柱穴である。本遺構は、ＳＢ254掘立柱建物跡と主軸の向き及び形状が大差なくほぼ同様であることから、ＳＢ254掘立柱建物跡から本遺構へ建て替える際に、そのまま使用したと考えられる。また上屋構造は不明である。

《埋土》埋土は第Ⅲ層土及び第Ⅳ層地山土由来を基質とするが、グライ化の影響により、明確な区分は難しい。柱痕跡の見られるＰ８では、裏込め土と柱腐食後の流入堆積土が、明瞭に見分けられた。

《出土遺物》Ｐ４(ＳＢ255掘立柱建物跡Ｐ４とどちらに由来する埋土から出土したかは不明)で、肥前磁器皿1点7.4ｇ及び角材が、Ｐ９(ＳＢ254掘立柱建物跡Ｐ８と同一)で肥前陶器袋物１点62.8ｇが出土した。

《所見・時期》ＳＢ254掘立柱建物跡の建て替えと考えられる。時期は、Ｐ４・８で肥前陶磁が出土したことや、柱間が６尺５寸及び６尺の間尺であることから、近世以降と推定される。

ＳＢ308掘立柱建物跡(第20・37・100図、図版14)

《位置・確認状況》ＬＳ53～55、ＬＲ54に位置する。第Ⅳ層地山上面で、規則性をもって並ぶ10基の柱穴が確認され、それらを掘立柱建物跡と判断した。本遺構Ｐ５がＳＯ206カマド状遺構、Ｐ８がＳＯ165カマド状遺構、Ｐ10がＳＯ205カマド状遺構と重複して新しい。また直接の重複はないが、ＳＯ204カマド状遺構と重複する。

《規模・形態》10基の柱穴からなり、桁行２間(一部３間)、梁行２間の建物跡である。桁行総長はＰ１－Ｐ３間は4.23ｍ、主軸方向はＮ－25°－Ｅである。柱間はそれぞれＰ１－Ｐ２は1.98ｍ、Ｐ２－Ｐ３は2.25ｍである。一方梁行総長は、Ｐ１－Ｐ７間は2.20ｍで、柱間はＰ１－Ｐ４間は1.10ｍ、Ｐ４－Ｐ７間は1.10ｍである。柱穴の規模は、それぞれ長軸0.15～0.30ｍ、短軸0.13～0.24ｍ、確認面からの深さは0.19～0.45ｍである。Ｐ１・６を除き他は全て柱材が残存していた。柱材の規模は、径６～10㎝、高さ10～35㎝である。またＰ１では柱当たりが確認された。径は32㎝である。上屋構造は不明である。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》比較的小型の建物跡である。時期は、出土遺物がなく不明であるが、柱間が６尺５寸の間尺であることから、近世以降と推定される。

ＳＢ313掘立柱建物跡（第26・39・100図）

《位置・確認状況》ＫＲ45・46、ＫＳ45・46に位置する。第Ⅳ層地山上面で、規則性をもって並ぶ８基の柱穴が確認され、それらを掘立柱建物跡と判断した。直接の重複はないが、ＳＮ240焼土遺構と重複する。

《規模・形態》８基の柱穴からなり、桁行３間、梁行２間の建物跡である。桁行総長はＰ１－Ｐ４間は4.10ｍで、主軸方向はＮ－69°－Ｗである。柱間はそれぞれＰ１－Ｐ２は0.64ｍで、Ｐ２－Ｐ３間は2.31ｍ、Ｐ３－Ｐ４は1.15ｍである。一方梁行総長は、Ｐ１－Ｐ７間は2.95ｍである。柱間はそれぞれＰ１－Ｐ５は1.74ｍ、Ｐ５－Ｐ７は1.21ｍである。柱穴の規模は、それぞれ長軸0.26～0.49ｍ、短軸0.21～0.44ｍ、確認面からの深さは0.14～0.26ｍである。上屋構造は不明である。

《埋土》Ｐ１～７は単層である。Ｐ８は断面観察をしていないため不明であるが、検出面からの観察では、柱痕跡はなく単層と考えられる。Ｐ７は第Ⅲ層土由来の暗褐色土を、他は第Ⅳ層地山土由来の褐色・にぶい黄褐色土を基質とする。それぞれ地山土・暗褐色土塊を含むことから、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》比較的小型の建物跡である。時期は、出土遺物がなく不明であるが、遺跡内で検出された他の掘立柱建物跡同様、近世に属する可能性が考えられる。

ＳＢ314掘立柱建物跡（第16・34・35・101・102図）

《位置・確認状況》ＭＪ49・50、ＭＫ49～51、ＭＬ49～51に位置する。第Ⅳ層地山上面で検出された柱穴を図面上で検討したところ、規則性をもって並ぶ柱穴12基が確認され、それらを掘立柱建物跡と判断した。本遺構Ｐ７がＳＥ34井戸跡を、Ｐ６がＰ1441と重複して新しい。また直接な重複関係がなく、新旧関係及び本遺構との関連は不明だが、37基の柱穴様ピットと重複する。

《規模・形態》12基の柱穴からなり、桁行４間、梁行２間の建物跡である。桁行総長はＰ８－Ｐ12間は7.69ｍで、主軸方向はＮ－60°－Ｗである。柱間はそれぞれＰ８－Ｐ９は2.27ｍで、Ｐ９－Ｐ10間は2.03ｍ、Ｐ10－Ｐ11は2.00ｍ、Ｐ11－Ｐ12は1.39ｍである。一方桁行総長は、Ｐ３－Ｐ11間で、3.94ｍある。柱間はそれぞれＰ３－Ｐ６は1.97ｍ、Ｐ６－Ｐ11は1.97ｍである。柱穴の規模は、それぞれ長軸0.19～0.94ｍ、短軸0.18～0.82ｍ、確認面からの深さは0.25～0.60ｍである。Ｐ２・６・10では柱当りが確認された。径は８～13㎝である。Ｐ４は本遺構を構成する他の柱穴に比べ、規模が小さいことから、支柱の可能性が考えられる。上屋構造は不明である。

《出土遺物》Ｐ３から貝風呂１点104.0ｇが出土した。

《所見・時期》時期は、Ｐ３から貝風呂が出土したことや、柱間が６尺５寸の間尺であることから、近世後期以降と推定される。

②柱穴列

ＳＡ244柱穴列（第26・27・39・40・101・102図）

《位置・確認状況》ＫＯ50、ＫＰ48～50に位置する。第Ⅳ層地山上面で、規則性をもって並ぶ７基の柱穴が確認され、それらを柱穴列と判断した。

《規模・形態》７基の柱穴からなる。東から北側へ、Ｐ２からＰ３へは直角に屈曲し延びている。柱列総長はＰ１－Ｐ７間で11.76ｍで、主軸は、Ｎ−29°−Ｅである。柱間はそれぞれ、Ｐ１－Ｐ２間は2.28ｍ、Ｐ２－Ｐ３間は1.91ｍ、Ｐ３－Ｐ４間は1.76ｍ、Ｐ４－Ｐ５間は1.88ｍ、Ｐ５－Ｐ６間は1.77ｍ、Ｐ６－Ｐ７間は2.16ｍである。柱穴の規模は、それぞれ長軸0.21～0.38ｍ、短軸0.19～0.36ｍ、確認面からの深さは0.08～0.46ｍである。Ｐ６では柱痕跡が確認された。

《埋土》Ｐ６は３層に分けた。他はすべて単層である。Ｐ６を除いた柱穴は、第Ⅲ層土由来の暗褐色・暗オリーブ灰色土を基質とした人為的な埋め戻し土である。Ｐ６の１・２層は第Ⅲ層土由来の灰オリーブ色土で、３層は第Ⅳ層地山土由来の黄褐色土である。Ｐ６の１層は、柱の腐食後に流入した埋土、また２・３層は、Ｐ６構築時の柱の裏込め土と考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》板塀跡、または掘立柱建物跡の一部の可能性もあるが詳細は不明である。時期は、出土遺物がなく不明であるが、柱間が６尺３寸の間尺であることから、近世以降と推定される。

ＳＡ245柱穴列（第26・27・39・102図）

《位置・確認状況》ＫＰ50、ＫＱ48～50に位置する。第Ⅳ層地山上面で、規則性をもって並ぶ６基の柱穴が確認され、それらを柱穴列と判断した。Ｐ４はＰ３と重複して新しい。Ｐ２は、Ｐ１と近い位置に設置されていることや、Ｐ１－Ｐ３の主軸と、Ｐ２－Ｐ４の主軸の傾きがほぼ同じで、柱穴列の規模もほぼ同じであることから、それぞれＰ２・４は、Ｐ１・３の柱の建て替えと考えられる。

《規模・形態》新旧それぞれ４基の柱穴からなる。柱列総長は6.72ｍで主軸はＮ−28°−Ｅである。柱間はそれぞれ、Ｐ１－Ｐ３間は4.00ｍ、Ｐ３－Ｐ５間で1.06ｍ、Ｐ５－Ｐ６間で1.54ｍである。また本遺構の作り替え後の柱列総長は、Ｐ２－Ｐ６間が6.73ｍで、主軸はＮ−25°−Ｅである。柱間はそれぞれ、Ｐ２－Ｐ４間で4.13ｍ、Ｐ４－Ｐ５間は1.06ｍ、Ｐ５－Ｐ６間は1.54ｍである。柱穴の規模は、長軸0.25～0.34ｍ、短軸0.20～0.31ｍ、確認面からの深さは0.13～0.22ｍである。

《埋土》柱穴列を構成する柱穴はすべて単層で、第Ⅲ層土由来の黒褐色土を基質とする。それぞれ地山土及び炭化物を含んだ人為的な埋め戻し土である。

《出土遺物》Ｐ５で土師器甕１点3.1ｇが、Ｐ６では小礫が出土した。

《所見・時期》板塀跡と推定される。Ｐ５で出土した土師器甕は、柱穴列廃絶時の埋め戻し土に混入した可能性がある。時期は不明であるが、周囲にある他の掘立柱建物跡や柱穴様ピットとの関連性から、近世以降と推定される。

③竪穴建物跡

ＳＫＩ88竪穴建物跡（第19・36・103図、図版18）

《位置・確認状況》ＭＣ48、ＭＤ48に位置する。第Ⅳ層地山上面で、北側が撹乱を受けて消失した、褐色土の分布が確認された。Ｐ872・873と重複して古い。

《規模・形態》平面形は、長軸4.00ｍ（Ｎ−85°−Ｅ）、短軸3.13ｍの不整隅丸方形を呈す。確認面からの深さは0.89ｍである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がるが、西側では中位で緩やかに立ち上がる。北東及び南側に張り出しが付設する。底面から杉板が出土し、床板が敷かれていたと考えられる。また周辺には関連する柱穴がなく、上部構造は不明である。

《埋土》２層に分けた。１・２層は第Ⅳ層地山由来土の褐色・灰黄褐色土を基質とする。２層はグラ

イ化している。１・２層ともに竪穴建物廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》２層下位である底面から床板の一部と考えられる杉板が出土した。また層位不明であるが、須恵器坏１点3.2ｇ、肥前磁器碗３点87.9ｇ・皿１点82.7ｇ、土製品１点3.5ｇも出土した。このうち肥前磁器碗・皿各１点を図示した(第113図336・337)。

《所見・時期》時期は、埋土から出土した肥前磁器碗より、19世紀前半以降と推定される。

ＳＫＩ102竪穴建物跡(第30・31・41・103図、図版18)

《位置・確認状況》ＫＦ47・48、ＫＧ48に位置する。第Ⅳ層地山上面で、暗褐色・灰色・オリーブ褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸2.56ｍ(Ｎ－29°－Ｅ)、短軸2.22ｍの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.59ｍでる。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。南東側で一部突き出た張り出しがあり、出入り口と考えられる。また周辺には関連する柱穴がなく、上部構造は不明である。

《埋土》12層に分けた。１～９層はグライ化により変色しているが、第Ⅲ層土由来の暗褐色・黒色・オリーブ黒色・灰色土を、10～12層は第Ⅳ層地山土由来のオリーブ灰色・明黄褐色土を基質とする。１層は、埋まり切らない凹みを埋めた人為的な埋め戻し土である。２～５層は、凹レンズ状に堆積した自然流入土、６～12層は、竪穴建物廃絶に際しての埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から、土師器甕３点17.7ｇ、須恵器甕１点253.8ｇ、近世擂鉢１点5.2ｇが出土し、このうち須恵器甕１点を図示した(第113図338)。

《所見・時期》時期は、平安時代の遺物が出土したが、これは後世の混入と考えられる。本遺構の形状や出土遺物、その他周囲で形状が類似する竪穴建物跡が検出されていることから、近世以降に属すると推定される。

ＳＫＩ115竪穴建物跡(第31・32・33・41・104図、図版18)

《位置・確認状況》ＪＴ45・46、ＫＡ46に位置する。第Ⅲ層及び第Ⅳ層地山上面で、黒褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸6.08ｍ(Ｎ－20°－Ｅ)、短軸2.24ｍの隅丸楕円形を呈す。確認面からの深さは0.59ｍである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。西側に一部突き出た張り出しがある。また周辺には関連する柱穴がなく、上部構造は不明である。

《埋土》３層に分けた。１～３層全て第Ⅲ層土由来の黒褐色・オリーブ褐色土を基質とするが、３層はグライ化していた。１・２層では地山土塊や炭化物粒、３層では地山土塊に暗褐色土と細砂を含むことから、全て竪穴建物廃絶に伴う人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から、須恵器坏１点6.5ｇ、肥前陶器袋物１点4.7ｇ、鉄製品では鎹１点64.9ｇが出土した。

《所見・時期》時期は、肥前陶器袋物が出土していることから近世以降と推定される。

ＳＫＩ122竪穴建物跡(第31・32・41・105図、図版18)

《位置・確認状況》ＫＢ47・48、ＫＣ47・48に位置する。第Ⅳ層地山上面で、黒色・浅黄色・オリーブ黄色・オリーブ灰色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸5.20ｍ(Ｎ－59°－Ｗ)、短軸4.08ｍの隅丸方形を呈す。確認面からの深さは0.88ｍである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。南側に張り出しが付設される。また周辺

には関連する柱穴がなく、上部構造は不明である。

《埋土》16層に分けた。ほとんどがグライ化していた。１・３・４・６・８・10・12・14・16層は第Ⅱ層土由来の暗褐色土及び黒色・オリーブ黒色泥状土を基質とする。一方、２・５・７・９・11・13・15層は第Ⅳ層地山土由来のグライ化した浅黄色・灰色・オリーブ黄色・オリーブ灰色・黄褐色・暗オリーブ灰色土を基質とする。木片や陶磁器を含む層が多く、全て人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》１・４・５層では、特に陶磁器の出土量が顕著である。須恵器坏３点71.4ｇ・甕１点85.2ｇ、須恵器系陶器甕１点23.8ｇ、肥前陶器皿１点43.8ｇ・壺１点37.3ｇ・袋物類約35点1083.9ｇ・火入れ２点409.2ｇ・秉燭１点116.4ｇ、肥前磁器碗約70点1332.3ｇ・皿約200点8743.4ｇ・鉢２点667.0ｇ・浅鉢２点422.0ｇ・猪口３点234.0ｇ・袋物約50点332.2ｇ・仏飯器３点209.1ｇ・戸車６点143.5ｇ、在地系陶器鉢・鍋約15点816.4ｇ・壺約10点387.0ｇ・袋物類約88点1631.6ｇ、擂鉢(産地分けせず)約20点7346.5ｇ、近代以降磁器10点154.5ｇ、土製品では貝風呂約130点8076.4ｇ、焙烙１点64.4ｇ、器種不明土製品３点47.6ｇ、羽口約50点416.3ｇ、石製品では砥石７点913.5ｇ、鉄製品では煙管１点6.4ｇ、不明鉄製品12点401.4ｇ、木製品では、建築具材、桶、折敷、連歯下駄、刳り下駄、陰卯下駄、鋤が出土した。このうち須恵器坏１点、肥前陶器皿１点・小壺１点・火入れ２点・秉燭１点、肥前磁器碗２点・皿７点・鉢１点・浅鉢２点・猪口１点、在地系陶器鉢１点、擂鉢３点、貝風呂２点、焙烙１点を図示した(第113～117図339～369)。

《所見・時期》出土遺物の中には被熱を受け釉薬が溶けたり、炭化した木製品がある程度確認されることから、火事の後に、遺物を廃棄したゴミ穴として最終的に利用されたものと考えられる。時期は、出土遺物から近世末期～近代と推定される。

ＳＫⅠ147竪穴建物跡(第27・29・39・40・106図、図版18)

《位置・確認状況》ＫＭ46、ＫＮ46に位置する。第Ⅳ層地山上面で、灰オリーブ色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸2.48ｍ(Ｎ－73°－Ｅ)、短軸2.12ｍの隅丸方形を呈す。確認面からの深さは0.24ｍである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《埋土》２層に分けた。１・２層ともに、グライ化したⅢ層土由来の灰オリーブ色土を基質とする人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から近世の在地系陶器甕１点147.0ｇの他、杭状の丸太材片が出土した。このうち在地系陶器甕１点を図示した(第117図370)。

《所見・時期》時期は、出土遺物から近世以降と推定される。

ＳＫⅠ171竪穴建物跡(第20・21・37・106図、図版18)

《位置・確認状況》ＬＲ53・54、ＬＳ53に位置する。第Ⅳ層地山上面で、オリーブ黒色・黒褐色土の分布が確認された。ＳＯ204カマド状遺構と重複して新しい。

《規模・形態》平面形は、長軸2.88ｍ(Ｎ－71°－Ｅ)、短軸2.34ｍの不整円形を呈す。確認面からの深さは0.51ｍである。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。南西側は一部突き出た段差があり、張り出しが付設されている。また周辺には関連する柱穴がなく、上部構造は不明である。

《埋土》３層に分けた。１～３層全て第Ⅳ層地山土由来のグライ化したオリーブ黒色・黒褐色土を基

質とする。１層は地山土塊を含むことから、最終的な一括埋め戻し土と考えられる。２・３層も地山土粒を含み凹レンズ状に堆積していることから、竪穴建物廃絶後の自然流入による堆積土と考えられる。

《出土遺物》埋土から肥前磁器袋物１点8.6ｇが出土した。

《所見・時期》時期は、出土遺物から18世紀以降と推定される。

ＳＫＩ197竪穴建物跡(第28・29・40・106図、図版18)

《位置・確認状況》ＫＬ47～49・ＫＭ47～49に位置する。第Ⅳ層地山上面で、北西側で重機により撹乱を受け、一部消失した状況が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸6.31ｍ(Ｎ－42°－Ｅ)、短軸4.93ｍの隅丸方形を呈す。確認面からの深さは、0.80ｍである。底面は平坦で、壁は南西側では急に立ち上がる。北東側でも急に立ち上がるが、再び平坦になり、その後緩やかに立ち上がる。北東部は一部突き出し、張り出し部と考えられる。また周辺には関連する柱穴がなく、上部構造は不明である。

《出土遺物》埋土から土師器甕１点26.1ｇ、須恵器坏１点19.2ｇ、肥前磁器皿３点78.7ｇ、木製品では独楽や楔、底板、角材、加工板材等が出土した。肥前磁器皿は一部被熱を受けていた。

《所見・時期》時期は、埋土から出土した肥前磁器皿より、18世紀後半と推定される。

④井戸跡

ＳＥ44井戸跡(第16・35・107図、図版18)

《位置・確認状況》ＭＩ50・51、ＭＪ50・51に位置する。第Ⅳ層地山上面で、黒褐色土に灰褐色土が周る分布が確認された。その後、断面調査のため断ち割りを入れ調査したところ、分布がさらに拡大することが判明した。Ｐ360・361・376・377・379と重複して古い。

《規模・形態》平面形は、長軸2.21ｍ(Ｎ－５°－Ｅ)、短軸2.14ｍの不整円形を呈す。確認面からの深さは底面まで掘りきっていないため不明であるが、確認面から1.66ｍまで確認された。堆積状況から井戸枠を伴い、さらに土坑として再利用された可能性が考えられる。

《埋土》８層に分けた。１・２・４・５・７層は、第Ⅲ層土由来の黒褐色及びグライ化した灰黄褐色土を、６・８層は第Ⅳ層地山土由来のにぶい黄褐色・にぶい黄橙色土を基質とする。３層は炭化物層である。１・２層は混入物を含むことから、人為的な一括埋め戻し土、３層は炭化物が凹レンズ状に堆積していることから、自然流入による堆積土と考えられる。また４～６層は、それぞれ地山土塊や暗褐色土を含むことから、井戸廃絶後の一括埋め戻し土と考えられ、４層には廃絶に際し入れられた径13cmの礫が残る。また７層は廃絶時、板材が入れられた埋め戻し土、８層は井戸構築時の井戸枠裏込め土と考えられる。また１～３層は、その堆積状況から、４層が大きく掘り込まれた後に土坑が構築され、それが廃絶された後の堆積土の可能性がある。

《出土遺物》１層から龍泉窯青磁碗１点10.9ｇ、須恵器系陶器袋物類１点240.9ｇ、４層から須恵器壺１点54.6ｇ、７層から箸や井戸枠材の可能性がある板材等、８層から肥前磁器筒形碗１点47.6ｇが、また層位不明であるが、不明鉄製品183.5ｇが出土した。７層から出土した加工板材で放射性炭素年代測定を実施した。出土遺物のうち、須恵器壺１点、龍泉窯青磁碗１点、須恵器系陶器袋物１点、肥前磁器筒形碗１点、加工板材１点を図示した(第117・118図371～375)。

《所見・時期》井戸枠材と思われる板材等が出土したことから、井戸枠を伴った井戸跡と考えられ

る。堆積状況から、土坑として再利用された可能性が考えらるが、詳細は不明である。７層から出土した木片の放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1046～1162calＡＤ(１σ)の年代値が得られているが、井戸枠裏込め土である８層から、17世紀前半の肥前磁器筒形碗が出土したため、時期は、17世紀前半以降と推定される。

ＳＥ71井戸跡(第16・35・107図、図版19)

《位置・確認状況》ＭＪ50・51に位置する。第Ⅳ層上面で、西側で撹乱を受けた褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸[1.44]ｍ(Ｎ－７°－Ｗ)、短軸[1.16]ｍの略円形を呈す。確認面からの深さは1.33ｍである。底面形は長軸[1.06]ｍ、短軸0.67ｍの楕円形で、底面は平坦、壁は急に立ち上がり、中位からは垂直に立ち上がる。

《埋土》５層に分けた。埋土は３層を除き第Ⅳ層地山土由来の一部グライ化した褐色・オリーブ灰色土を基質とする。３層は第Ⅲ層土由来のグライ化した灰黄褐色土と第Ⅳ層地山土由来の褐色土の混合土である。全て井戸廃絶時の人為的な一括埋め戻し土と考えられる。また１層下位では、部分的に炭化物が凹レンズ状に堆積しており、２層埋め立て後の凹みに流入したと考えられる。

《出土遺物》４層から木製品の漆椀や箸、５層から折敷・楔が出土した。折敷２点、楔１点を図示した(第118・119図376～378)。底面直上から出土した楔で放射性炭素年代測定を実施した。

《所見・時期》堆積状況から素掘りの井戸跡と推定される。放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1700～1915calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。

ＳＥ111井戸跡(第32・33・41図、図版19)

《位置・確認状況》ＪＳ46に位置する。第Ⅳ層上面で、確認調査時のトレンチにより南西側を削平された分布が確認された。調査中、埋土が崩落し地下からの湧水が激しいため、詳細な調査はできなかった。土層は記録していない。

《規模・形態》平面形は、長軸[2.06]ｍ(Ｎ－59°－Ｗ)、短軸[1.94]ｍの円形を呈す。確認面は標高17.30ｍである。

《出土遺物》確認面付近で、土師器甕２点31.2ｇが出土した。

《所見・時期》時期は、確認面付近で平安時代の遺物が出土したが、他の中近世と考えられる井戸跡の上位層でも古代の遺物が出土しているため、時期を確定させる材料としては乏しく、後世の混入の可能性がある。また周囲に古代の井戸跡はなく、近世の竪穴建物跡が周辺に配置されていることから、本遺構も近世の項に含めておく。

ＳＥ126井戸跡(第28～30・40・107図、図版19)

《位置・確認状況》ＫＩ47・48、ＫＪ47・48に位置する。第Ⅳ層地山上面で、黄褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》断面観察の結果、２時期の変遷が確認できた。第１期は、上端が確認されていないため詳細は不明であるが、平面形は、長軸・短軸ともに1.40ｍ規模の不定形を呈する。確認面からの深さは、1.16ｍである。底面形は、長軸[1.07]ｍ、短軸[1.07]ｍの円形で、底面は平坦、壁は急に立ち上がる。第２期の平面形は、長軸〈1.26〉ｍ(Ｎ－30°－Ｗ)、短軸[1.20]ｍの隅丸方形を呈す。確認面からの深さは0.80ｍである。底面形は、長軸[0.85]ｍ、短軸[0.79]ｍの隅丸方形で、底面は平坦、壁は急に立

ち上がる。堆積状況や出土遺物を含め井戸枠を伴っていた可能性がある。

《埋土》５層に分けた。１～４層が第２期、５層が第１期の埋土である。１～５層はグライ化の影響で変色しているが、全て第Ⅳ層地山土由来である。１・２層は井戸第２期廃絶時の人為的な埋め戻し土である。１層では、廃絶に際して投入された井戸枠材の可能性がある板材や径20cmの礫が確認される。３・４層は第２期構築時の井戸枠裏込め土、５層は地山土塊を含むことから、井戸第１期廃絶後の人為的な埋め戻し土と考えられる。５層が大きく掘り込まれるように井戸第２期が構築されている。

《出土遺物》１層から、井戸枠材の可能性がある板材及び礫が、また上位層で鉄製品１点18.6ｇが出土した。

《所見・時期》形状や堆積状況から、２時期あることが判明した。第２期は、裏込め土が残り、井戸枠材と考えられる板材が出土していることから、井戸枠を伴う井戸跡の可能性がある。第１期は、底面や壁の立ち上がりが、第２期と類似しており、こちらも井戸枠を伴った井戸跡の可能性がある。時期は、出土遺物がなく不明である。

ＳＥ142井戸跡（第30・40・108図、図版19）

《位置・確認状況》ＫＨ44、ＫＩ44に位置する。第Ⅳ層地山上面で、東及び南側が調査区外へ続くにぶい黄橙色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸〈2.05〉ｍ（Ｎ－40°－Ｅ）、短軸〈2.03〉ｍの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.76ｍである。底面形は、長軸1.06ｍ、短軸0.98ｍの隅丸方形で、底面は平坦、壁は急に立ち上がるが、平坦になった後、再び急に立ち上がる。

《埋土》埋土は15層に分けた。２～７・９は第Ⅲ層土由来のグライ化したオリーブ黒色・黒褐色土を、１・８・10・13は第Ⅳ層地山土由来のにぶい黄橙色、グライ化した暗オリーブ色・オリーブ褐色土を基質とする。11層は黒褐泥状土である。また12・14・15層はグライ化の影響で、由来土は不明である。堆積状況から、当初大きく掘り下げられ、13～15層が埋め立てられたと考えられる。その後、13～15層が掘込まれ、改めて井戸が構築されたと考えられる。１～10層は、各層の基質土とは異なる第Ⅳ層地山由来土や第Ⅲ層由来土を多く含むことから、井戸廃絶時の人為的な一括埋め戻し土と考えられる。10層は廃絶に伴う植物や木片の投げ入れがある。11層は炭化物が凹レンズ状に堆積していることから、井戸使用時の自然流入による堆積土と考えられる。

《出土遺物》埋土から、土師器甕１点12.7ｇ、肥前磁器皿１点3.6ｇ、土製品である貝風呂４点98.7ｇの他、加工木材片が出土した。

《所見・時期》井戸枠や井戸枠材と考えられる加工材が出土していないことから、素掘りの井戸跡と推定される。時期は、肥前磁器皿や貝風呂が出土したことから近世後期以降と推定される。

⑤溝跡

ＳＤ02溝跡（第11・12・34・108図、図版19）

《位置・確認状況》ＭＳ52に位置する。第Ⅳ層地山上面で、上部は大きく削平を受け、北東から南西へ走る褐色土の分布が確認された。底面で４基の柱穴様ピットが確認され、本遺構に伴うものと判断した。直接の重複はないが、延長線上でＳＤ18溝跡と直交する。

《規模・形態》長さ2.56ｍ、径0.16～0.28ｍ、確認面からの深さ0.06ｍ（Ｃ－Ｄ断面）である。底面は鍋

底状で、壁は緩やかに立ち上がる。また底面で柱穴が４基確認された。規模は長軸0.22～0.26m、短軸0.17～0.25m、検出面からの深さは0.09～0.23mである。
《埋土》単層である。第Ⅳ層地山土由来の褐色土を基質とする。柱穴埋設後、一気に埋め立てられたと思われる。また廃絶時に柱を抜き取った後、埋土と同様の土が入り混んでいる。
《出土遺物》なし。
《所見・時期》４基の柱穴が伴い布掘り溝状を呈することから、板塀が建っていた可能性がある。ＳＤ18溝跡と密接に関係し、区画を目的としたものと考えられる。時期は、出土遺物がなく不明である。

ＳＤ18溝跡（第11・12・34・108図、図版19）
《位置・確認状況》ＭＲ51・52、ＭＳ52に位置する。第Ⅳ層地山上面で、南東から北西へ走る褐色土の分布が確認された。上部は大きく削平を受けている。直接の重複はないが、ＳＤ02溝跡の延長線上と直交する。
《規模・形態》長さ5.70m、径0.24～0.40m、確認面からの深さ0.06m（Ａ－Ｂ断面）である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。また柱穴が底面で１基確認された。本遺構に伴うものと考えられる。規模は、長軸0.27m、短軸0.21mの楕円形で、検出面からの深さは0.14mである。
《埋土》単層である。第Ⅳ層地山土由来の褐色土を基質とする。柱穴埋設後、一気に埋め立てられたと思われる。また廃絶時に柱を抜き取った後、埋土と同様の土が入り混んでいる。
《出土遺物》なし。
《所見・時期》ＳＤ02溝跡と密接に関係し、区画を目的とした板塀が建っていた可能性がある。時期は、出土遺物がなく不明である。

ＳＤ146溝跡（第29・30・40・108図、図版19）
《位置・確認状況》ＫＪ45・46に位置する。第Ⅳ層上面で、上部は大きく削平を受け、北東から南西方向に走るオリーブ黒色土の分布が確認された。ＳＫ124土坑と重複して新しい。
《規模・形態》長さ〈2.13〉m、径0.12～0.22m、確認面からの深さ0.09mで、北東から南西へ走る溝である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。
《埋土》単層である。グライ化した第Ⅲ層土由来のオリーブ黒色土を基質とした、人為的な埋め戻し土と考えられる。
《出土遺物》なし。
《所見・時期》溝は北側の調査区外へ伸びておらず、排水施設とは考え難い。よって区画のための施設と考えられるが、詳細は不明である。時期は、出土遺物がなく不明である。

ＳＤ242溝跡（第24・38・109図）
《位置・確認状況》ＬＪ48～50、ＬＫ46～48に位置する。第Ⅳ層地山上面で、確認調査時のトレンチにより遮断され、南側調査区外から北側調査区外へ南北に走る暗褐色土の分布が確認された。Ｐ1297～1299と重複して古い。
《規模・形態》長さ〈15.84〉m、径0.12～0.32m、深さ0.08m（Ａ－Ｂ断面）である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。
《埋土》単層である。第Ⅲ層土由来の暗褐色土を基質とする。地山土塊を多く含むことから、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》溝は北側の低地である調査区外へ伸びていくことから、排水施設と考えられる。また区画の役割を兼ねた可能性もあるが、詳細は不明である。時期は、出土遺物がなく不明である。

⑥土坑

ＳＫ09土坑（第11・34・44図、図版５）

《位置・確認状況》ＭＴ53・54に位置する。第Ⅳ層上面で、褐色土の分布が確認された。ＳＥ10井戸跡と重複して新しい。

《規模・形態》平面形は、長軸[1.45]ｍ（Ｎ－83°－Ｗ）、短軸1.05ｍ、楕円形形を呈す。確認面からの深さは0.39ｍである。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がるが、西側では一部段をなす。

《埋土》単層である。第Ⅳ層地山土由来の褐色土を基質とする。炭化物粒を含むことから、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》有孔礫１点22.4ｇが出土した。

《所見・時期》時期は、古代のＳＥ10井戸跡と重複して新しいことから、古代以降と考えられるが、出土遺物がなく不明である。

ＳＫ11土坑（第11・34・109図）

《位置・確認状況》ＭＳ54に位置する。第Ⅳ層地山上面で、上部で削平を受けた褐色土の分布が確認された。ＳＫ12土坑と重複して古い。

《規模・形態》平面形は、長軸0.88ｍ（Ｎ－34°－Ｅ）、短軸0.74ｍの略円形を呈す。確認面からの深さは0.09ｍである。底面はやや凹凸があるが、比較的平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》単層である。第Ⅳ層地山土由来の褐色土を基質とした、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から土錘1.9ｇが１点が出土した。

《所見・時期》時期は、出土遺物がなく不明である。

ＳＫ12土坑（第11・34・109図）

《位置・確認状況》ＭＳ54、ＭＴ54に位置する。第Ⅳ層地山上面で、上部で削平を受けた、にぶい黄褐色土の分布が確認された。ＳＥ10井戸跡、ＳＫ11土坑と重複して新しい。

《規模・形態》平面形は、長軸1.26ｍ（Ｎ－15°－Ｅ）、短軸1.16ｍの略円形を呈す。確認面からの深さは0.16ｍである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《埋土》単層である。第Ⅳ層地山土由来のにぶい黄褐色土を基質とする。人為的な埋め戻し土と考えられる

《出土遺物》なし。

《所見・時期》時期は、出土遺物がなく不明である。

ＳＫ13土坑（第10・11・34・109図）

《位置・確認状況》ＭＲ54に位置する。上部及び南側で削平を受けた、褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸〈0.52〉ｍ（Ｎ－０°－Ｅ）、短軸0.62ｍの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.07ｍである。

《埋土》単層である。第Ⅳ層土由来の褐色土を基質とした、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》時期は、出土遺物がなく不明である。

ＳＫ16土坑(第11・34・109図)

《位置・確認状況》ＭＴ53に位置する。上部で削平を受けた、褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.84m(Ｎ－20°－Ｅ)、短軸0.78mの不整円形を呈す。確認面からの深さは0.08mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《埋土》単層である。第Ⅳ層土由来の褐色土を基質とした、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》時期は、出土遺物がなく不明である。

ＳＫ17土坑(第11・34・109図)

《位置・確認状況》ＭＴ53に位置する。第Ⅳ層地山上面で、上部で削平を受けた、黄褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.80m(Ｎ－43°－Ｅ)、短軸0.74mの略円形を呈す。確認面からの深さは0.08mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》単層である。第Ⅳ層地山土由来の黄褐色土を基質とした、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》時期は、出土遺物がなく不明である。

ＳＫ22土坑(第８・109図)

《位置・確認状況》ＮＧ60・61に位置する。第Ⅳ層地山上面で、分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.94m(Ｎ－52°－Ｅ)、短軸0.88mの略円形を呈す。確認面からの深さは0.49mである。底面はやや平坦で、壁は急に立ち上がる。

《出土遺物》埋土から土師器甕１点4.8ｇ・器種不明１点3.3ｇが出土した。

《所見・時期》形状から水溜の可能性があるが、詳細は不明である。時期は、平安時代の遺物が出土したが、周辺で同時代の遺構が検出されていない。よって後世の混入の可能性があり、不明である。

ＳＫ26土坑(第12・110図)

《位置・確認状況》ＭＰ49に位置する。第Ⅳ層地山上面で、にぶい黄褐色土の分布が確認された。Ｐ07と重複して古い。

《規模・形態》平面形は、長軸1.00m(Ｎ－103°－Ｅ)、短軸0.88mの略円形を呈す。確認面からの深さは0.25mである。底面はやや平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》２層に分けた。１・２層ともに第Ⅳ層地山土由来のにぶい黄褐色土を基質とする。それぞれ、炭化物粒や焼土塊を含むことから、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》時期は、出土遺物がなく不明である。

ＳＫ32土坑(第８・110図)

《位置・確認状況》ＮＦ61に位置する。第Ⅳ層地山上面で、にぶい黄褐色・褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.88m(Ｎ－48°－Ｅ)、短軸0.78mの略円形を呈す。確認面からの深さは0.39mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》２層に分けた。１層は第Ⅲ層土由来のにぶい黄褐色土を、２層は第Ⅳ層地山土由来の褐色土を基質とする。１・２層とも地山土塊を含むことから、人為的な埋め戻し土と考えられる。
《出土遺物》なし。
《所見・時期》時期は、出土遺物がなく不明である。

ＳＫ33土坑（第８・110図）
《位置・確認状況》ＮＥ61に位置する。第Ⅳ層地山上面で、削平を受けた、にぶい黄橙色土の分布が確認された。
《規模・形態》平面形は、長軸0.90ｍ（Ｎ－83°－Ｅ）、短軸0.80ｍの略円形を呈す。確認面からの深さは、0.12ｍである。底面は平坦で、壁は西側では急に、東側では緩やかに立ち上がる。
《埋土》単層である。第Ⅳ層地山土由来のにぶい黄橙色土を基質とする。第Ⅲ層土由来の暗褐色土塊を含むことから、人為的な埋め戻し土と考えられる。
《出土遺物》なし。
《所見・時期》時期は、出土遺物がなく不明である。

ＳＫ59土坑（第13・34・110図）
《位置・確認状況》ＭＯ55に位置する。第Ⅳ層地山上面で、西側半分は、断面断割により消失した暗褐色の分布が確認された。
《規模・形態》平面形は、長軸[0.82]ｍ（Ｎ－７°－Ｅ）、短軸〈0.40〉ｍの楕円形を呈すと推定される。確認面からの深さは0.13ｍである。底面はやや平坦で、壁は急に立ち上がる。
《埋土》単層である。第Ⅲ層土由来の暗褐色土を基質とする。炭化物粒を含むことから、人為的な一括埋め戻し土と考えられる。
《出土遺物》なし。
《所見・時期》時期は、出土遺物がなく不明である。

ＳＫ61土坑（第10・110図）
《位置・確認状況》ＮＡ56に位置する。第Ⅳ層地山上面で、調査区外へ続く暗褐色土の分布が確認された。
《規模・形態》平面形は、長軸0.63ｍ（Ｎ－48°－Ｅ）、短軸〈0.18〉ｍの楕円形を呈す。底面は鍋底状で、壁は緩やかに立ち上がる。
《埋土》単層である。第Ⅲ層土由来の暗褐色土を基質とする。地山土粒や炭化物粒を含むことから、人為的な一括埋め戻し土と考えられる
《出土遺物》なし。
《所見・時期》東に隣接するＳＴ60火葬墓と形状が類似しており、火葬墓の可能性があるが断定できない。時期は、出土遺物がなく不明である。

ＳＫ106土坑（第30・40・110図、図版19）
《位置・確認状況》ＫＨ45に位置する。第Ⅳ層地山上面で、にぶい黄褐色・褐色土の分布が確認された。
《規模・形態》平面形は、長軸1.40ｍ（Ｎ－31°－Ｅ）、短軸1.02ｍの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.26ｍである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《埋土》３層に分けた。１層は、第Ⅲ層土由来のにぶい黄褐色土を、２・３層は第Ⅳ層地山土由来の褐色・オリーブ褐色～暗オリーブ褐色土を基質とする。３層はグライ化している。すべて人為的な一括埋め戻し土と考えられ、特に１層土は地山土塊を多く含んでいる。

《出土遺物》２・３層を中心に、土師器甕11点79.3ｇ、須恵器坏３点30.2ｇ・甕１点42.5ｇ、肥前陶器甕１点133.5ｇの他、小礫が数点出土した。

《所見・時期》時期は、肥前陶器甕が出土したことから近世と推定される。

ＳＫ112土坑（第32・33・41図）

《位置・確認状況》ＪＴ44・45に位置する。第Ⅳ層地山上面で、にぶい黄褐色土の分布が確認された。確認面のみおさえた。

《規模・形態》断面観察をしていないため、深さは不明である。平面形は、長軸0.96ｍ（Ｎ-77°-Ｅ）、短軸0.92ｍの円形を呈す。

《埋土》土層記録をしていないため堆積状況は不明であるが、確認面による観察では、第Ⅲ層土由来のにぶい黄褐色土を基質とする。地山土塊を含むことから、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》時期は、出土遺物がなく不明である。

ＳＫ124土坑（第29・30・40・108図）

《位置・確認状況》ＫＪ46に位置する。第Ⅳ層地山上面で、上部は大きく削平を受けた、黄灰色土の分布が確認された。ＳＤ146溝跡と重複して古い。

《規模・形態》平面形は、長軸1.54ｍ（Ｎ－85°－Ｅ）、短軸1.16ｍの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.15ｍである。底面はやや凹凸があるが比較的平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《埋土》単層である。グライ化した第Ⅲ層土由来の黄灰色土を基質とする。地山土や炭化物の混入が僅かに見えることから、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》１層から近世陶器皿１点2.1ｇが出土した。

《所見・時期》時期は、１層から17世紀前半の陶器皿が出土したことから、近世初頭と推定される。

ＳＫ131土坑（第30・41・110図）

《位置・確認状況》ＫＦ44に位置する。第Ⅳ層地山上面で、にぶい黄褐色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸1.04ｍ（Ｎ－６°－Ｅ）、短軸0.80ｍの略円形を呈す。確認面からの深さは、0.34ｍである。底面は平坦で、壁は西側では急に、東側では緩やかに立ち上がる。

《埋土》単層である。第Ⅲ層土由来のにぶい黄褐色土を基質とする。堆積状況から人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》時期は、出土遺物がなく不明である。

ＳＫ132土坑（第30・31・40・41・110図）

《位置・確認状況》ＫＦ45、ＫＧ45に位置する。第Ⅳ層地山上面で、上部は大きく削平された、にぶい黄褐色土の分布が確認された。Ｐ1461と重複して古い。

《規模・形態》平面形は、長軸1.52ｍ（Ｎ－86°－Ｅ）、短軸1.17ｍの略円形を呈す。確認面からの深さは0.13ｍである。底面は平坦で、壁は西側では急に、東側では緩やかに立ち上がる。

《埋土》単層である。第Ⅲ層土由来のにぶい黄褐色土を基質とする。地山土塊や炭化物粒、焼土粒を含むことから人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》時期は、出土遺物がなく不明である。

ＳＫ137土坑(第27・29・39・40・110図)

《位置・確認状況》ＫＮ45に位置する。第Ⅳ層地山上面で、上部は大きく削平された、灰オリーブ・暗オリーブ色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸〈1.74〉ｍ(Ｎ－88°－Ｗ)、短軸0.78ｍの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.15ｍである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》３層に分けた。１～３層全て、第Ⅲ層土由来のグライ化した灰オリーブ色・暗オリーブ色土を基質とする。地山土塊を多く含むことから、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》時期は、出土遺物がなく不明である。

ＳＫ138土坑(第27・29・39・40・111図)

《位置・確認状況》ＫＮ45・46に位置する。第Ⅳ層地山上面で、上部は大きく削平され、南側は調査区外へ続く、暗オリーブ～灰オリーブ色土の分布が確認された。

《規模・形態》上部は大きく削平を受け、南側は調査区外へ続くことから全体の形態は不明である。現状から平面形は、長軸〈1.74〉ｍ(Ｎ－88°－Ｗ)、短軸〈0.92〉ｍの不整楕円形を呈すると推定される。確認面からの深さは0.21ｍである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《埋土》３層に分けた。１・２層は第Ⅲ層土由来の暗オリーブ色・灰色土を基質とし、３層は第Ⅳ層地山土由来の灰オリーブ色土を基質とする。全てグライ化していた。それぞれ地山土や灰褐色土及び炭化物を含むことから、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》時期は、出土遺物がなく不明である。

ＳＫ139土坑(第26・27・29・39・40・111図)

《位置・確認状況》ＫＮ46に位置する。第Ⅳ層地山上面で、上部を大きく削平された、オリーブ黒色・暗オリーブ色土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸2.96ｍ(Ｎ－22°－Ｅ)、短軸1.56ｍの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.19ｍである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《埋土》４層に分けた。全てグライ化していた。１～３層は第Ⅲ層土由来のオリーブ黒色・暗オリーブ色土を、４層は第Ⅳ層地山土由来の灰オリーブ色土を基質とする。それぞれ、１～３層は地山土、４層は第Ⅲ層土由来の灰褐色土を多く含むことから、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》埋土から、土師器甕４点18.6ｇ、須恵器坏１点21.5ｇ、肥前磁器猪口１点8.8ｇ、羽口１点6.4ｇが出土した。そのうち肥前磁器猪口１点を図示した(第118図379)。

《所見・時期》時期は、肥前磁器猪口が出土したことから、近世半ば以降と推定される。

ＳＫ145土坑(第30・40・111図)

《位置・確認状況》ＫＨ44に位置する。第Ⅳ層地山上面で、上部は大きく削平された、にぶい黄褐色

土の分布が確認された。

《規模・形態》平面形は、長軸0.90m（N－41°－W）、短軸0.56mの楕円形を呈す。確認面からの深さは0.17mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

《埋土》単層である。第Ⅲ層土由来のにぶい黄褐色土を基質とする。塊状に堆積していることから、人為的な埋め戻し土と考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》時期は、出土遺物がなく不明である。

⑦焼土遺構

ＳＮ108焼土遺構（第33・41・111図、図版19）

《位置・確認状況》ＪＲ45、ＪＳ45に位置する。第Ⅳ層地山上面で、焼土と炭化物の分布が確認された。

《規模・形態》掘形の平面形は、長軸1.14m（N－60°－W）、短軸0.61mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.19mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がるが、一旦平らになり、再び開口部へ向かう。焼土の平面形は、長軸0.90m、短軸0.61mで、被熱厚は0.02～0.19mである。

《層序》３層に分けた。１・２層は焼土で、１層は強被熱範囲、２層は弱被熱範囲である。２層は１層周辺に広がっていた。１・２層ともに第Ⅲ層土及び第Ⅳ層地山土由来の土が埋められ、その上面で火が焚かれたと考えられる。３層は、火が焚かれた際に形成された炭化物で、焼土遺構使用時に東側へ掻き出され、それによってできた凹みに堆積したものと考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》周辺には、上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉と考えられる。時期は、出土遺物がなく不明である。

ＳＮ110焼土遺構（第32・33・41・111図、図版20）

《位置・確認状況》ＪＳ45、ＪＴ45に位置する。第Ⅳ層地山上面で、径30cmの礫周辺に炭化物の分布が確認された。その後炭化物を除去したところ、礫の周辺に褐色土・焼土の分布が確認され、掘り込み底面で、火が焚かれたものと判断した。

《規模・形態》掘形の平面形は、長軸0.46m（N－100°－E）、短軸0.43mの不整形を呈す。確認面からの深さは0.16mである。底面形は、長軸0.51m、短軸0.48mの円形を呈す。底面は平坦で、壁は東側は急に立ち上がる。それ以外ではオーバーハングして開口部へ立ち上がる。焼土の平面形は、長軸0.80m、短軸0.72m、被熱厚は１～６cmである。

《層序》４層に分けた。１・２層は第Ⅲ層土由来の暗褐色土を基質とする。１層は人為的な埋め立て土で、焼土遺構廃絶に伴い礫が入れられたと考えられる。２層は炭化物層で、廃絶時の状態を残し、炭化物を多量に含んでいた。３・４層は焼土で、焼土遺構使用時の被熱痕である。３層は強被熱範囲で、掘形周辺で確認された。４層は弱被熱範囲で、３層周辺に広がる状態を確認した。

《出土遺物》廃絶に伴う径30cmの礫が出土した。

《所見・時期》周辺には、上屋施設となる柱穴が認められない。土坑状に掘り下げ、底面で火を焚いた野外の地床炉と考えられる。時期は、出土遺物がなく不明である。

ＳＮ113焼土遺構(第31・32・41・112図)

《位置・確認状況》ＫＢ46、ＫＣ46に位置する。第Ⅳ層地山上面で、焼土及び炭化物の分布が確認された。焼土及び炭化物の分布を掘り下げ、さらに精査したところ、７基の焼土遺構(ａ～ｅ・ｇ・ｈ)及び土坑１基(ｆ)が検出された。検出状況及び埋土から、これらを一連のものとして扱った。このうち５基の焼土遺構(焼土ａ～ｅ)は、北西から南東へ直線的に並んでいた。焼土ｅ・ｇでは、一部が近代以降の建物に伴う柱穴跡による撹乱を受けていた。

《規模・形態》焼土ｅ・ｇは撹乱を受けていたため、全体の形態は不明である。焼土ａ～ｅ・ｈの平面形は、長軸0.30～0.92m、短軸0.28～0.54mで、ａ・ｂ・ｅは楕円形、ｃは不整形、ｄは不整円形、ｇは略円形、ｈは円形を呈す。最大被熱厚は４～16cmである。焼土ａ～ｅは直線上にＮ－56°－Ｗで並んでいる。焼土ｇは土坑状に掘られ、底面に火が焚かれた痕跡が残る。掘形の平面形は、長軸0.48m(Ｎ－57°－Ｅ)、短軸[0.41]mの不整円形を呈す。確認面からの深さは0.12mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。焼土の平面形は、長軸1.15m、短軸0.85mの不整円形を呈す。最大被熱厚16cmである。土坑ｆの平面形は、長軸1.08m(Ｎ－８°－Ｅ)、短軸0.96mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.20mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

《層序》７層に分けた。１層は第Ⅳ層地山土由来の褐色土、２～４層は、それぞれ第Ⅲ層土由来の暗褐色・にぶい黄褐色土を基質とする。５～７層は焼土で、５・６層は強被熱範囲、７層は弱被熱範囲である。１～３層は土坑ｆの埋土で、それぞれ炭化物粒、焼土粒・塊を含むことから人為的な埋め戻し土と考えられる。特に２層では焼土塊を多量に含んでいた。４層は焼土ｇの埋土で、１～３層同様に混入物を含むことから、人為的な埋め戻し土と考えられる。５層は焼土ｂ・ｃ・ｇ、６層はａ・ｄ・ｅの強被熱範囲であり、この直上面で火が焚かれたものと考えられる。７層は弱被範囲で、焼土ａ～ｅ・ｇでは５・６層の周辺に広がる様子が確認された。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》周辺には、上屋施設となる柱穴が認められないため、焼土ａ～ｅ・ｇ・ｈは、ｇのみ地山面を掘り下げているが、他は地山上面で火を焚いた野外の地床炉と考えられる。土坑ｆは、埋土にこれら焼土遺構から生じた焼土粒・塊、炭化物粒を含み、他の焼土遺構と近接しているため、これら焼土遺構と一連のものと判断したが、詳細な性格は焼土遺構も含め不明である。時期は、出土遺物がなく不明である。

ＳＮ114焼土遺構(第31・32・41・111図、図版20)

《位置・確認状況》ＪＴ47、ＫＡ47に位置する。第Ⅳ層地山上面で、焼土と炭化物の分布が確認された。

《規模・形態》堀形の平面形は、長軸0.77m(Ｎ－51°－Ｅ)、短軸0.62mの略円形を呈す。確認面からの深さは0.12mである。被熱痕は、掘形底面まで確認された。炭化物の広がりは、東西0.96mに及ぶ。

《層序》３層に分けた。１・２層は焼土であるが、ともに地山面を掘り込み、第Ⅲ層土由来土を埋め立て、その上面で火が焚かれたと考えられる。１層は強被熱範囲で、２層は弱被熱範囲である。２層は１層を同心円状に囲むように広がる。３層は炭化物の広がりで、火が焚かれた際に形成され、掻き出されたことによりできた凹みへ、炭化物が再度堆積したと考えられる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》周辺には、上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉と考えられる。時期は、出土遺物がなく不明である。

ＳＮ154焼土遺構(第24・38・112図、図版20)

《位置・確認状況》ＬＩ48、ＬＪ48に位置する。第Ⅳ層地山上面で、上部は削平を受けた、焼土の分布が確認された。

《規模・形態》焼土の平面形は、長軸0.47ｍ、短軸0.32ｍの不整形を呈す。被熱厚は１～２cmである。

《層序》単層の焼土で、比較的弱い被熱痕である。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》周辺には、上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉と考えられる。時期は、出土遺物がなく不明である。

ＳＮ252焼土遺構(第27・39・112図、図版20)

《位置・確認状況》ＫＮ51に位置する。第Ⅳ層地山上面で、焼土の分布が確認された。

《規模・形態》焼土の平面形は、長軸0.46ｍ、短軸0.37ｍの不整形を呈す。被熱厚は４～11cmである。

《層序》２層に分けた。１・２層ともに焼土で、１層は強被熱範囲、２層は弱被熱範囲である。１層直上面で火が焚かれたと考えられる。２層は１層周辺に広がる。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》周辺には、上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉と考えられる。時期は、出土遺物がなく不明である。

ＳＮ303焼土遺構(第18・36・112図、図版20)

《位置・確認状況》ＭＣ54、ＭＤ54に位置する。第Ⅳ層地山上面で、焼土の広がりを確認した。

《規模・形態》焼土の平面形は、長軸0.74ｍ、短軸0.54ｍの不整形を呈す。被熱厚は２～６cmである。

《層序》２層に分けた。１・２層ともに焼土で、焼土遺構使用時の被熱痕である。１層は強被熱範囲で燃焼部である。２層は弱被熱範囲である。

《出土遺物》なし。

《所見・時期》周辺には、上屋施設となる柱穴が認められないため、野外の地床炉と考えられる。時期は、出土遺物がなく不明である。

⑧柱穴様ピット

調査区全域から柱穴様ピット1065基が検出された。これら柱穴様ピットの埋土は第Ⅲ層土及び第Ⅳ層地山土に由来するものであるが、グライ化等の影響によりその由来を明確に判断するのは難しい。また時期区分においても、古代の遺物が、中近世の柱穴に混入した可能性もあり、出土遺物による時期の判別も困難である。よって遺跡内には、古代から近代までの柱穴様ピットが存在すると思われるが、柱穴様ピットの分布をみると、今回検出された近世の掘立柱建物跡(ＳＢ243・247・254・255・308・313・314)や柱穴列(ＳＡ244・245)の柱筋が全て北西－南東を軸としている。これと同様な向きで柱穴様ピットも分布している印象を受けることから、これらの大部分が近世及びそれ以降に属し、

それぞれ掘立柱建物及び付属施設群を構成していたと考えられる。これらの柱穴様ピットの各位置については、遺構配置図(第８～41図)に掲載した。個々の規模や形態は、柱穴様ピット一覧表に掲載した(第３～14表)。また出土遺物は、縄文土器深鉢１点、土師器甕１点、須恵器坏２点、肥前陶器碗１点・皿２点、肥前磁器皿１点、砥石２点、土錘１点を図示した(第118・119図380～390)。

(２)近世以降の遺構外出土遺物

近世及び時期不明遺構外出土遺物は、瀬戸美濃陶器皿19点257.1ｇ、肥前陶器碗皿類135点1926.9ｇ・袋物類134点5000.8ｇ・その他４点157.0ｇ、肥前磁器碗皿類328点733.8ｇ・袋物類22点358.8ｇ・その他13点370.0ｇ、在地系陶器碗皿類26点366.0ｇ・鉢９点1098.2ｇ・袋物類72点1639.7ｇ・その他13点1359.0ｇ、擂鉢88点9155.7ｇ、貝風呂391点6860.7ｇ、鉢１点156.7ｇ、羽口293点3708.8ｇ、砥石７点1456.5ｇ、銭貨(寛永通宝)10点24.4ｇ、不明鉄製品84点2737.7ｇ、鉄滓(炉壁含む)243点4036.3ｇである。図示したものは、瀬戸美濃陶器碗１点・皿７点、肥前陶器碗２点・皿６点、肥前磁器碗２点・皿２点・鉢１点、在地系陶器皿１点・鉢１点・壺１点、擂鉢１点、羽口１点、銭貨10点である(第120～122図391～426)。出土遺物の特徴は、近世後期に当たるものが多く、近世前～中期の年代のものは相対的に少ない。

391～398は瀬戸美濃陶器で、391は碗、他は皿である。大窯第３段階(16世紀後半)～登窯第１段階(17世紀中葉)に当たる。392は丸皿、393・394は志野焼皿、395・397・398は内禿皿、396は折縁皿である。

399～406は肥前陶器である。399・400は碗で、399は天目茶碗である。401～406は皿である。それぞれ見込に、焼成時の窯積め痕が残る。401・402は胎土目積痕が、404・405は砂目積痕が残り、406は内野山窯産で蛇ノ目釉剥ぎが施されている。403は大皿で、鉄絵が施されている。

407～411は肥前磁器である。407・408は碗、409・410は皿、411は鉢である。407・410は粗悪な波佐見産で、410には、見込に406同様蛇ノ目釉剥ぎが施されている。409は初期伊万里、408は19世紀前半に流行した端反碗である。411は蛇ノ目凹形高台の鉢である。

412～414は在地系陶器である。412は楢岡焼(大仙市南外産)、413・414は白岩焼(仙北市角館産)である。412は皿で見込が蛇ノ目釉剥ぎである。413は鉢で見込に胎土目積痕が残る。414は壺である。

415は擂鉢で、底部切離しは回転糸切りである。

416は羽口で、溶解炉側がアメ状に溶解している。

417～426は銭貨で、すべて寛永通宝である。417～419は古寛永銭で、寛永三(1626)年～寛文八(1668)年に鋳造されたものである。一方420～426は新寛永銭で、寛文八年以降に鋳造されたものである。420・423は裏に「文」の字が施されている。

註１　秋田市教育委員会『秋田城跡－政庁跡－』2002(平成14)年
　　秋田市『秋田市史　第七巻　古代史料編』2001(平成13)年
註２　島田祐悦「出羽北半の古代土器の変遷－横手盆地の事例を中心に－」『秋田考古学』第56号　2012(平成24)年
　　東北古代土器研究会『東北古代土器集成－須恵器・窯跡編－〈出羽〉』松弘堂　2008(平成20)年
註３　吉岡康暢『須恵器系陶器』吉川弘文館　1994(平成６)年
　　珠洲市立珠洲焼資料館『珠洲の名陶』橋本確文堂　1989(平成元)年
註４　太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』　2000(平成12)年
註５　上田秀夫「14～16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁　No.２』貿易陶磁研究会　1982(昭和57)年
註６　愛知県史編さん委員会『愛知県史　別編　窯業２　中世・近世　瀬戸系』　2007(平成19)年
註７　九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年　九州近世陶磁器会10周年記念』　2000(平成12)年
　　大橋康二『考古学ライブラリー55　肥前陶磁』ニューサイエンス社　1989(平成元)年

参考文献

伊藤博幸「古代東北の甕二題－陸奥型甕と出羽型甕－」『第31回古代城柵官衙検討会資料集』　2005(平成17)年
小野正敏編『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会　2001(平成13)年
江戸遺跡研究会編『図説江戸考古学』柏書房　2001(平成13)年
永井久美男『新版中世出土銭の分類図版』高志書院　2002(平成14)年
日本貨幣共同組合編『日本貨幣カタログ　2005年版』日本貨幣共同組合　2005(平成17)年
鐘方正樹『ものが語る歴史８　井戸の考古学』同成社　2003(平成15)年

第３表　柱穴様ピット一覧表（１）

柱穴番号	挿図番号	所在グリッド	長軸×短軸（m）	平面形状	深さ（m）	底面標高（m）	重複(旧→新)	備　考
01	第25図	ＬＣ45	0.30×0.30	円形	0.48	17.201		
07	第12図	ＭＰ49	0.30×0.28	楕円形	0.22	15.900	ＳＫ26→Ｐ07	
11	第10図	ＭＴ57	0.31×0.29	隅丸方形	0.13	17.044		
13	第10図	ＭＴ57	0.19×0.18	隅丸方形	－	－		
14	第10図	ＭＴ57	0.36×0.32	隅丸方形	0.16	16.990		
15	第10図	ＭＴ57	0.34×0.33	隅丸方形	0.24	16.954		
16	第10図	ＭＴ57	0.20×0.18	隅丸方形	0.06	17.094		
17	第10図	ＭＴ57	0.21×0.20	不整円形	0.05	17.085		
18	第10図	ＭＴ56	0.19×0.17	不整円形	0.24	16.870		
19	第10図	ＭＴ56	0.40×0.37	隅丸方形	0.55	16.584		
20	第10図	ＭＴ56	0.32×0.32	隅丸方形	0.52	16.621		肥前磁器皿１点(1.2g)
21	第10図	ＭＴ56	0.20×0.20	円形	0.13	17.094		
22	第10図	ＭＴ56	0.16×0.16	円形	0.12	17.097		
23	第10図	ＭＴ56	0.48×0.40	不整形	0.21	16.993		
24	第10図	ＭＴ56	0.22×0.20	円形	0.10	17.099		
25	第13･34図	ＭＮ55	0.35×0.32	隅丸方形	0.10	17.110		
26	第10図	ＭＳ57	0.21×0.20	隅丸方形	0.18	16.977		
28	第10図	ＭＳ57	0.28×0.27	隅丸方形	0.30	16.877		
29	第10図	ＭＳ56･57	0.18×0.16	隅丸方形	0.19	17.000		
30	第10図	ＭＳ56	0.20×0.18	不整楕円形	0.32	16.814		
31	第10･34図	ＭＳ56	0.44×0.38	楕円形	0.32	16.617		
32	第10図	ＭＲ57	0.58×0.38	隅丸方形	0.64	16.611		
36	第10図	ＭＱ56	0.36×0.14	不整形	0.08	17.094		
37	第10図	ＭＱ56	0.59×0.41	楕円形	0.61	16.646		
38	第10図	ＭＱ56	0.20×0.19	隅丸方形	0.24	17.026		
40	第10図	ＭＱ56	0.16×0.14	円形	0.17	17.073		
44	第10･34図	ＭＲ56	[0.21]×0.18	隅丸方形	0.22	16.936		
46	第10･34図	ＭＲ55	0.20×0.18	隅丸方形	0.22	16.925		
48	第10･34図	ＭＱ55･56	0.16×0.14	楕円形	0.27	16.907		
49	第10･34図	ＭＱ55	0.18×0.11	楕円形	0.13	17.039		
50	第10･11･34図	ＭＱ55	0.29×0.27	隅丸方形	0.19	16.877		
51	第10･34図	ＭＰ55	0.46×0.34	不整形	0.22	16.957		
52	第10･34図	ＭＰ55	0.16×0.15	隅丸方形	0.29	16.917		
55	第10･11･34図	ＭＰ55	0.18×0.16	隅丸方形	0.19	16.935		
56	第10･11･34図	ＭＰ55	0.24×0.22	円形	0.20	16.859		
57	第10･11･34図	ＭＰ55	0.38×0.32	楕円形	0.31	16.797		
58	第10･13･34図	ＭＰ55	0.25×0.24	隅丸方形	0.29	16.888		
59	第10･11･13･34図	ＭＰ55	0.20×0.18	隅丸方形	0.28	16.877		
61	第10･34図	ＭＳ55	0.31×〈0.20〉	隅丸方形	0.42	16.745	Ｐ61→Ｐ392	
77	第10･11･34図	ＭＰ54	0.16×0.16	隅丸方形	0.09	16.886		
78	第10･11･13･34図	ＭＯ･ＭＰ54	0.57×0.44	不整形	0.29	16.861		
79	第13･34図	ＭＯ55	0.30×0.35	隅丸方形	0.10	17.086		
80	第13･34図	ＭＯ55	0.22×0.20	隅丸方形	0.10	17.096		
81	第11･13･34図	ＭＯ55	0.46×0.41	隅丸方形	0.30	16.890		
82	第13･34図	ＭＮ･ＭＯ55	0.35×0.30	隅丸方形	0.13	17.050		
84	第11･13･34図	ＭＯ54･55	0.48×0.47	不整形	0.36	16.810		
85	第11･13･34図	ＭＯ54	0.13×0.13	円形	0.17	16.959		
86	第11･13･34図	ＭＯ54	0.35×0.33	隅丸方形	0.17	16.972		
87	第13･34図	ＭＯ54	0.48×0.37	楕円形	0.53	16.643		
88	第11･13･34図	ＭＯ54	0.35×0.30	隅丸方形	0.09	16.974		
89	第11･13･34図	ＭＯ54	[0.26]×0.24	隅丸方形	0.29	16.760		
90	第11･13･34図	ＭＯ54	0.17×0.16	不整円形	0.23	16.820		
91	第11･13･34図	ＭＯ54	0.32×0.25	不整楕円形	0.14	16.889		
92	第11･13･34図	ＭＯ54	0.20×0.16	隅丸方形	0.23	16.806		
93	第13･34図	ＭＯ54	0.20×0.20	隅丸方形	0.09	16.995		
94	第13･34図	ＭＯ55	0.38×0.36	隅丸方形	0.10	17.050		
95	第13･34図	ＭＮ55	0.28×0.24	隅丸方形	0.16	17.064		
96	第13･34図	ＭＯ54	0.52×0.51	不整円形	0.42	16.648		
97	第13･34図	ＭＮ55	0.38×0.34	楕円形	0.42	16.819		
98	第13･34図	ＭＮ55	0.24×0.23	隅丸方形	0.08	17.124		
100	第10図	ＭＳ57	0.21×0.21	円形	0.05	17.103		
102	第13･34図	ＭＮ54	0.40×0.38	不整円形	0.22	16.915		
103	第13･34図	ＭＮ54	0.30×0.23	楕円形	0.25	16.912		肥前磁器１点(57.0g)、瀬戸美濃陶器１点(12.2g)
104	第13･34図	ＭＮ54	0.26×0.22	楕円形	0.11	17.068		
105	第13･34図	ＭＮ54	0.26×0.22	隅丸方形	0.19	16.984		
106	第13･34図	ＭＭ54	0.28×0.22	楕円形	0.15	17.113		
107	第13･34図	ＭＭ54	0.19×0.18	円形	0.15	17.140		
108	第13･34図	ＭＭ54	0.18×0.16	隅丸方形	0.14	17.162		
109	第13･34図	ＭＭ54	0.23×0.20	隅丸方形	0.24	17.047		
110	第13･34図	ＭＭ54	0.19×0.18	不整円形	0.14	17.155		
112	第13･34図	ＭＭ54	0.23×0.21	隅丸方形	0.18	17.097		
114	第13･34図	ＭＭ54	0.29×0.24	隅丸方形	0.33	16.931		
115	第13･34図	ＭＬ･ＭＭ54	0.34×0.29	楕円形	0.42	16.828		
116	第13･34図	ＭＭ54	0.46×0.38	楕円形	0.20	17.076		
117	第13･34図	ＭＭ54	0.51×0.50	不整円形	0.55	16.674		
118	第13･34図	ＭＭ53･54	0.45×0.42	不整円形	0.52	16.706		
123	第13･34･35図	ＭＬ55	0.22×0.22	不整円形	0.27	16.950		
124	第13･34･35図	ＭＬ55	[0.34]×0.24	楕円形	0.35	16.929		
126	第13･34･35図	ＭＬ54	0.40×0.27	不整楕円形	0.08	17.157		
127	第13･34･35図	ＭＬ54	0.23×0.22	隅丸方形	0.18	17.044		
128	第13･34･35図	ＭＬ54	0.40×0.39	円形	0.16	17.097		
129	第13･34･35図	ＭＬ54	0.39×0.33	不整円形	0.12	17.113		
130	第13･34･35図	ＭＬ54	0.27×0.26	隅丸方形	0.20	17.042		
131	第13･34･35図	ＭＬ54	0.33×0.32	不整円形	0.30	16.950		
133	第13･34･35図	ＭＬ55	0.34×0.28	楕円形	0.30	16.954		
135	第13･34･35図	ＭＬ55	0.21×0.20	不整円形	0.16	17.027		
136	第13･34図	ＭＮ54	0.22×0.21	隅丸方形	0.27	16.866		
137	第13･34図	ＭＯ53	0.40×0.39	隅丸方形	0.19	16.843		
139	第12･13･34図	ＭＮ53	0.29×0.28	隅丸方形	0.13	16.857		
140	第13･34図	ＭＮ53	0.25×0.21	隅丸方形	0.09	16.896		
141	第13･34図	ＭＮ53･54	0.26×0.26	隅丸方形	0.27	16.857		
142	第13･34図	ＭＮ53	0.24×0.22	円形	0.19	16.897		
143	第13･34図	ＭＮ53	0.16×0.15	隅丸方形	0.25	16.800		

※[　]内の数値は推定値、〈　〉内の数値は残存値を表す。

第４表　柱穴様ピット一覧表（２）

柱穴番号	挿図番号	所在グリッド	長軸×短軸（m）	平面形状	深さ（m）	底面標高（m）	重複(旧→新)	備　考
144	第12･13･34図	ＭＮ52	0.32×0.30	不整円形	0.12	16.840		
145	第12･13･34図	ＭＮ52	0.20×0.20	隅丸方形	0.20	16.749		
146	第12･13･34図	ＭＮ52	0.24×0.23	隅丸方形	0.23	16.710		
147	第12･13･34図	ＭＮ52	0.49×0.47	隅丸方形	0.20	16.741		
148	第12･13･34図	ＭＮ52	0.28×0.25	不整楕円形	0.36	16.583		
149	第12･13･34図	ＭＮ52	0.34×0.27	隅丸方形	0.30	16.650		
152	第12･13･34図	ＭＮ52	0.48×0.44	隅丸方形	0.49	16.412		柱材片
153	第12･13･34図	ＭＭ･ＭＮ52･53	0.38×0.17	不整形	－	－		
154	第12･13･34図	ＭＮ52	0.24×0.19	隅丸方形	0.33	16.603		
155	第12･13･34図	ＭＮ52	0.22×0.19	不整円形	0.59	16.361		
156	第12･13･34図	ＭＮ52	0.35×0.35	隅丸方形	0.07	16.899		
157	第12･13･34図	ＭＭ･ＭＮ52	0.62×0.51	不整円形	0.39	16.595		礎板
158	第13･34図	ＭＭ52	0.36×0.28	不整楕円形	0.17	16.820		
160	第13･34図	ＭＭ52	0.20×0.10	不整形	0.14	16.850		
161	第13･34図	ＭＭ52	0.24×0.22	隅丸方形	0.09	16.915		
162	第13･34図	ＭＭ52･53	0.28×0.25	不整形	0.12	16.871		
163	第13･34図	ＭＭ52	0.32×0.31	隅丸方形	0.24	16.775		
165	第13･34図	ＭＭ53	0.34×0.33	円形	0.41	16.753		
166	第13･34図	ＭＭ54	0.19×0.16	隅丸方形	0.16	17.113		
167	第13･34図	ＭＭ53	0.18×0.18	円形	0.53	16.624		
168	第13･34図	ＭＭ53	0.22×0.19	隅丸方形	0.25	16.827		
169	第13･34図	ＭＭ53	0.22×0.20	円形	0.21	16.840		
170	第13･34図	ＭＭ53	0.42×0.41	隅丸方形	0.40	16.632		
172	第13･34図	ＭＭ53	0.34×0.31	不整形	0.41	16.667		
174	第13･34図	ＭＭ53	0.20×0.19	隅丸方形	0.14	16.999		
175	第13･34図	ＭＭ53	0.48×0.48	円形	0.58	16.600		柱材
177	第13･34図	ＭＭ53	[0.28]×[0.26]	不整形	0.25	16.786		
178	第13･34図	ＭＭ53	0.22×0.19	隅丸方形	0.15	16.876		
179	第13･34図	ＭＭ53	0.35×0.32	隅丸方形	0.20	16.761		
180	第13･34図	ＭＭ53	0.25×0.22	隅丸方形	0.12	16.860		
181	第13･34図	ＭＭ53	0.24×0.22	不整円形	0.15	16.891		
182	第13･34図	ＭＭ53	0.26×0.26	円形	0.24	16.766		
183	第13･34図	ＭＭ53	0.32×0.32	隅丸方形	0.26	16.747		
184	第13･34図	ＭＭ53	[0.20]×0.19	不整円形	0.17	16.882		
185	第13･34･35図	ＭＬ53	0.25×0.25	不整円形	0.43	16.760		
186	第13･34･35図	ＭＬ53	0.30×0.30	不整形	0.43	16.707		柱材
187	第13･34図	ＭＬ･ＭＭ53	0.32×0.23	不整形	0.28	16.817		
188	第13･34図	ＭＬ･ＭＭ53	0.24×0.24	不整円形	0.43	16.593		
189	第13･34･35図	ＭＬ53	0.26×0.25	不整形	0.08	16.992		
190	第13･34･35図	ＭＬ53	[0.30]×[0.27]	隅丸方形	0.20	16.931		
191	第12･13･34図	ＭＮ51	0.30×0.28	隅丸方形	0.34	16.133		
192	第12･13･34図	ＭＮ51	0.14×0.14	円形	0.17	16.294		
193	第12･34図	ＭＯ50	0.14×0.13	隅丸方形	0.26	16.063		
194	第12･34図	ＭＯ50	0.13×0.12	円形	0.10	16.195		
195	第12･13･34図	ＭＮ51	0.24×0.24	隅丸方形	0.09	16.378		礎板
196	第12･34図	ＭＯ50	0.17×0.17	円形	0.17	16.151		
197	第12･34図	ＭＯ50	0.19×0.17	楕円形	0.22	16.117		
198	第12･13･34図	ＭＭ51	0.25×0.20	隅丸方形	0.17	16.226		
200	第８図	ＮＧ60	0.25×0.20	隅丸方形	0.13	16.610		
201	第８図	ＮＧ60	0.19×0.15	隅丸方形	－	－		
203	第８図	ＮＨ60	0.23×0.20	隅丸方形	0.14	16.394		
204	第８図	ＮＧ61	0.20×0.14	隅丸方形	0.24	16.607		
206	第８図	ＮＦ61	0.21×0.20	円形	0.10	16.698		
209	第16･34･35図	ＭＬ50	0.28×0.28	隅丸方形	0.26	16.769		
215	第11･34図	ＭＰ53	0.21×0.19	隅丸方形	0.19	16.595		
216	第11･12･34図	ＭＰ53	0.20×0.19	隅丸方形	0.28	16.597		
217	第11･12･34図	ＭＰ53	0.28×0.28	隅丸方形	0.15	16.694		
221	第11･12･34図	ＭＰ52	0.22×0.21	不整円形	0.35	16.443		
223	第11･12･34図	ＭＰ･ＭＱ52	0.56×0.44	不整形	0.24	16.489		
225	第12･13･34図	ＭＮ52	0.60×0.50	不整楕円形	0.54	16.321		
226	第12･13･34図	ＭＮ51･52	0.97×0.81	不整形	0.64	16.205		加工木材(切傷あり)
227	第16･34･35図	ＭＬ50	0.38×0.34	隅丸方形	0.39	16.670		
228	第16･35図	ＭＫ50	0.20×0.20	円形	0.11	16.971		
229	第16･34･35図	ＭＬ50	0.39×0.33	隅丸方形	0.11	16.929		
231	第16･34･35図	ＭＬ50	0.20×0.18	隅丸方形	0.24	16.834		
232	第16･35図	ＭＫ50	0.48×0.28	不整楕円形	0.28	16.830		
233	第16･35図	ＭＫ50	0.54×0.41	不整形	0.20	16.918		
235	第16･35図	ＭＫ50	0.38×0.38	隅丸方形	0.25	16.875		
239	第16･35図	ＭＫ50	0.52×0.50	隅丸方形	0.27	16.952		
240	第16･35図	ＭＫ50	0.28×0.28	不整円形	0.48	16.726		
241	第16･35図	ＭＫ50	0.33×0.27	楕円形	0.20	16.997		
244	第16･35図	ＭＫ50	0.25×0.15	楕円形	0.14	16.944		
245	第16･35図	ＭＫ50	0.34×0.26	楕円形	0.24	16.880		
247	第16･35図	ＭＫ49	0.19×0.16	隅丸方形	0.11	17.024		
248	第16･35図	ＭＫ49	0.20×0.16	楕円形	0.09	17.001		
250	第16･35図	ＭＫ49	0.32×0.22	楕円形	0.21	16.957		
252	第16･35図	ＭＫ49	0.17×0.15	隅丸方形	0.19	17.011		
253	第16･35図	ＭＪ49	0.32×0.28	不整楕円形	0.28	16.926		
255	第16･35図	ＭＪ･ＭＫ49	0.40×0.29	不整楕円形	0.15	17.105		擂鉢１点(24.4g)
257	第16･35図	ＭＪ51	0.25×0.24	隅丸方形	0.14	16.563		
258	第13･34図	ＭＮ55	0.32×0.25	隅丸方形	0.14	17.087		
261	第13･35図	ＭＮ54	0.36×0.34	不整円形	0.27	16.874		土錘１点(2.8g、第88図259)
262	第13･36図	ＭＮ54	0.34×0.34	隅丸方形	0.18	16.996		
264	第15･35図	ＭＨ54	0.45×0.43	隅丸方形	0.36	16.806		
267	第15･35図	ＭＨ54	0.28×0.21	隅丸方形	0.20	16.931		
276	第15･35図	ＭＨ54	0.20×0.17	不整楕円形	0.17	16.991		
277	第15･35図	ＭＨ54	0.44×0.40	不整円形	0.79	16.494		
278	第15･35図	ＭＨ54	0.34×0.25	不整楕円形	0.22	16.876		
279	第15･35図	ＭＩ54･55	0.23×0.21	隅丸方形	0.63	16.508		
280	第15･35･36図	ＭＦ53	0.25×0.25	楕円形	0.31	17.338		
281	第15･35･36図	ＭＦ53	0.32×0.25	楕円形	0.21	17.423		
282	第15･35図	ＭＦ53	0.28×0.25	隅丸方形	0.43	17.201		
287	第15･35図	ＭＧ52	0.24×0.23	隅丸方形	0.27	17.282		
288	第15･35図	ＭＧ52	0.24×0.19	楕円形	0.47	17.094		

※[　]内の数値は推定値、〈　〉内の数値は残存値を表す。

第５表　柱穴様ピット一覧表（３）

柱穴番号	挿図番号	所在グリッド	長軸×短軸（m）	平面形状	深さ（m）	底面標高（m）	重複(旧→新)	備　考
291	第19･35図	ＭＧ51	0.26×0.24	不整円形	0.81	16.655		
294	第16･35図	ＭＧ･ＭＨ51	0.24×0.24	円形	0.26	17.186		
295	第16･35図	ＭＧ･ＭＨ51	0.30×0.28	隅丸方形	0.33	17.108		
296	第13･34図	ＭＮ55	0.20×0.20	円形	0.11	17.148		
298	第16･35図	ＭＧ･ＭＨ51	0.22×0.22	楕円形	0.25	17.195		
299	第16･19･35図	ＭＧ51	0.16×0.16	円形	0.09	17.354		
300	第16図	ＭＨ48	0.31×0.25	楕円形	0.33	16.969		
301	第16図	ＭＨ48	0.42×0.33	楕円形	0.39	16.875		礫、肥前磁器碗１点(21.2g)
302	第16図	ＭＨ48	0.27×0.25	楕円形	0.11	17.155		
303	第16図	ＭＨ48	0.30×0.27	隅丸方形	0.44	16.772		
304	第16図	ＭＨ48	0.32×0.30	不整円形	0.14	17.033		
306	第16図	ＭＨ49	0.20×0.20	不整円形	0.26	17.012		
307	第16図	ＭＨ48	0.22×0.22	円形	0.36	16.856		礎板
310	第16･35図	ＭＨ49	0.32×0.27	不整円形	0.29	17.006		
311	第16･35図	ＭＨ49	[0.30]×[0.26]	隅丸方形	0.20	17.165		
312	第16･35図	ＭＨ49	0.36×0.34	円形	0.39	16.997		
313	第16･35図	ＭＨ49	0.26×0.23	隅丸方形	0.11	17.267		
314	第16･35図	ＭＨ49	0.30×0.27	隅丸方形	0.40	16.982		
315	第16･35図	ＭＨ49	0.16×0.15	隅丸方形	0.11	17.146		
319	第15･35図	ＭＩ52	0.33×0.30	隅丸方形	0.43	17.158	ＳＥ43→Ｐ319	
320	第15･16･35図	ＭＩ52	0.29×0.27	隅丸方形	0.22	17.384		
323	第15･35図	ＭＩ53	0.21×0.18	隅丸方形	－	－		
324	第15･35図	ＭＩ53	0.24×0.23	円形	0.23	16.784		
325	第15･35図	ＭＩ53	0.23×0.23	隅丸方形	0.25	16.784		
327	第15･35図	ＭＩ53	0.46×0.38	隅丸方形	0.47	16.591		
329	第15･35図	ＭＨ53	0.26×0.24	隅丸方形	0.37	16.738		
330	第15･35図	ＭＩ53	0.20×0.20	隅丸方形	0.21	17.300	ＳＥ72→Ｐ330	
331	第15･35図	ＭＩ53	0.22×0.16	楕円形	0.12	17.422		
333	第15･35図	ＭＪ53	0.27×0.24	楕円形	0.15	17.356		
334	第15･35図	ＭＩ･ＭＪ53	0.17×0.16	隅丸方形	0.23	17.317		須恵器坏１点(2.1g)
335	第15･35図	ＭＪ53	0.37×〈0.21〉	不整形	0.27	17.250		
336	第15･35図	ＭＪ53	0.30×0.26	隅丸方形	0.09	17.398		
337	第15･16･35図	ＭＩ52	0.51×0.48	不整円形	0.51	16.869		永楽通寶１点(1.0g)
339	第15･16･35図	ＭＩ･ＭＪ51	0.43×0.37	不整楕円形	0.45	16.302		
340	第15･16･35図	ＭＩ･ＭＪ52	0.28×0.25	隅丸方形	0.38	17.110		須恵器坏２点(7.3g)、土師器甕２点(7.7g)
345	第16･19図	ＭＧ49	0.22×0.15	隅丸方形	0.17	17.407		
349	第19図	ＭＧ49	0.36×0.33	円形	0.26	17.337		
351	第19図	ＭＧ49	0.22×0.22	円形	0.17	17.418		
352	第19図	ＭＧ49	0.39×0.35	隅丸方形	0.12	17.475		
357	第19･35図	ＭＧ49	0.38×0.37	隅丸方形	0.21	17.358		
358	第19･35図	ＭＦ･ＭＧ49	[0.27]×0.21	隅丸方形	0.44	17.144	Ｐ743との新旧不明	
359	第16･35図	ＭＩ50	0.23×0.18	隅丸方形	0.40	16.989		
360	第16･35図	ＭＩ50･51	0.40×0.31	隅丸方形	0.28	17.125	ＳＥ44→Ｐ360→Ｐ361	
361	第16･35図	ＭＩ51	0.26×0.22	楕円形	0.17	17.222	ＳＥ44→Ｐ360→Ｐ361	
362	第16･35図	ＭＩ51	0.53×0.39	不整形	0.38	17.025		肥前陶器皿１点(57.8g、第118図381)
363	第10･34図	ＭＴ55	0.26×0.22	隅丸方形	0.20	16.964	ＳＯ19→Ｐ363	
364	第16･35図	ＭＩ51	0.46×0.34	不整楕円形	0.18	17.209		礫
365	第15･16･35図	ＭＩ52	0.28×0.28	隅丸方形	0.12	17.522		
371	第19･36図	ＭＥ48	0.34×0.29	楕円形	－	－		
372	第19･36図	ＭＥ49	0.28×0.27	隅丸方形	0.19	17.499		
373	第19･36図	ＭＤ･ＭＥ50	0.31×0.27	不整円形	－	－		
376	第16･35図	ＭＩ50	0.30×0.30	円形	0.76	16.740	ＳＥ44→Ｐ376	
377	第16･35図	ＭＩ51	0.38×0.26	楕円形	－	－	ＳＥ44→Ｐ377	
378	第16･35図	ＭＩ50	－	隅丸方形	－	－		
379	第16･35図	ＭＩ51	0.28×0.22	楕円形	－	－	ＳＥ44→Ｐ379	
380	第10図	ＮＡ56･57	0.23×0.21	楕円形	0.20	16.930		
384	第10･34図	ＭＴ56	0.19×0.18	隅丸方形	0.22	16.921		
385	第10図	ＭＴ･ＮＡ56	0.25×0.23	隅丸方形	0.30	16.838		
388	第８図	ＮＦ61	0.26×0.20	楕円形	0.13	16.735		
391	第10図	ＭＴ56	0.24×0.23	隅丸方形	0.12	16.914		
392	第10･34図	ＭＳ55･56	0.28×0.25	隅丸方形	0.27	16.842	Ｐ61→Ｐ392	
393	第10図	ＭＳ56･57	0.42×0.38	隅丸方形	0.38	16.797		
394	第12･34図	ＭＮ･ＭＯ50	0.23×[0.20]	楕円形	0.22	16.175	ＳＥ21→Ｐ394	
395	第10･34図	ＭＴ55	0.26×0.24	隅丸方形	0.11	17.267		
397	第10･34図	ＭＴ55	0.22×〈0.20〉	楕円形	0.09	17.092	ＳＯ19→Ｐ397 Ｐ405･Ｐ398との新旧不明	
398	第10･34図	ＭＴ55	0.18×〈0.18〉	円形	0.09	17.084	Ｐ397との新旧不明	
404	第10･34図	ＭＴ55	0.30×0.20	楕円形	0.19	16.985	ＳＯ19→Ｐ404	
405	第10･34図	ＭＴ55	0.24×〈0.20〉	楕円形	0.12	17.055	ＳＯ19→Ｐ405 Ｐ397との新旧不明	
406	第８図	ＮＣ61	[0.27]×[0.27]	隅丸方形	0.20	16.773		
407	第10･34図	ＭＴ55･56	0.25×0.21	隅丸方形	0.29	16.890		
408	第10･34図	ＭＴ55	0.18×0.16	円形	0.05	17.149		
409	第10･34図	ＭＴ55	0.31×0.29	円形	0.21	16.962		
410	第10･34図	ＮＡ55･56	0.28×0.25	隅丸方形	0.31	16.936		
411	第10･34図	ＭＴ56	0.22×0.21	円形	0.14	17.094		
412	第10･34図	ＭＴ56	0.20×0.18	隅丸方形	0.15	16.987		
413	第10･34図	ＭＴ55	0.21×〈0.13〉	隅丸方形	0.09	17.100	Ｐ413→Ｐ419	
414	第15･16･35図	ＭＨ52	0.59×0.59	不整円形	0.62	16.984		柱材
415	第13･34図	ＭＮ･ＭＯ53	0.30×0.25	隅丸方形	0.17	16.850		
416	第11･13･34図	ＭＯ55	[0.16]×0.14	円形	0.31	16.875		
417	第９図	ＮＢ60	0.32×0.26	隅丸方形	0.18	16.764		
418	第９図	ＮＢ60	[0.23]×[0.19]	隅丸方形	0.20	16.707		
419	第10･34図	ＭＴ55	0.26×0.26	隅丸方形	0.38	16.809	Ｐ413→Ｐ419	
420	第８図	ＮＥ61	0.25×0.19	隅丸方形	0.18	16.623		
421	第８図	ＮＥ61	0.24×0.21	隅丸方形	0.22	16.613		
422	第11･13･34図	ＭＯ55	0.32×0.28	楕円形	0.18	17.006		
423	第９図	ＭＴ58	0.30×0.23	楕円形	0.16	16.611		
424	第９図	ＭＳ59	0.20×0.20	隅丸方形	0.21	16.844		
425	第９図	ＭＴ59	0.18×0.16	円形	0.11	16.761		
426	第９図	ＭＴ59	0.27×0.26	隅丸方形	0.50	16.372		
427	第15･35図	ＭＪ53	0.18×0.17	隅丸方形	0.21	17.453		
428	第10図	ＭＳ57	0.24×0.23	隅丸方形	0.08	17.093		

※[　]内の数値は推定値、〈　〉内の数値は残存値を表す。

第６表　柱穴様ピット一覧表（４）

柱穴番号	挿図番号	所在グリッド	長軸×短軸（m）	平面形状	深さ（m）	底面標高（m）	重複(旧→新)	備　考
429	第10･34図	ＭＳ56	0.16×0.14	隅丸方形	0.11	16.836		
430	第10図	ＭＲ56	0.28×0.23	楕円形	0.20	16.938		
433	第10図	ＭＳ･ＭＲ57	0.22×0.18	隅丸方形	0.12	16.921		
434	第15･16･35図	ＭＩ51	0.38×0.32	不整楕円形	0.23	17.160		
435	第15･16･35図	ＭＩ51	0.39×0.36	不整円形	0.19	17.204		
436	第15･16･35図	ＭＩ51	[0.37]×[0.28]	不整楕円形	0.44	16.963	ＳＥ66→Ｐ436	
438	第15･16･35図	ＭＩ51	0.27×0.26	円形	0.48	17.186	ＳＥ66→Ｐ438	
441	第10図	ＭＳ58	0.20×0.16	楕円形	0.07	17.044		
442	第10図	ＭＳ58	0.24×0.20	隅丸方形	0.06	17.043		
443	第16･35図	ＭＩ51	0.60×0.41	不整楕円形	0.21	17.180		
444	第16･35図	ＭＩ51	0.46×0.30	不整形	0.46	16.914		
446	第16図	ＭＭ49	0.26×0.24	不整楕円形	0.33	16.354		
447	第16図	ＭＭ49	0.19×0.16	不整円形	0.27	16.633		
450	第16･34･35図	ＭＬ51	0.22×0.18	隅丸方形	0.06	16.604		
452	第15･35図	ＭＩ52	0.38×0.30	楕円形	0.13	17.400	ＳＥ43→Ｐ452	
453	第16･34図	ＭＬ50	0.19×0.17	隅丸方形	0.20	16.775		
454	第16･35図	ＭＩ51	0.27×0.18	楕円形	0.38	16.865		瀬戸美濃陶器皿１点(6.3g)
456	第16･35図	ＭＨ51	0.40×0.31	楕円形	－	－		
458	第16･34･35図	ＭＬ50	0.30×0.27	隅丸方形	0.18	16.804		
462	第11･13･34図	ＭＯ55	0.31×〈0.20〉	楕円形	0.12	17.052	Ｐ1454との新旧不明	
463	第10･13･34図	ＭＯ･ＭＰ55	0.78×0.68	不整円形	0.26	16.942		
464	第13･34図	ＭＯ54	0.34×0.33	不整円形	0.32	16.775		
466	第16･34･35図	ＭＬ49	0.18×0.16	隅丸方形	0.46	16.591		
467	第16･34･35図	ＭＬ50	0.32×0.27	楕円形	0.30	16.750		
468	第16･34･35図	ＭＬ50	0.46×0.32	不整形	0.20	16.826		
470	第16･35図	ＭＫ50･51	0.20×0.18	隅丸方形	0.21	16.857		
473	第16･35図	ＭＩ51	0.30×0.28	隅丸方形	0.10	17.272		
474	第16･34･35図	ＭＬ50	0.46×0.29	不整楕円形	0.22	16.816	Ｐ474→Ｐ1435	
475	第16･34･35図	ＭＬ50	0.35×0.29	隅丸方形	0.71	16.805		
480	第13･34図	ＭＯ54	0.48×0.45	不整円形	0.26	16.881		
481	第13･34図	ＭＯ54	0.28×0.28	不整円形	0.15	17.008		
483	第11･13･34図	ＭＯ54	0.32×0.24	不整楕円形	0.17	16.861		
484	第13･34図	ＭＮ53･54	0.34×0.30	隅丸方形	0.16	16.945		
485	第13･34図	ＭＮ53	[0.24]×〈0.22〉	隅丸方形	0.22	16.820	Ｐ486→Ｐ485・487(新旧不明)	肥前磁器皿１点(6.4g)
486	第13･34図	ＭＮ53	0.28×〈0.20〉	隅丸方形	0.18	16.865	Ｐ486→Ｐ485・487(新旧不明)	
487	第13･34図	ＭＮ53	[0.30]×0.29	隅丸方形	0.28	16.767	Ｐ486→Ｐ485・487(新旧不明)	
488	第15･16･35図	ＭＩ52	0.27×0.27	円形	0.35	17.228	Ｐ489→Ｐ488	
489	第15･16･35図	ＭＩ52	[0.20]×0.19	隅丸方形	0.17	17.415	Ｐ489→Ｐ488	
490	第15･16･35図	ＭＩ52	0.19×0.17	隅丸方形	0.11	17.387		
493	第16･35図	ＭＪ49･50	0.26×0.22	隅丸方形	－	－		
494	第16･35図	ＭＪ50	0.32×0.23	不整楕円形	0.08	17.176		柱材
495	第16･35図	ＭＪ51	0.21×0.19	不整円形	0.10	16.686		土師器甕１点(1.0g)、不明鉄製品２点(9.5g)
496	第16･35図	ＭＪ51	0.22×0.20	隅丸方形	0.09	16.694		
497	第16･35図	ＭＩ51	0.20×0.18	隅丸方形	0.22	17.163		
498	第15･35図	ＭＩ･ＭＪ52･53	0.41×0.36	楕円形	0.30	17.111	ＳＥ72→Ｐ498	須恵器壺１点(19.4g)
500	第15･16･35図	ＭＩ52	0.30×0.20	楕円形	0.25	17.295	ＳＥ66→Ｐ500	
501	第15･35図	ＭＩ52	0.37×0.32	隅丸方形	0.16	17.345		
502	第16･35図	ＭＪ50	0.19×〈0.08〉	隅丸方形	0.18	17.082	Ｐ502→Ｐ508	
503	第16･35図	ＭＪ49･50	0.50×0.48	隅丸方形	0.62	16.644	ＳＥ34→Ｐ503	
504	第16･35図	ＭＪ50	0.44×0.39	隅丸方形	0.28	16.996		
505	第12･13･34図	ＭＮ52	0.26×0.25	隅丸方形	0.22	16.711		
507	第12･13･34図	ＭＮ52	0.46×0.30	不整形	0.32	16.580		
508	第16･35図	ＭＪ50	1.00×0.63	不整楕円形	0.61	16.648	Ｐ502→Ｐ508	
509	第16･35図	ＭＬ49	0.22×0.18	楕円形	0.19	16.901		砥石１点(230.8g、第119図383)
510	第13･34図	ＭＮ53	0.76×0.70	不整円形	0.54	16.520		礎板、柱材
511	第13･34図	ＭＮ53	0.22×0.21	楕円形	0.24	16.801		
512	第11･34図	ＭＱ54	0.25×0.25	円形	0.16	16.762		
514	第11･34図	ＭＱ53	0.26×0.25	隅丸方形	0.13	16.749		
515	第11･34図	ＭＱ53	0.21×0.20	円形	0.17	16.701		
516	第11･34図	ＭＰ･ＭＱ53	0.25×0.22	隅丸方形	0.08	16.649		
517	第11･12･34図	ＭＱ52	0.48×0.44	隅丸方形	0.26	16.500		
519	第16･35図	ＭＫ49	0.41×0.28	隅丸方形	0.14	16.937		柱材
520	第16･34･35図	ＭＬ50	0.29×0.24	隅丸方形	0.18	16.757		
521	第16･34･35図	ＭＬ50	0.14×0.14	不整形	0.08	16.898		
522	第16･34･35図	ＭＬ50	0.26×0.20	楕円形	0.22	16.851		
523	第16･34･35図	ＭＬ50	0.30×0.24	楕円形	0.20	16.863		
524	第16･34･35図	ＭＬ50	0.23×0.22	隅丸方形	0.13	16.894		
525	第16･35図	ＭＫ50	0.43×0.43	隅丸方形	0.45	16.692		
526	第16･34･35図	ＭＬ50	0.39×0.32	隅丸方形	0.22	16.835		
527	第16･35図	ＭＬ49	0.31×0.24	隅丸方形	0.67	16.857		
528	第16･35図	ＭＬ49	0.20×0.18	隅丸方形	0.14	16.906		
529	第16･35図	ＭＬ49	0.28×0.26	円形	0.31	16.745		
530	第16･34･35図	ＭＬ50	0.32×0.28	不整円形	0.07	16.992		
531	第16･35図	ＭＫ50	0.31×0.28	隅丸方形	0.12	16.953		
533	第16･35図	ＭＫ49	0.29×0.26	円形	0.15	16.950		
534	第16･35図	ＭＫ49	0.45×0.36	不整形	0.40	16.686		
535	第16･35図	ＭＫ49	0.36×0.24	楕円形	0.37	16.740	Ｐ548→Ｐ535	
537	第16･35図	ＭＫ49	0.26×0.23	不整円形	0.16	16.922		
538	第16･35図	ＭＫ49	0.17×0.16	隅丸方形	0.07	17.050		
539	第16･35図	ＭＫ49	0.20×0.17	隅丸方形	0.10	17.020		
541	第16･35図	ＭＪ･ＭＫ50	0.22×0.20	円形	0.19	17.003		
542	第11･12･34図	ＭＰ52	0.26×0.24	不整円形	0.17	16.578		
544	第13･34図	ＭＭ55	0.23×[0.20]	不整円形	0.15	17.117	Ｐ544→Ｐ545	
545	第13･34図	ＭＭ54･55	0.24×[0.24]	円形	0.30	16.962	Ｐ544→Ｐ545	
547	第13･34図	ＭＭ54	0.24×0.20	不整形	0.14	17.162		
548	第16･35図	ＭＫ49	[0.44]×0.26	不整楕円形	0.42	16.685	Ｐ548→Ｐ535	柱材
550	第16･35図	ＭＪ50	0.45×0.36	不整円形	0.21	17.040		
552	第13･34図	ＭＭ53･54	0.32×0.32	円形	0.34	16.886		
553	第16･35図	ＭＫ･ＭＬ49	0.26×0.22	隅丸方形	0.37	16.706		
554	第16･34･35図	ＭＬ50･51	0.21×0.20	隅丸方形	0.19	16.790		
555	第16･35図	ＭＪ50	0.16×0.13	隅丸方形	0.25	16.994		
556	第16･35図	ＭＪ50	0.28×[0.22]	楕円形	0.36	16.390	Ｐ556→Ｐ581	

※[　]内の数値は推定値、〈　〉内の数値は残存値を表す。

第７表　柱穴様ピット一覧表（５）

柱穴番号	挿図番号	所在グリッド	長軸×短軸（m）	平面形状	深さ（m）	底面標高（m）	重複(旧→新)	備　考
557	第12･13･34図	ＭＮ52	0.18×0.14	楕円形	0.10	16.868		
558	第15･35図	ＭＪ52	0.40×0.38	不整円形	0.35	17.078		柱材
559	第15･35図	ＭＪ52	0.26×0.24	円形	0.16	17.210	Ｐ559→Ｐ563	
561	第15･35図	ＭＪ53	0.30×0.24	不整円形	0.13	17.231		
562	第15･35図	ＭＪ52	0.22×0.16	隅丸方形	0.13	17.208		
563	第15･35図	ＭＪ52	0.32×0.29	隅丸方形	0.22	17.136	Ｐ559→Ｐ563	須恵器坏１点(28.4g)
565	第15･35図	ＭＪ53	0.22×0.20	不整円形	0.15	17.377		土師器甕１点(2.7g)
567	第15･35図	ＭＪ54	0.18×0.17	円形	0.12	17.373		
568	第16･35図	ＭＩ49	0.28×0.26	不整円形	0.31	16.853		
572	第15･35図	ＭＨ53･54	0.56×0.48	隅丸方形	0.56	17.208	ＳＯ36→Ｐ572	
573	第15･16･35図	ＭＨ52	0.26×0.19	隅丸方形	0.36	17.180		
574	第15･16･35図	ＭＨ52	0.40×0.34	不整楕円形	0.30	17.240		
575	第15･16･35図	ＭＨ52	0.18×0.17	円形	0.17	17.375		
576	第15･16･35図	ＭＨ51	0.44×0.41	不整円形	0.54	17.022		
577	第15･16･35図	ＭＨ52	0.20×0.17	隅丸方形	0.33	17.223		
578	第15･16･35図	ＭＨ52	0.22×0.22	隅丸方形	0.34	17.322		
579	第15･35図	ＭＪ54	0.28×0.20	不整楕円形	0.13	17.361		
580	第15･35図	ＭＩ54	0.46×0.42	不整円形	0.13	16.878		
581	第16･35図	ＭＪ50	0.31×0.25	不整円形	0.33	16.425	Ｐ556→Ｐ581	
582	第16･35図	ＭＪ50	0.26×0.26	円形	0.18	16.585		
583	第12･34図	ＭＯ50	0.25×0.25	円形	0.19	16.113		擂鉢１点(178.1g)
584	第12･34図	ＭＯ50	0.14×0.13	隅丸方形	0.10	16.217		
585	第12･34図	ＭＮ51	0.15×0.14	不整円形	0.19	16.249		
586	第12･34図	ＭＯ51	0.24×0.08	隅丸方形	0.07	16.223		
587	第12･34図	ＭＯ51	0.24×0.22	隅丸方形	0.48	15.791		
588	第11･12･33図	ＭＮ･ＭＯ51	0.12×0.11	隅丸方形	－	－		
589	第11･33図	ＭＮ50	0.29×0.23	楕円形	0.34	16.163		
590	第11･33図	ＭＮ50	0.10×0.10	隅丸方形	0.07	16.327		
591	第11･33図	ＭＮ51	0.18×0.18	隅丸方形	0.41	16.070		
592	第11･33図	ＭＮ51	0.16×0.15	隅丸方形	0.09	16.365		
593	第11･33図	ＭＮ51	0.14×0.12	楕円形	0.11	16.306		
594	第12･13･34図	ＭＮ51	0.38×0.31	楕円形	0.23	16.264		
596	第15･35図	ＭＨ52･53	0.44×0.42	隅丸方形	0.64	16.542		
597	第15･35図	ＭＨ52･53	0.22×0.22	隅丸方形	0.42	16.731		
598	第15･35図	ＭＨ52･53	0.50×0.38	不整楕円形	0.12	17.027		
599	第15･35図	ＭＨ52･53	0.44×0.44	円形	0.63	16.516		
600	第15･35図	ＭＨ53	0.27×0.19	楕円形	0.31	16.809		
601	第15･35図	ＭＨ52･53	0.23×0.21	隅丸方形	0.40	16.772		
602	第15･35図	ＭＨ52･53	0.41×0.38	不整円形	0.27	16.879		
603	第15･35図	ＭＨ53	0.23×0.23	円形	0.42	16.738		
604	第15･35図	ＭＧ55	0.27×0.21	隅丸方形	0.19	17.175	ＳＯ41→Ｐ604	
605	第15･16･35図	ＭＩ52	〈0.44〉×〈0.44〉	円形	0.38	17.176	ＳＥ66→Ｐ605→Ｐ606	土師器甕１点(7.3g)
606	第15･16･35図	ＭＩ52	0.40×〈0.39〉	円形	0.56	17.005	ＳＥ66→Ｐ605→Ｐ606	
608	第15･35図	ＭＨ55	0.64×0.62	隅丸方形	0.34	16.996		
609	第15･35図	ＭＨ53	0.24×0.21	隅丸方形	0.20	16.858		
610	第15･35図	ＭＨ55	0.18×0.17	隅丸方形	0.18	17.412		
611	第15･35図	ＭＨ･ＭＩ55	0.26×0.21	不整円形	0.11	17.465		
612	第15･35図	ＭＨ･ＭＩ55	0.22×0.20	隅丸方形	0.10	17.366		
613	第15･35図	ＭＧ54･55	0.37×0.28	隅丸方形	0.22	17.353		
614	第15･35図	ＭＧ54･55	0.62×0.52	不整楕円形	0.45	17.131		
615	第15･35図	ＭＨ54	0.55×0.52	円形	0.20	16.753		
617	第14図	ＭＬ58	0.24×0.22	不整円形	0.31	16.748		
618	第14図	ＭＬ58	0.22×0.17	楕円形	0.25	16.807		
619	第14図	ＭＬ58	0.15×0.13	隅丸方形	0.17	16.833		
620	第14図	ＭＬ58･59	0.20×0.19	隅丸方形	0.28	16.621		
621	第14図	ＭＫ58	0.16×0.14	楕円形	0.09	16.829		
622	第14図	ＭＫ58	0.18×0.18	円形	－	－		
623	第14図	ＭＫ58	0.21×0.20	隅丸方形	0.06	16.894		
624	第14･35図	ＭＫ58	0.17×0.16	隅丸方形	0.06	17.034		
625	第14･35図	ＭＫ58	0.26×0.24	不整円形	0.39	16.583		
626	第14･35図	ＭＫ58	0.47×0.36	楕円形	0.40	16.563		
627	第14･35図	ＭＫ57	0.33×0.28	隅丸方形	0.24	16.784		
628	第14･35図	ＭＪ58	0.44×0.32	隅丸方形	0.28	16.643		
629	第14･35図	ＭＪ58	0.66×0.40	不整形	0.26	16.557		礎板、柱材
630	第14･35図	ＭＪ57	0.22×0.20	円形	0.08	16.780		
631	第14･35図	ＭＪ57	0.35×0.29	楕円形	0.10	16.770		
633	第14･35図	ＭＪ･ＭＫ56	0.85×0.71	楕円形	0.40	16.414		柱材
635	第15･35図	ＭＨ54	0.12×0.09	隅丸方形	0.30	16.814		
636	第15･35図	ＭＧ55	[0.19]×[0.19]	不整円形	0.33	17.235		
637	第15･35図	ＭＨ54	0.25×0.21	隅丸方形	0.19	16.912		
639	第15･35図	ＭＩ52	0.29×0.27	隅丸方形	0.32	17.194		
640	第15･35図	ＭＩ52	0.30×0.14	楕円形	0.23	17.250		
642	第15･35図	ＭＩ52	[0.22]×0.18	隅丸方形	0.12	16.872	Ｐ643との新旧不明	
643	第15･35図	ＭＩ52･53	0.23×[0.18]	隅丸方形	0.27	16.721	Ｐ642との新旧不明	
644	第15･35図	ＭＨ52	0.32×0.29	隅丸方形	0.48	17.158		
645	第15･35図	ＭＩ54	0.24×0.23	隅丸方形	0.37	16.756		
646	第15･35図	ＭＩ52	[0.32]×0.30	隅丸方形	0.43	17.063	ＳＥ72→Ｐ646	
647	第15･35図	ＭＩ52	0.44×0.40	楕円形	0.47	17.019		
648	第15･35図	ＭＨ52	0.22×0.20	円形	0.49	17.043		
649	第14･35図	ＭＪ57	〈0.48〉×0.44	隅丸方形	0.42	16.542	ＳＥ99→Ｐ649	
650	第14･35図	ＭＪ57	0.60×[0.56]	隅丸方形	0.11	16.776	ＳＥ99→Ｐ650	礎板
651	第14･35図	ＭＧ･ＭＨ55	0.22×0.20	隅丸方形	－	－		
652	第14･35図	ＭＧ55	0.18×0.13	楕円形	－	－		土師器甕１点(7.6g)
653	第14･35図	ＭＧ55	0.58×0.56	不整円形	0.29	17.273		
656	第16･35図	ＭＩ50	0.24×0.19	不整形	0.18	17.063		
658	第16･35図	ＭＨ50･51	0.47×0.42	隅丸方形	－	－		
663	第16･35図	ＭＩ50	[0.24]×0.20	楕円形	0.28	16.895	Ｐ663→Ｐ707	
664	第16･35図	ＭＩ50	〈0.22〉×0.32	隅丸方形	0.34	17.085	Ｐ664→Ｐ1453	
666	第16･35図	ＭＨ･ＭＩ49	[0.35]×0.30	隅丸方形	0.14	17.064	Ｐ667との新旧不明	
667	第16･35図	ＭＨ49	[0.27]×0.24	隅丸方形	0.18	17.078	Ｐ666との新旧不明	
668	第16図	ＭＨ49	0.27×0.26	円形	0.40	16.781		
670	第16図	ＭＨ49	0.19×0.16	楕円形	0.08	17.208		
671	第16･35図	ＭＨ49	0.18×0.14	楕円形	0.14	17.190		
673	第16･35図	ＭＨ50	0.37×0.37	隅丸方形	0.26	17.135		

※[　]内の数値は推定値、〈　〉内の数値は残存値を表す。

第８表　柱穴様ピット一覧表（６）

柱穴番号	挿図番号	所在グリッド	長軸×短軸（m）	平面形状	深さ（m）	底面標高（m）	重複(旧→新)	備　考
675	第16･35図	ＭＨ50	0.39×0.34	円形	0.58	16.720	ＳＥ100→Ｐ675	割栗石
676	第16･35図	ＭＧ･ＭＨ50	0.46×0.27	不整形	0.36	17.115		
679	第16･19･35図	ＭＧ50	0.36×0.33	円形	0.40	17.075		
686	第14･35図	ＭＫ58	0.22×0.20	隅丸方形	0.27	16.822		
687	第14･35図	ＭＫ58	0.51×0.51	不整円形	0.51	16.587		
689	第16･35図	ＭＫ50	0.18×0.16	隅丸方形	0.25	16.811		
690	第14･35図	ＭＪ57	〈0.50〉×0.36	楕円形	0.52	16.469	Ｐ1437との新旧不明	礎板
691	第16･35図	ＭＩ･ＭＪ49･50	0.25×0.23	隅丸方形	0.28	16.952		
692	第16･35図	ＭＨ51	0.47×0.34	楕円形	－	－		
693	第16･35図	ＭＨ51	0.22×[0.20]	不整形	－	－	Ｐ694との新旧不明	
694	第16･35図	ＭＨ51	0.35×[0.28]	隅丸方形	－	－	Ｐ693との新旧不明	
696	第16･35図	ＭＨ51	0.22×0.20	隅丸方形	－	－		
697	第16･35図	ＭＨ50	0.37×0.31	不整楕円形	－	－		
698	第16･35図	ＭＨ50･51	[0.64]×0.46	不整形	－	－	Ｐ1448との新旧不明	須恵器坏１点(4.0g)
699	第19･35図	ＭＧ50	0.22×0.18	楕円形	0.20	17.352		
700	第12･13･34図	ＭＮ51	0.22×0.20	円形	0.16	16.333		
701	第12･13･34図	ＭＮ51	0.24×0.23	隅丸方形	0.29	16.206		
702	第12･34図	ＭＮ･ＭＯ51	0.13×0.12	隅丸方形	0.19	16.253		
704	第15･35図	ＭＪ55	0.21×0.20	隅丸方形	0.06	17.383		
705	第16･35図	ＭＨ49	0.21×0.19	隅丸方形	0.18	17.026		
706	第16･35図	ＭＨ49	0.30×0.22	楕円形	0.16	17.074		
707	第16･35図	ＭＩ50	0.36×0.34	不整円形	0.43	16.860	Ｐ663→Ｐ707	
708	第16･35図	ＭＩ50	0.31×0.21	不整形	0.20	17.154		礎石
709	第16･35図	ＭＩ50	[0.33]×[0.27]	不整円形	0.09	17.301		
710	第16･35図	ＭＩ50	0.42×0.30	楕円形	0.09	17.317		
711	第16･35図	ＭＨ･ＭＩ50	[0.28]×[0.24]	不整円形	0.10	17.288		
712	第16･35図	ＭＧ･ＭＨ49	0.38×0.37	隅丸方形	0.42	17.003		礎板、肥前磁器皿１点(4.1g)
715	第19･36図	ＭＦ49	0.33×0.26	不整楕円形	0.48	17.205		
716	第19･36図	ＭＥ･ＭＦ49	0.22×0.22	隅丸方形	0.24	17.481		
717	第10･11･34図	ＭＴ55	0.36×0.30	不整円形	0.22	16.794	ＳＯ15→Ｐ717	
718	第15･35図	ＭＦ･ＭＧ53	0.82×0.73	楕円形	0.46	17.164		
719	第19･36図	ＭＥ48	0.29×0.27	隅丸方形	0.38	17.266		
721	第19･35図	ＭＧ51	0.83×0.62	不整形	1.21	16.277		土師器甕１点(1.5g)、珠洲系陶器擂鉢１点(33.8g)、瀬戸美濃陶器２点(19.8g)、肥前陶器皿１点(22.6g、第119図384)
722	第15･35･36図	ＭＦ52･53	0.78×0.66	楕円形	0.80	16.877		近代磁器器種不明１点(0.8g)
725	第16･35図	ＭＨ50	0.49×0.35	楕円形	0.64	16.803	ＳＥ100→Ｐ725	礫(廃棄に伴うか)、須恵器坏１点(3.6g)、珠洲系陶器擂鉢１点(21.2g)
726	第11･13･34図	ＭＯ54	0.60×0.54	不整形	0.12	17.049		
727	第16･35図	ＭＪ49	0.30×0.27	隅丸方形	0.21	16.513	ＳＥ34→Ｐ727	
728	第16･35図	ＭＪ49	0.39×0.33	隅丸方形	0.17	16.580	ＳＥ34→Ｐ728	
729	第16･35図	ＭＪ49	0.38×0.33	不整形	0.39	16.216		
730	第16･35図	ＭＪ49	0.55×0.48	不整楕円形	0.47	16.116		
731	第16･35図	ＭＪ49	0.33×0.32	隅丸方形	0.47	16.231		
732	第19･35図	ＭＧ49	0.26×0.26	円形	0.30	17.298		
733	第19図	ＭＧ49	0.85×0.73	円形	0.25	17.337		
734	第16･35図	ＭＨ50	0.48×0.37	隅丸方形	0.33	16.957		
735	第14図	ＭＪ59	0.19×0.15	隅丸方形	0.38	16.502		
736	第14図	ＭＪ59	0.32×0.19	楕円形	0.28	16.585		
737	第14図	ＭＪ58	0.16×0.14	隅丸方形	0.19	16.670		
738	第15･35･36図	ＭＦ52	0.28×0.23	隅丸方形	0.51	17.101		柱材、擂鉢１点(72.8g)、砥石１点(195.0g、第119図385)
739	第19図	ＭＧ49	0.25×0.21	楕円形	0.11	17.476		
740	第19図	ＭＧ49	0.34×0.32	円形	0.09	17.510		
741	第19図	ＭＧ49	0.50×0.37	不整形	0.14	17.454		
742	第19図	ＭＧ49	0.45×0.39	不整円形	0.26	17.351		
743	第19･35図	ＭＦ･ＭＧ49	0.24×[0.22]	隅丸方形	0.30	17.293	Ｐ358との新旧不明	
744	第19･36図	ＭＦ49	0.24×0.24	円形	0.17	17.506		
745	第19･36図	ＭＦ49	0.29×0.23	隅丸方形	0.46	17.205		
746	第19･36図	ＭＥ･ＭＦ49	0.22×0.20	不整円形	0.15	17.558		
747	第19･36図	ＭＦ49	0.28×0.26	不整円形	0.13	17.555		
748	第19･36図	ＭＦ50	0.38×0.30	隅丸方形	0.17	17.431		
749	第21･36図	ＬＴ51	0.29×0.27	不整楕円形	0.27	17.222		
750	第22･36･37図	ＬＴ49	0.43×0.42	不整円形	0.32	17.230		
751	第21･22･37図	ＬＴ50	[0.39]×0.29	隅丸方形	0.54	16.960		
752	第16図	ＭＨ49	0.46×0.38	楕円形	0.45	16.894	Ｐ1451との新旧不明	
754	第16図	ＭＨ49	0.48×0.46	隅丸方形	0.54	16.826		
755	第14図	ＭＬ58	0.38×0.24	隅丸方形	0.13	16.970		
756	第14図	ＭＬ58	0.48×0.38	不整楕円形	0.29	16.814		
757	第14図	ＭＬ59	0.30×0.29	不整円形	0.07	16.861		
758	第14図	ＭＬ59	0.33×0.31	不整円形	0.08	16.928		
759	第14図	ＭＭ59	0.30×0.30	不整円形	0.17	16.877		
760	第14図	ＭＭ59	0.39×0.35	不整楕円形	0.24	16.742		
761	第17･36図	ＭＢ56	0.20×0.17	楕円形	0.32	17.168		
762	第16図	ＭＩ48･49	0.36×0.32	隅丸方形	0.14	17.015		
763	第16図	ＭＩ48･49	0.54×0.32	隅丸方形	0.22	16.875		
764	第16図	ＭＧ･ＭＨ48	0.28×0.24	不整円形	0.23	17.229		
765	第19･36図	ＭＦ50･51	0.36×〈0.26〉	楕円形	－	－	Ｐ766との新旧不明	
766	第19･36図	ＭＦ50	〈0.27〉×0.25	楕円形	－	－	Ｐ765との新旧不明	
768	第15･18･36図	ＭＦ53	[0.16]×0.14	隅丸方形	0.13	17.575		
769	第15･36図	ＭＦ53	0.22×0.20	円形	0.47	17.217		
770	第15･18･36図	ＭＦ53	0.20×0.19	隅丸方形	0.12	17.598		
771	第15･36図	ＭＦ53	0.26×0.24	不整円形	0.51	17.125		
772	第15･18･36図	ＭＦ53	0.42×0.40	楕円形	－	－		
773	第15･36図	ＭＦ53	0.23×0.22	不整円形	0.19	17.366		
775	第15･36図	ＭＦ54	0.67×0.67	不整円形	0.53	17.053		
776	第15･18･36図	ＭＦ54	0.31×0.31	不整円形	0.30	17.316		
777	第15･17･18･36図	ＭＦ54	0.58×0.53	不整円形	0.31	17.160		
778	第15･35図	ＭＨ53	0.16×0.14	隅丸方形	0.12	17.050		
779	第15･35図	ＭＨ53	0.15×0.13	隅丸方形	0.44	16.717		
780	第21･22･36図	ＬＴ50	0.20×0.17	隅丸方形	0.27	17.207		
781	第21･22･36図	ＬＴ49･50	0.24×0.19	隅丸方形	0.30	17.197		

※[　]内の数値は推定値、〈　〉内の数値は残存値を表す。

第９表　柱穴様ピット一覧表（７）

柱穴番号	挿図番号	所在グリッド	長軸×短軸（m）	平面形状	深さ（m）	底面標高（m）	重複(旧→新)	備　考
782	第15･18･36図	ＭＥ･ＭＦ54	0.29×0.26	楕円形	－	－		
783	第18･36図	ＭＤ52	0.28×0.24	楕円形	0.07	17.411		
784	第21･22･36図	ＬＴ50	0.19×0.18	隅丸方形	0.19	17.261		
785	第21･22･37図	ＬＳ･ＬＴ50	0.18×0.16	隅丸方形	0.22	17.250		
786	第15･19･35図	ＭＦ51	0.20×0.20	円形	0.25	17.270		
787	第15･35図	ＭＦ･ＭＧ52	0.92×0.92	隅丸方形	0.80	16.799		
788	第15･35図	ＭＦ･ＭＧ52	0.77×0.76	隅丸方形	0.68	16.886		
789	第15･35図	ＭＧ52	0.57×0.54	不整円形	0.62	16.945		
790	第15･35図	ＭＪ53	0.17×0.15	楕円形	0.14	17.380		
791	第15･35図	ＭＧ51･52	0.50×0.48	不整形	0.33	17.225		
792	第15･35図	ＭＧ51	0.26×0.26	円形	0.32	17.178		
793	第19･35図	ＭＧ51	0.36×0.22	楕円形	0.34	17.100		
794	第16･19･35図	ＭＧ51	0.39×[0.38]	隅丸方形	0.50	16.945		
795	第15･35･36図	ＭＦ52	0.24×0.23	円形	0.29	17.376		
796	第15･35図	ＭＪ53	0.44×0.35	不整円形	0.34	17.042		
797	第16･35図	ＭＩ･ＭＪ51	0.25×0.20	隅丸方形	0.12	16.718		
798	第16･35図	ＭＩ51	0.22×0.18	楕円形	0.08	16.750		
799	第16･35図	ＭＩ51	0.25×0.24	隅丸方形	0.08	16.768		
800	第16･35図	ＭＪ51	0.25×0.23	不整円形	0.19	16.490		
801	第16･35図	ＭＨ50	0.33×0.32	円形	－	－		
802	第22･36図	ＭＡ49	0.26×0.24	隅丸方形	0.22	17.338		
803	第22･36図	ＭＡ49	0.35×0.31	隅丸方形	－	－		
804	第22･36･37図	ＬＴ49	0.32×0.22	楕円形	0.15	17.404	Ｐ805→Ｐ804	
805	第22･36･37図	ＬＴ49	0.21×[0.21]	円形	0.13	17.428	Ｐ805→Ｐ804	
806	第22･36･37図	ＬＴ49	0.23×0.22	円形	0.18	17.383		
807	第22･36･37図	ＬＴ49	0.23×0.20	隅丸方形	－	－		
808	第22･37図	ＬＴ48･49	0.26×0.23	隅丸方形	0.17	17.404		
809	第22･37図	ＬＴ48	0.24×0.19	楕円形	－	－		
810	第22･37図	ＬＴ48	0.26×0.26	円形	－	－		
811	第22･37図	ＬＴ48	0.26×0.22	隅丸方形	－	－		
812	第22･37図	ＬＳ47･48	0.21×0.20	隅丸方形	－	－		
813	第22･37図	ＬＳ47	0.22×0.21	円形	－	－		
814	第22･37図	ＬＳ47	0.23×0.22	隅丸方形	0.16	17.514		
815	第22･37図	ＬＳ47	0.26×0.22	隅丸方形	－	－		
816	第22･37図	ＬＳ47	0.21×0.21	隅丸方形	－	－		
817	第22･37図	ＬＲ･ＬＳ47	0.18×0.16	隅丸方形	－	－		
818	第22･37図	ＬＳ47	0.31×0.26	不整楕円形	0.29	17.368		
819	第22･37図	ＬＳ48	0.29×0.23	楕円形	－	－		
820	第22･37図	ＬＲ47	0.27×0.25	隅丸方形	0.18	17.479		
821	第22･37図	ＬＲ47	0.19×0.19	円形	0.14	17.516		
822	第22･37図	ＬＲ47	0.23×0.21	円形	0.13	17.554		
823	第22･37図	ＬＲ47	0.21×0.20	円形	0.08	17.582		
824	第22･37図	ＬＳ48	0.28×0.28	不整円形	0.14	17.444		
826	第15･35図	ＭＧ･ＭＨ52	0.39×0.38	隅丸方形	0.60	17.025		
827	第15･35図	ＭＨ52	0.21×0.20	隅丸方形	0.08	17.484		
828	第15･35図	ＭＧ･ＭＨ52	0.21×0.20	隅丸方形	0.45	17.003		
829	第15･35図	ＭＧ52	0.44×0.42	不整円形	0.27	17.071		
830	第19･36図	ＭＥ49	0.17×0.16	不整円形	－	－		
831	第19･36図	ＭＥ49	0.32×0.25	楕円形	－	－		
832	第19･36図	ＭＥ49	0.29×0.24	隅丸方形	0.36	17.359		
833	第19･36図	ＭＥ49	0.29×0.22	楕円形	－	－		
834	第19･36図	ＭＥ49	0.20×0.17	楕円形	－	－		
835	第19･36図	ＭＥ49･50	0.52×0.51	不整形	0.37	17.411		
836	第19･36図	ＭＤ49	0.34×0.32	不整円形	－	－		
837	第19･36図	ＭＤ48	0.41×0.40	円形	－	－		
838	第19･36図	ＭＤ48	0.26×0.18	楕円形	－	－		
839	第19･36図	ＭＥ48	0.41×0.37	隅丸方形	－	－		
840	第19･36図	ＭＤ49	0.32×0.29	不整円形	0.40	17.432		
841	第19･36図	ＭＤ49	0.31×0.27	隅丸方形	－	－		
842	第19･36図	ＭＤ49	0.23×0.22	隅丸方形	－	－		
843	第19･36図	ＭＤ49	0.22×0.21	隅丸方形	－	－		
844	第19･36図	ＭＤ49	0.28×0.25	隅丸方形	－	－		
845	第19･36図	ＭＤ49	0.23×0.20	隅丸方形	－	－		
846	第19･36図	ＭＤ47	[0.36]×[0.32]	隅丸方形	－	－		
847	第19･36図	ＭＥ50	0.29×0.27	楕円形	－	－		
848	第19･36図	ＭＥ50	0,17×0.16	円形	－	－		
849	第19･36図	ＭＥ50	0.29×0.26	隅丸方形	－	－		
850	第19･36図	ＭＥ50	0.20×0.17	楕円形	－	－		
851	第19･36図	ＭＥ50	0.22×0.22	隅丸方形	－	－		
852	第19･36図	ＭＥ50	0.28×0.22	楕円形	－	－		
853	第19･36図	ＭＥ50	0.25×0.22	不整円形	－	－		
854	第19･36図	ＭＥ50	0.24×0.22	不整円形	－	－		
855	第19･36図	ＭＥ50	0.24×0.24	隅丸方形	－	－		
856	第19･36図	ＭＥ50	0.24×0.21	隅丸方形	－	－		
857	第19･36図	ＭＥ50	0.28×0.25	不整円形	－	－		
858	第19･36図	ＭＤ･ＭＥ50	0.30×0.23	隅丸方形	－	－		
859	第19･36図	ＭＤ50	0.38×0.32	隅丸方形	－	－		
860	第19･36図	ＭＤ50	0.68×0.44	不整楕円形	－	－		
861	第19･36図	ＭＤ50	0.22×0.19	円形	－	－		
862	第19･36図	ＭＤ50	0.19×0.17	隅丸方形	－	－		
863	第19･36図	ＭＥ･ＭＦ50･51	0.38×0.36	不整円形	－	－		
864	第19･36図	ＭＤ48	0.38×[0.32]	隅丸方形	0.28	17.488	ＳＯ79→Ｐ864	
865	第19･36図	ＭＤ49･50	0.21×0.15	不整形	－	－		
866	第19･36図	ＭＤ48	0.45×0.41	不整円形	0.37	17.423	Ｐ867→Ｐ866	
867	第19･36図	ＭＤ48	0.26×[0.26]	円形	0.28	17.512	Ｐ867→Ｐ866	
868	第19･36図	ＭＣ50	0.25×0.24	隅丸方形	－	－		
869	第19･36図	ＭＣ50	0.21×0.18	隅丸方形	－	－		
870	第19･36図	ＭＣ50	[0.26]×[0.23]	楕円形	－	－		
871	第19･36図	ＭＣ50	0.22×0.22	隅丸方形	－	－		
872	第19･36図	ＭＤ48	0.35×0.24	楕円形	0.19	17.542	ＳＫＩ88→Ｐ872	
873	第19･36図	ＭＤ48	0.32×0.26	隅丸方形	0.31	17.360	ＳＫＩ88→Ｐ873	
874	第19･36図	ＭＣ48	0.41×0.36	不整形	0.23	17.417		
875	第19･36図	ＭＣ48	0.43×0.36	楕円形	0.25	17.387		
876	第19･36図	ＭＣ48	0.19×0.19	円形	0.13	17.527		

※[　]内の数値は推定値、〈　〉内の数値は残存値を表す。

第 10 表　柱穴様ピット一覧表（８）

柱穴番号	挿図番号	所在グリッド	長軸×短軸（m）	平面形状	深さ（m）	底面標高（m）	重複(旧→新)	備　考
877	第19･36図	ＭＣ48	0.36×0.32	隅丸方形	0.26	17.387		
879	第16･35図	ＭＨ50	[0.57]×0.54	不整円形	0.41	−	ＳＥ100→Ｐ879	礎板
882	第22･23･37図	ＬＰ48	0.30×0.29	隅丸方形	0.13	17.392		
883	第22･23･37図	ＬＰ47	0.50×0.46	隅丸方形	0.26	17.276		
884	第24･38図	ＬＩ･ＬＪ46	0.24×0.22	隅丸方形	0.26	17.330		
1001	第33図	ＪＯ45	0.34×0.33	楕円形	0.41	16.762		
1002	第33図	ＪＰ45	0.32×0.29	楕円形	0.25	17.006		
1003	第33図	ＪＰ45	0.25×0.24	隅丸方形	0.13	17.113		土師器器種不明１点(0.7g)
1004	第33図	ＪＰ45	0.34×0.30	隅丸方形	0.23	16.991		
1005	第33図	ＪＰ45	0.30×0.30	円形	0.22	16.976		
1006	第33図	ＪＰ45	0.32×0.26	楕円形	0.63	16.593		
1008	第33図	ＪＰ46	0.40×0.36	隅丸方形	0.15	17.030		
1010	第33図	ＪＰ44	0.42×0.33	楕円形	0.45	16.813		
1011	第33図	ＪＰ44	0.36×0.28	楕円形	0.28	17.015		
1012	第33図	ＪＰ45	0.30×0.30	隅丸方形	0.29	16.817		
1013	第33図	ＪＰ･ＪＱ45	0.25×0.21	隅丸方形	0.26	17.031		
1014	第33図	ＪＱ45	0.25×0.24	隅丸方形	0.29	16.988		
1015	第33図	ＪＱ45	0.26×0.26	楕円形	0.15	17.039		
1016	第33図	ＪＱ45	0.26×0.23	楕円形	0.27	16.918		
1017	第33図	ＪＱ45	0.24×0.22	楕円形	0.26	16.957		
1018	第33図	ＪＱ45	0.27×0.20	楕円形	0.19	17.047		
1019	第33･41図	ＪＲ45	0.16×0.13	隅丸方形	0.05	17.241		
1021	第33･41図	ＪＲ･ＪＳ44	0.35×0.33	隅丸方形	0.23	17.033		
1023	第33･41図	ＪＳ44	0.27×0.26	隅丸方形	0.22	17.041		
1024	第33･41図	ＪＲ･ＪＳ44	0.30×0.28	隅丸方形	0.27	17.023		
1025	第33･41図	ＪＳ44	0.36×0.28	楕円形	0.35	16.952		
1029	第32･41図	ＫＢ45	0.28×0.23	楕円形	0.43	16.893		
1030	第33･41図	ＪＲ45	0.25×0.24	円形	0.27	17.020		
1031	第33･41図	ＪＲ45	0.23×0.22	円形	0.31	16.990		
1032	第33･41図	ＪＲ45	0.19×0.17	楕円形	0.25	17.060		
1033	第33･41図	ＪＲ45	0.24×0.21	楕円形	0.39	16.912		須恵器坏１点(8.9g)
1034	第33･41図	ＪＲ45	0.23×0.23	円形	0.17	17.129		
1035	第33･41図	ＪＳ45	0.24×0.24	円形	0.19	17.163		土師器甕１点(7.4g)
1037	第33･41図	ＪＳ45	0.36×0.33	楕円形	0.49	16.843		
1039	第33･41図	ＪＳ45	0.35×0.33	楕円形	0.18	17.134		土師器甕１点(9.5g)
1040	第32･33･41図	ＪＴ44	0.28×0.24	楕円形	0.22	17.063		
1041	第32･33･41図	ＪＴ44	0.30×0.23	隅丸方形	0.26	17.026		
1043	第32･33･41図	ＪＳ･ＪＴ44	0.31×0.29	楕円形	0.14	17.149		
1045	第32･33･41図	ＪＴ44	0.29×0.18	楕円形	0.15	17.122		
1046	第32･33･41図	ＪＴ44	0.34×0.32	隅丸方形	0.47	16.801		
1047	第32･33･41図	ＪＴ44	0.33×0.28	隅丸方形	0.15	17.113		
1049	第31･32･41図	ＫＢ45	0.29×0.28	円形	0.52	16.824		
1050	第32･41図	ＫＢ44	0.28×0.24	隅丸方形	0.49	16.811		
1051	第32･41図	ＫＢ44	0.30×0.28	隅丸方形	0.18	17.109		
1052	第32･41図	ＫＢ45	0.28×0.18	楕円形	0.41	16.937		
1053	第31･32･41図	ＫＢ45	0.32×0.32	円形	0.28	17.092		
1054	第24･38図	ＬＬ48	0.44×0.39	不整円形	0.43	17.138		肥前磁器１点(158.9g、第119図386)
1055	第33･41図	ＪＲ･ＪＳ44	0.26×0.18	楕円形	0.29	16.999		
1056	第33･41図	ＪＳ44	0.26×0.20	楕円形	0.35	16.945		須恵器坏１点(1.2g)
1057	第33図	ＪＰ44	0.36×0.34	円形	0.19	17.106		
1058	第33図	ＪＱ45	0.34×0.22	隅丸方形	0.24	17.050		
1059	第33図	ＪＰ44	0.39×0.27	不整円形	0.17	17.069		
1060	第33図	ＪＰ44	0.22×0.21	隅丸方形	0.17	16.981		
1061	第32･33･41図	ＪＴ44	0.27×0.19	隅丸方形	0.35	16.926		
1062	第32･41図	ＪＴ44	0.54×0.30	不整形	0.28	17.016		
1063	第32･33･41図	ＪＳ44	0.34×0.29	楕円形	0.50	16.785		
1065	第32･41図	ＫＡ44	0.27×0.24	楕円形	0.29	16.987		
1066	第32･41図	ＫＡ44	0.31×0.29	楕円形	0.19	17.082		
1067	第32･41図	ＫＡ44	0.29×0.24	隅丸方形	0.17	17.128		
1068	第32･41図	ＫＡ44	0.27×0.20	隅丸方形	0.20	17.102		
1069	第32･41図	ＫＡ44	0.29×0.27	楕円形	0.36	16.958		
1070	第32･41図	ＫＡ･ＫＢ44	0.34×0.27	楕円形	0.28	17.014		
1071	第32･41図	ＫＢ44	0.26×0.24	円形	0.22	17.097		
1072	第32･41図	ＫＢ44	0.34×0.26	楕円形	0.38	16.936		須恵器坏１点(4.2g)
1073	第32･41図	ＫＢ44	0.20×0.19	隅丸方形	0.16	17.141		
1074	第32･41図	ＫＢ44	0.24×0.20	楕円形	0.37	16.983		
1075	第32･41図	ＫＢ44	0.25×0.24	隅丸方形	0.43	16.824		
1076	第32･41図	ＫＢ44	0.20×0.19	隅丸方形	0.27	17.044		
1077	第32･41図	ＫＣ44	0.33×0.27	隅丸方形	0.42	16.862		
1078	第32･41図	ＫＣ44	0.29×0.22	楕円形	0.35	17.094		
1080	第32･41図	ＫＣ44	0.25×0.24	円形	0.12	17.095		
1081	第32･41図	ＫＣ44	0.24×0.24	円形	0.16	17.071		
1082	第32･41図	ＫＣ44	0.20×0.19	楕円形	0.13	17.116		
1083	第32･41図	ＫＣ44	0.39×0.22	楕円形	0.41	16.817		羽口１点(4.4g)
1084	第32･41図	ＫＣ44	0.26×0.21	楕円形	0.13	17.079		
1085	第32･33･41図	ＪＴ46	0.41×0.38	円形	0.12	17.227		
1086	第32･33･41図	ＪＴ46	0.29×0.27	不整円形	0.33	17.009		
1087	第31･32･41図	ＫＣ46	0.26×0.24	隅丸方形	0.18	17.208		
1088	第31･32･41図	ＫＣ46	0.42×0.41	円形	0.23	17.118		
1089	第31･32･41図	ＫＡ45	0.26×0.17	楕円形	0.30	17.067		
1090	第32･41図	ＫＤ44	0.33×0.26	隅丸方形	0.35	16.832		
1091	第32･41図	ＫＤ44	0.25×0.22	楕円形	0.15	17.030		
1093	第30･32･41図	ＫＤ44	0.40×0.37	楕円形	0.19	17.033		砥石１点(20.0g)
1094	第30･32･41図	ＫＤ44	0.34×[0.34]	隅丸方形	0.17	17.081	Ｐ1156→Ｐ1094	
1095	第30･32･41図	ＫＤ44	0.27×0.23	楕円形	0.27	16.999		
1096	第30･32･41図	ＫＤ44	0.35×0.33	楕円形	0.18	17.107		須恵器甕１点(31.9g)
1099	第30～32･41図	ＫＤ46	0.57×0.46	楕円形	0.47	16.906		
1100	第31･32･41図	ＫＣ･ＫＤ46	0.31×0.25	楕円形	0.18	17.219		
1101	第31･32･41図	ＫＤ47	0.32×0.28	隅丸方形	0.20	17.127		礫
1102	第30･32･41図	ＫＥ44	0.60×0.32	楕円形	0.30	17.014		
1103	第30･41図	ＫＥ44	0.24×[0.23]	円形	0.15	17.167	Ｐ1462→Ｐ1103	
1104	第30･41図	ＫＥ44	0.47×0.37	隅丸方形	0.16	17.177		
1105	第30･41図	ＫＥ44	0.39×0.29	楕円形	0.37	16.994		
1106	第30･41図	ＫＥ44･45	0.36×0.31	楕円形	0.18	17.228		

※[　]内の数値は推定値、〈　〉内の数値は残存値を表す。

第 11 表　柱穴様ピット一覧表（９）

柱穴番号	挿図番号	所在グリッド	長軸×短軸（m）	平面形状	深さ（m）	底面標高（m）	重複(旧→新)	備　考
1107	第30･41図	ＫＦ44･45	0.32×0.27	円形	0.10	17.331		
1108	第30･41図	ＫＦ45	0.45×0.29	楕円形	0.21	17.215		
1109	第30･31･41図	ＫＦ45	0.60×0.39	不整楕円形	0.34	17.152		
1110	第30･31･41図	ＫＦ45	0.28×0.27	楕円形	0.12	17.319		
1111	第30･31･41図	ＫＦ45	0.30×0.27	楕円形	0.16	17.285		
1112	第30･31･41図	ＫＦ45	0.33×0.29	楕円形	0.23	17.186		
1113	第30･40図	ＫＧ44	0.53×0.49	円形	0.15	17.380		
1114	第29･30･40図	ＫＩ46	0.24×0.24	隅丸方形	0.10	17.378		土師器甕１点(5.9g)
1115	第29･30･40図	ＫＩ46	0.48×0.34	隅丸方形	0.37	17.134		
1116	第29･30･40図	ＫＩ46	0.36×0.35	隅丸方形	0.34	17.168		
1117	第29･30･40図	ＫＩ46	0.47×0.40	隅丸方形	0.16	17.358		
1118	第29･30･40図	ＫＩ46	0.48×0.37	楕円形	0.17	17.346		
1119	第29･30･40図	ＫＩ46･47	0.35×0.31	楕円形	0.15	17.341		
1120	第30･40図	ＫＨ47	0.31×0.28	円形	0.26	17.176		土師器器種不明１点(1.8g)
1121	第30･40図	ＫＨ･ＫＩ47	0.38×0.37	円形	0.18	17.250		
1122	第28･30･40図	ＫＨ47	0.38×0.34	隅丸方形	0.17	17.242		
1123	第28･40図	ＫＨ48	0.35×0.34	円形	0.37	17.030		
1124	第28･30･40図	ＫＩ47･48	0.32×0.22	隅丸方形	0.22	17.201		柱材片か、磁器碗１点(2.1g)、土師器甕１点(3.1g)
1126	第29･40図	ＫＪ46	0.32×0.27	隅丸方形	0.11	17.461		
1127	第29･40図	ＫＪ46	0.33×0.26	楕円形	0.19	17.353		
1128	第29･40図	ＫＪ46	0.27×0.27	円形	0.21	17.341		
1129	第28･29･40図	ＫＪ48	0.33×0.29	隅丸方形	0.23	17.197		
1130	第28･40図	ＫＩ48	0.29×0.26	円形	0.19	17.180		
1131	第28･40図	ＫＬ46･47	0.36×0.33	円形	0.22	17.324		
1132	第28･40図	ＫＬ47	0.52×0.36	楕円形	0.19	17.338		
1133	第28･40図	ＫＬ46･47	0.49×0.46	隅丸方形	0.29	17.271		須恵器坏４点(8.9g)
1135	第25図	ＬＣ46	0.52×0.44	楕円形	0.33	17.259		
1137	第25･38図	ＬＦ･ＬＧ46	0.70×0.58	隅丸方形	0.32	17.335		柱材、礫
1138	第25･38図	ＬＦ･ＬＧ46	0.42×0.39	隅丸方形	0.24	17.410		
1139	第25図	ＬＥ46	0.33×0.31	隅丸方形	0.20	17.535		磁器１点(2.9g)
1146	第30･41図	ＫＦ44	0.41×0.36	楕円形	0.17	17.260		礫、土師器甕１点(6.9g)
1147	第32･33･41図	ＪＳ44	0.32×0.29	楕円形	0.26	17.038	ＳＫ136→Ｐ1147	
1148	第33･41図	ＪＲ44	0.36×0.24	楕円形	0.21	17.022		
1149	第33･41図	ＪＳ44	0.22×0.19	隅丸方形	0.22	17.040		
1150	第33･41図	ＪＳ44	0.22×0.17	楕円形	0.17	17.101		
1151	第32･33･41図	ＪＳ･ＪＴ44	0.21×0.19	楕円形	0.14	17.134		
1152	第32･33･41図	ＪＴ44	0.31×0.28	隅丸方形	0.68	16.623		
1153	第32･41図	ＪＴ45	0.42×0.35	楕円形	0.23	17.116		
1154	第30･41図	ＫＥ44	0.32×0.28	楕円形	0.33	17.068		
1155	第30･32･41図	ＫＤ44	0.34×0.28	隅丸方形	0.28	16.911		
1156	第30･32･41図	ＫＤ44	〈0.27〉×0.27	隅丸方形	0.34	16.908	Ｐ1156→Ｐ1094	土師器甕２点(4.6g)、須恵器坏１点(1.2g)、鉄滓２点(46.0g)
1157	第30･32･41図	ＫＤ44	0.30×0.29	隅丸方形	0.11	17.101		
1158	第30･32･41図	ＫＤ44	0.34×0.33	隅丸方形	0.19	17.092		
1159	第30･32･41図	ＫＤ44	0.44×0.42	隅丸方形	0.32	16.967		柱材、鉄滓１点(10.2g)
1160	第30･32･41図	ＫＤ45	0.21×0.20	隅丸方形	0.10	17.236		
1161	第30･41図	ＫＥ･ＫＦ44	0.41×0.36	円形	0.27	17.152		
1162	第30･41図	ＫＥ44	0.60×0.43	楕円形	0.15	17.205		土師器甕１点(4.1g)
1163	第30･41図	ＫＥ44	0.33×0.29	楕円形	0.10	17.259		
1164	第30･41図	ＫＥ44	0.32×0.27	円形	0.12	17.206		
1165	第30･32･41図	ＫＥ45	0.32×0.31	楕円形	0.22	17.119		土師器不明１点(0.9g)
1166	第30～31･41図	ＫＤ45	0.24×0.23	楕円形	0.16	17.190		
1167	第30～31･41図	ＫＥ46	0.37×0.37	隅丸方形	0.28	17.144		礫、土師器甕１点(6.6g)
1168	第30～31･41図	ＫＤ･ＫＥ47	0.32×0.30	隅丸方形	0.29	17.104		礫
1169	第30～31･41図	ＫＤ47	0.30×0.20	楕円形	0.17	17.188		
1170	第30･41図	ＫＦ44	0.50×0.43	隅丸方形	0.24	17.214		
1171	第30･41図	ＫＦ45	0.38×0.28	楕円形	0.20	17.211		
1172	第30･41図	ＫＦ45	0.42×0.33	楕円形	0.33	17.107		土師器器種不明１点(1.1g)、須恵器坏１点(4.2g)
1173	第30･31･41図	ＫＦ45	0.35×0.30	円形	0.16	17.270		
1174	第30･31･41図	ＫＦ45	0.35×0.28	隅丸方形	0.12	17.318		
1176	第30･31･41図	ＫＦ45	0.42×0.38	楕円形	0.36	17.045		
1177	第30･41図	ＫＦ44	0.30×0.27	楕円形	0.10	17.324		礫
1178	第30･31･41図	ＫＦ46	0.41×0.40	隅丸方形	0.34	17.068		
1179	第30･41図	ＫＦ44	0.44×0.43	円形	0.24	17.210		
1180	第30･41図	ＫＦ44	0.28×0.28	楕円形	0.10	17.350		
1181	第31･32･41図	ＫＣ46	0.32×0.25	円形	0.21	17.131		
1182	第31･32･41図	ＫＣ46	0.31×0.26	円形	0.21	17.104		
1183	第31･32･41図	ＫＣ46	0.36×0.32	楕円形	0.16	17.181		
1184	第31･32･41図	ＫＣ46	0.24×0.21	隅丸方形	0.17	17.190		
1185	第31･32･41図	ＫＣ46	0.26×0.21	楕円形	0.22	17.107		
1186	第31･32･41図	ＫＣ46	0.32×0.32	隅丸方形	0.24	17.129		
1187	第31･32･41図	ＫＤ46	0.32×0.22	楕円形	0.09	17.271		
1188	第30･40図	ＫＧ44	0.26×0.23	楕円形	0.10	17.277		
1189	第30･40図	ＫＧ44	0.24×0.22	隅丸方形	0.14	17.267		
1190	第30･40図	ＫＧ44	0.34×0.26	楕円形	0.16	17.310		
1191	第30･40図	ＫＧ44	0.38×0.38	楕円形	0.16	17.329		
1192	第30･40図	ＫＧ44	0.44×0.30	楕円形	0.17	17.332		
1193	第30･40･41図	ＫＧ45	0.56×0.45	楕円形	0.17	17.338		
1194	第30･40図	ＫＧ46	0.42×0.32	楕円形	0.30	17.240		
1195	第30･40図	ＫＧ45	0.32×0.30	楕円形	0.54	16.999		
1196	第30･40図	ＫＧ45	0.36×0.28	楕円形	0.12	17.390		
1197	第30･40･41図	ＫＧ46･47	0.36×0.30	隅丸方形	0.41	17.365		
1198	第30･40･41図	ＫＦ47	0.32×0.30	隅丸方形	0.18	17.232		
1199	第31･41図	ＫＥ48	0.28×0.22	隅丸方形	0.10	17.206		
1200	第31･41図	ＫＤ48	0.40×0.36	隅丸方形	0.09	17.194		
1201	第30～32･41図	ＫＤ47	0.30×0.28	隅丸方形	0.20	17.112		
1202	第30～32･41図	ＫＤ47	0.34×0.32	楕円形	0.20	17.131		
1203	第31･32･41図	ＫＣ47	0.28×0.28	楕円形	0.17	17.138		
1204	第30～32･41図	ＫＤ46	0.36×0.34	楕円形	0.17	17.178		
1205	第30～32･41図	ＫＥ44	0.30×0.26	隅丸方形	0.09	17.233		
1206	第30～32･41図	ＫＤ45	0.32×0.32	隅丸方形	0.19	17.171		
1207	第28･40図	ＫＩ48	0.37×0.32	楕円形	0.30	17.083		

※[　]内の数値は推定値、〈　〉内の数値は残存値を表す。

第 12 表　柱穴様ピット一覧表（10）

柱穴番号	挿図番号	所在グリッド	長軸×短軸（m）	平面形状	深さ（m）	底面標高（m）	重複(旧→新)	備　考
1208	第28･40図	ＫＩ48	0.32×0.29	隅丸方形	0.24	17.157		
1209	第28･40図	ＫＩ48	0.30×0.27	隅丸方形	0.40	16.988		
1210	第28･40図	ＫＨ48	0.36×0.34	隅丸方形	0.11	17.292		
1211	第30･31･41図	ＫＦ45･46	0.38×0.34	不整楕円形	0.18	17.193		
1212	第33･41図	ＪＳ44	0.35×0.32	円形	0.07	17.156		
1213	第33･41図	ＪＳ44	0.21×0.18	楕円形	–	–		
1214	第33･41図	ＪＳ44	0.32×0.25	楕円形	0.06	17.134		
1215	第33･41図	ＪＳ44	0.49×0.46	円形	0.23	17.078		土師器甕１点(6.1g)
1216	第33･41図	ＪＳ44	0.28×0.26	楕円形	0.16	17.140		
1217	第32･33･41図	ＪＳ44	0.26×0.22	楕円形	0.28	16.990		
1219	第33･41図	ＪＳ44･45	0.30×0.24	楕円形	0.14	17.109		
1220	第32･33･41図	ＪＳ44･45	0.48×0.28	楕円形	–	–	ＳＫ136→Ｐ1220	
1221	第32･33･41図	ＪＳ45	0.30×0.30	円形	0.27	16.997		
1222	第33･41図	ＪＳ45	0.27×0.22	楕円形	0.19	17.064		
1223	第33･41図	ＪＳ45	0.44×0.33	円形	0.35	16.907		
1224	第32･33･41図	ＪＳ45	0.30×0.27	隅丸方形	0.13	17.127		
1225	第32･33･41図	ＪＳ45	0.28×0.25	隅丸方形	0.13	16.882		
1226	第32･33･41図	ＪＳ45	0.32×0.27	楕円形	0.22	17.021		
1227	第32･33･41図	ＪＳ45	0.29×0.25	楕円形	0.15	17.088		
1228	第32･33･41図	ＪＳ･ＪＴ45	0.33×0.33	円形	0.23	16.988		
1229	第32･33･41図	ＪＳ･ＪＴ45	0.44×0.38	隅丸方形	0.31	16.999	Ｐ1230･1271との新旧不明 ＳＫ136→Ｐ1229	
1230	第32･33･41図	ＪＴ45	0.28×0.26	楕円形	0.48	16.830	Ｐ1229との新旧不明	土師器甕３点(26.2g)
1231	第32･33･41図	ＪＴ45	0.61×0.57	隅丸方形	0.56	16.739		
1232	第32･33･41図	ＪＴ45	0.35×0.29	隅丸方形	0.51	16.779		
1233	第32･33･41図	ＪＴ44	0.32×0.24	楕円形	0.20	17.048		
1234	第32･33･41図	ＪＴ44	0.30×0.29	隅丸方形	0.21	17.030		
1235	第30･40図	ＫＨ44	0.48×0.32	楕円形	0.18	17.326		
1236	第30･40図	ＫＨ44	0.36×0.32	隅丸方形	0.12	17.393		
1237	第30･40図	ＫＨ44	0.36×0.32	隅丸方形	0.16	17.389		
1238	第29･30･40図	ＫＩ46	0.34×0.30	隅丸方形	0.32	17.185		
1239	第29･30･40図	ＫＩ･ＫＪ46	0.41×0.58	楕円形	0.13	17.386		肥前磁器猪口１点(2.9g)
1240	第29･30･40図	ＫＩ46	0.53×[0.44]	隅丸方形	0.18	17.314	Ｐ1460と新旧不明	須恵器坏１点(10.3g)、肥前磁器器種不明１点(3.3g)
1241	第29･40図	ＫＪ46	0.28×0.27	楕円形	0.29	17.291		土師器甕１点(4.9g)
1242	第29･40図	ＫＪ46	0.25×0.24	楕円形	0.15	17.432		
1243	第29･40図	ＫＪ46	0.31×0.28	隅丸方形	0.15	17.388		
1244	第29･30･40図	ＫＩ46	0.40×0.40	隅丸方形	0.15	17.354		須恵器坏１点(6.7g)
1245	第29･40図	ＫＫ45	0.32×0.27	隅丸方形	0.11	17.473		
1246	第29･40図	ＫＬ46	0.34×0.23	楕円形	0.29	17.270		
1247	第29･40図	ＫＬ46	0.37×0.36	不整円形	0.15	17.431		土師器甕１点(1.3g)
1248	第30･40･41図	ＫＧ44･45	0.42×0.36	隅丸方形	0.20	17.295		
1249	第30･40図	ＫＧ44･45	0.44×0.34	楕円形	0.29	17.216		
1250	第30･40図	ＫＨ45	0.42×0.34	楕円形	0.14	17.372		
1251	第30･40図	ＫＭ45	0.34×0.23	楕円形	0.29	17.240		
1252	第29･39･40図	ＫＭ45	0.31×0.30	楕円形	0.06	17.477		
1253	第29･40図	ＫＭ46	0.36×0.32	隅丸方形	0.25	17.280		
1254	第29･40図	ＫＭ46	0.33×0.31	楕円形	0.35	17.198		
1255	第29･40図	ＫＭ46	0.36×0.30	楕円形	0.17	17.398		須恵器坏１点(15.0g)
1256	第29･40図	ＫＭ46	0.29×0.22	楕円形	0.17	17.407		
1257	第29･40図	ＫＬ･ＫＭ46	0.29×0.25	楕円形	0.38	17.208		
1258	第29･40図	ＫＭ46	0.33×0.26	楕円形	0.12	17.431		須恵器坏１点(3.0g)、土師器甕１点(5.0g)
1259	第29･40図	ＫＭ46	0.42×0.27	楕円形	0.12	17.427		
1260	第29･39･40図	ＫＭ46	0.31×0.31	隅丸方形	0.18	17.378		
1261	第29･40図	ＫＭ46	0.42×0.34	隅丸方形	0.19	17.321		
1262	第27･29･39･40図	ＫＮ46	0.32×0.28	隅丸方形	0.06	17.447		
1263	第27･29･39･40図	ＫＮ46	0.31×0.26	楕円形	0.08	17.422		
1264	第27･29･39･40図	ＫＮ46	0.29×0.27	隅丸方形	0.07	17.443		
1271	第32･33･41図	ＪＳ･ＪＴ44･45	[0.39]×0.37	楕円形	0.37	16.926	Ｐ1229との新旧不明 ＳＫ136→Ｐ1271	土師器甕１点(6.4g)
1280	第26･27･39図	ＫＱ47	0.57×0.47	隅丸方形	0.14	17.362		板材、土師器甕１点(4.2g)
1284	第26･27･39図	ＫＰ47･48	0.40×0.29	楕円形	0.37	17.013		
1288	第26･27･39図	ＫＰ47	0.43×0.33	楕円形	0.14	17.204		
1292	第26･27･39図	ＫＱ46	0.27×0.25	隅丸方形	0.28	17.239		礫
1294	第29･40図	ＫＬ47	0.34×0.28	楕円形	0.27	17.249		
1295	第29･40図	ＫＬ･ＫＭ45	0.29×0.28	楕円形	0.27	17.272		
1296	第24･38図	ＬＫ46･47	0.32×0.28	隅丸方形	0.37	17.300		
1297	第24･38図	ＬＫ47	0.33×0.25	不整形	0.39	17.235	ＳＤ242→Ｐ1297	
1298	第24･38図	ＬＫ48	0.33×0.29	楕円形	0.34	17.255	ＳＤ242→Ｐ1298	
1299	第24･38図	ＬＪ･ＬＫ48	0.48×0.45	不整円形	0.31	17.238	ＳＤ242→Ｐ1299	
1300	第24･38図	ＬＫ48	0.47×0.40	隅丸方形	0.12	17.472		
1301	第24･38図	ＬＬ46	0.34×0.29	隅丸方形	0.33	17.414		
1302	第24･38図	ＬＬ47	0.38×0.29	隅丸方形	0.12	17.515		
1303	第24･38図	ＬＬ48	[0.47]×0.41	隅丸方形	0.18	17.383		
1304	第23･24･38図	ＬＭ48	[0.47]×0.43	楕円形	0.29	17.276		肥前磁器皿１点(2.2g)、肥前磁器器種不明１点(2.2g)
1305	第28･40図	ＫＩ49	0.29×0.28	円形	0.09	17.298		
1306	第28･40図	ＫＨ48	0.31×0.25	隅丸方形	0.09	17.308		
1307	第28･40図	ＫＨ48	0.40×0.34	隅丸方形	0.13	17.258		
1311	第26･27･39図	ＫＰ46	0.43×0.39	隅丸方形	0.30	17.250		
1312	第25図	ＬＣ･ＬＤ46	0.71×0.67	不整形	0.17	17.441		
1313	第25･38図	ＬＧ46	0.25×0.23	円形	0.22	17.446		
1314	第25図	ＬＥ47	0.60×0.53	隅丸方形	0.28	17.222		
1315	第24･25･38図	ＬＨ46･47	0.26×0.22	不整円形	0.29	17.278		
1316	第24･38図	ＬＫ46	0.25×0.24	隅丸方形	0.19	17.548		
1317	第24･38図	ＬＫ46	0.19×0.19	隅丸方形	0.21	17.498		
1318	第24･38図	ＬＫ46	0.26×0.19	隅丸方形	0.38	17.440		肥前磁器皿１点(0.6g)
1319	第24･38図	ＬＫ47	0.18×0.18	隅丸方形	0.15	17.448		
1320	第24･38図	ＬＬ48	0.30×0.26	不整円形	0.17	17.358		
1321	第24･38図	ＬＬ48	0.30×0.29	不整円形	0.16	17.343		
1322	第23･24･38図	ＬＭ48	0.28×0.26	隅丸方形	0.07	17.434		
1323	第23･24･38図	ＬＭ48	0.24×0.22	隅丸方形	0.12	17.398		
1324	第23･24･38図	ＬＮ48･49	0.35×0.32	不整円形	0.12	17.342		

※[　]内の数値は推定値、〈　〉内の数値は残存値を表す。

第 13 表　柱穴様ピット一覧表（11）

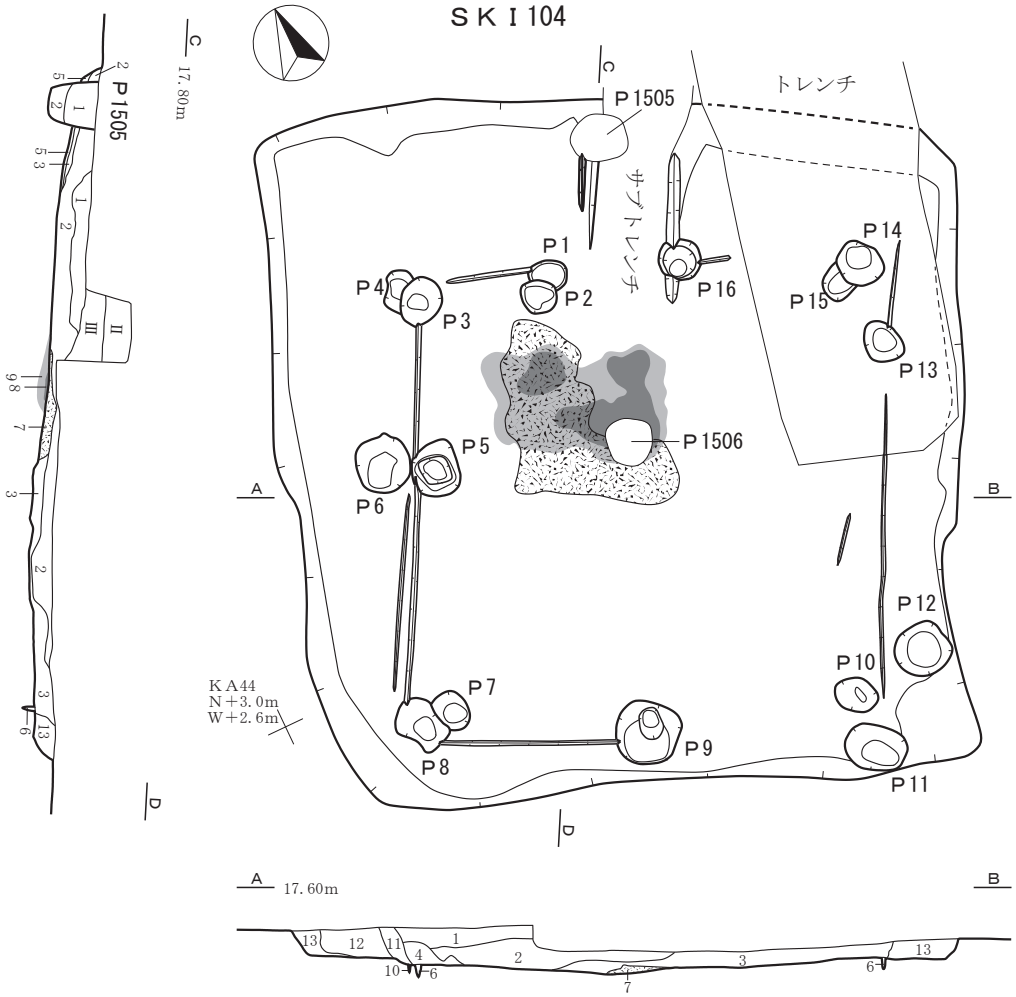
柱穴番号	挿図番号	所在グリッド	長軸×短軸（m）	平面形状	深さ（m）	底面標高（m）	重複(旧→新)	備　考
1325	第21･22･37図	ＬＯ49	0.32×0.28	隅丸方形	0.22	17.557		
1326	第23･24･38図	ＬＭ48	0.30×0.28	隅丸方形	0.18	17.369		
1327	第23･37･38図	ＬＮ48	0.22×0.22	隅丸方形	0.11	17.418		
1330	第28･40図	ＫＪ48	0.44×0.42	楕円形	0.19	17.266		礫
1331	第22･37図	ＬＲ47	0.25×0.23	隅丸方形	0.33	17.347		
1332	第22･37図	ＬＲ47	0.18×0.18	円形	－	－		
1333	第22･37図	ＬＲ47	0.26×0.25	円形	0.21	17.443		
1335	第22･37図	ＬＲ49	0.47×0.46	不整円形	0.37	17.291		
1336	第22･37図	ＬＲ49	0.85×0.61	不整楕円形	0.47	17.223		
1337	第21･22･37図	ＬＲ50	0.34×0.30	楕円形	0.54	17.142		
1338	第22･37図	ＬＳ49	0.42×0.32	不整円形	0.18	17.414		
1339	第21･22･37図	ＬＳ50	0.26×0.22	隅丸方形	0.40	17.187		
1344	第24･25･38図	ＬＨ46	0.22×0.21	隅丸方形	0.17	17.455		
1346	第26･27･39･40図	ＫＯ48	0.30×0.26	隅丸方形	0.29	17.074		
1347	第26･27･39･40図	ＫＯ49	0.30×0.24	隅丸方形	0.19	17.213		
1348	第27･39･40図	ＫＯ49	0.38×0.27	楕円形	0.21	17.125		須恵器坏１点(123.6g、第119図387)
1349	第27･39･40図	ＫＯ49	0.29×0.28	円形	0.16	17.213		
1350	第27･39･40図	ＫＯ50	0.34×0.27	円形	0.20	17.174		
1351	第27･39･40図	ＫＯ50	0.48×0.43	円形	0.33	17.017		
1352	第26･27･39･40図	ＫＯ49	0.32×0.25	不整円形	0.27	17.104		
1356	第26･27･39図	ＫＲ46	0.34×0.33	円形	0.09	17.391		
1362	第22･37図	ＬＲ47	0.24×0.22	円形	0.25	17.411		縄文土器１点(10.3g、第119図388)
1363	第25･38図	ＬＧ46	0.37×0.35	隅丸方形	0.17	17.540		
1364	第25･38図	ＬＧ46	0.30×0.21	隅丸方形	0.46	17.210		
1365	第25･38図	ＬＧ46	0.26×0.26	隅丸方形	0.11	17.554		
1367	第24･25･38図	ＬＨ46	0.24×0.21	円形	0.31	17.340		杭
1376	第24･38図	ＬＫ47	0.32×0.30	隅丸方形	0.40	17.286		
1377	第23･24･38図	ＬＭ48	0.23×0.22	隅丸方形	0.13	17.432		
1378	第23･24･38図	ＬＬ48	0.25×0.22	不整楕円形	0.15	17.405		
1379	第23･24･38図	ＬＭ48	0.22×0.20	楕円形	0.08	17.500		
1380	第24･38図	ＬＬ49	0.20×0.19	隅丸方形	0.14	17.330		
1381	第23･37･38図	ＬＮ48	0.27×0.19	楕円形	0.10	17.460		
1382	第22･37図	ＬＰ･ＬＯ49	0.32×0.26	隅丸方形	0.11	17.646		
1383	第21･22･37図	ＬＯ49	0.35×0.34	隅丸方形	0.14	17.620		
1384	第24･38図	ＬＫ46	0.23×0.23	隅丸方形	0.32	17.326		
1385	第24･38図	ＬＬ47	0.40×0.30	不整楕円形	0.11	17.524		
1387	第24･38図	ＬＬ47	0.23×0.21	隅丸方形	0.10	17.502		
1388	第24･38図	ＬＬ47	0.30×0.28	不整円形	0.33	17.273		
1389	第24･38図	ＬＬ47	0.70×0.35	不整楕円形	0.17	17.514		土師器甕１点(17.6g)
1390	第23･24･38図	ＬＭ47･48	0.43×0.37	隅丸方形	0.24	17.342		
1391	第23･37･38図	ＬＮ47	0.27×0.27	隅丸方形	0.08	17.507		
1392	第23･37･38図	ＬＯ47	0.33×0.31	隅丸方形	0.18	17.344		
1393	第23･37図	ＬＰ49	0.35×0.37	不整円形	0.20	17.344		
1395	第21･22･37図	ＬＲ49	0.35×0.29	隅丸方形	0.21	17.450		
1396	第23･37･38図	ＬＮ48	0.37×0.27	不整楕円形	0.16	17.317		
1397	第23･37･38図	ＬＯ48･49	0.39×0.36	隅丸方形	0.12	17.349		
1398	第21～23･37図	ＬＰ49	0.26×0.25	隅丸方形	0.16	17.453		
1399	第22･23･37図	ＬＰ49	0.26×0.25	隅丸方形	0.07	17.558		
1400	第22･23･37図	ＬＰ49	0.32×0.26	隅丸方形	0.12	17.517		
1401	第22･23･37図	ＬＰ･ＬＯ49	0.29×0.20	不整楕円形	0.10	17.670		
1402	第22･37図	ＬＯ49	0.22×0.22	円形	0.07	17.694		
1403	第21･22･37図	ＬＯ49	0.27×0.24	隅丸方形	0.21	17.568		
1404	第22･37図	ＬＯ49	0.27×0.27	隅丸方形	0.10	17.649		
1406	第21･22･37図	ＬＲ49	0.36×0.35	隅丸方形	0.48	17.225		鉄滓１点(4.8g)
1407	第21･22･37図	ＬＲ49	0.33×0.32	隅丸方形	0.21	17.491		
1408	第22･37図	ＬＲ49	0.24×0.20	隅丸方形	0.19	17.482		
1409	第27･39･40図	ＫＮ49	0.36×0.28	楕円形	0.27	17.090		
1414	第27･39･40図	ＫＮ50	0.33×0.24	隅丸方形	0.08	17.180		
1415	第27･39図	ＫＮ50	0.25×0.20	楕円形	0.08	17.162		
1416	第27･39図	ＫＮ50	0.24×0.19	隅丸方形	0.06	17.186		
1417	第23･24･38図	ＬＭ48	0.27×0.23	隅丸方形	0.17	17.331		
1418	第23･24･38図	ＬＭ48	0.19×0.18	隅丸方形	0.16	17.333		
1419	第23･24･38図	ＬＭ47	0.45×0.38	隅丸方形	0.16	17.466		
1420	第24･38図	ＬＬ48･49	0.68×0.27	不整形	0.16	17.331		
1421	第24･38図	ＬＬ48･49	0.27×0.23	隅丸方形	0.15	17.324		
1422	第21･22･37図	ＬＲ50	0.36×0.22	隅丸方形	0.28	17.352		
1423	第21･22･37図	ＬＲ50	0.38×0.36	隅丸方形	0.29	17.348		
1424	第23･37･38図	ＬＮ49	0.39×0.31	不整形	0.12	17.410		
1426	第24･38図	ＬＫ48	0.27×0.21	楕円形	0.12	17.415		
1427	第24･38図	ＬＫ48	0.21×0.19	不整楕円形	0.12	17.420		
1428	第24･38図	ＬＪ･ＬＫ47	0.22×0.20	不整円形	0.17	17.500		
1429	第23･24･38図	ＬＭ47	0.30×0.26	隅丸方形	0.09	17.570		
1430	第24･38図	ＬＩ48	0.26×0.20	楕円形	0.28	17.243		
1431	第13･34図	ＭＯ53	0.32×[0.28]	隅丸方形	0.22	16.850	Ｐ1432との新旧不明	
1432	第13･34図	ＭＯ53	0.32×[0.21]	隅丸方形	0.33	17.041	Ｐ1431との新旧不明 Ｐ1433→Ｐ1432	
1433	第13･34図	ＭＯ53	0.42×[0.42]	不整形	0.18	16.838	Ｐ1433→Ｐ1432･Ｐ1434	
1434	第13･34図	ＭＮ･ＭＯ53	0.64×0.61	不整円形	0.32	16.655	Ｐ1433→Ｐ1432･Ｐ1434	
1435	第16･34･35図	ＭＬ50	[0.34]×0.32	楕円形	0.23	16.805	Ｐ474→Ｐ1435	
1436	第16･34図	ＭＬ･ＭＭ49	0.22×0.19	隅丸方形	0.22	16.736		
1437	第14･35図	ＭＪ57	0.32×[0.30]	円形	0.09	16.846	Ｐ690との新旧不明 Ｐ1437→Ｐ1438･Ｐ1439との新旧不明	
1438	第14･35図	ＭＪ･ＭＫ57	0.58×[0.51]	隅丸方形	0.29	16.700	Ｐ1437→Ｐ1438･Ｐ1439との新旧不明	
1439	第14･35図	ＭＪ57	0.34×0.30	円形	0.24	16.693	Ｐ1437→Ｐ1438･Ｐ1439との新旧不明	
1440	第15･35図	ＭＪ53	0.24×0.22	隅丸方形	0.26	17.25		
1441	第16･35図	ＭＫ49	0.38×[0.32]	隅丸方形	0.27	16.869	Ｐ1441→SB314Ｐ6	
1442	第15･16･35図	ＭＨ･ＭＩ51	0.37×0.35	円形	0.25	17.16		
1444	第15･35図	ＭＨ54	[0.50]×0.36	不整楕円形	0.34	17.306		
1445	第24･38図	ＬＬ47	0.22×0.20	不整楕円形	0.55	17.101		
1446	第25･38図	ＬＧ46	0.50×0.38	楕円形	0.44	17.255		
1447	第16･34･35図	ＭＬ50	0.31×0.25	楕円形	0.14	16.85		

※[　]内の数値は推定値、〈　〉内の数値は残存値を表す。

第 14 表　柱穴様ピット一覧表（12）

柱穴番号	挿図番号	所在グリッド	長軸×短軸（m）	平面形状	深さ（m）	底面標高（m）	重複（旧→新）	備　考
1448	第16･35図	ＭＨ50･51	0.54×［0.52］	円形	－	－	Ｐ698との新旧不明	
1449	第16･35図	ＭＨ49	［0.22］×0.20	円形	0.26	16.900		
1450	第16･35図	ＭＨ49	0.71×0.68	円形	0.60	16.639		
1451	第16図	ＭＨ49	〈0.35〉×0.37	楕円形	0.35	16.991	Ｐ752との新旧不明	
1452	第16･35図	ＭＨ49	0.30×0.26	円形	0.35	16.908		
1453	第16･35図	ＭＩ50	0.33×0.26	楕円形	0.32	17.085	Ｐ664→Ｐ1453	
1454	第11･13･34図	ＭＯ55	〈0.39〉×0.38	円形	0.12	17.052	Ｐ462との新旧不明	
1455	第10･34図	ＭＴ55	0.30×0.22	隅丸方形	0.10	17.107		
1456	第10･34図	ＭＴ55	0.20×0.19	円形	0.07	17.104	Ｐ1457→Ｐ1456	
1457	第10･34図	ＭＴ55	0.18×［0.17］	隅丸方形	0.11	17.108	Ｐ1457→Ｐ1456	
1458	第10･34図	ＭＴ･ＮＡ55	0.20×0.15	楕円形	0.10	17.130		
1459	第10･34図	ＭＴ･ＮＡ55	0.19×0.19	隅丸方形	0.09	17.139		
1460	第29･30･40図	ＫＩ46	0.64×［0.61］	隅丸方形	－	－	Ｐ1240との新旧不明	
1461	第30･41図	ＫＦ･ＫＧ45	0.32×0.24	楕円形	－	－	ＳＫ132→Ｐ1461	
1462	第30･41図	ＫＥ44	0.41×［0.38］	円形	－	－	Ｐ1462→Ｐ1103	
1463	第24･38図	ＬＬ49	0.24×0.22	円形	0.13	17.353		
1464	第24･38図	ＬＬ49	0.18×0.16	円形	0.15	17.331		
1465	第24･38図	ＬＩ46	0.44×0.40	隅丸方形	0.13	17.481		
1466	第16･35図	ＭＪ49	〈0.64〉×0.75	隅丸方形	0.24	16.760	ＳＥ34→Ｐ1466	
1470	第10図	ＭＱ56	0.72×0.68	円形	0.43	16.760		
1471	第10図	ＭＲ56	0.66×0.58	楕円形	0.14	17.010		須恵器坏１点（71.3g、第119図389）
1472	第33図	ＪＰ44	0.46×0.42	円形	0.09	17.160		
1473	第33図	ＪＱ46	0.50×0.46	円形	0.10	17.100		
1474	第33･41図	ＪＲ45･46	0.70×0.38	楕円形	0.13	17.210		
1475	第30･41図	ＫＦ44	0.52×0.45	隅丸方形	0.15	17.300		
1476	第31･32･41図	ＫＢ45	0.74×0.70	円形	0.35	17.000		
1477	第23･37･38図	ＬＮ50･51	0.68×0.62	円形	0.18	17.450		
1478	第23･37･38図	ＬＮ･ＬＯ50	0.98×0.80	円形	0.29	17.420		
1479	第21･23･37･38図	ＬＯ50･51	0.76×0.54	楕円形	0.13	17.490		
1480	第21･23･37･38図	ＬＯ50	0.94×0.84	隅丸方形	0.26	17.400		
1482	第21･23･37･38図	ＬＯ50	0.98×0.94	円形	0.29	17.360		肥前磁器碗１点（22.9g）、土師器甕１点（3.4g）
1483	第28図	ＫＫ50	0.60×0.48	円形	0.30	17.270		
1485	第18･21･36図	ＬＴ･ＭＡ51	0.52×0.48	隅丸方形	0.35	17.160		
1486	第21･37図	ＬＳ51	0.34×0.30	隅丸方形	0.11	17.350		
1487	第21･37図	ＬＴ50･51	0.68×0.50	楕円形	0.76	15.720		
1488	第21･36･37図	ＬＴ51	0.58×0.56	隅丸方形	0.34	17.160		
1489	第18･36図	ＭＡ51	0.48×0.41	円形	0.15	17.420		
1490	第21･22･37図	ＬＴ49	0.44×0.42	円形	0.34	17.210		
1491	第22･37図	ＬＯ･ＬＲ49	0.96×0.64	楕円形	0.14	17.570		
1492	第21･22･37図	ＬＯ49	0.84×0.66	楕円形	0.23	17.470		
1494	第21･37図	ＬＯ52	0.52×0.48	円形	0.12	17.290		
1499	第21･37図	ＬＯ52･53	0.50×0.36	隅丸方形	0.18	17.300		
1500	第21･37図	ＬＯ52,ＬＰ52（旧ＳＫ221）	0.65×0.60	円形	0.15	17.190		
1504	第30･40図	ＫＨ45	0.50×0.44	隅丸方形	0.23	17.300		土師器甕１点（77.5g、第119図390）
1505	第32･41図	ＪＴ45	0.34×0.28	楕円形	0.29	17.080	SI104→Ｐ1505	
1506	第32･41図	ＫＡ44	0.29×0.29	不整円形	0.25	17.100	SI104→Ｐ1506	深さはＳＫＩ104床面上から計測
1507	第24･38図	ＬＫ47	0.36×0.28	楕円形	0.40	17.440	ＳＯ156→Ｐ1507	
1508	第13･34図	ＭＮ･ＭＯ54･55	［0.60］×［0.44］	楕円形	0.35	16.816		
1510	第15･35図	ＭＩ53	0.20×0.18	隅丸方形	0.13	17.386		
1511	第29･40図	ＫＪ46	0.30×0.28	円形	－	－		
1512	第32･41図	ＪＴ44	0.33×0.32	楕円形	－	－		
1513	第33･41図	ＪＳ45	0.34×〈0.30〉	隅丸方形	0.12	16.950	Ｐ1513→Ｐ1514	
1514	第33･41図	ＪＳ45	0.52×0.48	楕円形	0.08	16.9740	Ｐ1513→Ｐ1514	
1515	第28図	ＫＫ･ＫＬ51	0.22×0.20	楕円形	－	－	ＳＯ258→Ｐ1515	
1516	第24･38図	ＬＫ47	0.68×0.40	楕円形	0.22	17.620	ＳＤ242→Ｐ1516	
1517	第19･36図	ＭＦ48	0.76×0.64	楕円形	0.16	17.510		

※［　］内の数値は推定値、〈　〉内の数値は残存値を表す。



ＳＫＩ104
1　褐色（10ＹＲ4/4）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土塊φ10㎜以下10%、炭化物粒φ２㎜以下２%
2　暗褐色（10ＹＲ3/3）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土塊φ20㎜以下30%、炭化物粒φ１㎜以下１%未満
3　暗褐色（10ＹＲ3/4）粘土質シルト　しまり強　粘性中　混入物：地山土塊φ20㎜以下15%、炭化物粒φ１㎜以下１%
4　褐色（10ＹＲ4/6）粘土　しまり強　粘性中　混入物：暗褐色土10%
5　褐色（10ＹＲ4/6）粘土　しまり強　粘性中　混入物：地山土塊φ10㎜以下30%、炭化物粒φ５㎜以下５%
6　黒褐色（10ＹＲ2/3）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土粒φ10㎜以下10%、炭化物粒φ２㎜５%
7　黒褐色（10ＹＲ3/2）粘土　しまり強　粘性強　混入物：暗褐色土５%、炭化物塊φ20㎜以下10%
8　赤褐色（５ＹＲ4/8）焼土　しまり強　粘性弱　混入物：炭化物粒φ１㎜以下１%未満
9　褐色（7.5ＹＲ4/6）焼土　しまり強　粘性中
10　黒褐色（10ＹＲ2/3）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土粒φ10㎜以下10%、炭化物粒φ２㎜５%
11　褐色（10ＹＲ4/4）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土塊φ30㎜以下10%、炭化物粒φ１㎜以下１%
12　褐色（10ＹＲ4/4）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土塊φ30㎜以下20%、炭化物粒φ１㎜以下１%
13　褐色（10ＹＲ4/6）粘土　しまり強　粘性中　混入物：地山土塊φ10㎜以下30%、炭化物粒φ５㎜以下５%

P1505
1　暗褐色（10ＹＲ3/4）シルト質粘土　しまり中　粘性中　混入物：地山土塊φ30㎜以下20%、炭化物塊φ20㎜以下５%
2　褐色（10ＹＲ4/4）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土塊φ50㎜以下10%、炭化物粒φ１㎜以下１%

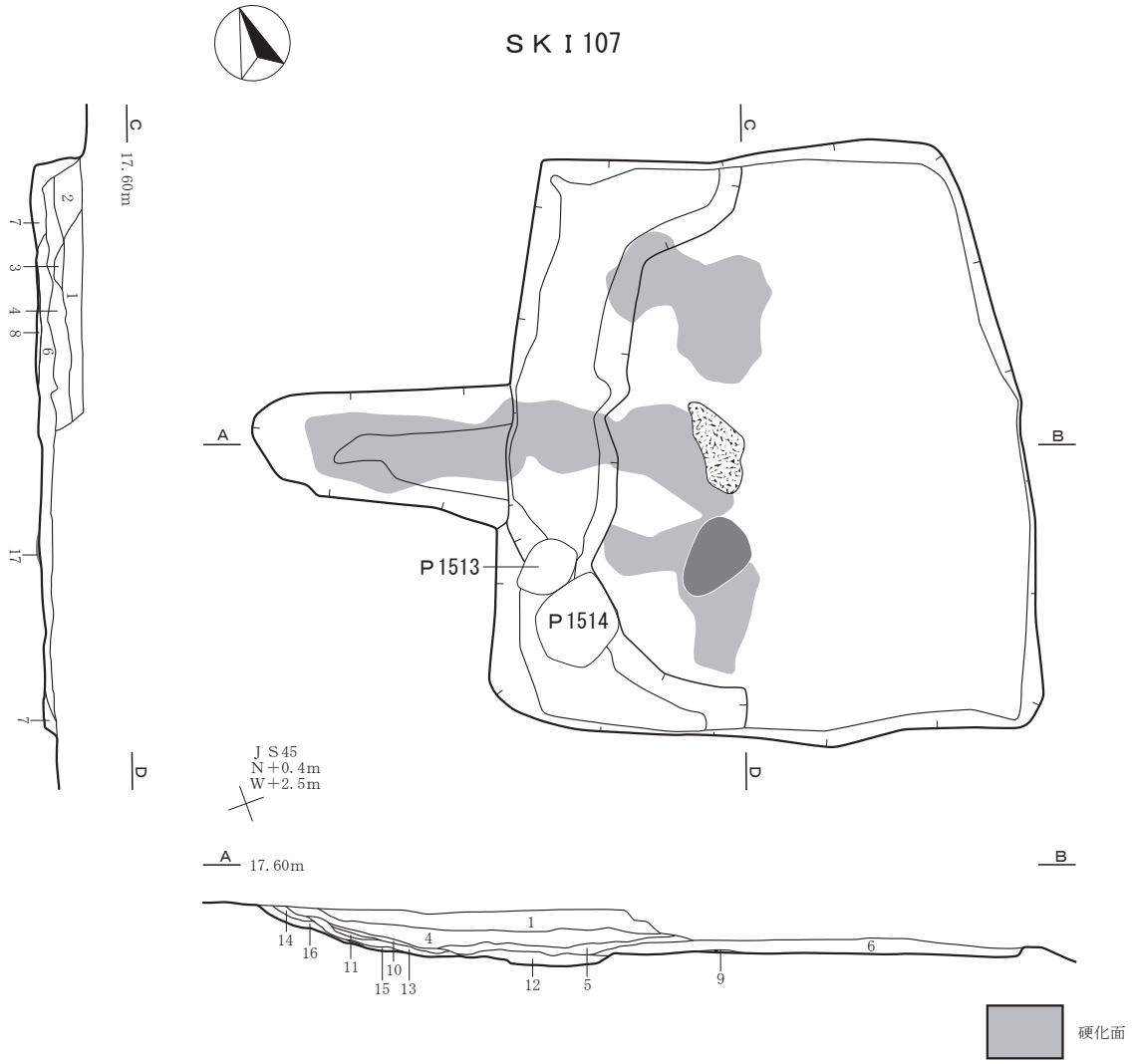
ＳＫＩ104柱穴一覧表

番号	長軸×短軸	平面形状	検出面からの深さ（m）	底面標高（m）	重複（旧→新）	遺物・備考
Ｐ１	0.23×〈0.20〉	楕円形	0.05	17.17	Ｐ１→Ｐ２	
Ｐ２	0.22×0.20	楕円形	0.10	17.12	Ｐ１→Ｐ２	
Ｐ３	0.29×0.25	楕円形	0.22	17.01	Ｐ４→Ｐ３	
Ｐ４	0.25×〈0.17〉	楕円形	0.11	17.12	Ｐ４→Ｐ３	
Ｐ５	0.34×0.30	楕円形	0.09	17.01	Ｐ６と新旧不明	
Ｐ６	0.35×〈0.33〉	円形	0.23	16.87	Ｐ５と新旧不明	
Ｐ７	0.24×0.22	楕円形	0.08	17.11	Ｐ８→Ｐ７	
Ｐ８	0.33×〈0.24〉	楕円形	0.18	17.01	Ｐ８→Ｐ７	
Ｐ９	0.37×0.35	不整円形	0.13	16.96		
Ｐ10	0.26×0.20	楕円形	0.22	16.95		
Ｐ11	0.36×0.27	楕円形	0.14	16.97		
Ｐ12	0.34×0.33	円形	0.11	17.00		
Ｐ13	0.26×0.22	楕円形	0.15	17.01		
Ｐ14	0.27×0.25	円形	0.22	16.93	Ｐ15→Ｐ14	
Ｐ15	〈0.23〉×0.20	楕円形	0.04	17.11	Ｐ15→Ｐ14	
Ｐ16	0.25×0.24	円形	0.06	17.10		

※〈　〉内の数値は残存値を表す。

0　（S＝1／40）　2m

第42図　ＳＫＩ104竪穴建物跡

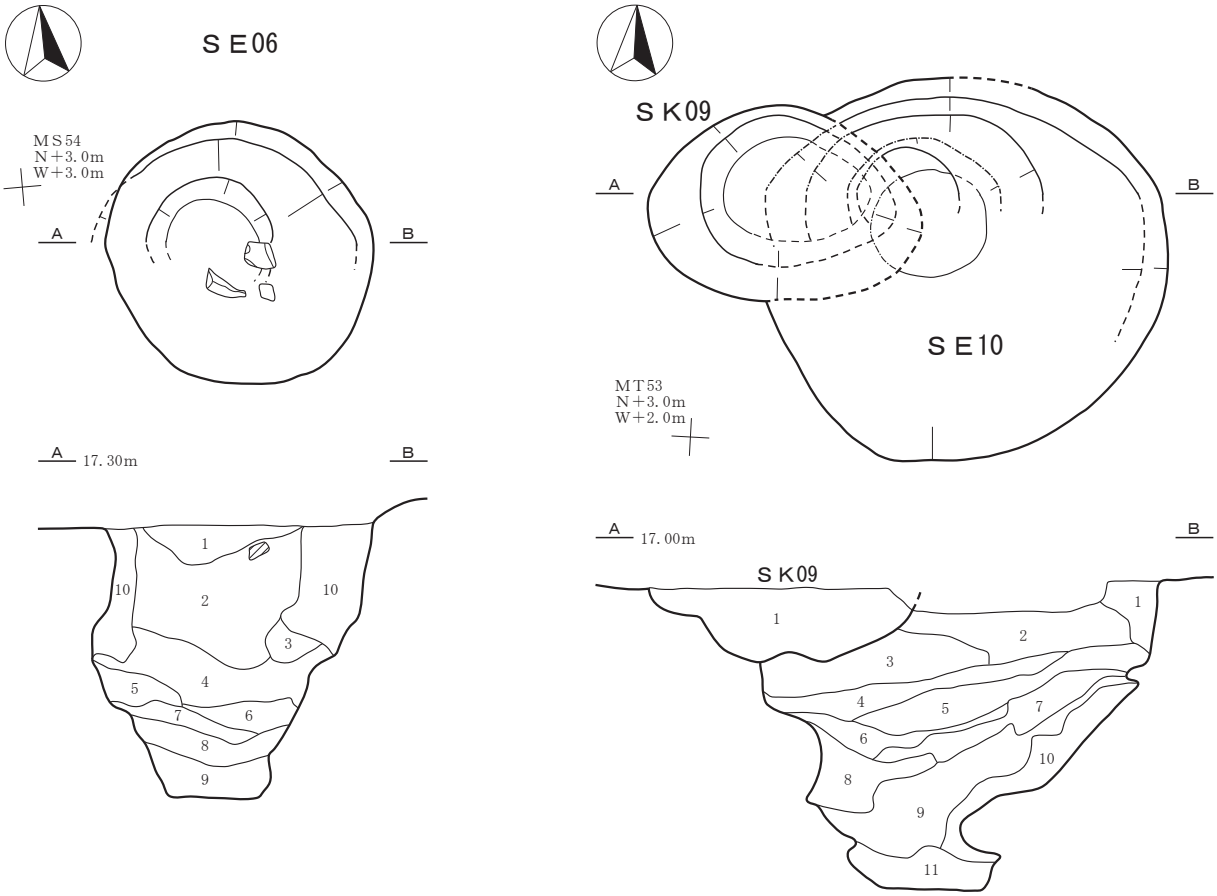


ＳＫＩ107

1　にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土粒φ５㎜以下10%、炭化物粒φ３㎜以下１%
2　灰黄褐色（10ＹＲ5/2）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土粒φ３㎜以下５%、炭化物粒φ１㎜以下１%
3　灰黄褐色（10ＹＲ5/2）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土粒φ５㎜以下20%、炭化物粒φ１㎜以下１%
4　暗褐色（10ＹＲ3/4）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土塊φ10㎜以下30%、炭化物粒φ８㎜以下２%
5　にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土塊φ10㎜以下20%、炭化物粒φ１㎜以下１%
6　黒褐色（10ＹＲ3/2）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土塊φ30㎜以下20%、炭化物塊φ８㎜以下２%
7　褐色（10ＹＲ4/6）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土塊φ30㎜以下20%、炭化物塊φ１㎜以下１%
8　黒褐色（10ＹＲ3/2）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土塊φ30㎜以下20%、にぶい横褐色土板状φ２㎜５%、炭化物粒φ５㎜以下10%
9　黒褐色（10ＹＲ3/2）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土塊φ10㎜以下20%、炭化物粒φ８㎜以下30%
10　黒褐色（10ＹＲ3/2）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土塊φ50㎜以下20%、炭化物塊φ20㎜以下10%
11　褐色（10ＹＲ4/4）シルト質粘土　しまり強　粘性強　混入物：炭化物粒φ１㎜以下１%
12　褐色（10ＹＲ4/4）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土塊φ８㎜以下20%、炭化物粒φ５㎜以下５%、焼土粒φ５㎜以下１%
13　褐色（10ＹＲ4/4）シルト質粘土　しまり強　粘性中　混入物：地山土塊φ８㎜以下15%、炭化物粒φ１㎜以下１%
14　黒褐色（10ＹＲ3/2）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土粒φ５㎜以下20%、炭化物粒φ３㎜以下50%
15　暗褐色（10ＹＲ3/3）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土粒φ３㎜以下15%、炭化物粒φ２㎜以下２%
16　褐色（10ＹＲ4/4）シルト質粘土　しまり強　粘性中　混入物：地山土塊φ８㎜以下15%、炭化物粒φ１㎜以下１%
17　黒褐色（10ＹＲ3/2）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土塊φ10㎜以下20%、炭化物塊φ８㎜以下５%

0　（S＝1／40）　2m

第 43 図　ＳＫＩ107 竪穴建物跡



ＳＥ06

1　褐色（10ＹＲ4/4）粘土質シルト　しまり強　粘性弱
　混入物：炭化物粒φ１～３㎜１％未満、焼土粒φ１・20㎜１％未満
2　暗褐色（10ＹＲ3/3）粘土質シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊φ２～50㎜３％、礫φ18㎝１個、炭化物粒φ１～５㎜１％未満、焼土粒φ１以下～３㎜１％未満
3　暗褐色（10ＹＲ3/3）粘土質シルト　しまり強　粘性中
　混入物：炭化物粒φ２～８㎜１％未満、焼土粒φ１以下～５㎜１％未満
4　褐色（10ＹＲ4/6）粘土質シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊φ２㎜～20㎝20％、炭化物粒φ２～20㎜１％未満、焼土粒φ１㎜１％未満
5　にぶい黄橙～褐灰色（10ＹＲ7/2～10ＹＲ4/1）シルト質粘土　しまり強　粘性強　混入物：地山土塊φ10～20㎜３％、炭化物粒φ２・５㎜１％未満、焼土φ５㎜１％未満
6　褐灰色（10ＹＲ4/1）シルト質粘土　しまり強　粘性強
　混入物：地山土40％、炭化物粒φ１～10㎜１％未満
7　灰黄褐色（10ＹＲ6/2）シルト質粘土　しまり強　粘性強
　混入物：暗褐色土筋状φ10㎜５％、炭化物粒φ５～10㎜１％未満
8　褐灰色（10ＹＲ4/1）粘土　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊φ５㎜～20㎝１％、炭化物粒φ２～５㎜３％
9　オリーブ灰色（2.5Ｇ Ｙ7/1）粘土　しまり強　粘性やや弱
　混入物：炭化物粒φ２㎜１％未満
10　にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）粘土質シルト　しまり強　粘性中
　混入物：暗褐色土筋状φ３～15㎜10％

ＳＥ10

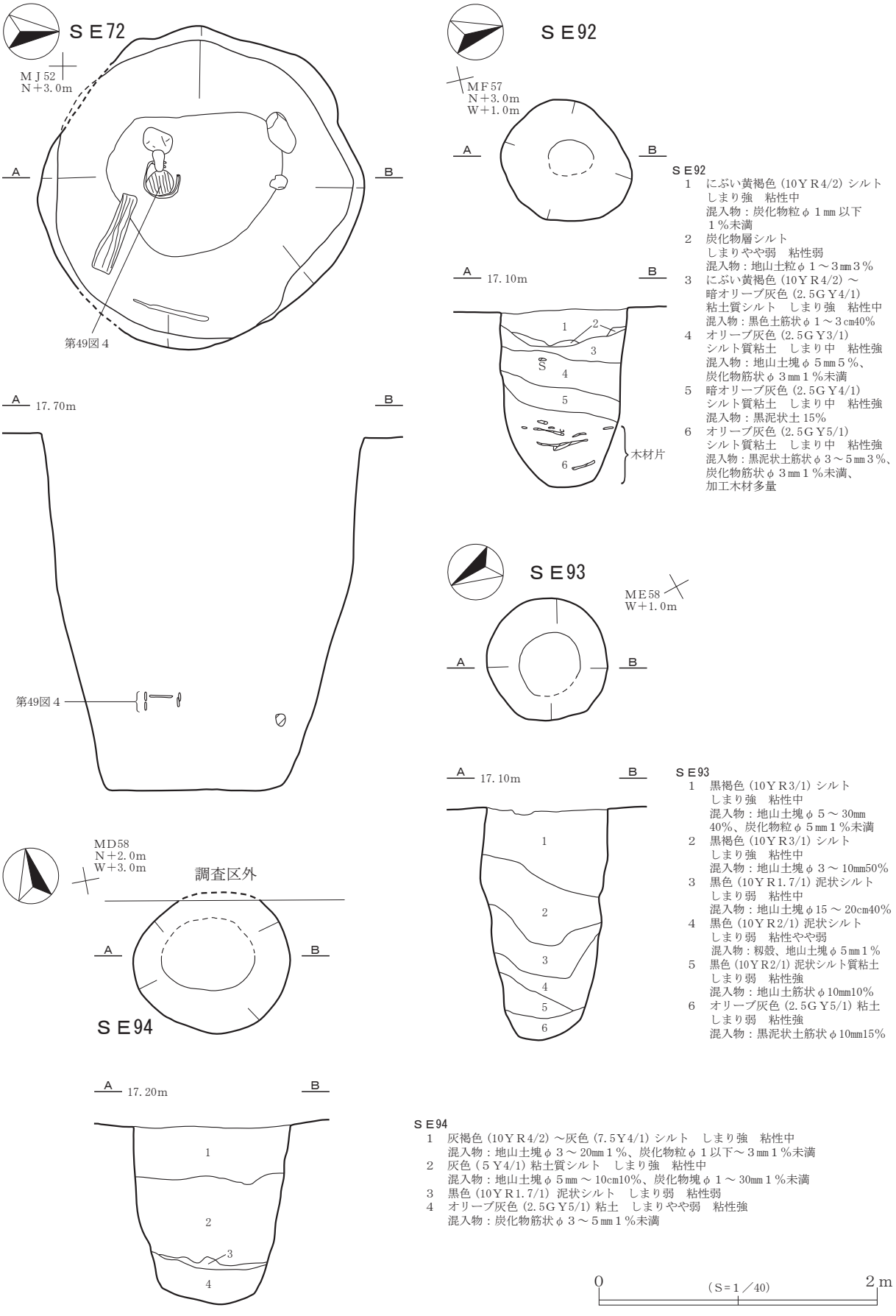
1　褐色（10ＹＲ4/6）シルト　しまり強　粘性中
　灰黄褐色土筋状φ５㎜５％
2　にぶい黄褐色（10ＹＲ5/3）シルト　しまり強　粘性やや弱
　混入物：地山土塊20％
3　褐色（10ＹＲ4/4～4/6）粘土質シルト　しまりやや弱　粘性強
　混入物：地山土塊10％、炭化物粒極小～小１％未満
4　にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）粘土質シルト　しまりやや弱　粘性やや強
　混入物：地山土筋状25％
5　にぶい黄褐色（10ＹＲ6/4）粘土質シルト　しまりやや弱　粘性やや強
　混入物：炭化物粒小～中１％
6　灰黄褐色（10ＹＲ5/2）粘土質シルト　しまりやや弱　粘性やや強
　混入物：地山土塊40％、炭化物粒小～中２％
7　にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）粘土質シルト　しまりやや弱　粘性やや強
　混入物：地山土筋状20％、炭化物粒小～大１％以下
8　にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）シルト質粘土　しまりやや弱　粘性強
　混入物：地山土塊30％
9　灰黄褐色（10ＹＲ6/2）シルト質粘土　しまりやや弱　粘性強
　混入物：地山土塊10％
10　にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）粘土質シルト　しまりやや弱　粘性やや強
　混入物：地山土塊30％
11　黄灰色（2.5Ｙ Ｒ4/1）粘土　しまりやや弱　粘性強
　混入物：黒泥状土粒φ１～２㎜３％・筋状40％

ＳＫ09

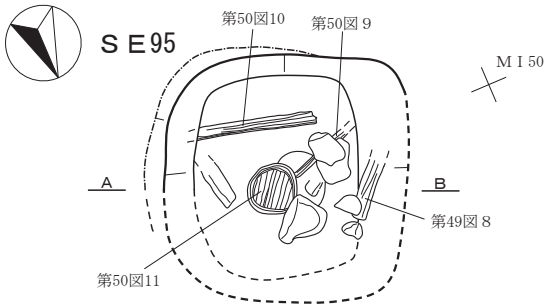
1　褐色（10ＹＲ4/4）シルト　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入物：炭化物粒φ５～10㎜１％

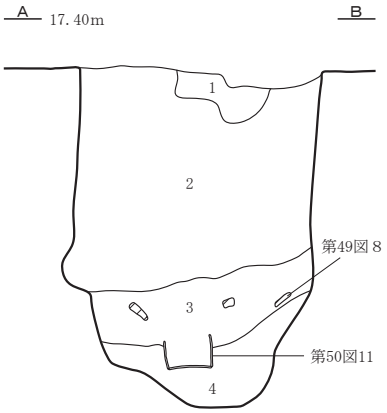
0　（Ｓ＝1／40）　2ｍ

第 44 図　ＳＥ06・10 井戸跡、ＳＫ09 土坑

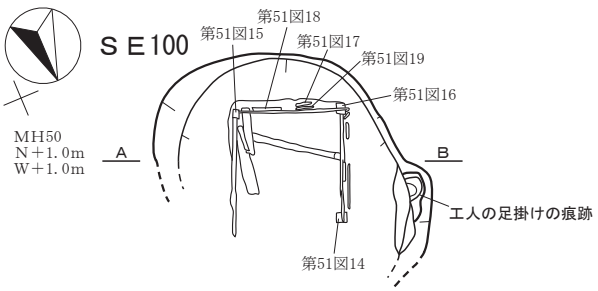


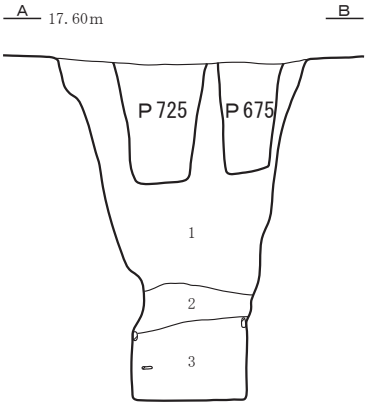
第 45 図　ＳＥ72・92・93・94 井戸跡



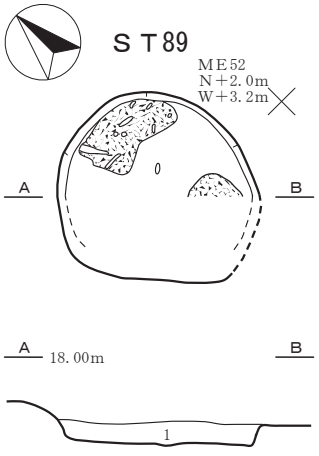


ＳＥ95
1　暗オリーブ灰色（2.5ＧＹ4/1）粘土質シルト　しまり強　粘性やや弱
　混入物：暗褐色土塊φ10 ～ 30㎜15%・筋状φ２㎜１%未満、
　礫φ11 ～ 28㎝数個
2　黒褐色（2.5ＧＹ3/1）シルト質粘土　しまり強　粘性強
　混入物：地山土塊φ５～ 30㎝30%、地山土筋状φ10㎝15%
3　暗オリーブ灰色（2.5ＧＹ4/1）シルト質粘土　しまり強　粘性強
　混入物：黒色土φ20㎜１%未満、木材片多量
4　暗オリーブ灰色（2.5ＧＹ4/1）粘土　しまり強　粘性強
　混入物：黒色土φ５～ 10㎝40%未満

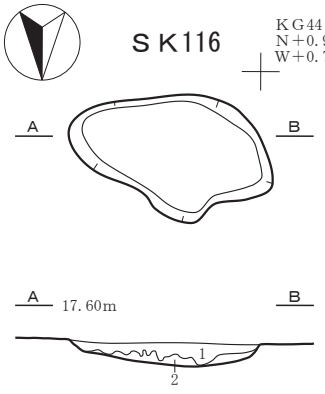




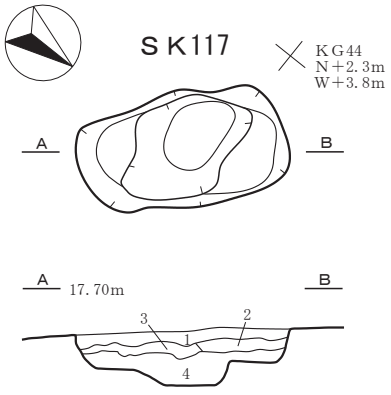
ＳＥ100
1　灰色（５Ｙ4/1）シルト質粘土　しまり中　粘性強
　混入物：地山土塊φ５～ 80㎜５%、炭化物粒φ１～５㎜１%未満
2　暗オリーブ灰色（2.5ＧＹ4/1）シルト質粘土　しまり中　粘性強
　混入物：暗褐色土粒φ１～５㎜３%
3　暗オリーブ灰色（2.5ＧＹ4/1）粘土　しまり中　粘性強
　混入物：暗褐色土粒φ１～５㎜３%、木材片多量



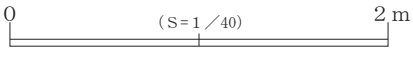
ＳＴ89
1　黒色（10ＹＲ3/2）シルト　しまり中　粘性強
　混入物：地山土粒小～極大１%未満、
　炭化物粒極大 15%



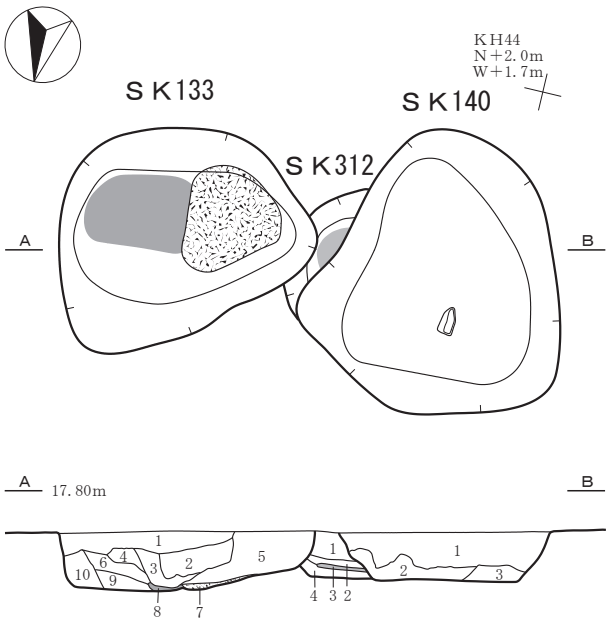
ＳＫ116
1　暗褐色（10ＹＲ3/4）シルト
　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ10㎜以下 20%、
　炭化物粒φ５㎜以下５%
2　褐色（10ＹＲ4/6）粘土質シルト
　しまり強　粘性強
　混入物：地山土塊φ10㎜以下 15%、
　炭化物粒φ２㎜以下１%



ＳＫ117
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ20㎜以下 15%、
　炭化物粒φ５㎜以下５%、焼土塊φ20㎜以下 20%
2　暗褐色（10ＹＲ3/3）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ30㎜以下 30%、
　炭化物粒φ５㎜以下１%、焼土塊 10%
3　褐色（10ＹＲ4/6）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：暗褐色土 30%
4　暗褐色（10ＹＲ3/3）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ10㎜以下 30%、
　炭化物粒φ１%、焼土塊φ10㎜以下 10%



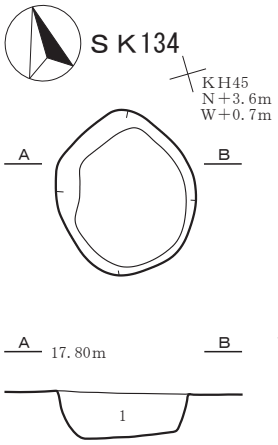
第 46 図　ＳＥ95・100 井戸跡、ＳＴ89 火葬墓、ＳＫ116・117 土坑



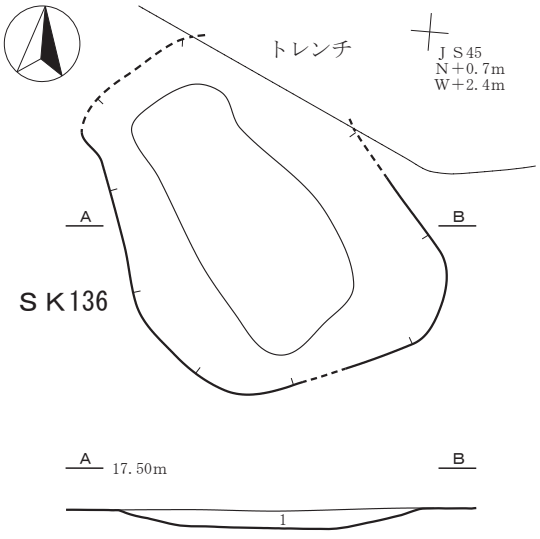
ＳＫ133
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ30㎜以下30%、炭化物塊φ８㎜以下１%
2　暗褐色（10ＹＲ3/3）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ30㎜以下20%、炭化物粒φ５㎜以下２%、
　焼土塊φ30㎜５%
3　暗褐色（10ＹＲ3/4）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ30㎜以下40%、炭化物塊φ８㎜以下５%、
　焼土粒φ3㎜１%
4　暗褐色（10ＹＲ3/4）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ10㎜以下20%、炭化物塊φ20㎜以下５%、
　焼土粒φ3㎜１%
5　褐色（10ＹＲ3/4）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ30㎜以下30%、炭化物塊φ10㎜以下５%、
　焼土塊φ10㎜２%
6　暗褐色（10ＹＲ3/3）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ20㎜以下５%、炭化物粒φ５㎜以下１%、
　焼土粒φ５㎜１%
7　炭化物層　しまり中　粘性中
8　極暗赤褐色（５ＹＲ2/3）焼土
9　褐色（10ＹＲ4/6）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：暗褐色土30%
10　褐色（10ＹＲ4/4）シルト　しまり中　粘性中

ＳＫ140
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ50㎜以下30%、炭化物粒φ５㎜以下２%、
　焼土塊φ10㎜以下１%
2　にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ30㎜以下20%、炭化物塊φ10㎜以下20%、
　焼土塊φ10㎜以下１%
3　褐色（10ＹＲ4/6）粘土質シルト　しまり中　粘性中
　混入物：暗褐色土20%

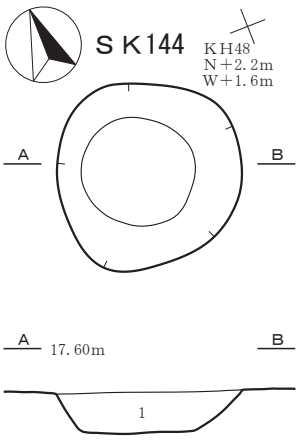
ＳＫ312
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ50㎜以下30%、炭化物塊φ20㎜以下１%、
　焼土塊φ10㎜以下２%
2　にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ50㎜以下10%、炭化物塊φ20㎜以下１%、
　焼土塊φ10㎜以下１%
3　極暗赤褐色（５ＹＲ2/4）焼土
4　褐色（10ＹＲ4/6）粘土質シルト　しまり強　粘性強
　混入物：暗褐色土10%



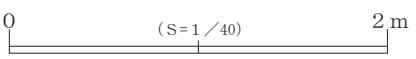
ＳＫ134
1　褐色（10ＹＲ4/6）粘土質シルト
　しまり中　粘性強
　混入物：
　地山土塊φ10㎜以下１%、
　炭化物粒φ２㎜以下１%



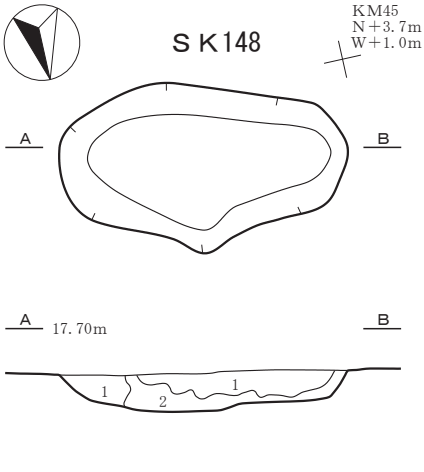
ＳＫ136
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ50㎜以下30%、炭化物粒φ５㎜以下２%、
　焼土塊φ20㎜以下５%

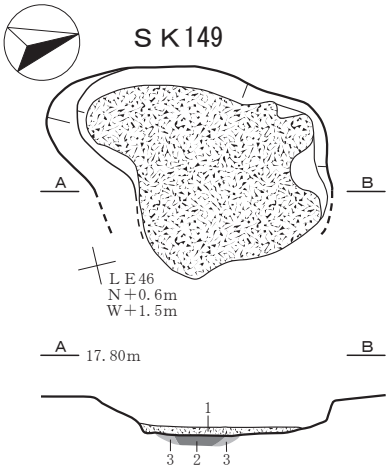


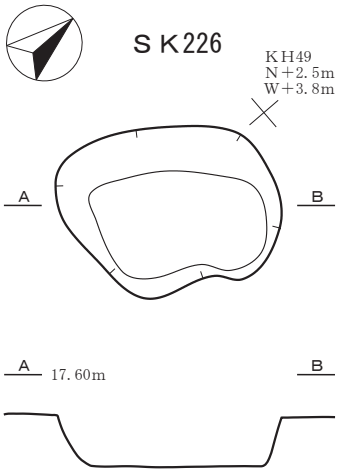
ＳＫ144
1　オリーブ褐色（2.5Ｙ4/4）粘土
　しまり強　粘性強



第 47 図　ＳＫ133・134・136・140・144・312 土坑





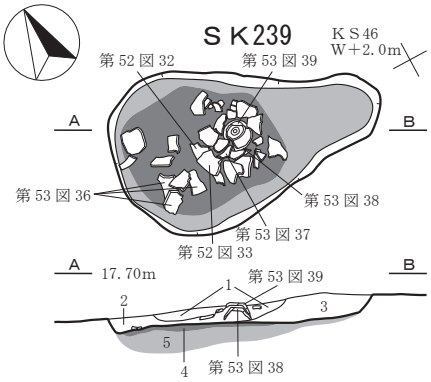


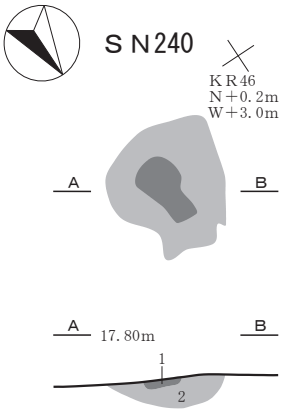
ＳＫ148

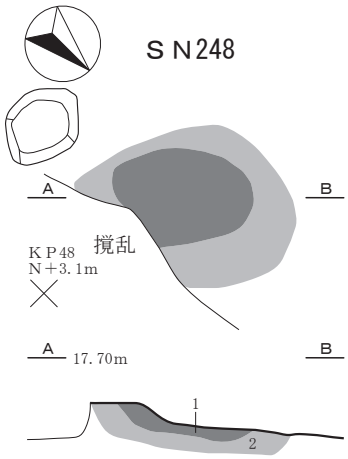
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）粘土質シルト
　しまり中　粘性弱
　混入物：地山土塊φ50㎜以下 50%
2　黄褐色（10ＹＲ5/6）粘土　しまり強　粘性強
　混入物：にぶい黄褐色土 20%

ＳＫ149

1　明黄褐色（10ＹＲ7/2）シルト　しまり中　粘性弱
　混入物：炭化物塊φ５以下～ 10㎜３％
2　明赤褐色（５ＹＲ5/6）焼土　しまりやや強　粘性弱
3　暗赤褐色（５ＹＲ3/6）焼土　しまりやや強　粘性弱







ＳＫ239

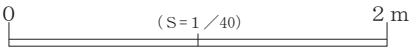
1　褐色（10ＹＲ4/4）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：焼土斑状 20%
2　暗褐色（10ＹＲ3/4）シルト　しまり強　粘性弱
　混入物：焼土粒φ１～５㎜３％
　炭化物粒φ１以下～３㎜１％未満
3　暗褐色（7.5ＹＲ3/4）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：炭化物塊φ10㎜以下５％
4　明褐色（５ＹＲ5/8）焼土　しまり強　粘性弱
　混入物：炭化物粒φ５㎜３％
5　褐色（10ＹＲ4/4）焼土　しまり強　粘性中

ＳＮ240

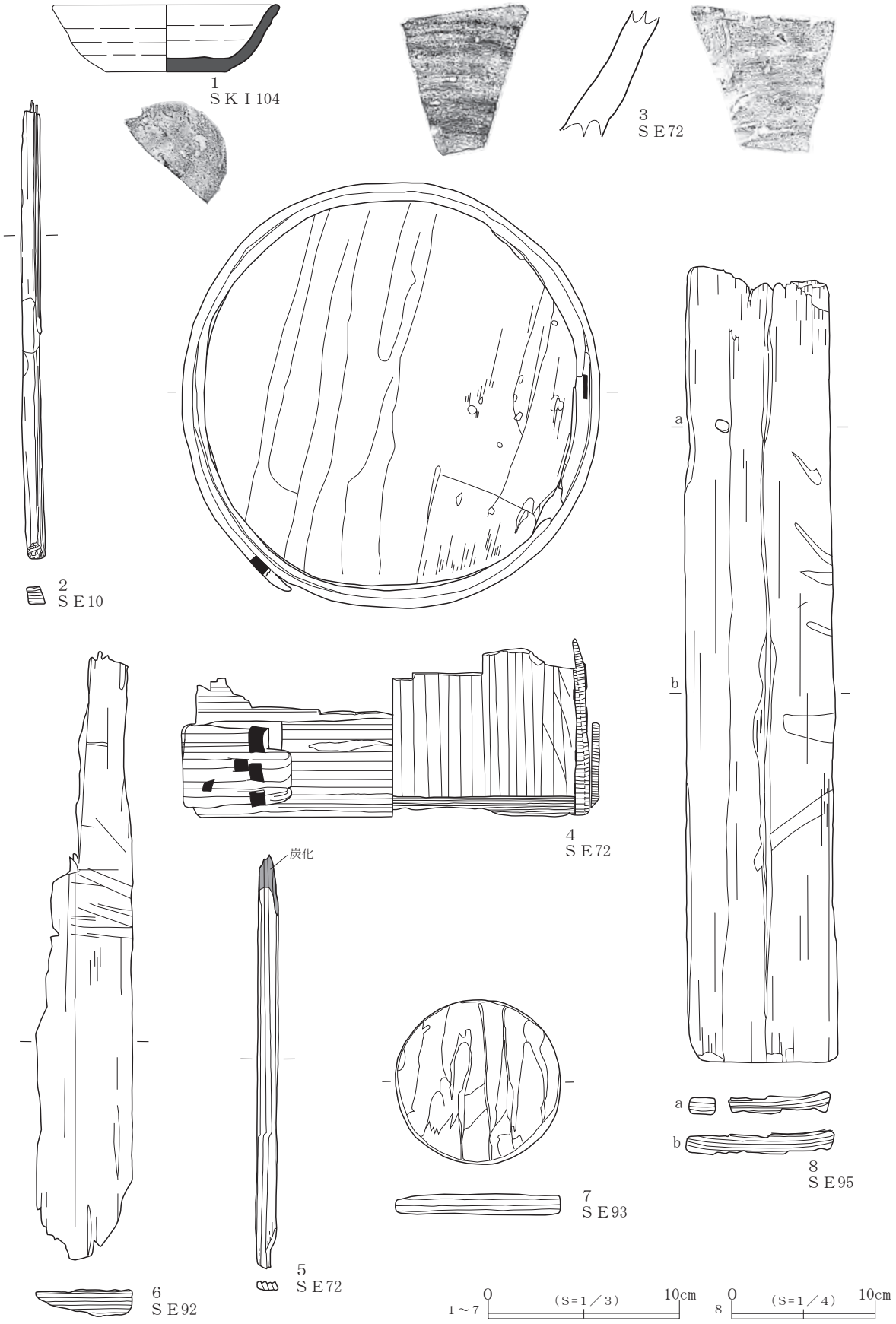
1　明赤褐色（５ＹＲ5/8）焼土
　しまり強　粘性弱
　混入物：炭化物粒φ５㎜以下１％
2　暗赤褐色（５ＹＲ3/3）焼土
　しまり中　粘性強
　混入物：焼土粒φ５㎜以下１％、
　炭化物粒φ２㎜以下１％

ＳＮ248

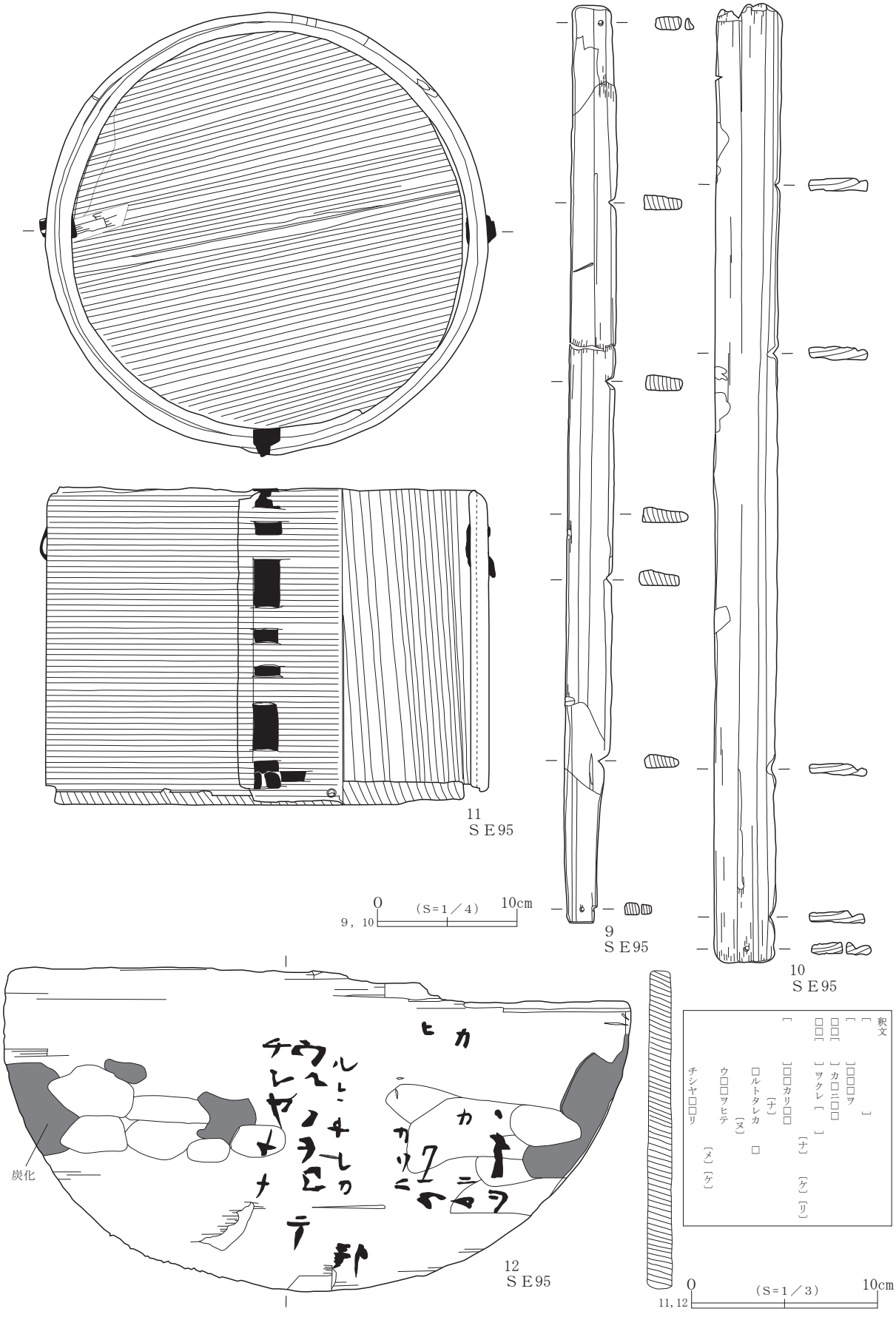
1　にぶい赤褐色（５ＹＲ4/4）焼土
　しまり中　粘性弱
　混入物：炭化物粒φ２㎜以下１％
2　暗褐色（7.5ＹＲ3/4）焼土
　しまり中　粘性弱



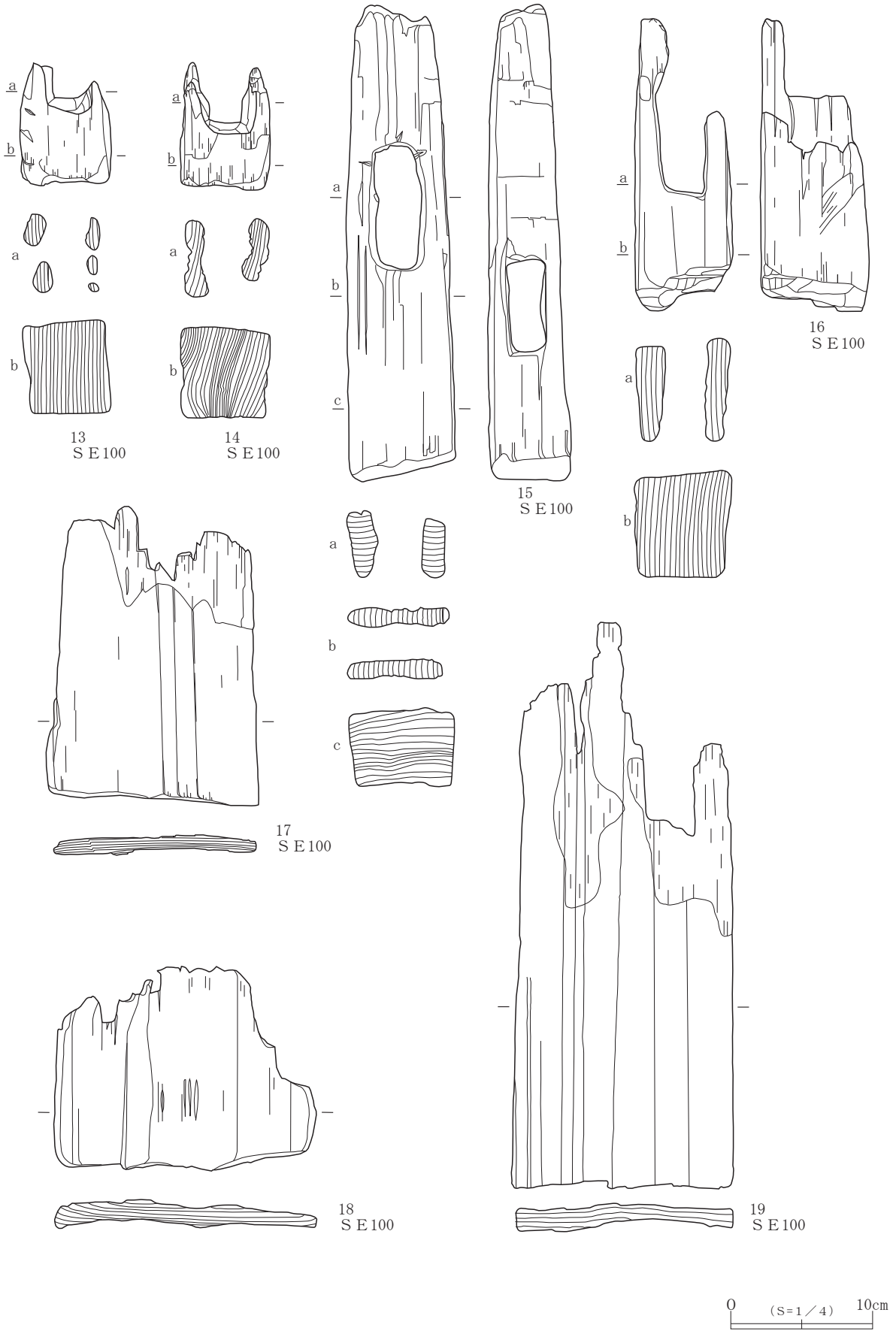
第 48 図　ＳＫ148・149・226・239 土坑、ＳＮ240・248 焼土遺構



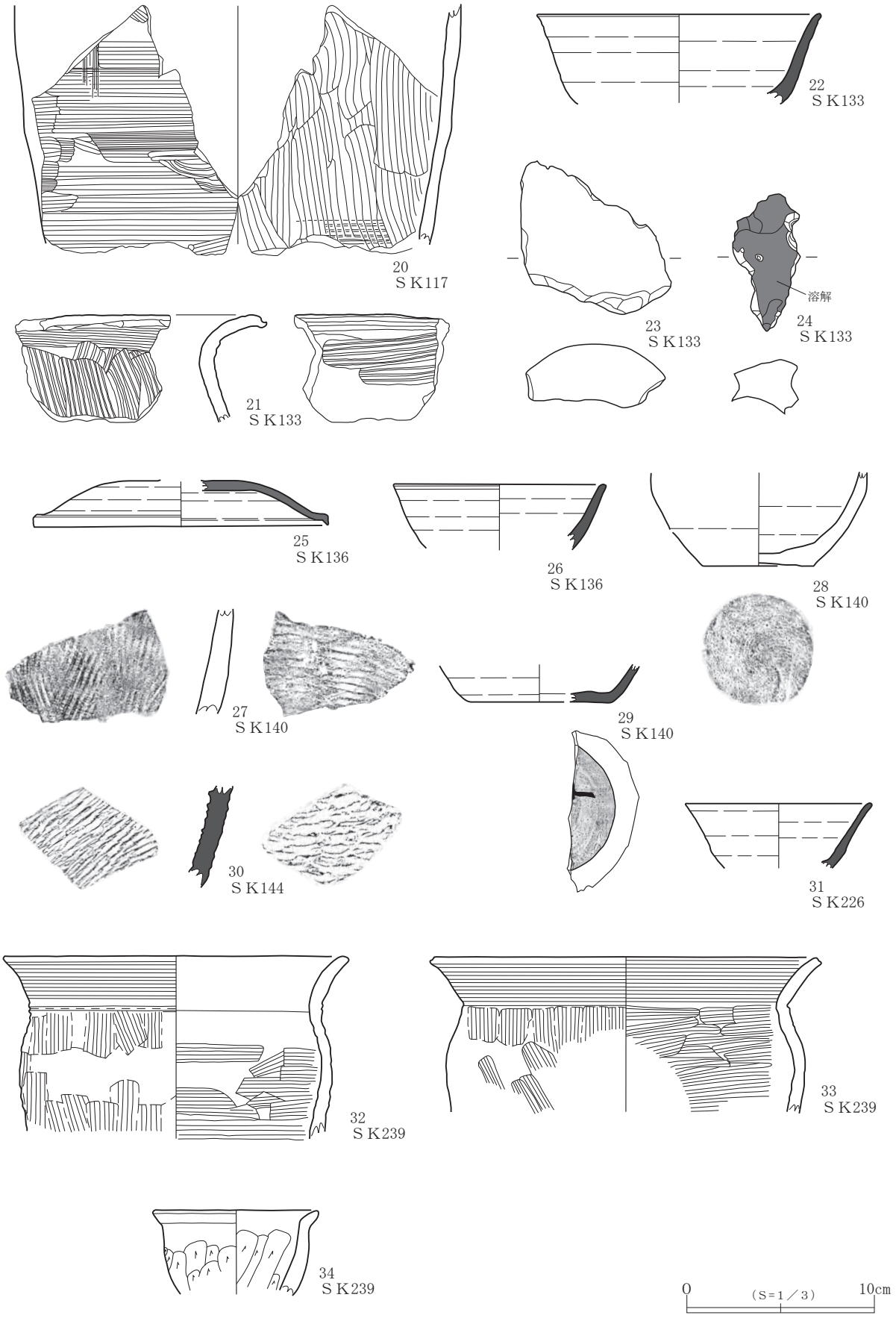
第 49 図　古代遺構内出土遺物（１）



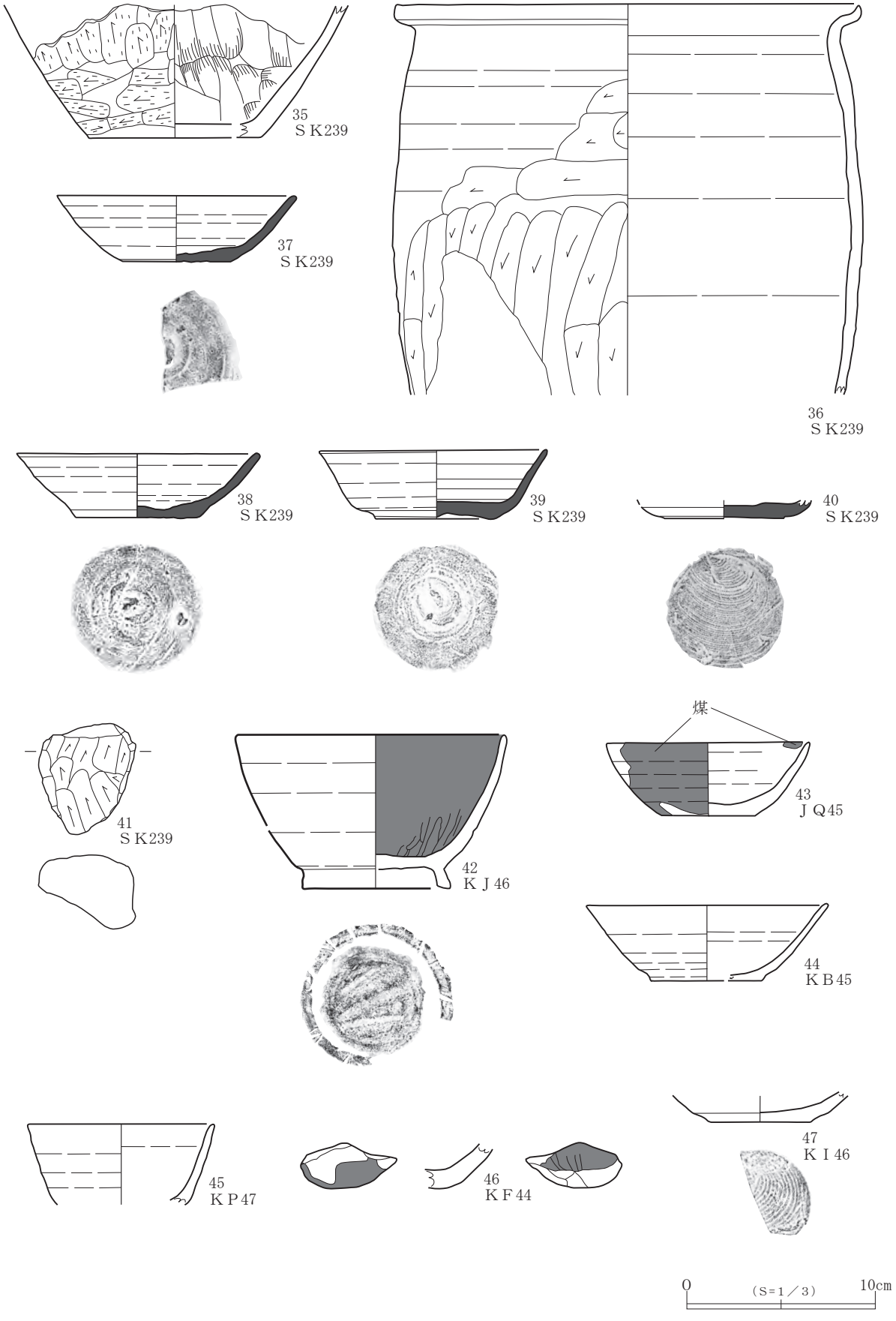
第 50 図　古代遺構内出土遺物（２）



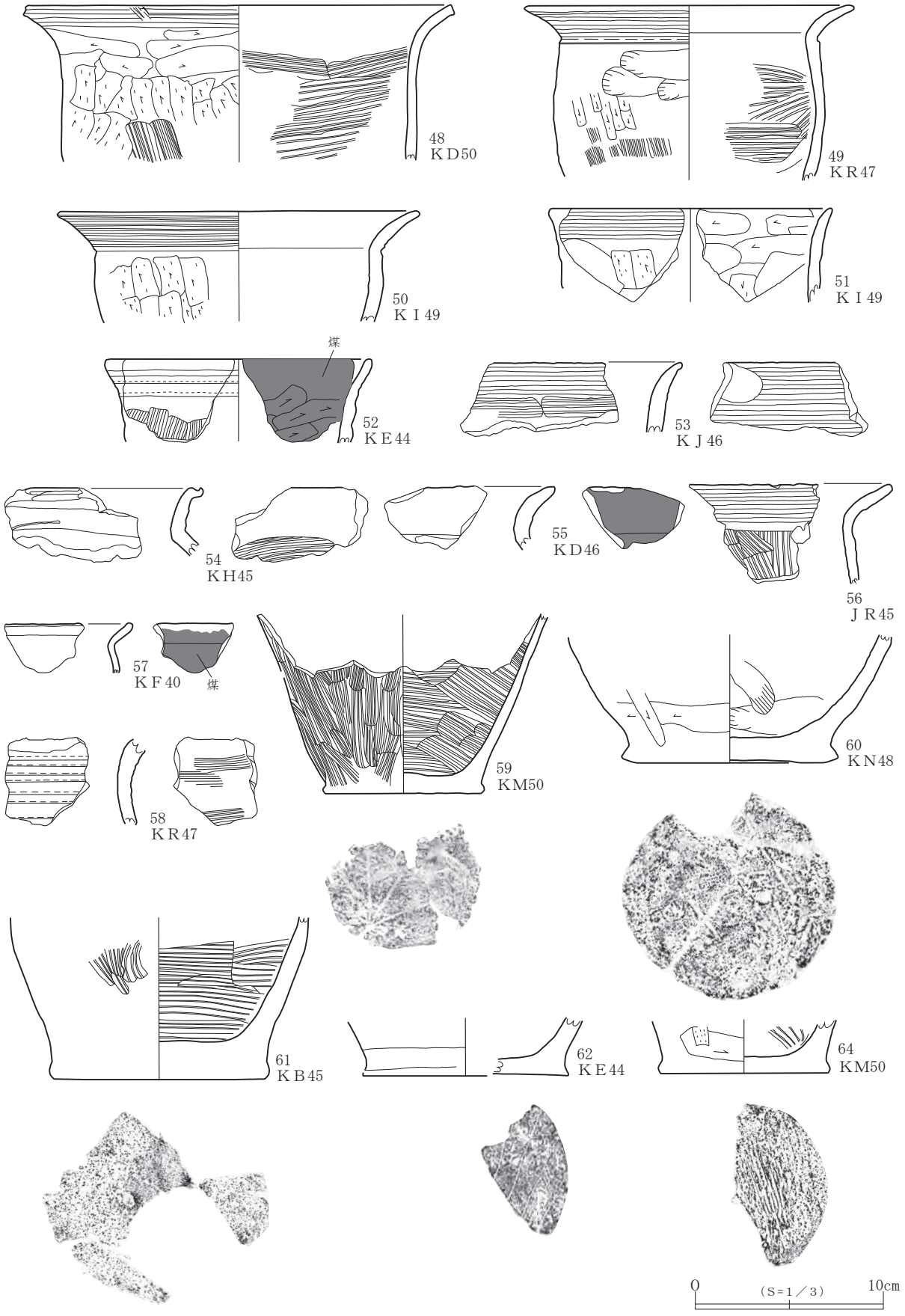
第 51 図　古代遺構内出土遺物（３）



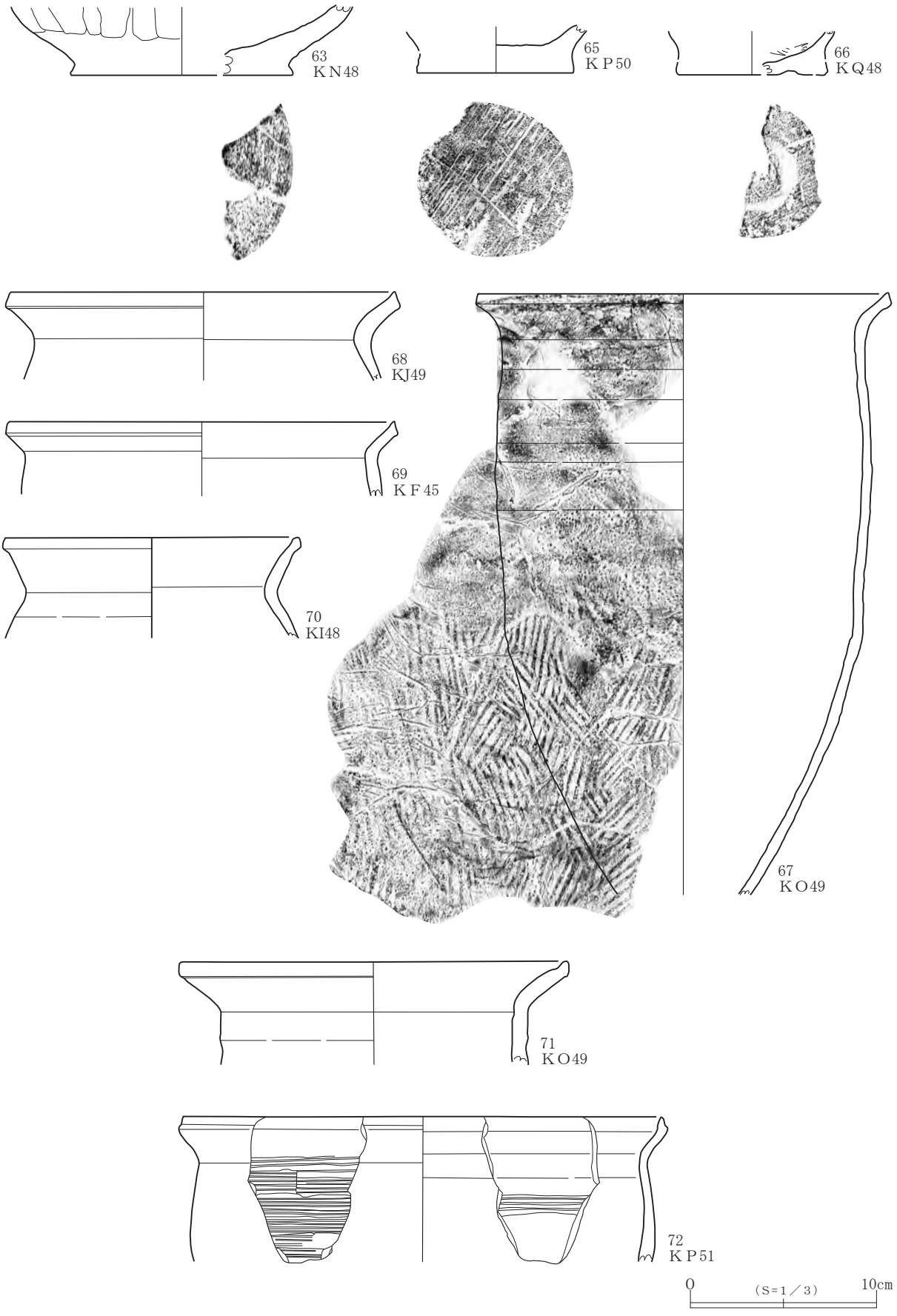
第 52 図　古代遺構内出土遺物（４）



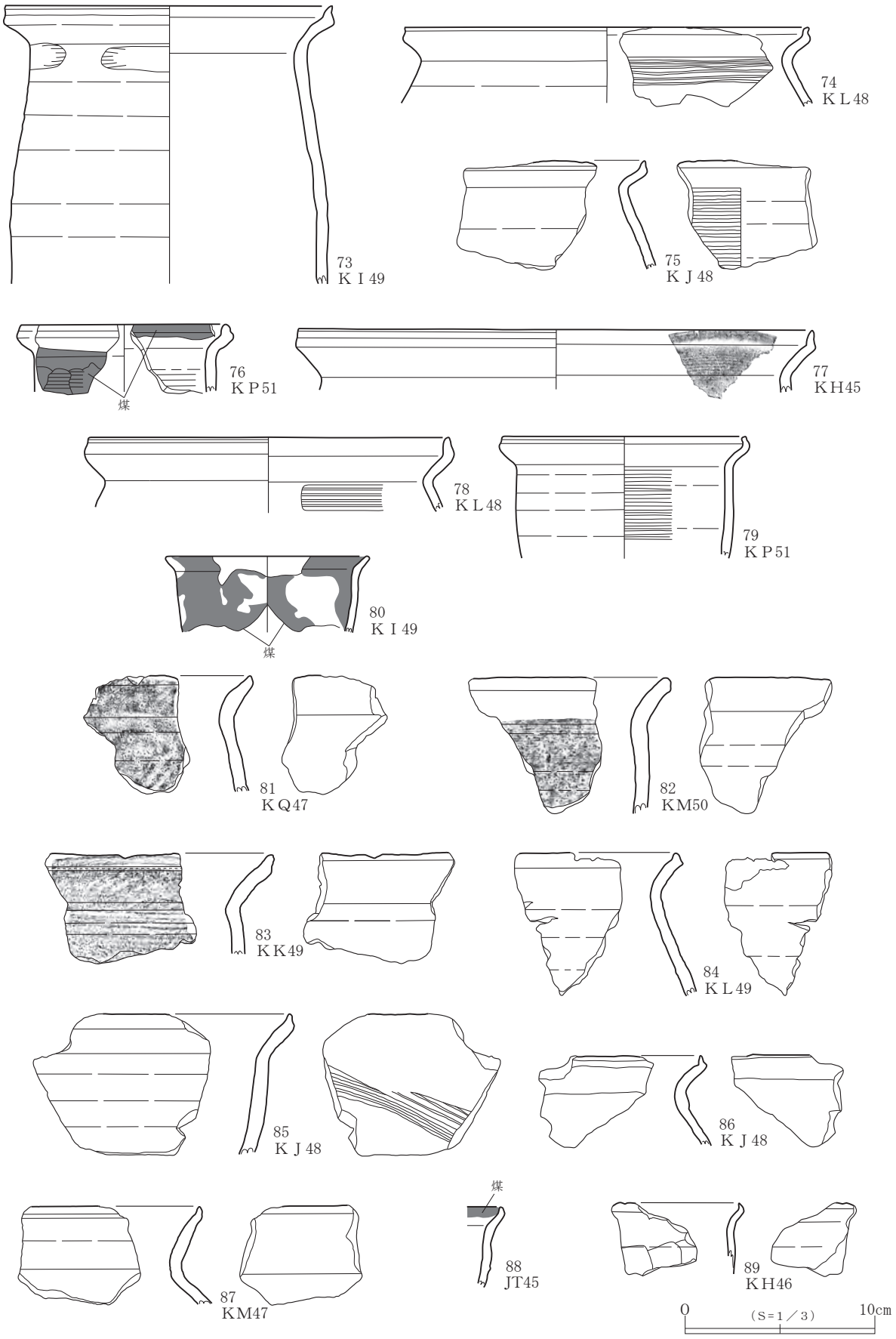
第 53 図　古代遺構内出土遺物（５）、古代遺構外出土遺物（１）



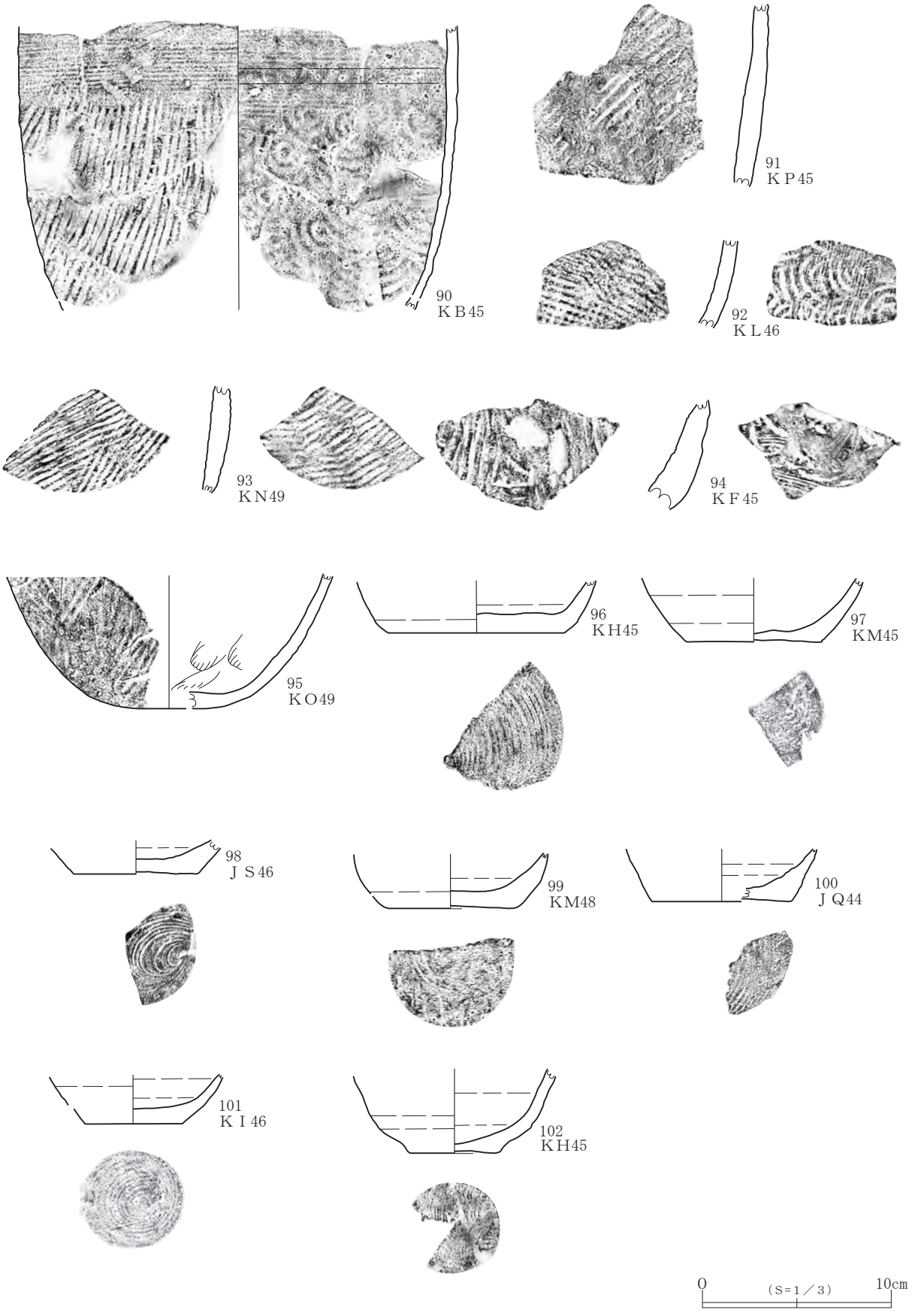
第 54 図　古代遺構外出土遺物（２）



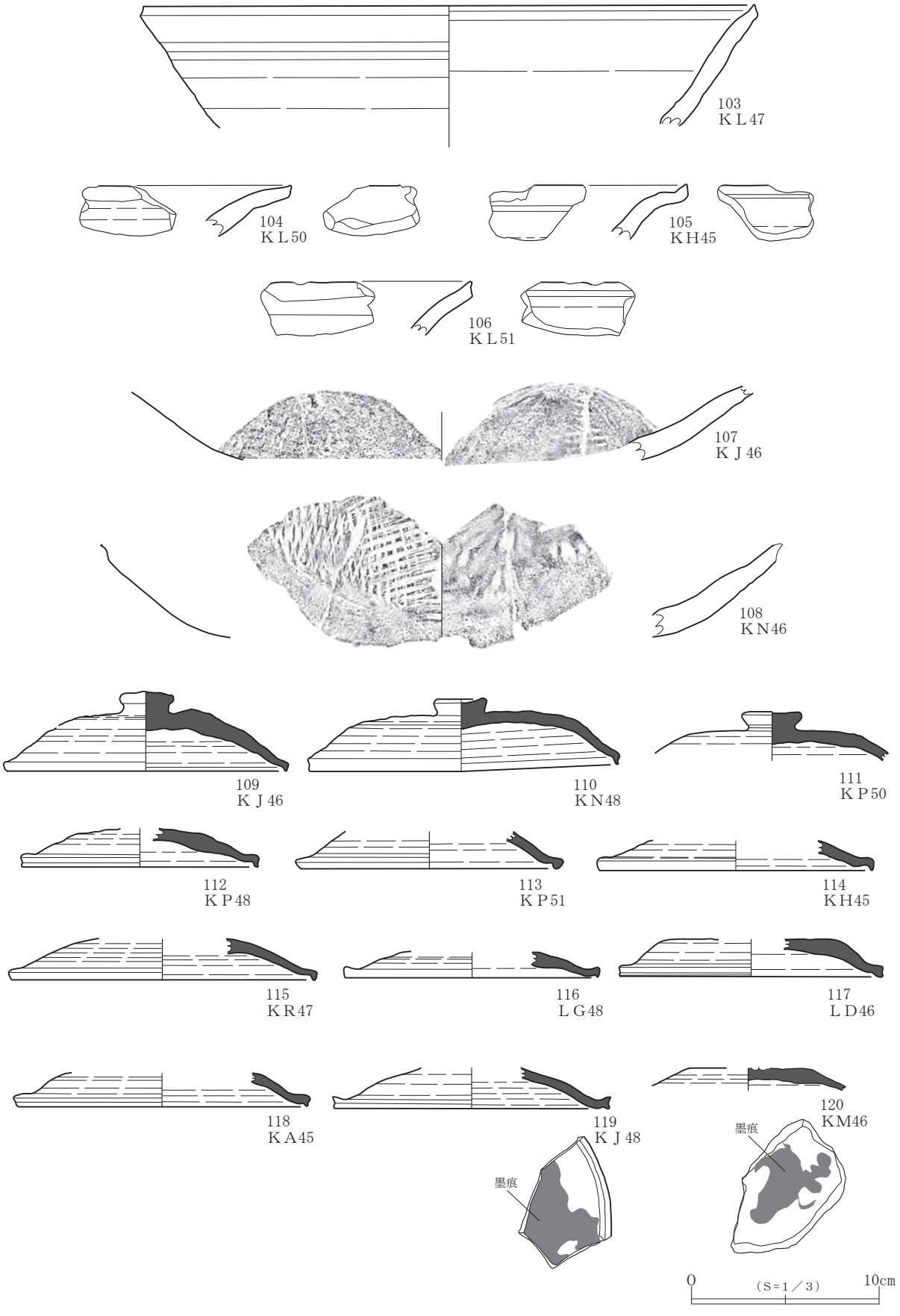
第 55 図　古代遺構外出土遺物（３）



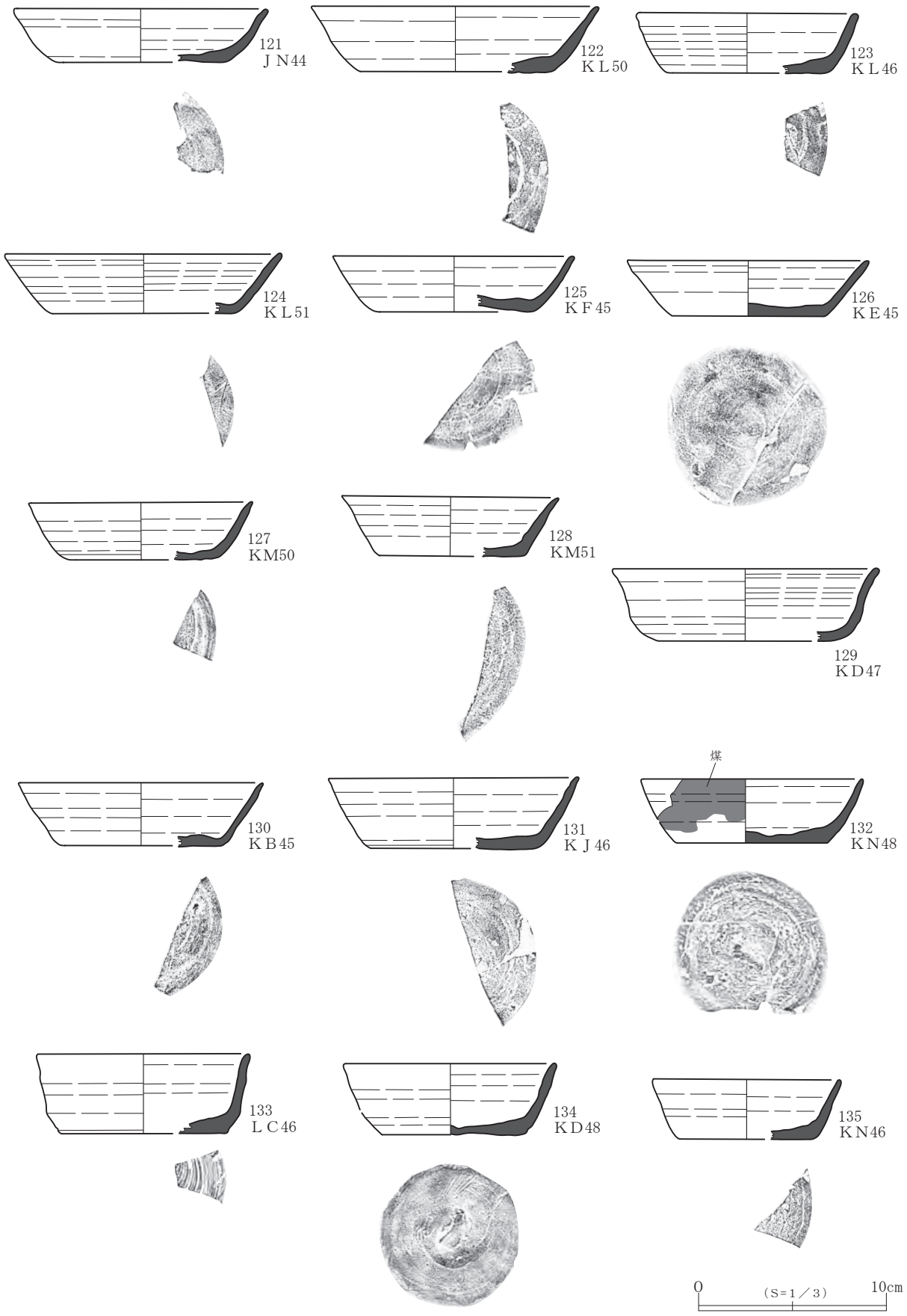
第 56 図　古代遺構外出土遺物（４）



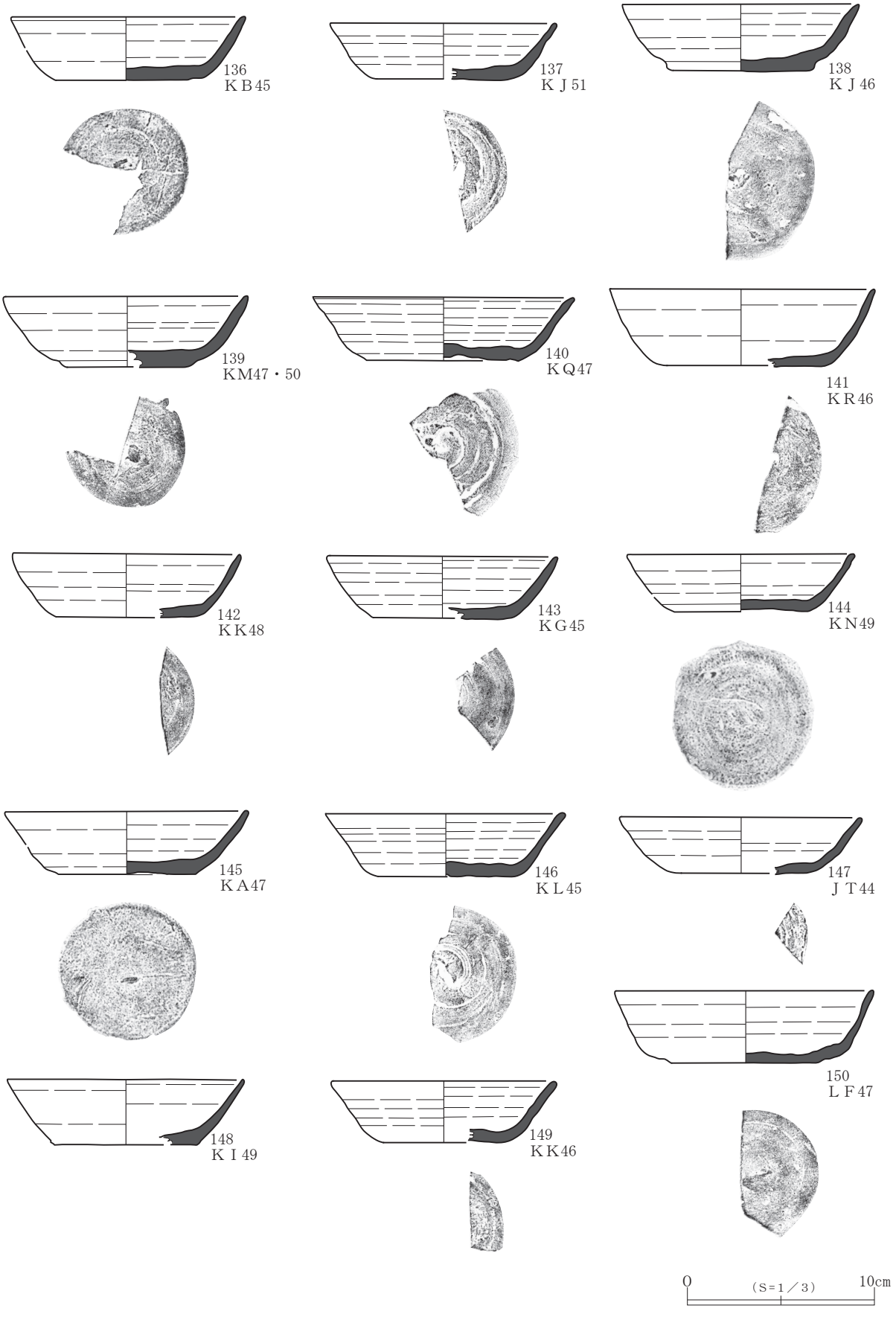
第 57 図　古代遺構外出土遺物（５）



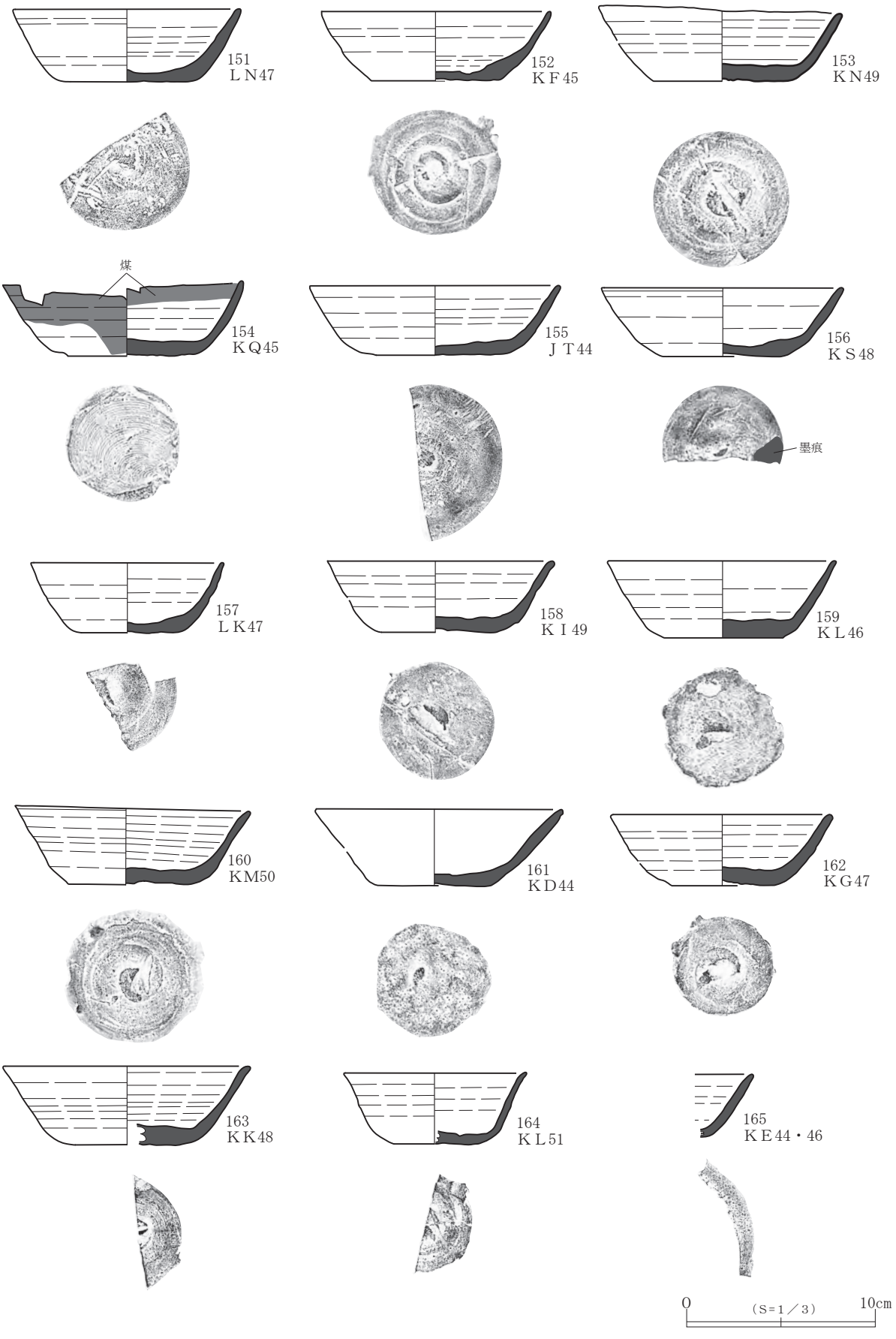
第 58 図　古代遺構外出土遺物（６）



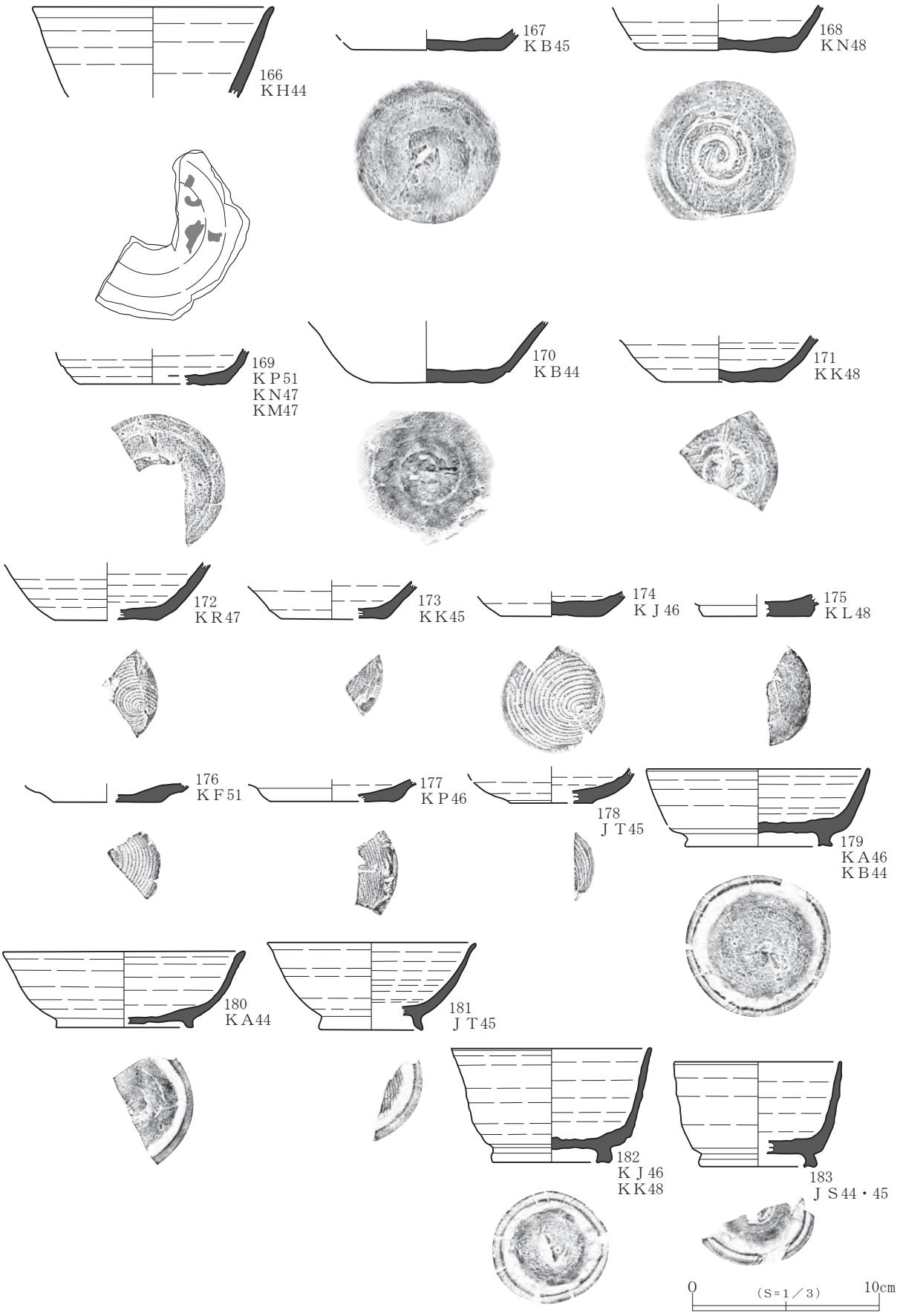
第 59 図　古代遺構外出土遺物（７）



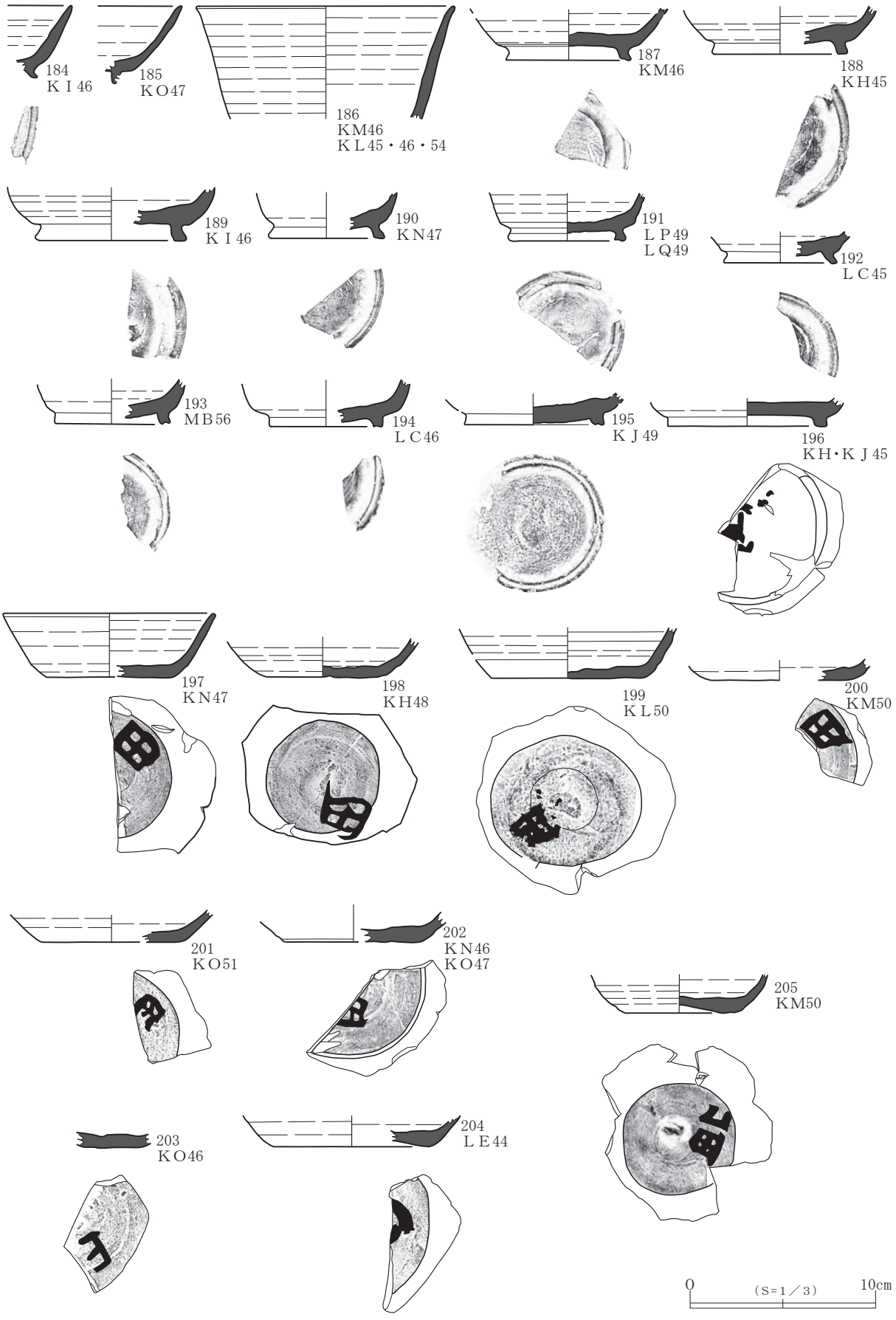
第 60 図　古代遺構外出土遺物（８）



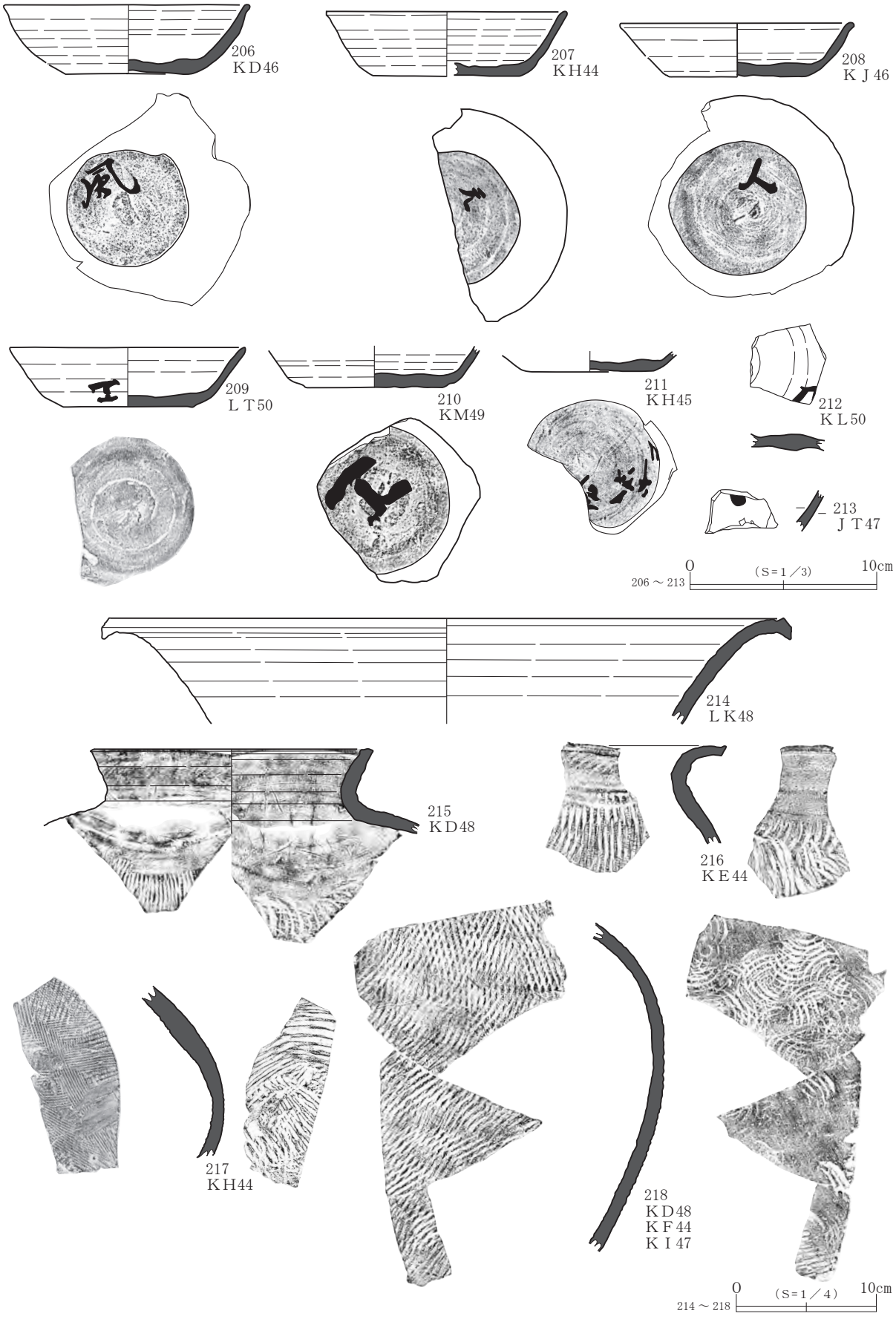
第 61 図　古代遺構外出土遺物（９）



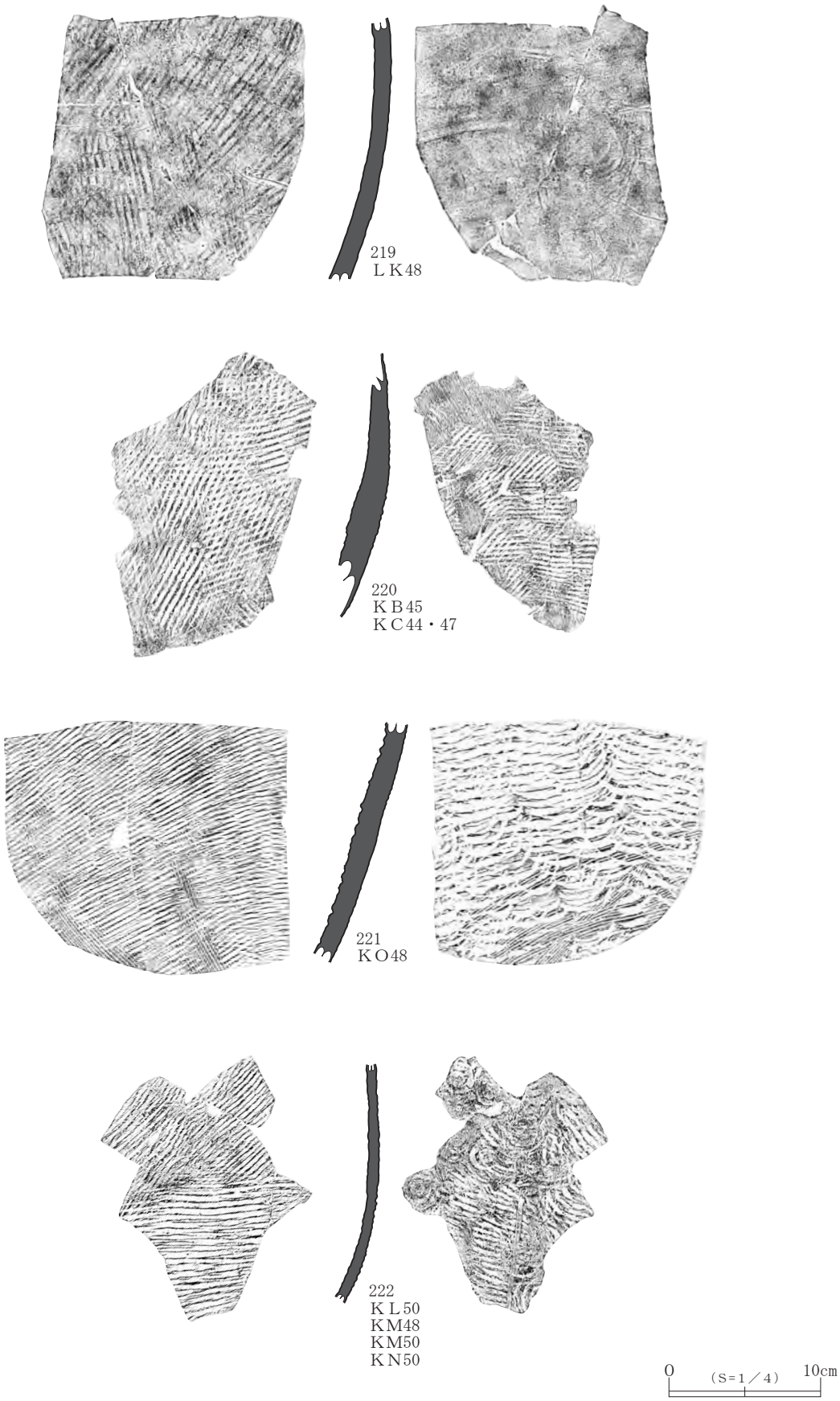
第 62 図　古代遺構外出土遺物（10）



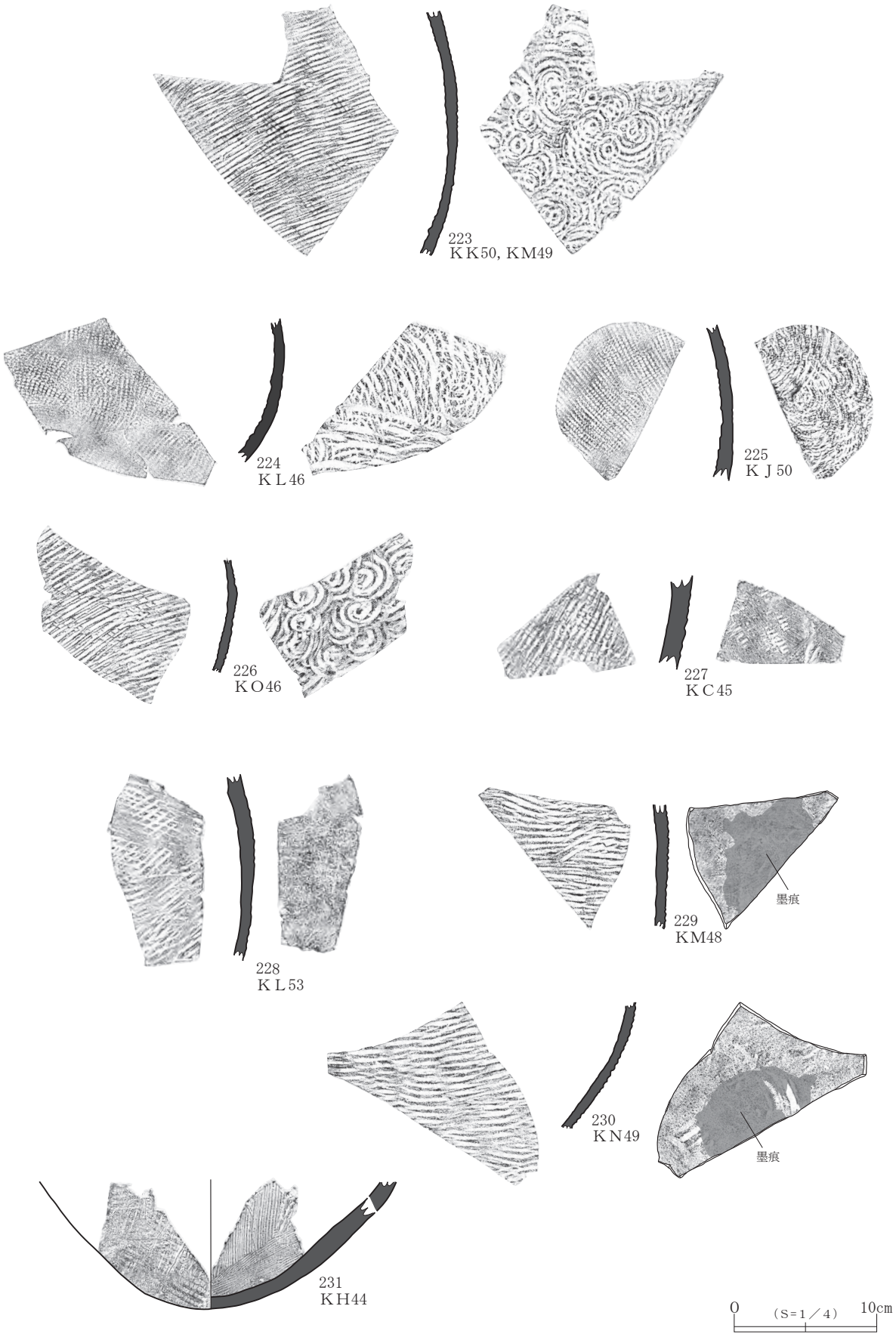
第 63 図　古代遺構外出土遺物（11）



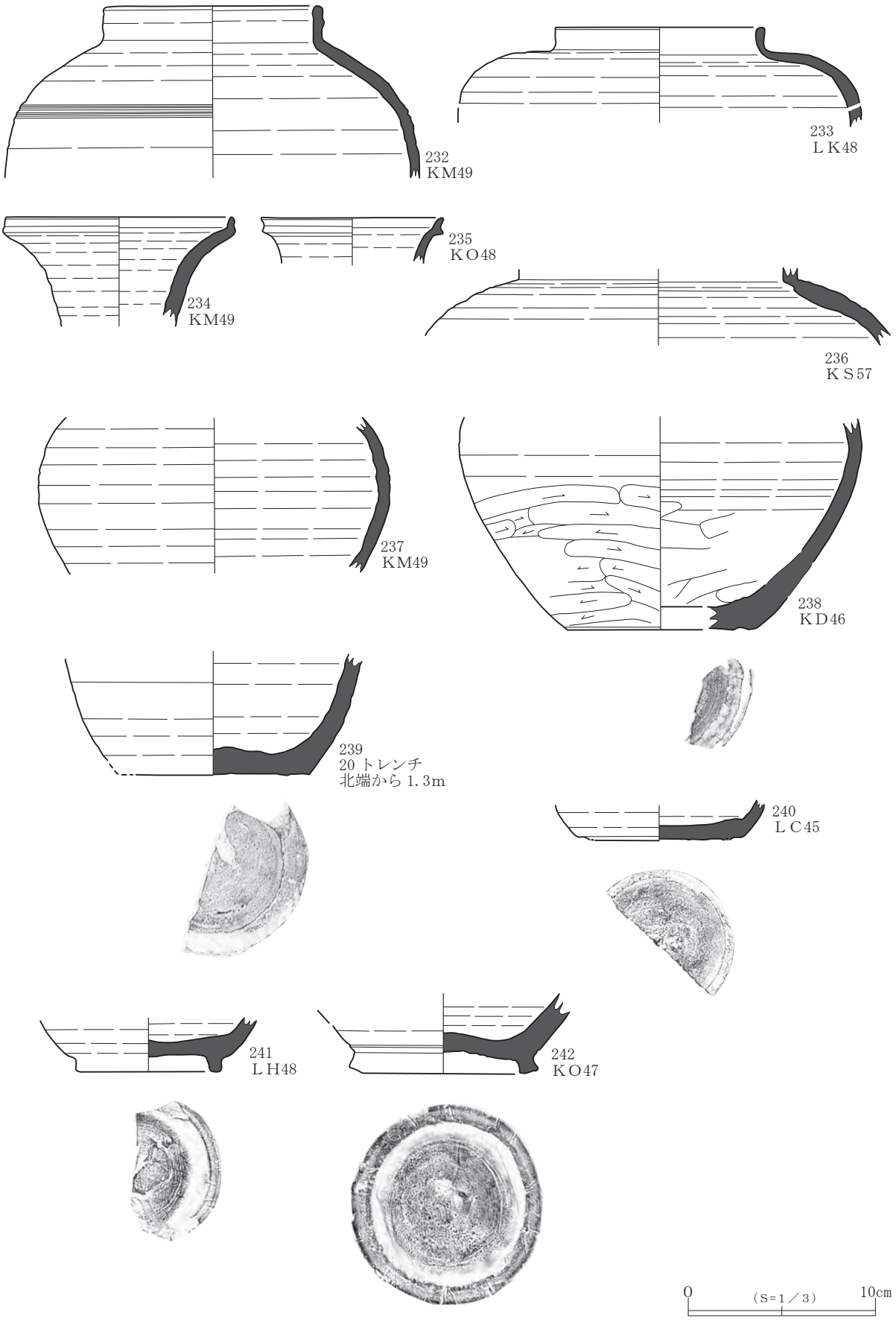
第 64 図　古代遺構外出土遺物（12）



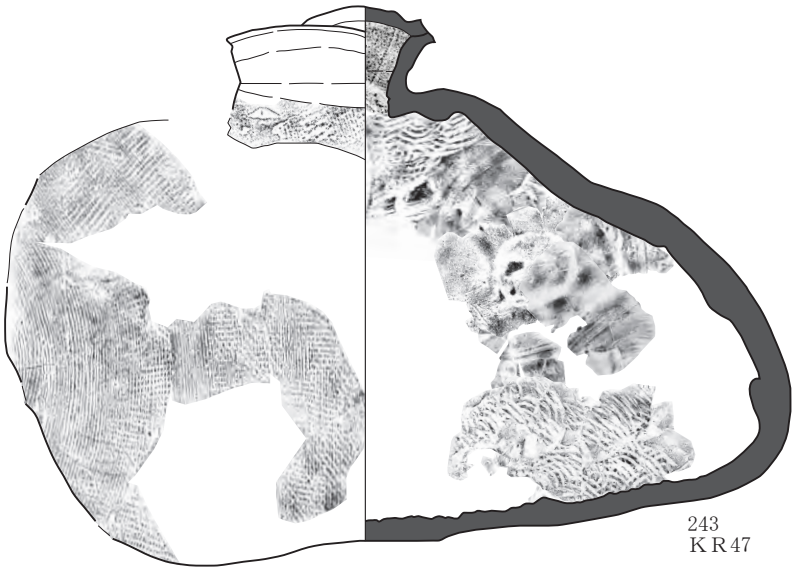
第 65 図　古代遺構外出土遺物（13）



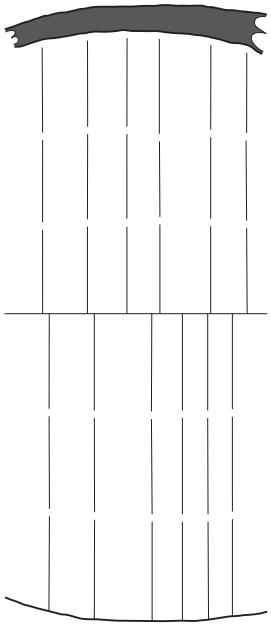
第 66 図　古代遺構外出土遺物（14）



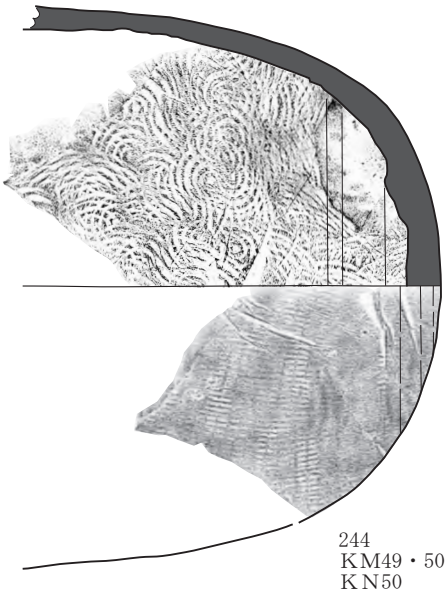
第 67 図　古代遺構外出土遺物（15）



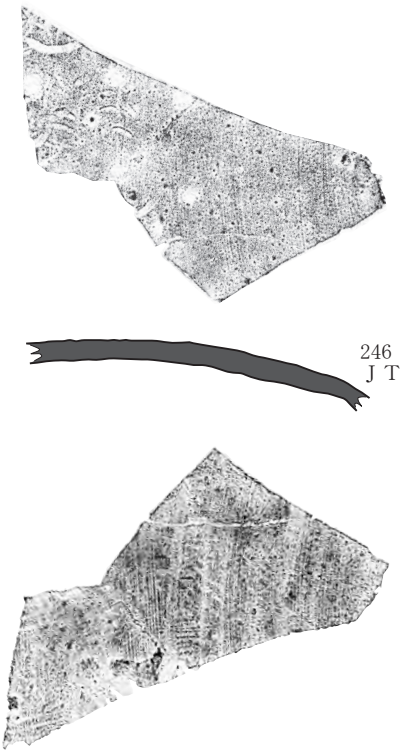
243
ＫＲ47



245
ＫＯ50



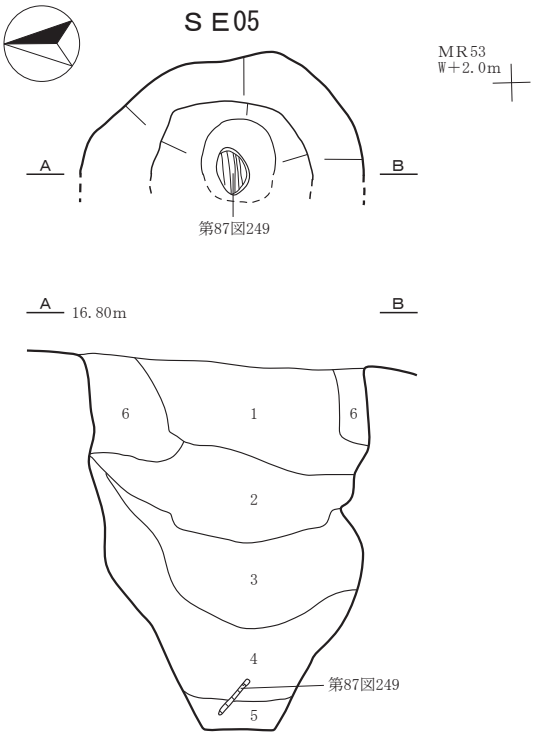
244
ＫＭ49・50
ＫＮ50
ＫＯ47



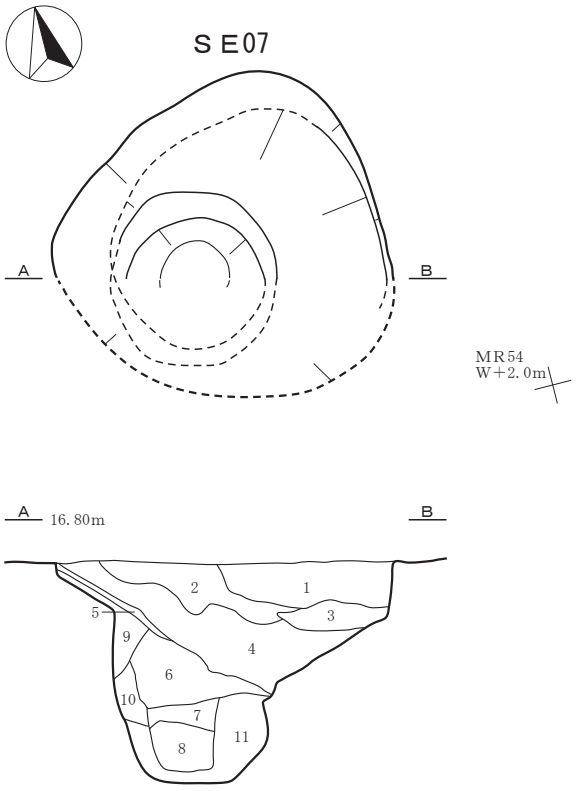
246
ＪＴ44

0　（S＝1／3）　10cm

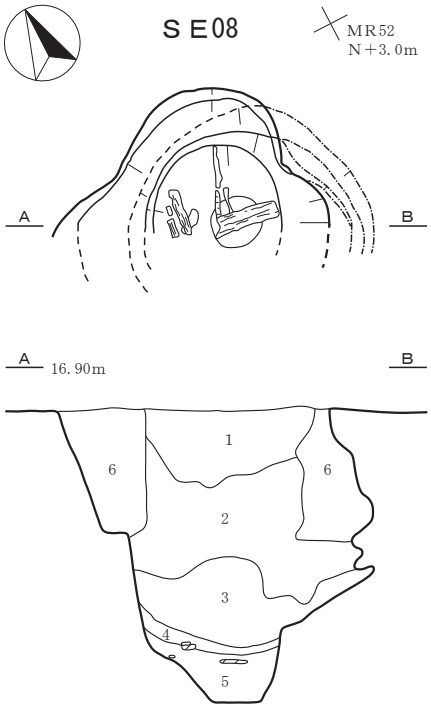
第 68 図　古代遺構外出土遺物（16）



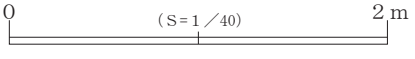
ＳＥ05
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）シルト　しまり強　粘性弱
　混入物：地山土塊φ５～50㎜３％、炭化物粒φ１～５㎜１％未満、
　焼土粒φ１以下～　５㎜１％未満
2　灰黄褐色（10ＹＲ5/2）シルト質粘土　しまり強　粘性やや強
　混入物：炭化物筋状φ４～10㎜３％
3　にぶい黄橙色（10ＹＲ7/2）粘土質砂　しまりやや弱　粘性弱
　混入物：地山土筋状φ40㎜１％
4　にぶい黄橙色（10Ｙ7/4）砂質シルト　しまり弱　粘性やや弱
5　オリーブ灰色（2.5Ｇ Ｙ5/1）シルト質粘土　しまり強　粘性強
6　褐色（10ＹＲ4/6）粘土質シルト　しまり強　粘性やや弱



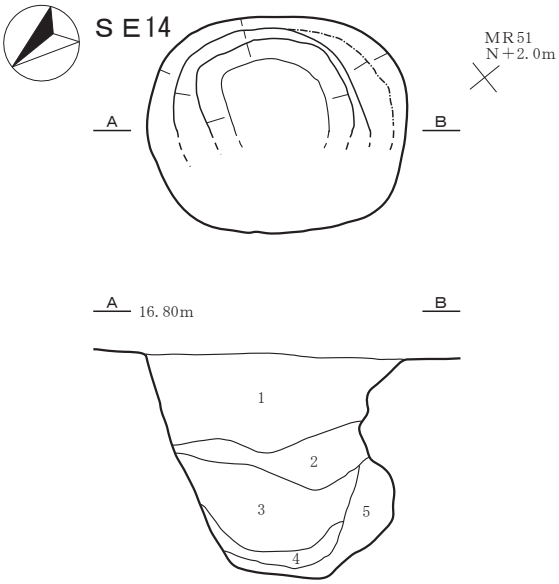
ＳＥ07
1　褐色（10ＹＲ4/6）粘土質シルト　しまり強　粘性弱
　混入物：地山土塊φ２～30㎜３％
2　褐灰色（10ＹＲ4/1）粘土質シルト　しまり強　粘性やや弱
　混入物：暗褐色土塊φ５㎜１％、炭化物粒φ１以下～５㎜１％未満、
　焼土粒φ１㎜１％
3　褐色（10ＹＲ4/6）粘土質シルト　しまり強　粘性やや弱
　混入物：地山土塊φ２～30㎜３％
4　褐灰色（10ＹＲ4/1）シルト質粘土　しまり強　粘性やや弱
　混入物：地山土塊φ５～20㎜10％、炭化物粒φ１㎜以下・５㎜１％未満
5　褐灰色（10ＹＲ4/1）シルト質粘土　しまり強　粘性やや弱
　混入物：炭化物粒φ１以下～３㎜70％
6　にぶい黄橙色（10ＹＲ6/3）粘土質シルト　しまり強　粘性やや弱
　混入物：地山土塊φ10～50㎜10％、
　炭化物粒φ１～５㎜１％未満・筋状φ３㎜１％未満
7　にぶい黄橙色（10ＹＲ6/3）粘土質シルト　しまり強　粘性強
　混入物：マンガン多量
8　褐灰色（10ＹＲ4/1）粘土　しまり強　粘性強
　混入物：地山土塊φ１～10㎝15％、炭化物粒φ１～10㎜１％未満
9　にぶい黄橙色（10ＹＲ6/3）シルト質粘土　しまり強　粘性弱
　混入物：炭化物粒φ１～５㎜１％未満
10　褐灰色（0ＹＲ4/1）シルト質粘土　しまり強　粘性弱
11　にぶい黄橙色（10ＹＲ6/3）粘土質　しまり強　粘性やや弱



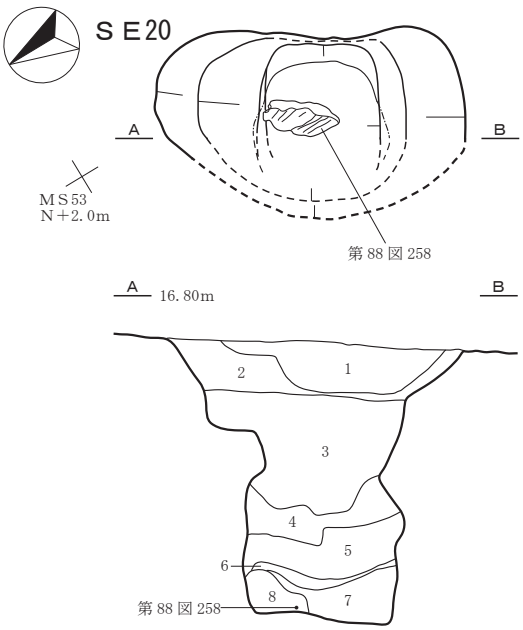
ＳＥ08
1　暗褐色（10ＹＲ3/3）シルト　しまり強　粘性弱
　混入物：地山土塊φ５～50㎜10％、
　炭化物粒φ１～５㎜１％未満、焼土φ１以下～５㎜１％未満
2　灰黄褐色（10ＹＲ4/2）粘土質シルト　しまり強　粘性やや弱
　混入物：地山土塊φ２㎜～10㎝３％、
　炭化物粒φ１～５㎜１％未満、焼土粒φ１㎜１％未満
3　黒褐色（10ＹＲ3/1）粘土質シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊φ20～50㎜３％、
　炭化物粒φ２～５㎜１％未満、礫φ4㎝１個
4　黄灰色（2.5Ｙ6/1）シルト質粘土　しまり強　粘性やや弱
5　褐灰色（10ＹＲ4/1）シルト質粘土　しまり強　粘性やや弱
　混入物：炭化物粒φ１㎜以下１％未満、礫φ７㎝１個
6　褐色（10ＹＲ4/4）　粘土質シルト　しまり強　粘性中
　混入物：炭化物粒φ１㎜以下１％未満



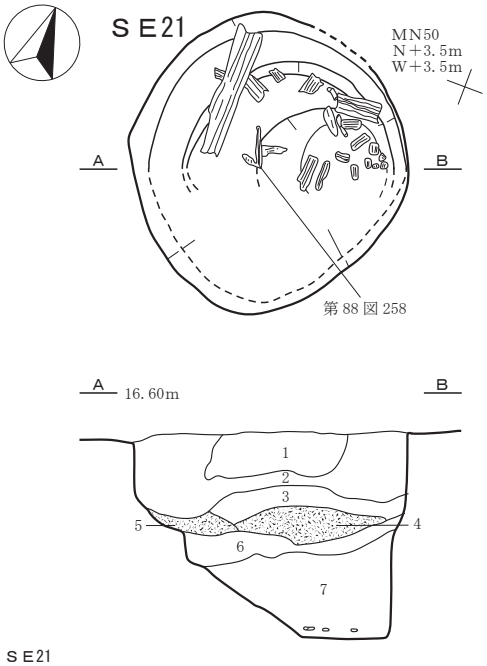
第 69 図　ＳＥ05・07・08 井戸跡



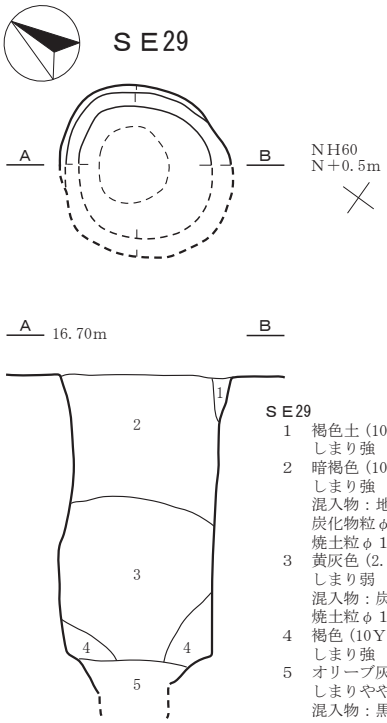
ＳＥ14
1　明黄褐色（10ＹＲ7/6）・灰黄褐色（10ＹＲ6/2）シルト　しまり強　粘性弱
　混入物：炭化物粒φ１㎜１％未満
2　灰黄褐色（10ＹＲ6/2）・にぶい黄橙色（10ＹＲ7/2）粘土質シルト
　しまり強　粘性中
　混入物：炭化物粒φ１以下～５㎜１％未満、礫φ６㎝１個、
3　にぶい黄橙色（10ＹＲ7/2）粘土質シルト　しまり強　粘性強
　混入物：炭化物筋状φ10 ～ 20㎜５％
4　灰黄褐色（10ＹＲ6/2）シルト質粘土　しまり強　粘性強
　混入物：炭化物筋状φ５～ 20㎜15％
5　にぶい黄橙色（10ＹＲ7/2）粘土質シルト　しまりやや弱　粘性中



ＳＥ20
1　褐色（10ＹＲ4/4）シルト　しまり中　粘性弱
　混入物：暗褐色土塊φ５㎜以下１％未満、
　地山土塊φ10 ～ 50㎜１％未満、炭化物粒φ１㎜以下１％
2　褐色（10ＹＲ4/4）・にぶい黄褐色（10ＹＲ5/3）粘土質シルト
　しまり中　粘性やや弱
3　にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）シルト質粘土　しまりやや弱　粘性中
4　褐色（10ＹＲ4/4）シルト質粘土　しまり弱　粘性中
　混入物：地山土塊φ50㎜20％
5　褐色（10ＹＲ4/4）シルト質粘土　しまり弱　粘性中
　混入物：地山土塊φ50㎜30％
6　にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）シルト質粘土　しまり弱　粘性中
　混入物：暗褐色土 30％、炭化物粒φ１以下～５㎜２％
7　褐色（10ＹＲ4/4）～褐灰色（10ＹＲ5/1）粘土　しまり弱　粘性中
8　黄褐色（10ＹＲ5/6）粘土質シルト　しまりやや弱　粘性やや弱



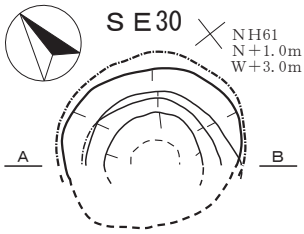
ＳＥ21
1　褐灰色（10ＹＲ5/1）シルト　しまり強　粘性弱
　混入物：地山土塊φ５～ 50㎜３％、炭化物φ１以下～５㎜１％
2　にぶい黄橙色（10ＹＲ7/4）粘土質シルト　しまり強　粘性やや弱
　混入物：暗褐色土塊φ２～５㎝10％、炭化物筋状φ５㎜１％未満
3　褐灰色（10ＹＲ4/1）粘土質シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊φ１～ 20㎜20％、炭化物筋状φ２～４㎜３％、
　焼土粒φ２㎜１％未満
4　炭化物層　しまりやや弱　粘性やや弱
5　炭化物層　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入物：地山土塊φ５～ 20㎜10％
6　褐灰色（10ＹＲ4/1）粘土質シルト　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入物：地山土塊φ５～ 20㎜３％、炭化物塊φ10 ～ 20㎜１％未満
7　オリーブ灰色（2.5Ｇ Ｙ5/1）粘土　しまりやや弱　粘性強
　混入物：炭化物塊φ２～ 20㎜５％、木製品・木材多量

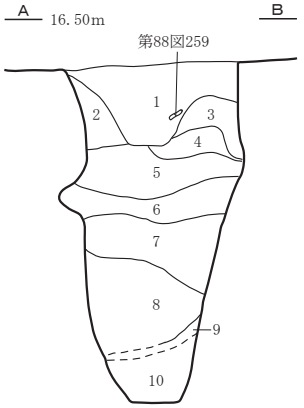


ＳＥ29
1　褐色土（10ＹＲ4/4）シルト
　しまり強　粘性中
2　暗褐色（10ＹＲ3/3）粘土質シルト
　しまり強　粘性やや弱
　混入物：地山土塊φ１～ 50㎜３％、
　炭化物粒φ１以下～３㎜１％、
　焼土粒φ１～３㎜１％未満
3　黄灰色（2.5Ｙ4/1）シルト質粘土
　しまり弱　粘性強
　混入物：炭化物粒φ１㎜以下１％未満、
　焼土粒φ１㎜以下１％未満
4　褐色（10ＹＲ4/4）粘土質シルト
　しまり強　粘性やや弱
5　オリーブ灰色（2.5Ｇ Ｙ5/1）粘土
　しまりやや弱　粘性強
　混入物：黒泥状土粒φ１㎜以下１％

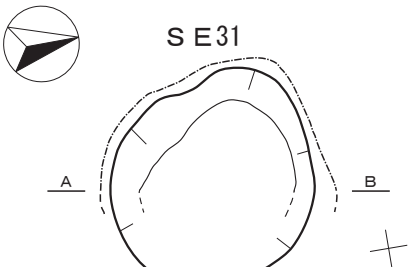
0　（S＝1／40）　2m

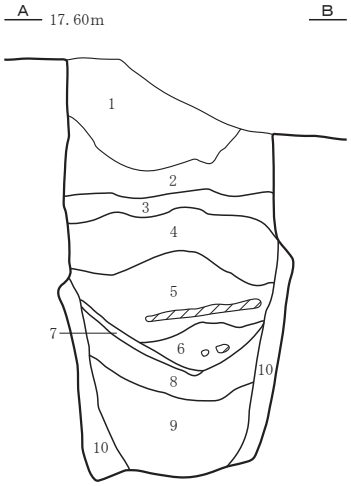
第 70 図　ＳＥ14・20・21・29 井戸跡



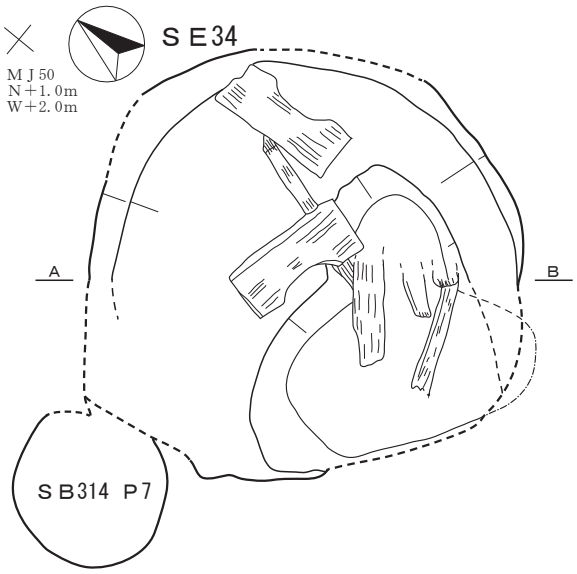


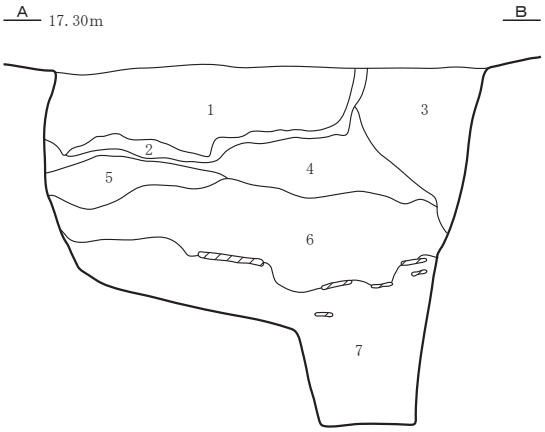
ＳＥ30
1　にぶい黄橙色（10ＹＲ7/2）シルト
　しまり強　粘性やや弱
　混入物：地山土塊φ１～50㎜１％、
　炭化物粒φ１以下～10㎜１％未満、
　焼土粒φ１㎜以下１％未満
2　暗褐色（10ＹＲ3/4）シルト
　しまり強　粘性やや弱
　混入物：地山土塊φ１～50㎜１％、
　炭化物粒φ１㎜以下１％未満
3　褐色（10ＹＲ4/4）シルト
　しまり強　粘性やや弱
　混入物：地山土塊φ１～50㎜１％、
　炭化物粒φ１㎜以下１％未満
4　灰黄褐色（10ＹＲ5/2）粘土質シルト
　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊φ５～50㎜10％、
　炭化物塊φ５～50㎜３％
5　オリーブ灰色（2.5Ｇ Ｙ5/1）
　シルト質粘土　しまり強　粘性やや強
　混入物：炭化物φ１以下～５㎜・50㎜１％未満・
　筋状φ５㎜１％未満、
　焼土粒φ１㎜以下１％未満
6　褐色（10ＹＲ4/4）シルト質粘土
　しまり強　粘性やや強
　混入物：炭化物粒φ２～５㎜１％未満、
　焼土粒φ１㎜以下１％未満
7　暗オリーブ灰色（2.5Ｇ Ｙ3/1）粘土
　しまり強　粘性強
8　オリーブ灰色（2.5Ｇ Ｙ5/1）粘土
　しまり強　粘性やや弱
　混入物：炭化物粒φ５～10㎜１％未満
9　黒色（10ＹＲ2/1）泥状シルト
　しまり強　粘性やや弱
10　オリーブ灰色（2.5Ｇ Ｙ5/1）粘土
　しまり強　粘性やや弱
　混入物：黒泥状土粒φ１～５㎜１％未満



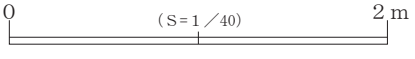


ＳＥ31
1　暗褐色（10ＹＲ3/4）シルト　しまり強　粘性弱
　混入物：地山土塊φ２㎜～10cm５％、礫φ４～26cm数個、
　炭化物粒φ１以下～５㎜１％未満、焼土粒φ１㎜１％未満
2　暗褐色（10ＹＲ3/3）シルト　しまり強　粘性やや弱
　混入物：礫φ４～26cm数個、
　炭化物粒φ１～５㎜１％・筋状φ１㎜１％、
　焼土粒φ１㎜以下１％未満
3　黄褐色（10ＹＲ5/6）粘土質シルト　しまり強　粘性やや弱
　混入物：暗褐色土40％、炭化物粒φ１～３㎜１％未満、
　焼土粒φ１以下～２㎜１％未満
4　褐色（10ＹＲ4/6）粘土質シルト　しまり強　粘性やや弱
　混入物：暗褐色土筋状φ５～10㎜30％、地山塊φ５～30㎜15％、
　炭化物筋状φ１～２㎜１％未満、焼土極小粒１％未満
5　褐灰色（10ＹＲ4/1）シルト質粘土　しまり強　粘性強
　混入物：地山土塊φ１～３cm15％、
　炭化物塊φ10㎜１％未満・筋状φ５㎜１％
6　黒色（10ＹＲ2/1）粘土質砂　しまり中　粘性強
　混入物：地山土塊φ１～５cm10％、
　炭化物塊φ10㎜１％・筋状φ５㎜１％
7　黒褐色（2.5Ｙ3/1）シルト質粘土　しまり強　粘性やや弱
　混入物：地山土塊φ１～５cm10％
8　灰色（7.5Ｙ4/1）シルト質粘土　しまり強　粘性やや弱
　混入物：地山土塊φ１～５cm10％、
　炭化物塊φ２㎜１％・筋状φ3㎜１％
9　オリーブ黒色（7.5Ｙ3/1）粘土　しまり弱　粘性強
　混入物：地山土塊φ１～10cm15％
10　オリーブ灰色（2.5Ｇ Ｙ5/1）粘土　しまり弱　粘性強
　混入物：炭化物筋状φ１～２㎜１％未満

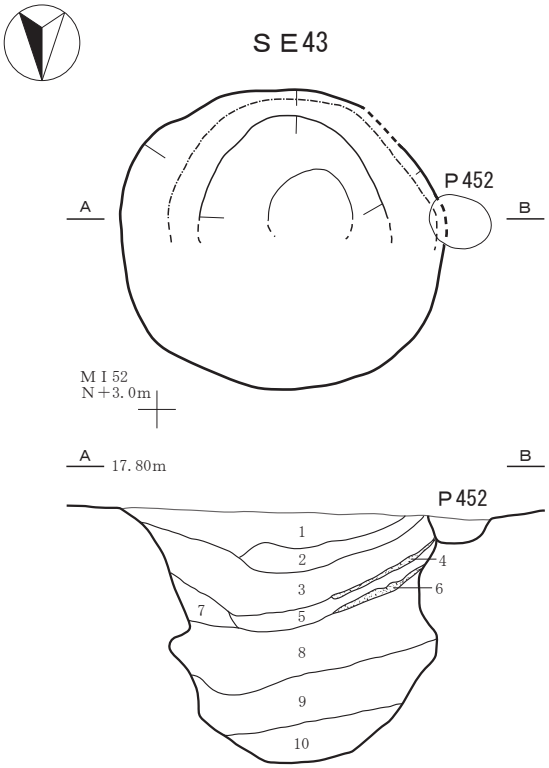




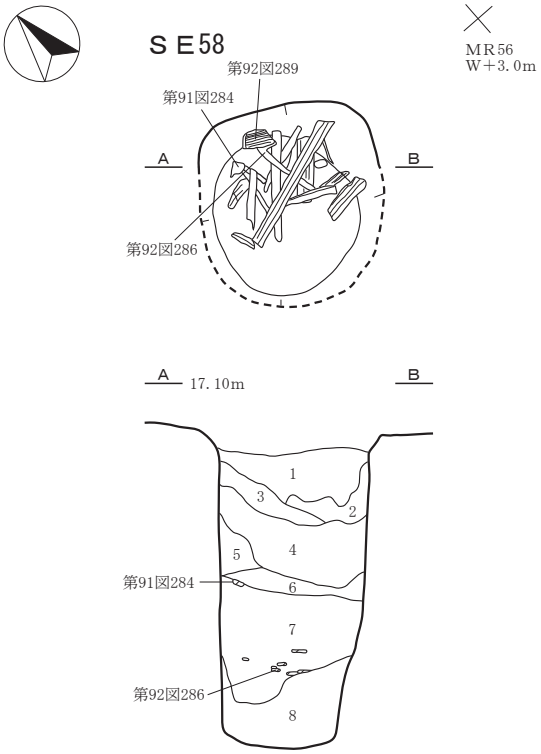
ＳＥ34
1　黄褐色（10ＹＲ5/6）粘土質シルト　しまり中　粘性やや弱
　混入物：褐灰色筋状φ５～20㎜10％
2　にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）粘土質シルト　しまりやや弱　粘性中
　混入物：地山土塊φ10～20㎜40％、炭化物粒φ５～10㎜２％
3　にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）粘土質シルト　しまりやや弱　粘性中
　混入物：褐灰色土筋状φ５㎜１％未満
4　明黄褐色（10ＹＲ6/6）シルト質粘土　しまりやや弱　粘性中
　混入物：褐灰色土φ10～20㎜20％
5　黒褐色（10ＹＲ3/1）シルト質粘土　しまりやや弱　粘性中
　混入物：炭化物塊φ10～15㎜５％、焼土粒φ２～10㎜20％
6　黒褐色（10ＹＲ3/1）粘土　しまりやや弱　粘性中
　混入物：炭化物塊φ５～50㎜１％
7　暗オリーブ灰色（2.5Ｇ Ｙ4/1）粘土　しまり弱　粘性中

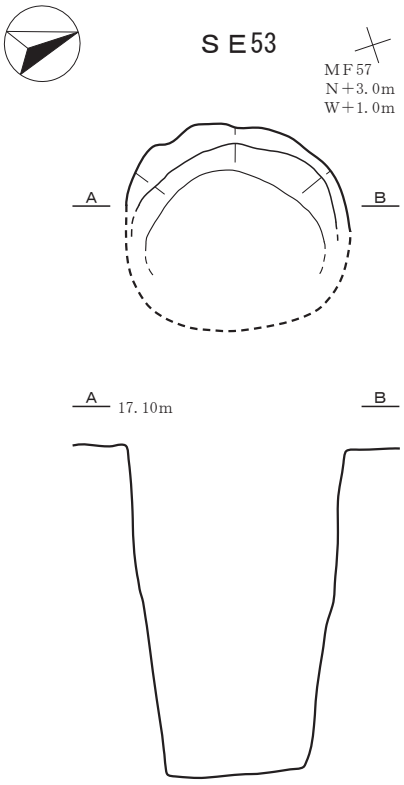


第 71 図　ＳＥ30・31・34 井戸跡

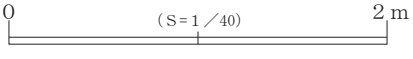


ＳＥ43
1　暗褐色（10ＹＲ3/3）粘土質シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土粒φ２～10㎜10%、炭化物粒φ１以下～３㎜１%
2　黄褐色（10ＹＲ5/6）粘土質シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土粒φ１～20㎜１%未満
3　暗褐色（10ＹＲ3/3）粘土質シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土粒φ１～10㎜１%、炭化物粒φ１～５㎜１%
4　炭化物層　シルト　しまり弱　粘性やや弱
5　黒褐色（10ＹＲ3/1）粘土質シルト　しまり強　粘性強
　混入物：地山土塊φ１～50㎜10%、炭化物筋状φ１～20㎜１%
6　炭化物層　シルト　しまりやや弱　粘性やや弱
7　灰黄褐色（10ＹＲ5/2）粘土質シルト　しまり強　粘性中
8　黄褐色（10ＹＲ3/3）～オリーブ灰色（５ＧＹ5/1）シルト質粘土
　しまりやや強　粘性中　混入物：暗褐色土塊φ５～20㎜３%
9　黄灰色（2.5Ｙ5/1）粘土　しまり弱　粘性強
10　黄灰色（2.5Ｙ4/1）粘土　しまり弱　粘性強

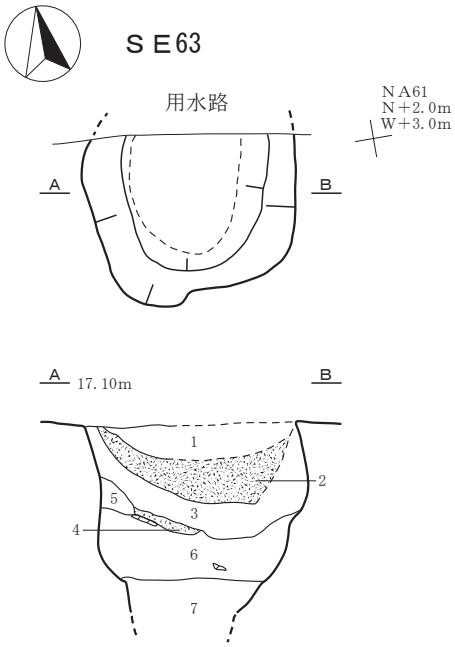




ＳＥ58
1　灰黄褐色（10ＹＲ4/2）シルト　しまり強　粘性弱
　混入物：暗褐色土φ１㎜以下～10cm30%、炭化物粒φ１以下～５㎜１%、
　焼土φ１以下～10㎜１%未満
2　灰黄褐色（10ＹＲ4/2）～にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）粘土質シルト
　しまり強　粘性中
　混入物：炭化物粒φ１以下～10㎜１%未満、焼土粒φ１以下～５㎜１%未満
3　にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）粘土質シルト　しまり強　粘性中
　混入物：暗褐色土筋状φ２～50㎜30%、炭化物粒φ１～10㎜１%未満
4　にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）粘土質シルト　しまり強　粘性中
　混入物：暗褐色土塊φ１以下～10㎜３%、炭化物粒φ１～５㎜１%未満、
　焼土極小～大１%未満
5　にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊φ20～50㎜３%
6　褐灰色（10ＹＲ5/1）粘土質シルト　しまり強　粘性強
　混入物：地山土筋状φ１～10㎜５%
7　褐灰色（10ＹＲ4/1）シルト質粘土　しまり中　粘性強
　混入物：黒泥状シルト30%、炭化物粒φ１以下～２㎜１%未満、
　木製品多数出土
8　オリーブ灰色（2.5Ｇ Ｙ5/1）粘土　しまり弱　粘性強
　混入物：炭化物筋状φ50㎜10%

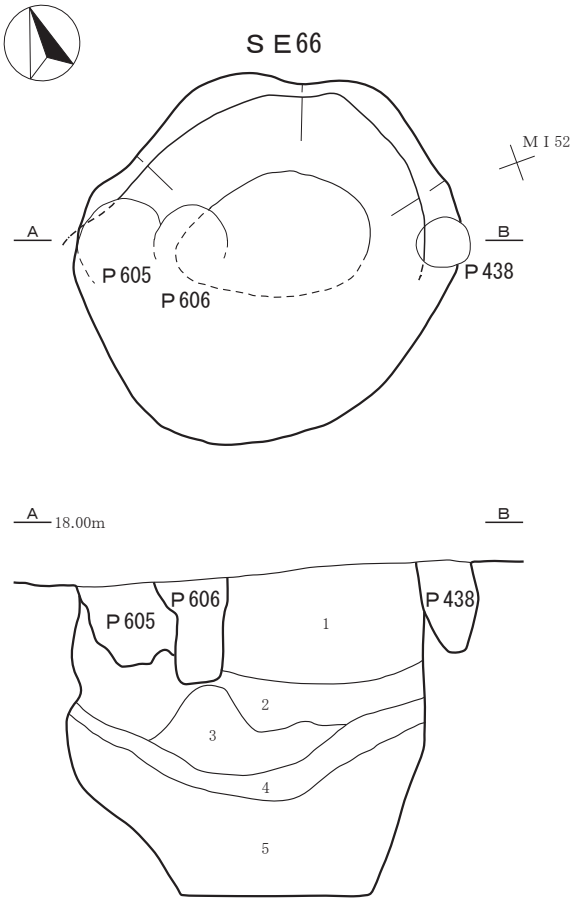


第 72 図　ＳＥ43・53・58 井戸跡



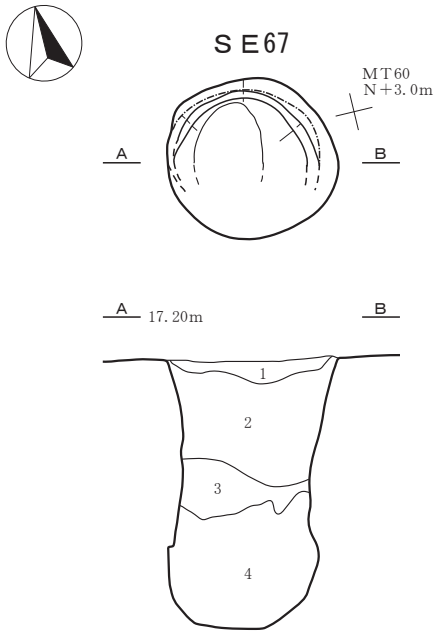
ＳＥ63

1　暗褐色（10ＹＲ3/3）シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊φ５㎜10%、炭化物粒φ１～３㎜１%未満
2　炭化物層　シルト　しまり弱　粘性弱
　混入物：地山土塊φ５～10㎜３%、焼土粒φ５㎜１%未満
3　黒褐色（10ＹＲ3/1）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ３～20㎜３%、炭化物筋状φ１～50㎜１%
4　炭化物層　シルト　しまり弱　粘性弱
5　にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）シルト　しまり中　粘性強
6　褐灰色（10ＹＲ4/1）シルト質粘土　しまり中　粘性強
7　オリーブ灰色（2.5ＧＹ5/1）粘土　しまり弱　粘性強
　混入物：炭化物筋状φ５㎜10%



ＳＥ66

1　にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）シルト　しまり強　粘性中
　混入物：暗褐色土筋状φ２～５㎜30%、炭化物粒φ１～10㎜１%未満、
　焼土粒φ１㎜１%未満
2　黒褐色（10ＹＲ5/4）シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊φ20～50㎜20%、炭化物粒φ２～５㎜１%・
　塊φ20～50㎜１%未満
3　オリーブ灰色（2.5ＧＹ5/1）粘土質シルト　しまり強　粘性強
　混入物：炭化物粒φ２～５㎜１%未満
4　黒褐色（10ＹＲ3/1）シルト質粘土　しまり中　粘性強
　混入物：炭化物粒φ５㎜１%未満・筋状φ10㎜１%
5　オリーブ灰色（2.5ＧＹ5/1）粘土　しまり弱　粘性強
　混入物：暗褐色土筋状φ10cm30%、炭化物塊φ５～10㎜１%未満

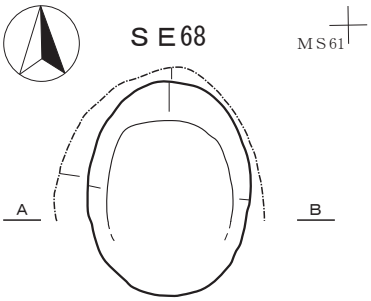


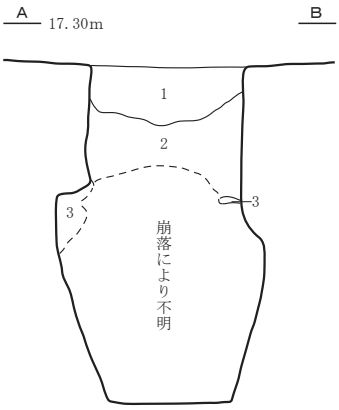
ＳＥ67

1　にぶい黄褐色（2.5Y6/3）シルト　しまり中　粘性やや弱
2　灰黄褐色（10ＹＲ4/2）シルト　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入物：地山土塊φ30～50㎜40%、炭化物塊φ１～10㎜１%、焼土塊φ１～10㎜１%
3　黄灰色（2.5Y5/1）シルト　しまりやや弱　粘性中
　混入物：地山土塊φ30～50㎜10%
4　黒褐色（10ＹＲ3/1）シルト質粘土　しまり弱　粘性中
　混入物：地山土塊φ10㎜１%未満

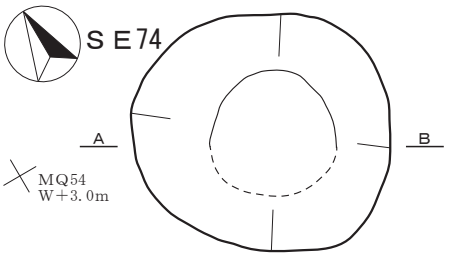
0　（S＝1／40）　2m

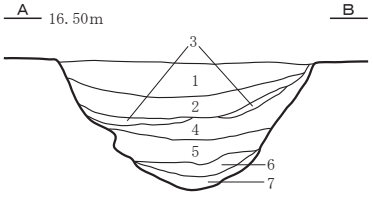
第 73 図　ＳＥ63・66・67 井戸跡



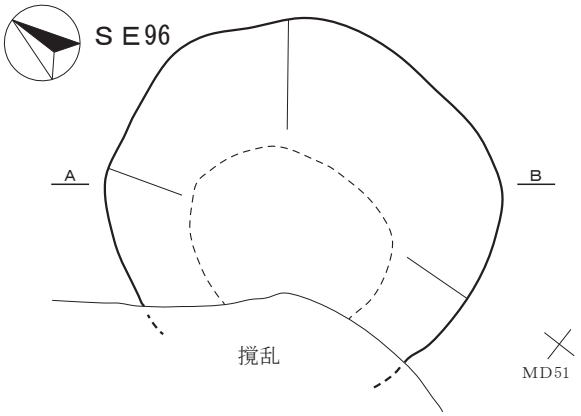


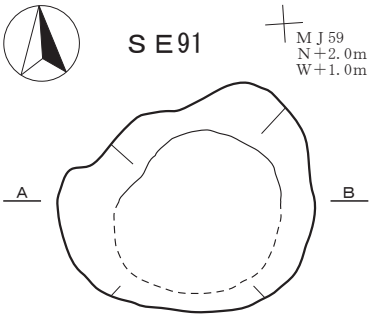
ＳＥ68
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）・褐灰色（10ＹＲ4/1）シルト
　しまりやや弱　粘性中
　混入物：炭化物粒φ１以下～ 10㎜１％
2　灰黄褐色（10ＹＲ4/2）シルト　しまりやや弱　粘性中
　混入物：地山土塊φ50㎜30%、炭化物粒φ１以下～ 10㎜１％
3　明黄褐色（10ＹＲ6/6）・褐灰色（10ＹＲ4/1）シルト
　しまりやや弱　粘性中

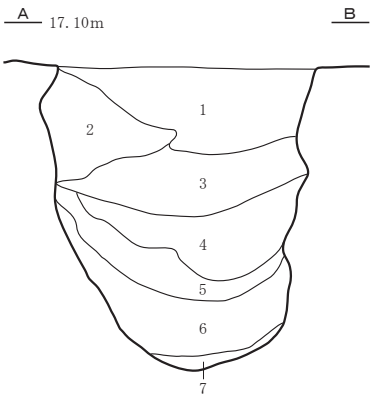




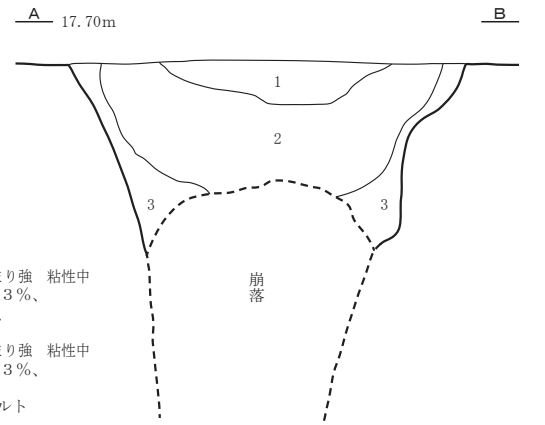
ＳＥ74
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）シルト
　しまり中　粘性中
　混入物：暗褐色土塊φ10 ～ 20㎜30%
2　暗褐色（10ＹＲ3/4）シルト
　しまり中　粘性やや弱
　混入物：地山土塊φ５～ 30㎜３%、
　炭化物粒φ２～ 10㎜１％
3　褐色（10ＹＲ4/4）シルト
　しまり中　粘性中
4　にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）シルト
　しまり中　粘性中
　混入物：炭化物粒φ２～ 10㎜１％
5　黄褐色（2.5Y5/3）粘土質シルト
　しまりやや弱　粘性中
6　灰黄褐色（10ＹＲ4/2）粘土質シルト
　しまりやや弱　粘性中
7　明褐色（7.5ＹＲ5/8）シルト質粘土
　しまりやや弱　粘性やや弱



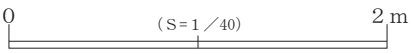




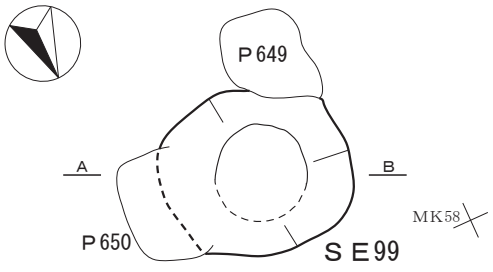
ＳＥ91
1　灰褐色（10ＹＲ4/2）シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊φ１～ 10㎜３%、
　炭化物粒φ１～３㎜１％未満、
　焼土粒φ１㎜以下１％未満
2　黒褐色（10ＹＲ3/1）シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊φ１～ 50㎜３%、
　礫φ５㎜～１㎝３％
3　黒褐色（10ＹＲ3/1）粘土質シルト
　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊φ５～ 30㎜３%、
　炭化物粒φ２㎜１％未満・板状φ５㎜１％未満
4　黒色（10ＹＲ2/1）シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊φ３～５㎜１%、
　炭化物筋状φ２㎜１％未満
5　黒色（10ＹＲ2/1）シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊１～ 10cm40%
6　オリーブ灰色（2.5Ｇ Y5/1）シルト質粘土
　しまり強　粘性強
　混入物：黒泥状土筋状φ２～３㎜１％未満、
　葦の根
7　黒色（2.5Ｇ Y2/1）泥状シルト
　しまり弱　粘性強

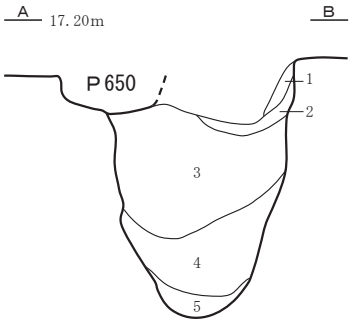


ＳＥ96
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）シルト質粘土
　しまり中　粘性やや弱
　混入物：地山土塊φ10 ～ 20㎜40%、
　炭化物粒φ１～５㎜１%、焼土粒φ５㎜１％
2　黄褐色（10ＹＲ5/6）～暗オリーブ灰色（2.5Ｇ Y4/1）
　シルト質粘土しまり中　粘性やや弱
　混入物：炭化物粒φ２～５㎜１％
3　黄灰色（2.5Y4/1）シルト質粘土　しまり中　粘性やや弱
　混入物：黒泥状土塊 30%

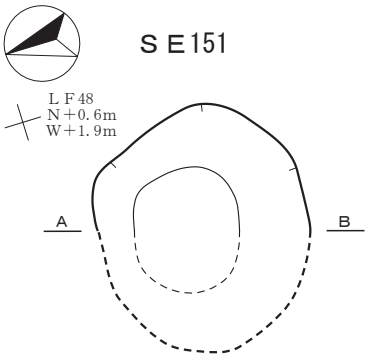


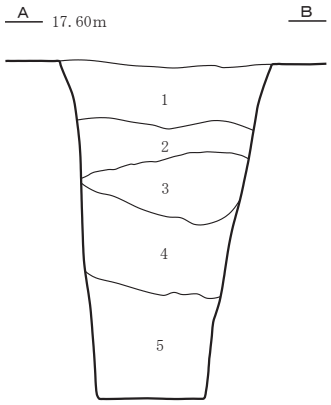
第 74 図　ＳＥ68・74・91・96 井戸跡



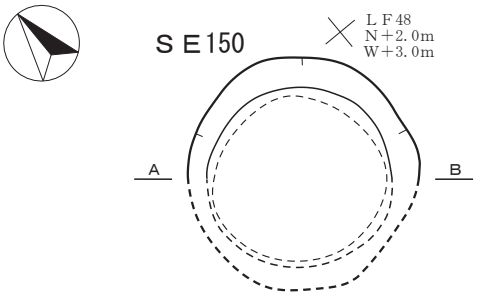


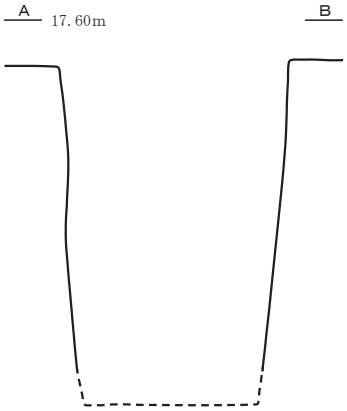
ＳＥ99
1　褐灰色（10ＹＲ4/1）シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊φ５～50㎜15％
2　褐灰色（10ＹＲ4/1）シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊φ１～10㎜３％、炭化物粒φ１以下～２㎜１％未満
3　黄灰色（2.5Y4/1）シルト　　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊φ１～15㎝、炭化物粒φ１～２㎜１％未満
4　黄灰色（2.5Y4/1）シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊φ１～５㎝５％、
　炭化物粒φ１㎜以下１％未満・筋状φ２㎜１％未満
5　黒色（10ＹＲ2/1）泥状シルト　しまり弱　粘性弱
　混入物：地山土塊φ２㎝１％

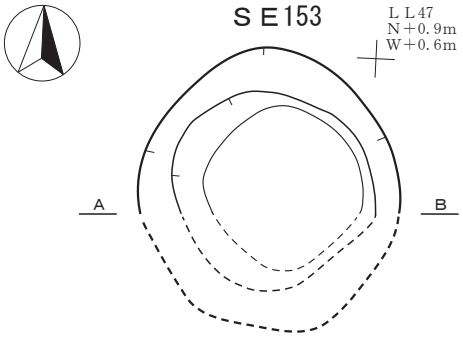


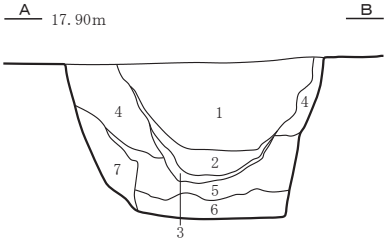


ＳＥ151
1　灰オリーブ色（５Ｙ4/2）粘土
　しまり強　粘性中
2　灰色（7.5Y4/1）粘土　しまり強　粘性強
　混入物：地山土塊φ20㎜以下10％、
　暗褐色土塊φ30㎜10％
3　暗オリーブ灰色（2.5GＹ4/1）粘土
　しまり強　粘性中
　混入物：黒泥状土粒φ３㎜５％
4　暗オリーブ灰色（５GＹ4/1）粘土
　しまり強　粘性中
　混入物：地山土30％
5　暗緑灰色（7.5GＹ4/1）粘土
　しまり中　粘性強
　混入物：暗褐色土塊φ30㎜10％

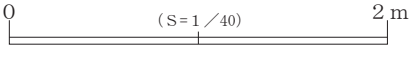




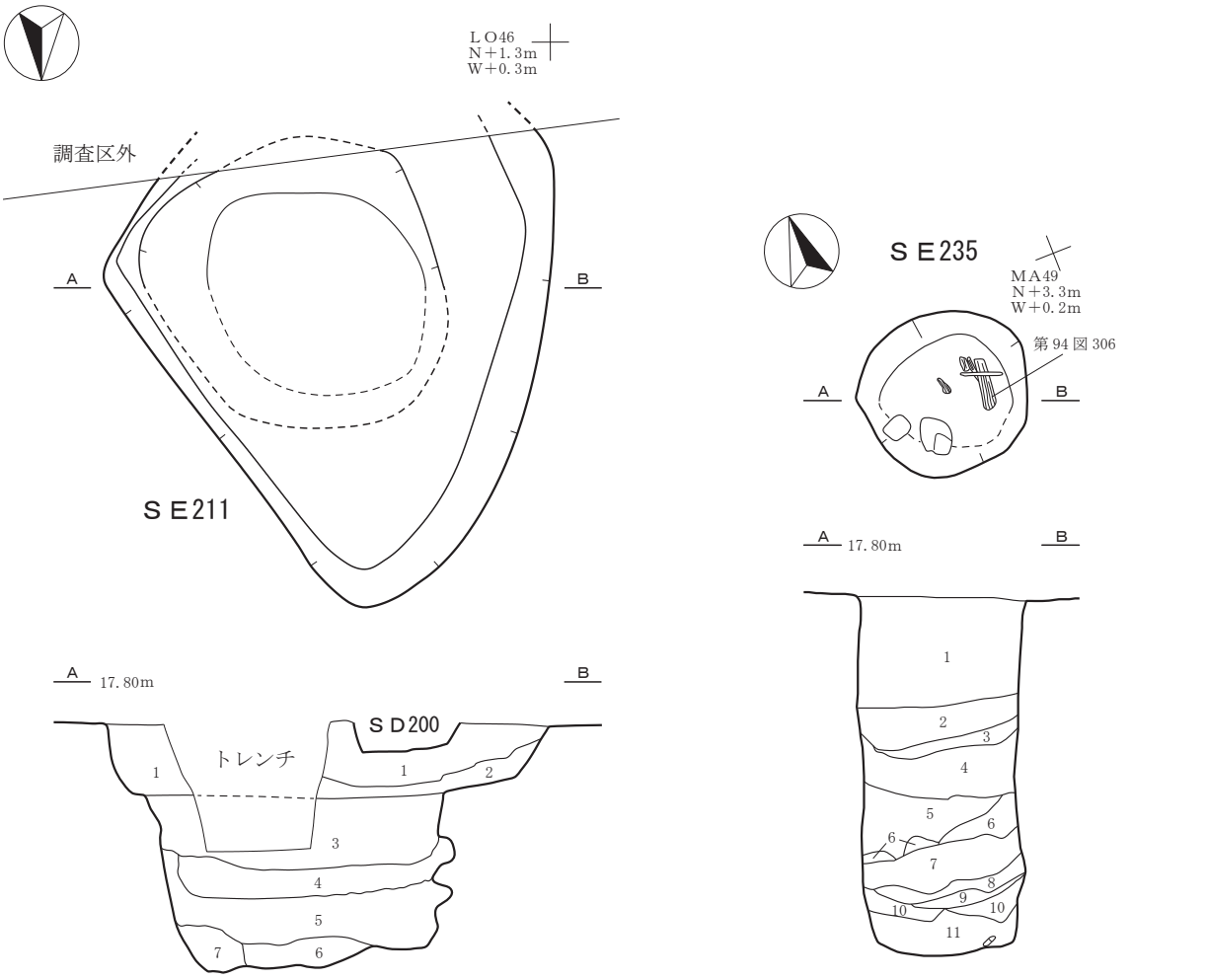




ＳＥ153
1　褐色（10ＹＲ4/4）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ８㎜以下10％、炭化物φ３㎜以下１％
2　暗灰色（2.5Y4/2）粘土質シルト　しまり小　粘性中
　混入物：地山土塊φ10㎜以下15％
3　黒色（10ＹＲ1.7/１）泥状シルト
　混入物：植物遺体多量
4　黄褐色（10ＹＲ5/8）粘土　しまり強　粘性強
　混入物：暗褐色土塊φ15㎜以下30％
5　黄褐色（2.5Y5/3）シルト質粘土
　混入物：暗褐色土塊φ15㎜以下30％
6　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘土
　混入物：暗褐色土塊φ８㎜以下30％
7　オリーブ褐色（2.5Y4/6）粘土
　混入物：地山土塊φ15㎝以下20％



第 75 図　ＳＥ99・150・151・153 井戸跡



ＳＥ211

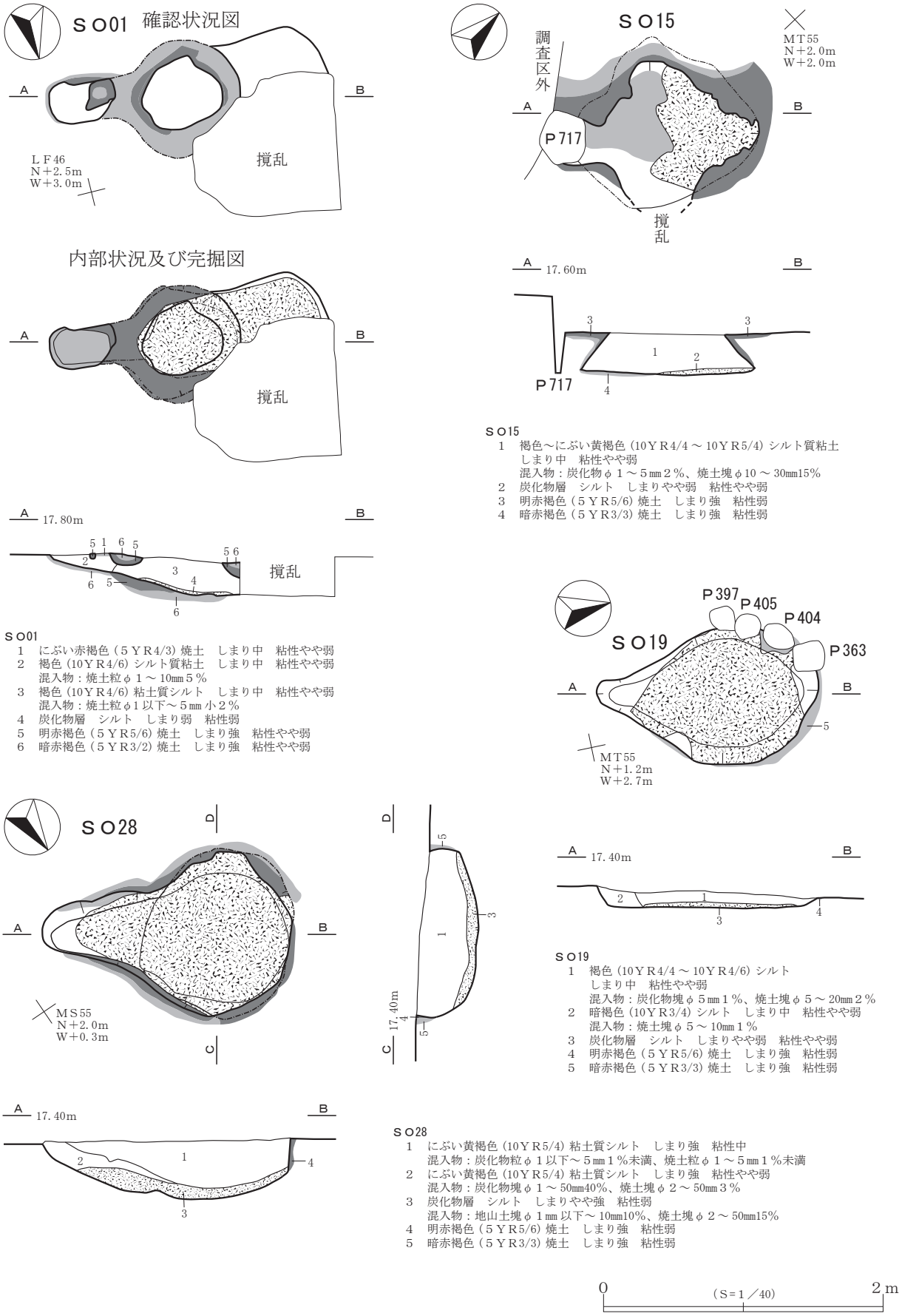
1　黄褐色（10ＹＲ5/6）粘土　しまり強　粘性中
　混入物：暗褐色土30%
2　にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）シルト　しまり強　粘性弱
　混入物：地山土塊φ15㎜以下30%、炭化物粒φ５㎜以下５%、
　焼土粒φ５㎜以下１%
3　黄褐色（10ＹＲ5/8）粘土　しまり強　粘性強
　混入物：暗褐色土15%
4　明黄褐色（10ＹＲ5/8）粘土　しまり強　粘性強
　混入物：炭化物粒φ10㎜以下１%
5　明黄褐色（10ＹＲ5/8）粘土　しまり強　粘性強
　混入物：暗褐色土φ５～10㎜５%
6　明黄褐色（10ＹＲ5/8）粘土　しまり強　粘性強
　混入物：地山土塊φ60㎜以下10%
7　明黄褐色（10ＹＲ5/8）粘土　しまり強　粘性強
　混入物：地山土塊φ80㎜以下30%

ＳＥ235

1　褐色（10ＹＲ4/4）～黄灰色（2.5Y4/1）粘土質シルト　しまり強　粘性弱
　混入物：地山土粒φ１～３㎜１%、炭化物粒φ１～２㎜１%未満、
　焼土粒φ１～２㎜１%未満
2　黄灰色（2.5Y4/1）シルト質粘土　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊φ10～20㎜３%
3　黒色（2.5Y2/1）粘土質シルト　しまり中　粘性強
　混入物：地山土粒φ１～５㎜３%、炭化物粒φ１㎜以下１%・
　筋状φ２㎜３%、焼土粒φ２㎜１%未満
4　灰色（５Y4/1）シルト質粘土　しまり中　粘性強
　混入物：地山土塊φ５～50㎜30%、炭化物筋状φ３～10㎜１%
5　灰色（５Y4/1）シルト質粘土　しまり中　粘性強
　混入物：地山土塊φ30～50㎜40%、炭化物粒φ２㎜１%未満
6　赤褐色（５ＹＲ4/8）～暗褐色（7.5ＹＲ3/4）焼土　しまり弱　粘性中
7　オリーブ灰色（2.5GY5/1）粘土　しまり中　粘性強
　混入物：炭化物粒φ１㎜１%未満、焼土粒φ１㎜１%未満
8　オリーブ灰色（2.5GY5/1）粘土　しまり中　粘性強
　混入物：焼土粒φ１～５㎜30%
9　黒色（2.5Y2/1）シルト　しまり弱　粘性弱
　混入物：木屑多量
10　黒褐色（7.5Y3/1）粘土　しまり弱　粘性強
　混入物：地山土塊φ10～50㎜10%
11　オリーブ灰色（2.5GY5/1）シルト質粘土　しまり弱　粘性弱
　混入物：木屑多量

0　（S＝1／40）　2m

第76図　ＳＥ211・235井戸跡



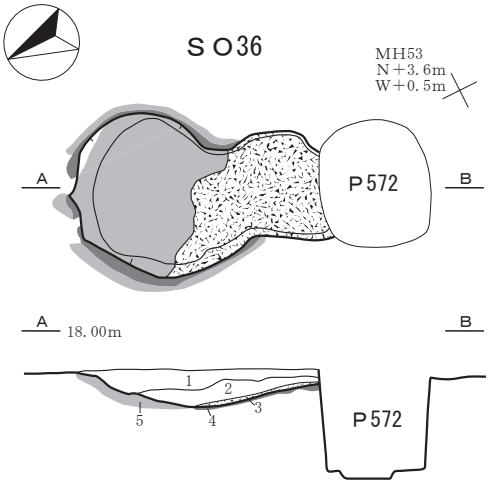
ＳＯ01
1　にぶい赤褐色（５ＹＲ4/3）焼土　しまり中　粘性やや弱
2　褐色（10ＹＲ4/6）シルト質粘土　しまり中　粘性やや弱
　混入物：焼土粒φ１～10㎜５％
3　褐色（10ＹＲ4/6）粘土質シルト　しまり中　粘性やや弱
　混入物：焼土粒φ1以下～５㎜小２％
4　炭化物層　シルト　しまり弱　粘性弱
5　明赤褐色（５ＹＲ5/6）焼土　しまり強　粘性やや弱
6　暗赤褐色（５ＹＲ3/2）焼土　しまり強　粘性やや弱

ＳＯ15
1　褐色～にぶい黄褐色（10ＹＲ4/4～10ＹＲ5/4）シルト質粘土
　しまり中　粘性やや弱
　混入物：炭化物φ１～５㎜２％、焼土塊φ10～30㎜15％
2　炭化物層　シルト　しまりやや弱　粘性やや弱
3　明赤褐色（５ＹＲ5/6）焼土　しまり強　粘性弱
4　暗赤褐色（５ＹＲ3/3）焼土　しまり強　粘性弱

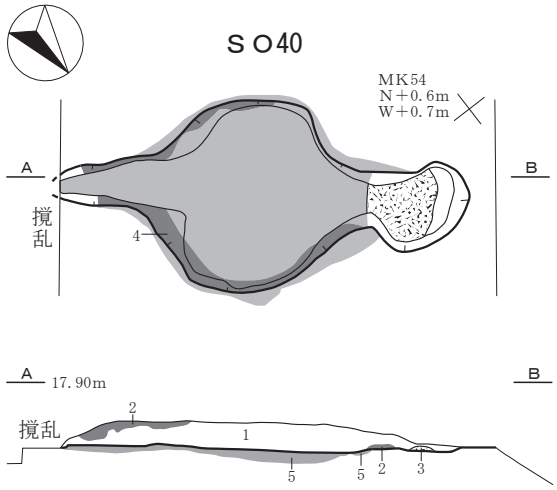
ＳＯ19
1　褐色（10ＹＲ4/4～10ＹＲ4/6）シルト
　しまり中　粘性やや弱
　混入物：炭化物塊φ５㎜１％、焼土塊φ５～20㎜２％
2　暗褐色（10ＹＲ3/4）シルト　しまり中　粘性やや弱
　混入物：焼土塊φ５～10㎜１％
3　炭化物層　シルト　しまりやや弱　粘性やや弱
4　明赤褐色（５ＹＲ5/6）焼土　しまり強　粘性弱
5　暗赤褐色（５ＹＲ3/3）焼土　しまり強　粘性弱

ＳＯ28
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）粘土質シルト　しまり強　粘性中
　混入物：炭化物粒φ１以下～５㎜１％未満、焼土粒φ１～５㎜１％未満
2　にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）粘土質シルト　しまり強　粘性やや弱
　混入物：炭化物塊φ１～50㎜40％、焼土塊φ２～50㎜３％
3　炭化物層　シルト　しまりやや強　粘性弱
　混入物：地山土塊φ１㎜以下～10㎜10％、焼土塊φ２～50㎜15％
4　明赤褐色（５ＹＲ5/6）焼土　しまり強　粘性弱
5　暗赤褐色（５ＹＲ3/3）焼土　しまり強　粘性弱

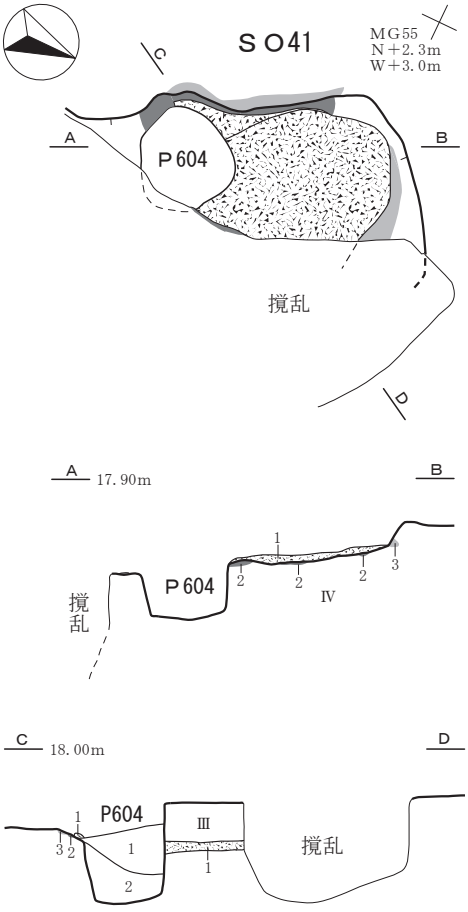
第 77 図　ＳＯ01・15・19・28 カマド状遺構



ＳＯ36
1　暗褐色（10ＹＲ3/3～10ＹＲ3/4）粘土質シルト　しまり中　粘性強
　混入物：地山土塊φ５～10㎜10%、炭化物粒φ１～５㎜１%未満、
　焼土粒φ１～５㎜１%
2　褐色（10ＹＲ4/4）粘土質シルト　しまり中　粘性強
　混入物：地山土塊φ５㎜５%、炭化物粒φ１㎜１%未満、
　焼土粒φ１㎜１%未満・塊φ20～50㎜１%未満
3　炭化物層　シルト　しまり中　粘性やや弱
　混入物：地山土30%、焼土粒φ１～５㎜10%
4　明赤褐色（５ＹＲ5/6）焼土　しまり強　粘性弱
5　暗赤褐色（５ＹＲ3/3）焼土　しまり強　粘性弱

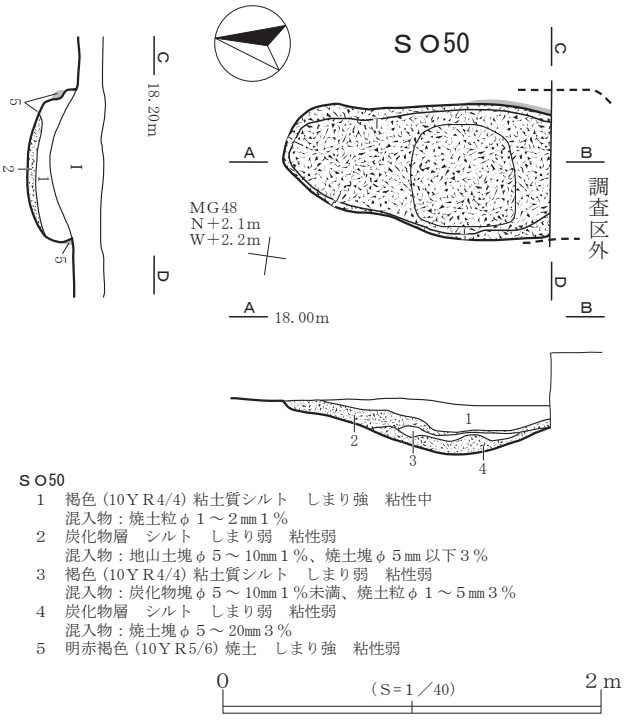


ＳＯ40
1　暗褐色（10ＹＲ3/3）粘土質シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土粒φ３～10㎜３%、炭化物粒φ３～５㎜１%未満、
　焼土粒φ２～５㎜１%未満
2　暗褐色（10ＹＲ3/3）粘土質シルト　しまり強　粘性中
　混入物：焼土塊φ３～20㎜30%
3　暗褐色（10ＹＲ3/3）粘土質シルト　しまり強　粘性中
　混入物：炭化物粒φ１～５㎜30%
4　明赤褐色（５ＹＲ5/6）焼土　しまり強　粘性弱
5　暗褐色（7.5ＹＲ3/4）焼土　しまり強　粘性弱



ＳＯ41
1　暗褐色（10ＹＲ3/3）シルト　しまり弱　粘性弱
　混入物：炭化物筋状φ２㎜５%・粒φ１㎜以下１%未満
2　橙色（7.5ＹＲ6/8）焼土　しまり強　粘性弱
3　褐色（7.5ＹＲ4/4）焼土　しまり強　粘性弱

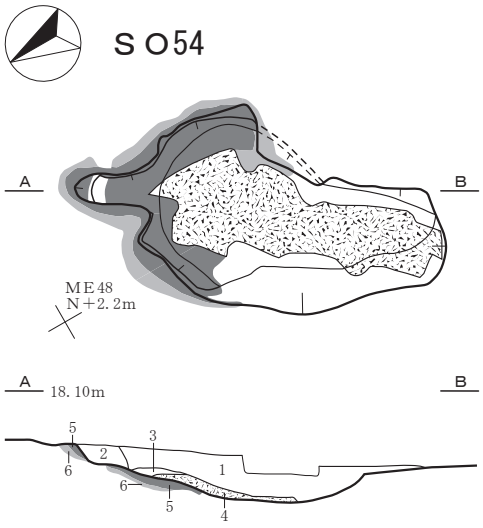
Ｐ604
1　褐色（10ＹＲ4/4）シルト　しまり強　粘性中
　混入物：炭化物粒φ２～５㎜１%未満、焼土塊φ１㎜以下～10cm15%
2　褐色（10ＹＲ4/4）シルト　しまり強　粘性中
　混入物：焼土粒φ１㎜以下１%未満・塊φ２㎜・10㎜１%未満・筋状φ３㎜１%



ＳＯ50
1　褐色（10ＹＲ4/4）粘土質シルト　しまり強　粘性中
　混入物：焼土粒φ１～２㎜１%
2　炭化物層　シルト　しまり弱　粘性弱
　混入物：地山土塊φ５～10㎜１%、焼土塊φ５㎜以下３%
3　褐色（10ＹＲ4/4）粘土質シルト　しまり弱　粘性弱
　混入物：炭化物塊φ５～10㎜１%未満、焼土粒φ１～５㎜３%
4　炭化物層　シルト　しまり弱　粘性弱
　混入物：焼土塊φ５～20㎜３%
5　明赤褐色（10ＹＲ5/6）焼土　しまり強　粘性弱

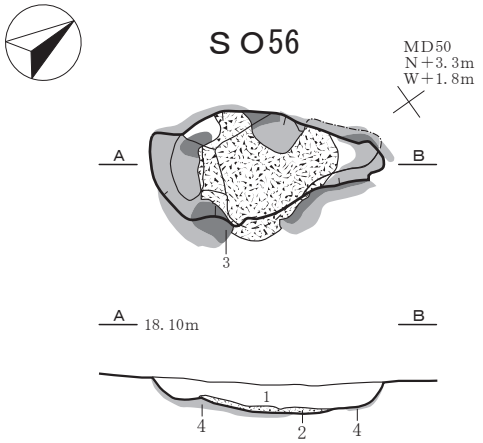
0　（S＝1／40）　2m

第 78 図　ＳＯ36・40・41・50 カマド状遺構



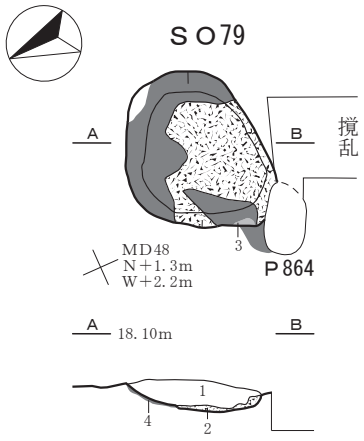
ＳＯ54

1　褐色（10ＹＲ4/6）粘土質シルト　しまり強　粘性中
　混入物：炭化物粒φ１～５㎜１％未満、
　焼土粒φ１㎜１％未満・塊φ10㎜１％未満
2　赤褐色（５ＹＲ4/6）焼土　しまり強　粘性中
　混入物：褐色土30％
3　褐色（10ＹＲ4/6）シルト質粘土　しまりやや弱　粘性中
　混入物：炭化物粒φ２～５㎜１％未満、焼土粒φ１～５㎜15％
4　炭化物層　シルト　しまりやや弱　粘性弱
　混入物：焼土粒φ１㎜１％
5　赤褐色（５ＹＲ4/6）焼土　しまり強　粘性弱
6　暗赤褐色（５ＹＲ3/2）焼土　しまり強　粘性弱



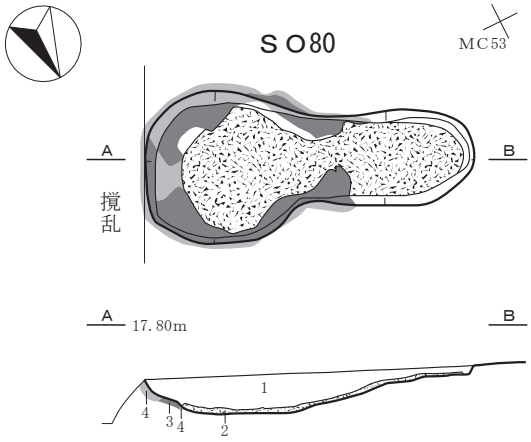
ＳＯ56

1　褐色（10ＹＲ4/4）粘土質シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土粒φ３～10㎜１％未満、
　炭化物粒φ２㎜１％未満、焼土粒φ１～10㎜５％
2　炭化物層　シルト　しまり弱　粘性弱
　混入物：地山土50％、焼土粒φ２㎜１％
3　明赤褐色（５ＹＲ5/6）焼土　しまり強　粘性弱
4　暗赤褐色（５ＹＲ3/2）～暗褐色（10ＹＲ3/2）焼土　しまり強　粘性弱



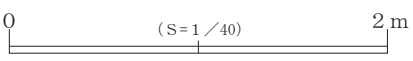
ＳＯ79

1　暗褐色（10ＹＲ3/4）シルト　しまり強　粘性中
　混入物：炭化物粒φ１以下・20㎜１％未満、焼土粒φ１㎜１％未満
2　炭化物層　シルト　しまりやや弱　粘性やや弱
3　明赤褐色（５ＹＲ5/6）焼土　しまり強　粘性弱
4　赤褐色（５ＹＲ4/6）焼土　しまり強　粘性弱

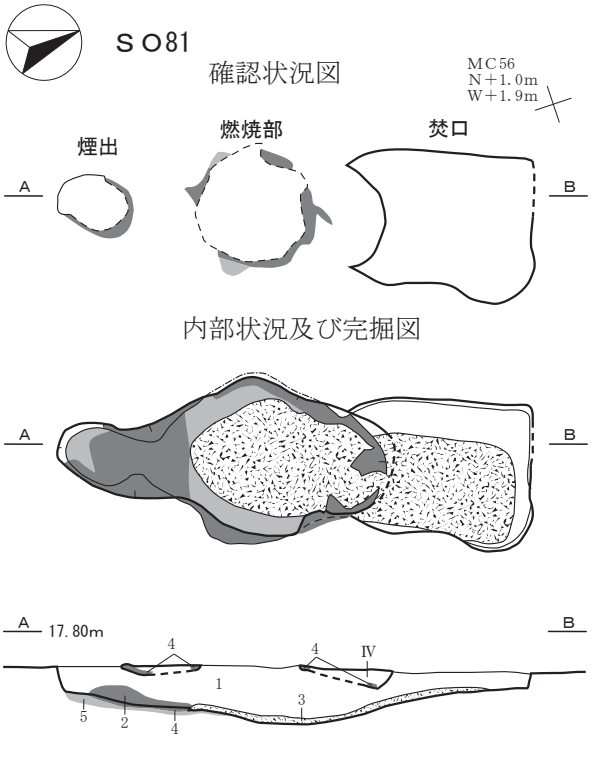


ＳＯ80

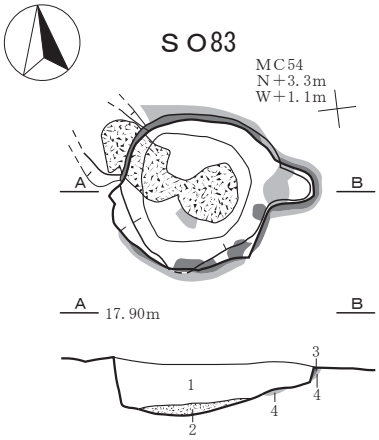
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）～灰黄褐色（10ＹＲ4/2）シルト質粘土
　しまり中　粘性中
　混入物：炭化物粒極小～中２％
2　炭化物層　シルト　しまりやや弱　粘性やや弱
3　明赤褐色（５ＹＲ5/6）焼土　しまり強　粘性弱
4　暗赤褐色（５ＹＲ3/3）焼土　しまりやや強　粘性弱



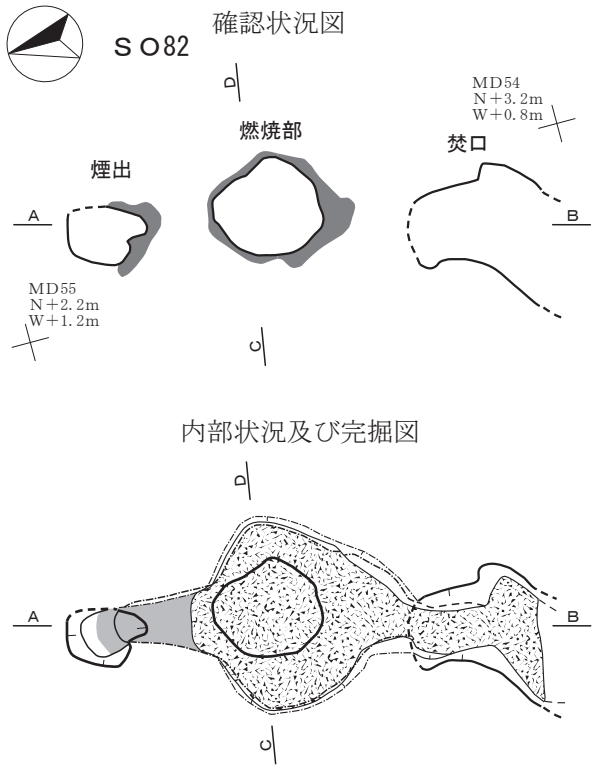
第 79 図　ＳＯ54・56・79・80 カマド状遺構



ＳＯ81
1　褐色（10ＹＲ4/4）～灰黄褐色（10ＹＲ4/2）粘土質シルト　しまり強　粘性中
　混入物：焼土粒φ１～３㎜１％未満・塊φ５～10㎜１％未満
2　明赤褐色（５ＹＲ3/3）焼土　しまり中　粘性弱
3　炭化物層　シルト　しまりやや弱　粘性弱
4　明赤褐色（５ＹＲ5/6）焼土　しまり強　粘性弱
5　暗褐色（7.5ＹＲ3/4）～暗赤褐色（５ＹＲ3/3）焼土



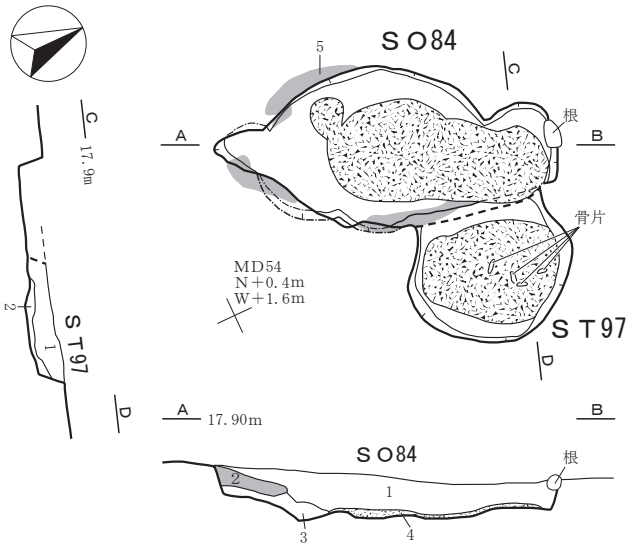
ＳＯ83
1　灰黄褐色（10ＹＲ4/2）粘土質シルト　しまり強　粘性中
　混入物：焼土塊φ10～50㎜３％
2　炭化物層　シルト　しまりやや弱　粘性やや弱
3　明赤褐色（５ＹＲ5/6）焼土　しまり強　粘性やや弱
4　暗赤褐色（５ＹＲ3/2）焼土　しまり強　粘性弱



ＳＯ82
1　褐色（10ＹＲ4/4）粘土質シルト　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入物：焼土粒φ１以下～10㎜３％
2　オリーブ灰色（2.5Ｇ Y5/1）　シルト質粘土　しまり強　粘性中
　混入物：礫φ４㎝１個、炭化物粒φ１以下～５㎜１％、
　焼土粒φ１㎜以下１％
3　灰黄褐色（１０ＹＲ4/2）シルト質粘土　しまり強　粘性中
　混入物：焼土塊φ10～50㎜10％
4　黒褐色（10ＹＲ3/2）シルト質粘土　しまり強　粘性弱
　混入物：焼土粒φ１以下～10㎜粒30％
5　炭化物　シルト質粘土　しまり弱　粘性弱
6　明赤褐色（５ＹＲ5/8）焼土　しまりやや弱　粘性弱
7　暗赤褐色（５ＹＲ3/6）焼土　しまりやや弱　粘性弱

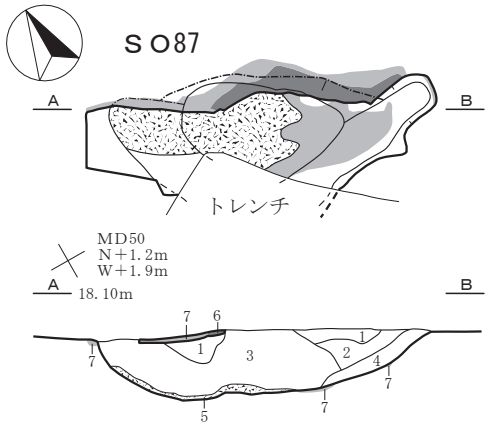
0　（S＝1／40）　2 m

第 80 図　ＳＯ81・82・83 カマド状遺構

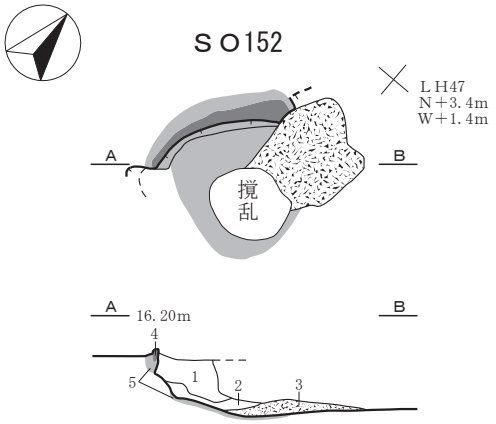


ＳＯ84
1　褐色（10ＹＲ4/4）シルト　しまりやや弱　粘性中
　混入物：炭化物粒φ２～10㎜１％、焼土粒φ２～15㎜１％
2　明赤褐色（５ＹＲ5/8）焼土　しまり中　粘性弱
3　にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）シルト　しまりやや弱　粘性中
　混入物：炭化物粒φ１～10㎜３％、焼土塊φ１～10㎜20％
4　炭化物層　シルト　しまり弱　粘性やや弱
5　明赤褐色（５ＹＲ5/8）焼土　しまり中　粘性弱

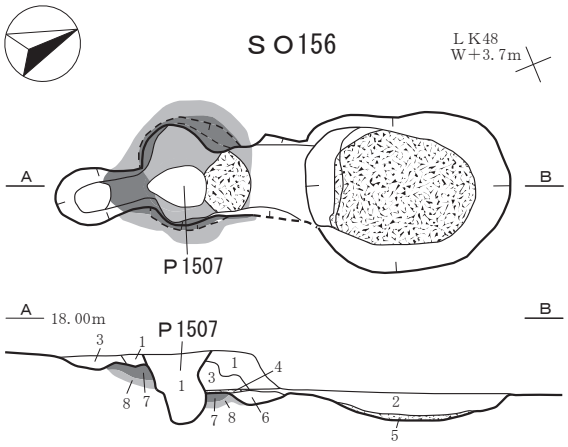
ＳＴ97
1　灰黄褐色（10ＹＲ4/2）シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土粒φ１以下～３㎜５％、炭化物粒φ１㎜以下１％未満
2　灰黄褐色（10ＹＲ4/3）シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊φ１～５㎜３％、炭化物粒φ１～３㎜15％



ＳＯ87
1　暗褐色（10ＹＲ3/3）粘土質シルト　しまり強　粘性中
　混入物：焼土塊φ10～50㎜30％
2　暗褐色（10ＹＲ3/3）粘土質シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土粒φ１～２㎜３％、焼土粒φ１以下～10㎜１％
3　暗褐色（10ＹＲ3/3）シルト質粘土　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊φ１以下～30㎜20％、炭化物粒φ１㎜１％未満、
　焼土粒φ５～10㎜１％未満
4　暗褐色（10ＹＲ3/3）シルト質粘土　しまり強　粘性中
　混入物：焼土塊φ１～10cm40％
5　炭化物層　シルト　しまりやや弱　粘性やや弱
6　明赤褐色（５ＹＲ5/6）焼土　しまり強　粘性弱
7　暗赤褐色（５ＹＲ3/3）焼土　しまり強　粘性弱

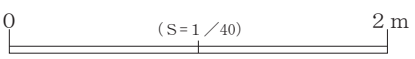


ＳＯ152
1　暗褐色（10ＹＲ3/4）シルト　しまりやや強　粘性やや弱
　混入物：焼土粒φ１㎜以下５％
2　暗褐色（7.5ＹＲ3/3）～黒褐色（7.5ＹＲ3/2）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：焼土粒・塊φ１以下～10㎜10％、
3　炭化物層　シルト　しまり中　粘性中
　混入物：焼土塊φ５～30㎜30％
4　明赤褐色（５ＹＲ5/6）焼土　しまり強　粘性弱
5　暗赤褐色（５ＹＲ3/3）焼土　しまり強　粘性弱

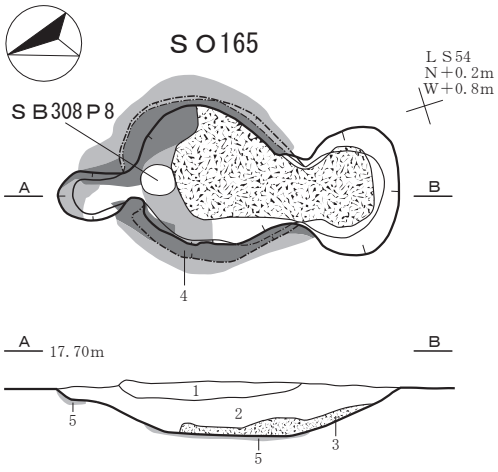


ＳＯ156
1　灰オリーブ色（５Ｙ4/2）シルト質粘土　しまりやや強　粘性中
　混入物：炭化物粒φ１～２㎜１％、焼土粒φ３～５㎜２％
2　オリーブ褐色（2.5Ｙ4/4）シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊φ10～50㎜20％、炭化物塊φ５～20㎜５％、
　焼土粒φ１以下～２㎜１％
3　暗オリーブ色（５Ｙ4/3）粘土質シルト　しまり中　粘性中
　混入物：炭化物粒φ１以下～２㎜２％、焼土塊φ10～50㎜30％
4　炭化物層　シルト　しまりやや弱　粘性やや弱
5　炭化物層　シルト　しまりやや弱　粘性やや弱
4　暗オリーブ色（５Ｙ4/3）粘土質シルト　しまり中　粘性中
6　混入物：炭化物粒φ１以下～２㎜２％、焼土塊φ10㎜５％
7　明赤褐色（５ＹＲ5/6）焼土　しまり強　粘性弱
8　暗赤褐色（５ＹＲ3/3）焼土　しまり強　粘性弱

Ｐ1507
1　灰オリーブ色（５Ｙ4/2）シルト質粘土　しまりやや強　粘性中
　混入物：炭化物粒φ１～２㎜１％、焼土塊φ５～８㎜１％

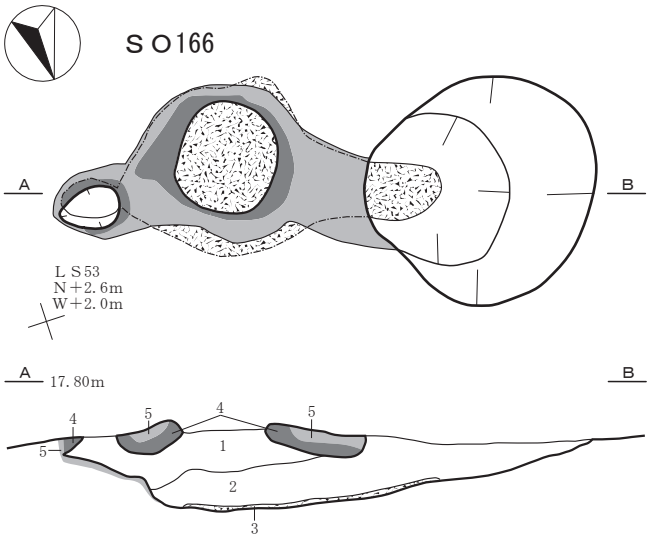


第 81 図　ＳＯ84・87・152・156 カマド状遺構、ＳＴ97 火葬墓



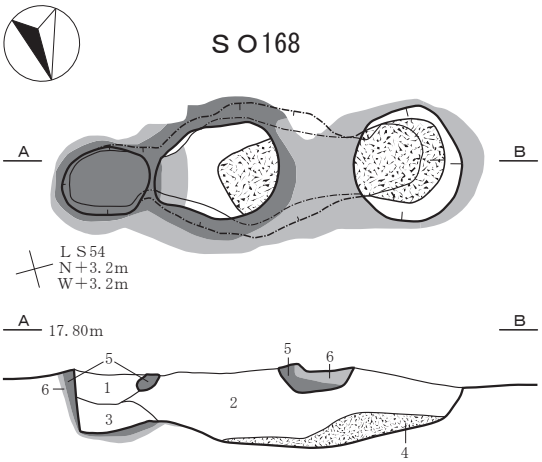
ＳＯ165

1　灰オリーブ色（５Ｙ4/2）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：炭化物粒φ１㎜以下１％、焼土塊φ５～10㎜15％
2　灰オリーブ色（５Ｙ4/2）シルト質粘土　しまり中　粘性中
　混入物：炭化物粒φ１～５㎜１％、焼土粒φ５㎜２％
3　炭化物層　シルト　しまりやや弱　粘性やや弱
4　明赤褐色（５ＹＲ5/6）焼土　しまり強　粘性弱
5　暗赤褐色（５ＹＲ3/3）焼土　しまりやや強　粘性やや弱



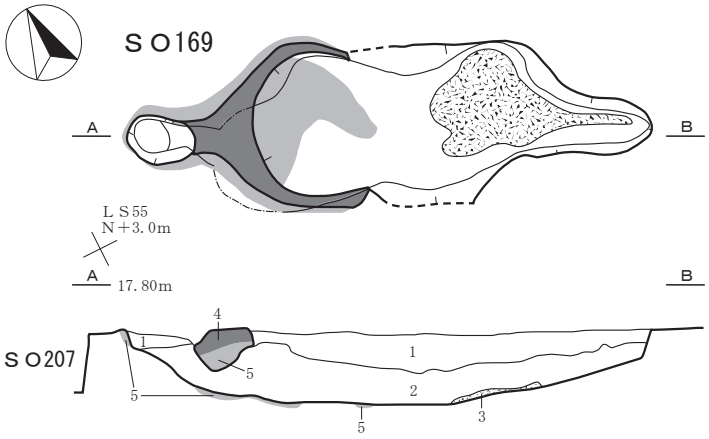
ＳＯ166

1　オリーブ褐色（2.5Y4/4）シルト　しまりやや強　粘性やや弱
　混入物：炭化物粒φ１㎜以下１％、焼土粒φ１㎜以下１％
2　暗褐色（10Y3/4）シルト質粘土　しまりやや強　粘性中
　混入物：炭化物粒φ１㎜以下１％、焼土粒φ１㎜以下１％
3　炭化物層　シルト　しまりやや弱　粘性やや弱
4　明赤褐色（５ＹＲ5/6）焼土　しまり強　粘性弱
5　暗赤褐色（５ＹＲ3/3）焼土　しまりやや強　粘性やや弱



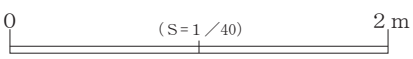
ＳＯ168

1　オリーブ褐色（2.5Y4/4）粘土質シルト　しまり強　粘性弱
　混入物：地山土粒φ１～８㎜５％・塊φ10～30㎜10％
2　灰オリーブ色（５Ｙ4/2）粘土質シルト　しまり強　粘性弱
　混入物：地山土塊φ５～８㎜１％
3　明赤褐色（５ＹＲ5/6）焼土　しまり強　粘性弱
4　炭化物層　シルト　しまりやや弱　粘性やや弱
5　明赤褐色（５ＹＲ5/6）焼土　しまり強　粘性弱
6　暗赤褐色（５ＹＲ3/3）焼土　しまりやや強　粘性やや弱

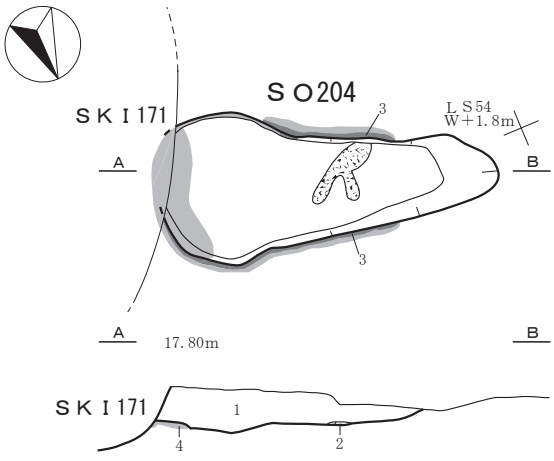


ＳＯ169

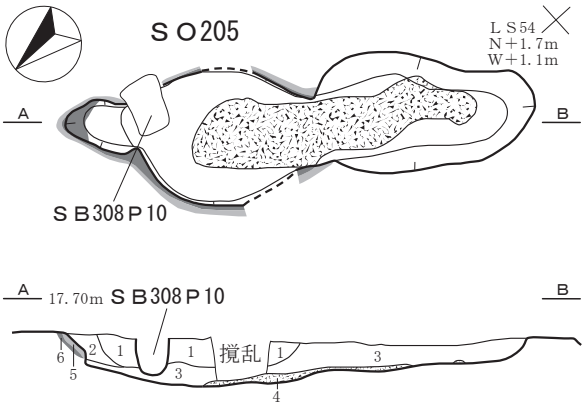
1　灰オリーブ色（５Ｙ4/2）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：炭化物粒φ１㎜以下１％、焼土塊φ５～10㎜15％
2　オリーブ黒色（５Ｙ3/1）シルト質粘土　しまり中　粘性中
　混入物：炭化物粒φ１～５㎜１％、焼土塊φ５㎜２％
3　炭化物層　シルト　しまりやや弱　粘性やや弱
4　明赤褐色（５ＹＲ5/6）焼土　しまり強　粘性弱
5　暗赤褐色（５ＹＲ3/3）焼土　しまりやや強　粘性やや弱



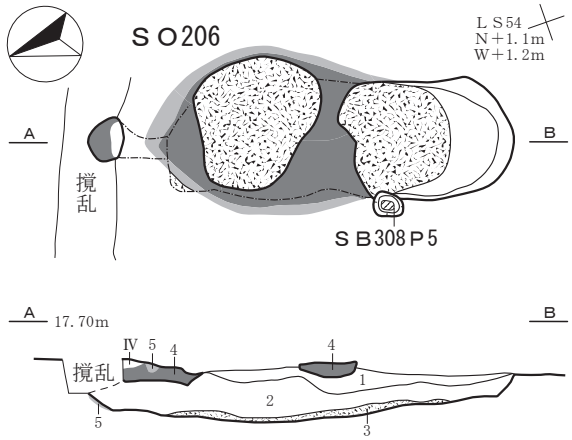
第 82 図　ＳＯ165・166・168・169 カマド状遺構

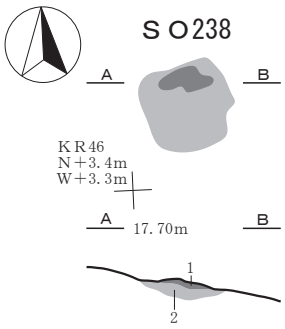


ＳＯ204
1　暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）シルト質粘土　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊φ１～８㎜30%、炭化物粒φ１㎜１%未満、
　焼土粒φ１～３㎜１%未満
2　炭化物層　シルト　しまり弱　粘性中
3　明赤褐色（５ＹＲ5/6）焼土　しまり強　粘性弱
4　暗赤褐色（５ＹＲ3/3）焼土　しまり強　粘性弱



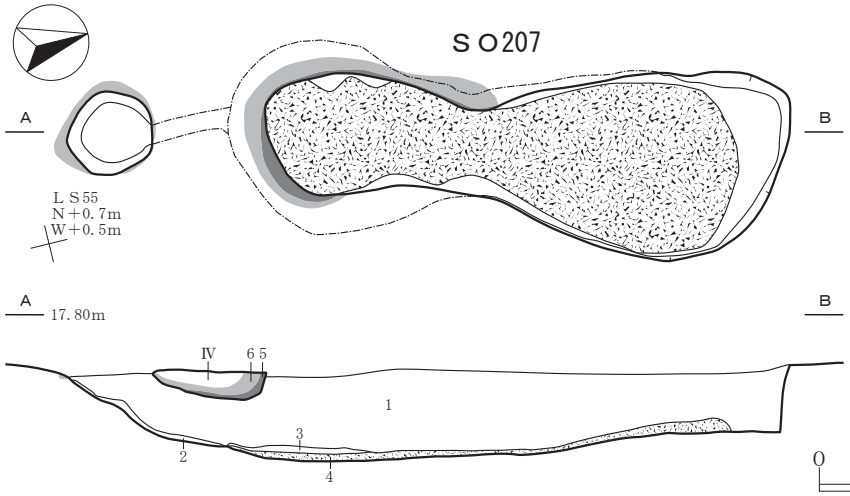
ＳＯ205
1　灰オリーブ色（５Ｙ4/2）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：炭化物粒φ１㎜以下１%未満、焼土塊φ10㎜以下15%
2　にぶい褐色（7.5ＹＲ5/4）シルト　しまり強　粘性弱
　混入物：地山土粒φ５～10㎜10%
3　灰オリーブ色（５Ｙ4/2）粘土質シルト　しまり中　粘性中
　混入物：炭化物粒φ５㎜以下１%未満、焼土粒φ５㎜以下２%
4　炭化物層　シルト　しまり弱　粘性弱
　混入物：にぶい褐色土30%
5　明赤褐色（５ＹＲ5/6）焼土　しまり強　粘性弱
6　暗赤褐色（５ＹＲ3/3）焼土　しまり強　粘性弱





ＳＯ238
1　明褐色（５ＹＲ5/8）焼土
　しまり中　粘性中
2　暗褐色（7.5ＹＲ3/4）焼土
　しまり強　粘性中

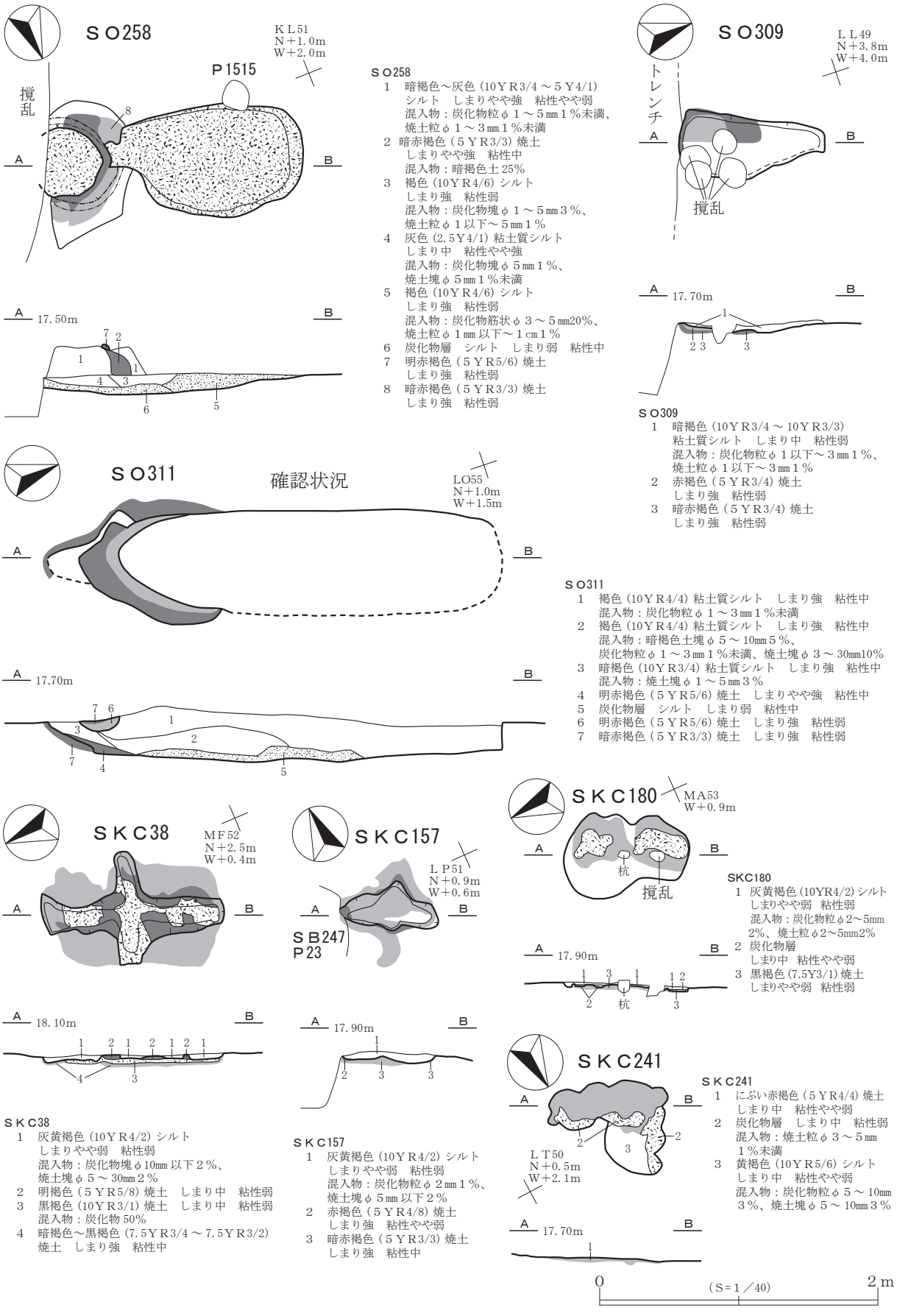
ＳＯ206
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土粒φ１㎜１%、炭化物粒φ１㎜１%
2　青灰色（５ＢＧ6/1）シルト　しまりやや弱　粘性中　混入物：焼土粒φ１～５㎜５%
3　炭化物層　シルト　しまり中　粘性中　混入物：暗褐色土塊φ５～10㎜15%、焼土粒φ５～10㎜10%
4　明赤褐色（５ＹＲ5/6）焼土　しまり強　粘性弱
5　暗赤褐色（５ＹＲ3/3）　焼土　しまり強　粘性弱



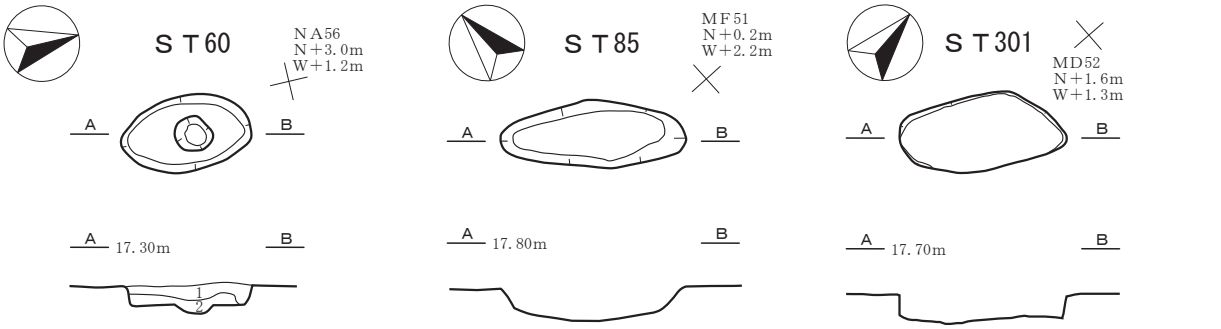
ＳＯ207
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ5/3）シルト
　しまり中　粘性中
　混入物：焼土粒φ10～20㎜　15%
2　灰黄褐色（10ＹＲ5/2）粘土質シルト
　しまり中　粘性中
　混入物：地山土粒φ５～10㎜10%
3　褐灰色（10ＹＲ6/1）粘土質シルト
　しまりやや弱　粘性中
　混入物：焼土粒φ10～20㎜10%
4　炭化物層　シルト
　しまりやや弱　粘性中
　混入物：地山土粒φ５～10㎜10%
5　明赤褐色（５ＹＲ5/6）焼土
　しまり強　粘性弱
6　暗赤褐色（５ＹＲ3/3）焼土
　しまり強　粘性弱

0　（S＝1／40）　2m

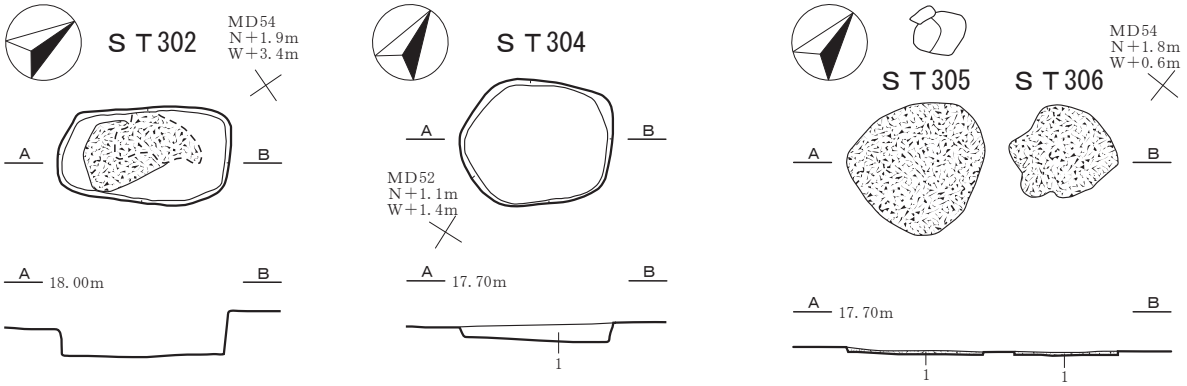
第 83 図　ＳＯ204・205・206・207・238 カマド状遺構



第 84 図　ＳＯ258・309・311 カマド状遺構、ＳＫＣ38・157・180・241 火葬施設



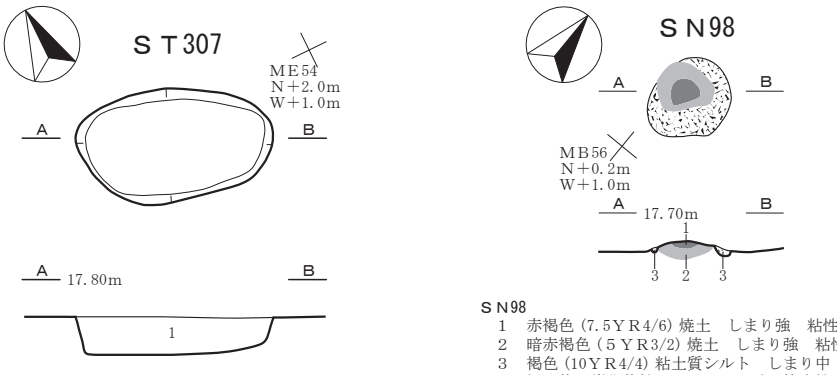
ＳＴ60
1　暗褐色（10ＹＲ3/3）シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土粒φ２～10㎜10％
2　黄褐色（10ＹＲ5/6）粘土質シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土粒φ５～10㎜５％



ＳＴ304
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）シルト　しまり中　粘性強
　混入物：炭化物粒φ１㎜以下１％未満、
　焼土粒φ１㎜以下１％未満

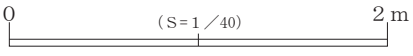
ＳＴ305
1　炭化物層　シルト
　しまりやや弱
　粘性やや弱

ＳＴ306
1　炭化物層　シルト
　しまりやや弱
　粘性やや弱

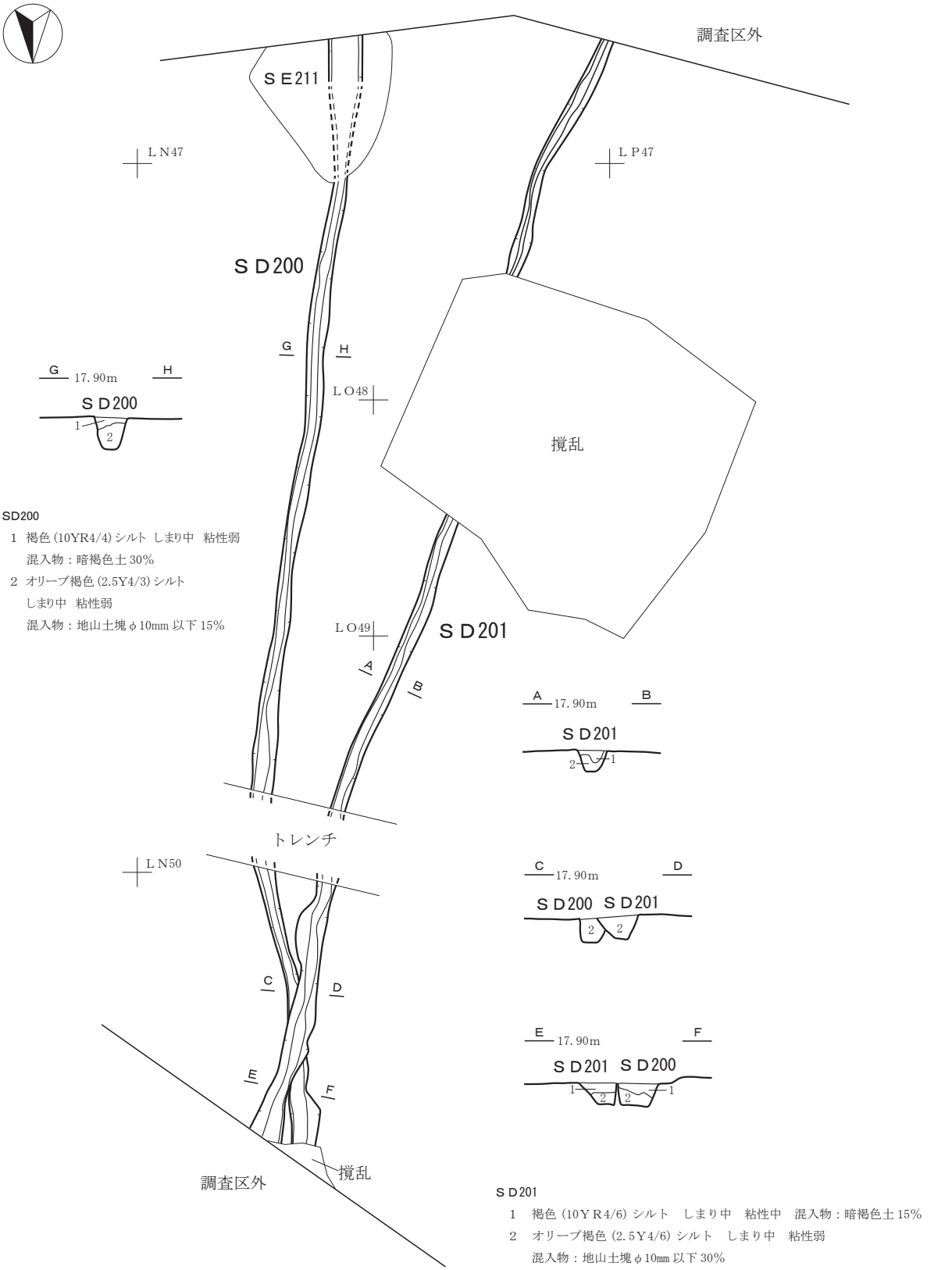


ＳＮ98
1　赤褐色（7.5ＹＲ4/6）焼土　しまり強　粘性やや弱
2　暗赤褐色（５ＹＲ3/2）焼土　しまり強　粘性やや弱
3　褐色（10ＹＲ4/4）粘土質シルト　しまり中　粘性中
　混入物：炭化物粒φ１～２㎜３％、焼土粒φ１以下～２㎜１％

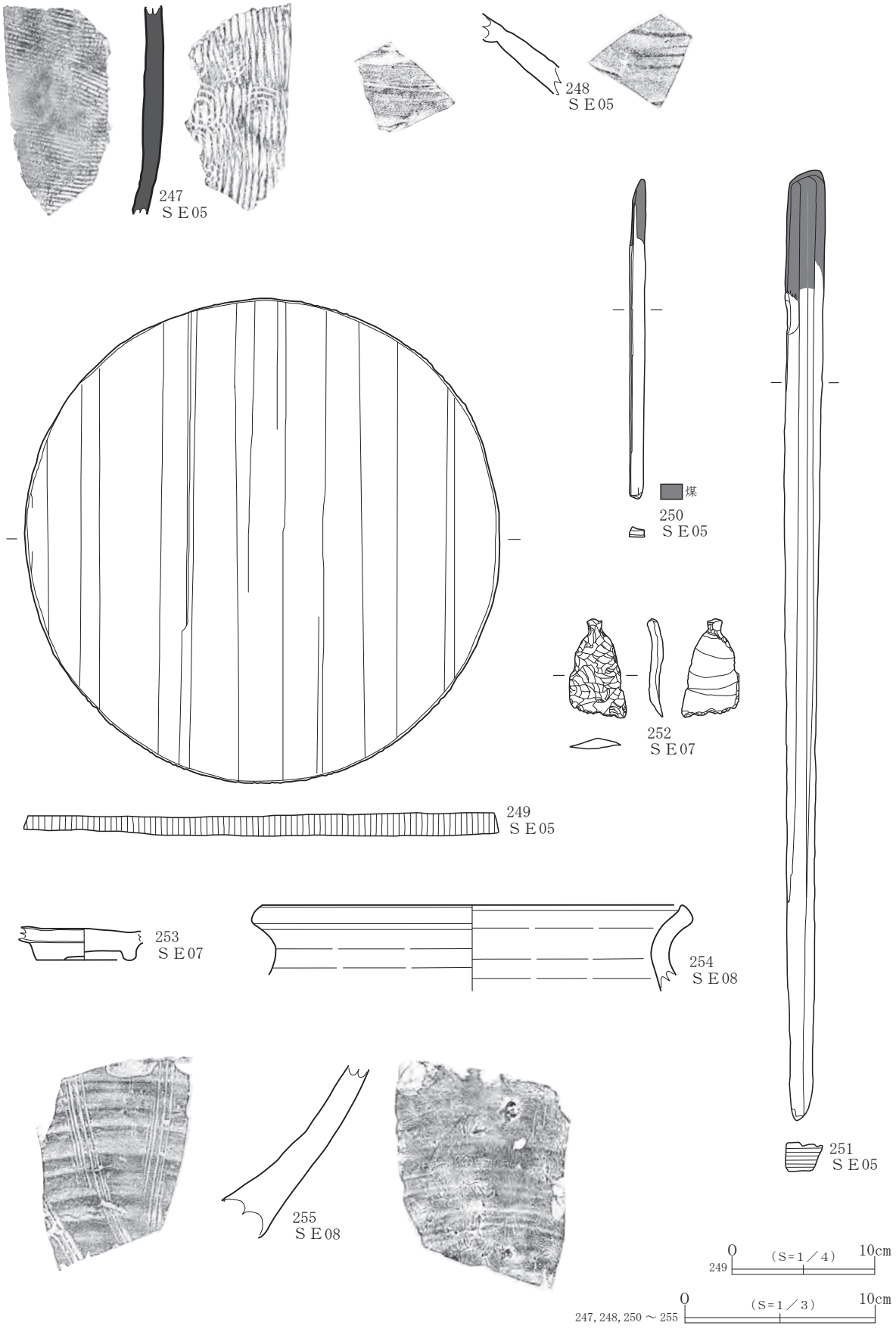
ＳＴ307
1　暗褐色（10ＹＲ3/4）シルト　しまり強　粘性やや弱
　混入物：焼土塊φ３～50㎜１％未満



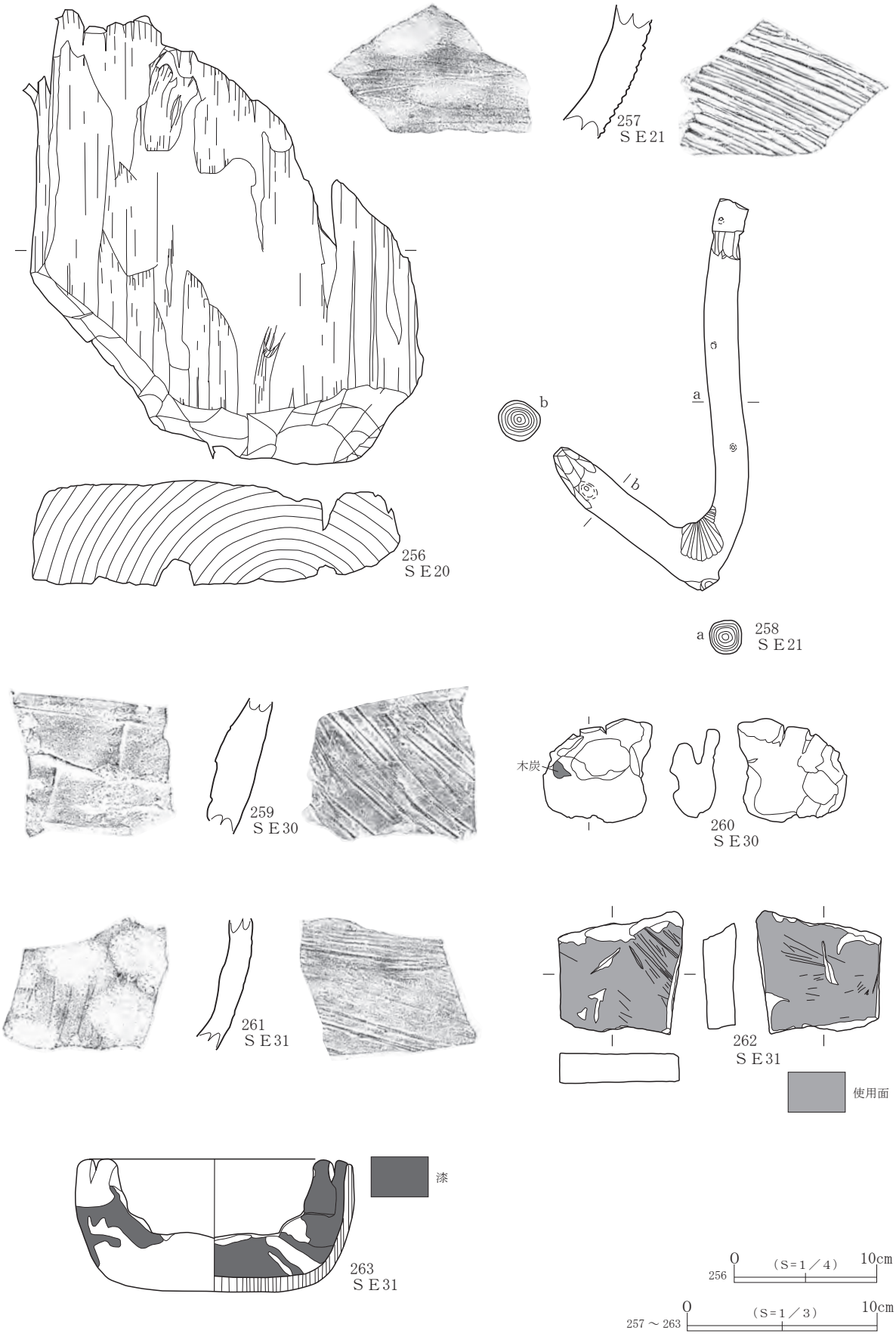
第 85 図　ＳＴ60・85・301・302・304・305・306・307 火葬墓、ＳＮ98 焼土遺構



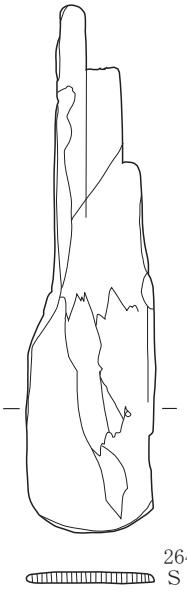
第 86 図　ＳＤ200・201 溝跡

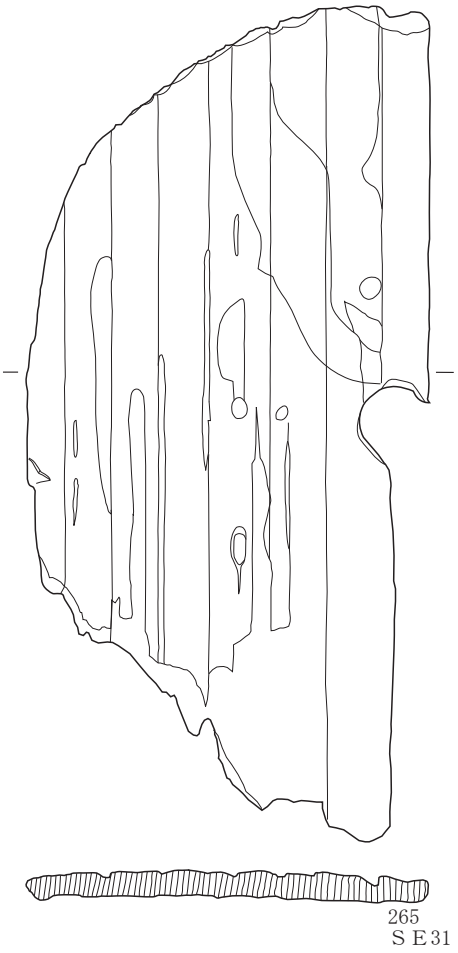


第 87 図　中世遺構内出土遺物（１）

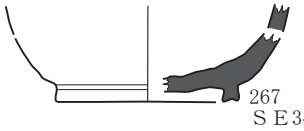


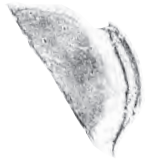
第 88 図　中世遺構内出土遺物（２）


264
ＳＥ31

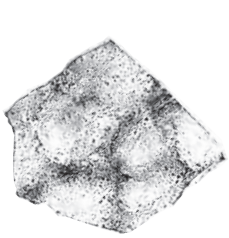

265
ＳＥ31

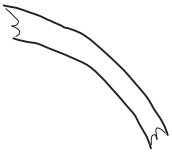
266
ＳＥ31

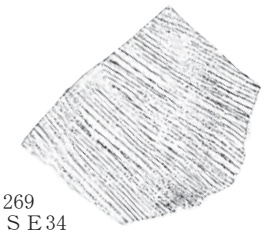

267
ＳＥ34

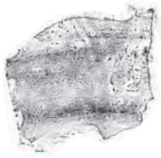


268
ＳＥ34

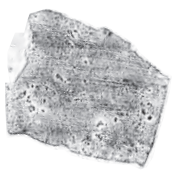


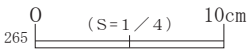


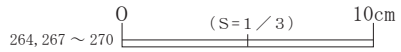

269
ＳＥ34

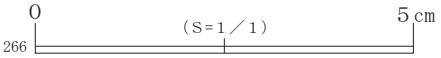


270
ＳＥ34

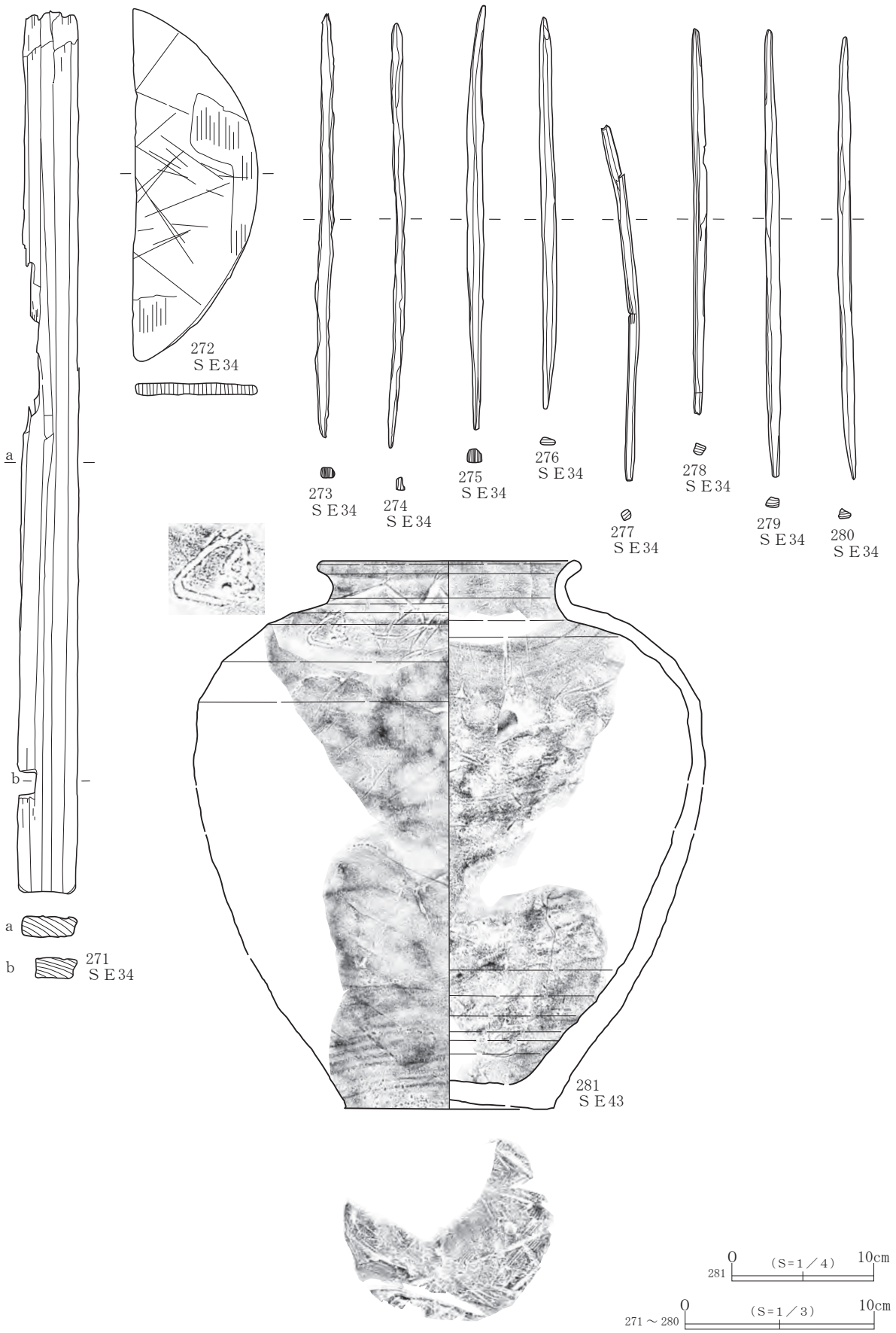




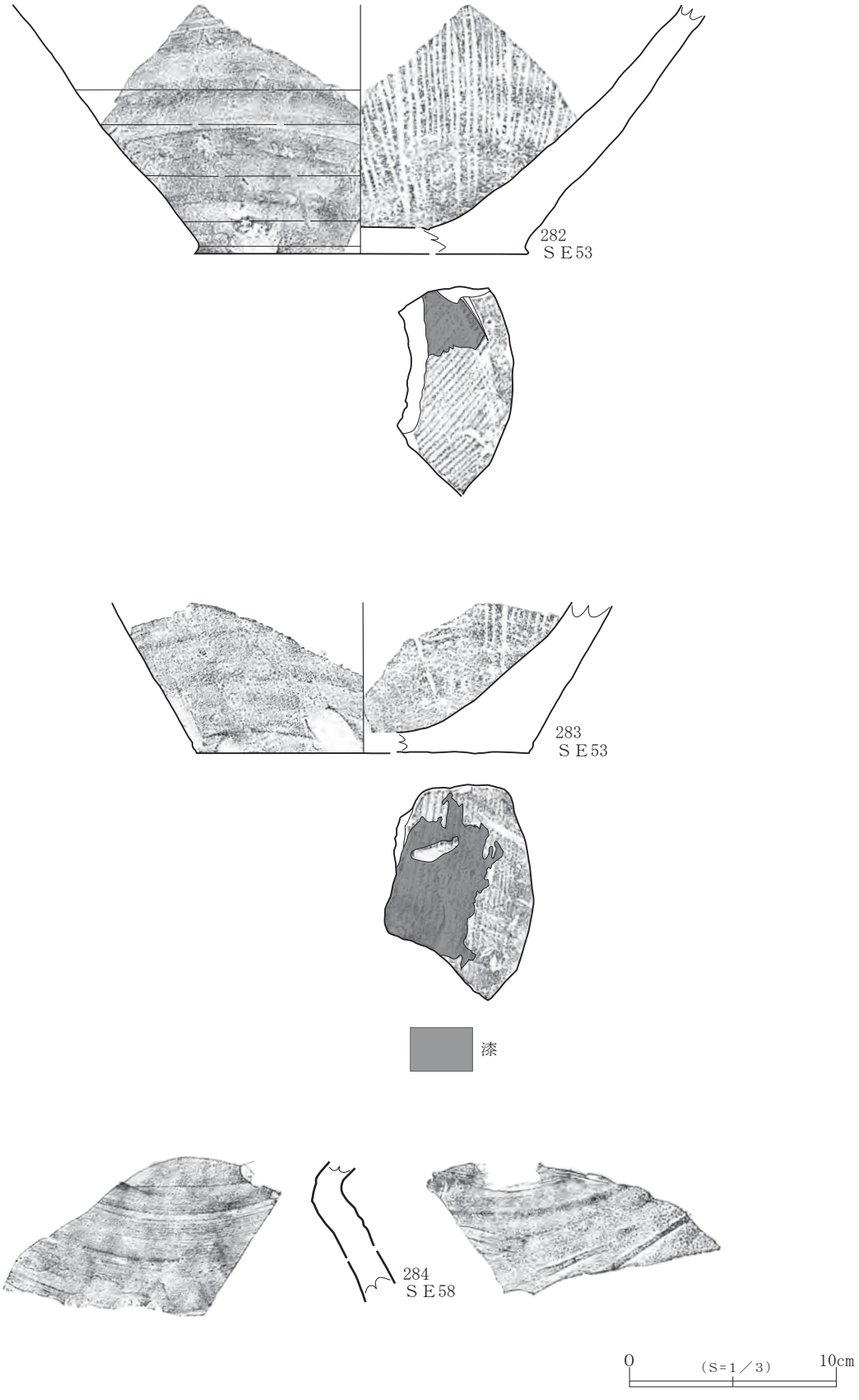




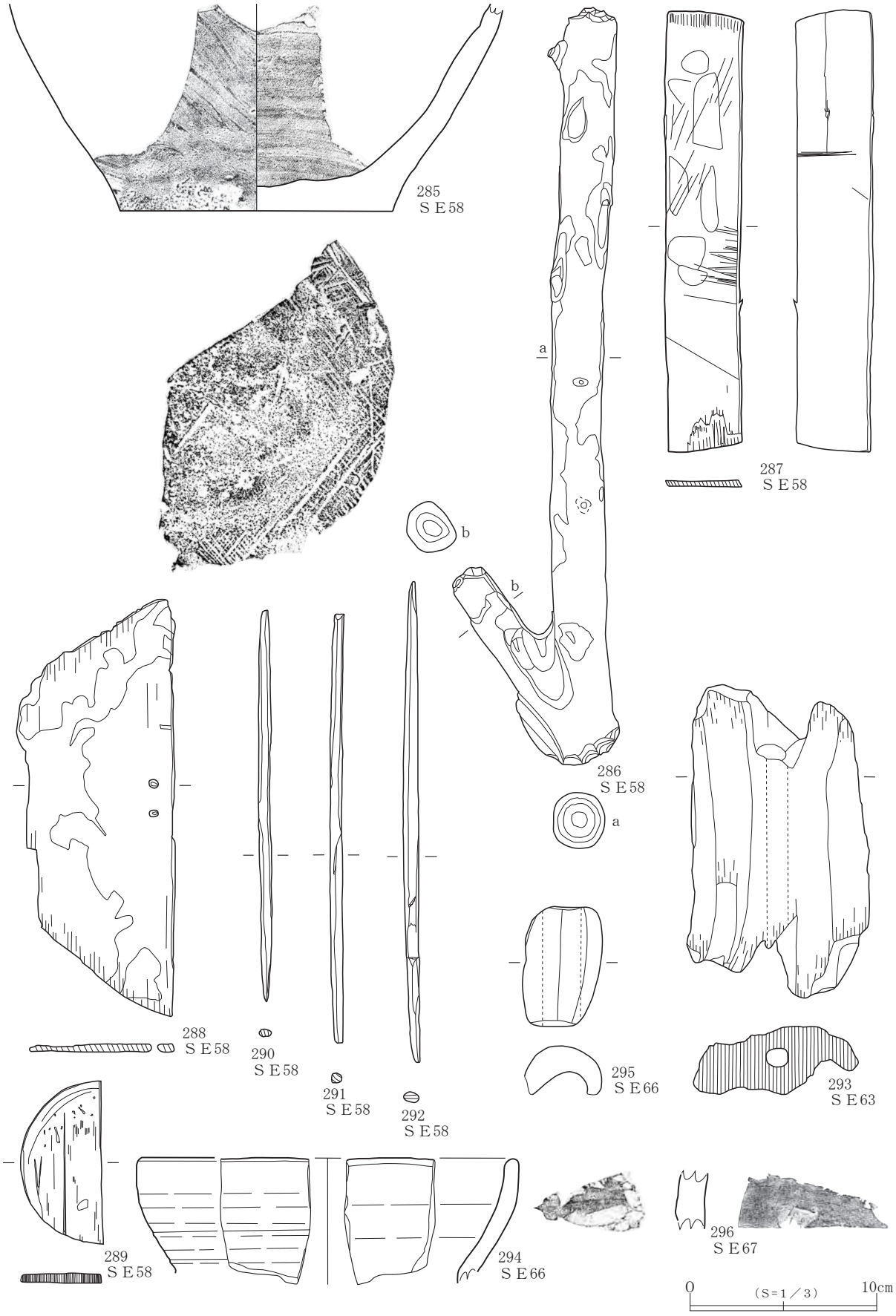
第 89 図　中世遺構内出土遺物（３）



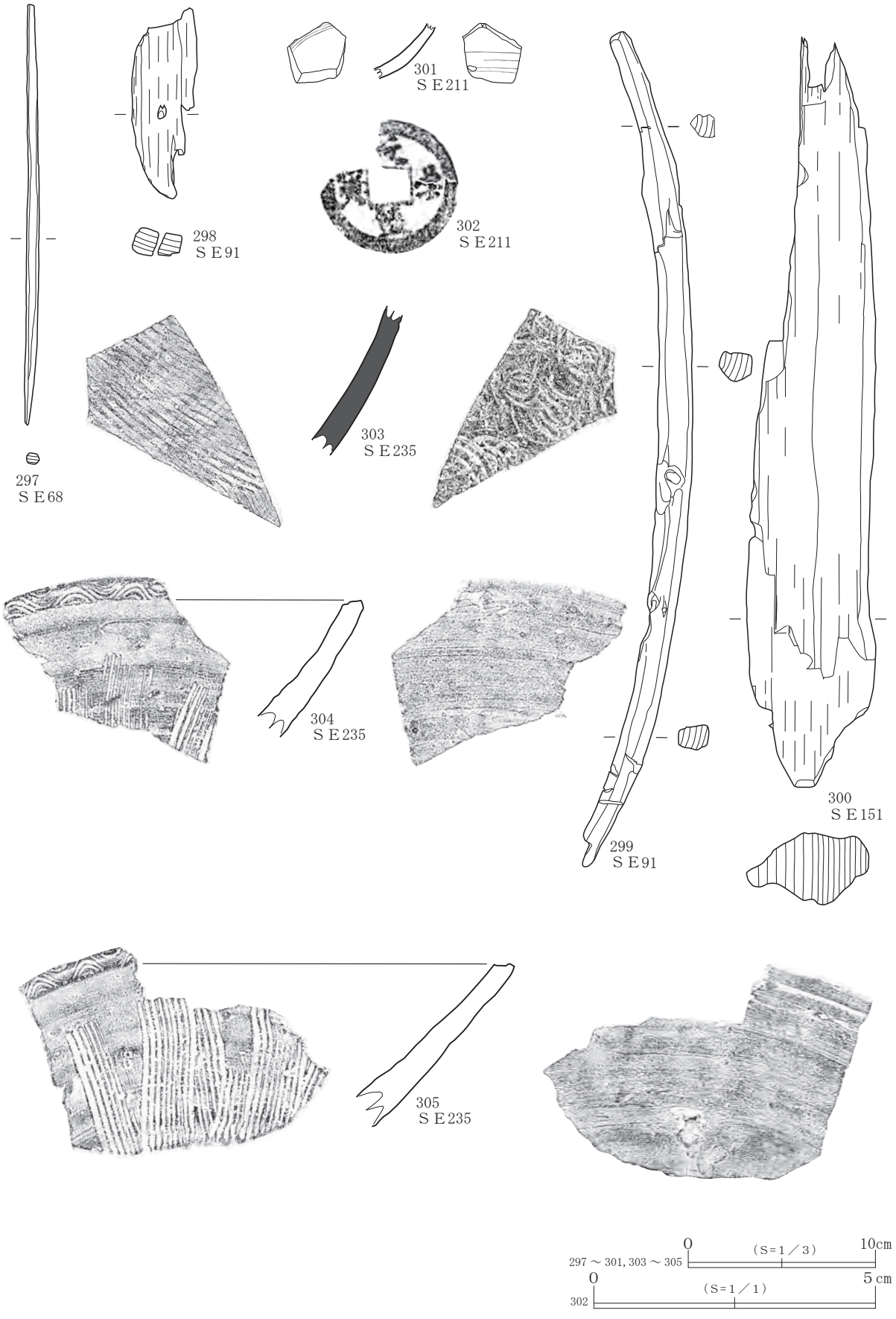
第 90 図　中世遺構内出土遺物（４）



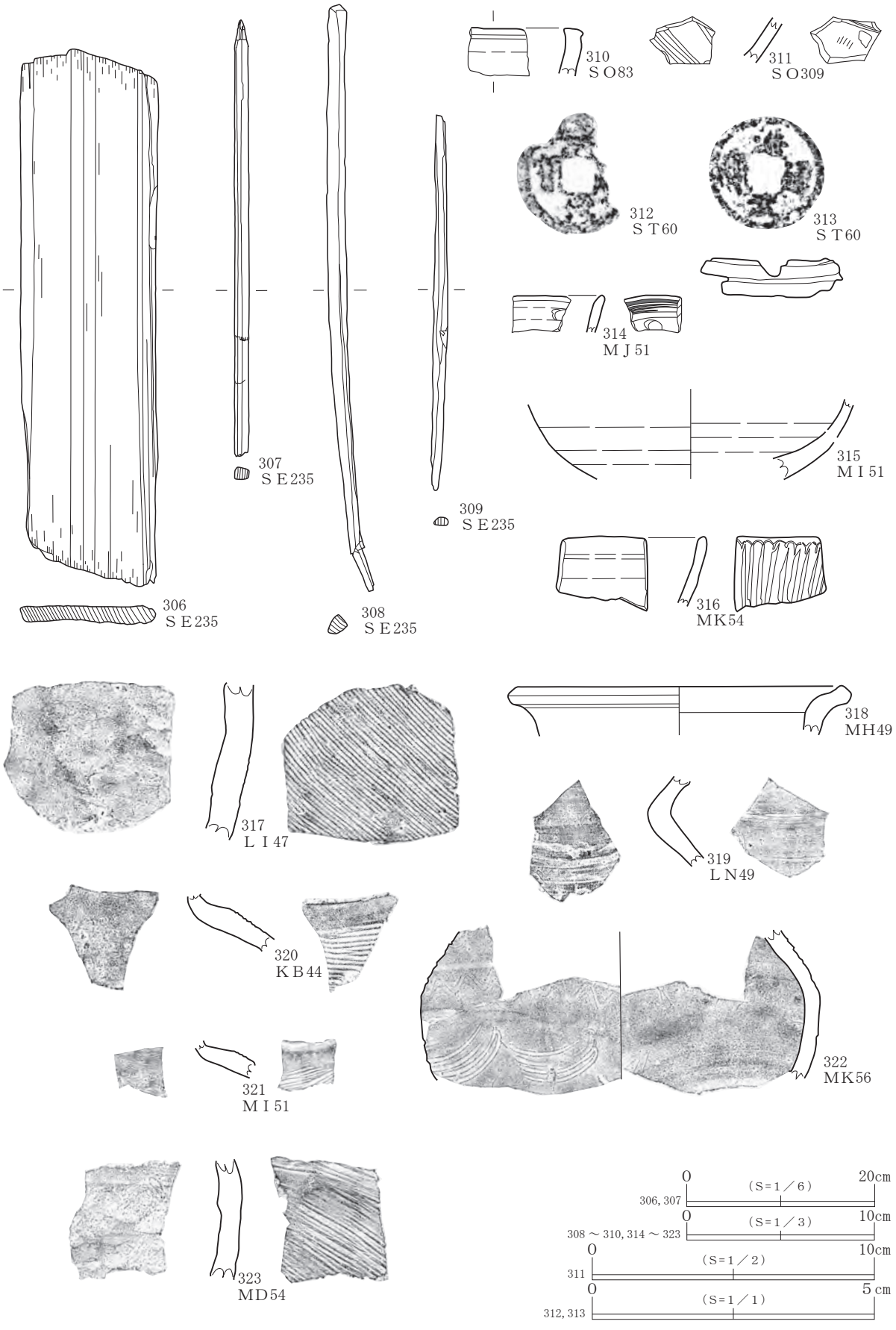
第 91 図　中世遺構内出土遺物（５）



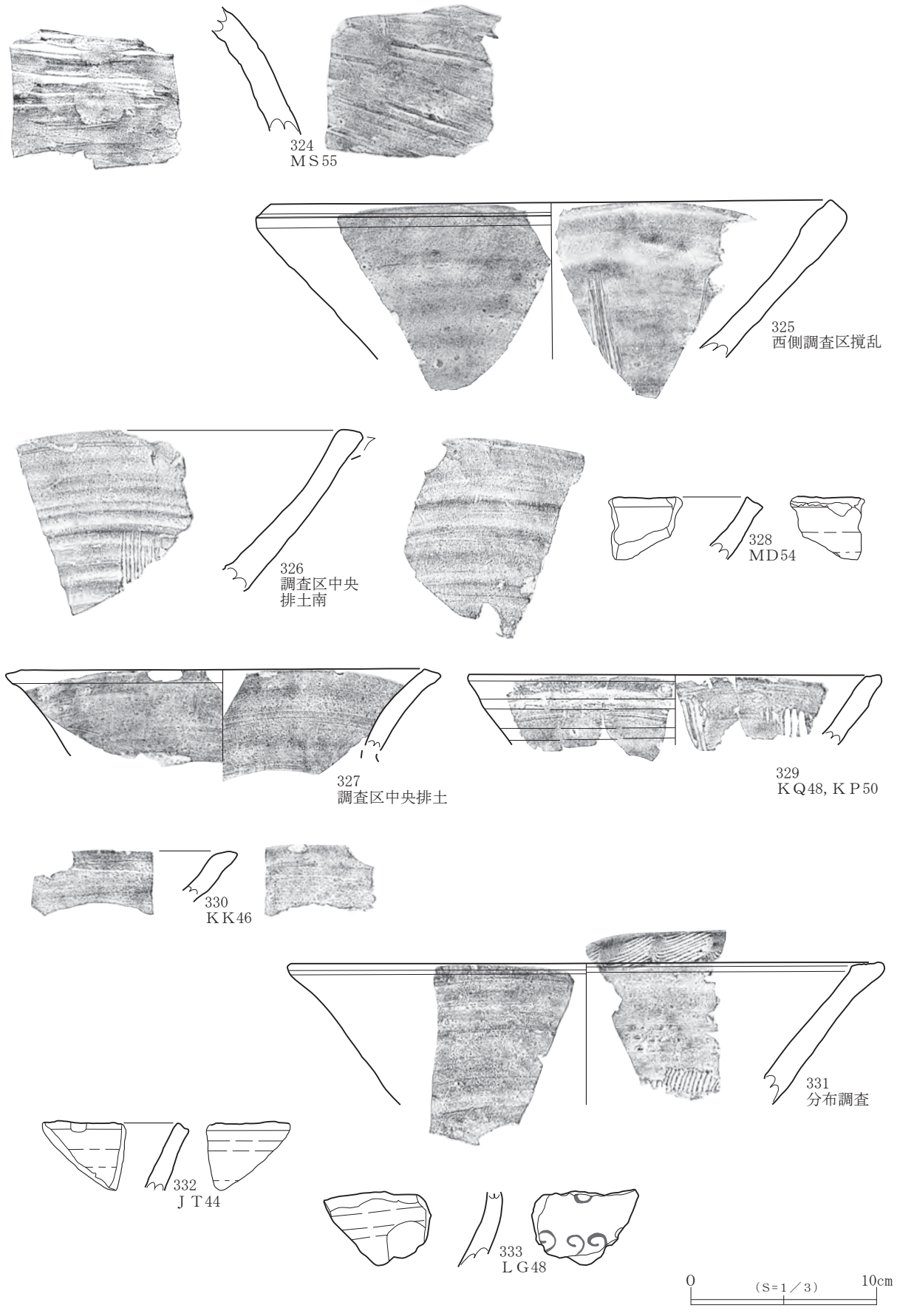
第 92 図　中世遺構内出土遺物（６）



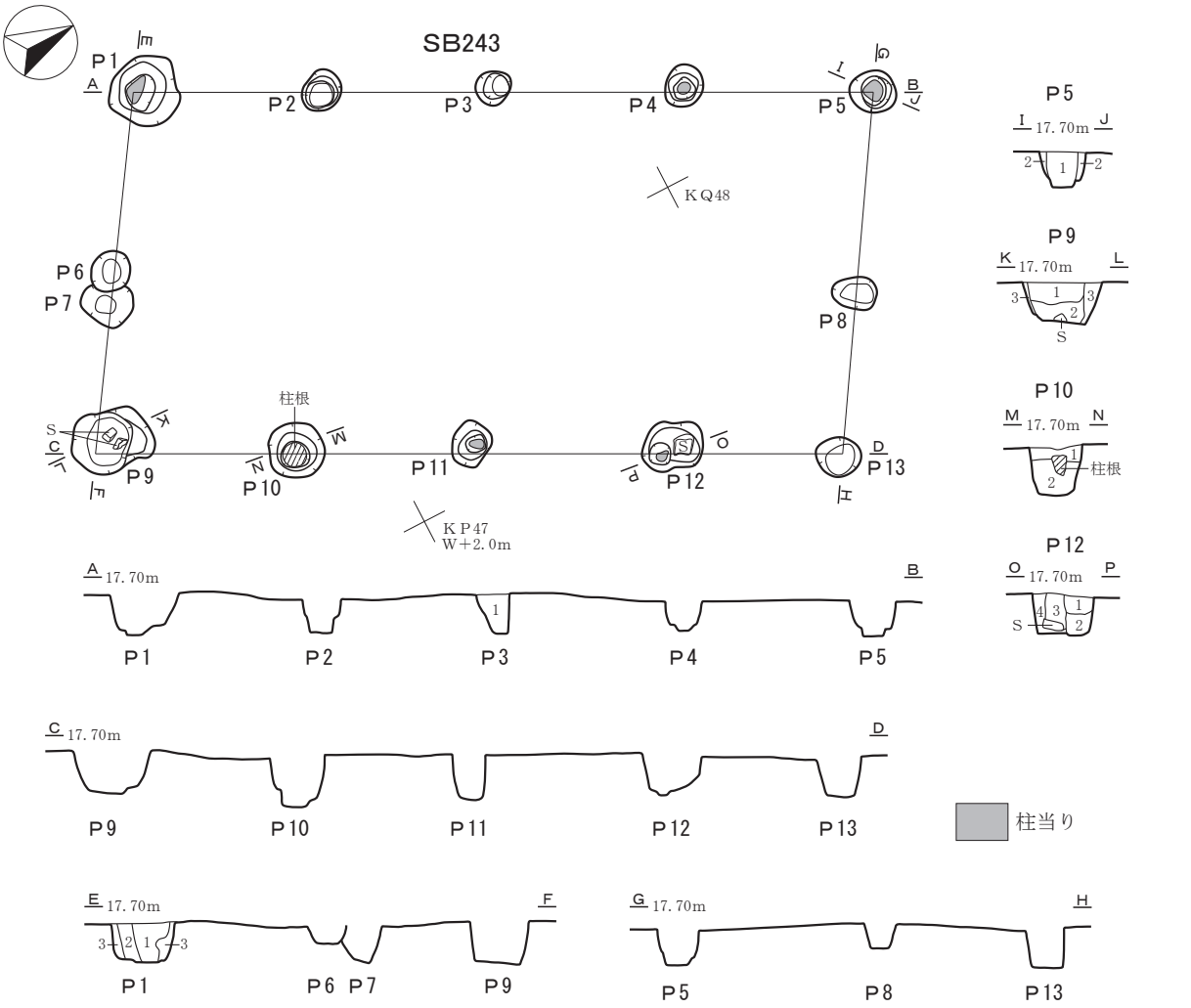
第 93 図　中世遺構内出土遺物（７）



第 94 図　中世遺構内出土遺物（８）、中世遺構外出土遺物（１）



第 95 図　中世遺構外出土遺物（２）



SB243
- P１　1　灰色（10Y5/1）粘土　しまり中　粘性　混入物：地山土塊φ30㎜以下15%
- 2　灰色（7.5Y4/1）粘土　しまり中　粘性強　混入物：地山土塊φ30㎜以下20%
- 3　黄褐色（2.5Y5/4）粘土　しまり中　粘性強　混入物：グライ化地山土塊φ30㎜以下30%
- P３　1　灰オリーブ（５Y4/2）シルト質粘土　しまり中　粘性中　混入物：地山土塊φ50㎜30%
- P５　1　オリーブ黒（7.5Y3/2）粘土　しまり中　粘性強　混入物：地山土塊φ10㎜以下10%
- 2　暗オリーブ灰色（2.5Y4/1）シルト質粘土　しまり急　粘性強　混入物：地山土粒φ５㎜以下10%
- P９　1　灰オリーブ（５Y4/2）粘土　しまり中　粘性中　混入物：地山土塊φ50㎜以下30%
- 2　灰（2.5Y4/1）粘土　しまり中　粘性強　混入物：地山土塊φ50㎜以下20%、植物腐植土多量
- 3　灰オリーブ（５Y4/2）粘土　しまり強　粘性強　混入物：地山土粒φ５㎜以下10%
- P10　1　灰オリーブ（５Y4/2）シルト質粘土　しまり中　粘性中　混入物：地山土塊φ50㎜以下10%
- 2　灰色（10Y4/1）粘土　しまり強　粘性強　混入物：地山土粒φ５㎜以下20%
- P12　1　灰色（10Y4/1）粘土　しまり中　粘性中　混入物：地山土塊φ50㎜以下30%
- 2　オリーブ黒色（7.5Y3/1）シルト　しまり弱　粘性弱
- 3　オリーブ黒色（7.5Y3/2）シルト　しまり弱　粘性弱
- 4　灰色（10Y4/1）粘土　しまり中　粘性中 混入物：地山土塊φ５㎜以下10%

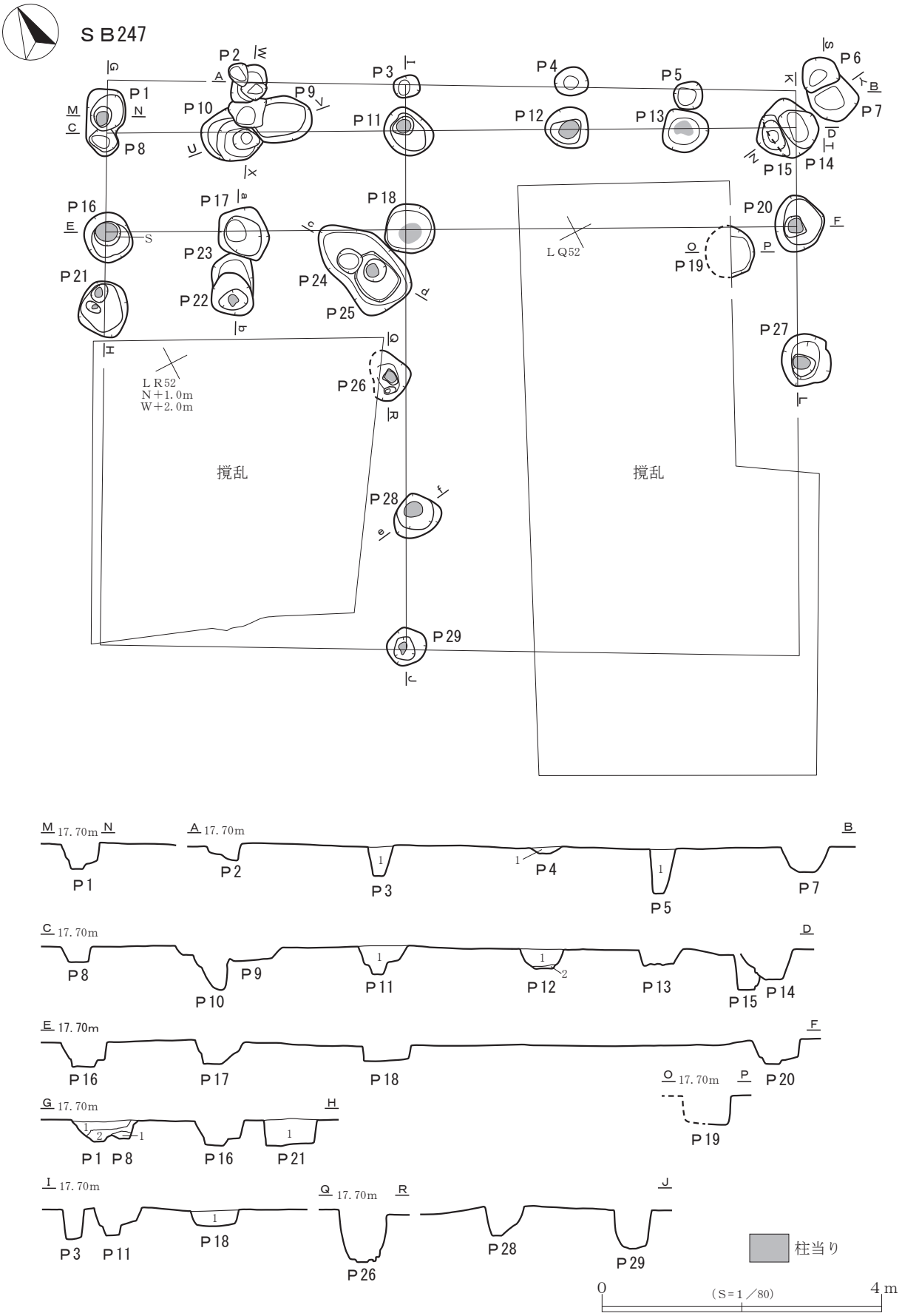
ＳＢ243 柱穴一覧表

番号	旧番号	長軸×短軸（m）	平面形状	確認面からの深さ（m）	底面標高（m）	重複（旧→新）	遺物・備考
Ｐ１	Ｐ1310	0.78×0.72	不整円形	0.43	17.10		
Ｐ２	Ｐ1290	0.48×0.38	楕円形	0.37	17.10		
Ｐ３	Ｐ1279	0.40×0.36	略円形	0.44	17.00		
Ｐ４	Ｐ1289	0.46×0.40	円形	0.32	17.02		
Ｐ５	Ｐ1287	0.52×0.46	略円形	0.39	16.97		
Ｐ６	Ｐ1293	0.43×0.22	円形	0.19	17.30	ＳＢ243Ｐ７→Ｐ６	
Ｐ７	Ｐ1293	0.57×〈0.36〉	楕円形	0.40	17.11	ＳＢ243Ｐ７→Ｐ６	
Ｐ８	Ｐ1282	0.48×0.34	楕円形	0.27	17.06		
Ｐ９	Ｐ1309	0.90×0.68	不整楕円形	0.47	17.08		
Ｐ10	Ｐ1308	0.62×0.61	円形	0.56	16.92		礫・木片
Ｐ11	Ｐ1286	0.48 ×0.40	隅丸方形	0.53	16.89		
Ｐ12	Ｐ1285	0.65×0.49	不整楕円形	0.46	16.97		礫・木片・土師器甕１点(5.6g)
Ｐ13	Ｐ1283	0.50×0.44	略円形	0.44	16.94		礫・木片

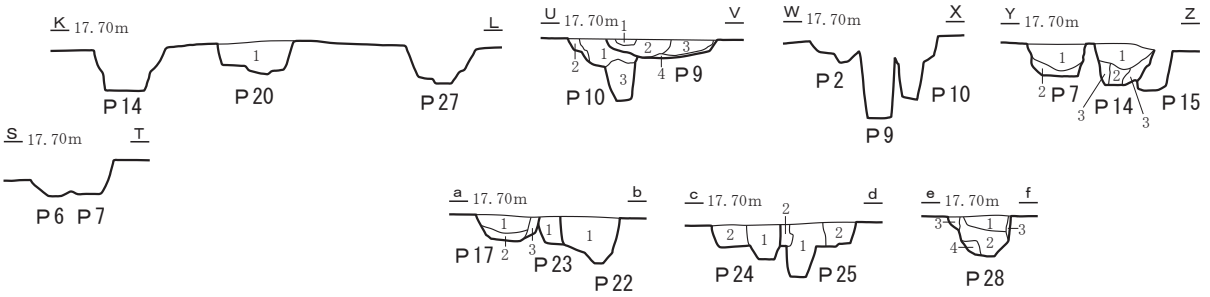
※〈　〉内の数値は残存値を示す。

0　（S＝1／80）　4m

第 96 図　ＳＢ243 掘立柱建物跡



第 97 図　ＳＢ247 掘立柱建物跡



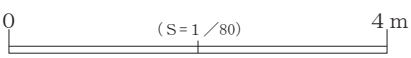
SB247

P１　１　暗灰黄（2.5Y4/2）粘土質シルト　しまり中　粘性中
　　混入物：黒褐色土20%
　２　暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）シルト質粘土　しまり弱　粘性強
　　混入物：黒泥状土多量
P３　１　暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト質粘土　しまり中　粘性強
　　混入物：にぶい黄褐色土10%
P４　１　暗灰黄（2.5Y4/2）粘土質シルト　しまり中　粘性中
　　混入物：黒褐色土20%
　２　オリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト質粘土　しまり中　粘性中
P５　１　オリーブ褐色（2.5Y4/6）シルト　しまり弱　粘性弱
　　混入物：暗褐色土10%
P７　１　オリーブ褐色（2.5Y4/4）シルト質粘土　しまり中　粘性中
　　混入物：黒褐色土20%
　２　オリーブ褐色（2.5Y4/4）粘土　しまり中　粘性強
P８　１　灰オリーブ（7.5Y4/2）シルト　しまり中　しまり強
　　混入物：炭化物粒φ３㎜以下１%
P９　１　黄褐色（2.5Y5/3）粘土質シルト　しまり中　粘性中
　２　黄褐色（2.5Y5/4）粘土質シルト　しまり中　粘性中
　　混入物：地山土塊φ50㎜以下30%
　３　暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト　しまり強　粘性中
　　混入物：炭化物粒φ３㎜以下１%
　４　黄褐色（2.5Y5/3）粘土　しまり強　粘性強
P10　１　暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）シルト質粘土　しまり強　粘性強
　２　オリーブ褐色（2.5Y4/6）シルト質粘土　しまり強　粘性中
　３　灰オリーブ色（7.5Y5/2）粘土　しまり強　粘性強
P11　１　暗灰黄（2.5Y4/2）シルト質粘土　しまり強　粘性強
P12　１　暗灰黄（2.5Y4/2）粘土質シルト　しまり中　粘性中
　　混入物：黒褐色土20%
　２　灰色（7.5Y4/1）粘土　しまり強　粘性強
P14　１　オリーブ灰色（５Y4/2）シルト　しまり強　粘性弱
　２　暗灰黄色（2.5Y4/2）粘土質シルト　しまり中　粘性中
　　混入物：地山土塊φ20㎜以下30%
　３　黄灰色（2.5Y4/1）粘土　しまり強　粘性強
P17　１　暗灰黄（2.5Y4/2）粘土質シルト　しまり強　粘性強
　２　暗灰黄（2.5Y4/2）粘土質シルト　しまり中　粘性中
　　混入物：炭化物塊φ８㎜以下５%、黒泥状土塊φ８㎜以下５%
　３　オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘土質シルト　しまり中　粘性中
　　混入物：にぶい黄褐色土20%
P18　１　暗灰黄（2.5Y4/2）シルト質粘土　しまり強　粘性強
P20　１　暗灰黄（2.5Y4/2）粘土質シルト　しまり中　粘性中
　　混入物：にぶい黄褐色土20%
P21　１　暗灰黄（2.5Y4/2）粘土質シルト　しまり中　粘性中
　　混入物：黒褐色土20%
P22　１　褐色（10YR4/4）シルト　しまり弱　粘性弱
　　混入物：地山土塊φ30㎜以下30%
P23　１　暗灰黄（2.5Y4/2）粘土質シルト　しまり中　粘性中
　　混入物：黒褐色土20%
P24　１　褐色（10YR4/4）シルト　しまり中　粘性中
　　混入物：炭化物粒φ５㎜以下１%
　２　黄褐色（10YR5/6）粘土　しまり強　粘性強
　　混入物：暗褐色土10%、炭化物粒φ５㎜以下１%
P25　１　暗褐色（10YR3/3）シルト　しまり中　粘性中
　　混入物：地山土塊φ８㎜以下20%、炭化物粒φ５㎜以下１%
　２　暗褐色（10YR4/4）シルト　しまり中　粘性中
　　混入物：炭化物粒φ５㎜以下１%
P28　１　褐色（10YR4/4）シルト　しまり中　粘性中
　　混入物：焼土粒φ10㎜以下１%、礫φ10cm
　２　にぶい黄褐色（10YR5/4）～黄灰色（2.5Y4/1）　しまり中　粘性中
　３　黄褐色（10YR5/6）シルト　しまり中　粘性中
　４　炭化物層　シルト

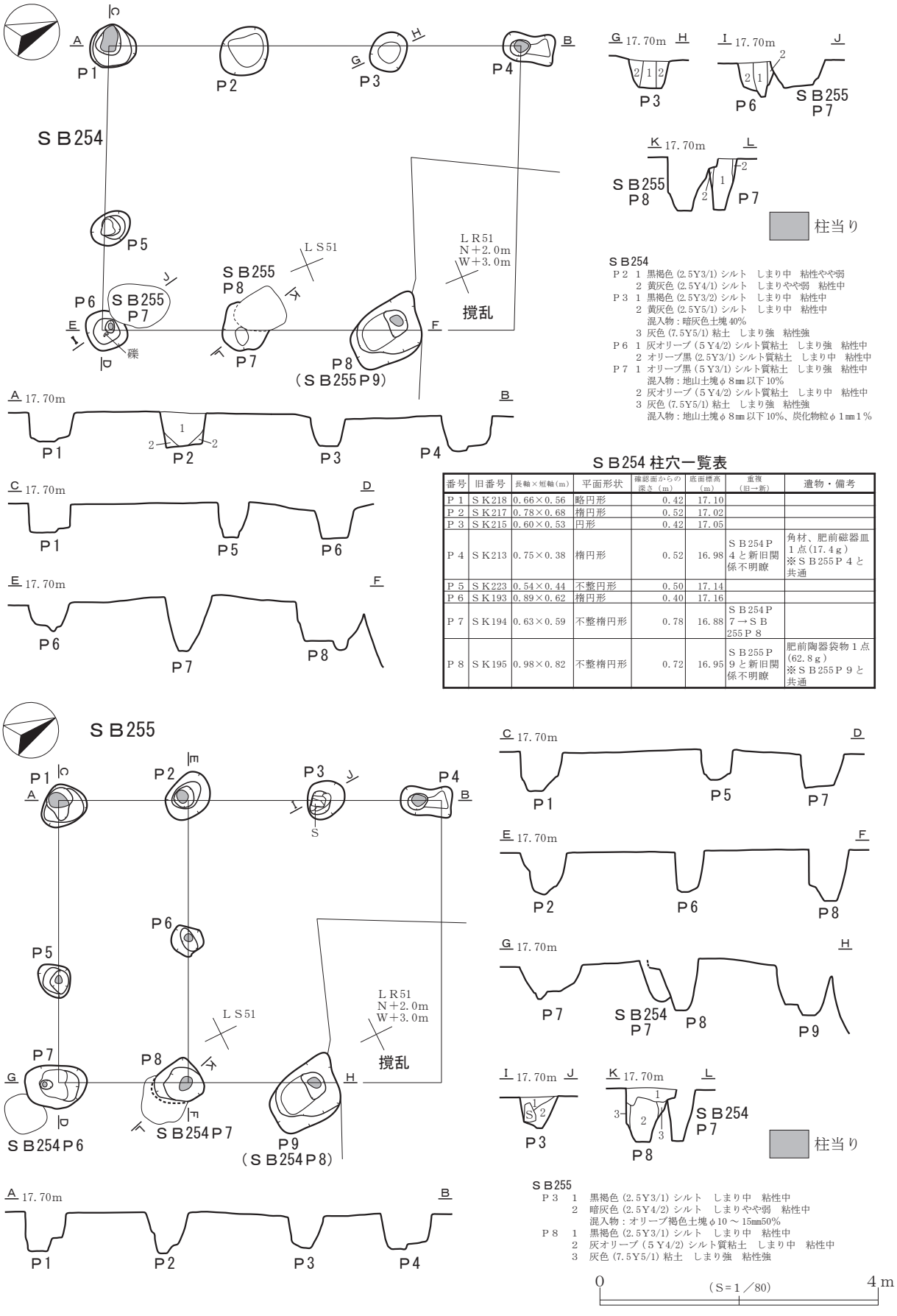
ＳＢ247 柱穴一覧表

番号	旧番号	長軸×短軸（m）	平面形状	確認面からの深さ（m）	底面標高（m）	重複（旧→新）	遺物・備考
P１	ＳＫ181	〈0.60〉×0.55	隅丸方	0.31	17.20	ＳＢ247Ｐ８→ＳＢ247Ｐ１	
P２	ＳＫ186	0.64×0.62	不整形	0.24	17.26	ＳＢ247Ｐ９→ＳＢ247Ｐ２	
P３	ＳＫ187	0.37×0.30	楕円形	0.43	17.07		肥前磁器碗１点(2.5ｇ)
P４	ＳＫ191	0.57×0.40	楕円形	0.09	17.39		須恵器坏１点(73.0ｇ、第114図334)
P５	ＳＫ199	0.42×0.39	隅丸方形	0.64	16.82		
P６	ＳＫ230	〈0.54〉×0.63	隅丸方形	0.38	17.18	ＳＢ247Ｐ７→ＳＢ247Ｐ６	
P７	ＳＫ232	0.54×0.43	不整円形	0.36	17.22	ＳＢ247Ｐ７→ＳＢ247Ｐ６	
P８	ＳＫ181	0.43×〈0.36〉	円形	0.26	17.27	ＳＢ247Ｐ８→ＳＢ247Ｐ１	
P９	ＳＫ202	1.20×0.64	楕円形	0.88	16.68	ＳＢ247Ｐ10→ＳＢ247Ｐ９→ＳＢ247Ｐ２	肥前陶器壺１点(62.8ｇ)
P10	ＳＫ203	0.84×〈0.58〉	楕円形	0.68	16.87	ＳＢ247Ｐ10→ＳＢ247Ｐ９→ＳＢ247Ｐ２	肥前磁器袋物１点(22.4ｇ)
P11	ＳＫ188	0.72×0.62	楕円形	0.39	17.13		
P12	ＳＫ192	0.61×0.59	略円形	0.28	17.20		
P13	ＳＫ164	0.64×0.60	略円形	0.23	17.26		
P14	ＳＫ229	0.84×〈0.64〉	隅丸方形	0.43	17.14	ＳＢ247Ｐ15→ＳＢ247Ｐ14	
P15	ＳＫ229	[0.49]×〈0.19〉	楕円形	0.50	17.09	ＳＢ247Ｐ15→ＳＢ247Ｐ14	
P16	ＳＫ182	0.72×0.70	隅丸方形	0.35	17.17		
P17	ＳＫ184	0.80 ×0.70	不整楕円形	0.28	17.28	ＳＢ247Ｐ23→ＳＢ247Ｐ22→ＳＢ247Ｐ17	
P18	ＳＫ189	0.75×0.75	隅丸方形	0.22	17.37		
P19	ＳＫ251	[0.74]×0.70	円形	0.42	17.18	撹乱を受けている	
P20	ＳＫ158	0.80 ×0.68	略円形	0.33	17.33		
P21	ＳＫ183	0.82×0.74	楕円形	0.39	17.15		有孔礫１点
P22	ＳＫ209	0.64×0.58	不整円形	0.50	17.04	ＳＢ247Ｐ23→ＳＢ247Ｐ22	
P23	ＳＫ185	〈0.28〉×0.60	楕円形	0.29	17.25	ＳＢ247Ｐ23→ＳＢ247Ｐ17・22	
P24	ＳＫ190	0.80×〈0.76〉	楕円形	0.40	17.20	ＳＢ247Ｐ25→ＳＢ247Ｐ24	
P25	ＳＫ190	〈0.87〉×0.82	楕円形	0.58	17.00	ＳＢ247Ｐ25→ＳＢ247Ｐ24	
P26	ＳＫ249	0.72×[0.54]	楕円形	0.75	16.84		肥前陶器皿１点(4.7ｇ)、肥前磁器碗１点(4.8ｇ)、擂鉢１点(10.2ｇ)
P27	ＳＫ159	0.79×0.76	不整円形	0.41	17.31		肥前陶器甕１点(24.1ｇ)、剝片１点(8.4ｇ)
P28	ＳＫ233	0.68×0.62	不整円形	0.43	17.14		肥前磁器壺１点(17.8ｇ、第114図335)
P29	ＳＫ234	0.58×0.54	円形	0.55	17.10		

※[　]内の数値は推定値、〈　〉内の数値は残存値を示す。



第98図　ＳＢ247 掘立柱建物跡



ＳＢ254
Ｐ２　1　黒褐色（2.5Y3/1）シルト　しまり中　粘性やや弱
　　2　黄灰色（2.5Y4/1）シルト　しまりやや弱　粘性中
Ｐ３　1　黒褐色（2.5Y3/2）シルト　しまり中　粘性中
　　2　黄灰色（2.5Y5/1）シルト　しまり中　粘性中
　　混入物：暗灰色土塊 40%
　　3　灰色（7.5Y5/1）粘土　しまり強　粘性強
Ｐ６　1　灰オリーブ（5Y4/2）シルト質粘土　しまり強　粘性中
　　2　オリーブ黒（2.5Y3/1）シルト質粘土　しまり中　粘性中
Ｐ７　1　オリーブ黒（5Y3/1）シルト質粘土　しまり強　粘性中
　　混入物：地山土塊φ8㎜以下10%
　　2　灰オリーブ（5Y4/2）シルト質粘土　しまり中　粘性中
　　3　灰色（7.5Y5/1）粘土　しまり強　粘性強
　　混入物：地山土塊φ8㎜以下10%、炭化物粒φ1㎜1％

ＳＢ254 柱穴一覧表

番号	旧番号	長軸×短軸(m)	平面形状	確認面からの深さ（m）	底面標高（m）	重複（旧→新）	遺物・備考
Ｐ１	ＳＫ218	0.66×0.56	略円形	0.42	17.10		
Ｐ２	ＳＫ217	0.78×0.68	楕円形	0.52	17.02		
Ｐ３	ＳＫ215	0.60×0.53	円形	0.42	17.05		
Ｐ４	ＳＫ213	0.75×0.38	楕円形	0.52	16.98	ＳＢ254Ｐ4と新旧関係不明瞭	角材、肥前磁器皿1点(17.4ｇ) ※ＳＢ255Ｐ4と共通
Ｐ５	ＳＫ223	0.54×0.44	不整円形	0.50	17.14		
Ｐ６	ＳＫ193	0.89×0.62	楕円形	0.40	17.16		
Ｐ７	ＳＫ194	0.63×0.59	不整楕円形	0.78	16.88	ＳＢ254Ｐ7→ＳＢ255Ｐ8	
Ｐ８	ＳＫ195	0.98×0.82	不整楕円形	0.72	16.95	ＳＢ255Ｐ9と新旧関係不明瞭	肥前陶器袋物1点(62.8ｇ) ※ＳＢ255Ｐ9と共通

ＳＢ255
Ｐ３　1　黒褐色（2.5Y3/1）シルト　しまり中　粘性中
　　2　暗灰色（2.5Y4/2）シルト　しまりやや弱　粘性中
　　混入物：オリーブ褐色土塊φ10～15㎜50%
Ｐ８　1　黒褐色（2.5Y3/1）シルト　しまり中　粘性中
　　2　灰オリーブ（5Y4/2）シルト質粘土　しまり中　粘性中
　　3　灰色（7.5Y5/1）粘土　しまり強　粘性強

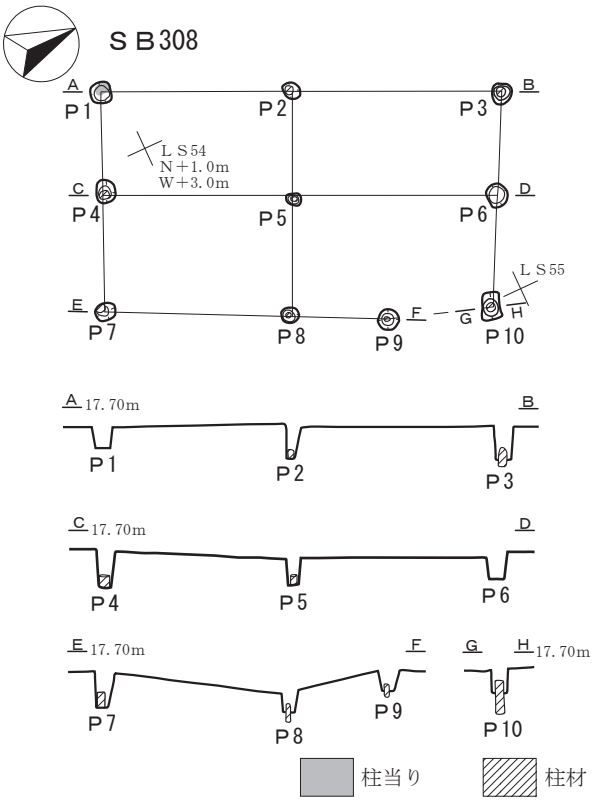
0　（S＝1／80）　4m

第 99 図　ＳＢ254・255 掘立柱建物跡

ＳＢ255 柱穴一覧表

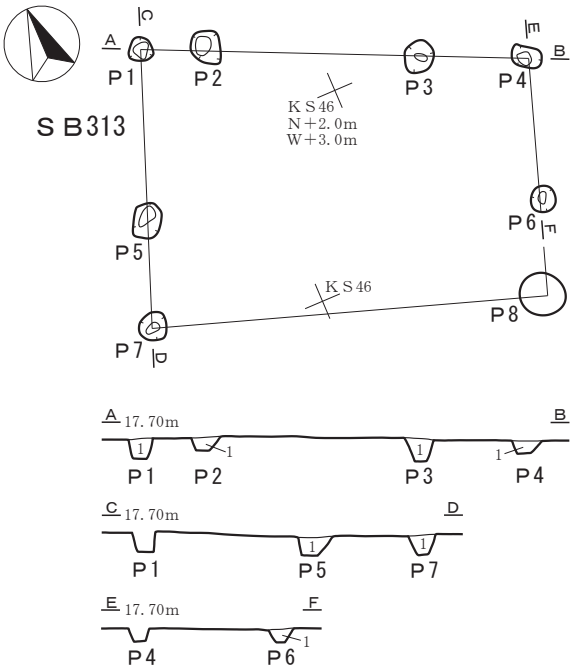
番号	旧番号	長軸×短軸(m)	平面形状	確認面からの深さ（m）	底面標高（m）	重複（旧→新）	遺物・備考
Ｐ１	ＳＫ219	0.68×0.57	楕円形	0.57	16.94		
Ｐ２	ＳＫ216	0.64×0.56	円形	0.61	16.90		
Ｐ３	ＳＫ214	0.60×0.52	隅丸方形	0.46	16.99		
Ｐ４	ＳＫ213	0.75×0.38	楕円形	0.52	16.98	ＳＢ255Ｐ４と新旧関係不明瞭	角材、肥前磁器皿１点(17.4ｇ) ※ＳＢ254Ｐ４と共通
Ｐ５	ＳＫ222	0.60×0.45	楕円形	0.45	17.18		
Ｐ６	ＳＫ236	0.48×0.45	不整楕円形	0.59	17.04		
Ｐ７	ＳＫ193	0.58×0.55	隅丸方形	0.49	17.03	ＳＢ255Ｐ６→ＳＢ254Ｐ７	
Ｐ８	ＳＫ194	(0.39)×0.65	不整円形	0.74	16.89	ＳＢ254Ｐ７→ＳＢ255Ｐ８	
Ｐ９	ＳＫ195	0.98×0.82	不整楕円形	0.72	16.95	ＳＢ254Ｐ８と新旧関係不明瞭	肥前陶器袋物１点(62.8ｇ) ※ＳＢ254Ｐ８と共通

※(　　)内の数値は残存値を示す。



ＳＢ308 柱穴一覧表

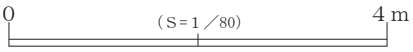
番号	長軸×短軸(m)	平面形状	確認面からの深さ（m）	底面標高（m）	重複	遺物・備考
Ｐ１	0.25×0.24	隅丸方形	0.22	17.28		
Ｐ２	0.20×0.15	円形	0.38	17.26		柱材
Ｐ３	0.22×0.21	円形	0.36	17.16		柱材
Ｐ４	0.25×0.22	隅丸方形	0.41	17.09		柱材
Ｐ５	0.15×0.13	楕円形	0.19	17.11	ＳＯ206→ＳＢ308Ｐ５	柱材
Ｐ６	0.25×0.23	円形	0.29	17.28	ＳＯ165→ＳＢ308Ｐ６	
Ｐ７	0.20×0.18	円形	0.38	17.10		柱材
Ｐ８	0.19×0.17	隅丸方形	0.34	16.94		柱材
Ｐ９	0.22×0.22	円形	0.28	17.21		柱材
Ｐ10	0.30×0.18	隅丸方形	0.45	17.04	ＳＯ205→ＳＢ308Ｐ10	柱材



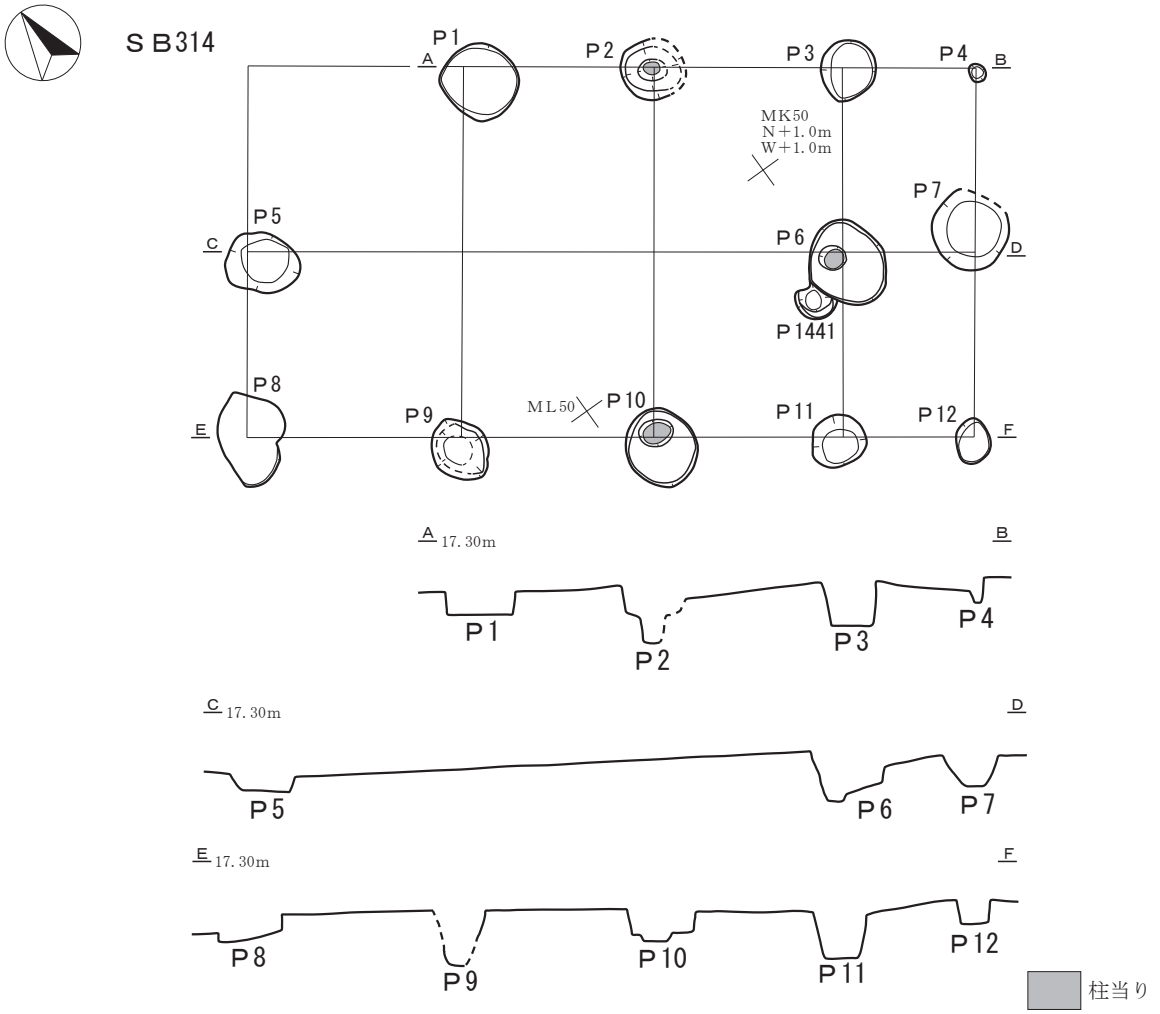
ＳＢ313
Ｐ１　１　褐色（10ＹＲ4/4）シルト　しまり中　粘性中
　　混入物：地山土塊 10%
Ｐ２　１　褐色（10ＹＲ4/4）シルト　しまり中　粘性中
　　混入物：地山土塊 10%
Ｐ３　１　にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）シルト　しまり中　粘性中
　　混入物：暗褐色土塊 10%
Ｐ４　１　にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）シルト　しまり中　粘性中
　　混入物：暗褐色土塊 10%
Ｐ５　１　褐色（10ＹＲ4/4）シルト　しまり中　粘性中
　　混入物：地山土塊 10%
Ｐ６　１　黄褐色（10ＹＲ5/6）シルト　しまり強　粘性弱
Ｐ７　１　暗褐色（１０ＹＲ3/3）シルト　しまり中　粘性中
　　混入物：地山土塊 10%

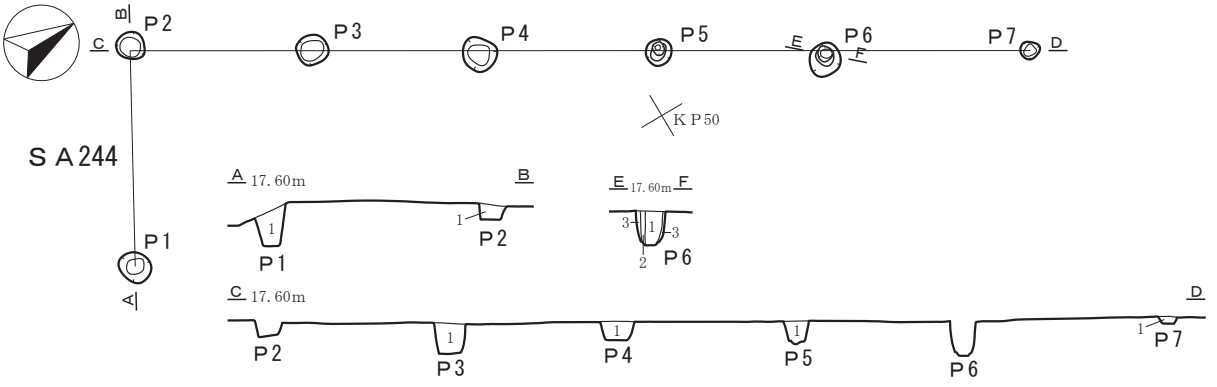
ＳＢ313 柱穴一覧表

番号	旧番号	長軸×短軸(m)	平面形状	確認面からの深さ（m）	底面標高（m）	重複	遺物・備考
Ｐ１	Ｐ1360	0.26×0.26	円形	0.22	17.22		
Ｐ２	Ｐ1359	0.40×0.30	楕円形	0.15	17.31		
Ｐ３	Ｐ1361	0.36×0.30	円形	0.26	17.28		
Ｐ４	Ｐ1355	0.32×0.21	楕円形	0.14	17.36		
Ｐ５	Ｐ1358	0.38×0.29	楕円形	0.21	17.27		
Ｐ６	Ｐ1354	0.29×0.27	円形	0.15	17.44		
Ｐ７	Ｐ1357	0.32×0.30	円形	0.23	17.26		
Ｐ８	Ｐ1353	0.49×0.44	円形	—	—		



第 100 図　ＳＢ255・308・313 掘立柱建物跡



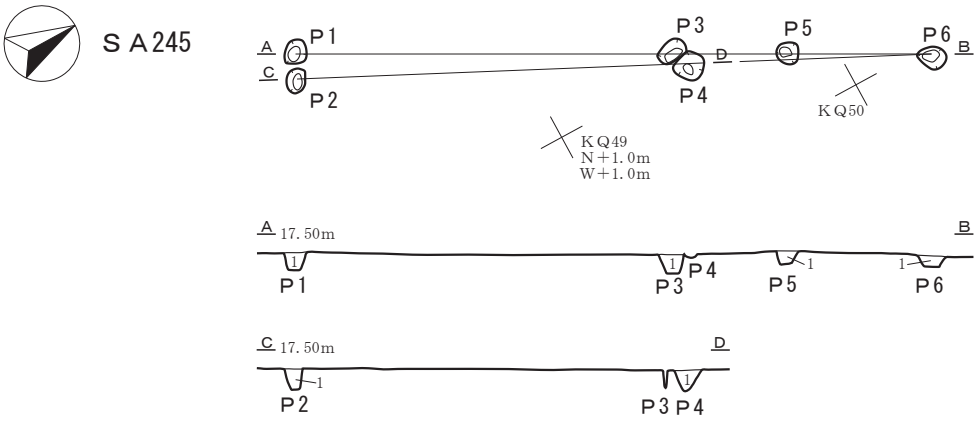


ＳＡ244

Ｐ１	１	暗褐色（10ＹＲ3/3）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土塊 10%
Ｐ２	１	暗オリーブ灰色（2.5Ｇ Ｙ4/1）～黄灰色（2.5Y4/1）シルト質粘土　しまり強　粘性中
Ｐ３	１	暗オリーブ灰色（2.5Ｇ Ｙ4/1）～黄灰色（2.5Y4/1）シルト質粘土　しまり強　粘性中
Ｐ４	１	暗オリーブ灰色（2.5Ｇ Ｙ4/1）～黄灰色（2.5Y4/1）シルト質粘土　しまり強　粘性中
Ｐ５	１	暗オリーブ灰色（2.5Ｇ Ｙ4/1）～黄灰色（2.5Y4/1）シルト質粘土　しまり強　粘性中
Ｐ６	１	灰オリーブ（５Ｙ5/2）粘土　しまり中　粘性強　混入物：地山土塊φ20㎜以下 30%
	２	灰オリーブ（５Ｙ5/2）粘土　しまり中　粘性強
	３	黄褐色（2.5Y5/3）シルト質粘土　しまり中　粘性中
Ｐ７	１	暗オリーブ灰色（2.5Ｇ Ｙ4/1）～黄灰色（2.5Y4/1）シルト質粘土　しまり強　粘性中

0　（S＝1／80）　4m

第 101 図　ＳＢ314 掘立柱建物跡、ＳＡ244 柱穴列



ＳＡ245

Ｐ１　１　黒褐色（2.5Y3/2）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土粒φ５㎜以下15%、炭化物粒φ５㎜以下２%
Ｐ２　１　黒褐色（2.5Y3/2）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土粒φ５㎜以下15%、炭化物粒φ５㎜以下２%
Ｐ３　１　黒褐色（2.5Y3/2）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土粒φ５㎜以下15%、炭化物粒φ５㎜以下２%
Ｐ４　１　黒褐色（2.5Y3/2）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土粒φ５㎜以下15%、炭化物粒φ５㎜以下２%
Ｐ５　１　黒褐色（2.5Y3/2）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土粒φ５㎜以下15%、炭化物粒φ５㎜以下２%
Ｐ６　１　黒褐色（2.5Y3/2）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土粒φ５㎜以下15%、炭化物粒φ５㎜以下２%

ＳＢ314 柱穴一覧表

番号	旧番号	長軸×短軸(m)	平面形状	確認面からの深さ（m）	底面標高（m）	重複（旧→新）	遺物・備考
Ｐ１	Ｐ236	0.80×0.76	隅丸方形	0.25	16.86		
Ｐ２	Ｐ230	[0.70]×[0.68]	円形	0.55	16.57		
Ｐ３	Ｐ254	0.65×0.58	楕円形	0.50	16.36		貝風呂片１点(104.0ｇ)
Ｐ４	Ｐ551	0.19×0.18	隅丸方形	0.28	16.99		
Ｐ５	Ｐ459	0.78×0.60	不整楕円形	0.29	16.65		
Ｐ６	Ｐ536	0.94×[0.82]	不整楕円形	0.40	16.74	Ｐ1441→ＳＢ314Ｐ６	
Ｐ７	Ｐ1468	[0.80]×0.80	隅丸方形	0.25	16.82	ＳＥ34→ＳＢ314Ｐ７	
Ｐ８	Ｐ461	0.84×0.65	不整形	0.31	16.69		
Ｐ９	Ｐ540	0.72×0.62	楕円形	0.58	16.45		
Ｐ10	Ｐ532	0.85×0.75	楕円形	0.35	16.72		
Ｐ11	Ｐ518	0.61×0.53	略円形	0.60	16.50		
Ｐ12	Ｐ251	0.47×0.36	楕円形	0.28	16.91		

※[　]内の数値は推定値を表す。

ＳＡ244 柱穴一覧表

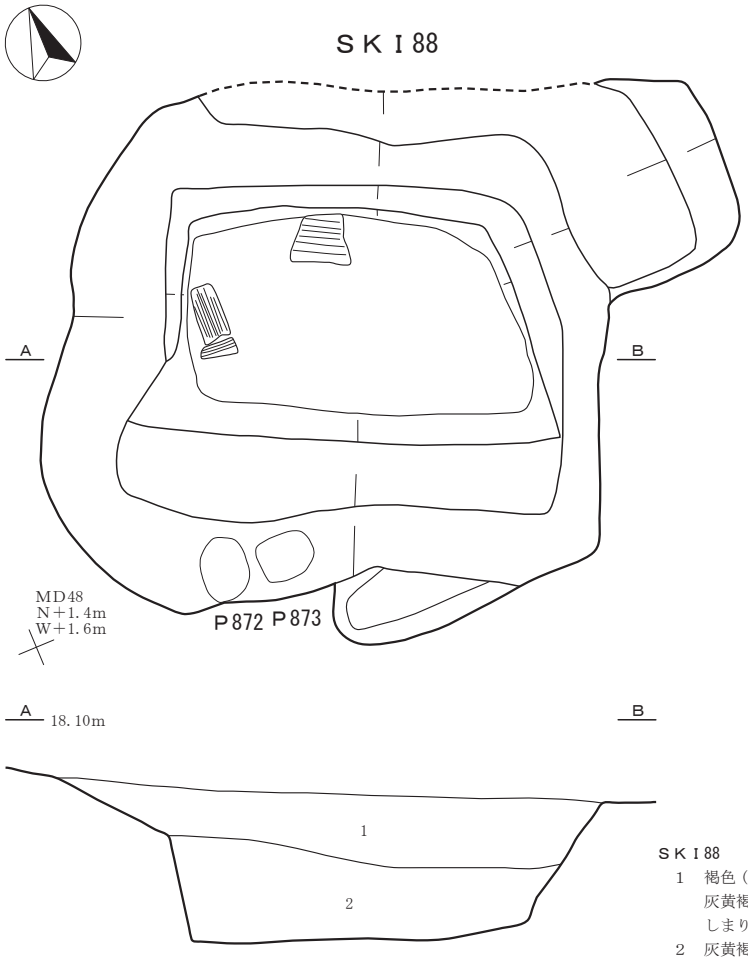
番号	旧番号	長軸×短軸(m)	平面形状	確認面からの深さ（m）	底面標高（m）	重複	遺物・備考
Ｐ１	Ｐ1281	0.36×0.31	円形	0.46	17.01		
Ｐ２	Ｐ1270	0.32×0.29	円形	0.18	17.20		
Ｐ３	Ｐ1269	0.35×0.32	円形	0.33	17.02		
Ｐ４	Ｐ1268	0.38×0.36	円形	0.20	17.16		
Ｐ５	Ｐ1267	0.29×0.27	円形	0.24	17.13		
Ｐ６	Ｐ1266	0.37×0.33	円形	0.36	17.00		
Ｐ７	Ｐ1265	0.21×0.19	円形	0.08	17.24		

ＳＡ245 柱穴一覧表

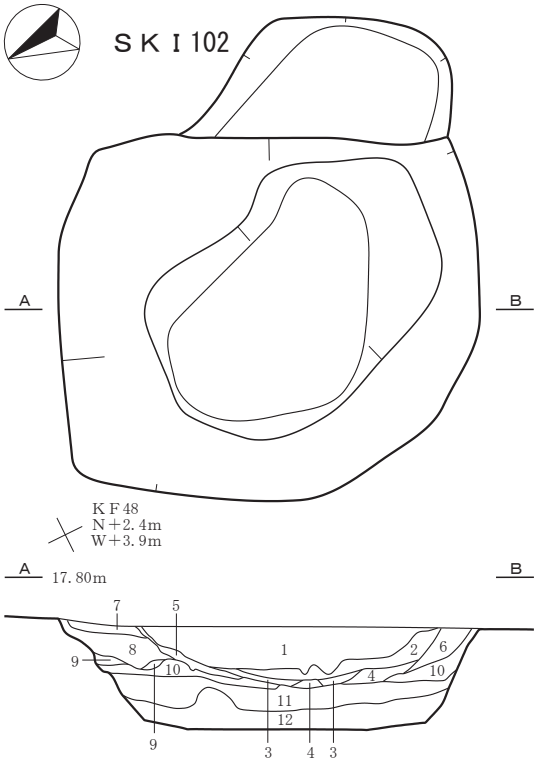
番号	旧番号	長軸×短軸(m)	平面形状	確認面からの深さ（m）	底面標高（m）	重複（旧→新）	遺物・備考
Ｐ１	Ｐ1273	0.30×0.24	楕円形	0.18	17.13		
Ｐ２	Ｐ1272	0.26×0.20	楕円形	0.22	17.08		
Ｐ３	Ｐ1275	0.32×0.20	楕円形	0.20	17.02	ＳＡ245Ｐ３→ＳＡ245Ｐ４	
Ｐ４	Ｐ1274	0.34×0.31	隅丸方形	0.22	17.08	ＳＡ245Ｐ３→ＳＡ245Ｐ４	
Ｐ５	Ｐ1276	0.25×0.24	円形	0.14	17.17		土師器甕１点(3.1g)
Ｐ６	Ｐ1277	0.32×0.24	不整楕円形	0.13	17.24		礫

0　(S=1／80)　4m

第 102 図　ＳＢ314 掘立柱建物跡、ＳＡ244・245 柱穴列



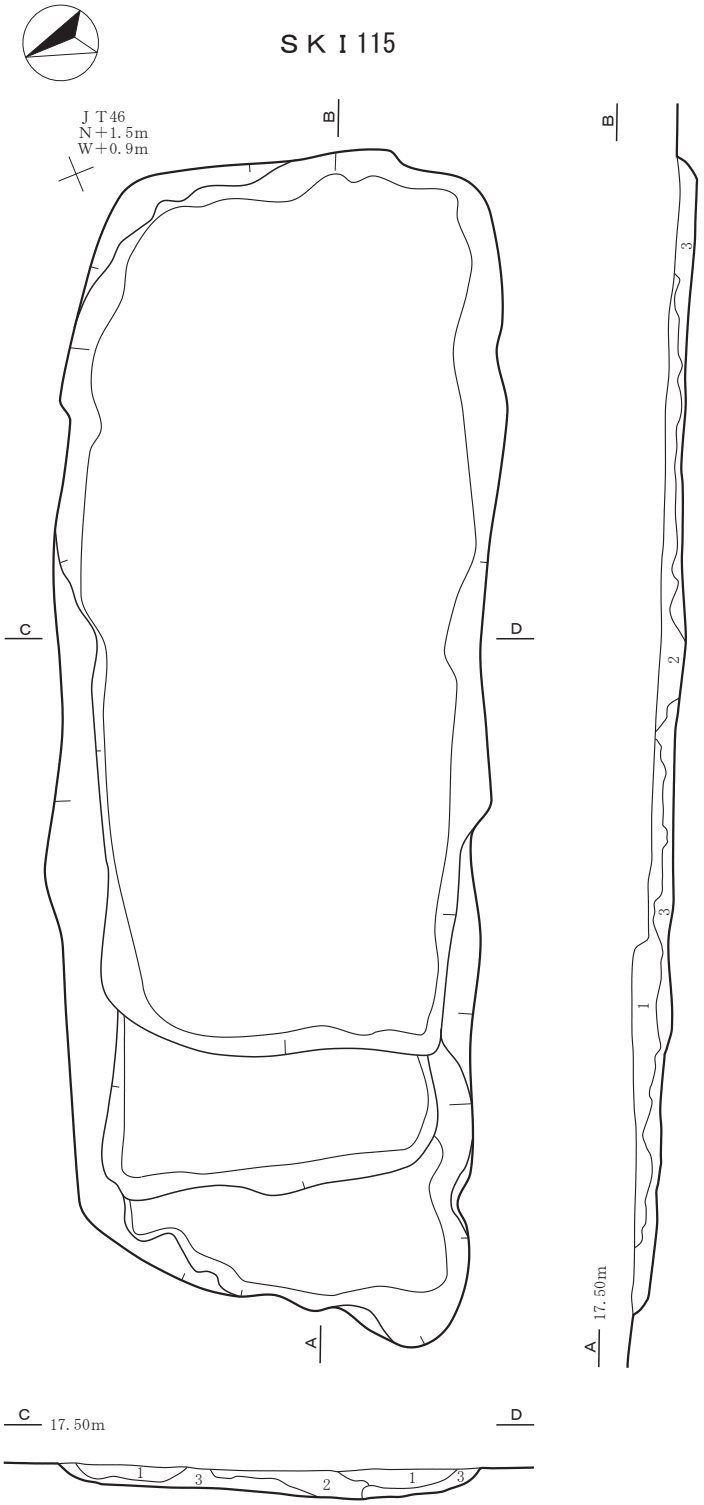
ＳＫＩ88
1　褐色（10ＹＲ4/4）～
　灰黄褐色（10ＹＲ5/2）シルト
　しまり強　粘性中
2　灰黄褐色（10ＹＲ5/2）粘土質シルト
　しまり強　粘性強



ＳＫＩ102
1　暗褐色（10ＹＲ3/3）粘土質シルト　しまり中　粘性強
　混入物：地山土塊φ50㎜以下15%、炭化物塊φ10㎜以下５%
2　黒色（10ＹＲ2/1）泥状シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ20㎜以下20%、炭化物塊φ10㎜以下５%、木片多量
3　オリーブ黒色（５Ｙ3/1）泥状シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ50㎜以下10%、炭化物塊φ10㎜以下２%、木片少量
4　オリーブ黒色（５Ｙ3/1）泥状シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ50㎜以下20%、炭化物塊φ５㎜以下１%、木片少量
5　オリーブ黒色（５Ｙ3/1）泥状シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ10㎜以下５%、炭化物塊φ５㎜以下１%、木片多量
6　オリーブ黒色（５Ｙ3/1）泥状シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ20㎜10%、炭化物粒φ５㎜以下１%、泥炭少量
7　灰色（7.5Ｙ4/1）泥状シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ20㎜２%、炭化物粒φ５㎜以下１%、泥炭少量
8　灰色（５Ｙ4/1）泥状シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ10㎜以下５%、炭化物粒φ５㎜以下１%、泥炭少量
9　灰色（５Ｙ4/1）泥状シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ20㎜以下10%、炭化物粒φ２㎜以下１%
10　オリーブ灰色（５ＧＹ6/1）泥状シルト　しまり強　粘性強
　混入物：灰褐色土20%、黒泥状土塊φ50㎜以下10%
11　明黄褐色（10ＹＲ6/6）粘土　しまり強　粘性強
　混入物：地山土塊φ50㎜以下20%
12　オリーブ灰色（５ＧＹ6/1）粘土　しまり強　粘性強
　混入物：地山土塊φ50㎜以下20%

0　（S＝1／40）　2m

第103図　ＳＫＩ88・102竪穴建物跡



ＳＫＩ115

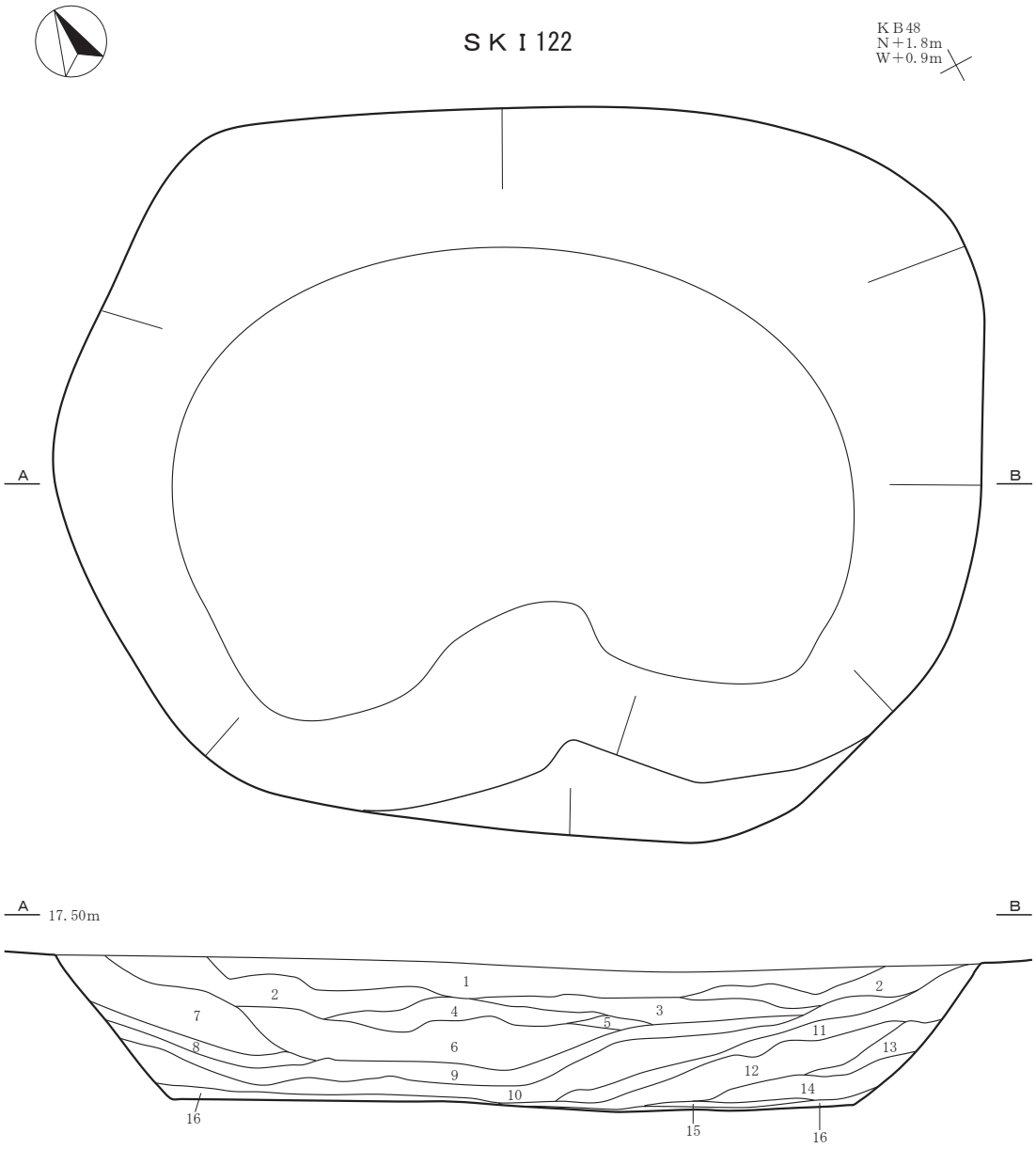
1　黒褐色（10ＹＲ2/3）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土塊φ20 ～ 50㎜15%、炭化物粒φ１～５㎜１%

2　黒褐色（10ＹＲ2/3）シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土塊φ20 ～ 100㎜40%、炭化物粒φ１～５㎜１%

3　オリーブ褐色（2.5Ｙ4/4）シルト質粘土　しまり中　粘性大　混入物：地山土塊φ10 ～ 100㎜20%、暗褐色土と細砂 10%

0　（Ｓ＝１／40）　2m

第 104 図　ＳＫＩ115 竪穴建物跡

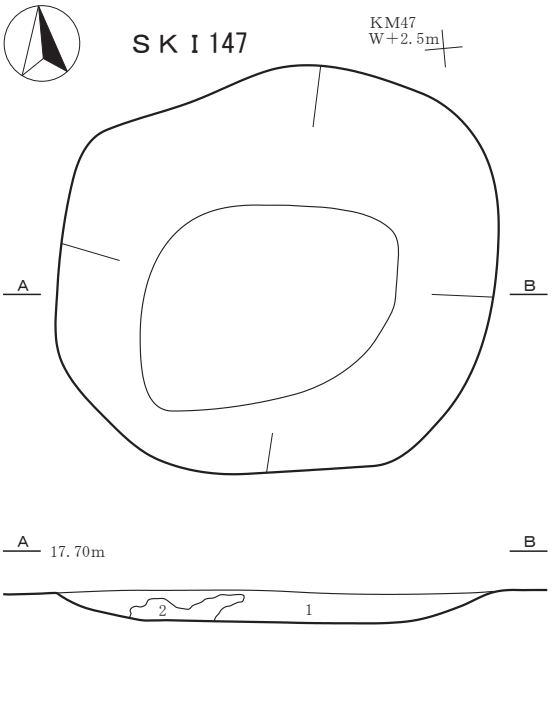


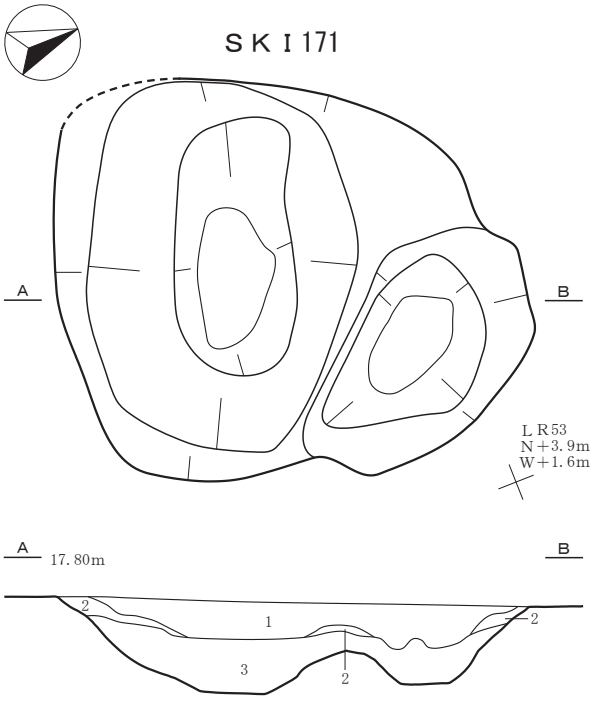
ＳＫＩ122

1　黒色（10ＹＲ2/1）泥状シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土塊φ30㎜以下20%、木片５％ 、角礫φ100㎜以下5%、木材多量
2　浅黄色（５Ｙ7/2）粘土　しまり強　粘性強　混入物：黒泥状土15%、木片２％
3　黒色（５Ｙ2/1）泥状シルト　しまり弱　粘性中　混入物：地山土塊φ30㎜以下20%、木片15%
4　黒色（10Ｙ2/1）泥状シルト　しまり弱　粘性中　混入物：地山土塊φ50㎜以下15%、木片20%
5　灰色（５Ｙ6/1）粘土　しまり強　粘性強　混入物：地山土塊φ30㎜以下20%、木片10%
6　黒色（2.5Ｇ Ｙ2/1）泥状シルト　しまり弱　粘性弱　混入物：地山土塊φ50㎜以下30%、木片20%
7　オリーブ黄色（５Ｙ6/3）粘土　しまり強　粘性強　混入物：地山土塊φ30㎜以下30%、黒泥状土10%、木片２％
8　黒色（2.5GY2/1）泥状シルト　しまり中　粘性弱　混入物：地山土塊φ30㎜以下10%、木片10%
9　灰色（7.5Y5/2）粘土　しまり強　粘性強　混入物：黒泥状土10%、木片５％
10　オリーブ黒色（7.5Y3/2）泥状シルト　しまり中　粘性中　混入物：地山土塊φ50㎜以下50%、木片40%
11　オリーブ灰色（５Ｇ6/1）粘土　しまり強　粘性強　混入物：黒泥状土５％
12　オリーブ黒色（7.5Y2/2）泥状シルト　しまり弱　粘性弱　混入物：地山土塊φ20㎜以下５％
13　黄褐色（10ＹＲ5/6）砂質シルト　しまり中　粘性弱　混入物：粗砂30%、角礫φ20㎜以下5%
14　オリーブ黒色（7.5Y2/2）泥状シルト　しまり弱　粘性弱　混入物：地山土塊φ30㎜以下10%、黒泥状土40%
15　暗オリーブ灰色（５ＧＹ4/1）粘土　しまり強　粘性強　混入物：黒泥状土20%、木片５％
16　黒色（2.5GY2/1）泥状シルト　しまり中　粘性弱　混入物：地山土塊φ20㎜以下10%、木片15%

0　（S＝1／40）　2m

第105図　ＳＫＩ122竪穴建物跡

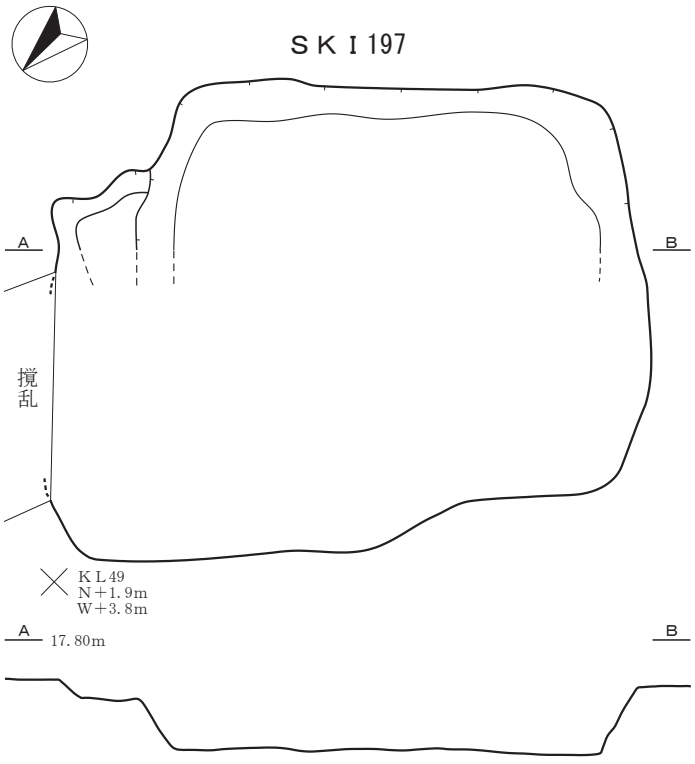




ＳＫＩ147
1　灰オリーブ色（５Ｙ5/3）シルト混細砂　しまり弱　粘性弱
2　灰オリーブ色（５Ｙ5/3）細砂混粘土　しまり強　粘性強

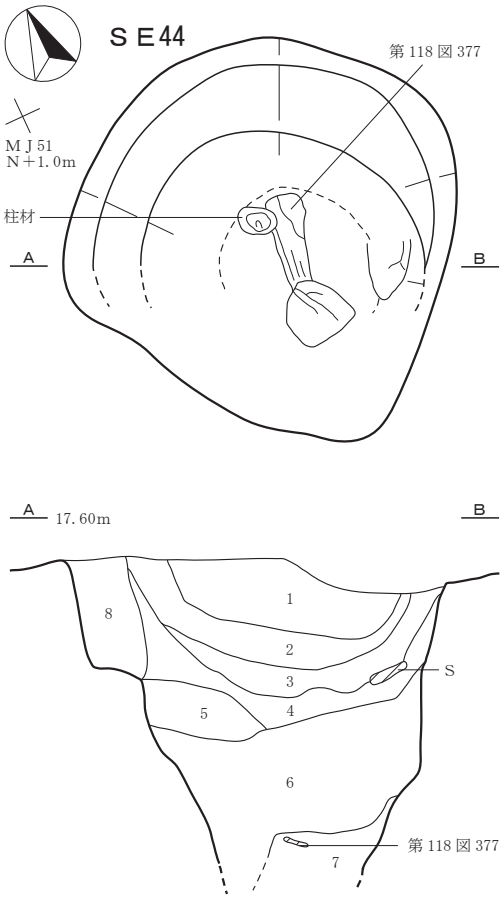
ＳＫＩ171
1　オリーブ黒色（7.5Y3/2）シルト質粘土　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊φ５～10㎜１％未満
2　黒褐色（2.5Y3/1）泥状シルト　しまり弱　粘性弱
　混入物：地山土粒φ１以下～８㎜30％
3　オリーブ黒色（2.5Y3/2）粘土質シルト
　混入物：地山土粒φ１㎜以下30％

0　（S＝1／40）　2m

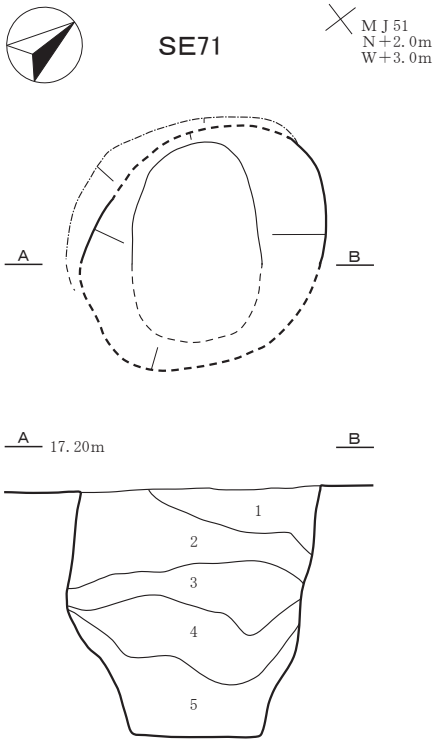


0　（S＝1／80）　4m

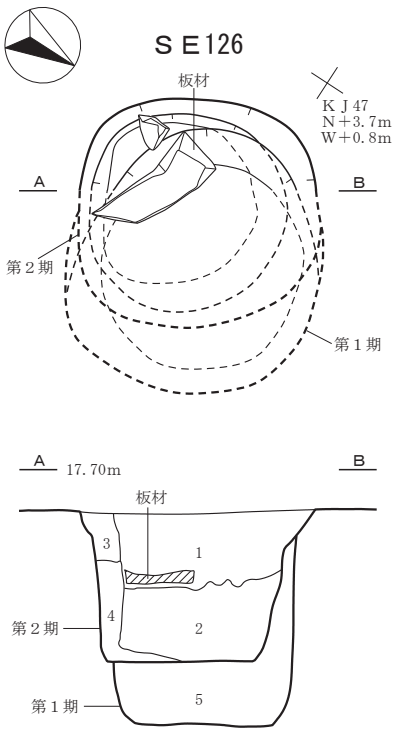
第106図　ＳＫＩ147・171・197竪穴建物跡



ＳＥ44
1　黒褐色（10ＹＲ2/2）粘土質シルト　しまり強　粘性やや弱
　混入物：地山土塊φ１㎜以下～ 15cm１％、炭化物塊φ１以下～ 10㎜１％、
　焼土粒φ１～ 10㎜１％
2　灰黄褐色（10ＹＲ4/2）粘土質シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊φ５～ 15㎜15％、炭化物粒φ１～５㎜１％未満、
　焼土粒φ１～５㎜１％未満
3　炭化物層　シルト　しまりやや弱　粘性やや弱
　混入物：地山土塊φ10・15㎜１％
4　灰黄褐色（10ＹＲ4/2）シルト質粘土　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊φ30～ 50㎜10％・φ１㎜１％未満、
　炭化物粒φ１～２㎜１％未満
5　灰黄褐色（10ＹＲ5/2）（10ＹＲ5/3）シルト質粘土　しまり強　粘性中
　混入物：暗褐色土筋状φ５～ 10㎜15％
6　にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）シルト質粘土　しまり強　粘性中
　混入物：暗褐色土板状φ５㎜１％
7　黒褐色（10ＹＲ3/1）筋状　しまりやや弱　粘性強
8　にぶい黄橙色（10ＹＲ6/4）シルト質粘土　しまり強　粘性中



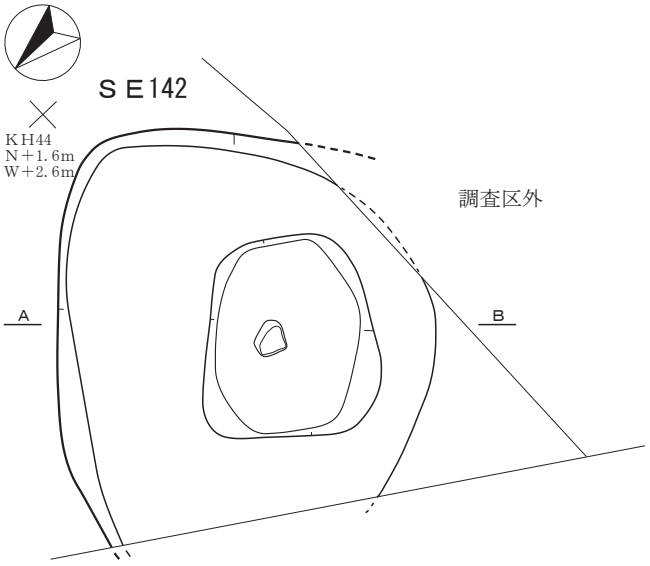
ＳＥ71
1　褐色（10ＹＲ4/6）砂質シルト　しまり強　粘性弱
　混入物：炭化物筋状φ２～ 50㎜３％
2　褐色（10ＹＲ4/6）砂質シルト　しまり強　粘性強
　混入物：炭化物粒φ２～３㎜１％未満
3　褐色（10ＹＲ4/6）・灰黄褐色（10ＹＲ5/2）シルト　しまり強　粘性強
4　オリーブ灰色（2.5Ｇ Y5/1）粘土　しまりやや弱　粘性強
　混入物：暗褐色土筋状φ30㎜30％
5　オリーブ灰色（2.5Ｇ Y5/1）粘土　しまりやや弱　粘性強
　混入物：炭化物塊φ５～ 10㎜１％未満

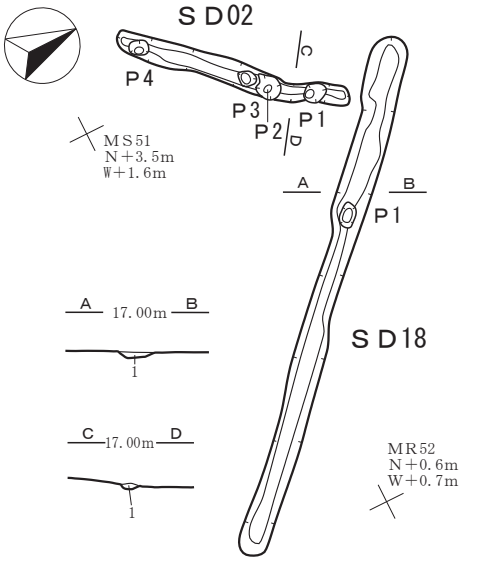


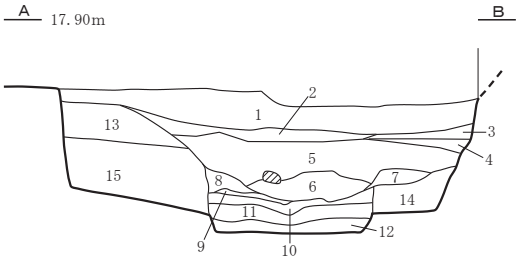
ＳＥ126
1　黄褐色（2.5Y5/4）粘土　しまり中　粘性中
2　オリーブ黒（10ＹＲ3/2）粘土　しまり強　粘性中
　混入物：炭化物粒φ１㎜以下２％
3　黄褐色（2.5Y5/4）粘土　しまり強　粘性強
4　暗オリーブ灰色（2.5Ｇ Y4/1）粘土　しまり強　粘性強
　混入物：炭化物粒φ１㎜以下２％、地山土塊φ８㎜以下 10％
5　灰色（10Y4/1）粘土　しまり強　粘性強
　混入物：地山土塊φ８㎜以下５％

0　（S＝1／40）　2m

第 107 図　ＳＥ44・71・126 井戸跡







ＳＤ02
1　褐色（10ＹＲ4/4）シルト　しまり強　粘性中
　混入物：灰黄褐色土塊φ１以下～１㎜１％未満

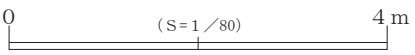
ＳＤ02 柱穴一覧表

番号	長軸×短軸（m）	平面形状	検出面からの深さ（m）	底面標高（m）
Ｐ１	0.26×0.23	円形	0.23	16.54
Ｐ２	0.26×0.25	不整円形	0.09	16.49
Ｐ３	0.22×0.19	略円形	0.11	16.43
Ｐ４	0.22×0.17	楕円形	0.11	16.37

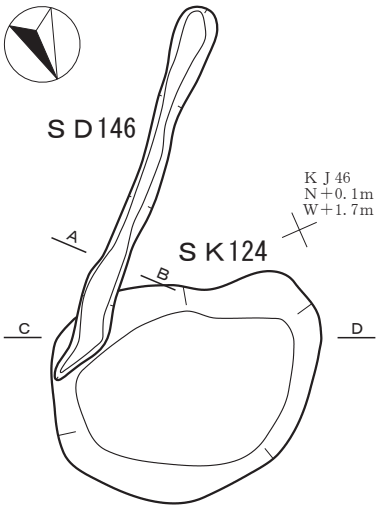
ＳＤ18
1　褐色（10ＹＲ4/4）シルト　しまり強　粘性中

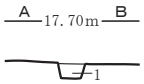
ＳＤ18 柱穴一覧表

番号	長軸×短軸（m）	平面形状	検出面からの深さ（m）	底面標高（m）
Ｐ１	0.27×0.21	楕円形	0.14	16.44

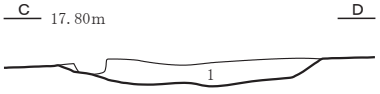


ＳＥ142
1　にぶい黄橙色（10ＹＲ4/3）細砂質シルト　しまり強　粘性弱
　混入物：地山土塊φ10㎜以下20%、炭化物粒φ５㎜以下１%
2　オリーブ黒色（５ＹＲ3/2）シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土粒φ５㎜以下30%、炭化物粒φ５㎜以下１%
3　黒褐色（2.5Y2/2）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ10㎜以下30%、黒色土塊φ20㎜以下15%、
　炭化物粒φ５㎜以下２%
4　黒褐色（2.5Y2/2）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ20㎜以下20%、炭化物粒φ５㎜以下１%
5　黒褐色（2.5Y3/2）粘土質シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土塊φ８㎜以下10%
6　オリーブ黒色（５Y2/2）シルト質粘土　しまり弱　粘性中
　混入物：地山土塊φ20㎜以下30%、木片５%
7　オリーブ黒色（５Y2/2）シルト質粘土　しまり弱　粘性中
　混入物：地山土塊φ20㎜以下30%、木片５%
8　暗オリーブ色（５Y4/4）シルト質粘土　しまり弱　粘性強
　混入物：暗褐色土30%
9　オリーブ黒色（５Y2/2）シルト質粘土　しまり弱　粘性中
　混入物：地山土塊φ５㎜５%
10　暗オリーブ色（５Y4/4）シルト質粘土　しまり中　粘性中
　混入物：黒色土30%
11　黒褐色（2.5Y2/2）泥状シルト　しまり弱　粘性弱
　混入物：木片、植物遺体多量
12　オリーブ灰色（2.5GY5/1）粘土　しまりやや弱　粘性強
　混入物：炭化物筋状φ３～５㎜１%未満
13　オリーブ褐色（2.5Y4/3）細砂混シルト　しまり中　粘性弱
　混入物：地山土塊φ30㎜以下30%、炭化物粒φ３㎜以下１%
14　オリーブ灰色（５GY4/1）シルト混細砂　しまり弱　粘性弱
　混入物：木片、植物遺体多量
15　緑灰色（7.5GY5/1）粘土　しまり中　粘性強
　混入物：黒褐色土塊φ30㎜以下15%

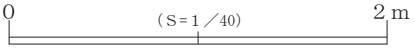




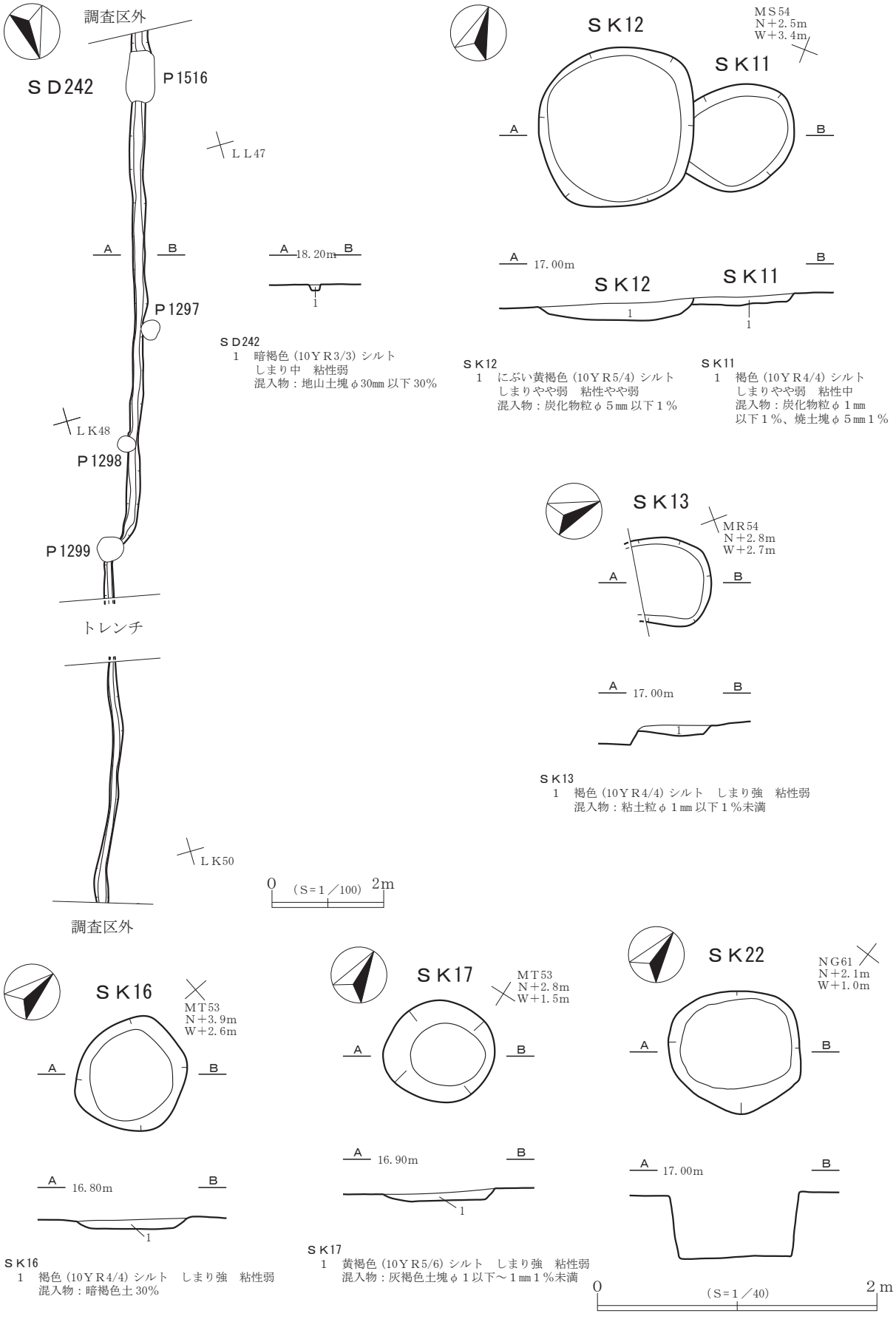
ＳＤ146
1　オリーブ黒色（５Y3/1）
　シルト　しまり中　粘性弱



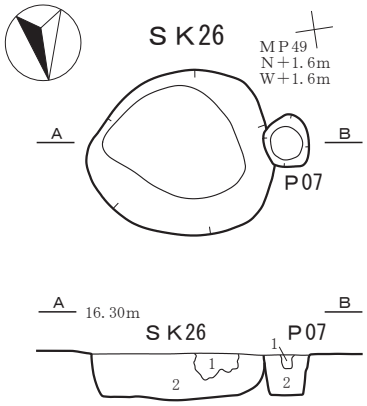
ＳＫ124
1　黄灰色（2．5Y4/1）細砂質
　シルト　しまり中　粘性弱
　混入物：地山土粒φ１㎜
　以下１%未満、炭化物粒
　φ１㎜以下１%未満



第 108 図　ＳＥ142 井戸跡、ＳＤ02・18・146 溝跡、ＳＫ124 土坑

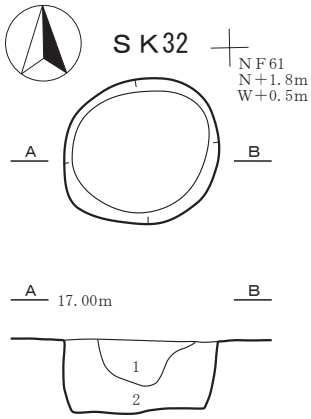


第109図　ＳＤ242溝跡、ＳＫ11・12・13・16・17・22土坑

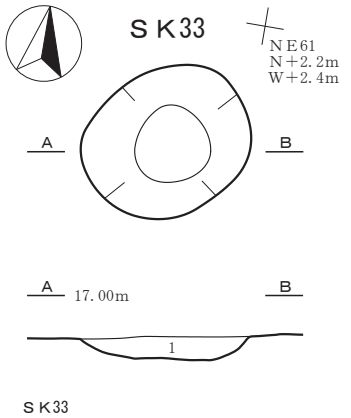


ＳＫ26
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ3/3）シルト
　しまり中　粘性弱
　混入物：炭化物粒φ10㎜以下
　１％未満
2　にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）シルト
　しまり中　粘性弱
　混入物：焼土塊φ20㎜以下
　１％未満

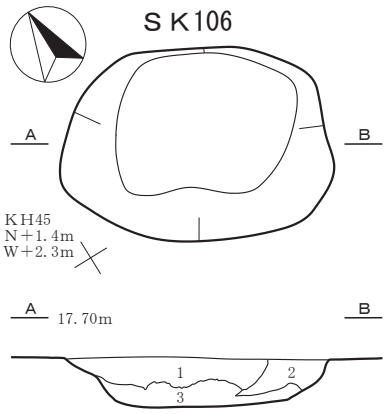
Ｐ07
1　にぶい黄橙色（10ＹＲ6/3）シルト
　しまり中　粘性やや弱
2　黄褐色（10ＹＲ5/6）シルト
　しまり中　粘性やや弱
　混入物：炭化物粒φ２㎜
　１％未満



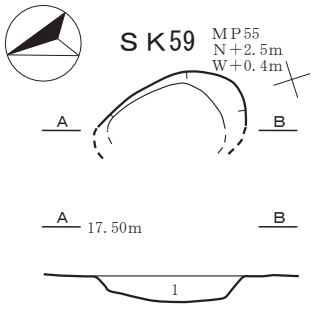
ＳＫ32
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ5/3）シルト
　しまり強　粘性弱
　混入物：炭化物粒φ１～２㎜１％未満、
　地山土塊φ10 ～ 50㎜10％
2　褐色（10ＹＲ4/4）シルト
　しまり強　粘性やや弱
　混入物：地山土塊φ30㎜１％



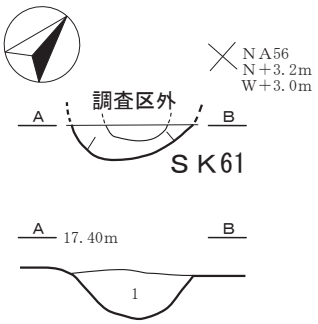
ＳＫ33
1　にぶい黄橙色（10ＹＲ7/4）シルト
　しまり強　粘性中
　混入物：暗褐色土塊φ５～ 20㎜３％



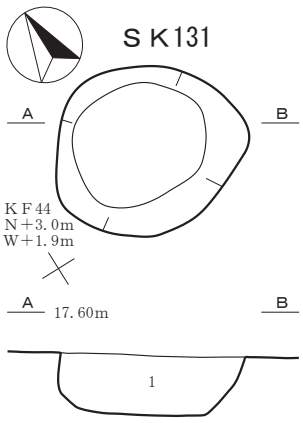
ＳＫ106
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）細砂混シルト
　しまり中　粘性弱
　混入物：地山土塊φ20㎜以下 30%、
　炭化物粒φ５㎜１％
2　褐色（10ＹＲ4/4）細砂混シルト　しまり中　粘性中
3　オリーブ褐色（2.5Ｙ4/4）～
　暗オリーブ褐色（2.5Ｙ3/3）シルト
　しまり中　粘性弱



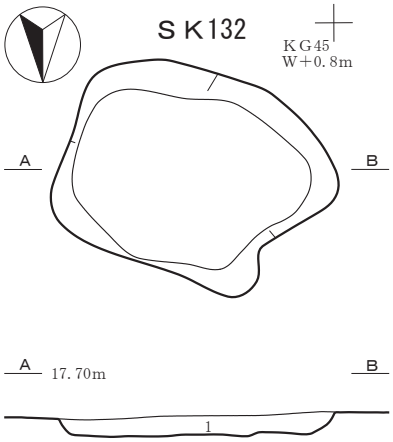
ＳＫ59
1　暗褐色（10ＹＲ3/3）シルト　しまり強　粘性中
　混入物：炭化物粒φ１以下～１㎜１％



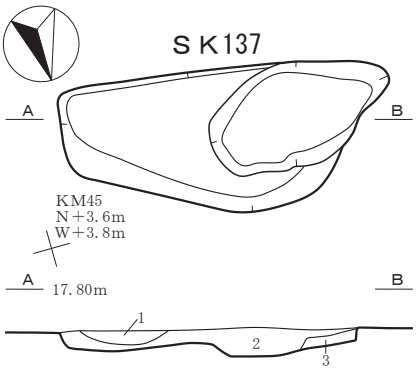
ＳＫ61
1　暗褐色（10ＹＲ3/3）シルト　しまり強　粘性中
　混入物：地山土粒φ２～５㎜１％、
　炭化物粒φ１㎜１％未満



ＳＫ131
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）シルト
　しまり中　粘性中
　混入物：暗褐色土筋状φ３㎜１％



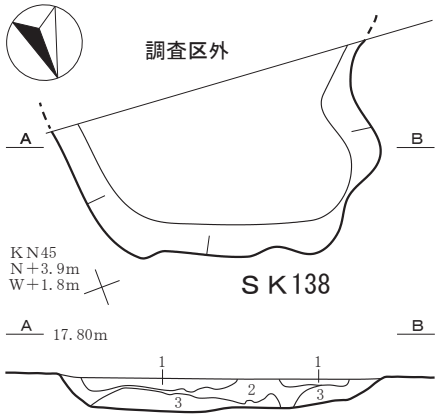
ＳＫ132
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ30㎜以下 30%、
　炭化物粒φ５㎜以下５%、焼土粒φ２㎜以下１%



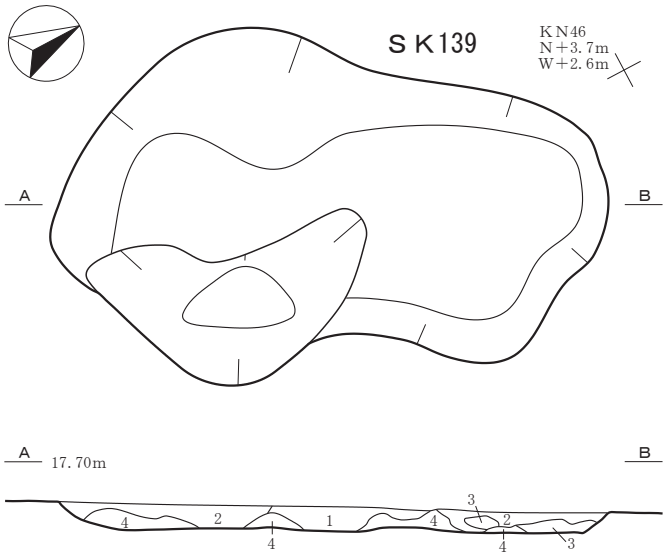
ＳＫ137
1　灰オリーブ色（５Ｙ5/3）細砂質シルト　しまり中　粘性弱
　混入物：地山土塊φ50㎜以下 30%、炭化物粒φ２㎜１％
2　暗オリーブ色（５Ｙ4/3）細砂質シルト　しまり中　粘性弱
　混入物：地山土塊φ10㎜以下 20%、炭化物粒φ２㎜１％
3　灰オリーブ色（５Ｙ5/3）細砂質シルト　しまり中　粘性弱
　混入物：地山土塊φ50㎜以下 30%、炭化物粒φ２㎜１％

0　（Ｓ＝1／40）　2 m

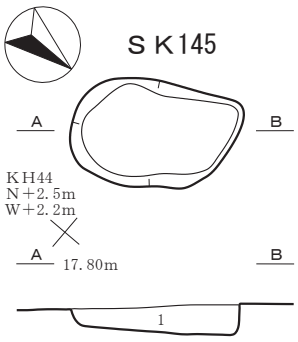
第 110 図　ＳＫ26・32・33・59・61・106・131・132・137 土坑、Ｐ07



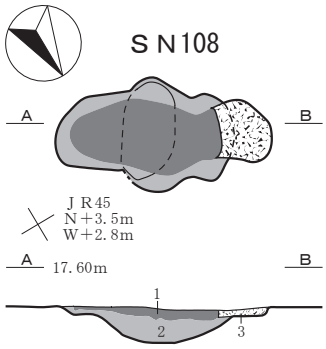
SK138
1　暗オリーブ色（５Y4/3）細砂質シルト　しまり中　粘性弱
　混入物：地山土粒φ５㎜以下10%、炭化物粒φ20㎜以下５%
2　灰色（５Y4/1）細砂質シルト　しまり中　粘性弱
　混入物：灰褐色土粒φ５㎜以下10%、
　植物遺体及び炭化物20%
3　灰オリーブ色（５Y5/3）シルト質粘土　しまり強　粘性強
　混入物：地山土粒φ50㎜以下に灰褐色土が混入10%、
　炭化物粒φ５㎜以下１%



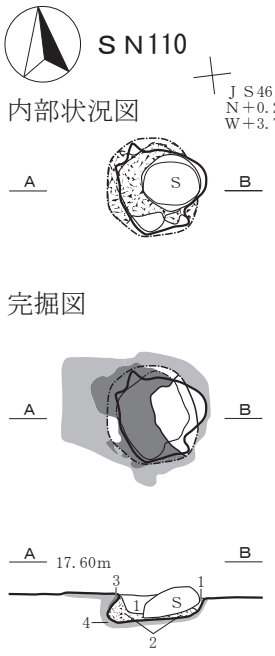
SK139
1　オリーブ黒色（５Y3/2）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ50㎜以下30%、炭化物塊φ10㎜以下５%、焼土粒φ２㎜以下１%
2　暗オリーブ色（５Y4/4）細砂混シルト　しまり中　粘性弱
　混入物：地山土塊φ10㎜以下20%、炭化物粒φ５㎜以下１%
3　暗オリーブ色（５Y4/3）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：地山土塊φ30㎜以下30%、炭化物粒φ５㎜以下１%
4　灰オリーブ色（５Y5/3）シルト質粘土　しまり中　粘性強
　混入物：灰褐色土10%、炭化物粒φ５㎜以下１%



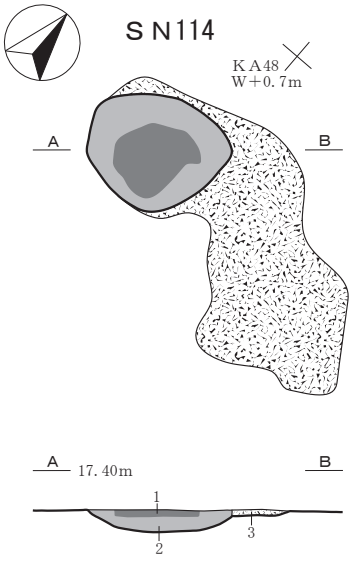
SK145
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト
　しまり中　粘性中



SN108
1　赤褐色（５YR4/8）焼土　しまり中　粘性弱
2　褐色（7.5YR4/3）焼土　しまり中　粘性中
3　炭化物層　シルト　しまり強　粘性中



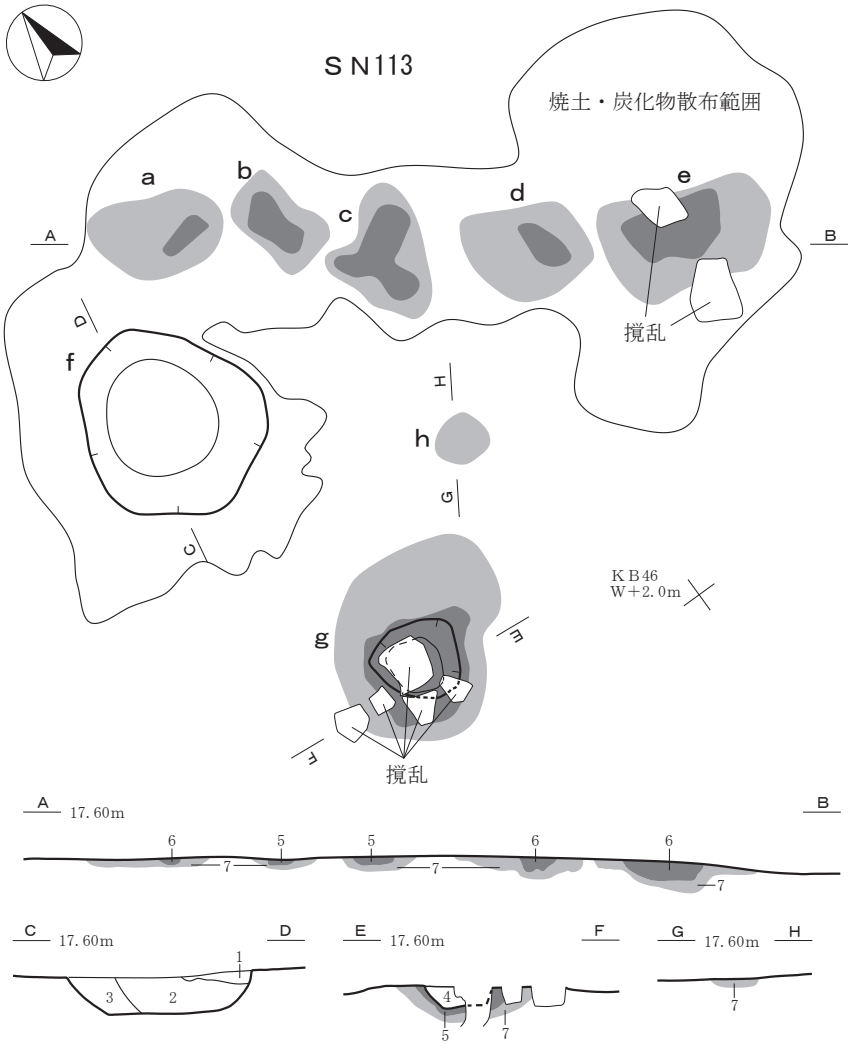
SN110
1　暗褐色（10YR4/4）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：焼土粒φ１㎜以下１%未満、
　炭化物粒φ１㎜以下１%
2　暗褐色（10YR4/4）シルト　しまり中　粘性中
　混入物：炭化物粒φ10㎜以下20%
3　赤褐色（５YR4/8）焼土　しまり中　粘性弱
4　褐色（7.5YR4/3）焼土　しまり中　粘性中



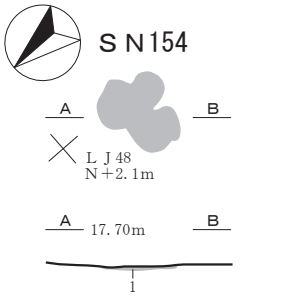
SN114
1　橙色（５YR6/8）焼土
　しまり強　粘性弱
2　褐色（7.5YR4/6）シルト
　しまり中　粘性中
　混入物：焼土大塊φ15㎜以下30%
3　炭化物の広がり

0　（S＝1／40）　2m

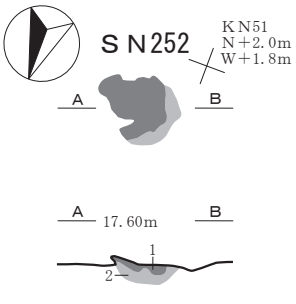
第 111 図　ＳＫ138・139・145 土坑、ＳＮ108・110・114 焼土遺構



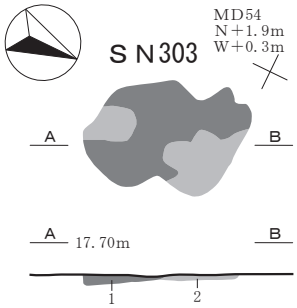
ＳＮ113
1　褐色（10ＹＲ4/4）シルト　しまり中　粘性中　混入物：炭化物粒φ５㎜以下１％、焼土粒φ５㎜以下５％
2　暗褐色（7.5ＹＲ3/4）シルト　しまり中　粘性中　混入物：炭化物粒φ２㎜以下１％、焼土塊φ20㎜以下 40％
3　にぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）シルト　しまり中　粘性中　混入物：炭化物粒φ２㎜以下１％、焼土粒φ１㎜以１％
4　暗褐色（7.5ＹＲ3/4）シルト　しまり中　粘性中　混入物：炭化物塊φ10㎜以下５％、焼土粒φ５㎜以下 10％
5　赤褐色（５ＹＲ4/6）焼土　しまり強　粘性弱
6　明赤褐色（7.5ＹＲ3/4）焼土　しまり強　粘性弱
7　褐色（7.5ＹＲ4/3）焼土　しまり中　粘性中



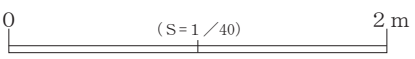
ＳＮ154
1　暗褐色（7.5ＹＲ３／３）焼土
しまりやや弱　粘性やや弱
混入物：炭化物塊φ５～ 10㎜１％



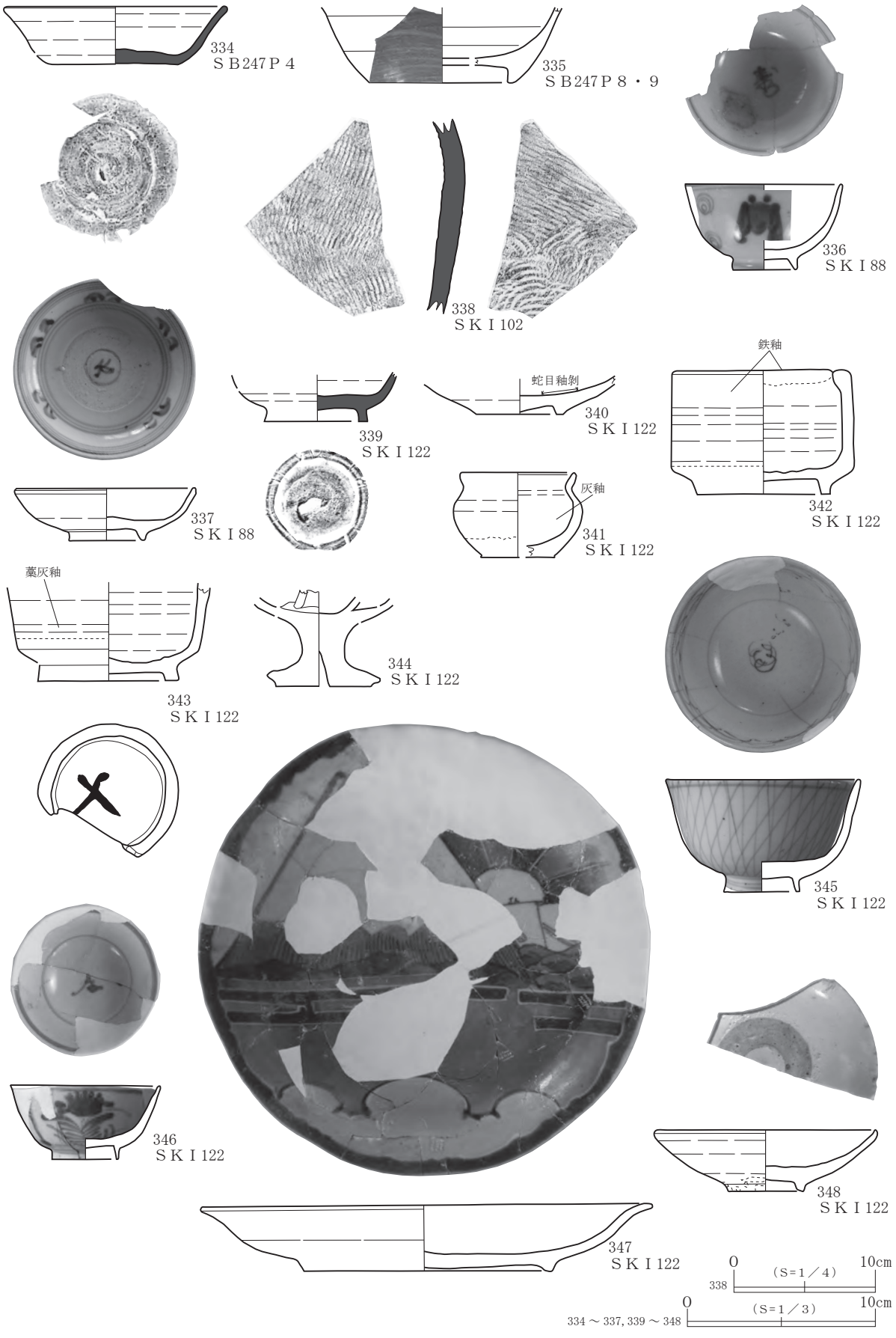
ＳＮ252
1　明赤褐色（５ＹＲ5/6）焼土　しまり中　粘性中
2　暗赤褐色（５ＹＲ3/3）焼土　しまり中　粘性中
混入物：明赤褐色焼土塊φ10㎜以下５％



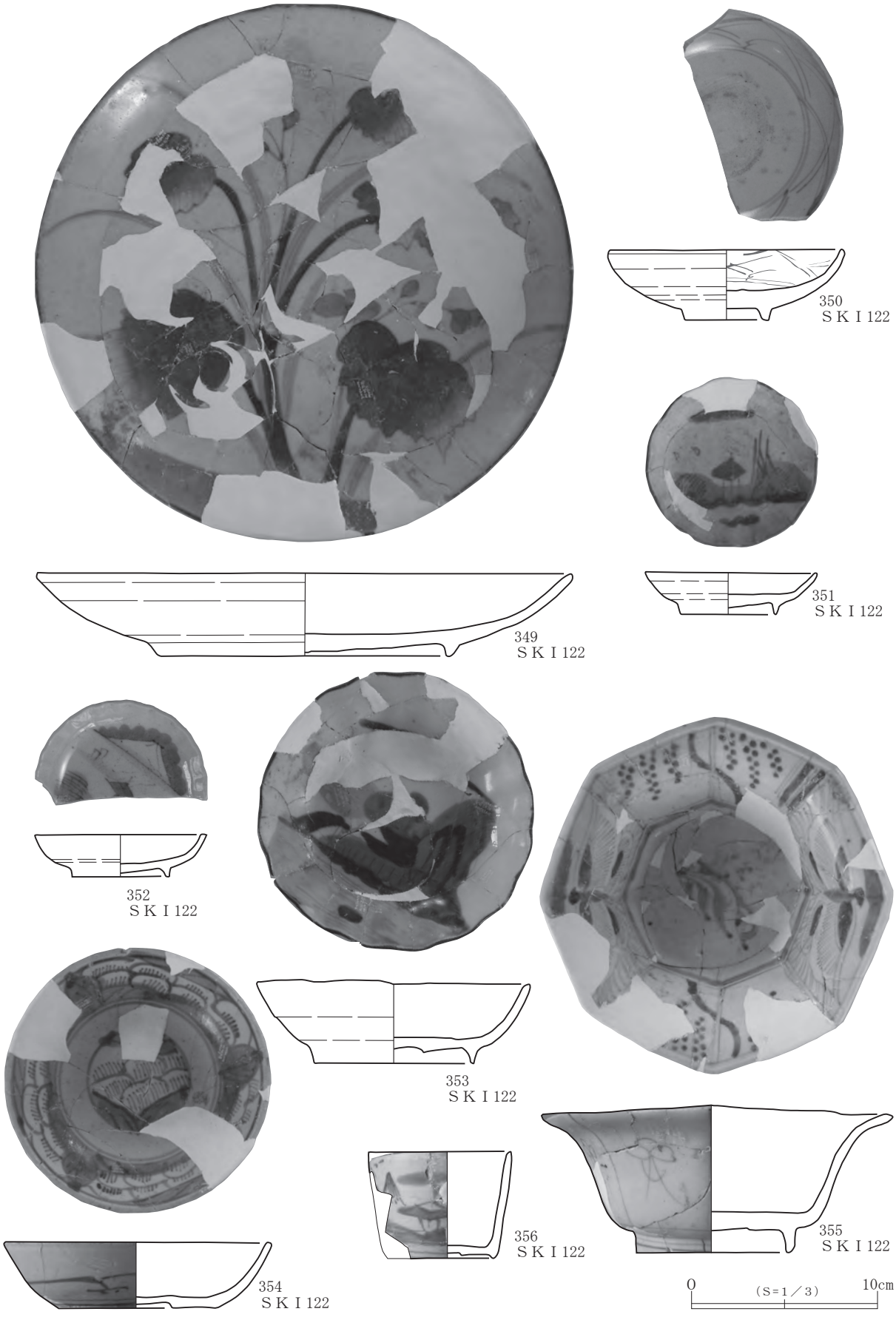
ＳＮ303
1　明赤褐色（５ＹＲ5/6）焼土　しまり中　粘性中
混入物：暗褐色土 50％
2　暗赤褐色（５ＹＲ3/6）焼土　しまり中　粘性中
混入物：暗褐色土 50％



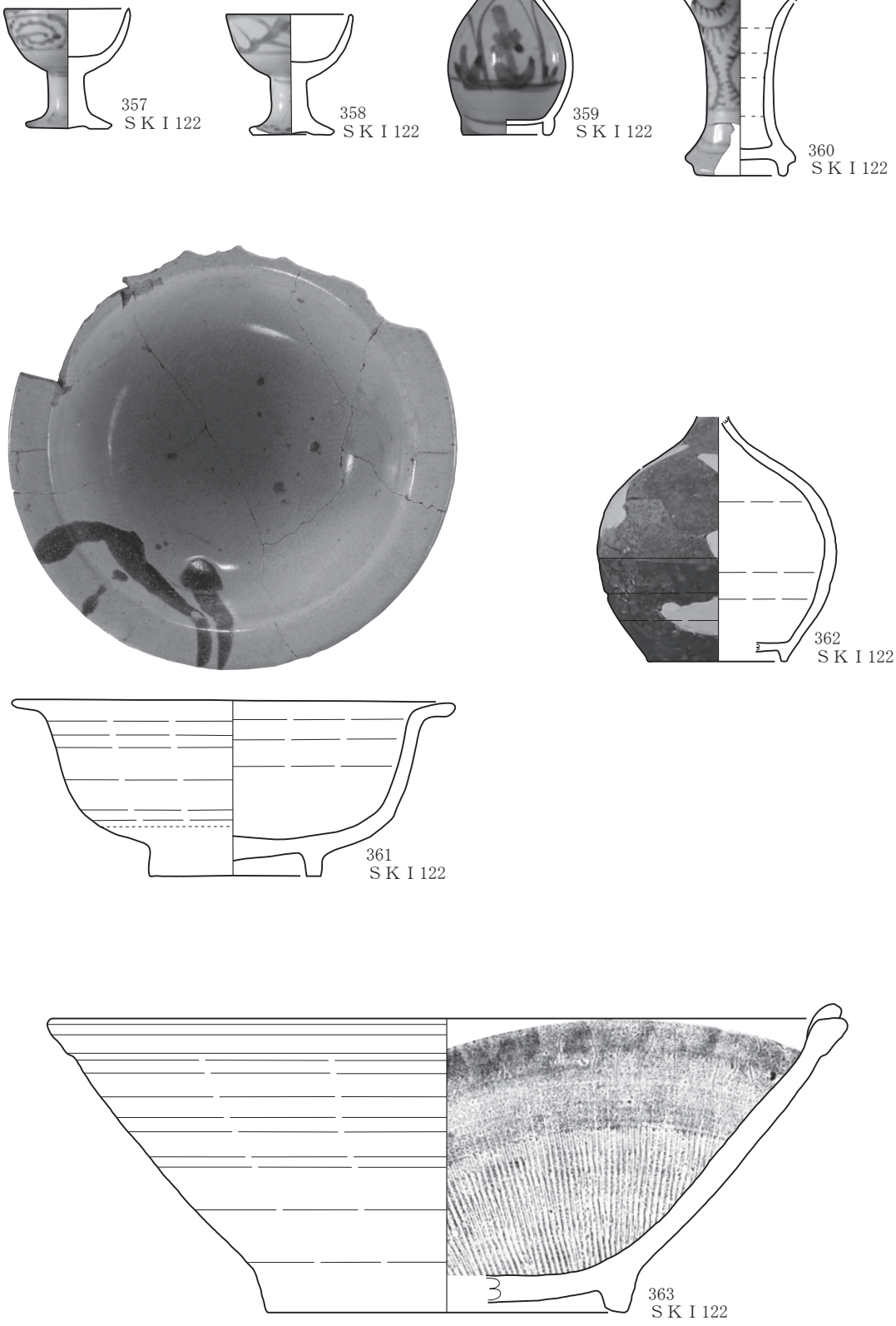
第 112 図　ＳＮ113・154・252・303 焼土遺構



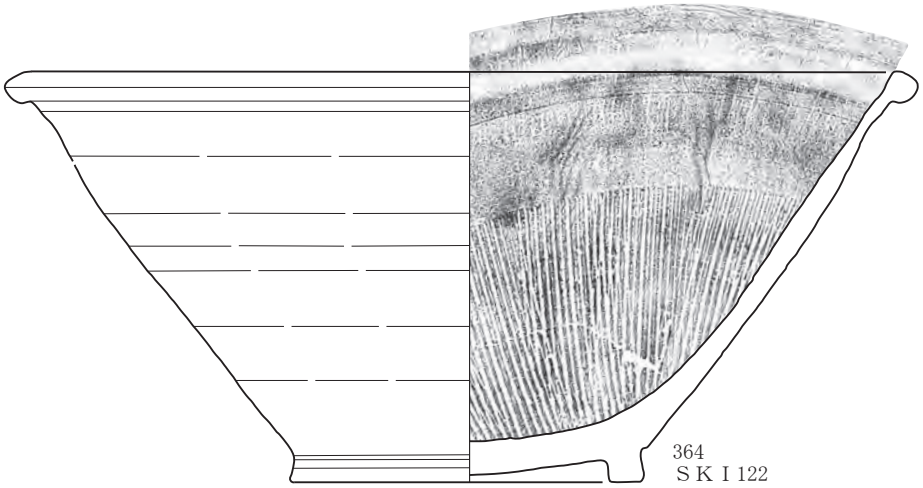
第 113 図　近世遺構内出土遺物（１）

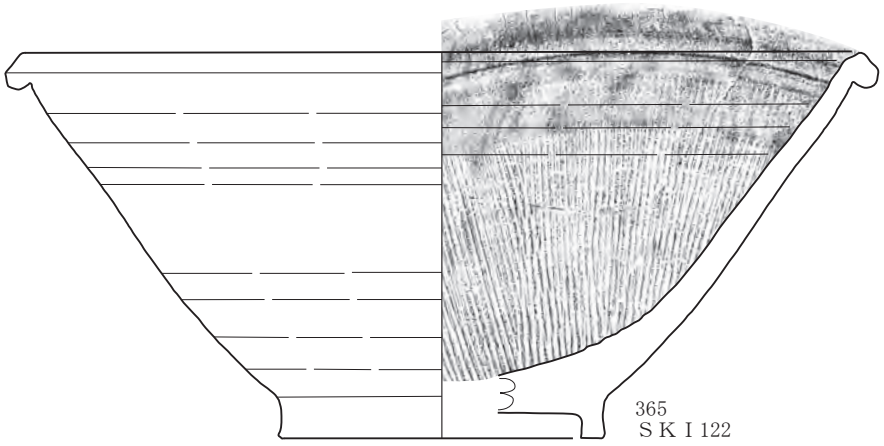


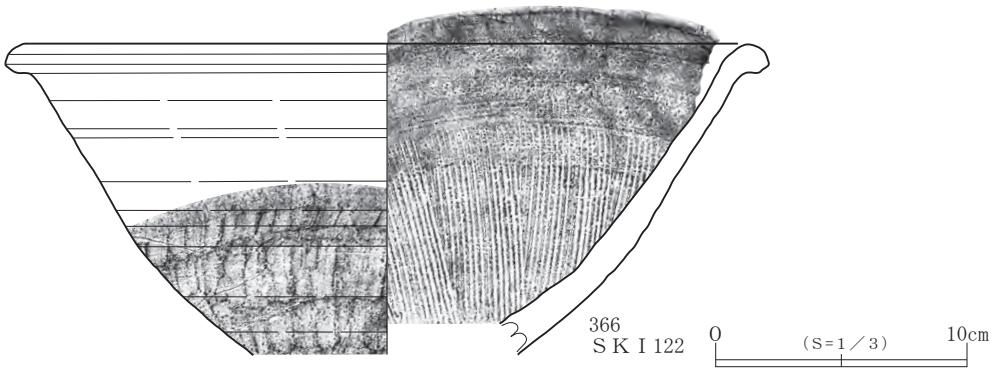
第 114 図　近世遺構内出土遺物（２）



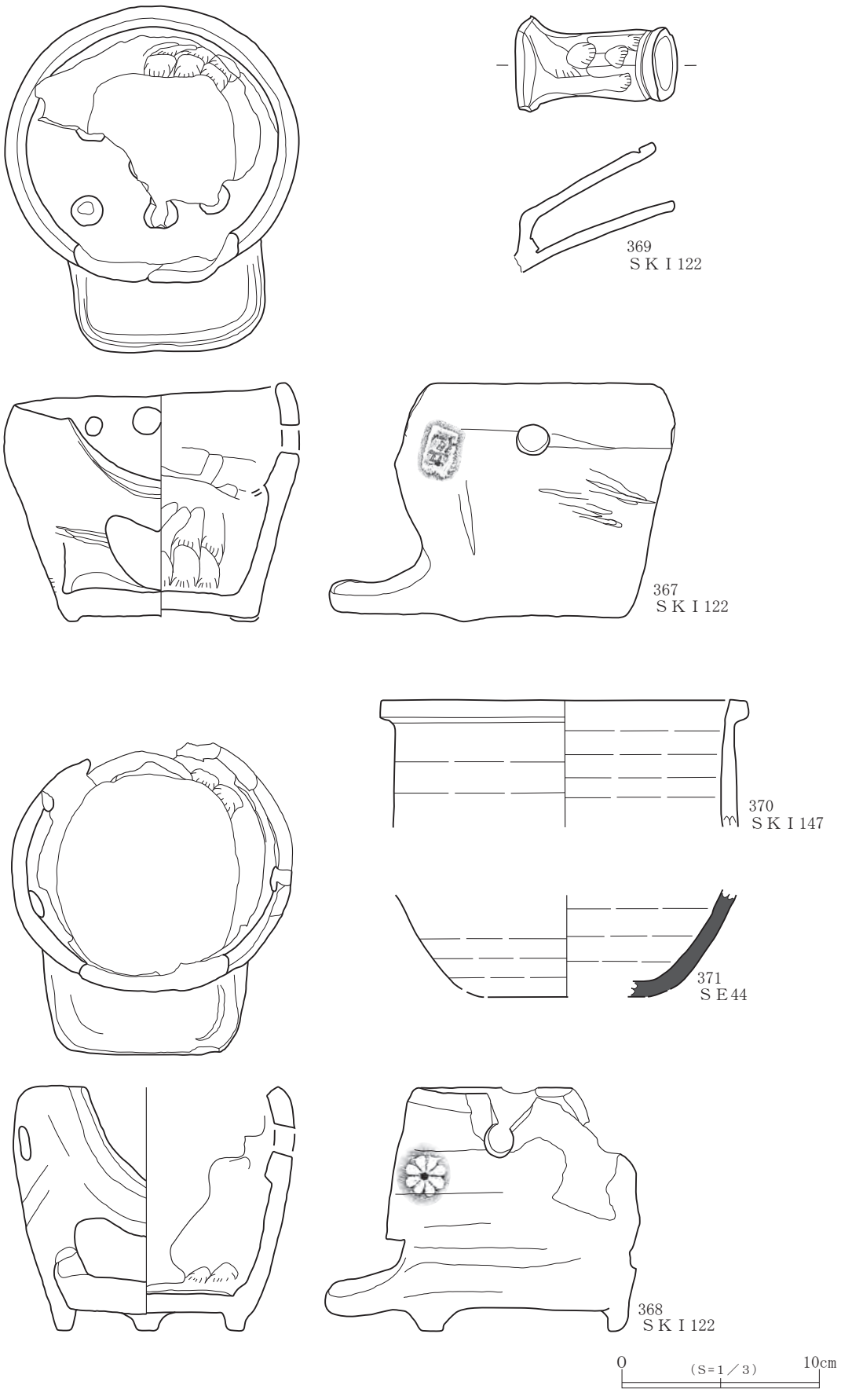
第 115 図　近世遺構内出土遺物（３）



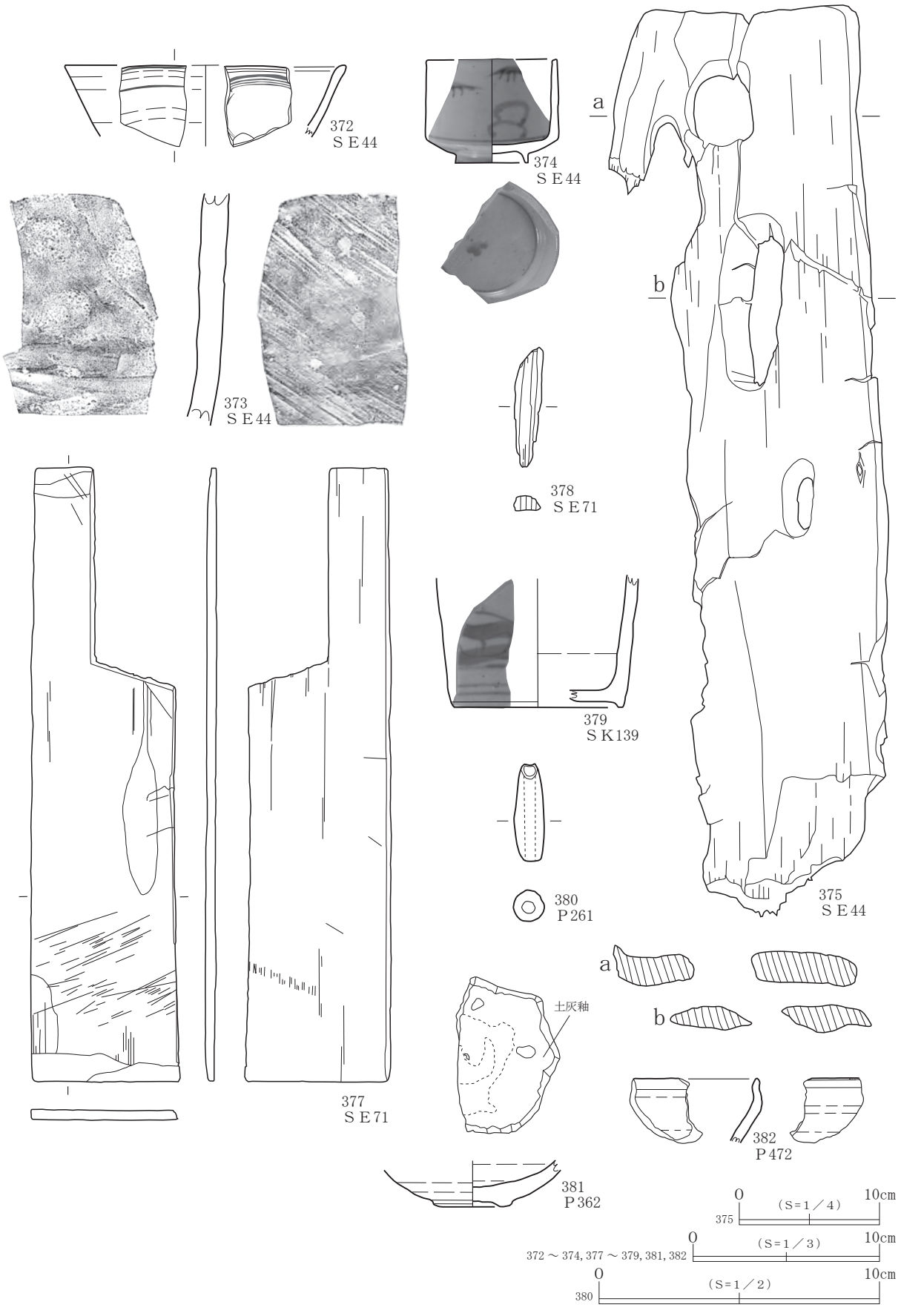




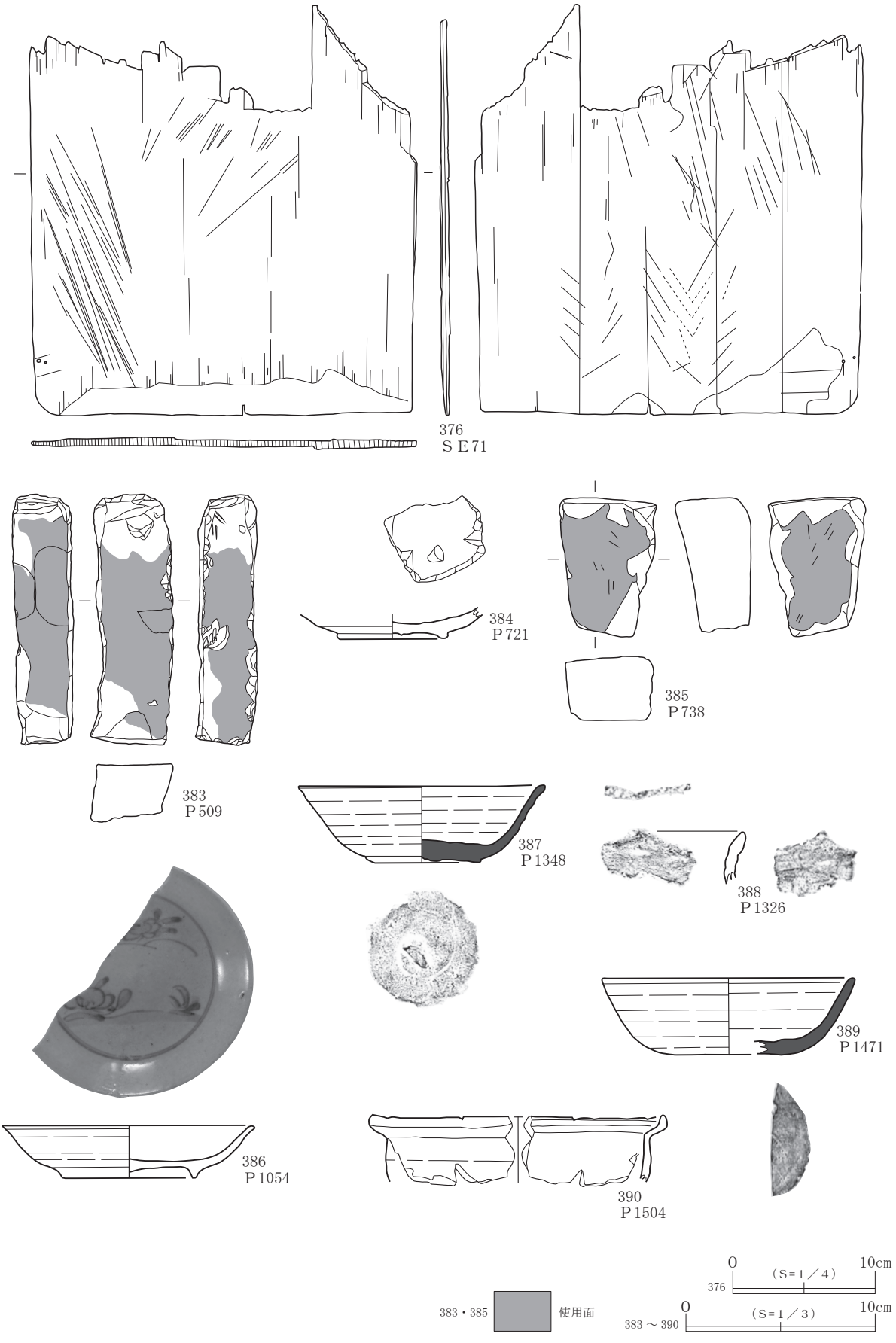
第 116 図　近世遺構内出土遺物（４）



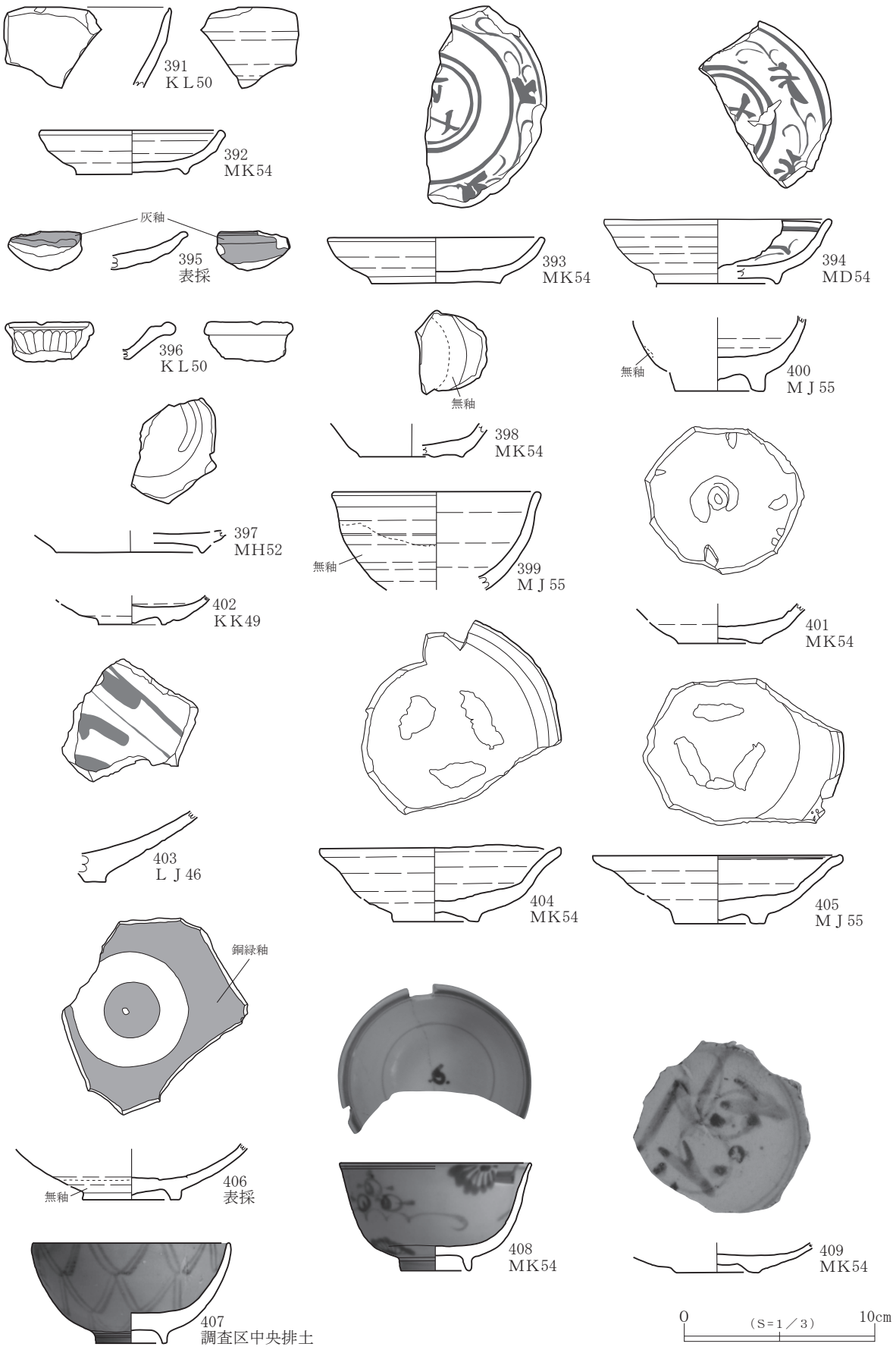
第 117 図　近世遺構内出土遺物（５）



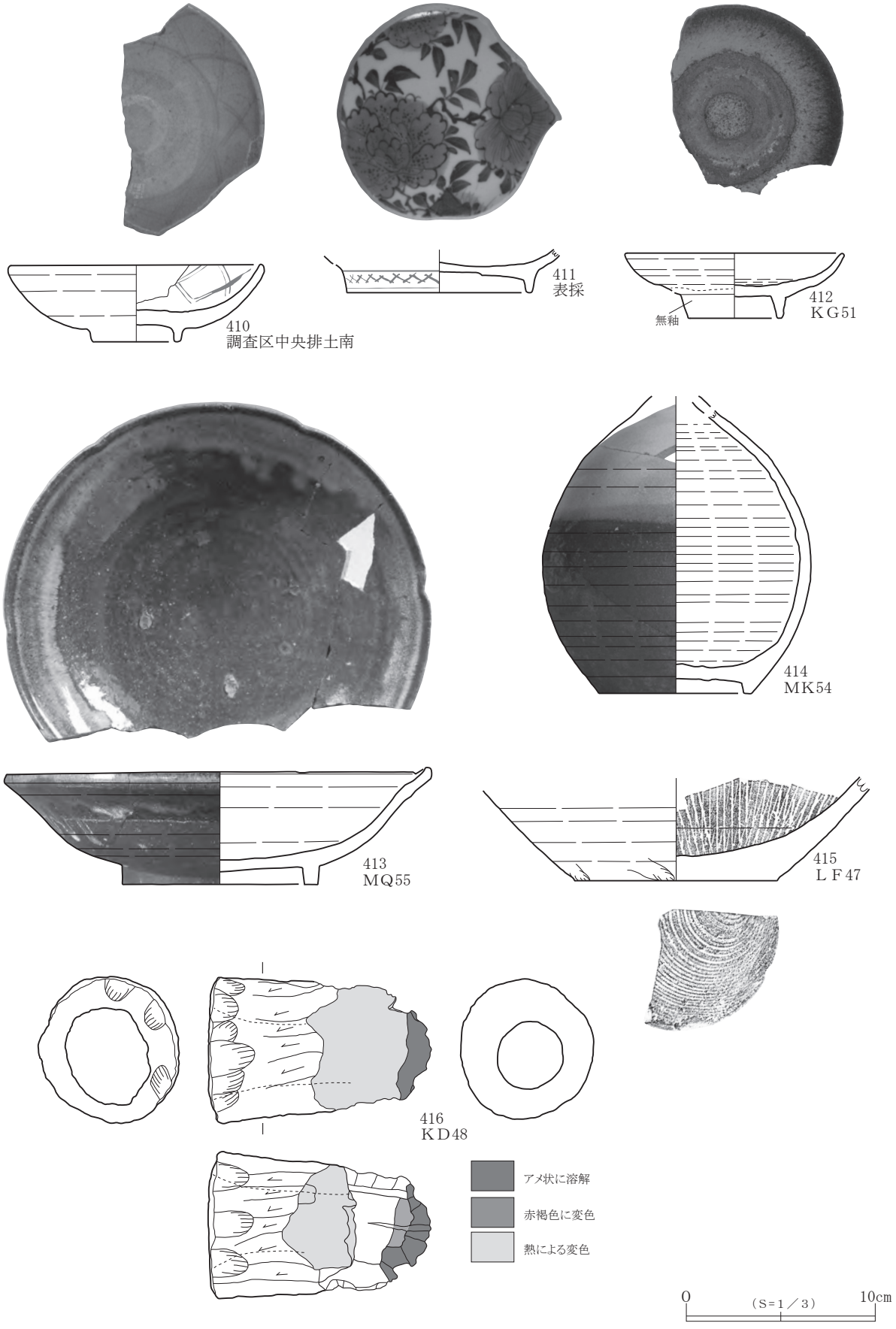
第 118 図　近世遺構内出土遺物（６）



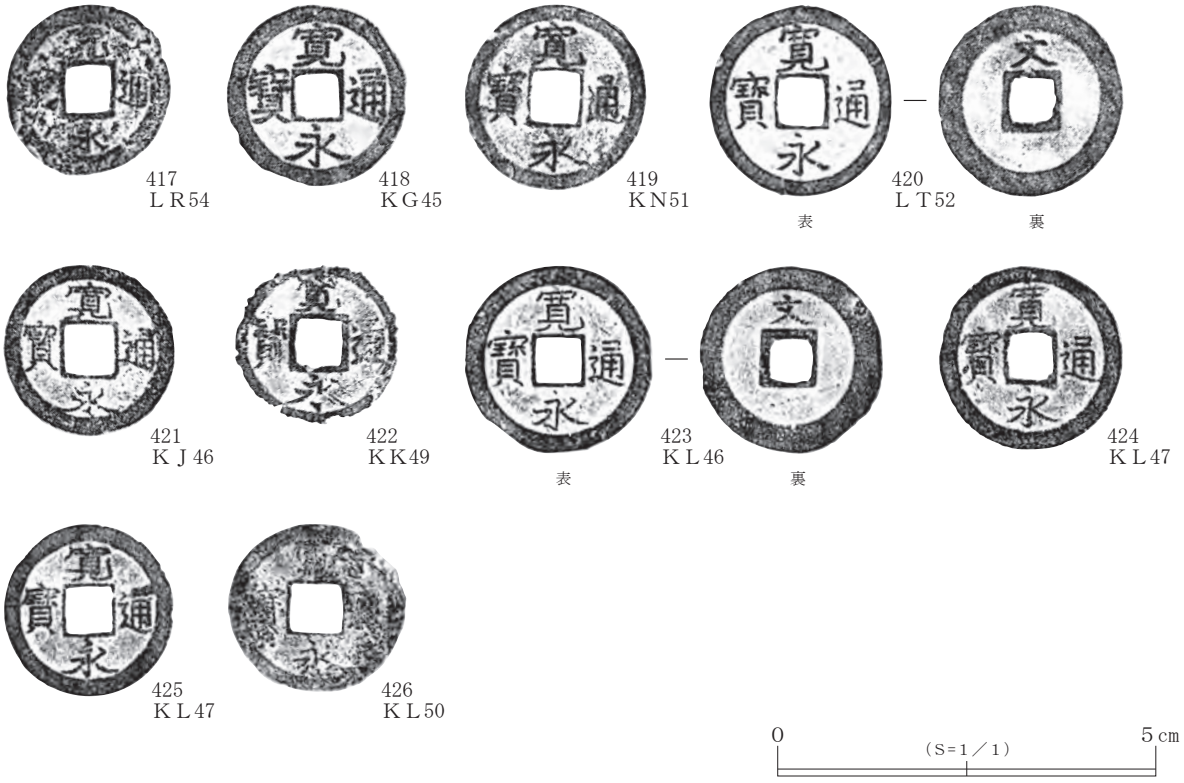
第 119 図　近世遺構内出土遺物（７）



第 120 図　近世遺構外出土遺物（１）



第 121 図　近世遺構外出土遺物（２）



第 122 図　近世遺構外出土遺物（３）

第 15 表　銭貨・鉄滓一覧表

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	分類	器種	口径・長さ（cm）	底径・幅（cm）	器高・厚さ（cm）	重量（g）	備考
260	88	－	ＳＥ30	1層	鉄滓	碗形滓	5.5	5.8	2.5	80.2	
266	89	－	ＳＥ31	5層	銭貨	熙寧元寶	2.4	－	0.15	4.6	北宋銭（1068年初鋳）。
302	93	－	ＳＥ211	－	銭貨	元豊通寶	2.4	－	0.1	1.3	北宋銭（1078年初鋳）。
312	94	－	ＳＴ60	1層	銭貨	元〇通寶	〈2.2〉	〈1.6〉	0.15	1.2	北宋銭。元豊通寶（1078年初鋳）、元祐通寶（1086年初鋳）、元符通寶（1098年初鋳）のうちいずれか。
313		－			銭貨	洪武通寶（他３枚）	１枚目2.2 ２枚目2.5 ３枚目[2.1] ４枚目[2.0]	－	１枚目0.1 ２枚目0.2 ３枚目0.15 ４枚目0.25	総重量6.1	明銭。1368年初鋳。４枚（１枚目：洪武通寶、他不明）癒着。
417	122	－	ＬＲ54	Ⅲ層	銭貨	寛永通宝	2.3	－	0.1	2.0	古寛永銭。
418		－	ＫＧ45	－	銭貨	寛永通宝	2.4	－	0.1	2.3	古寛永銭。
419		－	ＫＮ51	Ⅲ層	銭貨	寛永通宝	2.4	－	0.1	2.4	古寛永銭。
420		－	ＬＴ52	Ⅲ層	銭貨	寛永通宝	2.5	－	0.1	3.5	新寛永銭。裏に「文」。
421		－	ＫＪ46	Ⅲ層	銭貨	寛永通宝	2.3	－	0.1	1.6	新寛永銭。
422		－	ＫＫ49	Ⅲ層	銭貨	寛永通宝	2.2	－	0.1	1.7	新寛永銭。
423		－	ＫＬ46	Ⅲ層	銭貨	寛永通宝	2.5	－	0.1	3.9	新寛永銭。裏に「文」。
424		－	ＫＬ47	Ⅲ層	銭貨	寛永通宝	2.5	－	0.1	3.2	新寛永銭。
425		－			銭貨	寛永通宝	2.3	－	0.1	2.1	新寛永銭。
426		－	ＫＬ50	Ⅲ層	銭貨	寛永通宝	2.3	－	0.1	1.7	新寛永銭。変形している。

※[　]内の数値は推定値、〈　〉内の数値は残存値を表す。

第 16 表　土器・陶磁器一覧表（１）

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	分類	器種	部位	調整等	口径・長さ(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	49	21	ＳＫＩ104	－	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	[11.8]	[6.6]	3.5	41.1	白色焼成。底:[0.55]、高:[0.29]、外:28.5°。
3		－	ＳＥ72	中位層	須恵器系陶器	袋物	胴	【内外面】ロクロナデ	－	－	－	114.8	
20	52	21	ＳＫ117	－	土師器	甕	胴	【内面】横位ハケメ→縦位ハケメ　【外面】横位ハケメ	－	－	〈13.4〉	89.4	長胴甕。
21		－	ＳＫ133	－	土師器	甕	口～頸	【内外面】ハケメ、横ナデ	[16.0]	－	〈5.5〉	54.0	
22		－		－	須恵器	坏	口～胴	【内外面】ロクロナデ	[12.6]	－	〈4.0〉	19.0	白色焼成。
25		21	ＳＫ136	上位層	須恵器	坏蓋	天井～脚	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、天井部；切離不明→摘貼付	脚部[15.8]	天井部[6.7]	〈2.4〉	97.4	摘部は欠損。
26		－		－	須恵器	坏	口～胴	【内外面】ロクロナデ	[11.4]	－	〈3.4〉	9.1	白色焼成。
27		21	ＳＫ140	－	土師器	甕	胴	【内外面】平行叩き	－	－	〈5.4〉	59.5	長胴甕。
28		21		－	土師器	甕	胴～底	【内面】ロクロナデ　【外面】ロクロナデ、底部；回転糸切	－	6.0	〈5.0〉	134.9	
29		21		－	須恵器(墨書)	坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	－	[7.8]	〈1.9〉	24.2	白色焼成。底面に墨書(不明文字)あり。
30		－	ＳＫ144	－	須恵器	甕	胴	【内外面】平行叩き	－	－	〈5.1〉	45.7	
31		－	ＳＫ226	－	須恵器	坏	口～胴	【内外面】ロクロナデ	[10.0]	－	〈3.5〉	11.8	白色焼成。
32		7・21	ＳＫ239	－	土師器	甕	口～胴	【内面】横位ハケメ　【外面】縦位ハケメ→横ナデ	[18.6]	－	〈9.4〉	142.8	
33		7・21		－	土師器	甕	口～胴	【内面】横位ハケメ、横ナデ　【外面】縦位ハケメ、横ナデ	[21.0]	－	〈8.4〉	75.0	
34		－		－	土師器	甕	口～胴	【内外面】縦位ナデ	[8.9]	－	〈4.6〉	22.1	摩滅強。
35	53	21		－	土師器	甕	胴～底	【内面】指ナデ　【外面】ケズリ、底部；ヘラナデ調整か	－	[9.2]	〈7.0〉	182.0	
36		7・21		－	土師器	甕	口～胴	【内面】ロクロナデ 【外面】平行叩き→ロクロナデ→ケズリ	[24.8]	－	〈20.9〉	1448.0	胴部は摩滅し、叩きの痕跡がわずかに残る。
37		7		－	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切(右回転)	[12.8]	[5.6]	3.5	25.2	白色焼成。底:[0.44]、高:[0.27]、外:40°。
38		7		－	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切(右回転)	13.0	6.5	3.4	127.5	酸化炎焼成で土師質(一部還元炎焼成)。底:0.50、高:0.26、外:44°。
39		21		－	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切(右回転)	12.1	6.4	3.7	115.1	白色焼成。底:0.53、高:0.31、外:30°。
40		－		－	須恵器	坏	底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転糸切(右回転)	－	6.4	〈1.0〉	51.1	酸化炎焼成で、土師質。
42		21	ＫＪ46	－	土師器	台付坏	口～高台	【内面】ロクロナデ→ミガキ→黒色処理　【外面】ロクロナデ、底部；切離不明→棒状工具による調整→高台貼付	[14.2]	7.9	8.2	173.2	内面黒色処理。底:[0.56]、高:[0.58]、外:20°。
43		－	ＪＱ45	Ⅲ層	土師器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ　【外面】ロクロナデ、底部；切離不明	[10.8]	5.0	3.9	34.4	摩滅強。口縁部内面及び外面が煤けている。灯明皿として使用。底:0.46、高:0.36、外:23°。
44		－	ＫＢ45	－	土師器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ　【外面】ロクロナデ、底部；切離不明	[13.0]	[6.0]	4.1	21.9	摩滅強。底:[0.46]、高:[0.32]、外:26°。
45		－	ＫＰ47	Ⅲ層	土師器	坏	口～胴	【内外面】ロクロナデ	[9.8]	－	〈4.3〉	16.3	摩滅強。
46		－	ＫＦ44	Ⅱ層	土師器	坏	底	【内面】ロクロナデ→ミガキ→黒色処理 【外面】ロクロナデ→黒色処理	－	－	〈2.4〉	18.3	内面黒色処理。外面一部黒色処理。
47		－	ＫＩ46	Ⅲ層	土師器	坏	底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転糸切	[9.4]	[5.2]	〈1.4〉	20.9	
48	54	22	ＫＤ50	Ⅲ層	土師器	甕	口～胴	【内面】横位ハケメ 【外面】横ナデ、ケズリ→縦位ハケメ	[22.4]	－	〈8.4〉	62.7	
49		22	ＫＲ47	Ⅲ層	土師器	甕	口～胴	【内面】横位ハケメ、ナデ 【外面】縦位ハケメ、ケズリ→指ナデ、横ナデ	[17.6]	－	〈9.2〉	113.4	外面のハケメが、内面のハケメに比べ細かい。内面一部摩滅。同一個体を含めた重量198.5ｇ。
50		－	ＫＩ49	Ⅲ層	土師器	甕	口～頸	【内面】不明　【外面】ケズリ、横ナデ	[19.6]	－	〈5.9〉	63.6	摩滅強。
51		－		Ⅱ層	土師器	甕	口～頸	【内面】横ナデ　【外面】横ナデ、ケズリ	－	－	〈5.0〉	20.4	内面摩滅強。
52		－	ＫＥ44	Ⅲ層	土師器	甕	口～胴	【内面】ナデ　【外面】縦位ハケメ→ナデ	[14.2]	－	〈4.5〉	18.2	内面煤付着。摩滅強。
53		－	ＫＪ46	Ⅲ層	土師器	甕	口～頸	【内面】横ナデ　【外面】横ナデ→横位ハケメ	－	－	〈3.7〉	32.6	
54		－	ＫＨ45	Ⅲ層	土師器	甕	口～頸	【内面】横位ハケメ　【外面】ナデ	[16.0]	－	〈3.1〉	27.5	
55		－	ＫＤ46	Ⅲ層	土師器	甕	口	【外面】不明　【内面】ナデ→黒色処理	－	－	〈3.4〉	14.9	内面黒色処理。外面摩滅。
56		－	ＪＲ45	Ⅲ層	土師器	甕	口～頸	【内面】不明　【外面】横ナデ、縦位ハケメ	－	－	〈5.3〉	24.1	内面摩滅強。
57		－	ＫＦ40	Ⅲ層	土師器	甕	口～頸	【内外面】ナデ	－	－	〈2.7〉	5.2	内面煤付着。摩滅強。同一個体を含めた重量7.6ｇ。
58		22	ＫＲ47	Ⅲ層	土師器	甕	頸	【内面】ハケメ　【外面】多条沈線文	－	－	〈4.8〉	19.8	多条沈線文土器。
59		22	ＫＭ50	Ⅲ層	土師器	甕	胴～底	【内面】横位ハケメ　【外面】縦位ハケメ、底部；木葉痕	－	8.6	〈10.0〉	328.8	外面のハケメが、内面のハケメに比べ細かい。
60		22	ＫＮ48	Ⅲ層	土師器	甕	胴～底	【内面】指ナデ　【外面】ナデ→ケズリ、底部；木葉痕	－	[11.6]	〈6.7〉	426.0	同一個体を含めた重量626.0ｇ。
61		22	ＫＢ45	－	土師器	甕	胴～底	【内面】横位ハケメ　【外面】縦位ハケメ、底部；砂底痕	－	[11.4]	〈8.7〉	547.2	外面摩滅強。
62		－	ＫＥ44	Ⅲ層	土師器	甕	胴～底	【内面】不明　【外面】ケズリ→ナデ、底部；木葉痕	－	[10.8]	〈2.9〉	50.0	外面一部摩滅。
63	55	22	ＫＮ48	Ⅲ層	土師器	甕	胴～底	【内面】不明　【外面】ナデ、底部；砂底痕	－	[12.0]	〈3.7〉	156.6	球胴底。
64	54	－	ＫＭ50	Ⅲ層	土師器	甕	胴～底	【内面】ハケメ　【外面】ナデ→ケズリ、底部；笹葉痕	－	9.0	〈2.9〉	91.0	
65	55	－	ＫＰ50	Ⅲ層	土師器	甕	底	【内面】指頭オサエ　【外面】ケズリ、ナデ、底部；笹葉痕	－	8.5	〈2.6〉	143.1	
66		－	ＫＱ48	Ⅲ層	土師器	甕	胴～底	【内面】ハケメ、指ナデ　【外面】不明、底部；笹葉痕か	－	[7.8]	〈2.4〉	46.6	
67		22	ＫＯ49	Ⅲ層	土師器	甕	口～胴	【内面】ロクロナデか、当て具不明 【外面】ロクロナデ、平行叩き	[22.2]	－	〈32.5〉	498.0	長胴甕。上部及び内面は摩滅強。同一個体を含めた重量798.8ｇ。
68		－	ＫＪ49	Ⅲ層	土師器	甕	口～頸	【内外面】ロクロナデ	[20.6]	－	〈4.7〉	26.0	摩滅強。
69		－	ＫＦ45	Ⅲ層	土師器	甕	口～頸	【内外面】ロクロナデ	[21.0]	－	〈4.0〉	25.3	摩滅強。
70		－	ＫＩ48	Ⅲ層	土師器	甕	口～頸	【内外面】ロクロナデ	[15.8]	－	〈5.4〉	33.6	
71		－	ＫＯ49	Ⅲ層	土師器	甕	口～頸	【内外面】ロクロナデ	[21.0]	－	〈5.6〉	49.6	内面摩滅強。
72		－	ＫＰ51	Ⅲ層	土師器	甕	口～頸	【内外面】ロクロナデ	[25.7]	－	〈8.0〉	34.9	外面及び一部内面のロクロナデの痕跡がハケメ状に残る。
73	56	－	ＫＩ49	Ⅲ層	土師器	甕	口～胴	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ→指ナデ→横位ハケメ	[17.2]	－	〈14.7〉	104.0	摩滅強。
74		22	ＫＬ48	Ⅲ層	土師器	甕	口～頸	【内面】ロクロナデ→横位ハケメ　【外面】ロクロナデ	[22.9]	－	〈4.2〉	25.8	
75		－	ＫＪ48	Ⅲ層	土師器	甕	口～頸	【内外面】ロクロナデ	[22.6]	－	〈5.6〉	31.4	内面ロクロナデの痕跡がハケメ状に残る。
76		－	ＫＰ51	Ⅲ層	土師器	甕	口～胴	【内面】ロクロナデ→ナデ　【外面】ロクロナデ	[11.1]	－	〈3.6〉	9.7	内面口縁部及び外面頸部に煤付着。摩滅強。
77		－	ＫＨ45	Ⅲ層	土師器	甕	口～頸	【内外面】ロクロナデ	[27.2]	－	〈3.2〉	15.0	内面ロクロナデの痕跡がハケメ状に残る。
78		－	ＫＬ48	Ⅲ層	土師器	甕	口～頸	【内面】ロクロナデ→横位ハケメ　【外面】ロクロナデ	[19.2]	－	〈4.0〉	21.2	摩滅強。
79		22	ＫＰ51	Ⅲ層	土師器	甕	口～胴	【内外面】ロクロナデ	[12.8]	－	〈6.4〉	28.0	内面ロクロナデ痕が、ハケメ状に残る。同一個体を含めた重量35.4ｇ。
80		－	ＫＩ49	Ⅲ層	土師器	甕	口～胴	【内外面】ロクロナデ	[10.8]	－	〈4.0〉	17.4	内外面煤付着。摩滅強。

※[　]内の数値は推定値、〈　〉内の数値は残存値、備考の底は底径指数、高は高径指数、外は外傾度を表す。

第 17 表　土器・陶磁器一覧表（２）

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	分類	器種	部位	調整等	口径・長さ(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚さ(cm)	重量(g)	備考
81	56	－	ＫＱ47	Ⅲ層	土師器	甕	口	【内面】ロクロナデ　【外面】ロクロナデ→平行叩き	－	－	〈6.3〉	29.4	摩滅強。
82		－	ＫＭ50	－	土師器	甕	口～胴	【内外面】ロクロナデ	－	－	〈7.1〉	47.0	外面にロクロナデの痕跡がハケメ状に残る。
83		－	ＫＫ49	Ⅲ層	土師器	甕	口～胴	【内面】ロクロナデ　【外面】平行叩き→ロクロナデ	－	－	〈5.7〉	40.7	
84		－	ＫＬ49	Ⅲ層	土師器	甕	口～頸	【内外面】ロクロナデ	－	－	〈7.6〉	26.5	
85		－	ＫＪ48	Ⅲ層	土師器	甕	口～胴	【内面】ロクロナデ、横位ハケメ　【外面】ロクロナデ	－	－	〈7.5〉	66.0	摩滅強。
86		－		Ⅱ層	土師器	甕	口～頸	【内外面】ロクロナデ	－	－	〈4.9〉	21.2	
87		－	ＫＭ47	Ⅲ層	土師器	甕	口～頸	【内外面】ロクロナデ	－	－	〈5.1〉	32.3	摩滅強。
88		－	ＪＴ45	Ⅲ層	土師器	甕	口～胴	【内外面】ロクロナデ	－	－	〈4.8〉	10.5	口縁部内面煤付着。摩滅強。
89		－	ＫＨ46	Ⅲ層	土師器	甕	口～胴	【内外面】ロクロナデ	－	－	〈3.8〉	6.8	外面摩滅。
90	57	23	ＫＢ45	Ⅲ層	土師器	甕	胴	【内面】ロクロナデ→同心円状当て→横位ハケメ 【外面】ロクロナデ→平行叩き→横位ハケメ	－	－	〈15.2〉	151.3	長胴甕。
91		－	ＫＰ45	Ⅲ層	土師器	甕	胴	【内面】不明　【外面】ケズリ→平行叩き	－	－	〈9.8〉	79.2	長胴甕。内面摩滅強。
92		－	ＫＬ46	Ⅲ層	土師器	甕	胴	【内面】同心円状当て　【外面】平行叩き	－	－	〈4.8〉	32.0	長胴甕。
93		－	ＫＮ49	Ⅲ層	土師器	甕	胴	【内外面】平行叩き	－	－	〈5.6〉	37.7	長胴甕。
94		－	ＫＦ45	Ⅲ層	土師器	甕	胴	【内面】ハケメ→ナデ、当て具不明　【外面】平行叩き	－	－	〈6.2〉	68.2	長胴甕。
95		23	ＫＯ49	Ⅲ層	土師器	甕	胴	【内面】指頭オサエか、当て(当て具不明) 【外面】平行叩き	－	[4.0]	〈7.1〉	62.9	長胴甕。内面摩滅強。
96		23	ＫＨ45	Ⅲ層	土師器	甕	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；糸切(静止か回転かは不明)	－	[9.4]	〈2.8〉	68.0	
97		－	ＫＭ45	Ⅲ層	土師器	甕	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転糸切	－	[7.2]	〈3.2〉	26.4	摩滅強。
98		－	ＪＳ46	Ⅲ層	土師器	甕	底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデか、底部；回転糸切(右回転)	－	[6.6]	〈1.3〉	40.3	外面摩滅強。
99		23	ＫＭ48	－	土師器	甕	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転糸切か	－	[6.8]	〈2.9〉	61.3	内外面摩滅強。
100		－	ＪＱ44	Ⅲ層	土師器	甕	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデか、底部；回転糸切か	－	[7.4]	〈2.8〉	29.1	外面摩滅強。
101		23	ＫＩ46	Ⅲ層	土師器	甕	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転糸切(左回転)	－	5.2	〈2.6〉	63.0	摩滅強。
102		23	ＫＨ45	Ⅲ層	土師器	甕	胴～底	【内面】ロクロナデ　【外面】ロクロナデ、底部；回転糸切	－	4.8	〈4.1〉	66.1	外面摩滅強。
103	58	23	ＫＬ47	Ⅲ層	土師器	鍋	口～胴	【内外面】ロクロナデ	[32.8]	－	〈6.7〉	110.8	
104		－	ＫＬ50	Ⅲ層	土師器	鍋	口～頸	【内外面】ロクロナデ	－	－	〈2.6〉	24.9	
105		－	ＫＨ45	Ⅲ層	土師器	鍋	口～頸	【内外面】ロクロナデ	－	－	〈3.0〉	22.6	
106		－	ＫＬ51	Ⅲ層	土師器	鍋	口	【内外面】ロクロナデ	－	－	〈2.8〉	25.6	口縁部内面は一部煤けている。
107		23	ＫＪ46	Ⅲ層	土師器	鍋	底	【内面】平行叩き→ナデ　【外面】平行叩き	－	[21.4]	〈3.6〉	121.2	外面一部煤けている。外面摩滅強。
108		23	ＫＮ46	Ⅲ層	土師器	鍋	底	【内面】当て(当て具不明)　【外面】平行叩き	－	[22.6]	〈5.0〉	125.3	
109		23	ＫＪ46	Ⅲ層	須恵器	坏蓋	摘～端	【内面】ロクロナデ　【外面】ロクロナデ、天井部；回転ヘラ切→摘部貼付→ナデ調整	[15.0]	天井径 6.7	4.3	125.8	
110		23	ＫＮ48	Ⅲ層	須恵器	坏蓋	摘～端	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ→回転ヘラ切→摘部貼付	[16.6]	天井径 10.8	3.9	241.9	
111		23	ＫＰ50	Ⅲ層	須恵器	坏蓋	摘～胴	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、天井部；回転ヘラ切→摘部貼付	[12.4]	天井径 [7.0]	〈2.6〉	53.0	
112		23	ＫＰ48	Ⅲ層	須恵器	坏蓋	天井～端	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、天井部；回転ヘラ切→ナデ→摘部貼付	[12.8]	天井径 [4.0]	〈2.0〉	64.0	摘部欠損。
113		23	ＫＰ51	Ⅲ層	須恵器	坏蓋	胴～端	【内外面】ロクロナデ	[13.8]	－	〈2.0〉	18.0	
114		－	ＫＨ45	Ⅲ層	須恵器	坏蓋	胴～端	【内外面】ロクロナデ	[14.8]	－	〈1.6〉	10.0	
115		－	ＫＲ47	Ⅲ層	須恵器	坏蓋	胴～端	【内外面】ロクロナデ	[16.5]	－	〈2.2〉	19.0	
116		－	ＬＧ48	Ⅲ層	須恵器	坏蓋	胴～端	【内外面】ロクロナデ	[13.5]	天井径 [7.4]	〈1.4〉	9.0	
117		23	ＬＤ46	Ⅲ層	須恵器	坏蓋	天井～端	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、天井部；回転ヘラ切	[14.2]	天井径 [8.3]	〈2.0〉	41.0	
118		－	ＫＡ46	Ⅲ層	須恵器	坏蓋	胴～端	【内外面】ロクロナデ	[15.7]	天井径 [10.4]	〈1.8〉	10.0	
119		23	ＫＪ48	Ⅲ層	須恵器	坏蓋	胴～端	【内外面】ロクロナデ	[14.8]	天井径 [5.3]	〈2.2〉	18.0	内面に墨痕。硯として再利用か。
120		－	ＫＭ46	Ⅲ層	須恵器	坏蓋	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	－	[6.8]	〈1.2〉	32.0	内面に墨痕。硯として再利用か。
121	59	－	ＪＮ44	－	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	[13.5]	[9.0]	2.9	20.0	やや焼成不良。底:[0.67]、高:[0.21]、外:28.5°。
122		23	ＫＬ50	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	[15.4]	[10.3]	3.4	54.0	白色焼成。底:[0.67]、高:[0.22]、外:29.5°。
123		23	ＫＬ46	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	[11.9]	[8.6]	3.2	25.0	底:[0.72]、高:[0.27]、外:19°。
124		23	ＫＬ51	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切か	[14.8]	[9.8]	3.2	28.0	底:[0.66]、高:[0.22]、外:32.5°。
125		－	ＫＦ45	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	[12.9]	[8.5]	3.0	36.0	底:[0.66]、高:[0.23]、外:30.5°。
126		24	ＫＥ45	Ⅳ層上	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	12.9	[8.2]	3.0	101.7	底:0.64、高:0.23、外:35°。
127		24	ＫＭ50	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切(右回転)	[12.0]	[8.0]	3.1	22.0	底:[0.67]、高:[0.26]、外:26.5°。
128		24	ＫＭ51	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	[11.5]	[7.9]	3.2	25.0	白色焼成。底:[0.69]、高:[0.28]、外:30°。
129		－	ＫＤ47	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切か	[14.3]	[9.5]	3.9	23.0	底:[0.66]、高:[0.27]、外:22°。
130		24	ＫＢ45	－	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	[13.1]	[8.5]	3.4	25.0	白色焼成。底[0.65]:、高:[0.26]、外:30°。
131		－	ＫＪ46	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	[13.4]	[8.8]	3.7	48.0	白色焼成。底:[0.66]、高:[0.28]、外:25°。
132		24	ＫＮ48	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切(右回転)	[11.9]	8.1	3.4	80.0	白色焼成(土師器質)。口縁部外面煤付着。灯明皿として使用。底:[0.68]、高:[0.29]、外:23°。
133		－	ＬＣ46	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ　【外面】ロクロナデ、底部；回転糸切	[11.4]	[8.8]	4.3	19.0	底:0.77、高:0.38、外:9°。
134		24	ＫＤ48	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切(右回転)	[11.4]	7.8	3.7	91.0	白色焼成。底:[0.68]、高:[0.32]、外:19°。
135		－	ＫＮ46	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	[10.1]	[7.2]	3.2	15.0	底:[0.71]、高:[0.32]、外:18.5°。

※[　]内の数値は推定値、〈　〉内の数値は残存値、備考の底は底径指数、高は高径指数、外は外傾度を表す。

第 18 表　土器・陶磁器一覧表（３）

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	分類	器種	部位	調整等	口径・長さ(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚さ(cm)	重量(g)	備考
136		24	ＫＢ45	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	12.5	8.0	3.4	99.5	胴～底胴は酸化炎質。底:0.64、高:0.27、外:25.5°。
137		－	ＫＪ51	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	[12.1]	[7.4]	3.0	52.0	白色焼成。底:[0.61]、高:[0.25]、外:30.5°。
138		－	ＫＪ46	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	[12.7]	[8.0]	3.5	66.0	白色焼成。底部に段。内面が煤けている。灯明皿として使用か。底:[0.63]、高:[0.28]、外:29°。
139		－	ＫＭ47・50	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	[13.1]	[6.6]	3.8	77.0	焼成不良。ほぼ酸化炎。底:[0.56]、高:[0.29]、外:30°。
140		24	ＫＱ47	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	[14.0]	[8.2]	3.4	62.3	底:[0.59]、高:[0.24]、外:32.5°。
141		－	ＫＲ46	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	[14.3]	[8.9]	4.2	44.0	底:[0.62]、高:[0.29]、外:23.5°。
142		24	ＫＫ48	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	[12.2]	[7.5]	3.4	40.0	白色焼成。底:[0.61]、高:[0.28]、外:28°。
143	60	24	ＫＱ45	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	[12.3]	[7.4]	3.3	32.0	焼成不良。底部が酸化炎質。底:[0.60]、高:[0.27]、外:29°。
144		－	ＫＮ49	－	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	[12.2]	7.0	3.1	75.6	底:[0.57]、高:[0.25]、外:31.5°。
145		24	ＫＡ47	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切(右回転)→ナデ調整	[13.1]	7.4	3.4	114.0	白色焼成。底:[0.56]、高:[0.26]、外:32°。
146		－	ＫＬ45	Ⅱ・Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切(右回転)	[12.9]	[7.4]	3.4	54.0	白色焼成。灯明皿として使用か。底部に明瞭な段を持つ。底:[0.57]、高:[0.26]、外:35°。
147		24	ＪＴ44	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	[12.9]	[7.0]	3.0	20.0	底:[0.54]、高:[0.23]、外:33.5°。
148		24	ＫＩ49	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	[12.7]	[7.6]	3.5	46.5	酸化炎質。底:[0.60]、高:[0.28]、外:32°。
149		24	ＫＫ46	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	[12.1]	[6.6]	3.3	27.0	底:[0.55]、高:[0.27]、外:32°。
150		－	ＬＦ47	－	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切(右回転)	[13.9]	[7.8]	3.9	60.0	白色焼成。底:[0.56]、高:[0.28]、外:23°。
151		－	ＬＮ47	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切(右回転)→ナデ調整	[12.2]	[7.2]	3.9	81.0	底:[0.59]、高:[0.32]、外:25°。
152		24	ＫＦ45	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ　底部；回転ヘラ切(右回転)	12.2	6.8	3.7	106.0	白色焼成。底:0.56、高:0.30、外:30°。
153		24	ＫＮ49	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切(右回転)	[12.9]	7.1	4.0	109.0	白色焼成。底[0.55]:、高:[0.31]、外:31.5°。
154		24	ＫＱ45	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転糸切(右回転)	12.8	7.0	4.0	127.0	白色焼成(土師器質)。外面及び口縁部内面が煤けている。灯明皿として使用。底:0.55、高:0.31、外:35°。
155		24	ＪＴ44	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	[13.3]	[6.5]	3.7	81.0	底:[0.49]、高:[0.28]、外:30°。
156		－	ＫＳ48	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切→ナデ	12.9	6.5	3.7	97.4	白色焼成。底部外面に墨痕。底:0.50、高:0.28、外:32°。
157		－	ＬＫ47	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切(右回転)	[10.3]	[5.8]	3.7	28.0	底:[0.56]、高:[0.36]、外:26°。
158	61	24	ＫＩ49	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切(右回転)	[12.1]	6.1	3.8	108.0	白色焼成。底:[0.50]、高:[0.31]、外:30°。
159		－	ＫＬ46	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切(右回転)	[12.2]	6.3	4.1	89.0	白色焼成。底:[0.52]、高:[0.34]、外:28°。
160		－	ＫＭ50	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	12.5	6.4	4.2	130.7	白色焼成。底:0.51、高:0.34、外:30.5°。
161		－	ＫＤ44	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	[13.2]	6.0	4.1	85.2	土師器質。摩滅強。底:[0.45]、高:[0.31]、外:36°。
162		24	ＫＧ47	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切(右回転)	[11.8]	5.4	3.8	104.0	白色焼成。腰部分使用による摩滅。底:[0.46]、高:[0.32]、外:30.5°。
163		－	ＫＫ48	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	[13.2]	[5.5]	4.2	56.0	白色焼成。底:[0.42]、高:[0.32]、外:32.5°。
164		－	ＫＬ51	Ⅲ層	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	[9.7]	[4.5]	3.9	35.0	白色焼成。底:[0.46]、高:[0.40]、外:25.5°。
165		－	ＫＥ44・46	Ⅲ層	須恵器	坏	口～胴	【内外面】ロクロナデ	[15.0]	[10.2]	〈3.3〉	31.0	
166		－	ＫＨ44	Ⅲ層	須恵器	坏	口～胴	【内外面】ロクロナデ	[12.9]	－	〈4.9〉	18.0	
167		－	ＫＢ45	Ⅲ層	須恵器	坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切(左回転)	－	8.0	〈1.1〉	59.0	
168		－	ＫＮ48	Ⅲ層	須恵器	坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切(右回転)	－	8.4	〈2.4〉	66.0	
169		－	ＫＰ51 ＫＮ47 ＫＭ47	Ⅲ層	須恵器	坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	－	[8.1]	〈0.9〉	37.2	底部内面に墨痕か。硯として再利用か。
170		－	ＫＢ44	Ⅲ層	須恵器	坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	－	6.5	〈3.4〉	97.3	土師器質。摩滅強。
171		－	ＫＫ48	Ⅲ層	須恵器	坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切(右回転)	－	[6.0]	〈2.4〉	33.0	灯明皿として使用か。
172		－	ＫＲ47	Ⅲ層	須恵器	坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転糸切(右回転)	－	[5.7]	〈3.1〉	21.0	白色焼成。
173	62	－	ＫＫ45	Ⅲ層	須恵器	坏	胴～底	【内面】ロクロナデ　【外面】ロクロナデ、底部；回転糸切	－	[5.5]	〈2.1〉	12.0	白色焼成。
174		－	ＫＪ46	Ⅲ層	須恵器	坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転糸切(右回転)	－	5.5	〈1.3〉	44.0	白色焼成(土師器質)。
175		－	ＫＬ48	－	須恵器	坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	－	[5.8]	〈1.2〉	19.0	白色焼成。
176		－	ＫＦ51	Ⅲ層	須恵器	坏	胴～底	【内面】ロクロナデ　【外面】ロクロナデ、底部；回転糸切	[8.8]	[6.0]	〈1.0〉	12.0	白色焼成。
177		－	ＫＰ46	Ⅲ層	須恵器	坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；糸切(回転か静止かは不明)	－	[6.7]	〈1.3〉	15.0	
178		－	ＪＴ45	Ⅲ層	須恵器	坏	胴～底	【内面】ロクロナデ　【外面】ロクロナデ、底部；回転糸切	－	[4.5]	〈1.9〉	18.0	白色焼成。
179		24	ＫＡ46 ＫＢ44	Ⅲ層	須恵器	台付坏	口～高台	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切(右回転)→高台貼付	[11.9]	7.8	4.2	157.1	高台設置面に凹み。底:[0.66]、高:[0.35]、外:19.50°。
180		24	ＫＡ44	Ⅲ層	須恵器	台付坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切→高台貼付	[13.0]	[7.4]	4.1	47.0	底:[0.57]、高:[0.32]、外:29°。

※[　]内の数値は推定値、〈　〉内の数値は残存値、備考の底は底径指数、高は高径指数、外は外傾度を表す。

第 19 表　土器・陶磁器一覧表（４）

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	分類	器種	部位	調整等	口径・長さ(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚さ(cm)	重量(g)	備考
181		－	ＪＴ45	Ⅲ層	須恵器	台付坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転糸切か→高台貼付	[11.3]	[5.5]	〈4.7〉	27.0	底部外面に墨痕か。底：[0.49]、高：[0.42]、外：31°。
182	62	24	ＫＪ46 ＫＫ48	Ⅲ層	須恵器	台付坏	口～高台	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切(右回転)→高台貼付	10.8	6.2	6.2	109.6	全体的に形がいびつ。高台設置面に凹みがある。底：0.57、高：0.57、外：16.5°。
183		24	ＪＳ 44・45	Ⅲ層	須恵器	台付坏	口～高台	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切→高台貼付	[9.0]	[6.1]	5.7	54.2	高台設置面に凹み。底：[0.68]、高：[0.63]、外：８°。
184		－	ＫＩ46	Ⅲ層	須恵器	台付坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切→高台貼付	－	－	3.9	21.0	白色焼成
185		－	ＫＯ47	Ⅲ層	須恵器	台付坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切→高台貼付	－	－	5.2	28.0	高台が一部欠損。
186		－	ＫＬ45・54 ＫＬ46 ＫＭ46	Ⅱ・Ⅲ層	須恵器	台付坏	口～胴	【内外面】ロクロナデ	[13.9]	－	〈6.1〉	47.0	
187		－	ＫＭ46	Ⅲ層	須恵器	台付坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転糸切か→高台貼付	[10.7]	－	〈2.8〉	22.0	高台設置面に凹み。
188		－	ＫＨ45	Ⅲ層	須恵器	台付坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切→高台貼付	－	[7.1]	〈2.4〉	42.0	見込に工具痕。
189		－	ＫＩ46	Ⅲ層	須恵器	台付坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；切離不明→高台貼付	－	[8.0]	〈2.9〉	37.0	
190		－	ＫＮ47	Ⅲ層	須恵器	台付坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切→高台貼付	－	[6.3]	〈2.3〉	23.0	焼成不良(酸化炎質)。
191		－	ＬＰ49 ＬＱ49	Ⅲ層	須恵器	台付坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切→高台貼付	－	6.0	〈2.6〉	46.8	高台設置面に凹み。
192		－	ＬＣ45	Ⅲ層	須恵器	台付坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切→高台貼付	－	[5.8]	〈1.2〉	28.0	
193		－	ＭＢ56	Ⅲ層	須恵器	台付坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切→高台貼付	－	[6.2]	〈2.4〉	25.0	白色焼成。高台設置面に凹み。
194	63	－	ＬＣ46	Ⅲ層	須恵器	台付坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転糸切→高台貼付	－	[6.5]	〈2.5〉	21.0	高台設置面に凹み。
195		－	ＫＪ49	Ⅲ層	須恵器	台付坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切→高台貼付	－	[7.6]	〈1.7〉	86.0	白色焼成。高台設置面に凹み。
196		－	ＫＨ45 ＫＪ45	Ⅲ層	須恵器	台付坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切→高台貼付	－	[8.6]	〈1.5〉	56.0	底部外面に墨痕。硯として再利用か。底部外面は摩滅。
197		25	ＫＮ47	Ⅲ層	須恵器(墨書)	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	[11.5]	[6.8]	3.5	39.1	白色焼成。底部外面に墨書「田」。底：[0.59]、高：[0.30]、外：27.5°。
198		25	ＫＨ48	Ⅲ層	須恵器(墨書)	坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切(右回転)	－	6.0	〈2.1〉	64.8	白色焼成。底部外面に墨書「田」。
199		25	ＫＬ50	Ⅲ層	須恵器(墨書)	坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切(右回転)	－	8.2	〈2.7〉	77.8	底部外面に墨書「田」。
200		25	ＫＭ50	Ⅲ層	須恵器(墨書)	坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	－	[7.6]	〈0.7〉	10.5	白色焼成。底部外面に墨書「田」。
201		25	ＫＯ51	Ⅲ層	須恵器(墨書)	坏	胴～底	【内面】ロクロナデ　【外面】ロクロナデ→墨書	－	[7.6]	〈1.5〉	14.4	白色焼成。底部外面に墨書「田」。
202		25	ＫＮ46 ＫＯ47	Ⅲ層	須恵器(墨書)	坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切→墨書	－	7.2	〈1.1〉	31.4	白色焼成、底部外面に墨書「□〔田ゐ〕」。
203		25	ＫＯ46	Ⅲ層	須恵器(墨書)	坏	底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	－	[4.4]	〈1.2〉	18.9	白色焼成。底部外面に墨書「□〔田ゐ〕」。
204		25	表採	－	須恵器(墨書)	坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切か	－	[8.5]	〈1.6〉	21.3	白色焼成。底部外面に墨書「□〔田ゐ〕」。外面底部摩滅。
205		25	ＫＭ50	Ⅲ層	須恵器(墨書)	坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	－	6.0	〈2.1〉	60.4	焼成不良(やや酸化炎質)。底部外面に墨書「田□」。
206		25	ＫＤ46	Ⅲ層	須恵器(墨書)	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切(右回転)	[13.0]	6.5	3.7	87.9	底部外面に墨書「風」。底：[0.50]、高：[0.28]、外：29°。
207		25	ＫＨ44	Ⅲ層	須恵器(墨書)	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切(右回転)	[13.0]	[7.9]	3.5	60.9	白色焼成。底部外面に墨書「□〔无ゐ〕〔天ゐ〕」。底：[0.61]、高：[0.27]、外：28.5°。
208		25	ＫＪ46	Ⅲ層	須恵器(墨書)	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切(右回転)→墨書	[12.4]	7.4	2.9	95.4	底部外面に墨書「人」。底：[0.59]、高：[0.23]、外：39°。
209		25	ＬＴ50	Ⅲ層	須恵器(墨書)	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切(右回転)	[12.2]	7.0	3.2	86.0	白色焼成。底部外面に墨書「工」。底：[0.57]、高：[0.26]、外：30°。
210		25	ＫＭ49	Ⅲ層	須恵器(墨書)	坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	－	[7.1]	〈2.3〉	58.0	底部外面に墨書「工」。
211		－	ＫＨ45	Ⅲ層	須恵器(墨書)	坏	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切	－	[6.7]	〈1.0〉	31.3	底部外面に墨書(不明文字)。墨痕か。
212	64	25	ＫＬ50	Ⅲ層	須恵器(墨書)か	坏蓋	天井	【内面】ロクロナデ→天井部；回転ヘラ切か 【外面】ロクロナデ	－	－	〈1.6〉	15.8	白色焼成。内面に墨痕か。外面上面に墨書(不明文字)。
213		25	ＪＴ47	－	須恵器(墨書)	坏	胴	【内外面】ロクロナデ	－	－	〈2.3〉	5.0	白色焼成。内面に墨書(不明文字)。
214		25	ＬＫ48	Ⅲ層	須恵器	甕	口	【内外面】ロクロナデ	[48.4]	－	〈7.6〉	405.5	
215		25	ＫＤ48	Ⅲ層	須恵器	甕	口～肩	【内面】波状当て→ロクロナデ 【外面】平行叩き→ロクロナデ	[20.3]	－	〈6.1〉	159.3	白色焼成。
216		－	ＫＥ44	－	須恵器	甕	口～肩	【内面】波状当て→ロクロナデ 【外面】平行叩き→ロクロナデ	－	－	〈6.9〉	89.3	酸化炎質。
217		－	調査区中央排土	－	須恵器	甕	肩～胴	【内面】平行叩き　【外面】平行叩き→ハケメ	－	－	〈12.3〉	133.9	
218		25	ＫＤ48 ＫＦ44 ＫＩ47	Ⅲ層	須恵器	甕	胴	【内面】同心円状当て・平行叩き→ハケメ 【外面】平行叩き	－	－	〈23.7〉	417.3	
219		26	ＬＫ48 調査区中央排土南	Ⅲ層	須恵器	甕	胴	【内面】ハケメ→同心円状当て　【外面】平行叩き	－	－	〈17.3〉	538.5	
220	65	－	ＫＢ45 ＫＣ44・47	Ⅲ層	須恵器	甕	胴	【内面】平行当て→ハケメ　【外面】平行叩き	－	－	〈17.6〉	478.5	
221		26	ＫＯ48	Ⅲ層	須恵器	甕	胴	【内面】ハケメ→波状当て　【外面】平行叩き→ハケメ	－	－	〈15.8〉	674.4	同一個体を含めた重量982.4ｇ。
222		－	ＫＬ50 ＫＭ48・50 ＫＮ50	Ⅲ層	須恵器	甕	胴	【内面】平行叩き、同心円状当て、棒状工具痕 【外面】平行叩き	－	－	〈15.4〉	207.3	
223	66	26	ＫＭ49 ＫＫ50	Ⅲ層	須恵器	甕	胴	【内面】同心円状当て　【外面】平行叩き	－	－	〈17.3〉	208.9	
224		－	ＫＬ46	Ⅲ層	須恵器	甕	胴	【内面】波状当て　【外面】格子状叩き	－	－	〈10.0〉	130.6	

※[　]内の数値は推定値、〈　〉内の数値は残存値、備考の底は底径指数、高は高径指数、外は外傾度を表す。

第 20 表　土器・陶磁器一覧表（５）

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	分類	器種	部位	調整等	口径・長さ(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚さ(cm)	重量(g)	備考
225	66	26	ＫＪ50	Ⅲ層	須恵器	甕	胴	【内面】同心円状当て　【外面】格子状叩き	－	－	〈11.1〉	108.8	
226		－	ＫＯ46	Ⅲ層	須恵器	甕	胴	【内面】同心円状当て　【外面】平行叩き	－	－	〈7.9〉	84.3	
227		－	ＫＣ45	－	須恵器	甕	胴	【内面】平行叩き→ハケメ　【外面】平行叩き	－	－	〈6.7〉	96.3	
228		－	ＫＬ53	Ⅲ層	須恵器	甕	胴	【内面】平行叩き→当て(当て具不明) 【外面】平行叩き→ハケメ	－	－	〈13.0〉	119.8	
229		26	ＫＭ48	Ⅲ層	須恵器	甕	胴	【内面】当て(当て具不明)、指頭オサエ→ハケメ 【外面】平行叩き	－	－	〈8.8〉	78.0	内面に墨痕。硯として再利用か。
230		26	ＫＮ49	Ⅲ層	須恵器	甕	胴	【内面】ハケメ→同心円状当て　【外面】平行叩き	－	－	〈9.1〉	101.7	内面に墨痕。硯として再利用か。
231		－	ＫＨ44	Ⅲ層	須恵器	甕	胴～底	【内面】ハケメ、平行叩き　【外面】平行叩き	－	－	〈9.2〉	421.3	
232	67	26	ＫＭ49	Ⅲ層	須恵器	壺	口～胴	【内外面】ロクロナデ	[11.6]	－	〈9.3〉	193.5	短頸壺。胴部の張り出しに２条の沈線。
233		20・26	ＬＫ48	－	須恵器	壺	口～胴	【内外面】ロクロナデ	[11.4]	－	〈5.2〉	77.4	短頸壺。
234		26	ＫＭ49	－	須恵器	瓶	口	【内外面】ロクロナデ	[12.2]	－	〈5.9〉	66.4	長頸瓶。
235		26	ＫＯ48	Ⅲ層	須恵器	瓶	口	【内外面】ロクロナデ	[9.8]	－	〈2.5〉	21.2	長頸瓶。
236		－	ＫＳ57	Ⅲ層	須恵器	壺	肩	【内外面】ロクロナデ	－	－	〈4.1〉	55.4	短頸壺。
237		－	ＫＭ49	Ⅱ層	須恵器	壺	肩～胴	【内外面】ロクロナデ	－	－	〈8.3〉	69.1	
238		27	ＫＤ46 ＫＥ46 ＫＦ46 ＫＧ48	Ⅲ層	須恵器	壺	胴～底	【内面】ナデ、ロクロナデ 【外面】ナデ、ロクロナデ、底部；回転ヘラ切→高台貼付	－	[10.0]	－	255.4	高台部欠損。
239		27	20トレンチ(確認調査時)	北端から1.3m	須恵器	壺	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切→高台貼付	－	[10.4]	－	261.5	高台部欠損。
240		－	ＬＣ45	Ⅲ層	須恵器	壺	胴～底	【内面】ロクロナデ、見込；ナデ調整 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切→高台貼付	－	[8.0]	〈1.9〉	72.0	白色焼成。高台部欠損。
241		－	ＬＨ48	Ⅲ層	須恵器	壺	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切→高台貼付	－	[7.8]	〈2.8〉	74.0	
242		27	ＫＯ47	Ⅲ層	須恵器	壺	底	【内面】ロクロナデ→ヘラ削 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切→高台貼付	－	10.2	〈4.3〉	282.4	
243	68	20・27	ＫＲ47	Ⅲ層	須恵器	横瓶	口～底	【内面】波状当て、口縁部；ロクロナデ 【外面】平行叩き→カキメ、口縁部；ロクロナデ	〈8.4〉	最大径31.5	21.4	2431.3	焼成失敗品。形がいびつで、陶土塊が付着。外面の一部に自然釉。
244		27	ＫＮ50 ＫＭ49・50 ＫＯ47	Ⅲ層	須恵器	横瓶	胴	【内面】ロクロナデ→同心円状当て 【外面】ロクロナデ、平行叩き	－	最大幅〈16.5〉	〈22.1〉	1250.7	
245		－	ＫＯ50	Ⅲ層	須恵器	横瓶	胴	【内外面】ロクロナデ	－	最大幅〈10.5〉	〈24.6〉	304.1	
246		－	ＪＴ44	Ⅲ層	須恵器	横瓶	胴	【内面】ロクロナデ、波状当て、当て(当て具不明) 【外面】ロクロナデ	－	－	〈2.9〉	124.1	陶土付着。
247	87	－	ＳＥ05	２層	須恵器	甕	胴	【内面】平行叩き→同心円状当て　【外面】平行叩き	－	－	〈14.5〉	195.0	外面に自然釉。
248		27			須恵器系陶器	壺	肩	【内面】ロクロナデ　【外面】二筋平行線文叩き	－	－	〈4.5〉	44.2	大畑桧山腰窯産。Ⅱ１期(13世紀前半)。
253		28	ＳＥ07	４層	中国産青磁	碗	底	【内外面】ロクロナデ→釉、底部；高台削出	－	〈1.7〉	5.0	84.9	中国龍泉窯産。龍泉窯青磁Ⅱ類(13世紀)。高台畳付・高台内は無釉。
254		27	ＳＥ08	２層	須恵器系陶器	壺	口	【内外面】ロクロナデ	[22.2]	－	〈4.4〉	40.8	Ⅱ期13世紀。
255		27			須恵器系陶器	擂鉢	胴	【内面】ロクロナデ→卸目 【外面】ロクロナデ→指ナデ・ケズリ	－	－	〈10.5〉	233.1	在地産か。Ⅱ期(13世紀前半)。内部に７目の卸目。
257	88	28	ＳＥ21	６層	須恵器系陶器	甕	胴	【内面】当て(当て具不明)　【外面】平行叩き	－	－	〈6.9〉	164.7	
259		28	ＳＥ30	１層	須恵器系陶器	壺	胴	【内面】ロクロナデ(板状工具痕)【外面】二筋平行線文叩き	－	－	〈7.1〉	209.1	Ⅱ１期13世紀前半。大畑桧山腰窯産。
261		28	ＳＥ31	５層	須恵器系陶器	壺	胴	【内面】ナデ→円礫による当て　【外面】二筋平行線文叩き	－	－	〈6.8〉	111.8	Ⅱ１期13世紀前半。大畑桧山腰窯産。
267	89	28	ＳＥ34	－	須恵器	台付坏	胴～底	【内面】ロクロナデ　【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切→高台貼付→ロクロナデ	－	[7.2]	〈3.8〉	61.9	
268		28		６層	中国産青磁	碗	胴	【内面】ロクロナデ→片彫蓮華文→釉 【外面】ロクロナデ→片彫劃花文→釉	－	－	〈3.1〉	15.7	中国龍泉窯産。龍泉窯青磁Ⅰ類(13世紀初頭)。内面に片彫による蓮弁文、外面に劃花文。
269		28		－	須恵器系陶器	袋物	肩	【内面】円礫当て　【外面】平行叩き	－	－	〈5.7〉	88.7	大畑桧山腰窯産。Ⅱ１期13世紀前半。
270		28		－	須恵器系陶器	擂鉢	胴	【内外面】ロクロナデ	－	－	－	76.2	在地産か。Ⅱ期(13世紀前半)か。
281	90	28	ＳＥ43	－	須恵器系陶器	壺	口～底	【内面】ロクロナデ→円礫当て 【外面】ロクロナデ→二筋平行線文叩き、底部；ヘラ起こし	最大径[35.0]	[14.7]	38.0	4850.0	大畑桧山腰窯産。Ⅱ１期13世紀前半。酸化炎焼成。肩部に花押状文及び竹管文。
282	91	29	ＳＥ53	－	須恵器系陶器	擂鉢	胴～底	【内面】ロクロナデ→卸目 【外面】ロクロナデ→指頭オサエ、底部；静止糸切	－	[15.0]	〈12.0〉	578.7	底面漆継の痕跡(283と同一個体)。Ⅳ～Ⅴ期(14世紀代)。
283		29		－	須恵器系陶器	擂鉢	胴～底	【内面】ロクロナデ・指ナデ→卸目 【外面】ロクロナデ→指頭オサエ、底部；静止糸切	－	[16.0]	〈7.4〉	400.9	底面漆継の痕跡(282と同一個体)。Ⅳ～Ⅴ期(14世紀代)。
284		29	ＳＥ58	７層	須恵器系陶器	壺	頸～肩	【内面】ロクロナデ→円礫当て 【外面】ロクロナデ→二筋平行線文叩き	－	－	〈5.6〉	172.0	大畑桧山腰窯産。Ⅱ１期(13世紀前半)。外面に灰釉による白点。285と同一個体か。
285	92	29		－	須恵器系陶器	壺	胴～底	【内面】ロクロナデ→指オサエ・当て具不明　【外面】ロクロナデ→二筋平行線文叩き、底部；砂底→ヘラ起こし	－	[14.5]	〈11.2〉	657.8	大畑桧山腰窯産。Ⅱ１期(13世紀前半)。外面下位に漆付着。284と同一個体か。
294		29	ＳＥ66	－	須恵器系陶器	鉢	口	【内外面】ロクロナデ	[20.0]	－	〈6.9〉	48.0	大畑桧山腰窯産。Ⅱ１期(13世紀前半)。酸化炎焼成。
296		29	ＳＥ67	埋土中	須恵器系陶器	甕	頸	【内面】ロクロナデ→円礫当て痕　【外面】ロクロナデ	－	－	〈3.0〉	40.7	
301	93	29	ＳＥ211	－	中国産白磁	碗	胴	【内面】ロクロナデ→櫛目文→釉 【外面】ロクロナデ→篦描き文か→釉	－	－	〈3.0〉	11.7	中国産。白磁Ⅵ類(12世紀後半)か。
303		－	ＳＥ235	－	須恵器	甕	胴	【内面】波状当て　【外面】平行叩き	－	－	〈8.1〉	111.4	内面摩滅(再利用か)。
304		29		－	須恵器系陶器	擂鉢	口～胴	【内面】ロクロナデ→卸目、口縁部；櫛目波状文 【外面】ロクロナデ	－	－	〈7.3〉	143.0	Ⅴ期(15世紀前半)。305と同一個体か。
305		29		８層	須恵器系陶器	擂鉢	口～胴	【内面】ロクロナデ→卸目、口縁部；櫛目波状文 【外面】ロクロナデ	－	－	〈10.1〉	270.1	Ⅴ期(15世紀前半)。304と同一個体か。
310	94	－	ＳＯ83	－	須恵器系陶器	鉢	口	【内外面】ロクロナデ	－	－	〈2.6〉	11.9	Ⅳ１期(1280～1310年)か。
311		29	ＳＯ309	－	中国産青磁	碗	胴	【内面】ロクロナデ→櫛目文・沈線→釉 【外面】ロクロナデ→櫛目文→釉	－	－	－	2.5	中国同安窯産。同安窯Ⅰ類(13世紀初)か。

※[　]内の数値は推定値、〈　〉内の数値は残存値、備考の底は底径指数、高は高径指数、外は外傾度を表す。

第 21 表　土器・陶磁器一覧表（６）

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	分類	器種	部位	調整等	口径・長さ(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚さ(cm)	重量(g)	備考
314	94	－	ＭＪ51	－	中国産青磁	碗	口	【内面】ロクロナデ→口縁部櫛掻、劃花文→釉 【外面】ロクロナデ→釉	－	－	〈2.0〉	5.6	中国龍泉窯産。龍泉窯青磁Ⅰ２ａ’（13世紀初頭）か。
315		－	ＭＩ51	－	中国産青磁	碗	胴	【内外面】ロクロナデ→釉	－	－	〈4.3〉	31.8	中国龍泉窯産。龍泉窯青磁Ⅰ１ａ（13世紀初頭）か。
316		－	ＭＫ54	撹乱	中国産青磁	碗	口	【内面】ロクロナデ→釉　【外面】ロクロナデ→蓮弁文→釉	－	－	〈3.4〉	17.3	中国龍泉窯産。ＢⅡ類（15末～16世紀初頭）か。
317		－	ＬＩ47	Ⅲ層	須恵器系陶器	甕	胴	【内面】円礫当て　【外面】平行叩き	－	－	〈8.3〉	165.0	
318		－	ＭＨ49	－	須恵器系陶器	壺	口～頸	【内外面】ロクロナデ	［17.6］	－	〈2.6〉	28.0	Ⅱ期（13世紀前半）。
319		－	ＬＮ49	－	須恵器系陶器	壺	頸～肩	【内外面】ロクロナデ	－	－	〈4.8〉	39.0	
320		－	ＫＢ44	Ⅲ層	須恵器系陶器	壺	肩	【内面】当て（当て具不明）　【外面】平行叩き	－	－	〈2.4〉	29.0	Ⅱ期（13世紀前半）か。頸部に段を持つ。
321		－	ＭＩ51	Ⅲ層	須恵器系陶器	壺	肩	【内面】円礫当て　【外面】平行叩き	－	－	〈3.0〉	53.0	
322		29	ＭＫ56	撹乱	須恵器系陶器	壺	肩～胴	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ→沈線、櫛歯波状文	－	－	〈7.9〉	112.0	Ⅱ期（13世紀前半）か。
323		－	ＭＤ54	Ⅲ層	須恵器系陶器	壺	胴	【内面】円礫当て　【外面】平行叩き	－	－	〈6.4〉	76.0	大畑桧山腰窯産。Ⅱ１期（13世紀第１四半期）。
324	95	－	ＭＳ55	トレンチ内	須恵器系陶器	壺	胴	【内面】ナデ→当て（当て具不明） 【外面】二筋平行線文叩き	－	－	〈6.9〉	182.0	大畑桧山腰窯産。Ⅱ１期（13世紀前半）。
325		29	調査区西撹乱	－	須恵器系陶器	擂鉢	口～胴	【内面】ロクロナデ→卸目　【外面】ロクロナデ	［30.4］	－	〈8.7〉	168.0	在地産か。Ⅱ期（13世紀前半）。７目の卸目。
326		29	調査区中央排土南	－	須恵器系陶器	擂鉢	口～胴	【内面】ロクロナデ→卸目 【外面】ロクロナデ→片口部分つまみ出し→指ナデ	－	－	〈10.1〉	153.0	Ⅲ期（13世紀後半）。
327		－	調査区中央排土	－	須恵器系陶器	擂鉢	口～胴	【内外面】ロクロナデ	［23.6］	－	〈5.2〉	93.0	中世。
328		－	ＭＤ54	－	須恵器系陶器	擂鉢	口	【内外面】ロクロナデ	－	－	〈3.4〉	17.0	Ⅲ・Ⅳ期（13世紀後半～14世紀前半）か。
329		30	ＫＱ48 ＫＰ50	－	須恵器系陶器	擂鉢	口～胴	【内面】ロクロナデ→卸目　【外面】ロクロナデ	［22.2］	－	〈3.8〉	52.0	Ⅳ２期（14世紀後半）。
330		－	ＫＫ46	Ⅲ層	須恵器系陶器	擂鉢	口	【内外面】ナデ	－	－	〈2.7〉	30.0	Ⅳ２期（14世紀後半）。
331		30	分布調査	－	須恵器系陶器	擂鉢	口～胴	【内面】ロクロナデ→卸目、口縁部；櫛歯波状文 【外面】ロクロナデ	［32.4］	－	〈7.7〉	103.0	Ⅴ期（15世紀前半）。
332		－	ＪＴ44	－	須恵器系陶器	小鉢	口～胴	【内外面】ロクロナデ	－	－	〈3.6〉	18.0	Ⅲ・Ⅳ期（13世紀後半～14世紀前半）か。
333		30	ＬＧ48	Ⅲ層	瀬戸美濃陶器	瓶	胴	【内面】ロクロナデ　【外面】ロクロナデ→印花文→鉄釉	－	－	〈4.0〉	30.2	古瀬戸中期（14世紀初頭～半ば）か。
334	113	－	ＳＢ247Ｐ４	－	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切（右回転）	［11.8］	［6.8］	3.1	73.0	白色焼成。底：［0.58］、高：［0.26］、外：57°。
335		－	ＳＢ247Ｐ８・９	－	肥前陶器	壺	胴～底	ロクロナデ→釉　底部；高台削出	－	［7.6］	〈4.0〉	62.8	肥前産。Ⅲ期（1650～1690）。碁笥底。鉄釉に藁灰釉のハケメ。
336		29	ＳＫＩ88	－	肥前磁器	碗	口～底	【内外面】ロクロナデ→染付→釉	8.4	3.5	4.6	76.6	肥前産。江戸時代後期。
337		29		－	肥前磁器	皿	口～底	【内面】ロクロナデ→見込み蛇目釉剥ぎ・染付→釉 【外面】ロクロナデ→釉	9.7	4.1	2.8	82.7	肥前（波佐見）産。見込蛇目釉剥。肥前Ⅲ～Ⅳ期前半（17世紀後半～18世紀初）。
338		－	ＳＫＩ102	－	須恵器	甕	胴	【内面】平行叩き→波状当て　【外面】平行叩き	－	－	〈13.8〉	253.8	
339		－	ＳＫＩ122	－	須恵器	坏	胴～高台	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切→高台貼付	－	5.5	〈2.5〉	62.3	土師器質。底部に煤付着。
340		－		－	肥前陶器	皿	胴～高台	ロクロナデ→釉　底部；高台削出	－	［4.6］	〈2.1〉	43.8	肥前産。Ⅱ期（1610～1650）か。灰釉。見込蛇目釉剥。露胎高台。
341		－		－	肥前陶器	小壺	口～底部	ロクロナデ→釉　底部；回転糸切	［6.2］	［4.1］	4.6	37.3	肥前産。Ⅱ期～（1610～）か。灰釉。露胎高台。
342		29		－	肥前陶器	火入れ	口～高台	ロクロナデ→釉　底部；高台削出	9.8	7.2	6.8	296.8	肥前産。Ⅲ期（1650～1690）。外面及び口縁部内面に鉄釉。露胎高台。
343		29		－	肥前陶器	火入れ	胴～高台	ロクロナデ→釉　底部；高台削出	－	7.5	〈5.2〉	112.4	肥前産。Ⅲ期（1650～1690）。外面藁灰釉、内面無釉。露胎高台。高台に墨書「十」。
344		29		－	肥前陶器	燭	皿～脚	ロクロナデ→貼付芯立→釉　底部；回転糸切（右回転）	－	5.1	〈5.1〉	116.4	肥前産。Ⅴ期（1800～）か。鉄釉、外面底部のみ無釉。底部に径６㎜、深19㎜の釘穴。
345		29		－	肥前磁器	碗	口～高台	ロクロナデ→染付→釉　底部；高台削出	10.4	4.0	6.0	180.0	肥前産。Ⅴ期末（1850～1860）。
346		29		－	肥前磁器	碗	口～高台	ロクロナデ→染付→釉　底部；高台削出	8.0	3.6	3.9	71.9	肥前産。Ⅴ期（1820～1860）。
347		29		－	肥前磁器	皿	口～高台	ロクロナデ→染付→釉　底部；高台削出	26.4	14.5	3.9	535.0	肥前産。Ⅲ期～（1650～）。高台内にハリ痕。
348		29		－	肥前磁器	皿	口～高台	ロクロナデ→釉　底部；高台削出	［12.0］	［4.0］	3.3	49.0	肥前（波佐見）産。Ⅲ期（1650～1680）。白磁。見込蛇目釉剥。高台内及び底部一部無釉。
349	114	29		－	肥前磁器	皿	口～高台	ロクロナデ→染付→釉　底部；高台削出	29.0	15.8	4.5	823.0	肥前産。Ⅴ期（1780～1860）。口縁に錆釉（口紅）。高台内にハリ付着。部分的に二次被熱（火事の影響か）あり。
350		29		－	肥前磁器	皿	口～高台	ロクロナデ→染付→釉　底部；高台削出	［12.9］	4.6	3.8	107.5	肥前（波佐見）産。Ⅳ期後半～Ⅴ期前半（1750～1810）。見込蛇目釉剥。
351		29		－	肥前磁器	皿	口～高台	ロクロナデ→型打→染付→釉　底部；高台削出	9.3	5.2	2.2	76.0	肥前産。Ⅴ期（1810～1860）。口縁部に錆釉（口紅）。全体に二次被熱（火事の影響か）あり。
352		29		－	肥前磁器	皿	口～高台	ロクロナデ→型打→染付→釉　底部；高台削出	［9.6］	5.4	2.3	45.5	肥前産。Ⅴ期（1810～1860）。
353		29		－	肥前磁器	浅鉢	口～高台	ロクロナデ→型内→染付→釉　底部；高台削出	14.8	8.6	4.6	223.0	肥前産。Ⅴ期（1780～1860）。口縁に錆釉（口紅）。蛇目凹形高台。
354		29		－	肥前磁器	浅鉢	口～高台	ロクロナデ→染付→釉　底部；高台削出	14.8	8.6	3.6	199.0	肥前産。Ⅳ期（18世紀）。蛇目凹台高台。全体的に二次被熱（火事の影響か）あり。
355		29		－	肥前磁器	鉢	口～高台	ロクロナデ→型打→染付→釉　底部；高台削出	19.2	8.4	7.5	443.5	肥前産。Ⅴ期後半（1820～1860）。蛇目凹形高台。
356		29		－	肥前磁器	猪口	口～高台	ロクロナデ→染付→釉　底部；高台削出	7.8	5.8	5.8	91.5	肥前産。Ⅴ期（1820～1860）。蛇目凹形高台。

※［　］内の数値は推定値、〈　〉内の数値は残存値、備考の底は底径指数、高は高径指数、外は外傾度を表す。

第 22 表　土器・陶磁器一覧表（７）

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	分類	器種	部位	調整等	口径・長さ(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚さ(cm)	重量(g)	備考
357		29		－	肥前磁器	仏飯器	口～高台	ロクロナデ→染付→釉　底部；高台削出	－	3.7	〈5.6〉	74.0	肥前産。Ⅳ期(1690～1780)。蛇目凹形高台。高台内無釉。同一個体を含めた重量81.5ｇ。
358		29		－	肥前磁器	仏飯器	口～高台	ロクロナデ→染付→釉　底部；高台削出	6.1	3.8	5.8	62.5	肥前産。Ⅳ期(1690～1780)。蛇目凹形高台。高台内無釉。同一個体を含めた重量75.0ｇ。
359		29		－	肥前磁器	瓶	頸～高台	ロクロナデ→染付→釉　底部；高台削出	－	4.3	〈8.0〉	93.9	肥前産。Ⅴ期(1800～1860)。高台に砂粒付着。
360	115	－		－	肥前磁器	瓶	胴～高台	ロクロナデ→染付→釉　底部；高台削出	－	[4.2]	〈10.3〉	56.8	肥前産。Ⅴ期(1780～1860)。同一個体を含めた重量112.3ｇ。
361		29	ＳＫＩ122	－	在地系陶器	鉢	口～高台	ロクロナデ→釉→鉄絵　底部；高台削出	21.4	8.3	8.4	766.8	在地産か。近世後期か。見込胎土目積痕。内外面藁灰釉、内面一部に鉄絵。露胎高台。
362		29		－	在地系陶器	壺	頸～高台	ロクロナデ→釉　底部；高台削出	－	12.8	〈11.8〉	279.7	在地(白岩)産。近世後期～近代初期。上部は海鼠釉の漬掛、下部は鉄釉。二次被熱(火事か)による焼けはじが目立つ。
363		29		－	肥前系陶器	擂鉢	口～高台	ロクロナデ→櫛目掻→ナデ→釉　底部；高台削出	[38.6]	[17.4]	14.2	1441.1	肥前系。近世後期以降。鉄釉。高台に焼成時の砂敷き痕。
364		29		－	在地系陶器	擂鉢	口～高台	ロクロナデ→櫛目掻→ナデ→釉　底部；高台削出	36.6	14.0	16.5	1850.4	在地産か。近世後期以降。鉄釉。
365	116	29		－	在地系陶器	擂鉢	口縁～高台	ロクロナデ→釉　底部；高台削出	[33.5]	[12.8]	15.5	1238.6	在地産か。近世後期以降。鉄釉。
366		－		－	在地系陶器	擂鉢	口～高台	【内面】ロクロナデ→櫛目掻→ナデ 【外面】ロクロナデ→ケズリ、底部；高台削出	[30.5]	－	〈12.5〉	509.1	在地(白岩か)産。近世後期以降。鉄釉。割目に漆継痕。
370	117	－	ＳＫＩ147	－	在地系陶器	甕	口	【内外面】ロクロナデ→釉	[18.6]	－	〈6.5〉	163.5	在地産か。近世後期。鉄釉の漬掛け。
371		－		４層	須恵器	壺	胴～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切→高台貼付	－	[8.8]	〈5.2〉	54.6	高台部欠損。
372		30		１層	中国産青磁	碗	口～胴	【内面】ロクロナデ→輪花文→釉 【外面】ロクロナデ→櫛刀文か→釉	[15.2]	－	－	10.9	龍泉窯産。龍泉窯青磁Ⅰ期４ｂ(13世紀初頭)か。
373		30	ＳＥ44	１層	須恵器系陶器	壺	胴	【内面】ナデ→円礫当て　【外面】二筋平行線文叩き	－	－	〈12.6〉	240.9	大畑桧山腰窯産。Ⅱ１期(13世紀前半)。
374	118	－		８層	肥前磁器	筒形碗	口～底	ロクロナデ→染付→釉	[7.0]	[4.0]	5.6	47.6	高台畳付に漆付着。肥前Ⅳ期前半18世紀前半。
379		－	ＳＫ139	－	肥前磁器	猪口	胴～底	ロクロナデ→染付、底部；蛇目凹形高台	－	[6.0]	〈4.6〉	8.8	Ⅴ期(18世紀後葉～19世紀前葉)。
381		－	Ｐ362	－	肥前陶器	皿	胴～底	ロクロナデ→釉	－	3.4	〈2.5〉	57.8	肥前Ⅰ期(1590～1610)。土灰釉。見込に胎土目積痕。
382		30	Ｐ472	－	瀬戸美濃陶器	碗	口～胴	ロクロナデ→鉄釉	－	－	〈3.5〉	8.8	瀬戸美濃登窯第１段階第第３小期(17世紀中葉)か。口縁部は外反。天目茶碗。
384		－	Ｐ721	－	肥前陶器	皿	胴～底	ロクロナデ→釉	－	[5.8]	〈1.7〉	22.6	肥前産。Ⅰ期(1590～1610)。鉄釉。見込に胎土目積痕。
386		－	Ｐ1054	－	肥前磁器	皿	口～底	ロクロナデ→染付→釉	[13.4]	[7.2]	2.8	100.1	肥前産。Ⅱ２期(1640～1650)。
387	119	－	Ｐ1348	－	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ底部；回転ヘラ切(右回転)	13.1	5.6	4.1	123.6	白色焼成。底:0.43、高:0.31、外:39.50°。
388		30	Ｐ1326	－	縄文土器	深鉢	口	【外面】ナデ　【内面】ミガキ	－	－	〈2.4〉	10.3	縄文後期後葉。波状口縁。口唇部ＬＲ縄文。
389		30	Ｐ1471	－	須恵器	坏	口～底	【内面】ロクロナデ 【外面】ロクロナデ、底部；回転ヘラ切→ナデ調整か	[13.5]	[6.6]	4.1	71.3	下半部酸化炎質。底:[0.49]、高:[0.30]、外:24°。
390		30	Ｐ1504	－	土師器	甕	口～胴	【内外面】ロクロナデ	[15.9]	－	〈3.5〉	13.0	外面煤けている。口縁部摩滅。
391		30	ＫＬ50	Ⅱ層	瀬戸美濃陶器	碗	口	【内外面】ロクロナデ→灰釉	－	－	〈4.2〉	15.2	大窯第３段階(16世紀後半)か。外面下位部は無釉。
392		30	ＭＫ54	Ⅲ層	瀬戸美濃陶器	皿	口～底	【内外面】ロクロナデ→灰釉、底部；高台削出	[9.8]	[5.8]	2.3	41.0	丸皿。大窯第３段階後半～第４段階前半(16世紀第４四半期～16世紀末)。底部外面に輪トチン付着。
393		－		撹乱	瀬戸美濃陶器	皿	口～底	【内面】ロクロナデ→藁灰釉→鉄絵 【外面】ロクロナデ→藁灰釉　底部；高台削出	[11.5]	[6.8]	2.4	64.3	志野焼皿。登窯第１段階第２小期(17世紀第２四半期)。高台内に焼成時の円錐ピン痕。
394		－	ＭＤ54	Ⅲ層	瀬戸美濃陶器	皿	口～底	【内面】ロクロナデ→藁灰釉→鉄絵 【外面】ロクロナデ→藁灰釉　底部；高台削出	[12.0]	[6.4]	3.4	51.5	志野焼皿。登窯(17世紀)か。高台内に焼成時の円錐ピン痕。
395		－	表採	－	瀬戸美濃陶器	皿	口～胴	【内外面】ロクロナデ→灰釉	－	－	〈2.0〉	14.3	内禿皿。登窯第１段階第３小期(17世紀中葉)。口縁部が端反気味。
396		30	ＫＬ50	Ⅱ層	瀬戸美濃陶器	皿	口	【内面】ロクロナデ→菊花文削ぎ→灰釉 【外面】ロクロナデ→灰釉	－	－	〈2.0〉	12.2	折縁皿。大窯第４段階後半(16世紀末)。口縁が玉縁状。
397		30	ＭＨ52	Ⅲ層	瀬戸美濃陶器	皿	底～高台	【内面】ロクロナデ→灰釉 【外面】ロクロナデ→灰釉、底部；高台削出	[10.2]	[7.8]	〈1.1〉	21.7	内禿皿。大窯第３段階後半～第４段階前半(16世紀第４四半期～16世紀末)。見込に輪トチン付着。
398		30	ＭＫ54	Ⅲ層	瀬戸美濃陶器	皿	底	【内面】ロクロナデ→灰釉 【外面】ロクロナデ→灰釉、底部；高台削出	－	－	〈1.4〉	15.1	内禿皿。大窯第４段階前半(16世紀末)。見込禿げ。高台内に輪積み及びヘリ痕。
399	120	－	ＭＪ55	撹乱	肥前陶器	碗	口～胴	ロクロナデ→釉	[11.0]	－	〈5.2〉	36.5	肥前産。天目茶碗。Ⅱ期(1620～1650)。鉄釉。外面下位は無釉。
400		－			肥前陶器	碗	胴～高台	ロクロナデ→釉　底部；高台削出	－	4.8	〈4.0〉	95.1	肥前産。Ⅱ期(1620～1650)。藁灰釉。高台に砂粒付着。
401		－	ＭＫ54	Ⅱ層	肥前陶器	皿	胴～高台	ロクロナデ→釉　底部；高台削出	－	〈4.5〉	〈2.2〉	68.9	肥前産。Ⅰ－２期(1590～1610)。見込みに胎土目積痕。土灰釉。露胎高台。
402		－	ＭＫ49	Ⅱ層	肥前陶器	皿	胴～高台	ロクロナデ→釉　底部；高台削出	－	3.6	〈1.5〉	49.0	肥前産。Ⅰ－２期(1590～1610)。見込みに胎土目積痕。内面及び外面一部に錆釉。
403		－	ＬＪ46	Ⅲ層	肥前陶器	皿	胴～高台	ロクロナデ→釉→鉄絵　底部；高台削出	－	－	〈3.4〉	55.7	肥前産。鉄絵皿。Ⅰ－２期(1590～1610)か。藁灰釉。蛇目高台。露胎高台。
404		－	ＭＫ54	－	肥前陶器	皿	口～高台	ロクロナデ→釉　底部；高台削出	[12.8]	4.6	3.9	139.2	肥前産。Ⅱ期(1620～1650)。灰釉。見込に砂目積痕。高台に砂粒付着。灰釉。露胎高台。
405		－	ＭＪ55	撹乱	肥前陶器	皿	口～高台	ロクロナデ→釉　底部；高台削出	[13.2]	4.8	3.6	108.1	肥前産。Ⅱ期(1610～1630)。口縁部溝縁皿。見込に砂目積痕。高台に砂粒付着。灰釉。露胎高台。
406		－	表採	－	肥前陶器	皿	胴～高台	ロクロナデ→釉　底部；高台削出	－	5.1	〈2.7〉	81.3	肥前内野山窯産。Ⅲ期(1650～1690)。見込蛇目釉剥。内面銅緑釉、外面透明釉。露胎高台。同一個体を含めた重量83.9ｇ。
407		－	調査区中央排土	排土	肥前磁器	碗	口～底	ロクロナデ→染付→釉　底部；高台削出	[10.4]	3.8	5.3	147.5	肥前(波佐見)産。Ⅳ期前半(1680～1740)。高台に砂粒付着。

※[　]内の数値は推定値、〈　〉内の数値は残存値、備考の底は底径指数、高は高径指数、外は外傾度を表す。

第 23 表　土器・陶磁器一覧表（８）

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	分類	器種	部位	調整等	口径・長さ(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚さ(cm)	重量(g)	備考
408	120	29	MK54	－	肥前磁器	碗	口～底	ロクロナデ→染付→釉　底部；高台削出	10.1	3.8	5.7	87.7	肥前産。Ⅴ期末(1850～1860)。端反碗。
409		－		撹乱	肥前磁器	皿	胴～高台	ロクロナデ→染付→釉　底部；高台削出	－	4.4	〈1.3〉	74.6	肥前産。Ⅱ－１期(1610～1630)。高台に焼成時の砂粒付着。
410	121	29	調査区中央排土南	排土	肥前磁器	皿	口～高台	ロクロナデ→染付→釉　底部；高台削出	[13.6]	4.8	4.1	115.0	肥前(波佐見)産。Ⅳ期前半(1680～1740)。見込蛇目釉剥。高台に焼成時の砂粒付着。
411		－	表採	－	肥前磁器	鉢	胴～高台	ロクロナデ→染付→釉　底部；凹台高台	－	9.8	〈2.3〉	159.1	肥前産。Ⅳ～Ⅴ期前半(1690～19世紀前半)。
412		－	KG51	Ⅲ層	在地系陶器	皿	口～高台	ロクロナデ→釉　底部；高台削出	[11.7]	5.0	3.5	105.2	在地(楢岡)産。近世末期～近代初期。見込蛇目釉剥。口縁部海鼠釉。露胎高台。
413		－	MG55	Ⅲ層	在地系陶器	鉢	口～高台	ロクロナデ→釉　底部；高台削出	22.8	10.4	6.2	617.0	在地(白岩)産。近世後期～近代初期。外面底部に鉄釉、内面灰釉、口縁部に内外ともに海鼠釉の濃掛。見込に胎土目積痕。外面底部に「二瀧」の刻印。
414		－	MK54	Ⅲ層	在地系陶器	壺	肩～高台	ロクロナデ→釉　底部；高台削出	－	8.2	〈15.9〉	529.0	在地(白岩)。近世後期か。上部は藁灰釉。下部は鉄釉。
415		－	LF47	Ⅲ層	肥前系陶器	擂鉢	胴～底部	ロクロナデ→櫛目掻　底部；回転糸切	－	[10.8]	〈5.5〉	312.5	Ⅱ期(1630～1650)。無釉。

※[　]内の数値は推定値、〈　〉内の数値は残存値を表す。

第 24 表　土製品一覧表

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	分類	器種	部位	調整等	口径・長さ(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚さ(cm)	重量(g)	備考
23	52	－	SK133	－	土製品	羽口	口～胴	－	〈5.4〉	〈4.8〉	〈2.3〉	39.6	
24		－		－	土製品	羽口	胴	－	〈4.8〉	〈2.4〉	〈1.9〉	13.9	一部溶解。
41	53	－	SK239	－	土製品	羽口	口～胴	－	〈5.3〉	〈5.5〉	〈3.8〉	51.0	
295	92	－	SE66	２層	土製品	土錘	－	－	6.5	4.1	〈2.6〉	61.1	下部欠損。
367	117	29	SKI122	－	土製品	貝風炉	口～足	【内面】指ナデ、目皿貼付 【外面】ミガキ、ナデ、底部；足部摘出	13.7	10.0	12.2 奥行15.2	935.8	在地産。近世後期以降。外面に刻印(解読不明)。
368		29		－	土製品	貝風炉	口～足	【内面】指ナデ、ナデ 【外面】ケズリ、ナデ、底部；足部摘出	12.7	9.4	12.5 奥行15.4	550.0	在地産。近世後期以降。外面に八花弁の刻印。
369		－		－	土製品	焙烙	取手	【外面】指ナデ→指頭オサエ	〈8.3〉	〈4.9〉	〈3.6〉	64.4	在地産か。
380	118	30	P261	－	土製品	土錘	－	－	〈3.4〉	1.0	1.1	2.8	
416	121	30	KD48	Ⅲ層	土製品	羽口	－	【外面】指頭オサエ、ナデ	12.9	7.6	8.9	401.5	

※〈　〉内の数値は残存値を表す。

第 25 表　石器・石製品一覧表

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	分類	器種	部位	口径・長さ(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚さ(cm)	重量(g)	備考
252	87	30	SE07	２層	石器	縦型石匙	完形	5.2	3.0	6.5	8.6	縦型石匙。
262	88	30	SE31	５層	石製品	砥石	－	6.6	6.6	1.6	112	上下両側とも折れ。
383	119	30	P509	－	石製品	砥石	－	13.4	4.4	3.1	231	３面に使用痕。
385		30	P738	－	石製品	砥石	－	7.3	5.0	3.4	195.0	２面に使用痕。

第 26 表　木製品一覧表（１）

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	種類・器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(高さ)(cm)	重量(g)	備考
2	49	30	SE10	11層	加工木材	〈24.2〉	1.1	0.9	－	二方柾の心去り材。木口面の一方は、刃物による切断、もう片面は廃棄に際し、素手で折ったと考えられる痕跡がある。放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、778～882calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。
4		6・30	SE72	底部	曲物(側板～底板)	〈22.5〉	23.0	9.5	528.0	側板に木目に直行した切れ目。側板は二～三重に重なる。左側に５カ所、右側に３カ所、桜皮で固定。底板は板目板を使用。底板の裏面は腐食が激しい。放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1035～1154calＡＤ(１σ)年代値が得られている。
5		30		－	火付け木	〈21.8〉	1.1	0.5	－	柾目板を裂いて再利用か。片側端部は火を付けたことにより炭化している。もう一方の端部は、人為的に折った痕跡が残る。
6		－	SE92	６層	有孔加工板材	〈32.0〉	〈5.1〉	〈1.4〉	－	加工材。柾目板状。腐食が激しい。表裏面ともに切れ込みの傷がある。放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1046～1160calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。
7		31	SE93	－	曲物底板	8.6	8.6	1.2	－	板目板。表裏両面とも、加工痕が明瞭に残る。放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1040～1152calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。
8		31	SE95	３層	有孔板材	〈55.9〉	10.5	1.8	－	井戸枠材か。年輪割の板目板。部分的に腐食。木口面の片側は切断面が残るが、もう一方では腐食を受けている。人為的に設けられた径７～８㎝の孔がある。放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1040～1152calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。
9	50	31		３層	加工板材	66.3	3.7	1.3	－	井戸枠材か。柾目板。折れて破損していた。両木口面は、切断された痕跡を残す。両木口面近くの柾目面に貫通孔が２カ所開けられている。片側の板目面にはほぼ等間隔に５カ所の切れ込みが入れられている。
10		31			加工板材	〈69.3〉	4.9	1.0	－	井戸枠材か。年輪割の板目板。木口面の片側は切断面を残すが、もう一方は折れているため不明。製材時の粗い仕上げが木表裏両面で確認された。木口面が残る側では貫通孔が開けられている。また木表面には、溝状に加工された痕跡が残り、片側の柾目面には４カ所の切れ込みが入れられている。
11		6・30		３・４層	曲物	口径 22.5	底径 23.0	高さ 17.3	1189.0	完形。側板に木目に直行した切れ目。側板は二～三重に重なる。正面に７カ所左右に各１カ所の桜皮で固定。内部は使用時に入れた溶液の影響で黒ずんでいる。
12		31		３層	木簡(曲物底板)	33.7	17.3	1.2	382.0	柾目板。両柾目面ともに部分的に炭化。片仮名文字の墨書が記されている。詳細は附編参照。
13	51	31	SE100	３層	隅柱(北東)	〈8.7〉	6.4	6.5	－	井戸枠材。ミカン割で二方柾の心去り材。木口面は片側のみ残存、もう一方では腐食のため欠損している。柾目面の両面は腐食が激しい。底部はヨキにより削られ、粗い加工痕が残る。上部は欠損しているため詳細は不明だが、貫通孔があったものと考えられる。
14		6・31			隅柱(北西)	〈9.0〉	6.4	6.5	140.7	井戸枠材。ミカン割で二方柾の芯去材。腐食のため上部は欠損している。木口面は腐食しているが、部分的にヨキにより粗く仕上げられた状態が残る。出土時、柾目面に貫通孔を開け、横桟を挿し込み南西隅柱と連結している状態を確認。北東隅柱とは、板目面に貫通孔を開けて同じく横桟で連結していたと考えられる。放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、724～864calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。
15		6・31			隅柱(南東)	〈33.8〉	7.7	5.7	496.0	井戸枠材。ミカン割で二方柾の芯去材。木口面はヨキにより粗く仕上げられた状態。上部は腐植のため欠損している。板目面に貫通孔を開け、横桟を挿し込み南西隅柱と連結し、その上部の柾目面にも貫通孔を開け、北東隅柱と連結していた。放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、772～868calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。
16		6・31			隅柱(南西)	〈20.8〉	7.0	7.1	－	井戸枠材。ミカン割で二方柾の芯去材。木口面はヨキにより粗く仕上げられた状態。上部は腐植のため欠損している。柾目面に貫通孔を開け、横桟を挿し込み北西隅柱と連結し、その上部の板目面にも貫通孔を開け、南東隅柱と連結していた。板目面の貫通孔は上部が腐食のため欠損しているが、下部が残存している。
17		6・31			縦板	〈21.3〉	15.1	1.2	－	井戸枠材。年輪割の板目板。木表面を外側にして設置されていた。木口面の下部はヨキによる粗い仕上げが残る。上部は腐食のため欠損している。木裏面も腐食が激しい。板目面は、製材時の段差が明瞭に残る。

※〈　〉内の数値は残存値を表す。

第 27 表　木製品一覧表（２）

遺物番号	挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	種類・器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(高さ)(cm)	重量(g)	備考
18	51	6・31	ＳＥ100	３層	縦板	〈14.5〉	18.6	2.6	－	井戸枠材。年輪割の板目板。木表面を外側にして設置されていた。木口面の下部はヨキによる粗い仕上げが残る。上部は腐食のため欠損している。木裏面も腐食が激しい。板目面は、製材時の段差が明瞭に残る。木裏面には刃物による傷跡が残る。
19		6			縦板	〈40.4〉	15.7	2.0	－	井戸枠材。年輪割の板目板。木表面を外側にして設置されていた。木口面の下部はヨキによる粗い仕上げが残る。上部は腐食のため欠損している。木裏面も腐食が激しい。木表面には、製材時の段差が明瞭に残る。
249	87	8	ＳＥ05	４・５層	曲物底板	25.6	25.7	1.2	－	柾目板材。製材時の加工痕による段差が確認できる。放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1184～1243calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。
250		32		１層	付け木	〈16.9〉	0.8	0.6	－	板目板を裂いて再利用か。片側端部は、細く加工され、火を付けたことにより炭化している。もう一方の端部は、人為的に折った痕跡が残る。板目面は、片面で加工時の段差が残る。
251		32		４層	端部炭化加工材	〈50.3〉	2.0	1.6	－	心去材の二方柾。先端の木口面は、片側は四角に作られ、被熱を受け炭化している。もう一方の先端は細く加工している。柾目面、板目面ともに加工による段差が明瞭に残る。また炭化した木口面から約６㎝の位置では、長さ２㎝、幅0.5㎝の半円形に加工された箇所がある。
256	88	－	ＳＥ20	８層	加工材	〈31.8〉	28.0	7.3	－	井戸枠材。二方柾の心去り材。木口面は片側のみ残し、もう一方では腐食のため欠損している。表の柾目面及び残存する木口面は、ヨキにより削られ、粗い加工痕が残る。木口面は先端を尖らせている。放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1274～1292calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。
258		8・32	ＳＥ21	７層	鉤	20.7	7.0	2.1	73.0	完形。木の股部分を使用。先端は刃物で細く加工。上部のひもを掛ける部分は周囲より細く削る。樹皮が部分的に残存し、一部は炭化している。
263		9・32	ＳＥ31	９層	漆椀	口径〈14.2〉	6.1	7.0	68.1	内外面ともに黒漆塗(部分的に残存)。ブンギリ法による横木柾目の材で、ロクロ挽きでヤリガンナによる削出。
264	89	－		５層	ヘラ	〈21.1〉	〈5.1〉	0.5	－	柾目材。折れて欠損しているため全体像は不明。板目面には、加工時の削りによる段差がわずかに残る。
265		－		９層	有孔円盤板	〈44.6〉	〈21.5〉	1.6	－	柾目材。半円形に加工され、円形にされていない板目側は、直線上に切断加工されず、中央部分で段違いにされている。また、中央部には円形の切り抜きが確認でききる。両柾目面は部分的に腐食している。
271	90	32	ＳＥ34	３層	加工板材	［47.0］	3.2	1.1	－	井戸枠材。心去材の二方柾。木口面の片側は切断面を残すが、もう一方では折れて欠損している。木表裏両面の板目面には、製材時の段差が明瞭に残る。柾目面には片側で切れ込みが１カ所確認された。
272		－		７層	曲物底板	18.8	〈6.6〉	0.6	－	柾目板。表の柾目面は刃痕が多くまな板として再利用された可能性がある。裏の柾目面は腐食が激しい。
273		32			箸	22.6	1.0	0.5	2.8	両先端一部欠損。両先端を尖らせている。
274		32			箸	22.5	0.8	0.6	3.0	完形。両先端を尖らせている。
275		32			箸	22.5	0.9	0.7	3.8	完形。両先端を尖らせている。
276		32			箸	20.8	0.8	0.4	3.2	片側先端一部欠損。両先端を尖らせている。
277		32			箸	20.5	0.7	0.6	3.7	両先端一部欠損。両先端を尖らせている。
278		32			箸	18.9	0.7	0.6	2.9	両先端一部欠損。中央で折れ。両先端を尖らせている。
279		32			箸	23.7	0.7	0.5	3.2	完形。両先端を尖らせている。
280		32			箸	23.4	0.7	0.5	4.6	片側先端一部欠損。両先端を尖らせている。
286	92	32	ＳＥ58	７層	鉤	〈40.8〉	5.2	3.0	256.2	木の股部分を使用。底部先端を加工。使用時の熱を受け炭化している。樹皮の残存部も炭化している。
287		－			折敷	〈23.9〉	〈4.1〉	0.4	－	柾目板材。表裏両面ともに刃の痕跡がある。
288		－			折敷	〈22.6〉	〈8.5〉	0.7	－	柾目板。両柾目面ともに腐食が激しい。中央に２つの孔が穿かれている。
289		－			曲物底板	17.4	8.8	1.1	－	半分欠損。柾目板。上面及び下面一部が内容液の影響で黒ずんでいる。
290		32			箸	21.1	0.7	0.4	－	完形。両先端を尖らせている。
291		32			箸	〈23.1〉	0.6	0.5	－	片側先端は折れて欠損している。もう片側の先端は細く加工しているが、端部は平らになっている。
292		32			箸	25.9	0.9	0.6	－	折れあり。両端とも先端が尖っている。
293		－	ＳＥ63	６層	貫孔材	〈17.0〉	9.8	3.7	－	厚手の柾目材。板目面に中心に径1.2㎜の貫通孔が開けられている。
297		32	ＳＥ68	－	箸	〈22.6〉	0.7	0.6	－	片側端部は折れて欠損している。もう一方の端部先端は尖っている。
298	93	－	ＳＥ91	３層	有孔加工板材	〈10.3〉	〈3.4〉	1.3	－	板目板状。破損が激しい。板目面に径３～４㎜の貫通孔。上部は刃物で切断されている。
299		－			加工材	〈45.0〉	1.8	1.6	－	枝木を刃物により、加工したものと考えられ、湾曲している。放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1450～1490calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。
300	93	－	ＳＥ151	５層	加工板材	〈40.4〉	7.2	3.5	－	柾目板材。部分的に腐食。木口面の片側は板目面の両側を削り、やや丸丸味のある杭状に加工されている。もう一方の木口面は、折れて欠損しているため不明である。射性炭素年代測定(暦年較正用)の結果、1291～1386calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。
306	94	11	ＳＥ235	11層	加工板材	〈59.5〉	15.0	2.0	－	年輪割の板目板。木口面は両面ともヨキにより粗く切断された痕跡を残す。柾目面は、木表裏両面ともに、製材による段差が明瞭。放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1325～1411calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。
307		32			加工材	〈48.3〉	1.7	1.3	－	心去の二方柾材。折れている。片側端部は、錐状に加工されている。もう一方の端部は折れて欠損している。板目面はやや腐食が目立つ。
308		－			箸	〈31.5〉	1.0	1.0	－	折れあり。片側端部は折れて欠損している。もう一方の端部は尖っている。
309		－			箸	〈20.2〉	0.9	0.4	－	折れあり。片側端部は折れて欠損している。もう一方の端部は尖っている。平坦な面があり、板材等の転用か。
375	118	－	ＳＥ44	７層	加工板材	〈64.9〉	〈18.1〉	2.5	－	井戸枠構成材か。柾目板。破損し３個体に分裂。部分的に腐食。節穴が３孔。加工による貫通孔は上部の１孔のみ。木口面は上部は刃物で切断、下部先端はヨキにより荒く加工され、細くなっている。また柾目面にもヨキによる加工痕が残る。放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1046～1162calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。
376	119	19・32	ＳＥ71	５層	折敷	〈28.8〉	27.3	0.7	270.7	表裏面ともに刃物による切傷。２つの貫通孔。接合のための切り込みあり。
377	118	－	ＳＥ71	５層	折敷	33.2	〈8.0〉	0.5	85.1	表裏面ともに刃物による切傷。廃棄に際して、折れた後、刃物を入れて割っている。
378		－			くさび	6.5	1.7	0.8	－	心去り材。上部は切断。下部先端は細く加工。放射性炭素年代測定(暦年較正年代)の結果、1700～1915calＡＤ(１σ)の年代値が得られている。

※[　]内の数値は推定値、〈　〉内の数値は残存値を表す。

第４章　理化学的分析

第１節　放射性炭素年代測定

１　はじめに

大仙市に位置する峰吉川中村遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。測定対象試料は、井戸跡、カマド状遺構、火葬施設、火葬墓、土坑から出土した木製品、木材片、炭化物等の合計29点である。なお試料No.１～22は(株)加速器分析研究所が、試料No.23・24は(株)吉田生物研究所が、試料No.25～29は(株)パレオ・ラボが測定を行い、各報告書を編集し、第１節としてまとめた。

２　化学処理工程

（１）木片、炭化物の化学処理

１）試料No.１～22…メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
　試料No.23～29…超音波洗浄により付着物を取り除く。

２）酸－アルカリ－酸(AAA：Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常１mol/ℓ(１M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」、１M未満の場合は「AaA」と第28表に記載する。

３）試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO_2)を発生させる。

４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

５）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。

６）グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

（２）炭化物を含む土の化学処理

１）メス・ピンセットを使い、炭化物を周辺の土とともに採取する。

２）酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。処理には１mol/ℓ(１M)の塩酸(HCl)を用い、第40表に「HCl」と記載する。

以下、（１）３）以降と同じ。

測定試料の情報、調製データは第40表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

３　結果

第29表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}C$)、同位体分別効果の補正を行って

暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代を、第123～125図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代(yrBP)の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差(±１σ)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い(^{14}Cの半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正には試料No.１～22はOxCal v 4.2、試料No.23～29はOxCal4.2(較正曲線データ：IntCal13)を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

４　考察

試料No.１～22

試料22点の^{14}C年代は、1320±20yrBP(試料No.24)から90±20yrBP(試料No.5)の間にある。暦年較正年代(1σ)は、最も古いNo.18が661～761calADの間に２つの範囲、最も新しいNo.５が1700～1915calADの間に３つの範囲で示される。なお、No.５の較正年代については、記載された値よりも新しい可能性がある点に注意を要する(第29表下の警告参照)。推定される年代に対して一致する、もしくはやや古いものが多い。

試料の炭素含有率を確認すると、No.14、17、21、22を除く17点はすべて50％を超える適正な値であった。炭化物と土を完全に分けられなかったNo.14は15％、No.17は41％、No.22は24％で、No.14、17は通常よりかなり低い値となっている。炭化物を含む土として扱ったNo.21は5.7％で、これも明らかに低い値である。炭素含有率が低かった試料、特にアルカリ処理を行わなかったNo.21については、測定された炭素の由来に注意を要する。

試料No.25～29

以下、各試料の暦年較正結果のうち２σ暦年代範囲(確率95.4％)に着目して、遺構ごとに結果を整理する。

ＳＥ93井戸跡出土の底板(試料No.25：PLD－29523)は、1033－1155calAD(95.4％)であった。これは11世紀前半～12世紀中頃で、平安時代中期～後期に相当する。

ＳＥ09井戸跡出土の木材片(試料No.26：PLD－29524)は、1445－1518calAD(78.9％)および

1594-1619calAD(16.5%)であった。これは15世紀中頃～16世紀前半および16世紀末～17世紀前半で、室町時代もしくは安土・桃山時代～江戸時代前期に相当する。

ＳＥ05井戸跡出土の曲物底板(試料No.27：PLD－29525)は、1259－1290calAD(95.4%)であった。これは13世紀中頃～末で、鎌倉時代に相当する。一方、同じくＳＥ05井戸跡でサブトレンチ内出土の丸木(試料No.28：PLD－29526)は3262－3255calBC(1.2%)および309－2928calBC(94.2%)であった。これは小林(2008)によれば縄文時代中期中頃に相当し、ＳＥ05井戸跡に伴う試料ではないと推測される。

ＳＥ08井戸跡出土の曲物側板(試料No.29：PLD－29527)は、1166－1254calAD(95.4%)であった。これは12世紀後半～13世紀中頃で、平安時代後期～鎌倉時代に相当する。

木材は最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。今回の試料では、ＳＥ05井戸跡サブトレンチ内出土の丸木(試料No.28：PLD－29525)は最終形成年輪が残存しており、得られた最終形成年輪の年代は、木材が伐採もしくは枯死した年代を示していると考えられる。それ以外の試料は、最終形成年輪を欠く部位不明の炭化材であり、年代測定の結果は古木効果の影響を受けて、木材が枯死もしくは伐採された年代よりもやや古い年代を示している可能性がある。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337－360.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0－50,000Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869－1887.

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of C data, Radiocarbon 14 19(3), 355－363

中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」：3-20, 日本第四紀学会.

小林謙一(2008)縄文時代の暦年代．小杉　康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学2　歴史のものさし－縄文時代研究の編年体系－」：257－269，同成社.

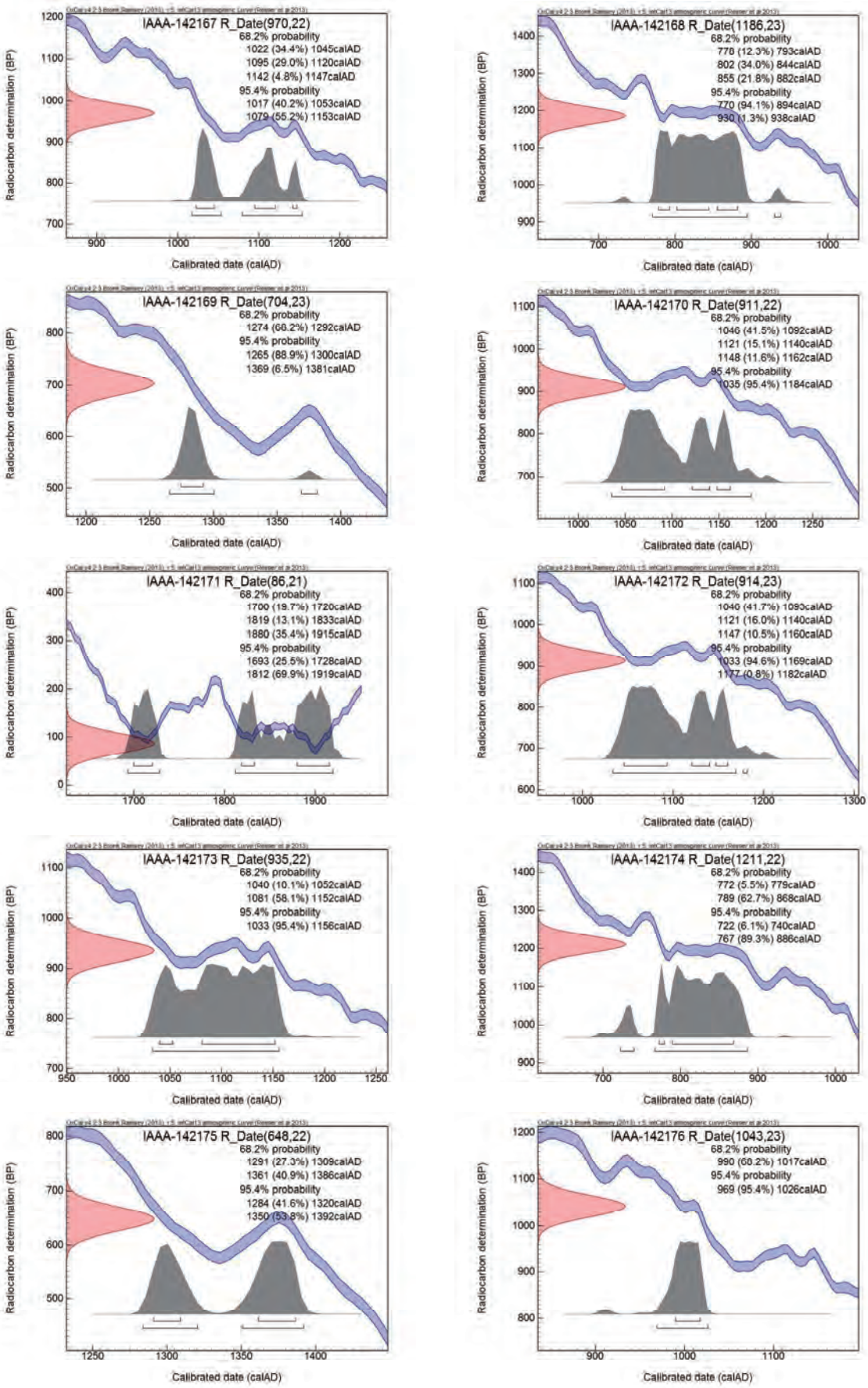
第 28 表　測定試料および処理

	測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	実測図
加速器１	IAAA-142167	遺構：ＳＥ06井戸跡 試料No. １	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：木材片	ＡＡＡ	－
加速器２	IAAA-142168	遺構：ＳＥ10井戸跡 層位：11層 試料No. ２	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：加工木材	ＡＡＡ	第49図２
加速器３	IAAA-142169	遺構：ＳＥ20井戸跡 層位：８層 試料No. ３	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：木材片	ＡＡＡ	第88図256
加速器４	IAAA-142170	遺構：ＳＥ44井戸跡 層位：７層 試料No. ４	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：木材片	ＡＡＡ	第118図375
加速器５	IAAA-142171	遺構：ＳＥ71井戸跡 層位：５層 試料No. ５	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：くさび	ＡＡＡ	第118図378
加速器６	IAAA-142172	遺構：ＳＥ92井戸跡 試料No. ６	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：加工材	ＡＡＡ	第49図６
加速器７	IAAA-142173	遺構：ＳＥ95井戸跡 層位：３層 試料No. ７	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：木材片	ＡＡＡ	第49図８
加速器８	IAAA-142174	遺構：ＳＥ100井戸跡 層位３層 試料No. ８	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：隅柱(北西)	ＡＡＡ	第51図14
加速器９	IAAA-142175	遺構：ＳＥ151井戸跡 層位：５層 試料No. ９	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：加工木材	ＡＡＡ	第93図300
加速器10	IAAA-142176	遺構：ＳＴ89火葬墓 試料No. 10	種類：炭化物 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：木材片	ＡＡＡ	－
加速器11	IAAA-142177	遺構：ＳＴ97火葬墓 試料No. 11	種類：炭化物 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：木材片	ＡＡＡ	－
加速器12	IAAA-142178	遺構：ＳＴ302火葬墓 試料No. 12	種類：炭化物 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：木材片	ＡＡＡ	－
加速器13	IAAA-142179	遺構：ＳＫＣ38火葬施設 試料No. 13	種類：炭化物 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：木材片	ＡＡＡ	－
加速器14	IAAA-142180	遺構：ＳＫＣ157火葬施設 試料No. 14	種類：炭化物 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：木材片	ＡａＡ	－
加速器15	IAAA-142181	遺構：ＳＥ235井戸跡 層位：11層 試料No. 15	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：板材	ＡＡＡ	第94図306
加速器16	IAAA-142182	遺構：ＳＯ36カマド状遺構 試料No. 16	種類：炭化物 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：木材片	ＡＡＡ	－
加速器17	IAAA-142183	遺構：ＳＯ81カマド状遺構 試料No. 17	種類：炭化物 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：木材片	ＡａＡ	－
加速器18	IAAA-142184	遺構：ＳＫ149土坑 層位：１層 試料No. 18	種類：炭化物 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：木材片	ＡＡＡ	－
加速器19	IAAA-142185	遺構：ＳＴ301火葬墓 試料No. 19	種類：炭化物 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：木材片	ＡＡＡ	－
加速器20	IAAA-142186	遺構：ＳＴ304火葬墓 試料No. 20	種類：炭化物 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：木材片	ＡＡＡ	－
加速器21	IAAA-142187	遺構：ＳＯ206カマド状遺構 層位：３層 試料No. 21	種類：炭化物を含む土 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：木材片	ＨＣＬ	－
加速器22	IAAA-142188	遺構：ＳＯ207カマド状遺構 層位：４層 試料No. 22	種類：炭化物 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：木材片	ＡａＡ	－
吉田１	PLD-29528	遺構：ＳＥ72井戸跡 試料No. 23	種類：生材(スギ) 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：曲物側板 状態：wet	ＡａＡ	第49図４
吉田２	PLD-29529	遺構：ＳＥ100井戸跡 層位：３層 試料No. 24	種類：生材(スギ) 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：隅柱(南東) 状態：wet	ＡａＡ	第51図15
パレオ１	PLD-29523	遺構：ＳＥ93井戸跡 試料No. 25	種類：生材(スギ) 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：底板 状態：dry	ＡａＡ	第49図７
パレオ２	PLD-29524	遺構：ＳＥ91井戸跡 層位：３層 試料No. 26	種類：生材(クリ) 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：木材片 状態：dry カビ：有	ＡＡＡ	第93図299
パレオ３	PLD-29525	遺構：ＳＥ05井戸跡 層位：４～５層 試料No. 27	種類：生材(ヒノキ) 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：曲物底板 状態：dry	ＡａＡ	第87図249
パレオ４	PLD-29526	遺構：ＳＥ05井戸跡 位置：サブトレンチ内 試料No. 28	種類：生材(エノキ属) 試料の性状：最終形成年輪 器種：丸木 状態：dry	ＡＡＡ	図版８
パレオ５	PLD-29527	遺構：ＳＥ08井戸跡 層位：5層 試料No. 29	種類：生材(スギ) 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 器種：曲物側板 状態：dry	ＡＡＡ	－

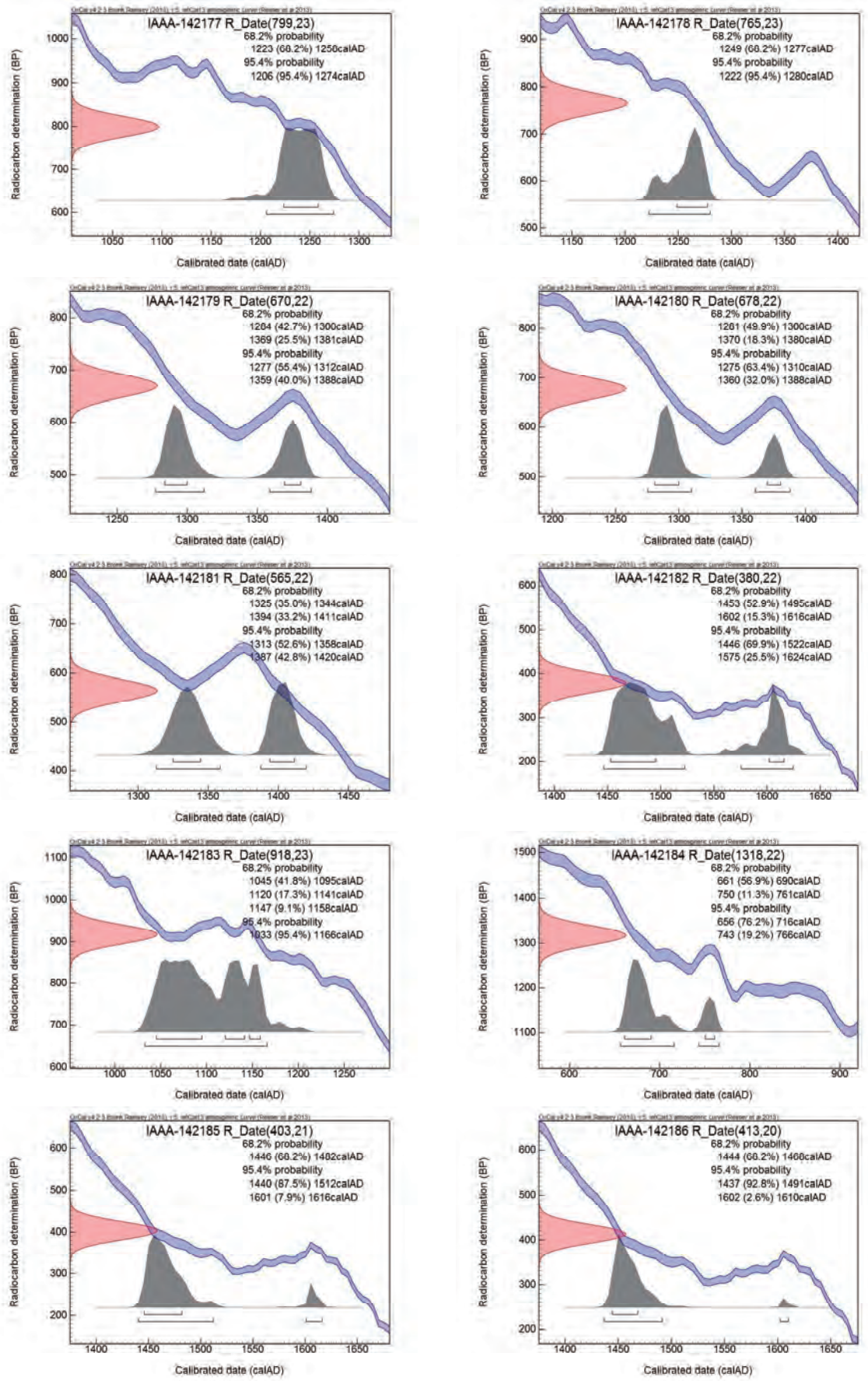
第29表　放射性炭素年代測定の暦年較正の結果

測定番号	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
IAAA-142167 試料No. 1（ＳＥ06井戸跡）	-25.49±0.25	970±22	970±20	1022calAD-1045calAD (34.4%) 1095calAD-1120calAD (29.0%) 1142calAD-1147calAD (4.8%)	1017calAD-1053calAD (40.2%) 1079calAD-1153calAD (55.2%)
IAAA-142168 試料No. 2（ＳＥ10井戸跡）	-23.96±0.25	1,186±23	1,190±20	778calAD-793calAD (12.3%) 802calAD-844calAD (34.0%) 855calAD-882calAD (21.8%)	770calAD-894calAD (94.1%) 930calAD-938calAD (1.3%)
IAAA-142169 試料No. 3（ＳＥ20井戸跡）	-28.61±0.26	704±23	700±20	1274calAD-1292calAD (68.2%)	1265calAD-1300calAD (88.9%) 1369calAD-1381calAD (6.5%)
IAAA-142170 試料No. 4（ＳＥ44井戸跡）	-25.42±0.24	911±22	910±20	1046calAD-1092calAD (41.5%) 1121calAD-1140calAD (15.1%) 1148calAD-1162calAD (11.6%)	1035calAD-1184calAD (95.4%)
IAAA-142171 試料No. 5（ＳＥ71井戸跡）	-24.08±0.28	86±21	90±20	1700calAD-1720calAD (19.7%)* 1819calAD-1833calAD (13.1%)* 1880calAD-1915calAD (35.4%)*	1693calAD-1728calAD (25.5%)* 1812calAD-1919calAD (69.9%)*
IAAA-142172 試料No. 6（ＳＥ92井戸跡）	-25.29±0.27	914±23	910±20	1046calAD-1093calAD (41.7%) 1121calAD-1140calAD (16.0%) 1147calAD-1160calAD (10.5%)	1033calAD-1169calAD (94.6%) 1177calAD-1182calAD (0.8%)
IAAA-142173 試料No. 7（ＳＥ95井戸跡）	-22.63±0.31	935±22	940±20	1040calAD-1052calAD (10.1%) 1081calAD-1152calAD (58.1%)	1033calAD-1156calAD (95.4%)
IAAA-142174 試料No. 8 （ＳＥ100井戸跡北西隅柱）	-23.90±0.25	1,211±22	1,210±20	772calAD-779calAD (5.5%) 789calAD-868calAD (62.7%)	722calAD-740calAD (6.1%) 767calAD-886calAD (89.3%)
IAAA-142175 試料No. 9（ＳＥ151井戸跡）	-27.79±0.24	648±22	650±20	1291calAD-1309calAD (27.3%) 1361calAD-1386calAD (40.9%)	1284calAD-1320calAD (41.6%) 1350calAD-1392calAD (53.8%)
IAAA-142176 試料No. 10（ＳＴ89火葬墓）	-23.98±0.28	1,043±23	1,040±20	990calAD-1017calAD (68.2%)	969calAD-1026calAD (95.4%)
IAAA-142177 試料No. 11（ＳＴ97火葬墓）	-21.12±0.34	799±23	800±20	1223calAD-1258calAD (68.2%)	1206calAD-1274calAD (95.4%)
IAAA-142178 試料No. 12（ＳＴ302火葬墓）	-22.22±0.25	765±23	770±20	1249calAD-1277calAD (68.2%)	1222calAD-1280calAD (95.4%)
IAAA-142179 試料No. 13（ＳＫＣ38火葬施設）	-19.93±0.30	765±23	670±20	1284calAD-1300calAD (42.7%) 1369calAD-1381calAD (25.5%)	1277calAD-1312calAD (55.4%) 1359calAD-1388calAD (40.0%)
IAAA-142180 試料No. 14（ＳＫＣ157火葬施設）	-24.25±0.31	678±22	680±20	1281calAD-1300calAD (49.9%) 1370calAD-1380calAD (18.3%)	1275calAD-1310calAD (63.4%) 1360calAD-1388calAD (32.0%)
IAAA-142181 試料No. 15（ＳＥ235井戸痕）	-24.10±0.24	565±22	570±20	1325calAD-1344calAD (35.0%) 1394calAD-1411calAD (33.2%)	1313calAD-1358calAD (52.6%) 1387calAD-1420calAD (42.8%)
IAAA-142182 試料No. 16（ＳＯ36カマド状遺構）	-23.23±0.33	380±22	380±20	1453calAD-1495calAD (52.9%) 1602calAD-1616calAD (15.3%)	1446calAD-1522calAD (69.9%) 1575calAD-1624calAD (25.5%)
IAAA-142183 試料No. 17（ＳＯ81カマド状遺構）	-23.59±0.25	918±23	920±20	1045calAD-1095calAD (41.8%) 1120calAD-1141calAD (17.3%) 1147calAD-1158calAD (9.1%)	1033calAD-1166calAD (95.4%)
IAAA-142184 試料No. 18（ＳＫ149土坑）	-25.08±0.25	1,318±22	1,320±20	661calAD-690calAD (56.9%) 750calAD-761calAD (11.3%)	656calAD-716calAD (76.2%) 743calAD-766calAD (19.2%)
IAAA-142185 試料No. 19（ＳＴ301火葬墓）	-25.65±0.34	403±21	400±20	1446calAD-1482calAD (68.2%)	1440calAD-1512calAD (87.5%) 1601calAD-1616calAD (7.9%)
IAAA-142186 試料No. 20（ＳＴ304火葬墓）	-22.56±0.29	413±20	410±20	1444calAD-1468calAD (68.2%)	1437calAD-1491calAD (92.8%) 1602calAD-1610calAD (2.6%)
IAAA-142167 試料No. 21（ＳＯ206カマド状遺構）	-9.24±0.34	544±21	540±20	1331calAD-1338calAD (9.5%) 1397calAD-1422calAD (58.7%)	1321calAD-1350calAD (25.2%) 1391calAD-1431calAD (70.2%)
IAAA-142167 試料No. 22（ＳＯ207カマド状遺構）	-24.21±0.30	717±22	720±20	1271calAD-1287calAD (68.2%)	1261calAD-1297calAD (95.4%)
PLD-29528 試料No. 23（ＳＥ72井戸跡）	-26.06±0.22	942±19	940±20	1035calAD-1050calAD (13.5%) 1084calAD-1125calAD (40.7%) 1136calAD-1151calAD (13.9%)	1029calAD-1154calAD (95.4%)
PLD-29529 試料No. 24 （ＳＥ100井戸跡南東隅柱）	-23.89±0.20	1224±18	1225±20	724calAD-739calAD (13.4%) 767calAD-778calAD (11.3%) 791calAD-827calAD (26.0%) 840calAD-864calAD (17.6%)	711calAD-745calAD (19.8%) 765calAD-882calAD (75.6%)
PLD-29523 試料No. 25（ＳＥ93井戸跡）	-25.95±0.19	935±21	935±20	1040calAD-1052calAD (10.1%) 1081calAD-1152calAD (58.1%)	1033calAD-1155calAD (95.4%)
PLD-29524 試料No. 26（ＳＥ91井戸跡）	-28.22±0.20	388±20	390±20	1450calAD-1490calAD (60.1%) 1603calAD-1610calAD (8.1%)	1445calAD-1518calAD (78.9%) 1594calAD-1619calAD (16.5%)
PLD-29525 試料No. 27（ＳＥ05井戸跡）	-25.77±0.24	731±20	730±20	1268calAD-1282calAD (68.2%)	1259calAD-1290calAD (95.4%)
PLD-29526 試料No. 28 （ＳＥ05井戸跡サブトレンチ内）	-28.31±0.16	4414±22	4415±20	3094calAD-3011calBC (65.0%) 2977calAD-2973calBC (1.7%) 2948calAD-2945calBC (1.5%)	3262calAD-3255calBC (1.2%) 3099calAD-2928calBC (94.2%)
PLD-29527 試料No. 29（ＳＥ08井戸跡）	-25.84±0.13	835±18	835±20	1184calAD-1225calAD (59.9%) 1234calAD-1243calAD (8.3%)	1166calAD-1254calAD (95.4%)

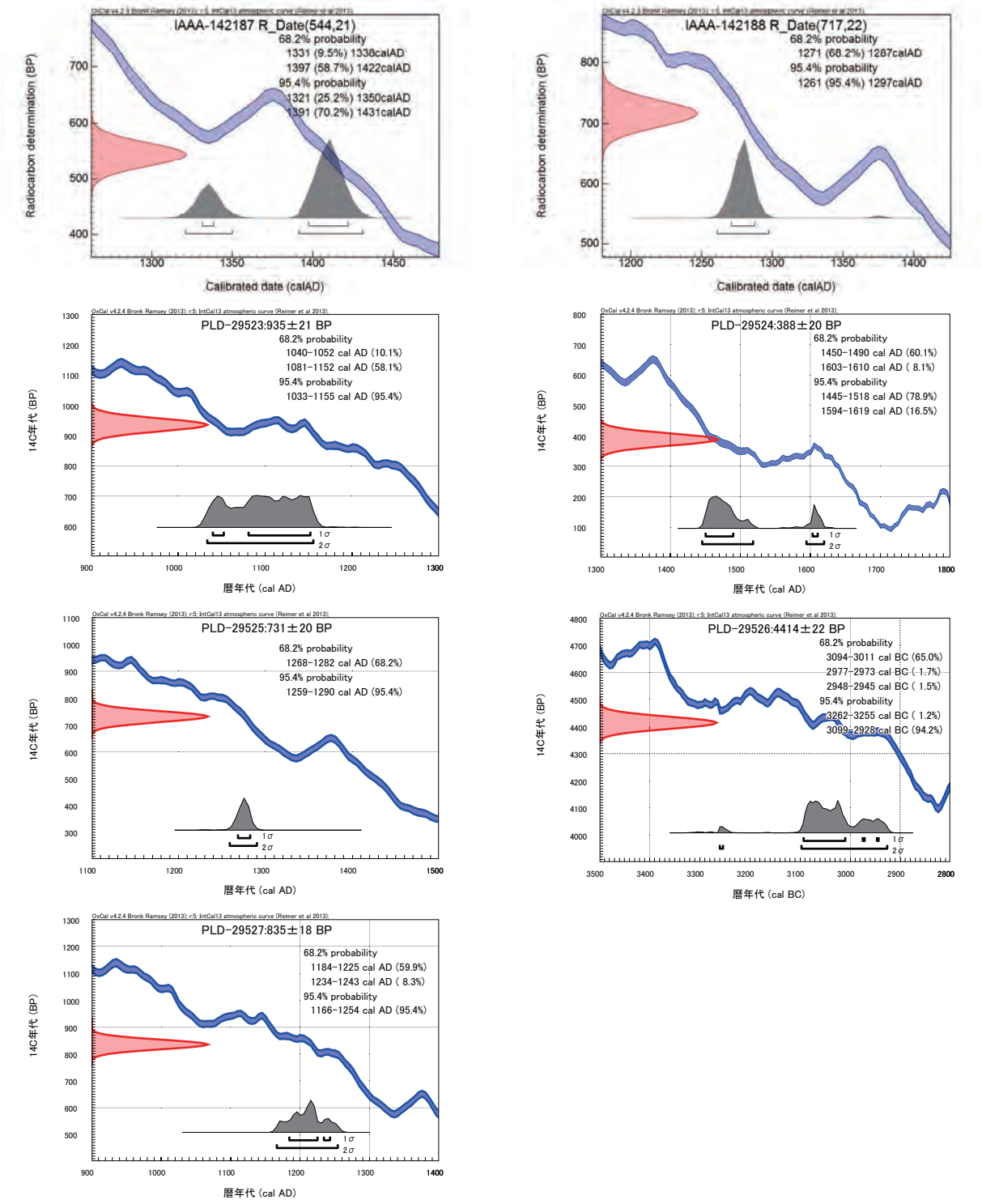
Warning! Date probably out of range
（この警告は較正プログラムOxCal が発するもので、試料の^{14}C年代に対応する較正年代が、当該暦年較正曲線で較正可能な範囲を超える新しい年代となる可能性があることを表す。）



第 123 図　暦年較正年代グラフ（参考）（１）



第 124 図　暦年較正年代グラフ（参考）（２）



第 125 図　暦年較正年代グラフ（参考）（３）

第２節　樹種同定

(株)吉田生物研究所

１　試料

試料は秋田県峰吉川中村遺跡から出土した木簡(曲物底板)、漆器椀、曲物、折敷、井戸枠隅柱を各１点、鉤、箸を各２点の合計９点である。

２　観察方法

剃刀で木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

３　結果

樹種同定結果(針葉樹２種、広葉樹２種)の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

１）マキ科マキ属イヌマキ(*Podocarpus macropyllus* Sweet)

(遺物No.４)

(写真No.４)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はゆるやかであり、年輪界がやや不明瞭で均質な材である。樹脂細胞はほぼ平等に散在し数も多い。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で１分野に１～２個ある。短冊型をした樹脂細胞が早材部、晩材部の別なく軸方向に連続(ストランド)をなして存在する。板目では放射組織はすべて単列であった。イヌマキは本州(中・南部)、四国、九州、琉球に分布する。

２）スギ科スギ属スギ(*Cryptomeria japonica* D.Don)

(遺物No.１,３,５,６,８,９)

(写真No.１,３,５,６,８,９)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で１分野に１～３個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

３）ヤナギ科ヤナギ属(*Salix* sp.)

(遺物No.７)

(写真No.７)

散孔材である。木口では中庸ないしやや小さい道管(～110μm)が単独または２～４個放射方向ないし斜線方向に複合して分布する。軸方向柔組織は年輪界で顕著。柾目では道管は単穿孔と交互壁孔を有する。放射組織は直立と平伏細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔はやや大きく、篩状になっている。板目では放射組織はすべて単列、高さ～450μmであった。ヤナギ

属はバッコヤナギ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

４)ニレ科ケヤキ属ケヤキ(*Zelkova serrata* Makino)

(遺物No.２)

(写真No.２)

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管(～270μm)が１列で孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圏部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している(イニシアル柔組織)。放射組織は１～数列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の１～３列のものと大部分を占める６～７細胞列のほぼ大きさの一様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

林 昭三 「日本産木材顕微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所(1991)

島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版(1988)

北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社(1979)

奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)

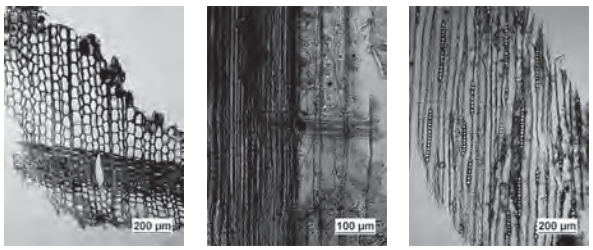
奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)

◆使用顕微鏡◆

Nikon DS－Fi1

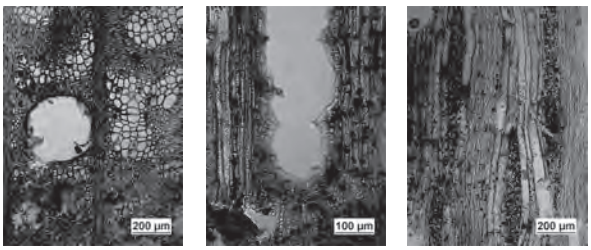
第30表　秋田県峰吉川中村遺跡出土木製品同定表

No.	品名	樹種	^{14}C	実測図
1	木簡(曲物底板)	スギ科スギ属スギ	－	第50図12
2	漆器椀	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	－	第88図263
3	曲物	スギ科スギ属スギ	試料No.23	第49図４
4	鉤	マキ科マキ属イヌマキ	－	第88図258
5	箸	スギ科スギ属スギ	－	第90図274
6	箸	スギ科スギ属スギ	－	第90図279
7	鉤	ヤナギ科ヤナギ属	－	第92図286
8	折敷	スギ科スギ属スギ	－	第119図376
9	井戸枠隅柱(南東)	スギ科スギ属スギ	試料No.24	第51図15



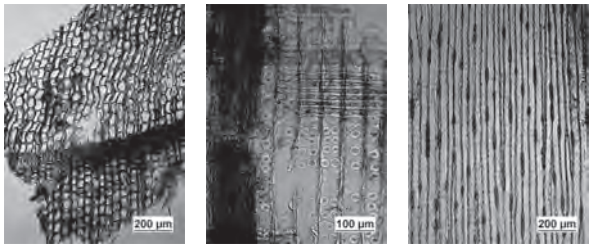
木口　　柾目　　板目

No-１　スギ科スギ属スギ



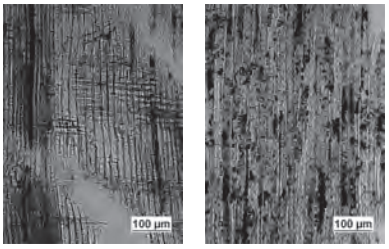
木口　　柾目　　板目

No-２　ニレ科ケヤキ属ケヤキ



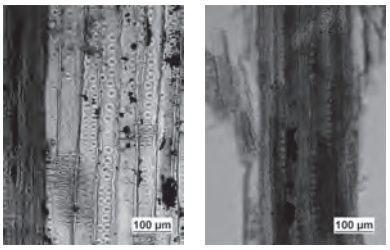
木口　　柾目　　板目

No-３　スギ科スギ属スギ



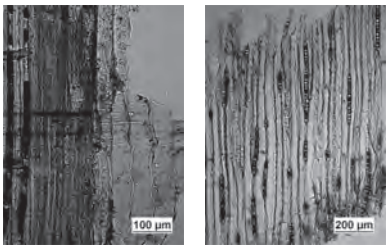
柾目　　板目

No-４　マキ科マキ属イヌマキ



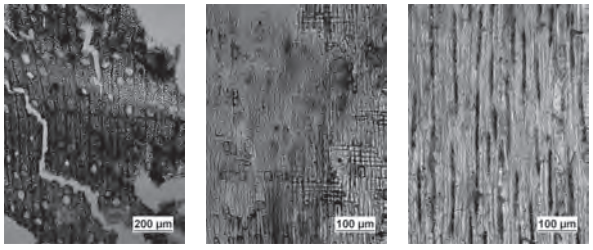
柾目　　板目

No-５　スギ科スギ属スギ



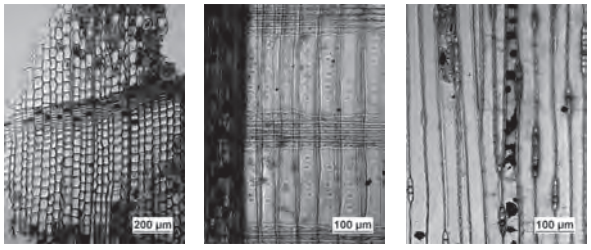
柾目　　板目

No-６　スギ科スギ属スギ



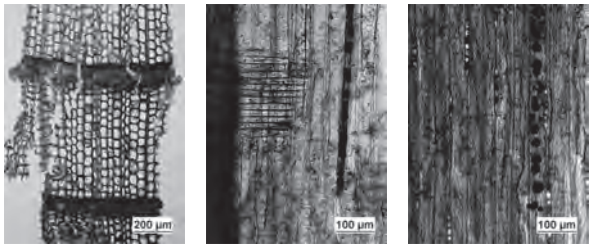
木口　　柾目　　板目

No-７　ヤナギ科ヤナギ属



木口　　柾目　　板目

No-８　スギ科スギ属スギ



木口　　柾目　　板目

No-９　スギ科スギ属スギ

第 126 図　樹種同定　顕微鏡写真

第３節　種実同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

峰吉川中村遺跡(秋田県大仙市協和峰吉川字中村地内)は、雄物川右岸に分布する微高地に立地する。遺跡では、発掘調査の結果、平安時代前期～近世の遺構・遺物が確認され、平安時代から現代に至るまで断続的に集落が続いていたことが明らかとされている。

本報告では、植物利用や植生、遺構の性格に関する資料の作成を目的として、井戸跡や火葬墓と推定される土坑などから出土した種実遺体の同定を実施した。

１　試料

試料は、井戸跡(ＳＥ21・58・72・95・100)および埋葬施設と考えられる火葬墓(ＳＴ89・97)などから出土した種実遺体７試料(試料番号１～７)である。各試料の詳細(試料名、出土層位、保管状態)および出土遺物や放射性炭素年代測定結果等により推定された遺構の時期などは、一覧として第31表に示したので参照されたい。

第 31 表　分析試料一覧

試料番号	試料内容(試料名)	出土層位	保管状態	時期
1	ＳＥ21井戸跡	７層(底面付近)	水浸	中世
2	ＳＥ58井戸跡	７層(埋土下部)	水浸	鎌倉時代(13世紀前半)
3	ＳＥ72井戸跡底	－(埋土下部)	水浸	平安時代後期(11世紀中葉～12世紀前半)
4	ＳＥ95井戸跡曲物内	３層(埋土下部)	乾燥	平安時代後期(11世紀半ば～12世紀半ば)
5	ＳＥ100井戸跡	３層(埋土下部)	水浸	奈良時代半ば～平安時代前期(８世紀半ば～９世紀半ば)
6	ＳＴ89火葬墓	１層	乾燥	平安時代後期(10世紀末～11世紀前)
7	ＳＴ97火葬墓	２層	乾燥	鎌倉時代(13世紀第２四半期～中葉)

２　分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実遺体を抽出する。種実遺体の同定は、現生標本や石川(1994)、中山ほか(2000)、鈴木ほか(2012)等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて、結果を一覧表で示す。また、保存状態が良好な種実遺体を対象として、長さ、幅、厚さ等をデジタルノギスで計測し、結果を一覧表に併記する。欠損等で完全な計測値を得られない場合は、残存値にプラス「+」で表示する。

分析後は、種実遺体を分類群別に容器に入れ、水浸試料は約70％のエタノール溶液に液浸し、保管する。

３　結果

同定結果および主な種実遺体の計測値を第32表に、各分類群の写真を第127図に示す。

分析に供された７試料を通じて、木本４分類群(クリ、スモモ、モモ、トチノキ)13個、草本３分類群(イネ、オオムギ、ヒエ)181個の、計194個の種実遺体が同定された。また、種実遺体以外では、木材(ＳＥ100井戸跡)、炭化材(ＳＴ89・ＳＴ97火葬墓)、骨片(ＳＴ97火葬墓)、土粒(ＳＴ89・97火葬墓)なども確認された。

栽培種は、果樹のスモモの核が１個(ＳＥ21井戸跡)、モモの核が２個(ＳＥ58・95井戸跡)と、穀

第 32 表　種実同定結果

試料番号	試料内容	分類群	部位	状態		個数	番号	計測値(㎜) 長さ	幅	厚さ	図版番号	備考
1	ＳＥ21井戸跡	スモモ	核	完形		1	－	14.8	13.4	9.7	3	
		トチノキ	種子	完形		1	－	23.4	26.4	－	6	
2	ＳＥ58井戸跡７層	モモ	核	破片		1	－	21.8 ＋	17.3	6.9	5	半分，頂部欠損，内面凹部長15.2㎜，幅10.6㎜
3	ＳＥ72井戸跡　底	クリ	果実	完形		1	－	19.9	20.5	13.6	1	
				完形未満		1	－	20.1	23.5	12.3	2	接合し完形１個体
				破片		1	－					腹面側着点に径0.9㎜の孔（虫類食痕）
				破片		3	－	19.1 ＋	21.7 ＋	－	－	２個接合，背面
		トチノキ	種子	完形		1	－	17.8	27.2	－	－	
4	ＳＥ95井戸跡曲物内	モモ	核	完形		1	－	23.0	19.3	14.7	4	
		トチノキ	種子	完形		1	－	18.1	22.1	－	7	
5	ＳＥ100井戸跡	トチノキ	種子	破片		1	－	－	32.2 ＋	－	－	
		その他				1	－	－	－	－	－	木材
6	ＳＴ89火葬墓	イネ	穎・胚乳	完形・塊状	炭化	4	－	－	－	－	8	別個体胚乳破片接着
				完形	炭化	3	－	－	－	－	－	
				完形未満	炭化	1	－	－	－	－	－	
			胚乳	完形	炭化	16	1	4.5	2.7	2.3	12	
							2	4.3	2.8	1.6	－	
							3	4.6	2.7	2.0	－	
							4	4.2	2.5	1.4	－	
							5	4.5	2.6	1.8	－	
							6	4.8	2.9	2.1	－	
							7	4.7	2.3	2.0	－	
							8	4.1	2.8	2.1	－	
							9	4.3	2.6	2.0	－	
							10	4.4	2.9	2.0	－	
							11	4.7	2.4	1.9	－	
							12	3.3	2.0	1.1	－	
							13	4.0	2.3	1.9	－	
							14	4.6	2.6	2.2	－	
							15	4.4	3.1	2.0	－	
							16	4.7	1.9	1.4	－	
							－	3.3	1.9	1.1	－	最小
							－	4.8	3.1	2.3	－	最大
							－	4.4	2.6	1.9	－	平均
							－	0.4	0.3	0.3	－	標準偏差
				完形未満	炭化	25	－	－	－	－	－	
				破片	炭化	5	－	－	－	－	－	
		オオムギ	胚乳	完形	炭化	1	－	5.8	2.8	2.3	14	胚長1.8㎜
		その他				4	－	－	－	－	－	炭化材、土粒など
7	ＳＴ97火葬墓	イネ	穎・胚乳	完形	炭化	32	1	5.9	2.4	1.8	9	
					炭化	－	2	4.2	1.6	1.4	10	細身
				完形未満	炭化	19	－	－	－	－	－	
				破片	炭化	3	－	－	－	－	－	
			胚乳	完形	炭化	31	1	4.8	2.3	1.8	11	
							2	4.6	2.5	2.0	－	
							3	4.7	2.4	2.0	－	
							4	4.3	2.8	2.3	－	
							5	4.4	3.0	2.0	－	
							6	3.7	2.6	1.7	－	
							7	4.4	2.6	2.0	－	
							8	3.8	2.2	1.8	－	
							9	4.5	2.1	1.6	－	
							10	3.5	2.2	1.7	－	
							11	4.4	2.8	2.2	－	
							12	4.3	2.7	1.8	－	
							13	4.0	2.4	1.8	－	
							14	4.3	2.9	2.2	－	
							15	4.5	2.1	1.8	－	
							16	4.4	2.9	2.0	－	
							17	4.7	2.2	2.1	－	
							18	4.5	3.0	2.0	－	
							19	4.6	2.9	2.3	－	
							20	4.7	2.9	2.0	－	
							21	4.3	2.7	1.7	－	
							22	4.8	2.9	1.9	－	
							23	3.7	2.2	1.7	－	
							24	4.4	2.3	2.0	－	
							25	4.3	2.7	2.0	－	
							26	3.8	2.2	2.1	－	
							27	4.4	2.2	1.7	－	
							28	4.2	2.3	1.7	－	
							29	3.3	2.2	1.5	－	
							30	3.7	2.1	1.7	－	
							31	4.1	2.0	1.8	－	
							－	3.3	2.0	1.5	－	最小
							－	4.8	3.0	2.3	－	最大
							－	4.3	2.5	1.9	－	平均
							－	0.4	0.3	0.2	－	標準偏差
				完形未満	炭化	22	－	－	－	－	－	
				破片	炭化	16	－	－	－	－	－	
		ヒエ	穎・胚乳	完形	炭化	3	－	2.4	1.6	1.2	13	
		その他				25	－	－	－	－	－	炭化材、骨片、土粒など
				合計		224	－	－	－	－	－	

＊計測はデジタルノギスを使用。欠損は残存値に「＋」で示す。

類のイネの炭化穎・胚乳が62個（ＳＴ89・97火葬墓）、炭化胚乳が115個（ＳＴ89・97火葬墓）、オオムギの炭化胚乳が１個（ＳＴ89火葬墓）、ヒエの炭化穎・胚乳が３個（ＳＴ97火葬墓）の、計184個が確認され、種実全体の94.8％を栽培種が占める。とくに、最も多く確認されたイネ（177個）は、種実全体の91.2％、栽培種全体の96.2％を占める。

第 33 表　出土炭化米の粒大・粒形

試料	標本数(n)	円粒					短粒					長粒				
		極々小	極小	小型	中型	大型	極々小	極小	小型	中型	大型	極々小	極小	小型	中型	大型
ＳＴ89火葬墓	16	－	－	－	－	－	1	8	5	－	－	－	2	－	－	－
ＳＴ97火葬墓	32	－	－	－	－	－	3	13	8	－	－	1	7	－	－	－
合計	48	－	－	－	－	－	4	21	13	－	－	1	9	－	－	－

＊粒大（長さ×幅）、粒形（長さ/幅）は、佐藤（1988）の定義に従う。

栽培種を除いた分類群は、全て落葉広葉樹であり、堅果類のクリの果実が６個（ＳＥ72井戸跡）と、トチノキの種子が４個（ＳＥ21・72・95・100井戸跡）の、計10個が確認された。

以下に、遺構毎に種実遺体の出土状況等を述べる。

１）試料番号１；ＳＥ21井戸跡

栽培種のスモモの核の完形が１個（第127図－３）と、堅果類のトチノキの種子の完形が１個（第127図１－６）確認された。

２）試料番号２；ＳＥ58井戸跡７層

栽培種のモモの核の破片が１個確認された（第127図－５）。

３）試料番号３；ＳＥ72井戸跡底

堅果類のクリの果実の完形が１個（第127図－１）、完形未満が１個、破片が４個と、トチノキの種子の完形が１個確認された。クリの完形未満１個と破片１個が接合して完形１個体となる（第127図－２）。なお、基部腹面側の着点に径0.9㎜の孔が確認され、虫類による食痕と考えられる（第127図－２ｂ）。その他、破片２個は接合し、丸みを帯びることから背面と考えられる。

４）試料番号４；ＳＥ95井戸跡曲物内

栽培種のモモの核の完形が１個（第127図－４）と、堅果類のトチノキの種子の完形が１個（第127図－７）確認された。

５）試料番号５；ＳＥ100井戸跡

堅果類のトチノキの種子の破片が１個確認された。

６）試料番号６；ＳＴ89火葬墓

炭化した栽培種のイネの穎・胚乳の完形・塊状が４個、完形が３個、完形未満が１個、胚乳の完形が16個、完形未満が25個、破片が５個と、炭化したオオムギの胚乳の完形が１個（第127図－14）の、計55個が確認された。

イネの胚乳（炭化米）のうち、状態が良好な16個の計測値は、長さが最小3.3～最大4.8（平均4.4±標準偏差0.4）mm、幅が1.9～3.1（平均2.6±0.3）mm、厚さが1.1～2.3（平均1.9±0.3）mmであった（第32表）。また、計測値をもとに粒形・粒大（佐藤,1988）を求めた結果、短粒が14個（極々小型１個、極小型８個、小型５個）と大部分を占め、長粒は２個（極小型）のみで、円粒は確認されなかった（第33表）。

イネの保存状態は比較的良好で、胚乳表面に２～３本の縦隆条が明瞭に確認される個体や種皮が残

る「玄米」の状態(第127図－12)、穎(籾)が残る個体(第127図－８ａ)、別個体の胚乳の破片が接着する塊状(第127図-８ｂ)も確認された。

７）試料番号７；ＳＴ97火葬墓

炭化した栽培種のイネの穎・胚乳の完形が32個、完形未満が19個、破片が３個、胚乳の完形が31個、完形未満が22個、破片が16個と、炭化したヒエの穎・胚乳の完形(第127図－３)が３個の、計126個が確認された。

イネの保存状態は、ＳＴ89火葬墓よりも良好で(第127図－９・11)、胚乳表面に穎(籾)が残る個体や細身の個体が多い(第127図-９・10)。イネの胚乳のうち、状態が良好な31個の計測値は、長さが3.3～4.8(平均4.3±0.4)mm、幅が2.0～3.0(平均2.5±0.3)mm、厚さが1.5～2.3(平均1.9±0.2)mmであった(第44表)。また、穎・胚乳１個(第127図-10)の計測値を含む32個の粒形・粒大は、短粒が24個(極々小型３個、極小型13個、小型８個)と大部分を占め、長粒は８個(極々小型７個、極小型１個)と次ぎ、円粒は確認されなかった(第45表)。

４　考察

井戸跡や火葬墓から出土した種実遺体には、栽培種のスモモ、モモ、イネ、オオムギ、ヒエが確認され、これらが全体の95％を占める組成を示した。これらの栽培種のうち、果樹のスモモやモモ、穀類のイネやオオムギは、栽培のために持ち込まれた渡来種とされ、スモモやモモは観賞用の他、果実や種子が食用、薬用、祭祀等に、穀類のイネやオオムギ、ヒエなどは胚乳が食用に利用される。

上記した栽培種の検出状況や種実遺体の状態についてみると、井戸跡で確認されたモモやスモモはいずれも未炭化であったのに対して、ＳＴ89・97火葬墓はイネを主体とし、すべて炭化するという特徴が認められた。調査所見によれば、ＳＴ89・97火葬墓は火葬施設で焼かれた人骨を埋葬した火葬墓と推測されている。これらの遺構より出土した種実遺体は、埋葬時の埋納物の可能性が考えられるが、すべて炭化する状況を考慮すると、火葬の際に火を受けた状態を示している可能性も考えられる。

なお、ＳＴ89・97火葬墓より多産したイネ、ＳＴ89火葬墓より確認されたオオムギ、ＳＴ97火葬墓より確認されたヒエは、胚乳表面に穎が残る籾の状態や種皮が残る状態が確認され、とくにＳＴ97火葬墓では穎の残存率が高い。このような特徴から、イネ、オオムギ、ヒエなどの炭化穀粒は、籾がついた食用前の状態で火を受けたことが推定される。また、イネ(炭化米)の粒形・粒大については、ＳＴ89・97火葬墓のいずれも短粒極小型・小型が大部分を占め、ＳＴ97火葬墓で長粒極小型がやや多いという傾向が確認された。

次に、栽培種を除いた分類群では、堅果類のクリとトチノキが確認された。クリは丘陵や山地に生育する二次林要素の落葉高木であり、トチノキは渓流沿いの肥沃地などに生育する河畔林要素の落葉高木である。本遺跡の立地などを考慮すると、これらは当時の遺跡周辺に分布した二次林や雄物川流域の河畔林などに生育していたと考えられる。また、クリは果実内部の子葉が食用可能であり、トチノキは種子内部の子葉をあく抜きすることで食用可能となる有用植物である。出土したクリやトチノキは、全て成熟した果実・種子から成ることから、遺跡周辺の森林より食用可能な成熟果実・種子が選択的に採取されたと推定されるが、ＳＥ21・72・95井戸跡より出土したトチノキやＳＥ72井戸跡のクリなどは完形個体であったことから、食利用前の状態であったことが示唆される。

なお、これらの有用植物は、すべて井戸跡から出土しており、その多くが覆土下部の井戸廃絶時の埋戻し土あるいは木製品などが廃棄された層位より出土していることから、井戸廃絶時の人為的行為に伴う可能性が考えられる。

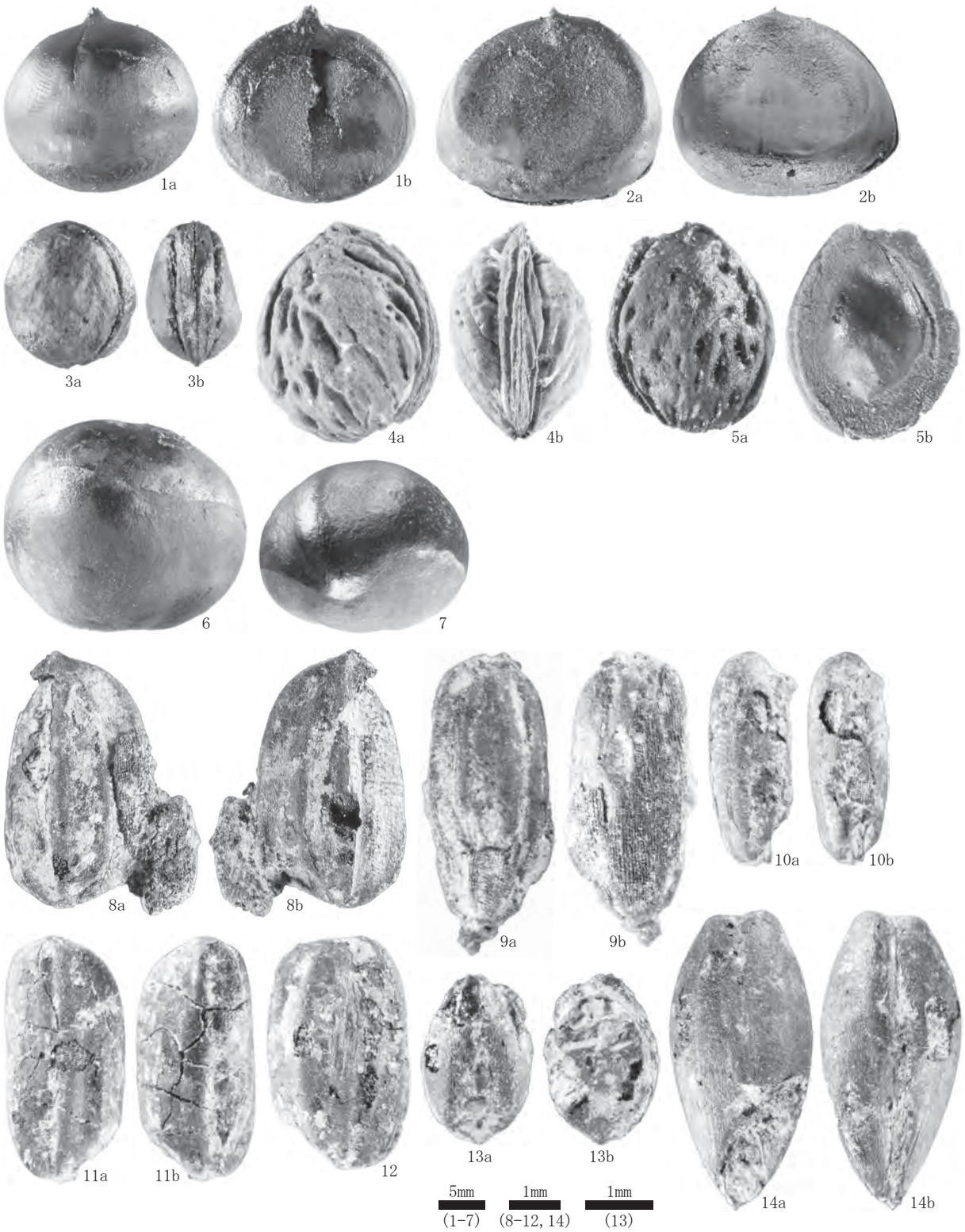
＜引用文献＞

石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑(2010年改訂版).東北大学出版会,678p.

佐藤敏也,1988,弥生のイネ.弥生文化の研究2生業,金関　恕・佐原　真編,雄山閣,97－111.

鈴木庸夫・高橋　冬・安延尚文,2012,ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種－.誠文堂新光社,272p.



1. クリ　果実（ＳＥ72井戸跡底;3）
2. クリ　果実（基部食痕）（ＳＥ72井戸跡底;3）
3. スモモ　核（ＳＥ21井戸跡;1）
4. モモ　核（ＳＥ95井戸跡曲物内;4）
5. モモ　核（ＳＥ58井戸跡７層;2）
6. トチノキ　種子（ＳＥ21井戸跡;1）
7. トチノキ　種子（ＳＥ95井戸跡曲物内;4）
8. イネ　穎・胚乳（別個体接着）（ＳＴ89火葬墓;6）
9. イネ　穎・胚乳（ＳＴ97火葬墓;7）
10. イネ　穎・胚乳（ＳＴ97火葬墓;7）
11. イネ　胚乳（ＳＴ97火葬墓;7）
12. イネ　胚乳（ＳＴ89火葬墓;6）
13. ヒエ　穎・胚乳（ＳＴ97火葬墓;7）
14. オオムギ　胚乳（ＳＴ89火葬墓;6）

第 127 図　種実遺体

第４節　骨同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

峰吉川中村遺跡(秋田県大仙市協和峰吉川字中村地内)は、雄物川右岸に分布する微高地に立地する。遺跡では、発掘調査の結果、平安時代初期・後期頃の遺構・遺物が確認されたほか、鎌倉時代前半～江戸時代と考えられる集落跡の存在が明らかとされている。

本分析では、鎌倉時代～室町時代の火葬施設や火葬骨を埋葬したと考えられる火葬墓などから出土した骨について、出土骨の種類および部位に関わる情報を得ることを目的として骨同定を実施した。

１　試料

試料は、鎌倉時代～室町時代の埋葬施設と考えられる火葬墓(ＳＴ89・ＳＴ97・ＳＴ302)や火葬施設(ＳＫＣ38・157・180)、さらに火葬墓を壊して構築されたと考えられるカマド状遺構(ＳＯ81)より出土した骨片である。

これらの試料は、遺構毎に試料番号(骨１～７)が付されているが、ＳＴ302火葬墓試料(骨３)は骨を収納した袋が複数確認されたため、便宜的に枝番(骨３－１～骨３－６)を付して扱っている。なお、試料の詳細および調査所見や放射性炭素年代測定結果等により推定された遺構の時期などは、一覧として第34表に示したので参照されたい。

第 34 表　分析試料一覧

試料番号		試料出土遺構	時期	試料名	年月日	重量(g)	備考
骨１	ＳＴ89	火葬墓	平安時代後期	ＳＴ89骨１	14.08.25	262.3	
骨２	ＳＴ97	火葬墓	鎌倉時代半ば	ＳＴ97骨２		175.9	
骨３	ＳＴ302	火葬墓	鎌倉時代	ＳＴ302	14.09.08	473.8	
				ＳＴ302骨	14.09.10	406.2	
				ＳＴ302骨	14.09.09	26.2	4袋あり
骨４	ＳＫＣ38	火葬施設	鎌倉時代後半～室町時代前期	ＳＫＣ38		16.4	
骨５	ＳＫＣ157	火葬施設	鎌倉時代後半～室町時代前期	ＳＫＣ157		29.5	
骨６	ＳＫＣ180	火葬施設	(鎌倉時代～室町時代)	ＳＫＣ180		51.0	
骨７	ＳＯ81	カマド状遺構３層(火葬墓と重複して古いか)	(平安時代後半)	ＳＯ81３層	14.09.01	39.4	

２　分析方法

試料を肉眼等で観察し、形態的特徴から種類および部位を同定する。

３　結果

同定結果を第35表に、人体骨格各部位の名称を第128図に示す。以下に、遺構毎に同定結果を記す。

⑴ 骨１；ＳＴ89火葬墓

ヒトの大腿骨・脛骨、ヒトの鎖骨の可能性がある破片、哺乳類の脳頭蓋・肋骨上腕骨/大腿骨・四肢骨・部位不明破片が検出される。

⑵ 骨２；ＳＴ97火葬墓

ヒトの基節骨、哺乳類の脳頭蓋・頭蓋骨・上腕骨/大腿骨・四肢骨・部位不明破片が検出される。

⑶ 骨３－１～３-６；ＳＴ302火葬墓

ヒトの前頭骨右側破片・左側頭骨・左右頬骨・上顎骨・下顎骨左関節突起・下顎骨片・上顎骨/下顎骨・上腕骨・橈骨/尺骨の可能性がある破片・大腿骨・脛骨・腓骨・左側の可能性がある距骨・踵骨・中手骨/中足骨・基節骨/中節骨、ヒトの大腿骨・脛骨・足根骨の可能性がある破片、哺乳類の脳頭蓋・頭蓋骨・椎骨・肋骨の可能性がある破片・上腕骨/大腿骨・四肢骨・部位不明破片が検出される。

⑷ 骨４；ＳＫＣ38火葬施設

ヒトの左大菱形骨・末節骨、哺乳類の脳頭蓋・四肢骨・部位不明破片が検出される。

⑸ 骨５；ＳＫＣ157火葬施設

哺乳類の頭蓋骨・椎骨の可能性がある破片、四肢骨、部位不明破片が検出される。

⑹ 骨６；ＳＫＣ180火葬施設

哺乳類の脳頭蓋・四肢骨・部位不明破片が検出される。

⑺ 骨７；ＳＯ81カマド状遺構３層

ヒトの右側頭骨、哺乳類の頭蓋骨の可能性がある破片・四肢骨・部位不明破片が検出される。

４　考察

今回の分析に供された火葬施設および火葬墓などから出土した骨片は、小型の破片が多く、いずれも白色を呈しており、表面に細かなひび割れを生じるなどの特徴が認められた。馬場ほか(1986)を参考にすると、人骨を焼いた際、600℃以下ではほとんど変化がなく、800℃付近では灰白色になり、収縮・硬化が見られ、歯のエナメル質が崩壊し歯冠が失われる等、最も激しく変化するとされている。したがって、これらの出土骨は、800℃以上で焼かれた焼骨と考えられる。

出土骨のうち、ＳＴ89・97・302火葬墓、ＳＫＣ38火葬施設、ＳＯ81カマド状遺構３層の各試料には、明らかにヒトと判断される部位が認められたことから、これらの遺構で特徴的な部位が認められず哺乳類とした試料もヒトに由来する可能性がある。また、ＳＫＣ157・180火葬施設も断定できないがヒトの可能性がある。なお、ＳＴ302火葬墓を除いた各遺構は、骨の検出量が少なく、また火葬施設、火葬墓とされる遺構のいずれからも大型の破片が検出されないという特徴が認められた。このような特徴は、火葬施設とする遺構の調査所見を支持する一方、火葬墓と考えられる遺構においては主要部位と考えられる骨片や大型の破片の破片は認められなかったことから、上述した火葬施設との関連性を言及するには至らない。

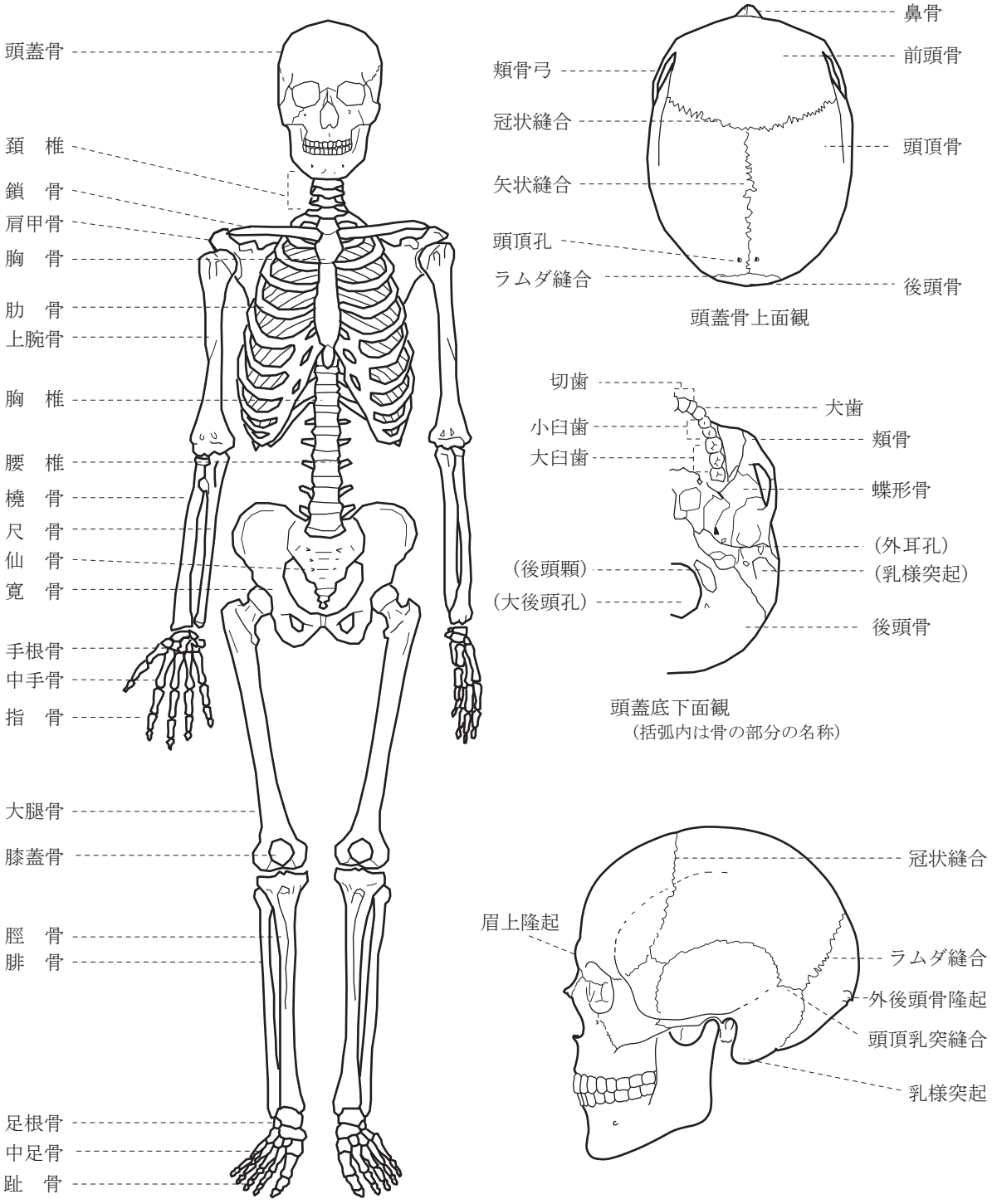
また、出土人骨の年齢や性別に関しては、上述したような試料の状態により得られた情報が極めて少なく、その多くが不明である。なお、骨が最も多く検出されたＳＴ302火葬墓の出土人骨についてみると、縫合の内側が閉じかけているようにもみられる脳頭蓋が確認されていることから、熟年(40～59歳)以降の個体が含まれる可能性がある。

＜引用文献＞

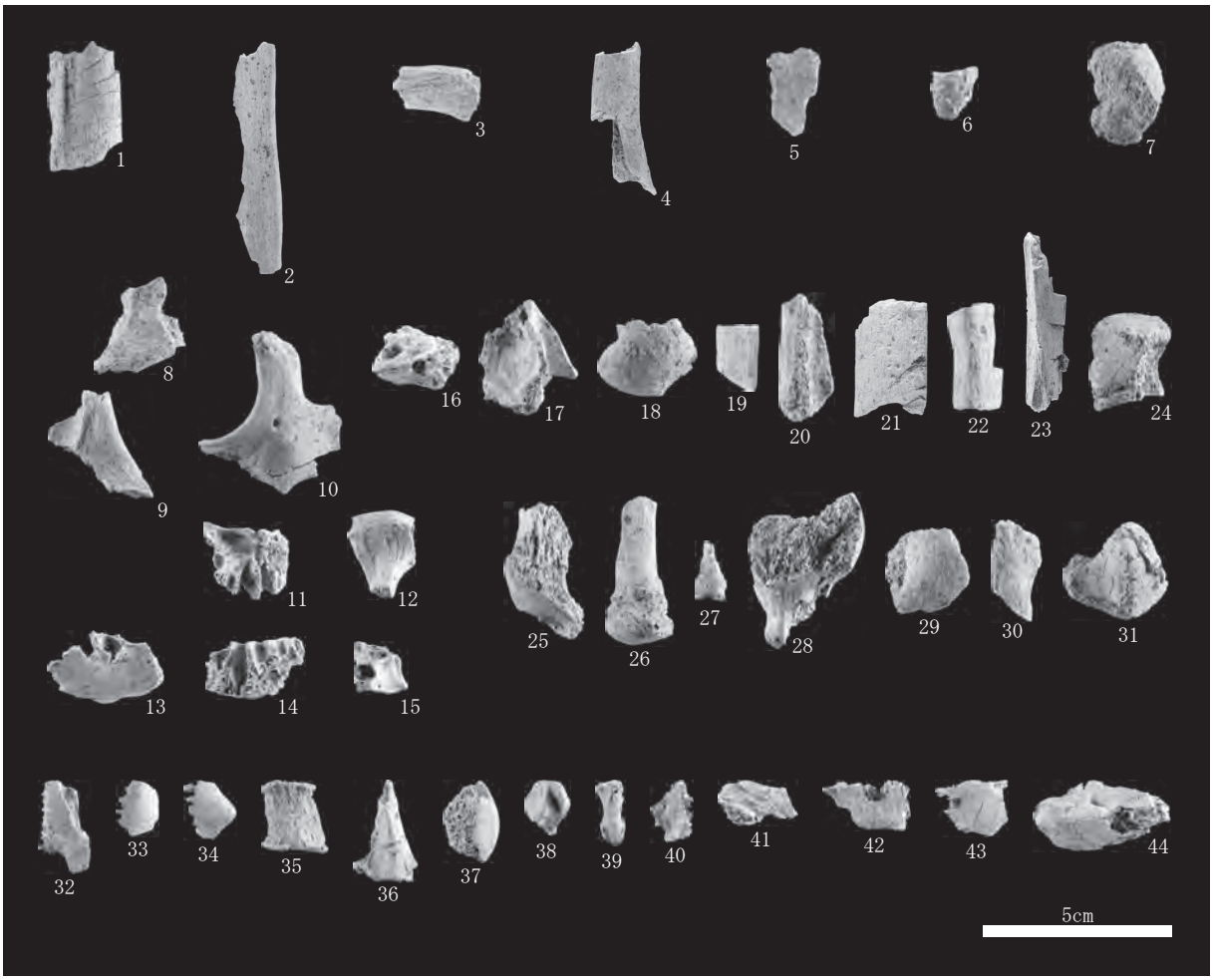
馬場悠男・茂原信生・阿部修二・江藤盛治,1986,根古屋遺跡出土の人骨・動物骨.霊山根古屋遺跡の研究－福島県霊山町根古屋における再葬墓群－,福島県霊山町教育委員会,93-113.

第 35 表　骨同定結果

試料番号	出土遺構	年月日	重量	時期	種類	部位	左右	部分	数量	被熱	備考
骨１	ＳＴ89火葬墓	14.08.25	262.3g	平安時代後期	ヒト	大腿骨		破片	2	○	
						脛骨		破片	2	○	
					ヒト？	鎖骨？		破片	1	○	
					哺乳類	脳頭蓋		破片	3	○	
						肋骨		破片	1	○	
						上腕骨/大腿骨		近位端片	1	○	
						四肢骨		破片	35	○	
						不明		破片	163.18 g	○	
骨２	ＳＴ97火葬墓		175.9g	鎌倉時代	ヒト	基節骨		近位端片	1	○	
					哺乳類	脳頭蓋		破片	1	○	
						頭蓋骨		破片	1	○	
						上腕骨/大腿骨		近位端片	1	○	
						四肢骨		破片	6	○	
						不明			163.16 g	○	
骨３　－１	ＳＴ302火葬墓	14.09.08	473.8g	鎌倉時代	ヒト	側頭骨	左	錐体部	1	○	
							左	破片	1	○	
						上腕骨		近位端片	1	○	
						橈骨/尺骨？		破片	1	○	
						脛骨		破片	1	○	
						腓骨		破片	1	○	
						距骨	左？	破片	1	○	
						基節骨/中節骨		遠位端	1	○	
					ヒト？	大腿骨？		近位端片？	1	○	
								遠位端？	1	○	
						脛骨？		破片	1	○	
						足根骨？		破片	2	○	
					哺乳類	脳頭蓋		破片	2	○	縫合有
								破片	14	○	
						頭蓋骨		破片	5	○	
						椎骨		椎体	1	○	
						椎骨		破片	2	○	
						四肢骨		破片	45	○	
						不明			328.69 g	○	
骨３　－２	ＳＴ302火葬墓	14.09.10	406.2g	鎌倉時代	ヒト	前頭骨	右	破片	1	○	
						頬骨	左	破片	1	○	
							右	破片	1	○	
						上顎骨		破片	1	○	
						下顎骨	左	関節突起	1	○	
								破片	2	○	
						上顎骨/下顎骨		破片	2	○	
						大腿骨		破片	2	○	
						脛骨		破片	5	○	
						踵骨		破片	1	○	
						中手骨/中足骨		遠位端片	1	○	
					哺乳類	脳頭蓋		破片	4	○	縫合有
								破片	22	○	
						頭蓋骨		破片	8	○	
						肋骨？		破片	1	○	
						上腕骨/大腿骨		近位端片	1	○	
						四肢骨		破片	54	○	
						不明		破片	203.19 g	○	
骨３　－３	ＳＴ302火葬墓	14.09.09	17.4g	鎌倉時代	哺乳類	不明		破片	17.4 g	○	
骨３　－４	ＳＴ302火葬墓	14.09.09	4.9g	鎌倉時代	哺乳類	不明		破片	4.9 g	○	
骨３　－５	ＳＴ302火葬墓	14.09.09	2.3g	鎌倉時代	哺乳類	不明		破片	2.3 g	○	
骨３　－６	ＳＴ302火葬墓	14.09.09	1.6g	鎌倉時代	哺乳類	不明		破片	1.6 g	○	
骨４	ＳＫＣ38火葬施設		16.4g	鎌倉時代後半～室町時代前期	ヒト	大菱形骨	左	ほぼ完存	1	○	
						末節骨		ほぼ完存	1	○	
					哺乳類	脳頭蓋		破片	1	○	縫合有
						四肢骨		破片	1	○	
						不明		破片	14.39 g	○	
骨５	ＳＫＣ157火葬施設		29.5g	鎌倉時代後半～室町時代前期	哺乳類	頭蓋骨？		破片	2	○	
						椎骨？		椎体？	1	○	
						四肢骨		破片	1	○	
						不明		破片	26.31 g	○	
骨６	ＳＫＣ180火葬施設		51.0g	鎌倉時代～室町時代	哺乳類	脳頭蓋		破片	2	○	縫合有
								破片	2	○	
						四肢骨		破片	3	○	
						不明		破片	45.09 g	○	
骨７	ＳＯ81カマド状遺構３層	14.09.01	39.4g	平安時代後半か	ヒト	側頭骨	右	破片	1	○	
					哺乳類	頭蓋骨？		破片	1	○	
						四肢骨		破片	4	○	
						不明		破片	26.76 g	○	



第 128 図　人体骨格各部の名称



１. ヒト　大腿骨(骨１；ＳＴ89)
２. ヒト　脛骨(骨１；ＳＴ89)
３. ヒト？　鎖骨？(骨１；ＳＴ89)
４. 哺乳類　肋骨(骨１；ＳＴ89)
５. 哺乳類　上腕骨/大腿骨(骨１；ＳＴ89)
６. ヒト　基節骨(骨2；ＳＴ97)
７. 哺乳類　上腕骨/大腿骨(骨２；ＳＴ97)
８. ヒト　右前頭骨(骨３－２；ＳＴ302)
９. ヒト　右頬骨(骨３－２；ＳＴ302)
10. ヒト　左頬骨(骨３－２；ＳＴ302)
11. ヒト　上顎骨(骨３－２；ＳＴ302)
12. ヒト　左下顎骨(骨３－２；ＳＴ302)
13. ヒト　下顎骨(骨３－２；ＳＴ302)
14. ヒト　下顎骨(骨３－２；ＳＴ302)
15. ヒト　上顎骨/下顎骨(骨３－２；ＳＴ302)
16. ヒト　左側頭骨(骨３－１；ＳＴ302)
17. ヒト　左側頭骨(骨３－１；ＳＴ302)
18. ヒト　上腕骨(骨３－１；ＳＴ302)
19. ヒト　橈骨/尺骨？(骨３－１；ＳＴ302)
20. ヒト　大腿骨(骨３－２；ＳＴ302)
21. ヒト　脛骨(骨３－１；ＳＴ302)
22. ヒト　脛骨(骨３－２；ＳＴ302)
23. ヒト　腓骨(骨３－１；ＳＴ302)
24. ヒト　左？距骨(骨３－１；ＳＴ302)
25. ヒト　踵骨(骨３－２；ＳＴ302)
26. ヒト　中手骨/中足骨(骨３－２；ＳＴ302)
27. ヒト　基節骨/中節骨(骨３－１；ＳＴ302)
28. ヒト？　大腿骨？(骨３－１；ＳＴ302)
29. ヒト？　大腿骨？(骨３－１；ＳＴ302)
30. ヒト？　脛骨？(骨３－１；ＳＴ302)
31. ヒト？　足根骨？(骨３－１；ＳＴ302)
32. 哺乳類　脳頭蓋(骨３－１；ＳＴ302)
33. 哺乳類　脳頭蓋(骨３－１；ＳＴ302)
34. 哺乳類　脳頭蓋(骨３－２；ＳＴ302)
35. 哺乳類　椎骨(骨３－１；ＳＴ302)
36. 哺乳類　椎骨(骨３－１；ＳＴ302)
37. 哺乳類　上腕骨/大腿骨(骨３－２；ＳＴ302)
38. ヒト　左大菱形骨(骨４；ＳＫＣ38)
39. ヒト　末節骨(骨４；ＳＫＣ38)
40. 哺乳類　脳頭蓋(骨４；ＳＫＣ38)
41. 哺乳類　頭蓋骨？(骨５；ＳＫＣ157)
42. 哺乳類　椎骨？(骨５；ＳＫＣ157)
43. 哺乳類　脳頭蓋(骨6；ＳＫＣ180)
44. ヒト　右側頭骨(骨7；ＳＯ81　３層)

第 129 図　出土骨

第５章　総　括

今回の調査で、峰吉川中村遺跡は、平安時代から現代にかけて断続的に集落として使用されていたことがわかった。以下に遺構の変遷、特徴的な遺物、立地、周辺遺跡の特徴等をふまえ、遺跡の特徴や性格について、各時期に分け考察する。なおＳＥ05・06・10・71・72・91～93・95・100・150・151井戸跡、ＳＯ36・81・206・207カマド状遺構、ＳＴ89・97・301・302火葬墓、ＳＫＣ38・157火葬施設、ＳＫ149土坑は、時期を特定する出土遺物がなく、おおよその時期決定においては、炭素年代測定に頼っている。

古代(第１期：８世紀後葉～９世紀代　第２期：10世紀末～12世紀中葉　第130図)

古代に属する遺構は、竪穴建物跡２棟、井戸跡８基、火葬墓２基(ＳＯ81カマド状遺構と重複していたと推定されるものを含む。以下便宜上、ＳＴ81火葬墓と表記する)、土坑13基、焼土遺構２基である。

第１期の西側調査区では、井戸跡２基(ＳＥ10・100)が検出された他、特に目立つものはない。また井戸跡は遺跡内で39基検出されたが、大きさや埋土から各時期ごとに特徴を見出すことはできない。ＳＥ100井戸跡は、古代第１期の井戸跡で、遺跡内で唯一井戸枠が残存していた。四本の隅柱が横桟で結合され、縦板で囲まれる方形縦板組型の井戸である。ＳＥ10井戸跡は、下位壁面が大きく西側へオーバーハングし、形状がゆがんでおり、地震の影響が考えられる。ＳＥ10井戸跡の年代では、天長七(830)年に「正月三日に出羽国で地震が起き、秋田城で被害があった」ことが、『類従国史』巻百七十に記載されている。同じく嘉祥三(850)年の「十月十六日、出羽国で大地震が起きた」ことが『日本文徳天皇実録』巻二に記載されている(註１)ことから、これらの大地震の影響を受けた可能性もある。

東側調査区では、西側調査区と比べ当時の人々の活発な活動を示す遺構や遺物がより多く検出され、東端では、竪穴建物跡２棟(ＳＫＩ104・107)及び土坑13基、焼土遺構２基が検出された。竪穴建物跡は２棟とも作業小屋として使用されていたと考えられ、底面で焼土及び炭化物の広がりが確認された。ＳＫＩ104竪穴建物跡は、底面壁際から約20～90cmの内側を囲うように径２～４cm、底面からの深さ５～８cmの壁溝が巡る。壁溝のライン上及びその周辺では柱穴が並べられ、壁が建てられた後、壁の外側が埋められて建てられたことが判明した。一方、ＳＫＩ107竪穴建物跡は、壁溝や柱穴は確認されていない。

土坑は13基であるが、うち４基(ＳＫ133・149・239・312)は、土坑状に掘り込まれた後に、底面で火が焚かれていた。ＳＫ239土坑では、火が焚かれた後に、須恵器坏が逆位に２枚(38・39)重ねて置かれ、割られた土師器甕と一緒に埋納されていた。

一方、土師器・須恵器の出土量は、西側調査区と比較し大きな差が見られ、特に土坑及びその周辺では、出土量が顕著である(第133図)。遺跡内では須恵器が多量出土したことから、律令政府との関わりが深いと考えられる。墨書土器は計18点出土し、記された墨書は「田」・「□〔田ヵ〕」８点(197～204)、「田□」１点(205)、「風」１点(206)、「□〔无ヵ〕〔天ヵ〕」１点(207)、「人」１点(208)、「工」２点(209・210)、不明４点(29・211～213)である。その中で「田」・「□〔田ヵ〕」墨書須恵器坏が８点と県内

で最も多く出土した。この他、外形が大きく歪み、焼けた陶土塊が付着した須恵器横瓶(243)が遺跡内へ持ち込まれて割られており、検出された遺構の状況と出土遺物と合わせて考えた結果、祭祀儀礼が行われていたことが想起される。

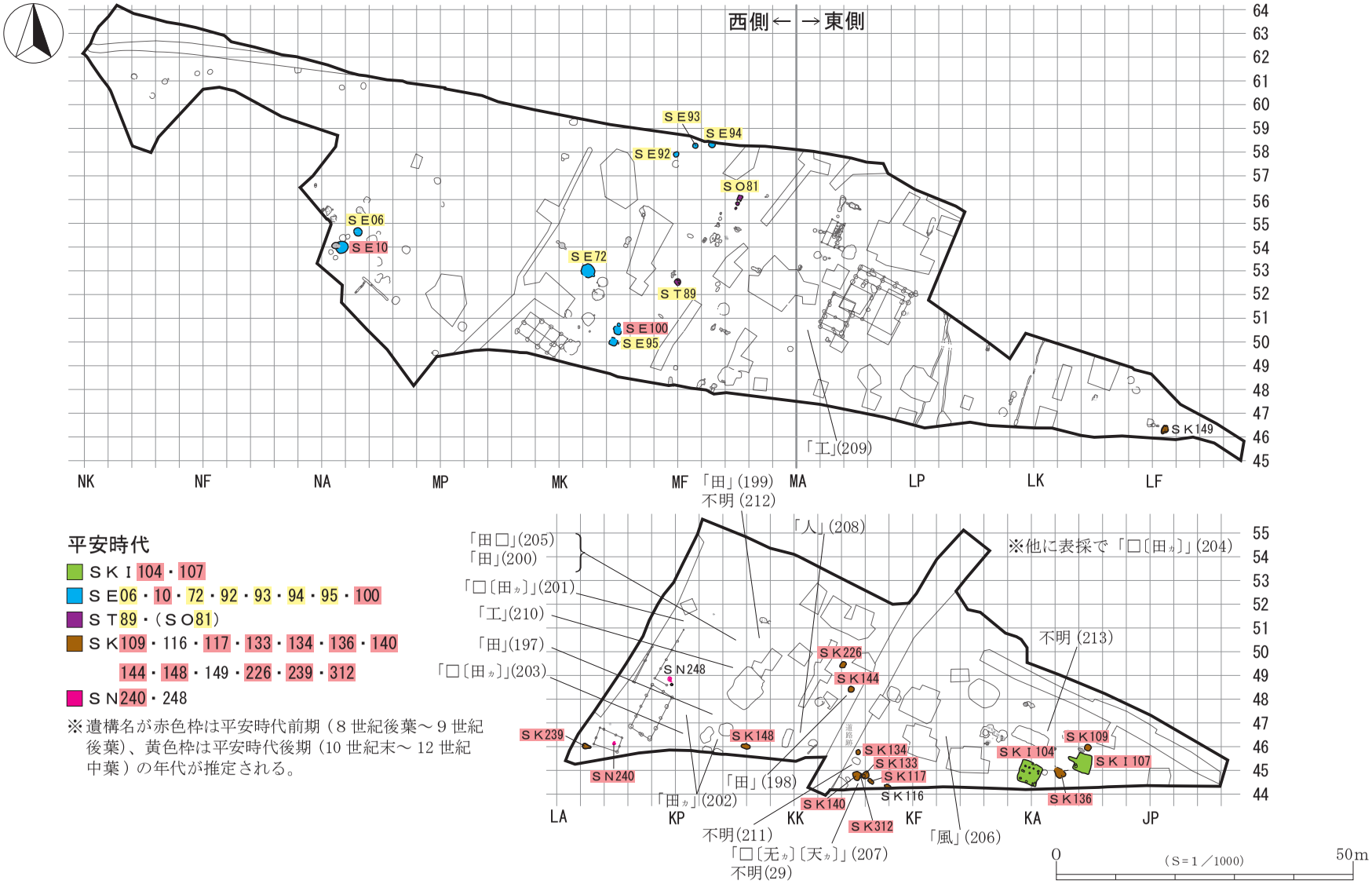
さて遺跡は、城柵官衙遺跡である秋田城跡(秋田市)及び払田柵跡(大仙市・美郷町)のおよそ中間地点に位置し、遺跡が機能していた延暦20(801)年頃、払田柵が造営される。この頃の出羽国内の様子が記された『類従三代格』巻十五には、延暦22(803)年十月十五日条で、「出羽国内で土地を無断で開発することを禁止する」と記され、陸奥国で蝦夷勢力との三十八年戦争(宝亀５年〔774〕～弘仁２〔811〕年)が繰り広げられていた時代に、出羽国内では田地の開発が盛んに行われていたことが示されている(註２)。同史料によれば、弘仁２(811)年正月二十九日条に、「奥羽両国の人々が開墾した田地を収公しないことを命じる」とあるが、これは北方の蝦夷への備えを目的とし、墾田を収公しないことにより多くの百姓を国内に留めることを目的としたと考えられる(註３)。この他同巻五閏十二月二十六日条には、「出羽守が、出羽国の人口が増加し、倉庫が充実している」と報告した内容が記されており(註４)、これらの史料から当時の活発な田地開発が想像される。

以上から遺跡及びその周辺でも、田地の開発行為が活発に行われていたことがうかがわれ、検出された遺構や出土した遺物は、当時の様子の一端を物語っているといえよう。

一方、遺跡に関わる人々がどこに居住していたか、耕作対象である田地はどこに所在したかという点について考えたい。検出された竪穴建物跡２棟は作業小屋と考えられる。よって住居跡と思われる建物跡は未確認である。遺跡周辺を見渡した結果、調査区の南東側に接する微高地に居住域が存在した可能性が考えられる。現在水田が広がる遺跡周辺には、当時も低湿地帯が広がっていたと考えられ、現在同様、田地としての土地利用が想定される。

次に遺跡内で出土した多量の須恵器について、これらがどこからもたらされたか、また外形が歪んだ横瓶が出土した他、焼成があまく白色焼成及び酸化炎気味の製品が多量に出土したことについて考えてみたい。まず１つめであるが、近世には雄物川の水運に係る川湊が、遺跡南東0.1㎞に開かれ、現在も船着き場が残っている。遺跡近隣には、古代の須恵器窯跡は確認されていないが、横手盆地には、竹原窯跡群や富ヶ沢窯跡群(横手市)等、同時期に操業した須恵器窯が展開しており、これらの窯で生産された製品が水運により遺跡内にもたらされた可能性は考えられる。また遺跡の対岸に位置する大仙市南外地区では、鎌倉時代前半期に須恵器系陶器を生産していた大畑桧山腰窯跡・大畑窯跡、または近世末から現代に続く楢岡焼窯が所在し、良質な陶土が得られることから、未確認の須恵器窯が存在している可能性も否定できない。２つめは、前述した１つめの内容と合わせて考えると、雄物川水運により遺跡内にもちこまれた須恵器が、下流の消費地へ運搬される途中に、不良製品等を遺跡で選別していた可能性が考えられるのではなかろうか。以上仮説にはなるが、これらの須恵器がどこからもたらされ、またなぜ不良製品が多く遺跡内から出土したのか、今後の課題である。

遺跡内では、出羽国の開発が盛んであった政治的背景の下、第１期が経過するが、出土遺物から見ると、９世紀後半から次の第２期までのおよそ100～150年近くの間、遺跡内における人々の生活の痕跡は認められなくなる。前述した通り、830・850年には、地震が起きた他、飢饉や鳥海山の噴火等の天災による被害が続き、元慶２(878)年には元慶の乱が起こるなど、政情不安の記事が頻繁に見られるが、こうした状況を背景に、遺跡周辺での開発行為が低調となった可能性は想定できるかもしれな



平安時代

- ＳＫＩ 104・107
- ＳＥ06・10・72・92・93・94・95・100
- ＳＴ89・（ＳＯ81）
- ＳＫ109・116・117・133・134・136・140
  144・148・149・226・239・312
- ＳＮ240・248

※遺構名が赤色枠は平安時代前期（８世紀後葉～９世紀後葉）、黄色枠は平安時代後期（10 世紀末～ 12 世紀中葉）の年代が推定される。

第 130 図　遺構変遷図（１）付墨書土器分布

い。

第２期では、井戸跡８基のうち５基がＭＣ～ＭＪラインに分散している他、調査区西側東端で、火葬墓が２基(ＳＴ81・89)検出されたのみである。この時期に属する遺物は井戸跡から出土した木製品のみで、土器や陶磁器も出土したが、炭素年代測定によれば、これらは後世に混入した可能性が高い。ＳＥ72・95井戸跡では、曲物(４・11)が出土した。ＳＥ95井戸跡は、曲物が井戸底部に設置され、水溜として使用されていたと考えられる。トチノキの種実やモモの核が内部から出土しており祭祀儀礼が執り行われた可能性もある。また埋土からは木簡(12)も出土している。片仮名文字で記されていたが、詳細な内容は不明である(附編参照)。三上喜孝氏によれば、「平泉における片仮名の文字資料は他の地域にくらべると多いという印象を受けるが、平泉だけでなく、12世紀～13世紀の片仮名資料は東北地方を中心にさらに広がりをみせている」。また「12世紀半ばごろには、すでに片仮名が東北地方一円に普及していた可能性が高い(註５)」としており、清原氏及びその流れを受け継いだ奥州藤原氏の影響がこの地域へも浸透していたことを想定する資料といえよう。

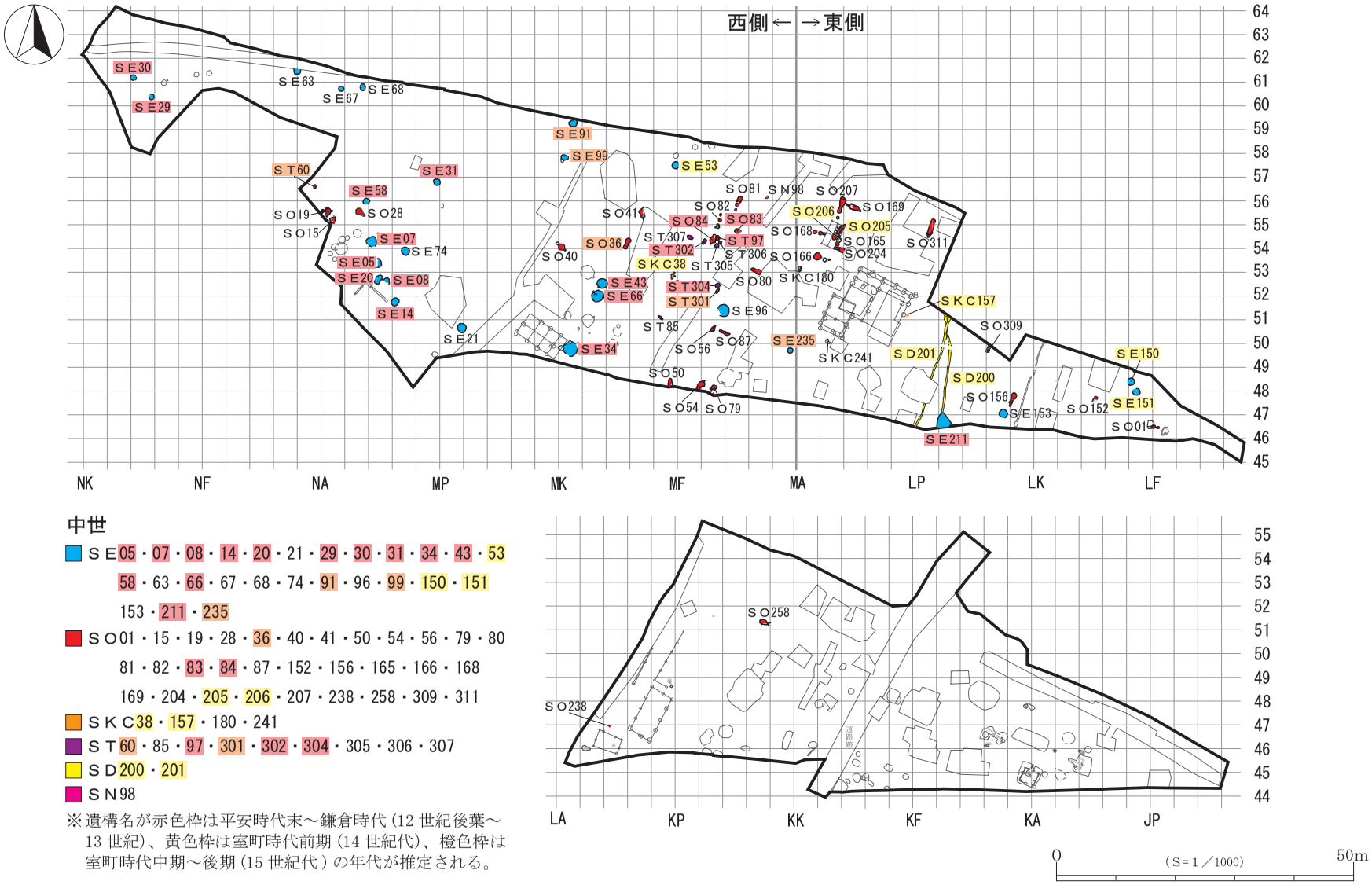
またＳＥ93井戸跡では、埋土に籾殻を多量に含む層が確認された他、ＳＴ89火葬墓では、炭化したイネやオオムギの種実が出土しており、水田耕作及び畑作が盛行していたと推定される。

中世(第１期：12世紀末～13世紀　第２期：14世紀代　第３期：15世紀代　第131図)

中世に属する遺構は、井戸跡26基、カマド状遺構31基、火葬施設４基、火葬墓９基、溝跡２条、焼土遺構１基である。遺跡内での活動がピークを迎えるが、詳細な時期が特定できる遺構は相対的に少ない。

古代と異なり中世では、遺跡内における生活の舞台が西側調査区へ移る。カマド状遺構は、ＬＲ～ＭＩラインに特に集中して検出された。放射性炭素年代の結果により時期が推定できる遺構は５基のみである。しかし本地域に多く検出された同遺構が、ほぼ中世におさまることから、遺跡内で検出されたカマド状遺構も、該期に属する可能性は高い。大仙市内では、特に神岡地区の遺跡で多く検出されており、小沢(岳下)・茨野・薬師・沖田Ⅰ・沖田Ⅱ・北楢岡中野・船戸遺跡の他、南外地区の西板戸遺跡、西仙北地区の大川端道ノ上遺跡等が挙げられる。使用目的としては、煮沸や灰獲得のため等の説があるが、詳細は不明と言わざるを得ない(註６)。またＳＥ21・58井戸跡では、鍋等をつり下げるために使用した鉤と思われる木製品(258・286)も出土した。一方カマド状遺構の構造は、天井を残しながらトンネル状に地山土が掘り抜かれた地下式と、地山土が掘られた後、天井部がアーチ状に構築された半地下式に分類することができる。地下式は、天井部が残存することから容易に判断でき、11基確認されたが、ＳＯ238カマド状遺構は被熱面しか残存しておらず、判断の対象にできない。また他の18基は天井部が残存せず、地下式か半地下式かの区別は容易ではない。地下式と断定されたカマド状遺構の確認面からの深さは24～47㎝である。その結果、天井部が残存していない19基のうち、13基はこの範囲に入るため、天井部が後世の削平により消失した可能性を考えれば、この中のいくつかは地下式であったかもしれない。

またカマド状遺構の形状の特徴として、煙道(煙出し)が焚き口～燃焼部の中軸線上に位置したもの(Ａ類型)が７基(ＳＯ15・19・28・40・84・168・311)、焚き口部～燃焼部の中軸線上から外れて煙道が設置されていたもの(Ｂ類型)が13基(ＳＯ01・54・81・82・83・87・156・165・166・169・205～



中世

- ＳＥ05・07・08・14・20・21・29・30・31・34・43・53・58・63・66・67・68・74・91・96・99・150・151・153・211・235
- ＳＯ01・15・19・28・36・40・41・50・54・56・79・80・81・82・83・84・87・152・156・165・166・168・169・204・205・206・207・238・258・309・311
- ＳＫＣ38・157・180・241
- ＳＴ60・85・97・301・302・304・305・306・307
- ＳＤ200・201
- ＳＮ98

※遺構名が赤色枠は平安時代末～鎌倉時代（12 世紀後葉～13 世紀）、黄色枠は室町時代前期（14 世紀代）、橙色枠は室町時代中期～後期（15 世紀代）の年代が推定される。

第 131 図　遺構変遷図（２）

207)確認された他、削平による可能性もあるが、燃焼部から煙道が延びる痕跡が見られないもので、煙道を持つ可能性が低いもの(Ｃ類型)が４基(ＳＯ36・56・79・80)、削平や撹乱により詳細不明なものが６基ある。またＡ類型をさらに細分すると、燃焼部と焚き口の区別が不明瞭な形状のものも３基(ＳＯ15・19・28)ある。煙道が中軸から外れるＢ類型は13基で、その振幅は７～40度(平均は約13.1度)である。またそのうちの９基は14度以下である。煙出しの方向は、不明13基(Ｃ類型を含む)を除く18基(ＳＯ01・19・28・54・81・82・83・84・87・156・165・166・168・169・205～207・311)で見ると、十六方位で、北１、北北東２、北東２、東２、東南東３、南東１、南南東１、南３、西北西１、南南西１、南西１に分類でき、結果、東側半分に比べ西側半分は少なく、西から西南西は１基も確認されていない。これは西風の影響を考慮した結果と考えられる。

次に葬送関連の遺構であるが、遺体を焼く火葬施設とそれを改葬した火葬墓の関係が成り立つ。カマド状遺構同様ＬＲ～ＭＩラインに特に集中しているが、生産に関わるカマド状遺構と、葬送関連の遺構が同時存在したとは考えがたく、時期差があると思われる。さて県内における火葬の風習で、現在確認される最古の例は９世紀前半の大郷守火葬墓(潟上市昭和)である。県内の火葬は９世紀前半から見られ、９世紀後半～10世紀前半に普及、10世紀後半～11世紀前半に減少し、空白期を得て、12世紀後半～13世紀前半に再び出現する状況が知られている(註７)が、前代のＳＴ89火葬墓は減少期、ＳＯ81カマド状遺構と重複していたと考えられる火葬墓(以下ＳＴ81火葬墓と表記)は、空白期に当たる可能性がある。

火葬施設は４基中２基(ＳＫＣ38・157)で、焚き口が直交した十字形を呈し、壁面及び底面が強く被熱を受け、埋土からは焼骨が出土した。この形式の火葬施設は、からむし岱Ⅰ遺跡(北秋田市)、山王岱遺跡(大館市)、盤若台遺跡(三種町)、船戸遺跡(大仙市)、寄騎館遺跡(大仙市)でも検出されており、特に山王岱遺跡のＳＸ05、寄騎館遺跡の第１号方形土坑は、方形土坑に焚き口が直交する形である。また山王岱遺跡では、火葬後に焼骨がそのまま埋葬された状態で残り、頭部が北、脚部を南にした横臥屈葬の様子が確認された。遺構の時期としては、放射性炭素年代測定をした船戸遺跡では、13世紀末～15世紀前半の年代値が、一方、遺跡内で検出されたＳＫＣ38・157火葬施設は13世紀後葉～14世紀後葉の年代値が得られている。また盤若台遺跡や山王岱遺跡も出土遺物から、それぞれ12世紀後半～13世紀前半、12世紀～15世紀の年代が考えられており、特異な形態ではあるが、県内の中世には、比較的まれに見られる(註９)。

一方、遺跡内の火葬墓は、前代の２基を含め11基が確認された。中世はＳＴ97・301・302・304火葬墓が、古代ではＳＴ81・89火葬墓で焼骨片が出土した。ある一定量の焼骨が出土したのは、前代の２基(ＳＴ81・89)とＳＴ97・302火葬墓の４基のみである。これらの共通点は、土坑状に掘り込まれた底面に焼骨が炭化物と混ざった状態で入れられ、その上に第Ⅳ層土由来の地山土で埋められていた。火葬墓の上部が削平された可能性もあるが、底面から出土した焼骨の量が明らかに少ないことから分骨葬の可能性もある。ＳＴ305・306火葬墓は埋土が炭化物を多量に含む単一層である。焼骨片は出土していない。上部は大きく削平され詳細は不明で、北西隣で径30㎝の礫に径12㎝の礫がもたれるように重なっていたことから墓標の名残の可能性もある。またＳＴ60火葬墓も焼骨片の出土はなく明銭５枚のみの出土であるが、詳細は不明で、位置も他の火葬墓に比べ極端に西側に位置している。しかし、ＳＴ60火葬墓の西側は現在まで中村集落の墓地として使用されていた場所であり、火葬墓の可

能性を考えたい。

以上中世と推定される遺構として代表的なものを扱った。次に詳細な時期が判明、もしくは推定される遺構の分布及び出土遺物から中世における遺跡の性格を探っていきたい。

第１期は、井戸跡12基、カマド状遺構２基、火葬墓４基である。中世の遺跡内での活動のピークである。ＭＣライン以西に遺構が集中する。特に井戸跡は、ＭＰ～ＭＳライン間で集中している。この時期に該当する遺物には、須恵器系陶器がある。遺跡の対岸南東10㎞には、12世紀末～13世紀前半に須恵器系陶器を生産した大畑桧山腰窯跡・大畑窯跡(大仙市)がある。遺跡内からは、この大畑桧山腰窯産の陶器が出土し、報告書に掲載した36点の須恵器系陶器のうち11点を占める。大畑桧山腰窯では、酸化炎焼成の製品がかなりの割合で生産されていたことが知られている(註10)が、遺跡内からも酸化炎焼成の壺(281、肩部に花押状文)や鉢(294)が出土した。また大畑桧山腰窯産の陶器は、雄物川の下流である下タ野遺跡(秋田市)でも出土しており、これは雄物川水運によりもたらされた可能性がある。また遺跡内からは中国産の龍泉窯青磁(253・268・314～316・372)、同安窯青磁(311)や白磁碗(301)も出土した。遺跡の対岸西３㎞に位置する大川端道ノ上遺跡では、12世紀後半～13世紀前半の中国産磁器が出土し、有力者の屋敷と考えられる２棟の掘立柱建物跡が、約50m北に流れる雄物川を見下ろすような位置で確認された。一方本遺跡内で、建物跡は確認されていないが、中国産磁器の出土から、雄物川水運を統轄するような有力者が居たことがうかがわれる。遺跡の北側に広がる出羽丘陵の先端には寄騎館跡・根岸館跡・館ノ沢城跡・馬館跡といった中世城館や高善寺(註11)が位置し、その麓では、近世には羽州街道であった国道13号線が東西に走る。このことから、遺跡及びその周辺は、中世から現在に至るまで水陸交通の要衝で、出羽丘陵先端にあった城館が陸路を抑え、遺跡の周辺にはそれら城館に関連した有力者が居住して、雄物川の水運を統轄していたと推定される。

第２期は、井戸跡３基、カマド状遺構２基、火葬施設２基がこの時期に当たる。第１期と比べ遺構の分布の中心がやや東へ移り、ＬＦ～ＭＧライン間に移って行く。この時期の遺物は、須恵器系陶器や瀬戸美濃壺が出土したが、遺構数の減少に比例し、遺物の出土量も減少する。

第３期は、井戸跡２基(ＳＥ91・235)、カマド状遺構１基(ＳＯ36)、火葬墓２基(ＳＴ60・301、ただしＳＴ60の上限は第２期に遡る)である。井戸跡に関して観ていくと、ＳＥ91・99井戸跡はＭＪ56・58、235井戸跡はＭＡ49に分散して位置する。この時期の遺物は、須恵器系陶器や中国龍泉窯青磁１点が出土したが、遺構・遺物ともに前代、前々代と比較し閑散とする。

以上、中世を通じて見てきたが、遺跡内に人々の居住した跡は確認されていない。前代同様調査区に隣接した場所に居住域があった可能性が高い。第１期及び第３期の年代に該当する中国産磁器が出土し、ある一定の地位にある人々の間で普及していた可能性が高い火葬の風習(註12)が行われていたことから、中世を通じて遺跡内には雄物川の水運を統轄した有力者が居たと想定される。

近世(第132図)

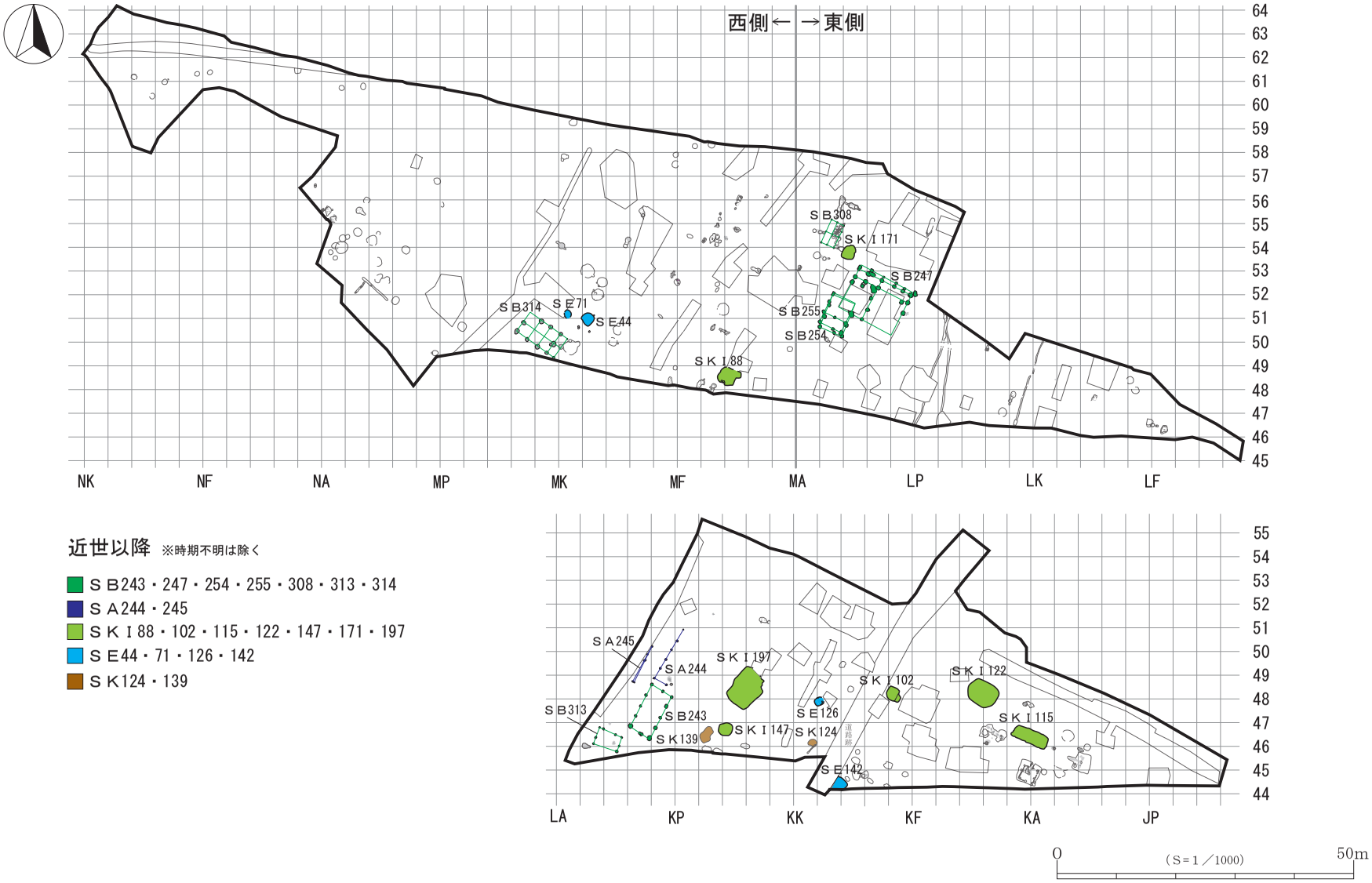
遺跡が所属する(峰吉川)中村地区は、近世を通じ一貫して秋田藩に属している。(峰吉川)中村の文献上での初見は、延宝８(1680)年『秋田領峯吉川同領寺館村矢島領寺館尻引村地境争論絵図』(第１図、秋田県公文書館蔵)である。絵図を見ると南には雄物川が流れ、その北には水田が広がる。古代から近世、そして現在に至るまで水田耕作が遺跡周辺で続いていたことが読み取れる。また、北側の

出羽丘陵の山麓部には前述した羽州街道が通っていた。雄物川水運の船着き場は遺跡の南東0.1ｍに現在も残っている。この船着き場は荒川村(大仙市協和)の諸鉱山への物資輸送の重要な拠点で、天明８(1788)年11月の町触には、目付番所が置かれていたことが記されている(註13)。遺物は、近世後期に当たる陶磁器類が多く、近世前～中期のものは相対的に少ない。16世紀後半と考えられる瀬戸美濃陶器も出土しているが、数は極端に少ない。このことから近世における遺跡のピークは、18世紀末～19世紀代の近世後期と想定される。番所の具体的な位置は不明であるが、番所が置かれ整備されたのは近世後期の天明８年であり、遺跡の出土遺物の時期と符号する。

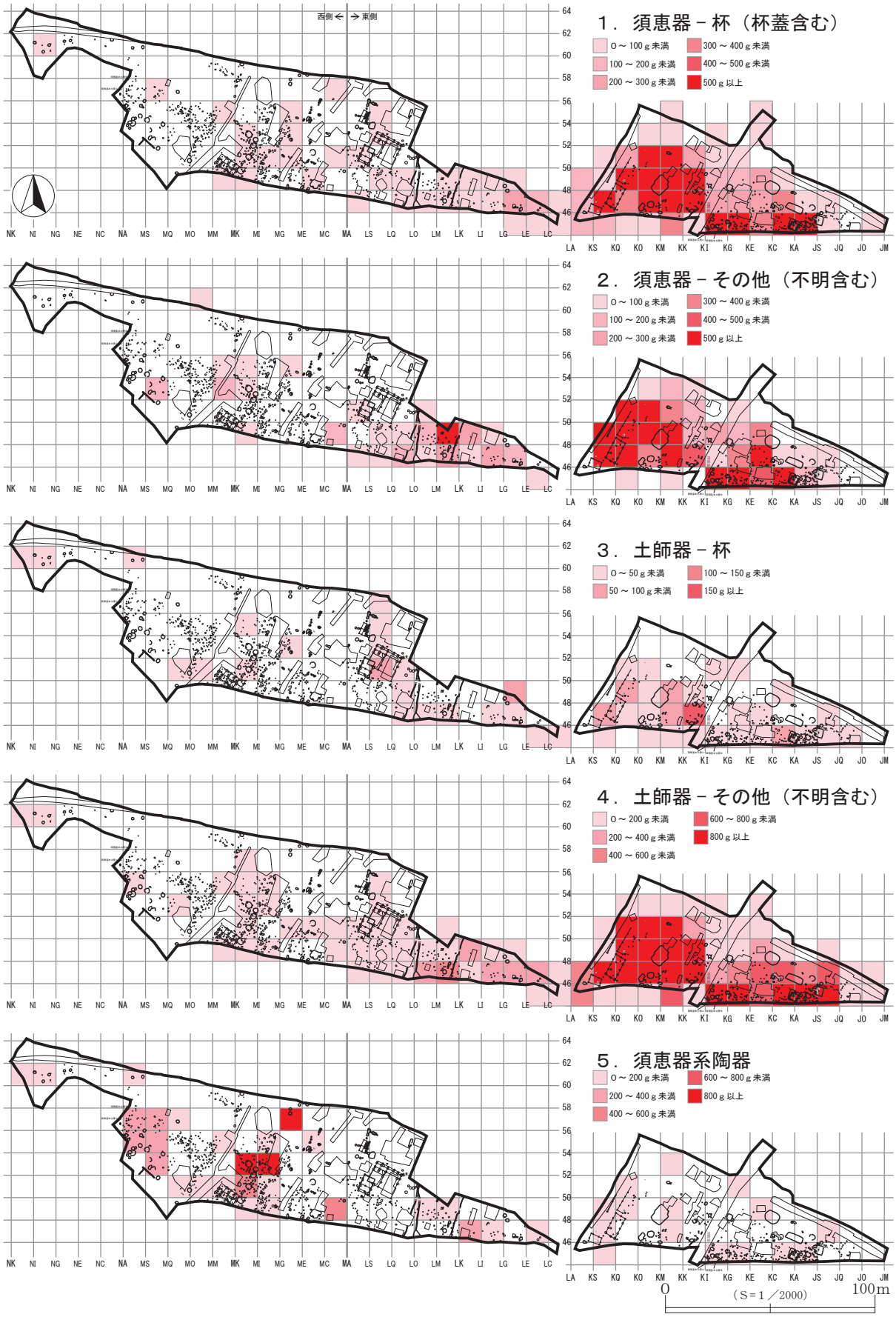
さて近世に属する遺構は、掘立柱建物跡７棟、柱穴列２条、竪穴建物跡７棟、井戸跡４基、土坑３基である。遺構の分布は、東側調査区に偏っているように見えるが、今回は掘立柱建物跡、柱穴列及び建物として扱うことができなかった柱穴様ピットの分布から、北東－南西に主軸がそろう建物が数棟建っていたと推定され、遺跡全体に建物が分布していたと想定される。検出された掘立柱建物跡の柱並びはいびつで、天明８年に幕府巡検使に同行して来秋した古川古松軒は『東遊雑記』で、「此辺の家を見るに、建てやうもかわりて、一家も残りなく土間住居なり」と記していることから、これらの掘立柱建物跡は、土間床に藁壁の粗末な造りであったと思われる(註14)。

また遺構の特徴として、竪穴建物跡が７棟と目立つ。長軸2.54～7.24ｍの巨大な穴は、最終的にはゴミ捨て穴として廃棄されていた。特にＳＫＩ122竪穴建物跡では、江戸時代後期～近代の陶磁器や木製品が多量に出土した。二次焼成を受けている磁器が多いことから、火事により生じたゴミが埋められて片付けられたと推定される。また羽口も多量に出土し、当地にて小鍛治が営まれていたと推定される。一方、ＳＫＩ88・102・197竪穴建物跡には、張り出しが付属するが、近世の竪穴建物跡には共通して柱穴が見当たらないという特徴がある。また堆積状況からも壁を埋めたてた裏込め土の痕跡も確認されていないことから、土台建物の可能性が考えられる。また対岸南東７㎞に位置する西板戸遺跡(大仙市南外)では、本遺跡同様、近世には船着き場が近隣にあったことが知られるが、ここでも竪穴建物跡が２棟検出されており、そのうちの１棟の底面直上で炭化材が広範囲に検出されたことから、床が板張りであった可能性が示唆されている。ＳＫＩ88竪穴建物跡にも、底面直上で杉皮がわずかだが出土している。西板戸遺跡では、この竪穴建物跡を、雄物川の水運により運ばれた船荷を保管する倉庫ととらえており、本遺跡も同様に船荷を保管する倉庫ととらえておきたい。

以上、古代から近世まで峰吉川中村遺跡の性格を探ってみたが、古代から現代にいたるまで、基本的には水田耕作と小鍛冶を営む集落として断続しながら現代まで続いている。雄物川の水運によってその上下流域と密接につながっていたことが想定される。今回の調査は遺跡の一部であることから、その性格を完全に把握することは難しいが、本遺跡の周辺遺跡及び雄物川流域の船着き場に関わる史料の調査が進むことで、遺跡の性格がより明らかになることが期待される。



第 132 図　遺構変遷図（３）



第 133 図　遺物出土分布図

註１～４　横手市『横手市史　史料編　古代・中世』2006(平成18)年

秋田市『秋田市史　古代史料編』第七巻　2001(平成13)年

註５　本報告書附編

註６　青森県教育委員会『宮田館遺跡Ⅲ・米山(２)遺跡Ⅱ－青森県新総合運動公園建設事業に伴う遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第344集　2003(平成15)年

茅野嘉雄「カマド状遺構の集成と今後の研究課題について」『青森県埋蔵文化財センター研究紀要』第13号　2008(平成20)年

註７　高橋和成「秋田における古代火葬墓の一様相」『秋田考古学』第55号　2011(平成23)年

同「秋田県における古代火葬墓の分布と変遷」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第25号　2011(平成23)年

註８　からむし岱Ⅰ遺跡で検出された火葬墓ＳＫ14は、報告書では中世、註７の高橋氏の論では、古代に比定している。

註９・12　田中則和「東北中世墓の様相と画期」『東北中世史の研究』下巻　高志書院　2005(平成17)年

※盤若台遺跡の火葬墓の時期について、「十字形土坑を含む北海道夷王山の発掘調査成果によると十五～十六世紀の中で十字形火葬墓から土葬土坑墓に変遷する可能性が高いことから、この遺跡の火葬遺構の下限についても十五世紀まで下る可能性が高いと考える」と述べている。

※火葬墓の数量について、「火葬墓の数量は九～十六世紀にいたるまで大きな変化はない。火葬が古代以降、階層を下降して普及したと言うよりは、支配者層の一定部分にとどまったことを反映している可能性がある」と述べている。

註10　吉岡康暢『須恵器系陶器』吉川弘文館　1994(平成６)年

※「東北の中世須恵器にはⅠ期ですでに赤褐色の製品が存し、大畑ヒヤマゴシ・スリバチ山両窯でも過半は赤焼きである。…疑瓷器効果をねらった結果と…考えている」と述べている。

註11・13　今村義孝監修『日本歴史地名大系第五巻　秋田県の地名』平凡社　1980(昭和60)年

※現在の高山寺観音、建保６(1218)年、秋田城介藤原朝臣景盛入道が再興と伝わる。

註14　秋田市『秋田市史　美術・工芸偏』第15巻　2000(平成12)年

参考文献

小林克「岳下遺跡検出の窯跡について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第10巻　1995(平成７)年

神岡町教育委員会『茨野遺跡－下夕野地区県営担い手育成基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』神岡町文化財報告書　2004(平成16)年

秋田県教育委員会『薬師遺跡』秋田県文化財調査報告書第388集　2005(平成17)年

秋田県教育委員会『沖田遺跡・沖田Ⅱ遺跡』秋田県文化財調査報告書第443集　2009(平成21)年

秋田県教育委員会『北楢岡中野遺跡』秋田県文化財調査報告書第482集　2012(平成24)年

秋田県教育委員会『船戸遺跡』秋田県文化財調査報告書第490集　2014(平成26)年

秋田県教育委員会『西板戸遺跡・窪遺跡』秋田県埋蔵文化財調査報告書第501集　2016(平成28)年

秋田県教育委員会『大川端道ノ上遺跡』秋田県埋蔵文化財調査報告書第496集　2015(平成27)年

秋田県教育委員会『からむし岱Ⅰ遺跡』秋田県文化財調査報告書第339集　2002(平成14)年

秋田県教育委員会『山王岱遺跡』秋田県文化財調査報告書第221集　1992(平成４)年

秋田県教育委員会『盤若台遺跡』秋田県文化財調査報告書第319集　2001(平成13)年

秋田県教育委員会『寄騎館遺跡』秋田県文化財調査報告書第277集　1998(平成10)年

報 告 書 抄 録

ふりがな	みねよしかわなかむらいせき
書名	峰吉川中村遺跡
副書名	雄物川上流河川改修事業（中村芦沢地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	秋田県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第505集
編著者名	三上喜孝、佐藤淳、山村剛（編）
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014－0802　秋田県大仙市払田字牛嶋20番地　　TEL（0187）－69－3331
発行年月日	西暦2016年９月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
みねよしかわなかむらいせき 峰吉川中村遺跡	あきたけんだいせんし 秋田県大仙市 きょうわみねよしかわなか 協和峰吉川中 むらあざなかむら 村字中村15－8	05212	212－51－110	39° 33′ 26″	140° 20′ 25″	20140508 ～ 20140919	8,390㎡	雄物川上流河川改修事業（中村芦沢地区）に係る埋蔵文化財事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
峰吉川中村遺跡	祭祀遺跡 集落遺跡	平安時代	竪穴建物跡	2棟	縄文土器 土師器 須恵器 中国産磁器（龍泉窯・同安窯） 須恵器系陶器 瀬戸美濃陶器 肥前陶磁器 在地系陶器 土製品（貝風呂・焙烙・羽口） 石匙・砥石 木製品（井戸枠構成材・曲物・漆椀・鉤・箸・木簡等） 銭貨 鉄滓	計18点の墨書土器や片仮名文字が記された木簡が出土している。
			井戸跡	8基		
			火葬墓	1基		
			土坑	13基		
			焼土遺構	2基		
		中世	井戸跡	26基		
			カマド状遺構	31基		
			火葬施設	4基		
			火葬墓	9基		
			溝跡	2条		
			焼土遺構	1基		
		近世	掘立柱建物跡	7棟		
			柱穴列	2条		
			竪穴建物跡	7棟		
			井戸跡	4基		
			土坑	3基		
		時期不明	井戸跡	1基		
			溝跡	4条		
			土坑	18基		
			焼土遺構	7基		
			柱穴様ピット	1065基		

要約	
	雄物川の右岸、標高18ｍの自然堤防上に位置する古代～近世の複合遺跡で、現代まで断続的に集落が続いていたことが判明した。平安時代前期～近世にかけ集落として人々が生活し、井戸跡やカマド状遺構等の遺構が多数検出されている。近世から続く雄物川の船着き場が近辺にあり、古くから雄物川の水運に大きく関わっていたことが想定される。

峰吉川中村遺跡及び周辺の中世遺跡（真上が北、1975 年撮影）

図版2　遺跡遠景

1　峰吉川中村遺跡遠景（南東→）

2　峰吉川中村遺跡遠景（東→）

１　峰吉川中村遺跡全景（真上が北西）

２　峰吉川中村遺跡東側調査区（真上が北）

図版４　遺跡近景

１　峰吉川中村遺跡西側調査区（真上が北西）

２　東側調査区ＫＢライン以西（東→）

３　東側調査区ＬＲライン以東（西→）

４　西側調査区ＭＳライン以東（西→）

５　西側調査区ＭＣライン以西（東→）

図版５　基本土層、ＳＫＩ104・107、ＳＥ06・10、ＳＫ09

１　東側調査区基本土層（北→）

２　西側調査区基本土層（東→）

３　ＳＫＩ104 土層断面（北西→）

４　ＳＫＩ104 完掘状況（南西→）

５　ＳＫＩ107 土層断面（南→）

６　ＳＫＩ107 完掘状況（北西→）

７　ＳＥ06 断面（南→）

８　ＳＥ10・ＳＫ09 断面（南→）

図版6 SE72・92・95・100、ST89

1　SE72 遺物出土状況（西→）

2　SE92 土層断面（東→）

3　SE93 土層断面（北西→）

4　SE94 土層断面（南→）

5　SE95 土層断面（北東→）

6　SE100 井戸枠出土状況（北→）

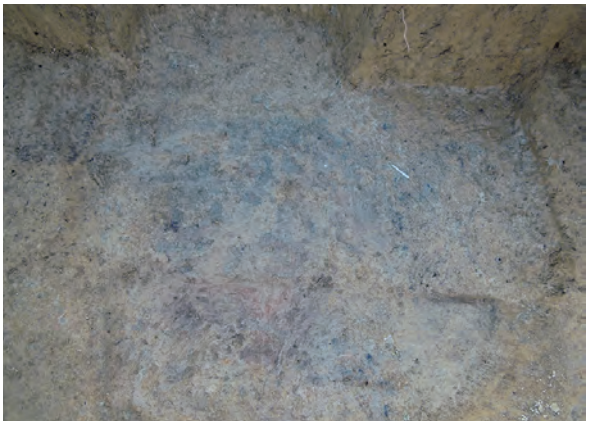
7　SE100 井戸枠壁（南東→）

8　ST89 遺物出土状況（南西→）

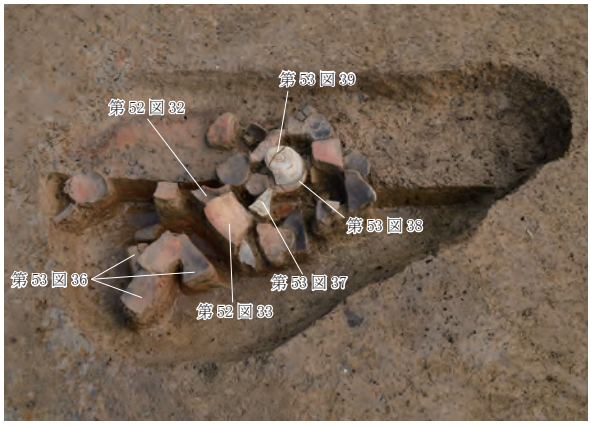
1　SK133 完掘状況（北→）

2　SK136 土層断面（南→）

3　SK140 遺物出土状況（北東→）



4　SK149 炭化物・焼土検出状況（東→）



5　SK239 遺物出土状況（南西→）

6　SN240 土層断面（北東→）

7　SN248 土層断面（北東→）

8　調査区西側井戸跡群（西→）

図版8 SE05・07・08・14・20・21

1　SE05 土層断面（西→）

2　SE05 遺物出土状況（真上が西）

3　SE07 土層断面（南→）

4　SE08 土層断面（南西→）

5　SE14 土層断面（北西→）

6　SE20 土層断面（北西→）

7　SE21 土層断面（南東→）

8　SE21 遺物出土状況（南東→）

１　ＳＥ29・ＳＥ30 完掘状況（南西→）

２　ＳＥ29 土層断面（南西→）

３　ＳＥ30 土層断面（南西→）

４　ＳＥ31 土層断面（東→）

５　ＳＥ31 遺物出土状況（東→）

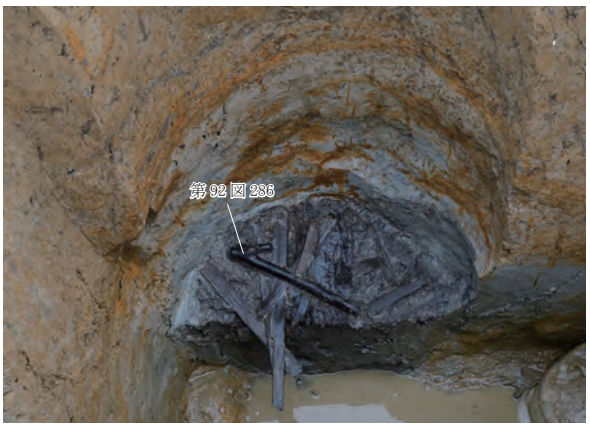
６　ＳＥ34 遺物出土状況（南西→）

７　ＳＥ43 土層断面（北→）

８　ＳＥ53 完掘状況（東→）

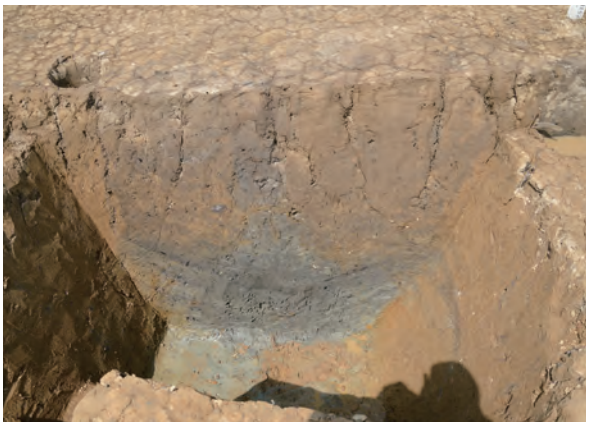
図版10 ＳＥ58・63・66～68・74・91

1　ＳＥ58 遺物出土状況（南西→）



2　ＳＥ58 遺物出土状況（南西→）

3　ＳＥ63 土層断面（南→）



4　ＳＥ66 土層断面（南→）

5　ＳＥ67 土層断面（南→）

6　ＳＥ68 完掘状況（南→）

7　ＳＥ74 完掘状況（南→）

8　ＳＥ91 土層断面（南→）

1　ＳＥ96 土層断面（南西→）

2　ＳＥ99 土層断面（北東→）

3　ＳＥ150 確認状況（南西→）

4　ＳＥ151 土層断面（西→）

5　ＳＥ153 土層断面（南→）

6　ＳＥ211 土層断面（北→）

7　ＳＥ235 土層断面（真上が南）

8　ＳＥ235 遺物出土状況（北→）

図版12 SO01・15・19・28・36・40・41・50

1　SO01 断面状況（北→）

2　SO15 完掘状況（北→）

3　SO19 完掘状況（東→）

4　SO28 完掘状況（北西→）

5　SO36 断面状況（北西→）

6　SO40 完掘状況（北西→）

7　SO41 完掘状況（東→）

8　SO50 確認状況（北→）

1　SO54 土層断面（西→）

2　SO56 土層断面（東→）

3　SO79 土層断面（西→）

4　SO80 完掘状況（北西→）

5　SO81 土層断面（東→）

6　SO82 完掘状況（西→）

7　SO82 燃焼部土層断面（南→）

8　SO83 土層断面（南→）

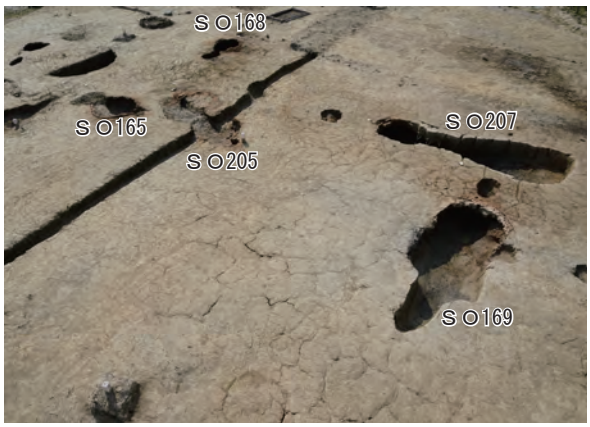
図版14　ＳＯ84・87・152・156・165・166、カマド状遺構群、ＳＢ308

1　ＳＯ84 完掘状況（北→）

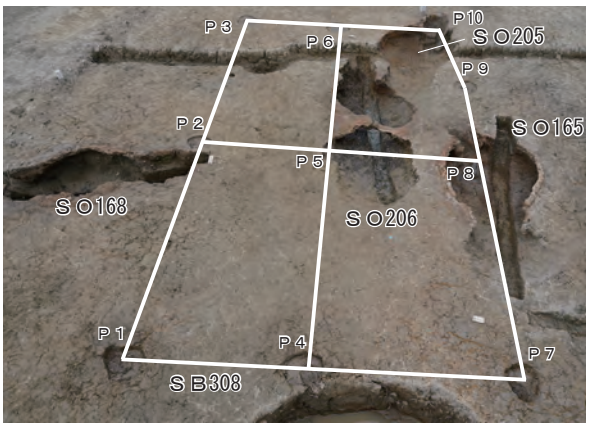
2　ＳＯ87 完掘状況（北西→）

3　ＳＯ152 完掘状況（南西→）

4　ＳＯ156 完掘状況（東→）



5　調査区中央部カマド状遺構群（北東→）



6　カマド状遺構群とＳＢ308（南→）

7　ＳＯ165 完掘状況（南→）

8　ＳＯ166 完掘状況（南→）

1　SO168 完掘状況（西→）

2　SO169 完掘状況（北東→）

3　SO204 完掘状況（北→）

4　SO205 完堀状況（北西→）

5　SO206 土層断面（東→）

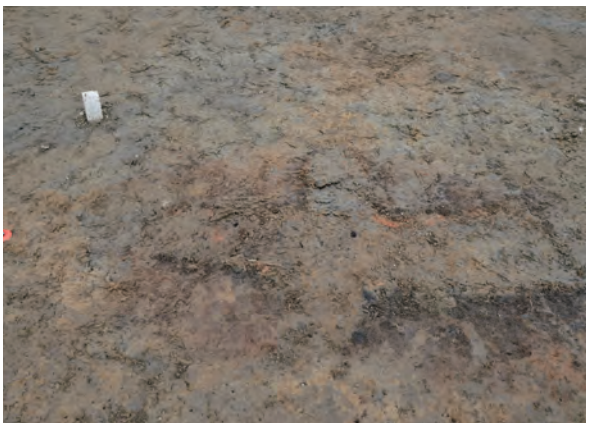
6　SO207 完掘状況（北→）

7　SO238 確認状況（南→）

8　SO258 断面状況（南→）

図版16 SO311、SKC38・157・180・241、ST60・97

1　SO311 確認状況（北→）



2　SKC38 確認状況（西→）

3　SKC38 完掘状況（西→）

4　SKC38・ST97 完掘状況（北→）

5　SKC157 完掘状況（南西→）

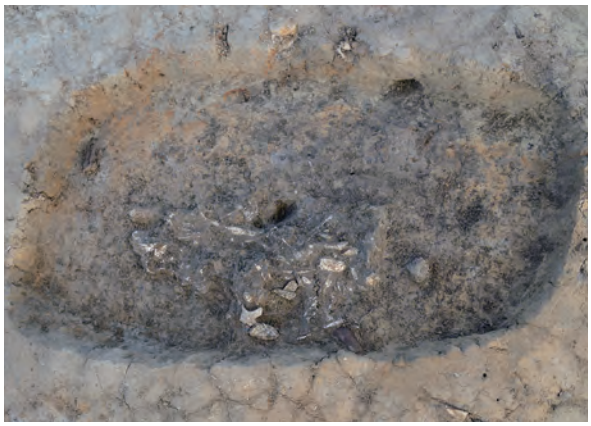
6　SKC180 土層断面（西→）

7　SKC241 確認状況（北→）

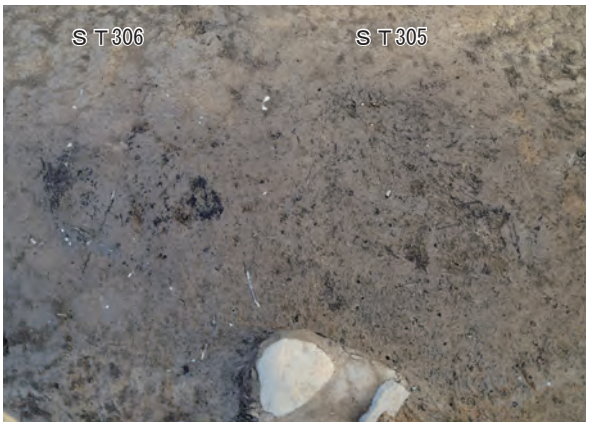
8　ST60 遺物出土状況（東→）

1　ＳＴ97 遺物出土状況（南→）

2　ＳＴ301・ＳＴ304 完掘状況（南→）

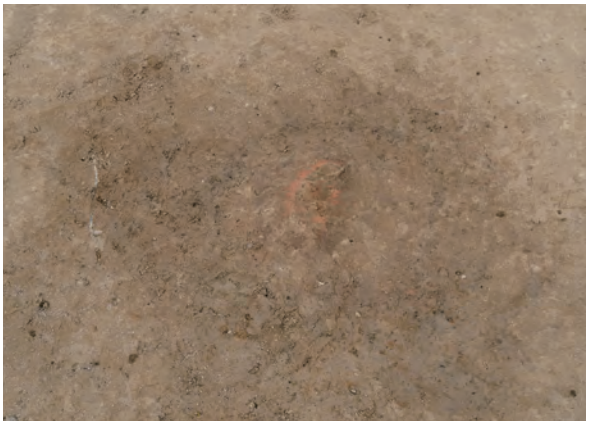


3　ＳＴ302 遺物出土状況（南東→）



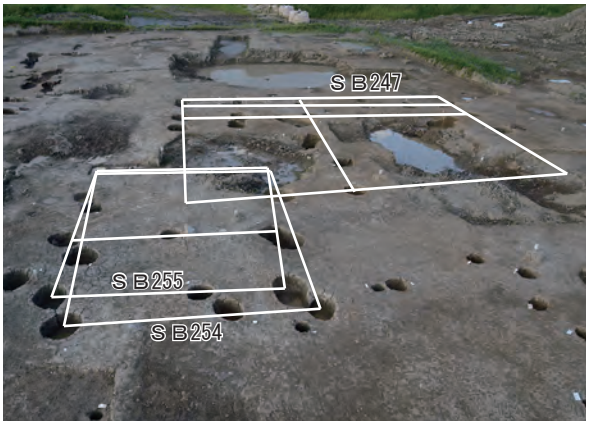
4　ＳＴ305・ＳＴ306 確認状況（北西→）

5　ＳＴ307 確認状況（南→）



6　ＳＮ98 確認状況（南→）

7　ＳＤ200・ＳＤ201 確認状況（北→）



8　ＳＢ247・ＳＢ254・ＳＢ255 完掘状況（北→）

図版18 SKI88・102・115・122・147・171・197、SE44

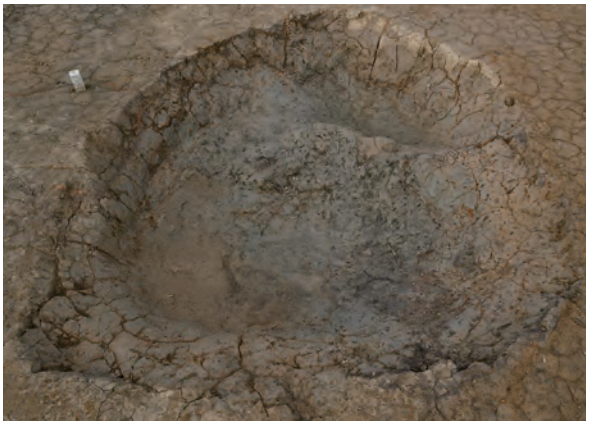
1　SKI88 完掘状況（南→）

2　SKI102 土層断面（北西→）

3　SKI115 確認状況（南西→）

4　SKI122 確認状況（南西→）

5　SKI147 完掘状況（東→）



6　SKI171 完掘状況（南西→）

7　SKI197 確認状況（北西→）

8　SE44 土層断面（南西→）

1　SE71遺物出土状況（南東→）

2　SE111確認状況（西→）

3　SE126土層断面（北東→）

4　SE142土層断面（北西→）

5　SD02・SD18完掘状況（北→）

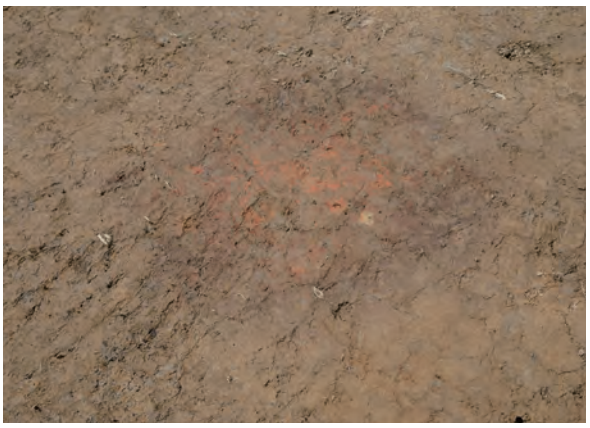
6　SD146完掘状況（北東→）

7　SK106遺物出土状況（北東→）

8　SN108断面状況（北西→）

図版20　SN110・114・154・252・303、遺物出土状況、遺跡見学会の様子

1　SN110 内部状況（南→）



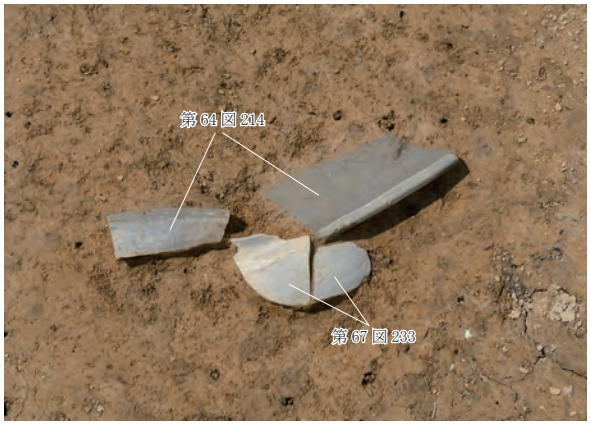
2　SN114 確認状況（南→）

3　SN154 確認状況（南東→）

4　SN252 断面状況（西→）

5　SN303 断面状況（北→）

6　KR48 遺物出土状況（南西→）



7　LK48 遺物出土状況（南→）

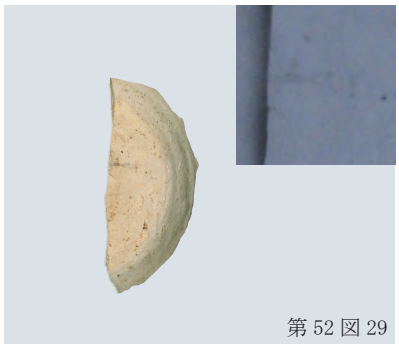
8　遺跡見学会の様子（南西→）

第 49 図 1

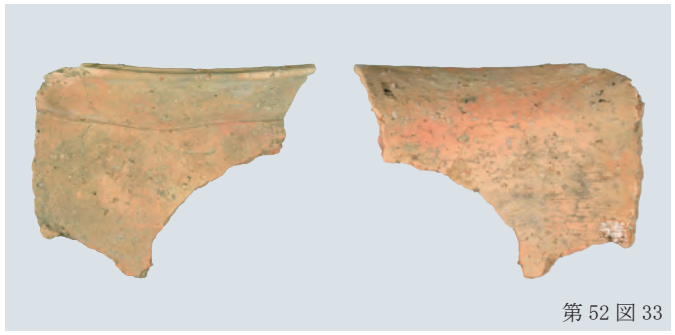
第 52 図 20

第 52 図 25

第 52 図 28


第 52 図 29

第 52 図 32


第 52 図 33

第 53 図 35

第 53 図 36

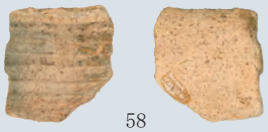
第 53 図 39

第 53 図 42

第54図

48

49



58

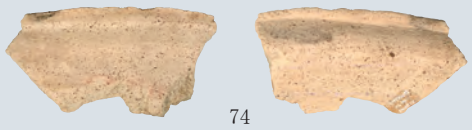
第54図 59

第54図 60

第54図 61

第55図 63

第56図



74

79

第55図 67

第 57 図 90

第 57 図 95

第 57 図 96

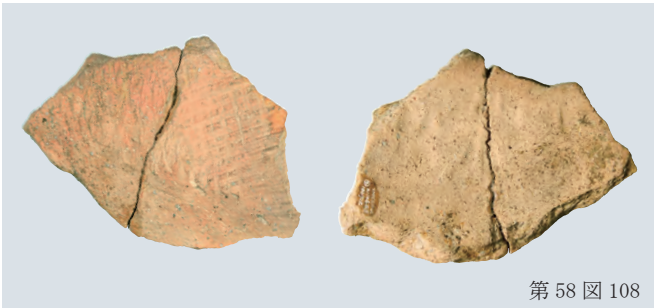
第 57 図 99

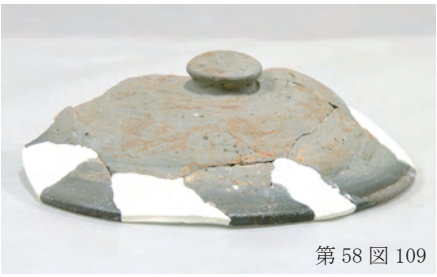
第 57 図 101

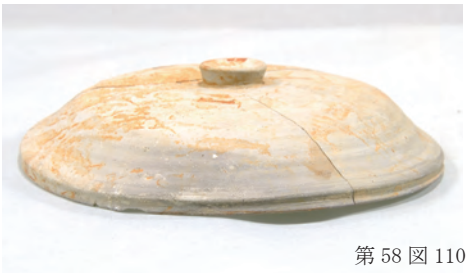
第 57 図 102

第 58 図 103

第 58 図 107


第 58 図 108


第 58 図 109


第 58 図 110

第 58 図 111

第 58 図 112

第 58 図 113

第 58 図 117

第 58 図 119

第 59 図 122

第 59 図 123

第 59 図 124

第 59 図 126

第 59 図 127

第 59 図 128

第 59 図 130

第 59 図 132

第 59 図 134

第 60 図 136

第 60 図 140

第 60 図 142

第 60 図 143

第 60 図 145

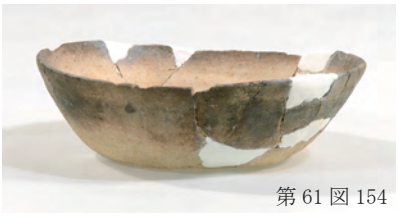
第 60 図 147

第 60 図 148

第 60 図 149

第 61 図 152

第 61 図 153


第 61 図 154

第 61 図 155

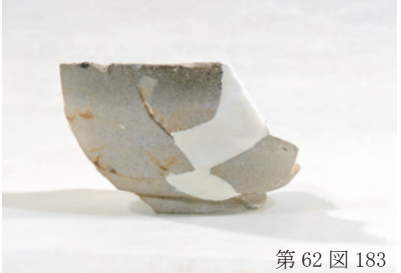
第 61 図 158

第 61 図 162

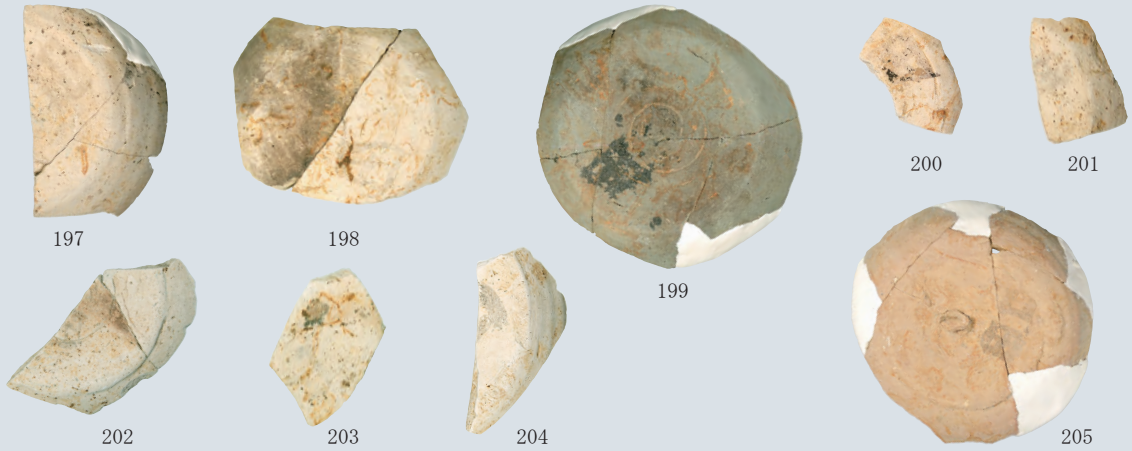
第 62 図 179

第 62 図 180

第 62 図 182


第 62 図 183

第 63 図



第 64 図

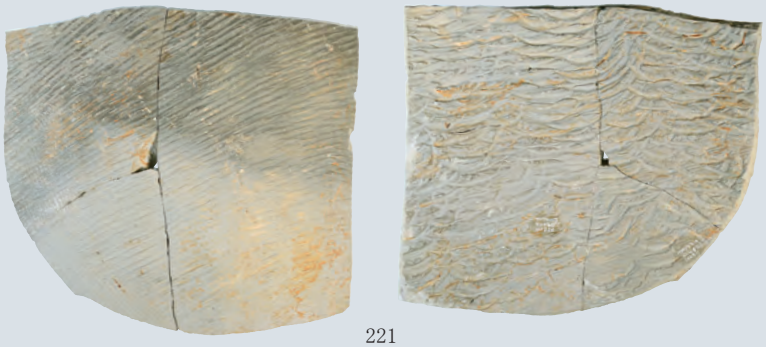
第 64 図 209

第 64 図 215

第 64 図 218

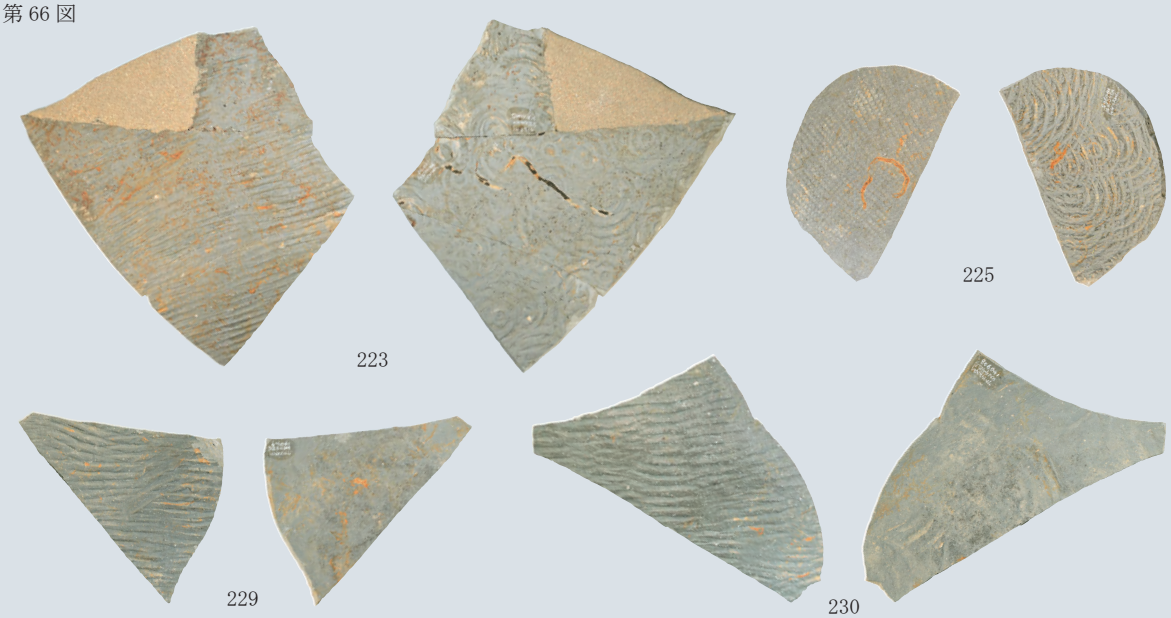
第 65 図

219



221

第 66 図



223　225　229　230

第 67 図 232

第 67 図 233

第 67 図 235

第 67 図 234

第 67 図 238

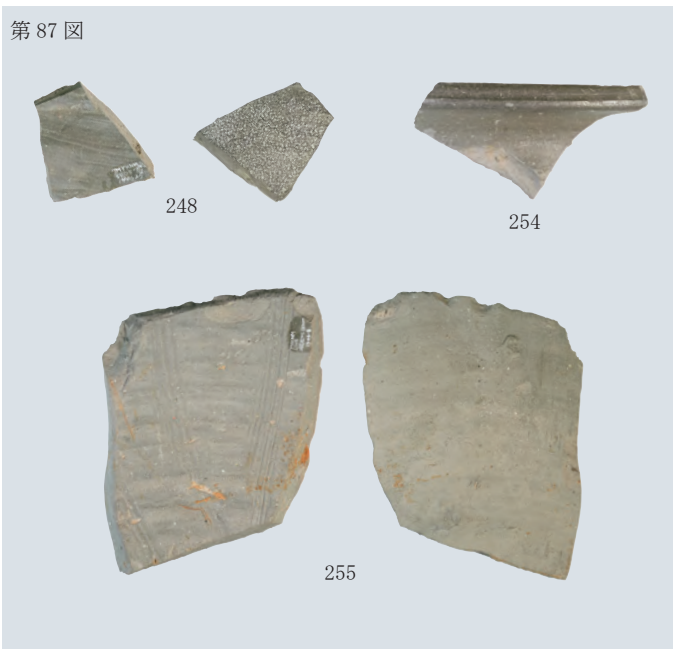
第 67 図 239

第 67 図 242

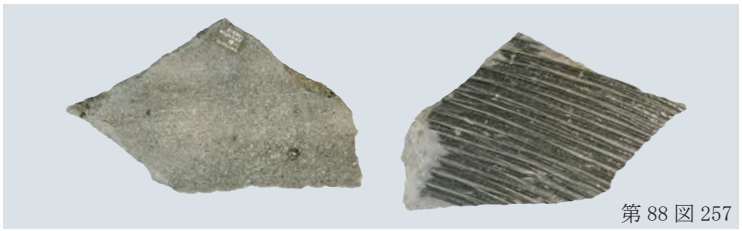
第 68 図 243

第 68 図 244

第 87 図

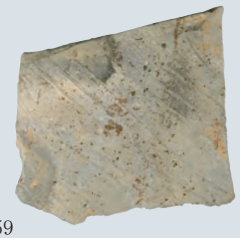


第 87 図 253


第 88 図 257

第 88 図

259

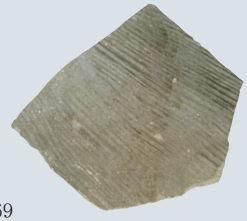


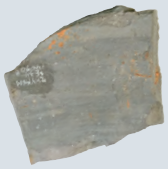
261

第 89 図 267

第 89 図

268

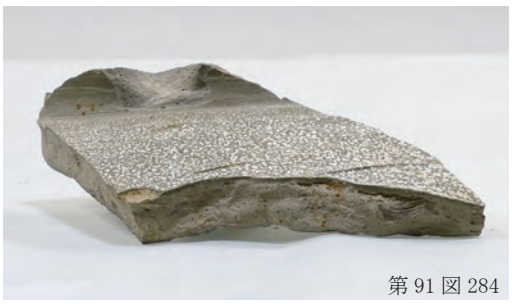

269



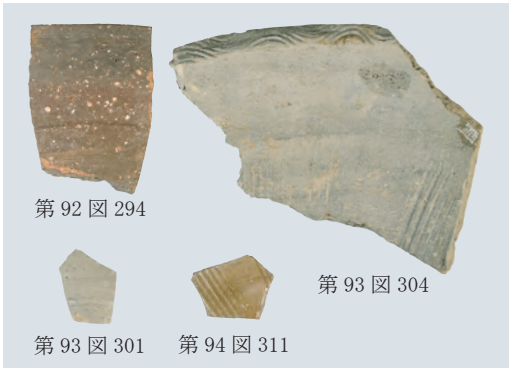
270

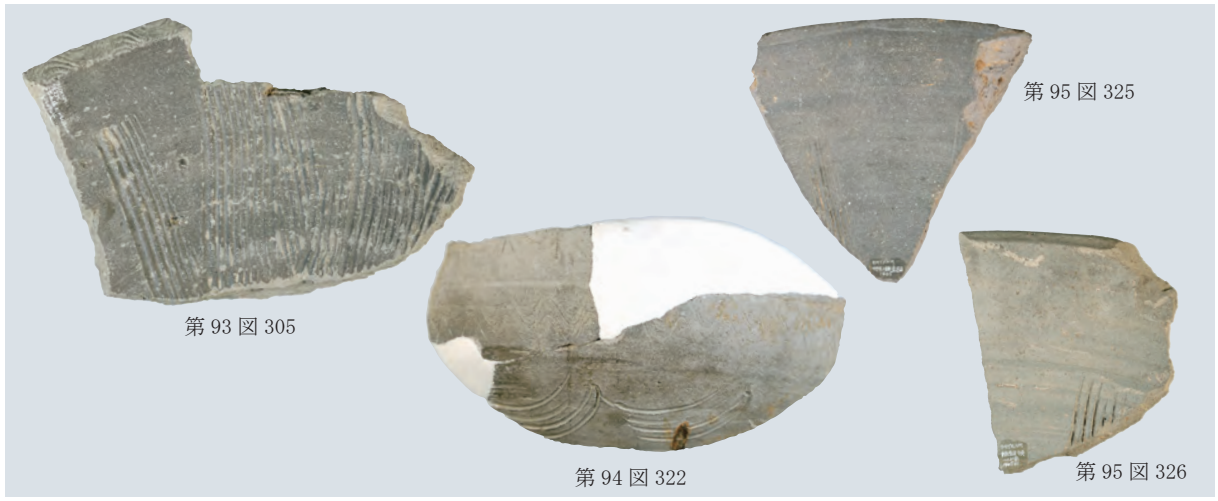
第 90 図 281

第 91 図 282・283


第 91 図 284

第 92 図 285


第 92 図 294
第 93 図 304
第 93 図 301
第 94 図 311


第 93 図 305
第 95 図 325
第 94 図 322
第 95 図 326

近世の陶磁器・土製品

364・363・365
355・361・362・368・367
358・357・359・336・346・408・345・356・344・343・342
347・349
353・354・410・350
337・352・351・348

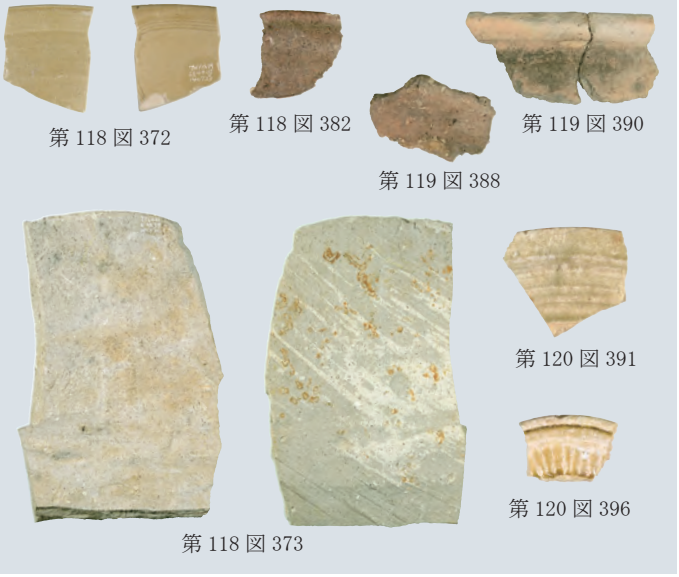
第 95 図

329

331

333

第 119 図 389



第 118 図 372

第 118 図 382

第 119 図 388

第 119 図 390

第 120 図 391

第 120 図 396

第 118 図 373

第 120 図 392

第 120 図 397

第 120 図 398

第 118 図 380

第 121 図 416

第 49 図 4

第 87 図 252

第 88 図 262

第 119 図 385

第 119 図 383

第 49 図

5

2

第 50 図 11

第 49 図 7

第 49 図 8

第 51 図 13

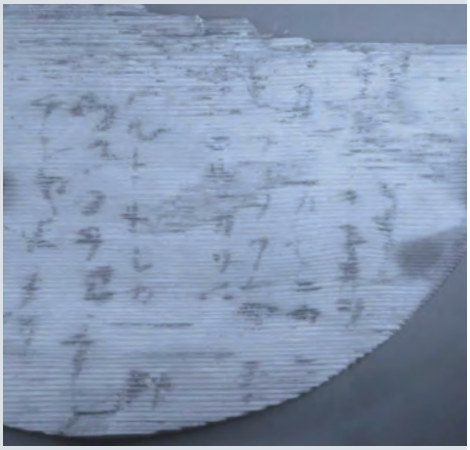
第 51 図 14

第 51 図 15

第 51 図 16

第 51 図 17

第 51 図 18



第 50 図 9

第 50 図 10

第 50 図 12

第87図 250

第88図 258

第88図 263

第90図

第87図 251

第90図 271

第92図 290

第92図 291

第92図 292

第93図 297

第92図 286

第94図 307

第119図 376

ただし黒田説についても異論がある。たとえば落書起請については、「書き手を特定されないよう、字体の個性がでやすい漢字ではなく、画数が少なく個性のでにくい片仮名を中心に用いるのが落書起請の文字使いの決まりであったという解釈も可能であり、特定の文書に特定の文字が使われることと、書いた人間の文字使用能力を直接的に結びつけることには慎重でなければならない」とする見方もある[11]。

ここで、本来の片仮名表記の意味について考えてみると、片仮名は寺院で経典を読み下すときの訓点として使われはじめたといわれており、片仮名の普及には、経典をあつかう僧侶が密接にかかわっていた可能性も考えられる。もちろん僧侶の中には漢字、平仮名、片仮名を使いこなす学侶がいたことはいうまでもないが、その中でも片仮名が、寺院の中では最も身近な表記方法として習得しやすかったのではないだろうか。

そのような視点でみると、漢字の音を片仮名で表記した木簡が見つかった観音寺廃寺跡は、一二世紀～一三世紀にかけての寺院跡と考えられており、寺院において片仮名が経典の読みの際に普通に用いられていたことが背景となり、音義を片仮名表記したと考えられるし、井川町の洲崎遺跡の人魚供養札も、僧侶による「人魚」の供養の姿が描かれていることから、これが僧侶の手によって書かれたとみることも可能である。すなわち観音寺廃寺跡出土木簡も、洲崎遺跡出土木簡も、僧侶あるいは寺院関係者によって片仮名表記が用いられた可能性があるのである。こうして片仮名表記は、経典を読み下す必要のある僧侶や寺院関係者たちの手によって広められていったのではないだろうか。

このことは、当該時期のこの地域における文字文化普及の「主たる担い手」が、どのような存在であったかを知る手がかりとなる。経典の読み下しなどの際に日常的に片仮名を用いる寺院関係者たちが、この地域における文字文化の普及に大きな影響を与えていたことを意味するのではないだろうか。地域社会における文字文化普及の「主たる担い手」は、それぞれの地域の事情に応じて異なっていたと考えられ、秋田県内出土の片仮名表記木簡の存在は、この地域におけるそうした文字文化普及の「主たる担い手」を示唆する貴重な資料といえるのではないだろうか。一つの仮説として提示しておきたい。

1　秋田県教育委員会『盤若台遺跡』秋田県文化財調査報告書　第三一九集　二〇〇一年。なお盤若台遺跡出土のいろは歌木簡の再釈読と意義については、伊豆俊祐「盤若台遺跡出土いろは歌木簡の再釈読」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第三十号　二〇一六年を参照。

2　秋田県教育委員会『観音寺廃寺跡』秋田県文化財報告書　第三二一集　二〇〇一年。

3　秋田県教育委員会『洲崎遺跡』秋田県文化財調査報告　第三〇三集　二〇〇〇年。

4　三上喜孝「古代日本の境界意識と文化交流」『古代・中世の境界意識と文化交流』勉誠出版、二〇一一年。

5　岡陽一郎・阿部勝則・小岩弘明・時田里志・七海雅人・平田光彦（助言者：菅野文夫）「平泉出土文字資料の再検討　その1」『平泉文化研究年報』一二、二〇一二年の釈文を、若干改変した。

6　岡陽一郎・阿部勝則・小岩弘明・時田里志・七海雅人・平田光彦（助言者：菅野文夫）「平泉出土文字資料の再検討　その2」『平泉文化研究年報』一三、二〇一三年

7　山形県・山形県教育委員会『大楯遺跡　第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書　第一三九集　一九八九年

8　石井進『中世を読み解く　―古文書入門―』東京大学出版会、一九九〇年などを参照。

9　網野善彦『日本の歴史をよみなおす（全）』ちくま文庫、二〇〇五年、初出一九九一年。

10　黒田弘子『ミミヲキリ　ハナヲソギ　―片仮名書百姓申状論―』吉川弘文館、一九九五年。

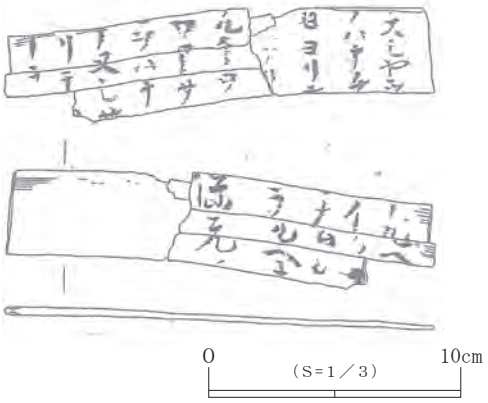
11　久留島典子・五味文彦編『史料を読み解く1　中世文書の流れ』山川出版社、二〇〇六年。

タカナは音声を文字化する時に使われることが多いから、これで書かれた資料は音声のメモ化の過程で作られた公算が大きい」

たしかに平泉における片仮名の文字資料は他の地域にくらべると多いという印象を受けるが、平泉だけでなく、一二世紀～一三世紀の片仮名資料は東北地方を中心にさらに広がりをみせている。秋田県のほかにも、山形県遊佐町の大楯遺跡からも、片仮名が書かれた木簡が出土している[7]（第138図）。

（表面）
」スシヤ「
」ハナ「
日ヨリ「
□ロ□□
」ルイワ
ワアサ
」ヲハナ
」又シ□
リチ×
」ラ×

（裏面）
」ルヘ×
イノ□
」ナム○
ラルヘ□
保元「



第138図　山形県遊佐町大楯遺跡出土木簡

大楯遺跡は、中世の遊佐荘にかかわる遺跡であると考えられている。この木簡は溝跡から出土した。木目に対し垂直方向に書かれ、文字は表裏両面にわたっている。上端、下端が欠損しているため内容は不明だが、末尾に「保元」という年号が書かれていることから、一一五六年～一一五八年の間に書かれた可能性が高い。これもやはり一二世紀半ばの片仮名資料である。

こうしてみてくると、一二世紀半ばには、すでに片仮名が東北地方一円に普及していた可能性が高い。

さて、片仮名表記の中世文書といえば、紀伊国阿弖川荘の上村百姓の申状が有名である[8]。阿弖川荘は、現在の和歌山県有田郡清水町にあった中世の荘園で、鎌倉中期の建治元年（一二七五）十月末に、百姓が地頭の非法を訴えるために書いた片仮名書きの申状が残されている。今回の釈読においても、申状にみえる片仮名の字形が参考になった。

書風に注目すると、たとえば「タ」の字が漢字の「斗」のように書かれていることが、本木簡や盤若台遺跡出土のいろは歌木簡と共通する。また、「ホ」が「ρ」と書かれている点も、盤若台遺跡出土のいろは歌木簡と共通する。全体的な文字の雰囲気から考えても、本木簡は、阿弖川荘の百姓申状や盤若台遺跡出土のいろは歌木簡と同様に、一三世紀頃のものとみてよいだろう。

四　中世における片仮名表記資料の意義

最後に、本木簡にみえるような片仮名表記の資料の意味について考えてみたい。

中世史家の網野善彦氏は、日本社会の文字の特質について論じるなかで、片仮名の意味についてもふれている。それによると、片仮名交じりの文書は、現在残っている中世文書の中の一％か二％にすぎず、仮名の普及はもっぱら平仮名の普及という形で進行していったのだと指摘している。

では、このような少数派の片仮名は、どういう用途で文書に使われたのだろうか。網野氏によれば、「基本的には、口頭で語られる言葉を表現する場合に使われた」という。しかも中世前期においては、しばしば神仏と関わりを持つ場合が多いことも指摘する。

たとえば起請文や願文、託宣記など、神仏と関わりを持ち、しかも口頭で語られたことにかかわる場合に、片仮名が使われている傾向がある。また、落書あるいは落書起請にも片仮名が使われている。これらもまた、「神仏に変わる声」という性質を持っているのだという。

このように網野氏は、神仏に関わりがあり、かつ口頭で語られることを文字化する際に、片仮名が用いられる傾向にあると推定したのである。

これに対して黒田弘子氏は網野説を批判し、阿弖川荘の片仮名申状を含む荘園関係文書の検討から、当該期の在地社会にあっては、平仮名は公文層以上、片仮名は百姓クラスという、文字と身分との対応関係が存在するのではないかと指摘した[10]。

であろう。洲崎遺跡から出土した人魚供養札は、アザラシやアシカなどの鰭脚類の漂着にともない、不吉な出来事が起きぬことを願って作られた祈祷札のような性格のものであろう。「そわか」の部分は平仮名表記とみられる。

秋田県内から出土した片仮名表記木簡は、いずれも一二世紀～一三世紀ごろのものと推定されるが、本木簡の年代も、同様であろうと推定される。片仮名の書風も、たとえば盤若台遺跡出土のいろは歌木簡と類似しており、遺構の年代とも矛盾しない。

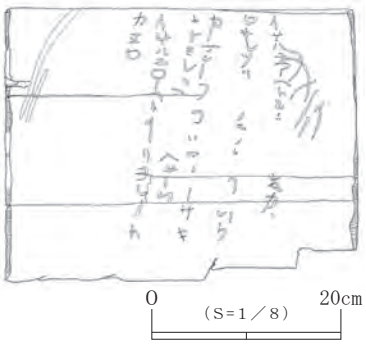
同時期の片仮名木簡の類例は、東北地方の他の遺跡にもみられる。有名なのは、平泉の柳之御所跡出土の木簡である。柳之御所跡は、奥州藤原氏三代秀衡（一一二二～一一八七）の政庁跡とされ、儀礼や宴会の際に用いられた数多くの遺物が出土している。文字資料も多く出土しているが、折敷に書かれた、有名な「人々給絹日記」には、人々への支給品目として「ヒトエ」「ウヘ」「カサネ」「カサネタリ」「カリキヌハカマ」「アヌハカマ」などの品名が片仮名で書かれている。年代は秀衡が活躍した一二世紀半ばごろのものと推定される。

また、同じく折敷に書かれたもの中に、一二行にわたり三文字の片仮名を羅列したものもみられる[5]。

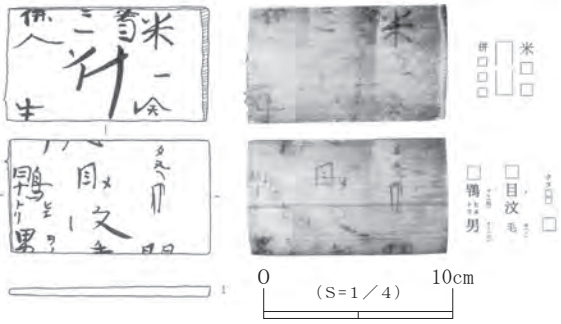
タヽラ　タヽ□　タヽ□　タヽル　タヽヰ
タヽキ　タヽミ　サヽラ　サヽコ　サヽケ　サヽユ
サヽ□　サヽ□　サヽ□　サヽキ　クヽメ　クヽリ
クヽオ　クヽシ　クヽリ　クヽツ　クヽツ
スヽ□　スヽカ　スヽキ　クヽケ　スヽキ　キコハ
マヽコ　マヽキ　□□　カヽミ　カヽト　カヽ□　カヽシ
□□□　□□□　□ヽ□　ツヽ□　ツヽヰ　ツヽラ　ツヽリ
ココ□　キヽス　□ヽナ　ハヽコ　ハヽチ　コヽメ　コヽメ
□□キ　キヽヌ　ヲヽナ　ヲヽチ　メヽキ　ナヽキ　シヽ□
ワヽ□　□ヽメ　タヽミ　□ヽヤ　ヤヽケ　ナヽヲ
コヽ□　タヽコ　スヽキ　ヒヽキ　コヽウ　□ヽレ　□ヽク　チヽ□

平泉の出土文字資料について検討した岡陽一郎氏をはじめとする研究グループは、その特徴について次のように述べている[6]。

「まず、総体的なものとして、鎌倉などの他の地域と比べると平泉での出土文字資料にはカタカナが多いという指摘を受けた。カタカナの特徴に注目するなら、この指摘は各資料の成り立ちはもとより、いかなる状況で資料が作成されたかを示唆するものである。カ



第 135 図　盤若台遺跡出土いろは歌木簡



第 136 図　横手市観音寺廃寺跡出土音義木簡

第 137 図　井川町洲崎遺跡出土人魚供養札木簡

峰吉川中村遺跡出土片仮名木簡について

国立歴史民俗博物館　三上　喜孝

一　釈文

［　　］□□□ヲ
［　　］カ□ニ□□
□□［　　］ヲクレ［　　］〔ナ〕　〔ケ〕〔リ〕
［　　］□□カリ□□
　　〔ナ〕
□ルトタレカ　□
　　〔ヌ〕
ウ□□ヲヒテ
　　〔メ〕〔ケ〕
チシヤ□□リ

二　形状

半円形を呈している、本来は円形をした木製容器の底板が半截されたのであろう。文字列は、上部が欠損していると考えられることから、もともと円形の木製容器の底板に文字が書かれ、後に欠損したものと思われる。

三　片仮名表記木簡の類例

本木簡は、全文が片仮名で記されているが、完全な釈読は困難であり、意味がとりにくいが、何らかの文章を書き記したものであると推定できる。

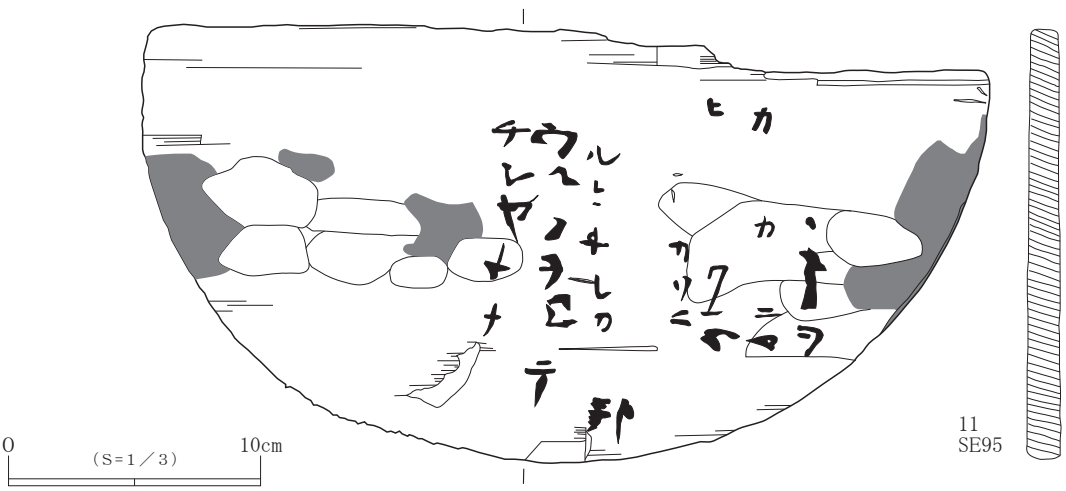
秋田県内には、これまで片仮名を記した中世木簡が何例か出土している。まず第一にあげられるのは、秋田県山本郡三種町（旧琴丘町）の盤若台遺跡出土の木簡である[1]（第135図）。一三世紀前半と推定される井戸跡から、折敷を転用した木簡が出土し、片仮名で書かれた「いろは歌」の全文が書かれていた。

第二は、横手市の観音寺廃寺跡出土木簡である[2]（第136図）。一二世紀中葉と推定される井戸跡から、漢字とその読みをカタカナで記す音義木簡が出土している（『木簡研究』二四）。これによると、「目」の読みとして「メ」、「鵜」の読みとして「ヒエトリ」といったように、読みがカタカナで記されている。

第三は、秋田県潟上市（旧井川町）洲崎遺跡のやはり一三世紀頃と思われる井戸から出土した人魚供養札木簡である[3]（第137図）。

（僧侶と人魚の絵）
「アラ、ツタナヤ、テウチ、テウチニトテ候、そわか」

洲崎遺跡は、八郎潟に面した鎌倉時代の港町の遺跡であり、『吾妻鏡』にみえる「湯川湊」に相当する遺跡と考えられている。やはり年代は一三世紀ごろとみるのが妥当



第 134 図　峰吉川中村遺跡出土木簡

秋田県文化財調査報告書第505集

峰吉川中村遺跡

−雄物川上流河川改修事業（中村芦沢地区）に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書−

印刷・発行　平成28年９月

編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014－0802　大仙市払田字牛嶋20番地
電 話（0187）69－3331
FAX（0187）69－3330

発　　行　秋田県教育委員会
〒010－8580　秋田市山王三丁目１番１号
電話（018）860－5193